

# 福田片岡遺跡

－太子・竜野バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書－

(本文編)

1991. 2

兵庫県教育委員会

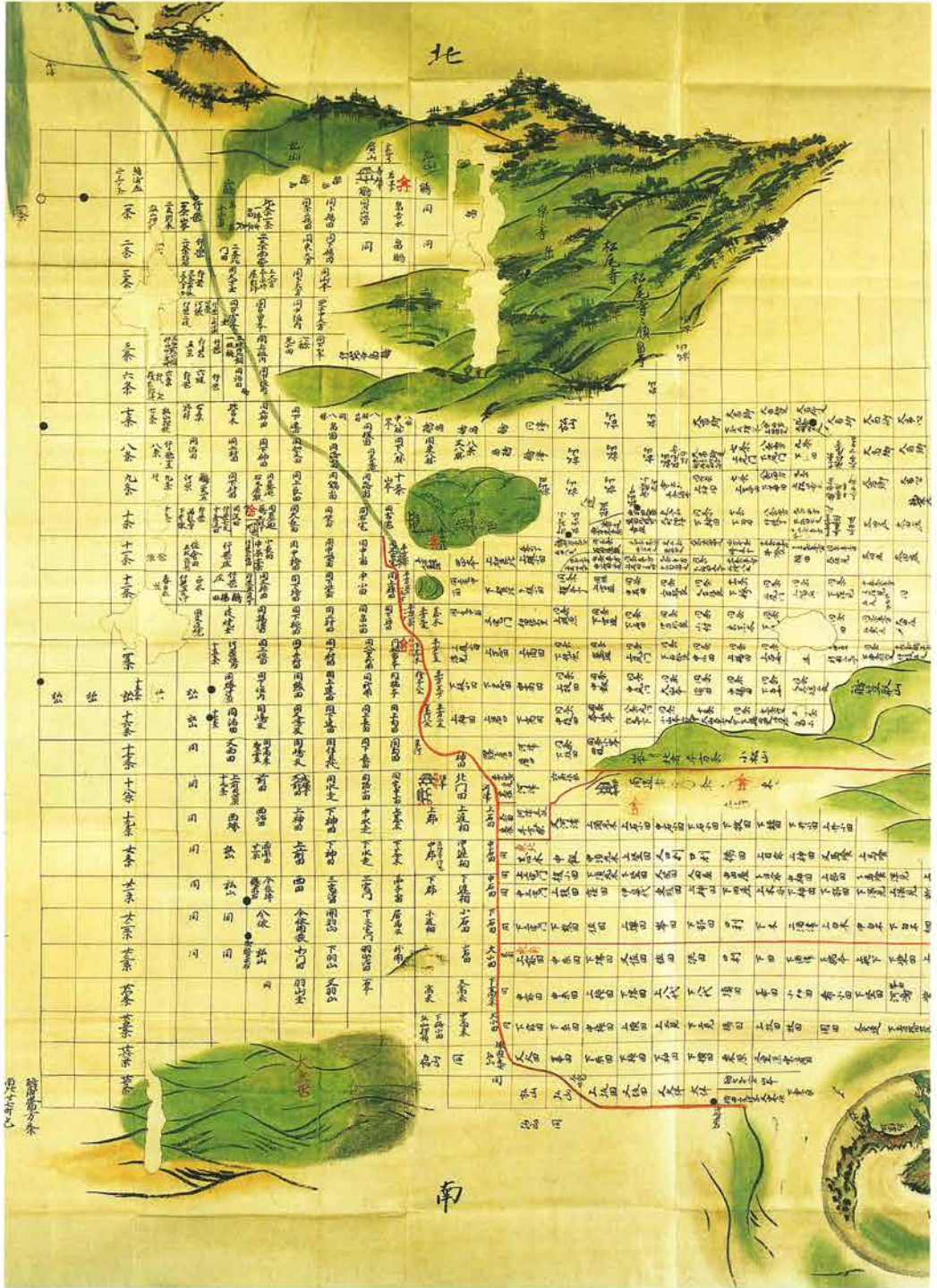
# 福田片岡遺跡

—太子・竜野バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書—

(本文編)

1991. 2

兵庫県教育委員会



播磨国鶴莊絵図 (嘉暦図) (京都大学文学部博物館蔵)





播磨国鶴荘繪図 (至徳図) (京都大学文学部博物館蔵)





1. 男山からの眺望



2. Ci地区全景





1. C<sub>3</sub>地区の東西堀と市道太子町永久橋線



2. 筑紫大道と館の堀





1. S<sub>3</sub>地区遺構群

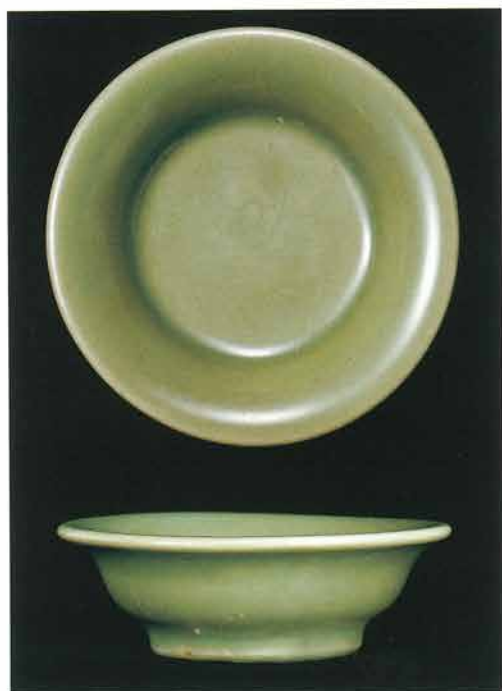


2. S<sub>1</sub>地区井戸と埋甕



3. N<sub>3</sub>地区SK25 骨蔵器





1. 青磁皿



2. 天目茶碗



3. S<sub>3</sub>地区ⅡSX01 白磁碗と皿



1. 漆器碗



2. 備前焼大甕



1. 金属器 (容器と武具)



2. 金属器 (工具・道具と銭)



# 例 言

1. 本書は龍野市誉田町福田所在する国道2号太子・竜野バイパスのほぼ中央の国道179号西側に接続する0.3kmで国道敷地内約19,350㎡の鎌倉～室町時代を中心とする福田片岡遺跡の発掘調査報告書である。
2. 建設省姫路工事事務所は国道2号太子・竜野バイパス建設に伴い、兵庫県教育委員会と協議を行い、昭和55年に龍野市教育委員会・東洋大学附属姫路高等学校考古学研究会が確認調査を、昭和56～59年に兵庫県教育委員会が全面調査を実施した。
3. 調査は兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 埋蔵文化財調査係が行い、昭和56年は西口和彦・種定淳介、昭和57年は岡崎正雄・岡田章一・種定淳介・西口圭介、昭和58年は岡崎正雄・種定淳介・西口圭介、昭和59年は岡崎正雄・平田博幸・別府洋二がそれぞれ担当した。
4. 報告書刊行のための整理事業は昭和60年から始め、平成元年度からは機構改革により兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
5. 福田片岡遺跡は大和法隆寺領「播磨国鶴荘絵図」に描かれている中世の遺跡であり、近年盛んになった荘園研究の基礎資料となる遺構・遺物が発見されている。また、下層には弥生時代～古墳時代の集落が調査されてる。
6. 調査地区は道路センターNo.262～277間で、2本の市道を挟んで北地区（N）・中央地区地区（C）・南地区（S）に分割し、本線と側道部分に分けて工事工程と併せて調査を実施した。
7. 発掘作業は株式会社西沢組の協力を得て実施し、航空測量図化については国際航業株式会社に委託し、作業の迅速かつ円滑化を計った。遺構写真については岡田模型店（模型ヘリコプター）・稲富興産株式会社（ポール）・西尾リース株式会社（気球）・ワールド航空事業株式会社（気球）の協力を得た。
8. 遺物整理は整理作業班で行い、特に保存処理は金属器・加古千恵子、木製品・別府洋二が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。遺物写真は主に森 昭氏に委託し、一部吉田カメラ商会・横山英俊氏に委託した。
9. 遺物は1. 弥生時代中期 2. 弥生時代終末～古墳時代 3. 奈良・平安時代 4. 中世 5. 江戸時代以降の区分で、土器・石器・金属器・木製品・土製品に分類している。
10. 本書の執筆者及び執筆分担は以下の通りである。

西口 和彦 第2章 第2節1

岡崎 正雄 第1章～第6章

岡田 章一 第5章 第5節5、第6章 第2節  
種定 淳介 第3章 第2節、第5章 第2節  
西口 圭介 第2章 第2節2・3、第4章 第1節、第5章 第1節1  
平田 博幸 第2章 第2節4、第5章 第5節8 (1)  
別府 洋二 第2章 第5節、第5章 第5節6 (2)  
高橋 学 第3章 第1節 (抜)  
加古千恵子 第2章 第4節  
小林 基伸 第6章 第1節

11. また、自然科学分野及び考古学・歴史学の諸先生方から協力を戴き、付載として玉稿を纏めている。

渡辺 誠 (名古屋大学)、高塚秀治 (東京工業大学)、藁科哲男・東村武信 (京都大学原子炉実験所)、島地 謙 (京都大学名誉教授)・林 昭三 (京都大学木材研究所)、岡田文男 (京都市埋蔵文化財研究所)、嶋倉巳三郎、安田博幸・森真由美 (武庫川女子大学)

12. なお、本書の編集は岡崎が調査員の協力を得て行った。

13. 最後に、本書を纏めるに際して多くの研究機関、各教育委員会ならび研究者、個人の方々からのご指導、助言及び協力を戴きました。名前を記し、お礼と致します。

奈良国立文化財研究所、京都大学考古学研究室、京都大学埋蔵文化財センター、立命館大学、中世土器研究会、関西近世考古学研究会、岡山県史編纂室、愛知県陶磁資料館、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、国立歴史民俗博物館、兵庫県立歴史博物館、神戸市立博物館、竹中大工道具資料館、兵庫県史編集室、龍野市教育委員会、太子町教育委員会、兵庫県龍野保健所、西播磨食肉衛生検査所、株式会社西沢組、国際航業株式会社

伊藤 晃、篠原芳秀、井上喜久治、田中真吾、庄 洋二、吉本昌弘、上田洋行、石田善人、脇田晴子、菱田哲郎、藤村淳子、森田 勉、松本岩雄、内田律男、泉 拓良、宇野隆雄、鈴木重治、綾村 宏、西沢智則、高橋 学、小林基伸

# 目 次

第 1 章	はじめに	1
第 2 章	調査の経緯	3
第 1 節	調査に至る経過	3
第 2 節	発掘調査	5
	1. 昭和55・56年度調査（第1次・2次調査）	8
	2. 昭和57年度調査（第3次調査）	11
	3. 昭和58年度調査（第4次調査）	24
	4. 昭和59年度調査（第5次調査）	42
	5. 荒河井堰の調査（C <sub>4</sub> 地区）	56
第 3 節	整理作業	61
第 4 節	出土金属製品の保存処理作業	64
第 5 節	出土木製品の保存処理作業	66
第 3 章	遺跡の環境	67
第 1 節	地形的環境	67
第 2 節	歴史的環境	68
第 4 章	遺 構	73
第 1 節	弥生時代（中期）の遺構	73
	1. 住居跡	73
	2. 土 壙	79
第 2 節	古墳時代の遺構	85
	1. 配石遺構	85
	2. 土器群	85
	3. 下層トレンチ	87
第 3 節	奈良時代の遺構	91



第4節	平安時代の遺構	92
1.	水田	92
2.	荒河井堰の溝(荒河井)	96
第5節	中世の遺構	97
1.	掘立柱建物跡	97
2.	方形区画溝	113
3.	方形館跡	118
4.	井戸	125
5.	火葬施設	147
6.	墓	150
7.	土壙	164
8.	筑紫大道	174
第6節	江戸時代の遺構	176
1.	井戸	176
2.	荒河井堰と市町境溝	179
3.	土壙	180
第5章	遺物	181
第1節	弥生時代中期の遺物	181
1.	弥生土器の器形分類	181
2.	遺構出土の弥生土器	185
3.	石器	212
第2節	古墳時代の遺物	214
1.	古式土師器	214
2.	須恵器	229
第3節	奈良時代の遺物	231
第4節	平安時代の遺物	231
1.	須恵器	231
2.	足跡	232
第5節	中世(鎌倉時代~室町時代)の遺物	233
1.	昭和56年度(1981)調査から見た中世土器の概観	234
2.	中世土器の組成	238

3. 輸入陶磁器	330
4. 金属製品	367
(1) 鉄製品・銅製品	367
(2) 古    銭	392
5. 鉄    滓	397
6. 木    製品	402
(1) 木    器	402
(2) 木    筒	416
7. 石    製品	420
(1) 石造品・一石五輪塔	420
(2) 石白・茶白	424
(3) 砥    石	427
(4) 硯	437
(5) 石    鍋	440
(6) 磨    石	442
8. 土    製品	445
(1) 瓦	445
(2) 風炉・火鉢	458
(3) 土    錘	464
(4) 面    子	469
(5) 躰羽口	478
9. ガラス玉	481
第6節 江戸時代以降の遺物	481
1. 陶磁器	481
2. 金属製品	481
第 6 章    ま    と    め	485
第1節 片岡荘域と開発	485
第2節 県下の輸入陶磁器	490
第3節 小結にかえて	496

## 付 載

1. 福田片岡遺跡、香山廃寺跡出土のサヌカイト製石器の石材産地分析 .....	1
2. 福田片岡遺跡出土木製品の樹種 .....	9
3. 福田片岡遺跡出土漆器の塗膜構造の観察 .....	21
4. 福田片岡遺跡出土炭化材の樹種 .....	26
5. 福田片岡遺跡出土の動物遺体 .....	32
6. 福田片岡遺跡出土の土器類の化学分析 .....	41
7. 福田片岡遺跡出土の鉄滓及び鉄器について .....	51



# 図版目次

- 卷首図版 1 播磨国鷗莊絵図（嘉暦図）（京都大学文学部博物館所蔵）
- 卷首図版 2 播磨国鷗莊絵図（至徳図）（京都大学文学部博物館所蔵）
- 卷首図版 3 福田片岡遺跡遠景
1. 男山からの眺望
  2. C<sub>1</sub>地区全景
- 卷首図版 4 筑紫大道と堀
1. C<sub>3</sub>地区の東西堀と市道太子町永久橋線
  2. 筑紫大道と館の堀
- 卷首図版 5 遺 構
1. S<sub>3</sub>地区遺構群
  2. S<sub>1</sub>地区 井戸と埋甕
  3. N<sub>3</sub>地区SK25 骨蔵器
- 卷首図版 6 遺 物 (1)
1. 青 磁 皿
  2. 天目茶碗
  3. S<sub>3</sub>II SX01 白磁碗・皿
- 卷首図版 7 遺 物 (2)
1. 漆 器 椀
  2. 備前大甕
- 卷首図版 8 遺 物 (3)
1. 金属器（容器と武具）
  2. 金属器（工具・道具と銭）

## 挿図目次

挿図1	福田片岡遺跡位置図	1
挿図2	太子・龍野バイパス路線と埋蔵文化財と傍示石	2
挿図3	鶯荘と片岡荘位置図	4
挿図4	福田片岡遺跡周辺の水田呼称と神社	6
挿図5	昭和55・56年度確認調査位置図	7
挿図6	昭和55・56年度調査地区位置図	8
挿図7	昭和56年度調査地区遺構図	9
挿図8	昭和56年度確認調査位置図	10
挿図9	年度別調査範囲	12
挿図10	調査地区（N・C・S地区）位置図	13
挿図11	調査面の範囲	14
挿図12	調査地区割り付け図	15
挿図13	昭和57年度調査地区位置図	16
挿図14	C <sub>1</sub> 地区遺構全体図	17
挿図15	N <sub>1</sub> 地区遺構全体図	19
挿図16	昭和58年度調査区位置図	24
挿図17	C <sub>2</sub> 地区遺構全体図	26
挿図18	C <sub>2</sub> 地区旧河道牛骨出土状況	27
挿図19	N <sub>2A</sub> 地区遺構全体図	29
挿図20	S <sub>2</sub> 地区遺構全体図	31
挿図21	N <sub>2B</sub> 地区遺構全体図	32
挿図22	N <sub>3</sub> 地区遺構全体図	34
挿図23	N地区遺構全体図（合成）	35
挿図24	C <sub>3</sub> 地区遺構全体図	37
挿図25	S <sub>1</sub> 地区Ⅰ面遺構全体図	38
挿図26	下層確認トレンチと下層遺構調査区	39
挿図27	S <sub>3</sub> 地区下層確認トレンチ土層図	41
挿図28	昭和59年度調査地区位置図	42
挿図29	S <sub>1</sub> 地区Ⅱ面遺構全体図	43
挿図30	S <sub>1</sub> 地区SE12・SE13と埋甕	44

挿図31	S <sub>1</sub> 地区埋甕	45
挿図32	S <sub>4</sub> 地区遺構全体図	46
挿図33	内堀・外堀・片岡庄堀遺物出土ドット図	47
挿図34	S <sub>3</sub> 地区Ⅰ面遺構全体図	48
挿図35	S <sub>3</sub> 地区Ⅱ面遺構全体図	49
挿図36	S <sub>3</sub> 地区Ⅲ面下層溝	52
挿図37	C <sub>4</sub> 地区位置図	56
挿図38	C <sub>4</sub> 地区遺構全体図	57
挿図39	C <sub>4</sub> 地区南端下層溝	58
挿図40	C <sub>4</sub> 地区下層水田遺構図	59
挿図41	整理作業風景（木製品実測・金属製品実測・トレース・レイアウト）	63
挿図42	火打金の処理工程	64
挿図43	真空樹脂含浸作業	65
挿図44	錆取り作業	65
挿図45	処理された銅銭	65
挿図46	保存処理された鉄製品（処理前・処理後）	65
挿図47	接着・補強・復元作業	66
挿図48	福田片岡遺跡周辺遺跡分布図	69
挿図49	弥生時代遺構位置図	74
挿図50	弥生時代住居跡 1	75
挿図51	弥生時代住居跡 1 中央土壙	76
挿図52	弥生時代住居跡 2	78
挿図53	弥生時代土壙 1	80
挿図54	弥生時代土壙 2	81
挿図55	弥生時代土壙 3	83
挿図56	弥生時代土壙 4・土壙 5	84
挿図57	C <sub>2</sub> 地区下層調査区地形図	86
挿図58	C <sub>2</sub> 地区下層遺構全体図	87
挿図59	C <sub>2</sub> 地区下層配石遺構	88
挿図60	C <sub>2</sub> 地区古式土師器出土状況細部	89
挿図61	N <sub>2</sub> A地区下層トレンチ古式土師器出土状況土器	90
挿図62	C <sub>1</sub> 地区Pc区内堀コーナー古式土師器出土状況	90
挿図63	S <sub>1</sub> ・S <sub>3</sub> ・S <sub>4</sub> 地区下層水田跡	93

挿図64	S <sub>1</sub> ・S <sub>4</sub> 地区水田跡・犁跡と牛および人の足跡の方向	95
挿図65	調査区と掘立柱建物数量	98
挿図66	掘立柱建物主軸方向	99
挿図67	掘立柱建物跡 (1)	102
挿図68	掘立柱建物跡 (2)	103
挿図69	掘立柱建物跡 (3)	104
挿図70	掘立柱建物跡 (4)	105
挿図71	掘立柱建物跡 (5)	106
挿図72	掘立柱建物跡 (6)	107
挿図73	掘立柱建物跡 (7)	108
挿図74	掘立柱建物跡 (8)	109
挿図75	方形区画溝と方形館跡	113
挿図76	N <sub>2</sub> ASD02	114
挿図77	C <sub>2</sub> SD04	115
挿図78	S <sub>3</sub> SD16	116
挿図79	内堀・外堀と上層溝	117
挿図80	東西堀・外堀切合とSE07	118
挿図81	内堀土層堆積	119
挿図82	外堀土層堆積	120
挿図83	C <sub>1</sub> 地区内堀階段状遺構	121
挿図84	S <sub>1</sub> 地区片岡庄堀と橋脚遺構	122
挿図85	S <sub>1</sub> SD01と土橋状遺構	123
挿図86	土橋状遺構	124
挿図87	中世井戸位置図	125
挿図88	SE01	126
挿図89	SE02	127
挿図90	SE03	128
挿図91	SE04	129
挿図92	SE05	130
挿図93	SE06	131
挿図94	SE08-1	133
挿図95	SE08-2	134
挿図96	SE10	135

挿図97	SE11	137
挿図98	SE12	138
挿図99	SE13	139
挿図100	SE14	140
挿図101	SE16	141
挿図102	SE18	142
挿図103	SE19	143
挿図104	SE20	145
挿図105	C <sub>1</sub> 火葬施設SX01 (窯) (1)	146
挿図106	C <sub>1</sub> 火葬施設SX01 (窯) (2)	147
挿図107	C <sub>1</sub> SK15上層遺構図	148
挿図108	C <sub>1</sub> SK15下層遺構図	149
挿図109	C <sub>1</sub> SK11	150
挿図110	C <sub>1</sub> SK14	151
挿図111	N <sub>3</sub> SK25	153
挿図112	S <sub>3</sub> SK98	155
挿図113	C <sub>1</sub> Pb区木棺墓	156
挿図114	C <sub>1</sub> SK102	157
挿図115	N <sub>1</sub> SK2138	158
挿図116	N <sub>2</sub> ASK18・SK21	159
挿図117	N <sub>3</sub> SK11	160
挿図118	S <sub>3</sub> II SX01	161
挿図119	S <sub>1</sub> SK28	162
挿図120	N <sub>1</sub> SK3066	163
挿図121	N <sub>2</sub> ASK10	164
挿図122	N <sub>1</sub> SK3072	165
挿図123	N <sub>1</sub> SK3065	166
挿図124	N <sub>1</sub> SK3192	167
挿図125	S <sub>3</sub> SK49	168
挿図126	C <sub>3</sub> SK04	169
挿図127	C <sub>1</sub> SK100	170
挿図128	C <sub>2</sub> SK03	171
挿図129	S <sub>1</sub> SK06	172



挿図130	S <sub>1</sub> II SK42	173
挿図131	N <sub>2</sub> ASK25	174
挿図132	筑紫大道と井戸の概念図	175
挿図133	近世井戸位置図	176
挿図134	SE07	177
挿図135	SE09	178
挿図136	SE15・SE17	179
挿図137	弥生土器 (1) N <sub>1</sub> 地区住居跡 1 壺・甕	186
挿図138	弥生土器 (2) N <sub>1</sub> 地区住居跡 1 甕 (2)・高杯・鉢	187
挿図139	弥生土器 (3) N <sub>3</sub> 地区住居跡 2 壺 (1)	189
挿図140	弥生土器 (4) N <sub>3</sub> 地区住居跡 2 壺 (2)・甕 (1)	190
挿図141	弥生土器 (5) N <sub>3</sub> 地区住居跡 2 甕 (2)・鉢・高杯・紡錘車	191
挿図142	弥生土器 (6) N <sub>1</sub> 地区土壙 1 壺 (1)	193
挿図143	弥生土器 (7) N <sub>1</sub> 地区土壙 1 壺 (2)・甕 (1)	194
挿図144	弥生土器 (8) N <sub>1</sub> 地区土壙 1 甕 (2)	195
挿図145	弥生土器 (9) N <sub>1</sub> 地区土壙 1 甕 (3)・鉢	196
挿図146	弥生土器 (10) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 壺 (1)	197
挿図147	弥生土器 (11) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 壺 (2)	198
挿図148	弥生土器 (12) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 壺 (3)	199
挿図149	弥生土器 (13) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 甕 (1)	200
挿図150	弥生土器 (14) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 甕 (2)	201
挿図151	弥生土器 (15) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 甕 (3)	202
挿図152	弥生土器 (16) N <sub>1</sub> 地区土壙 2 高杯・鉢	203
挿図153	弥生土器 (17) N <sub>1</sub> 地区土壙 3 壺	204
挿図154	弥生土器 (18) N <sub>1</sub> 地区土壙 3 甕 (1)	205
挿図155	弥生土器 (19) N <sub>1</sub> 地区土壙 3 鉢・高杯・甕 (2)	206
挿図156	弥生土器 (20) N <sub>1</sub> 地区 壺 (1)	208
挿図157	弥生土器 (21) N <sub>1</sub> 地区 壺 (2)・甕	209
挿図158	弥生土器 (22) N <sub>1</sub> 地区 高杯・鉢・蓋	210
挿図159	弥生土器 (23) C <sub>1</sub> ・C <sub>3</sub> ・C <sub>4</sub> ・S <sub>4</sub> 地区 甕・高杯・壺	211
挿図160	弥生時代石器 石鏃・石錐・石匙・剥片石器・石斧	213
挿図161	古式土師器 (1) C <sub>1</sub> 地区 壺	216
挿図162	古式土師器 (2) C <sub>1</sub> 地区 甕	217

挿図163	古式土師器 (3) C <sub>1</sub> 地区 高杯・鉢	218
挿図164	古式土師器 (4) C <sub>2</sub> 地区 壺・甕 (1)	219
挿図165	古式土師器 (5) C <sub>2</sub> 地区 甕 (2)	220
挿図166	古式土師器 (6) C <sub>2</sub> 地区 高杯・鉢	221
挿図167	古式土師器 (7) C <sub>3</sub> 地区 壺・甕 (1)	222
挿図168	古式土師器 (8) C <sub>3</sub> 地区 甕 (2)・高杯・鉢	225
挿図169	古式土師器 (9) C <sub>4</sub> 地区 壺・甕・高杯・器台	226
挿図170	古式土師器 (10) N <sub>2</sub> A地区 壺・甕・鉢	227
挿図171	古式土師器 (11) S <sub>4</sub> 地区 壺	227
挿図172	古式土師器 (12) その他の地区 壺・甕・器台	228
挿図173	古墳時代～平安時代の須恵器	230
挿図174	足跡の計測	232
挿図175	昭和56年度 (1981) の中世土器 (1)	235
挿図176	昭和56年度 (1981) の中世土器 (2)	236
挿図177	昭和56年度 (1981) の中世土器 (3)	237
挿図178	須恵器 (椀・小皿) と土師器 (皿) の法量 (1)	238
挿図179	N <sub>1</sub> SK2031・SK2001・SK2031・SK2041・SK2338土器	239
挿図180	S <sub>3</sub> II SX01・SK03土器	240
挿図181	S <sub>3</sub> II SK01～05、S <sub>3</sub> II SK07～10土器	241
挿図182	S <sub>3</sub> I 面一括土器 (1)	243
挿図183	S <sub>3</sub> I 面一括土器 (2)	244
挿図184	土師器 (皿) の法量 II	245
挿図185	N <sub>1</sub> SK3066土器	246
挿図186	S <sub>3</sub> SK98土器	247
挿図187	N <sub>2</sub> BSK11土器	248
挿図188	N <sub>1</sub> SK2129・SK3072土器	250
挿図189	N <sub>1</sub> SD3044土器 (1)	251
挿図190	N <sub>1</sub> SD3044土器 (2)	252
挿図191	N <sub>1</sub> SD3044土器 (3)	253
挿図192	N <sub>1</sub> SD3044土器 (4)	254
挿図193	N <sub>3</sub> SK25土器 (1)	255
挿図194	N <sub>3</sub> SK25土器 (2)	256
挿図195	土師器 (皿) の法量 III	257

挿図196	N <sub>2</sub> BSD02土器 (1)	258
挿図197	N <sub>2</sub> BSD02土器 (2)	259
挿図198	C <sub>1</sub> PbSK01土器	260
挿図199	SE04土器 (1)	261
挿図200	SE04土器 (2)	262
挿図201	C <sub>1</sub> SD16他土器	263
挿図202	C <sub>1</sub> SE02ヨコ土師器一括	264
挿図203	土師器 (皿) の法量Ⅳ	265
挿図204	S <sub>1</sub> SD02土器 (1)	266
挿図205	S <sub>1</sub> SD02土器 (2)	267
挿図206	C <sub>2</sub> SD04土器 (1)	268
挿図207	C <sub>2</sub> SD04土器 (2)・P7・P12・P53・P60・P111・P113・下層溝土器	269
挿図208	N <sub>3</sub> SK01・SK02・SK09・SK11・SK14土器	270
挿図209	S <sub>3</sub> SD16土器 (1)	271
挿図210	S <sub>3</sub> SD16土器 (2)	272
挿図211	S <sub>3</sub> SD16土器 (3)	273
挿図212	S <sub>3</sub> SD16土器 (4)	274
挿図213	S <sub>3</sub> SD16土器 (5)	275
挿図214	C <sub>1</sub> 内堀土器 (1)	277
挿図215	C <sub>1</sub> 内堀土器 (2)	278
挿図216	C <sub>1</sub> 内堀土器 (3)	279
挿図217	C <sub>1</sub> 内堀土器 (4)	280
挿図218	C <sub>1</sub> SK11～SK14土器	282
挿図219	C <sub>1</sub> SK15土器	283
挿図220	N <sub>2</sub> ASK10土器	284
挿図221	N <sub>1</sub> SK3076・SK3192土器	285
挿図222	C <sub>3</sub> SD01・SD07土器	286
挿図223	S <sub>2</sub> SK04・SK05・SK07・集石土壙土器	287
挿図224	S <sub>1</sub> ⅡSK42土器	288
挿図225	S <sub>3</sub> SK48・SK49・SK58土器	289
挿図226	SE01土器	291
挿図227	SE02土器	292
挿図228	SE03土器	293

挿図229	SE05・SE06土器	294
挿図230	SE08土器	295
挿図231	SE10・SE12・SE13土器	296
挿図232	SE14・SE16土器	297
挿図233	SE18土器	298
挿図234	SE19土器 (1)	299
挿図235	SE19土器 (2)	300
挿図236	SE20土器	301
挿図237	S <sub>3</sub> 切合溝 5・SD02他土器	303
挿図238	N <sub>1</sub> SK3065土器 (1)	304
挿図239	N <sub>1</sub> SK3065土器 (2)	305
挿図240	N <sub>1</sub> SK3065土器 (3)	306
挿図241	N <sub>1</sub> SK3065土器 (4)	307
挿図242	C <sub>1</sub> SD17土器 (1)	308
挿図243	C <sub>1</sub> SD17土器 (2)	309
挿図244	S <sub>3</sub> SD09土器 (1)	310
挿図245	S <sub>3</sub> SD09土器 (2)	311
挿図246	S <sub>3</sub> SD09土器 (3)	312
挿図247	S <sub>1</sub> SD01土器 (1)	313
挿図248	S <sub>1</sub> SD01土器 (2)	314
挿図249	S <sub>1</sub> SD01土器 (3)	315
挿図250	S <sub>1</sub> SD01土器 (4)	316
挿図251	C <sub>1</sub> ・C <sub>3</sub> 東西堀土器 (1)	317
挿図252	C <sub>1</sub> ・C <sub>3</sub> 東西堀土器 (2)	318
挿図253	C <sub>1</sub> ・C <sub>3</sub> SK04土器	319
挿図254	C <sub>1</sub> 外堀土器	320
挿図255	片岡庄堀土器 (1)	321
挿図256	片岡庄堀土器 (2)	322
挿図257	N <sub>2</sub> ASK08土器	323
挿図258	N <sub>3</sub> SD06土器 (1)	324
挿図259	N <sub>3</sub> SD06土器 (2)	325
挿図260	C <sub>4</sub> 地区の土器	326
挿図261	輸入陶磁器出土状況	331

挿図262	輸入陶磁器分類 (1) .....	334
挿図263	輸入陶磁器分類 (2) .....	336
挿図264	輸入陶磁器分類 (3) .....	338
挿図265	輸入陶磁器分類 (4) .....	341
挿図266	輸入陶磁器分類 (5) .....	343
挿図267	輸入陶磁器分類 (6) .....	345
挿図268	輸入陶磁器分類 (7) .....	346
挿図269	輸入陶磁器 (1) 白磁碗A I・A II・A III類 .....	348
挿図270	輸入陶磁器 (2) 白磁碗A II・A III類 .....	349
挿図271	輸入陶磁器 (3) 白磁碗A IV・A V・A VI・A VII類 .....	350
挿図272	輸入陶磁器 (4) 白磁碗A VIII・B I類、白磁皿A I・A II・A III・A IX・ A X・B I・B II・B III類 .....	351
挿図273	輸入陶磁器 (5) 白磁皿B III・B IV・B V・A IV・A VI・A VII・A VIII類、 白磁碗A IX・A X類 .....	352
挿図274	輸入陶磁器 (6) 白磁四耳壺・白磁皿A V類、白磁小碗A I・A II類 .....	353
挿図275	輸入陶磁器 (7) 同安窯系青磁碗I・II類、皿I・II・III類 .....	354
挿図276	輸入陶磁器 (8) 龍泉窯系青磁碗A I・A II・A III類 .....	355
挿図277	輸入陶磁器 (9) 龍泉窯系青磁碗B I・B II類 .....	356
挿図278	輸入陶磁器 (10) 龍泉窯系青磁碗B III・B IV類 .....	357
挿図279	輸入陶磁器 (11) 龍泉窯系青磁碗B I・B II・B III類、C I・C II・ C VI・C VII類 .....	358
挿図280	輸入陶磁器 (12) 龍泉窯系青磁碗C II・C III・C V・F I類 .....	359
挿図281	輸入陶磁器 (13) 龍泉窯系青磁碗C VIII・C IX・D I・E I類 .....	360
挿図282	輸入陶磁器 (14) 龍泉窯系青磁碗B V類、杯I・II・III類、 小碗I・II類、盤 .....	361
挿図283	輸入陶磁器 (15) 龍泉窯系青磁皿I・II類 .....	362
挿図284	輸入陶磁器 (16) 青白磁皿、小壺蓋、合子蓋 .....	363
挿図285	輸入陶磁器 (17) 青白磁合子身、注口蓋、香炉、小壺身、梅瓶その他 .....	364
挿図286	輸入陶磁器 (18) 青花皿、碗 .....	365
挿図287	輸入陶磁器 (19) 施釉陶器 中国天目碗・壺・甕・四耳壺、朝鮮製壺・甕 .....	366
挿図288	金属製品出土状況 .....	367
挿図289	鉄製品 (1) 刀・刀子・小柄 .....	368
挿図290	鉄製品 (2) 鏃・小札 .....	369

挿図291	鉄製品 (3) 容器 蓋・身	370
挿図292	鉄製品 (4) 鍋・把手	371
挿図293	鉄製品 (5) 鎌・鋤・鍬	372
挿図294	鉄製品 (6) 工具・道具	373
挿図295	釘の法量と個数	374
挿図296	鉄製品 (7) 釘 (1)	375
挿図297	鉄製品 (8) 釘 (2)	376
挿図298	鉄製品 (9) 釘 (3)	377
挿図299	鉄製品 (10) 釘 (4)	378
挿図300	鉄製品 (11) 釘 (5)	379
挿図301	鉄製品 (12) 釘 (6)	380
挿図302	鉄製品 (13) 釘 (7)	381
挿図303	鉄製品 (14) 釘 (8)	382
挿図304	鉄製品 (15) 釘 (9)	383
挿図305	鉄製品 (16) 火打金・紡錘車その他、銅製品煙管その他	384
挿図306	古銭出土状況	392
挿図307	古銭	393
挿図308	古銭の法量と年代	394
挿図309	鍛冶関係遺物出土状況	397
挿図310	鉄滓 (1)	398
挿図311	鉄滓 (2)	399
挿図312	鉄滓 (3)	400
挿図313	木製品出土状況	402
挿図314	木製品 (1) 曲物	408
挿図315	木製品 (2) 曲物	409
挿図316	木製品 (3) 漆碗	410
挿図317	木製品 (4) 鎌・木錘・栓・下駄	411
挿図318	木製品 (5) 羽子板・櫛・箸・その他	412
挿図319	木製品 (6) 井戸枿材	413
挿図320	木製品 (7) 井戸材・その他	414
挿図321	木製品 (8) 木簡	415
挿図322	一石五輪塔他出土状況	420
挿図323	石製品 (1) 一石五輪塔 (1)	421

挿図324	石製品 (2) 一石五輪塔 (2) .....	422
挿図335	石製品 (3) 五輪塔その他 .....	423
挿図326	石臼・茶臼出土状況 .....	424
挿図327	石製品 (4) 石臼 (1) .....	425
挿図328	石製品 (5) 石臼 (2) ・茶臼 .....	426
挿図329	砥石出土状況 .....	427
挿図330	石製品 (6) 砥石 (1) .....	428
挿図331	石製品 (7) 砥石 (2) .....	429
挿図332	石製品 (8) 砥石 (3) .....	430
挿図333	石製品 (9) 砥石 (4) .....	431
挿図334	石製品 (10) 砥石 (5) .....	432
挿図335	石製品 (11) 砥石 (6) .....	433
挿図336	石製品 (12) 砥石 (7) .....	434
挿図337	硯出土状況 .....	437
挿図338	石製品 (13) 硯 (1) .....	438
挿図339	石製品 (14) 硯 (2) .....	439
挿図340	石鍋出土状況 .....	440
挿図341	石製品 (15) 石鍋 .....	441
挿図342	磨石出土状況 .....	442
挿図343	石製品 (16) 磨石 (1) .....	443
挿図344	石製品 (17) 磨石 (2) .....	444
挿図345	古代瓦出土状況 .....	445
挿図346	瓦 (1) 丸瓦 .....	446
挿図347	瓦 (2) 平瓦 .....	447
挿図348	中世瓦・磚出土状況 .....	449
挿図349	瓦 (3) 軒丸瓦・塑像 .....	450
挿図350	瓦 (4) 丸瓦・雁振瓦 (1) ・その他 .....	451
挿図351	瓦 (5) 雁振瓦 (2) .....	452
挿図352	磚の法量 .....	453
挿図353	磚 (1) .....	454
挿図354	磚 (2) .....	455
挿図355	磚 (3) .....	456
挿図356	風炉・火鉢出土状況 .....	458



挿図357	土製品 (1) 風炉・火鉢 (1) .....	459
挿図358	土製品 (2) 火鉢 (2) .....	460
挿図359	土製品 (3) 火鉢 (3)・香炉 (1) .....	461
挿図360	土製品 (4) 火鉢 (4)・香炉 (2) .....	462
挿図361	土錘出土状況 .....	464
挿図362	土製品 (5) 土錘 (1) .....	465
挿図363	土製品 (6) 土錘 (2) .....	466
挿図364	土錘の法量 .....	467
挿図365	面子出土状況 .....	469
挿図366	面子の重さ .....	469
挿図367	土製品 (7) 面子 (1) .....	470
挿図368	土製品 (8) 面子 (2) .....	471
挿図369	土製品 (9) 面子 (3) .....	472
挿図370	土製品 (10) 面子 (4) .....	473
挿図371	土製品 (11) 面子 (5) .....	474
挿図372	土製品 (12) 面子 (6) .....	475
挿図373	土製品 (13) 轆羽口 .....	476
挿図374	ガラス玉 .....	480
挿図375	江戸時代以降の陶磁器 (1) .....	482
挿図376	江戸時代以降の陶磁器 (2) .....	483
挿図377	鶴荘絵図の片岡荘域 .....	485
挿図378	片岡荘周辺の荘園と水利 .....	487
挿図379	兵庫県輸入陶磁器出土遺跡分布図 .....	490
挿図380	福田片岡遺跡出土輸入陶磁器の法量 .....	495
挿図381	井戸集成 (1) .....	497
挿図382	井戸集成 (2) .....	498
挿図383	福田片岡遺跡と輸入陶磁器 .....	500
挿図384	福田片岡遺跡と中世の物流 .....	501
挿図385	福田片岡遺跡Ⅰ～Ⅲ期 .....	502
挿図386	福田片岡遺跡Ⅳ～Ⅵ期 .....	503
挿図387	福田片岡遺跡Ⅶ～Ⅸ期 .....	504
挿図388	福田片岡遺跡の遺構 .....	505

- 付図1 福田片岡遺跡遺構全体図  
 付図2 福田片岡遺跡中世の遺構図  
 付図3 輸入陶磁器集成図

## 表 目 次

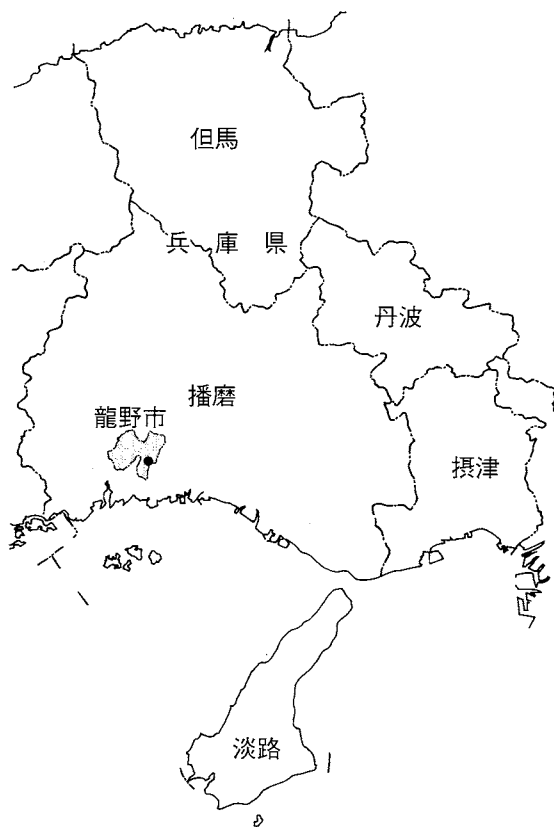
表1	掘立柱建物一覧	100~112
表2	弥生土器の器種分類	182
表3	弥生土器甕の分類	184
表4	石器一覧	212
表5	中世土器他の組成について	242
表6	輸入陶磁器	332
表7	金属製品一覧(1)(2)	385~391
表8	古銭一覧	395・396
表9	鉄滓一覧	401
表10	木製品一覧(1)~(3)	417~419
表11	石造品・一石五輪塔一覧	420
表12	石臼・茶臼一覧	424
表13	砥石一覧	435・436
表14	硯一覧	437
表15	石鍋一覧	440
表16	磨石一覧	442
表17	瓦一覧(1)(2)	448
表18	塼一覧	457
表19	風炉・火鉢一覧	463
表20	土錘一覧	468
表21	面子一覧	476・477
表22	鞆羽口一覧	478
表23	ガラス玉一覧	480
表24	井戸集成	499

## 第1章 はじめに

「中世遺跡を掘る」ことが、埋蔵文化財保護行政の調査として始められ一般化したのは、昭和42年からの福井県一乗谷朝倉氏遺跡・昭和48年からの広島県草戸千軒町遺跡の調査研究からであると言っても過言ではなく、20数年を経た今日、行政による大規模な調査も含め中世の都市遺跡・村落遺跡・寺院・城郭等数多くの調査例がある。中でも、中世土器研究・貿易土器研究そして近世考古学研究の進展と共に遺物・遺構・遺跡学が多くの成果を生み出し、日本国内ばかりではなく、東アジアまでを調査研究の対象とする広がりを示している。

兵庫県下において、中世墓・経塚・寺院・山城の調査例は古くからあるが、昭和57年刊行の『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』が纏められたことが、「中世遺跡」調査研究の進展を促した。

福田片岡遺跡は法隆寺領播磨国鵜荘内にあり、遺跡の最後は方形館跡であり、中世荘園遺跡・城館として重構造を持つ遺跡である。

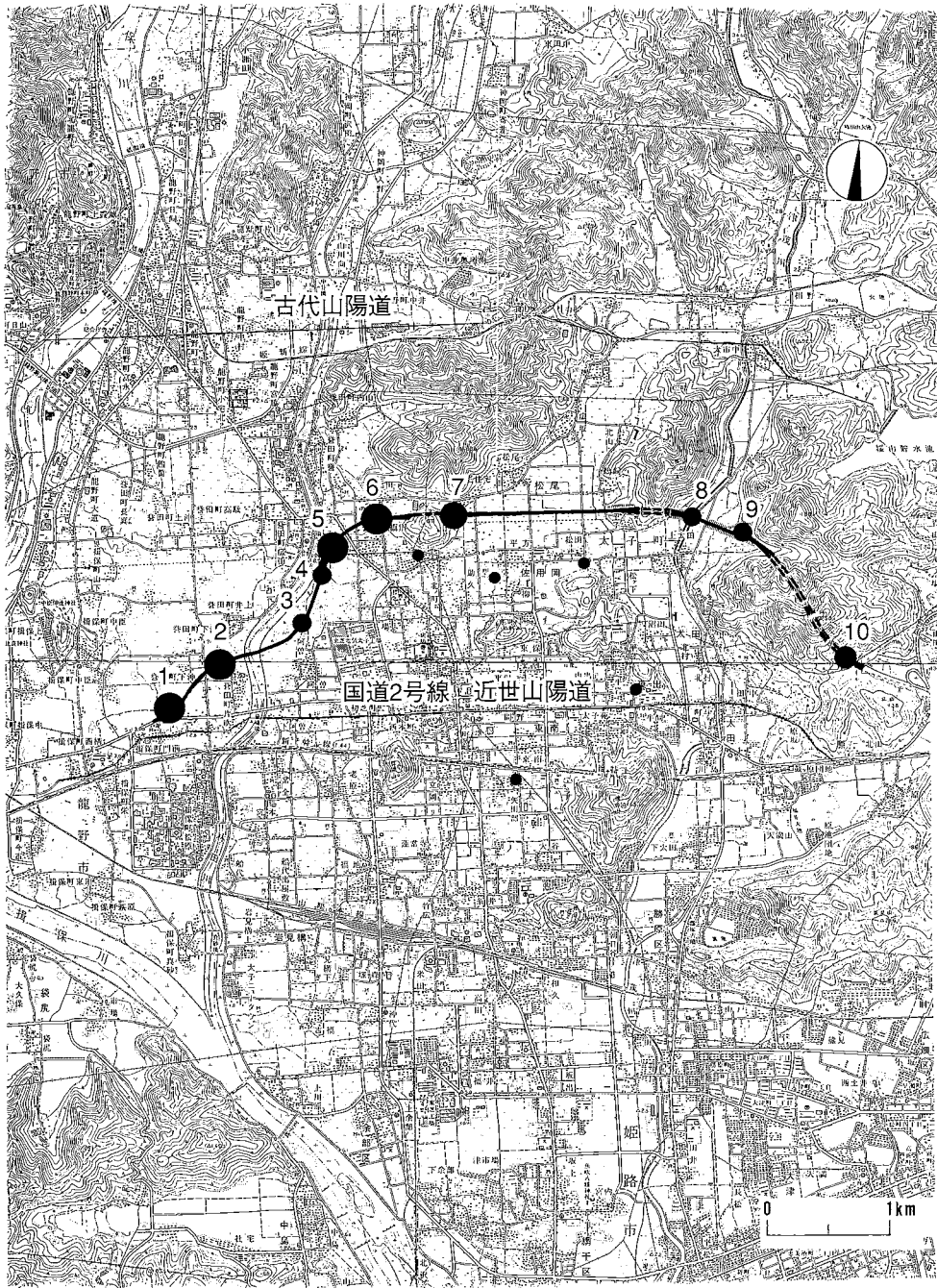


挿図1 福田片岡遺跡位置図

国道2号太子・竜野バイパス建設に伴い、約20,000㎡の範囲を調査した。鵜荘内では福田天神遺跡（龍野市）、城山遺跡（太子町）が調査されている。

福田天神遺跡調査報告書の中で、「鵜荘古絵図」嘉暦4（1329）年と遺跡が検証されるように福田片岡遺跡も古絵図の分析から調査が開始された。昭和55年の確認に始まり、昭和59年に終了した発掘調査と並行して兵庫県立歴史博物館の鵜荘・小宅荘・弘山荘復元図作成調査研究が実施され、調査終了後の昭和61年から鵜荘現況調査が開始され現在も太子町・竜野市において継続して実施されている。

福田片岡遺跡の歴史的・地理的成果の詳述については、鵜荘現況調査とその考察を踏まえた上で成されなければいけないが、本書では不十分ながら福田片岡遺跡の一端を紹介するに止まる。



挿図2 太子・竜野バイパス路線と埋蔵文化財と傍示石

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経過

建設省近畿地方建設局姫路工事事務所が国道2号太子・竜野バイパス建設（揖保郡太子町山田～龍野市揖保町門前）を計画するに当たり、兵庫県教育委員会と協議を重ね、路線内の遺跡詳細分布調査成果を踏まえて、遺跡保存のための発掘調査が計画された。太子・竜野バイパス建設にかかる遺跡は、挿図2の10箇所が昭和54年から昭和59年にかけて調査され、記録保存された。1. 宝林寺北遺跡 2. 片吹遺跡 3. 阿曾遺跡 4. 春日社跡地 5. 福田片岡遺跡 6. 福田天神遺跡 7. 坊主山遺跡 8. 中後瀬遺跡 9. 上太田古墳群 10. 山田古墳群があり、旧石器時代・縄文時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が発見されている。

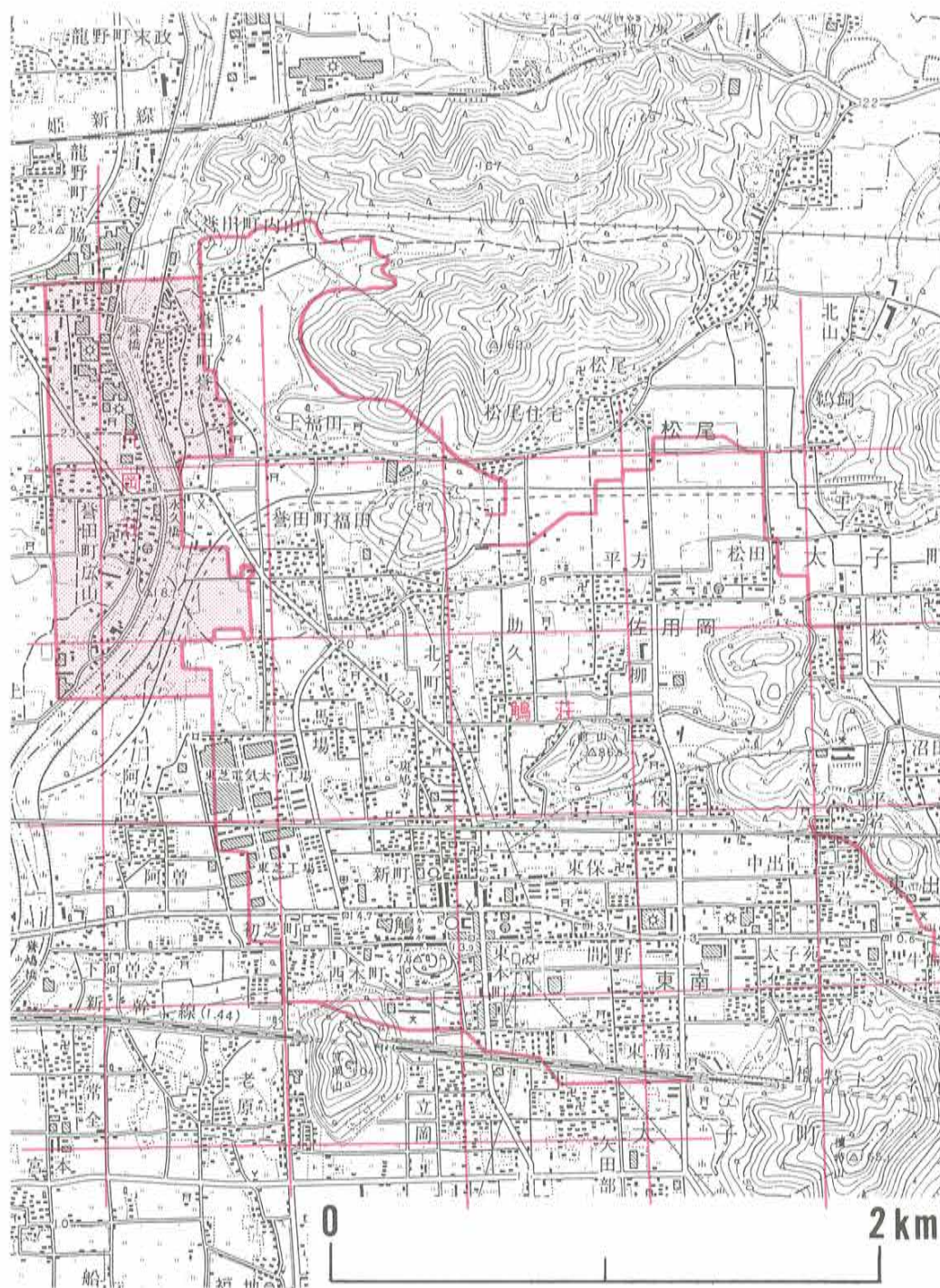
中でも福田天神遺跡・春日社跡地・福田片岡遺跡は法隆寺領鵜荘園内遺跡、宝林寺北遺跡は新熊野社領浦上荘園内遺跡として古絵図等から位置付けられており、中世荘園遺跡の調査例となった。

法隆寺領鵜荘は鎌倉時代末の嘉暦4年（1329）絵図・南北朝時代の至徳3年（1386）絵図が存在しており、現在では荘園内の現況調査が精力的にされ、考証が進んでいる。調査開始当時は法隆寺所蔵の嘉暦4年絵図の写しが太子町斑鳩寺にあり利用できる唯一の絵図であった。

福田片岡遺跡の調査の間、兵庫県立歴史博物館の鵜荘調査研究により本書巻頭カラー図版の京都大学文学部博物館所蔵の嘉暦4年絵図・至徳3年絵図2枚の写しを検討する機会を得た。2本の絵図の情報量の違い等を検討するに及んで、福田片岡遺跡の鵜荘内の中世遺跡としての重要性が明らかになってきた。

荘園絵図集成でも指摘されている事であるが、嘉暦4年絵図の注に鵜荘360町歩の内31町歩余の「弘山押領分在之」の片岡荘の地域が発掘調査地区と重なることが判り、また、絵図の西方の条の記載を検討するに、2枚の絵図の筑紫大道の朱線書きの部分が発掘調査地区と重なることになり、絵図資料以外使用例のない「筑紫大道」の検討を含め種々難題が抽出できる。調査は荘園内の傍石・斑鳩寺・阿曾神社を現地踏査する事から再度始めることとした。

なお、福田片岡遺跡は昭和55年の龍野市教育委員会・東洋大学付属姫路高等学校考古学研究室が龍野市福田所在の遺跡を国道17号線を挟んで福田A・B地点とした福田B地点にあたるが、福田A地点が同年に全面調査を実施して福田天神遺跡と報告されたことから、昭和56年の調査に当たり福田片岡遺跡と遺跡名称を変更した。



挿図3 鵜荘と片岡荘位置図



## 第2節 発掘調査

鵜荘内の中世遺跡の調査、福田天神遺跡・春日社跡地の調査を経験して鵜荘絵図の分析・現地地形と絵図記載の水路・傍示石・斑鳩寺・阿曾神社などの現地踏査から遺跡の復元を始めた(挿図4)。

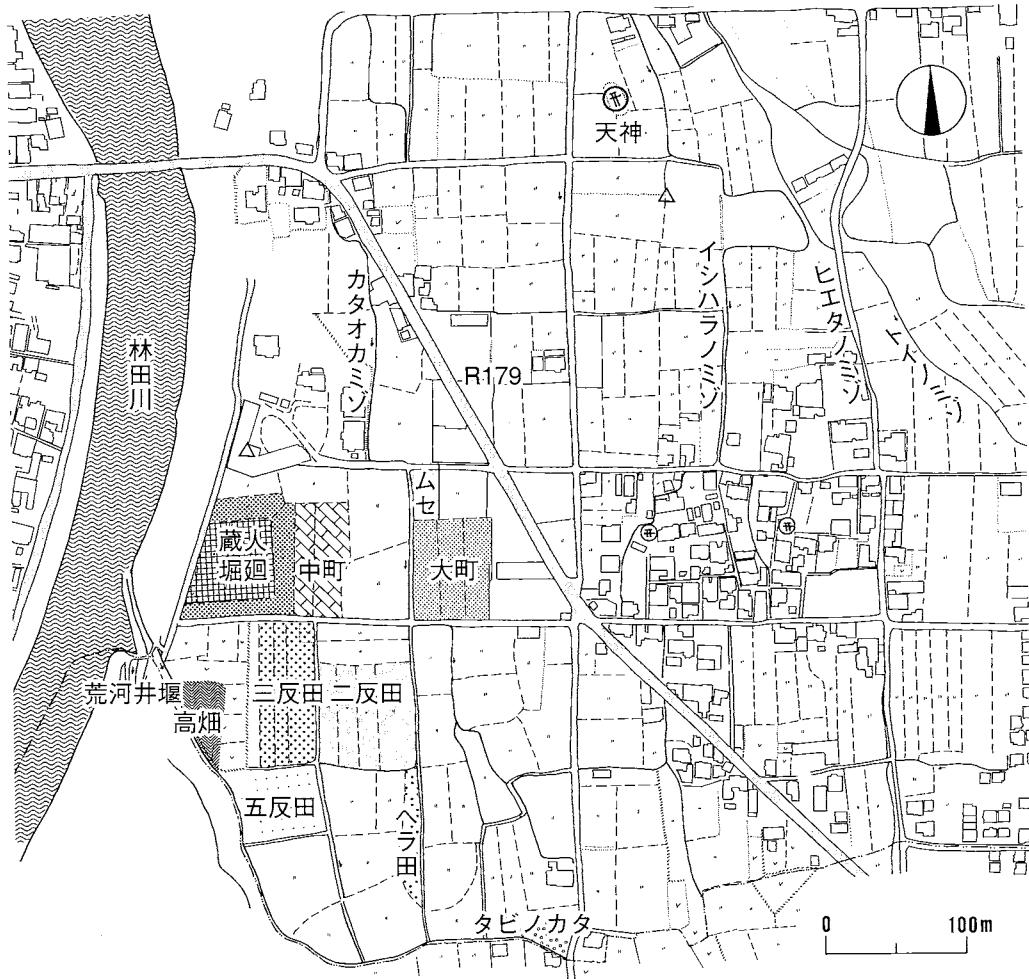
ただし、昭和55年(1980)の確認調査時点では20mピッチで機械的に坪(グリッド)を設定し、適宜トレンチに変更して調査されている。従来の集落遺跡の確認調査方法であった。ただ調査対象面積約20,000㎡にわたって、豊富な中世土器を中心に遺物が出土するため全面調査を必要とした(挿図5)。

昭和56年(1981)は福田片岡遺跡の全面調査の初年度に当たり、道路センター№262～277の広い調査地区を1.北地区(N)[国道179線から市道永久橋福田線間]2.中央地区(C)[市道永久橋福田線～市道永久橋太子町線間]3.南地区(S)[市道永久橋太子町線以南]の三区分けし、C地区の市道永久橋太子町線沿いの部分から発掘調査を実施した。なお、S地区については堆積土が厚いため、昭和55年の成果を踏まえて改めてグリッド設定して(挿図5)、第2次確認調査を実施し、全面調査の積算資料を補強した。この年の調査はスケジュール的に厳しく、遺構検出の段階で調査が打ち切られた。

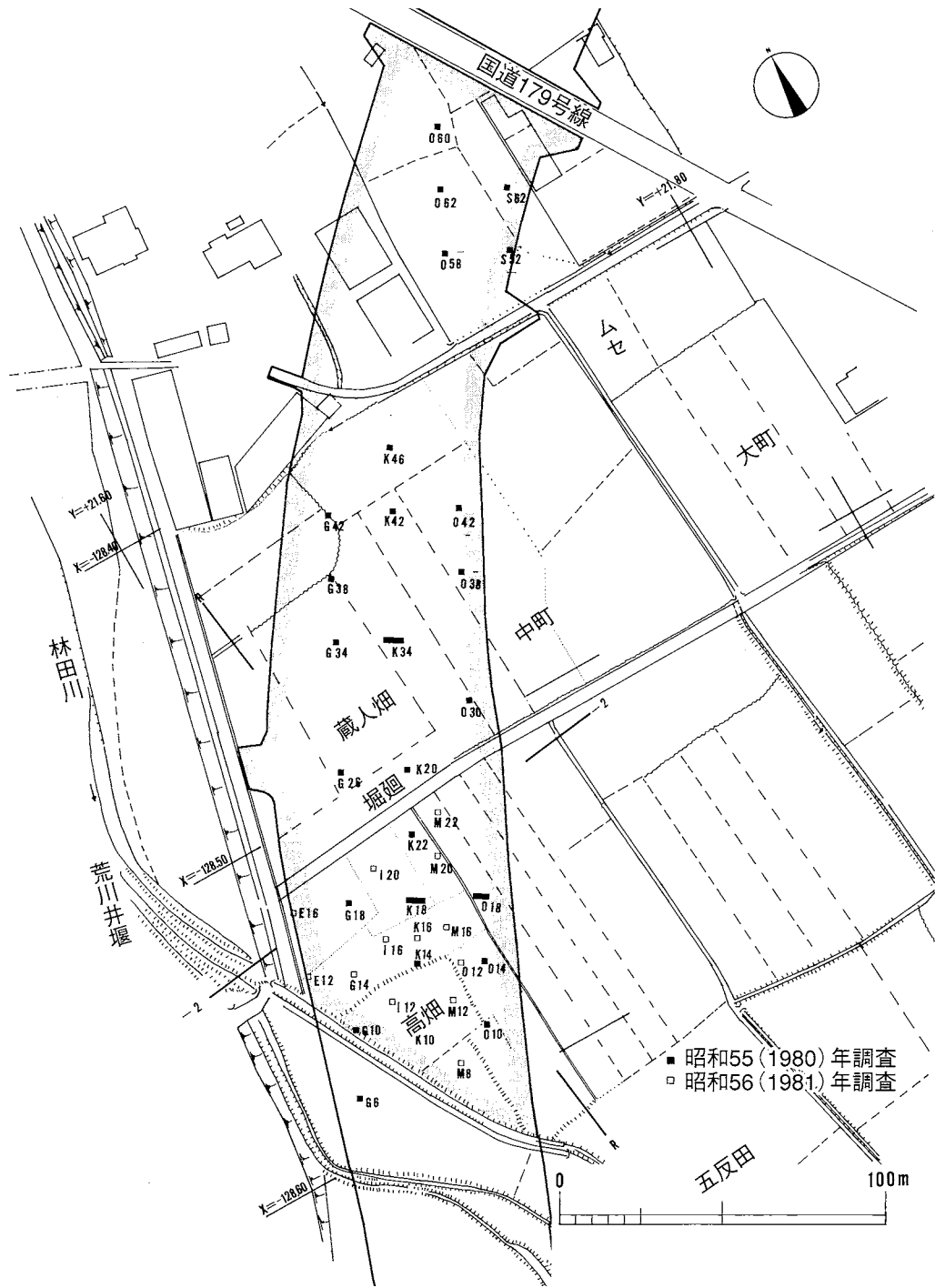
昭和57年から新たに前年の調査を踏まえた形で、昭和59年までの3ヵ年で対象面積の全面調査を終了した。

さて、播磨国揖保郡の条里地割と鵜荘域を重ねた図(挿図3)から、福田片岡遺跡は条里16条12坊の条里に位置し、鵜荘域の九条鵜墓廻言石丸屋敷・同下村田、十条鵜流田/片岡七反十条流田、片岡満願寺下井依、十一条片岡庄・佐会田/五段残に比定できると考える。

昭和57年度からは立命館大学 高橋 学氏の協力を得て、微地形の分析から遺跡を分析することを行い、弥生時代及び古墳時代の遺構と集落を復元し、かつ平安時代以前の水田を調査する機会を得た。



挿図4 福田片岡遺跡周辺の水田呼称と神社



挿図5 昭和55・56年度確認調査位置図

## 1. 昭和55・56年度調査（第1次・第2次調査）

### 昭和55年度調査（第1次調査）

昭和55年5月から6月にかけて、龍野市教育委員会が調査主体となり、発掘調査を東洋大学付属姫路高等学校考古学研究会（代表上田哲也）に依頼して、遺跡の範囲確認調査が実施された。約20,000㎡の対象地に27箇所（136㎡）のトレンチが設定された（挿図6上）。

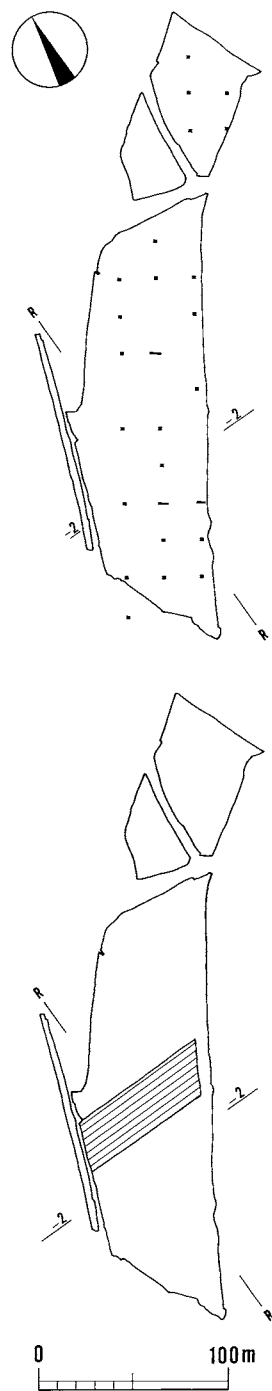
調査の結果、本報告書にC地区と呼称する中央部の各所のトレンチでピット・溝などが検出され、特に、石や備前焼の破片などで護岸をする堀と考えられる遺構も検出された。調査区内の水田には「蔵人畑」・「堀端」などの地名が残り、検出された遺構とを勘案し中世の館が想定された。

### 昭和56年度調査（第2次調査—1）

龍野市教育委員会の確認調査成果に基づき、今後の発掘調査を県教育委員会が引き継ぐことになった。前年度では福田遺跡B地区と呼称されていたが、A地区が福田天神遺跡と名付けられたので、当調査区を「福田片岡遺跡」とし、区別することになった。また、調査対象箇所は国道179号線から南西へ約300mの広域な区間であり、調査の都合上、北から「北地区」、「中央地区」、「南地区」と3地区に分けた。調査対象面積が約20,000㎡にもなり、今後、全面調査終了には2～3年は必要と考えられた。また、北地区の一部には未買収地が残っているなど問題があり、県教育委員会は建設省姫路工事事務所と工事行程を踏まえ、調査順序の協議を行った。結果、確認調査では遺構が推定される中央区の市道永久橋福田線の北側から順次北方へ進め、本年度は年度内に出来る区域とすることになった。また、南地区では、再度確認調査を行い、より明確な調査資料を得ることとした。

中央区では、南北約25m、東西約80mの区域を調査した。

市道永久橋福田線路肩から北へ約2～2.5mの箇所に道路に平行し、幅4～5m、深さ約2mを測る逆台形の東西方向の堀を検出した。堀の東端部は北に屈曲していることが判明した。さらに、東側では約3.5mの空白部を置き、別の南北堀が確認され、館の東側は二重の堀が掘削されていることも判明した。東西堀の西端は調査地外となり不明であるが、前年度の確認調査結果や現状水田の地割り



挿図6 昭和55・56年度調査地区位置図



挿図7 昭和56年度調査地区遺構図



などから推定して、さほど西へ延びるとは考えられず、堀で区画された館の一辺は約70m程と考えられた。堀内埋土からは、多量の備前焼片と漆器椀や一石五輪塔などが出土した。

堀で囲まれた内側では、多数のピット群や土壙を検出した。一部のピット底には上面が平らな河原石が入り、明らかに掘立柱建物の根石と考えられるものも認められた。

ピット群と同一レベルで集石土壙を検出した。人頭大の河原石と備前焼片が多数投入されている。ピットを切って掘削されている土壙も認められているのでピット群よりも後出のものであろう。遺構の性格は不明であるが、他の調査例から土取り場とも考えれる。

#### 昭和56年度調査（第2次調査-2）

南区は第1次確認調査で、ピットや土師器、銅銭などが検出されている。今回の成果も同様であり、調査対象地域全域に遺構の広がり認められた。特にピット群は中央部に集中し、周囲に溝が走る事も判明した。出土遺構は断片であるが、中世に比定されるものである。このことから、南地区は北に隣接する館に関連した、中世集落跡が広がっていると推定された。

#### 調査体制

社会教育・文化財課長 藤和重喜／参事 田中幹雄／副課長 道畑 実／埋蔵文化財係長  
池田義雄／主査 大村敬通／主任 小川良太

調査担当 西口和彦・種定淳介

調査補助員 小谷五郎・小谷義男・黒田卓也

#### 調査日誌抄

7月13日（月）現地に調査事務所を建設。発掘調査の準備を始める。

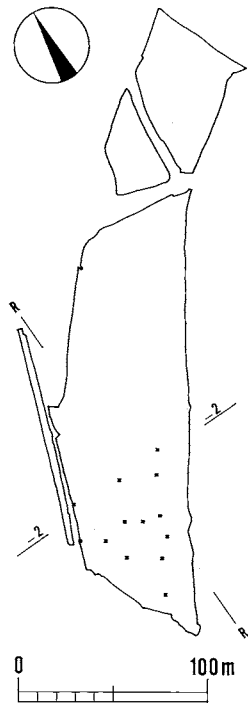
20日（月）調査区を3区分する。中央区の草刈りから始め、終了箇所から発掘する。

29日（水）堀跡、ピット群を検出する。

9月2日（木）堀跡の発掘が進む。堀内から

11月17日（火）凶化作業のため、規準点測量を奈良国立文化財研究所伊東、西村両氏の指導のもとに開始する。

昭和57年1月20日（水）遺構写真・実測図が完成し、現地撤収の作業を始める。



挿図8 昭和56年度  
確認調査位置図

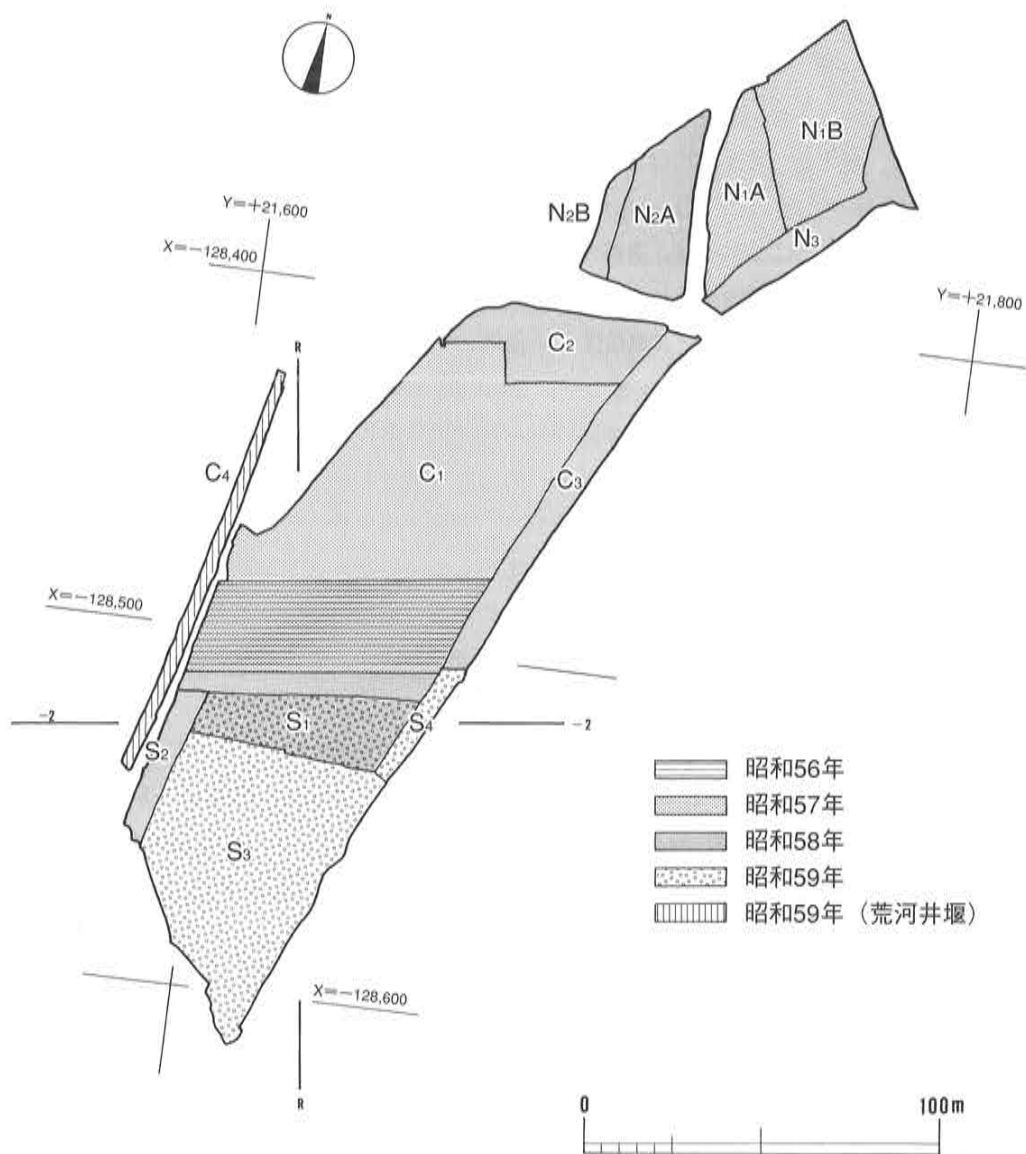
## 2. 昭和57年度調査（第3次調査）

### (1) 調査方法と調査地区

昭和56年度から全面調査を始めたが、昭和57年度から改めて調査体制を整えたため、ここで調査方法を含め、調査地区についても説明をしておく。北地区・中央地区・南地区の大分区は変わらない。各年度調査の項で詳しく述べられるが、北地区（N地区）はN<sub>1</sub>（A→B）地区→N<sub>2</sub>（A→B）地区→N<sub>3</sub>地区と調査が進められ、中央地区（C地区）はC<sub>1</sub>地区→C<sub>2</sub>地区→C<sub>3</sub>地区→C<sub>4</sub>地区、南地区（S地区）はS<sub>1</sub>地区→S<sub>3</sub>地区（Ⅰ）→S<sub>2</sub>地区（1T→3T→2T）→S<sub>1</sub>地区（Ⅱ面）→S<sub>4</sub>地区→S<sub>1</sub>地区（Ⅲ面）→S<sub>3</sub>地区（Ⅱ面）とそれぞれ調査が進められた。

中世の遺構面の検出については、遺跡が自然堤防上に位置し後世に水田・畑化する際、平坦地となったため遺構面の認識が難しかった。従って中世の遺構面の調査について地区毎に数が異なる。1面の調査はN<sub>1</sub>A地区・N<sub>2</sub>B地区・N<sub>3</sub>地区・C<sub>3</sub>地区・C<sub>4</sub>地区、2面の調査はN<sub>1</sub>地区・N<sub>2</sub>A地区・C<sub>1</sub>地区・C<sub>2</sub>地区・S<sub>3</sub>地区・S<sub>4</sub>地区、3面の調査S<sub>1</sub>地区・S<sub>2</sub>地区において実施された。昭和58年度の調査から立命館大学地理学（臨海平野の微地形の成立）を専攻の高橋 学氏の協力を得て、遺跡の成立及び衰退、遺跡の消長の原因を地理学的見地から現地で土層を検討しながら、考古学・歴史学的な調査を有効に実施した。古代・中世鶴荘の遺跡が播磨灘臨海平野の成立史の中でどう対応したか、また開発したかといった諸問題も含めた調査を実施することとなった。実際の調査においては、遺跡の成立する地形基盤を理解し、下層の遺構の調査（弥生時代中期集落、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器群と遺構）、奈良・平安時代の溝と水田の調査が効率良く実施できた。

ところで、福田片岡遺跡の調査地区は国土座標X = -128,300～-128,600、Y = +21,600～+21,800を中心としており、昭和56年度の調査時に道路センター杭を利用して5mメッシュの調査小地区を設けていたが、昭和57年度の調査開始時においてメッシュの方向を生かして、しかも調査範囲が20,000㎡と広いため改めてメッシュ割り付けを行った。40m×40mの方眼を遺跡に被せ、北からA. B. C・・・X. Y. Zと大区分した。その一つの大区分を4分割して20m×20mの方眼として逆時計回りにa. b. c. dとし中区分し、最後に中区分の一つを4分割して10m×10mの方眼とし同じく逆時計回りにa. b. c. dとして小区分した。すなわち、A→A a. A b. A c. A d→A a a. A a b. A a c. A a d... A d a. A d b. A d c. A d dとなる。遺構の呼び方・遺物の取上げ方は基本的にN<sub>1</sub>W地区と付け、それぞれの遺構SD・SKと名付けた。井戸は数が少ないためSE01・・・と表している。



挿図9 年度別調査範囲

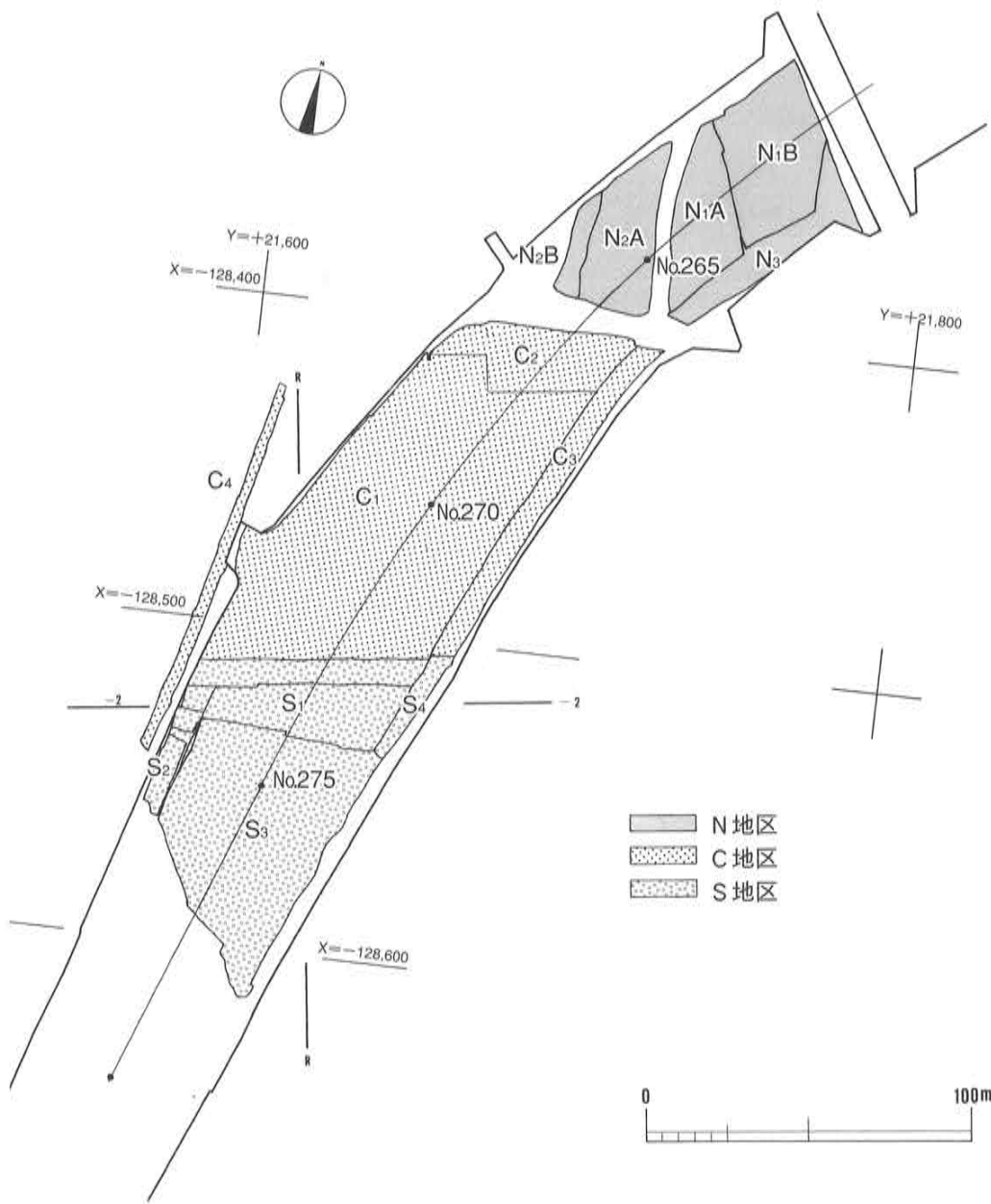
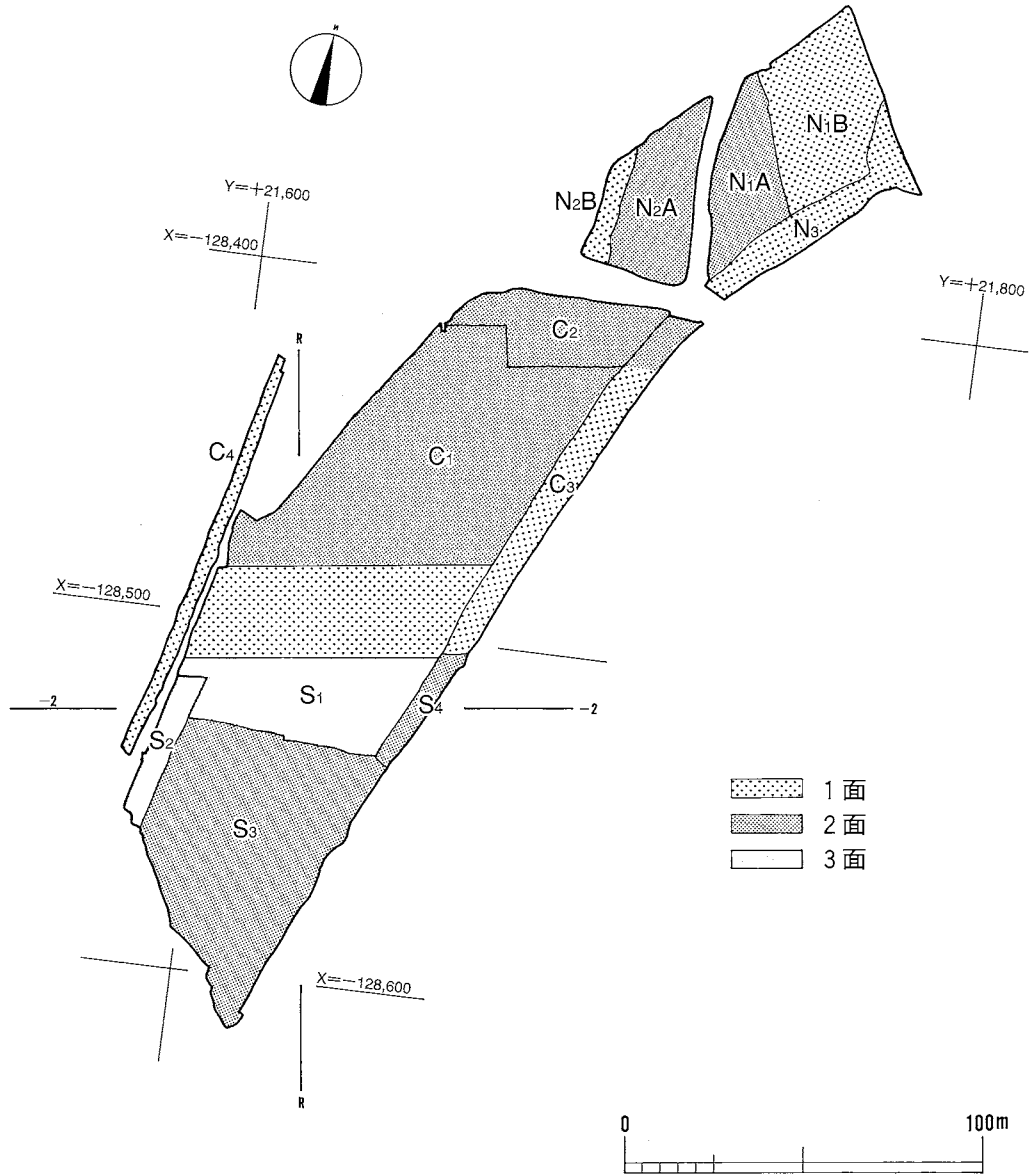
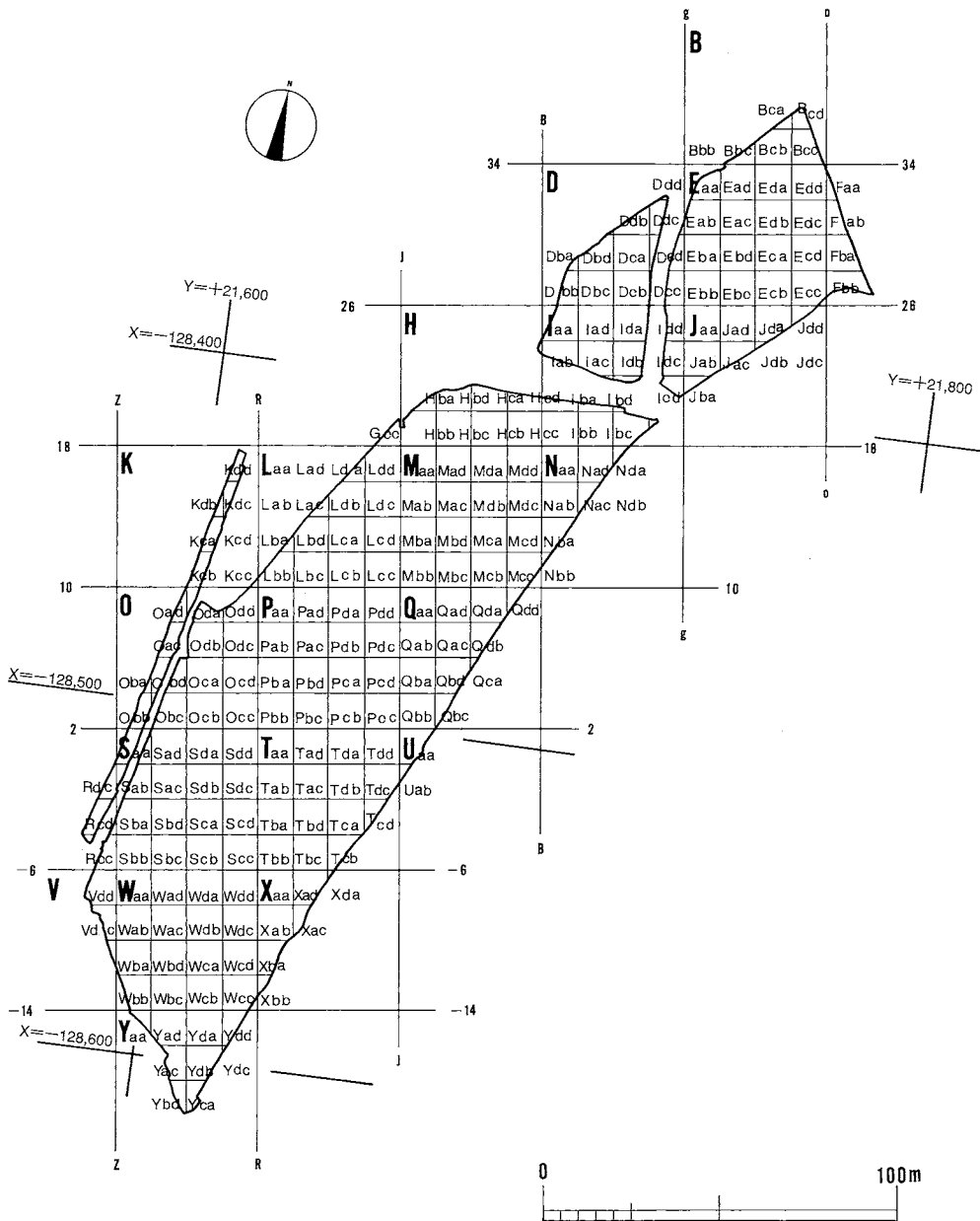


插图10 調査地区 (N・C・S地区) 位置図



挿図11 調査面の範囲





挿図12 調査地区割り付け図

## 調査体制

社会教育・文化財課長 藤本 繁／参事 吉村芳郎／副課長  
道畑 実／課長補佐 池田 義雄／埋蔵 文化財係長 大村敬  
通／主任 小川良太

調査担当 岡崎正雄・岡田章一・種定淳介・西口圭介

調査補助員 小谷五郎・小谷義男・黒田卓也

## (2) C地区の調査

C地区は、幅約4mの内堀・外堀の二重に堀に囲まれた中世寺院跡ならびに館跡からなる。遺跡の北西は、林田川によって形成された自然堤防の末端にあたり、古墳時代前期の土器が出土している。後世再利用し、内堀北辺の東への水路を導く東西堀の北部にも、古墳時代前期の土器が出土する自然流路が発見されている。

中心となる遺構群は、内堀の内側に広がる一辺約65m四方の寺院跡であり、法隆寺に現存する嘉暦4年(1329)の「播磨国鶴荘絵図」の「十条片岡・満願寺・下井依」・「十条流田」に比定される寺院跡である。遺構は、多数の掘立柱建物柱穴、5基の石組み井戸、北東部に点在する墓跡ならびに内堀にはほぼ並行する数条の溝と柵列からなる。

掘立柱建物はOd区に5×3間のSB59、Pd区に4×4間のSB58などがある。

すべての井戸の井側は、石組みである。SE01は直径0.9m、深さ3.3m、掘り方約4.7mであるが、SE02・03・04の3基は、いずれも深さ約2mと浅い。SE05の井筒には、曲物が使用されている。井戸の時期は14世紀から16世紀にかけて築かれている。

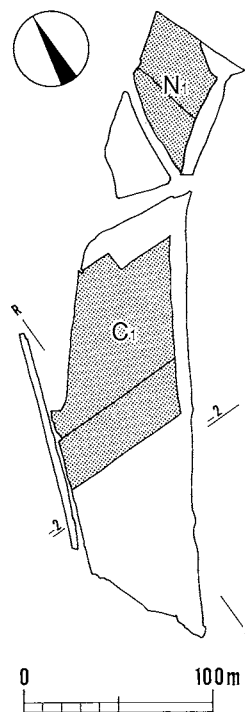
墓跡は、火葬埋葬施設としてSD11からSK15の5基が検出された。特にSK12・13は、14世紀前葉の魚住産捏ね鉢を蔵骨器に転用した墓であり、火葬された骨が炭とともに散乱していた。相伴遺物として、備前焼壺(ⅢB期)・土師器皿・口禿げ白磁碗、宋銭が出土している。

土葬施設としてPbSK100では、土師器皿が10固体以上と鉄鏝が出土しており、木棺墓の可能性はある。

溝は、堀内側の中央南寄りに、一辺22mの空間を区画するように二条から四条の溝が廻る。方向は磁北からわずかに西偏しており、南北朝期の備前焼と土師器皿など多量に出土する。

土壙SK100は、直径約65cm、深さ約20cmを計り、鉄鍋把手と完全な形の青磁皿が出土している。15世紀前半の遺物である。

内堀は、幅約4m、深さ約1.5mを計り、多量の備前焼を包含していた。最下層は青灰色粘



挿図13 昭和57年度  
調査地区位置図

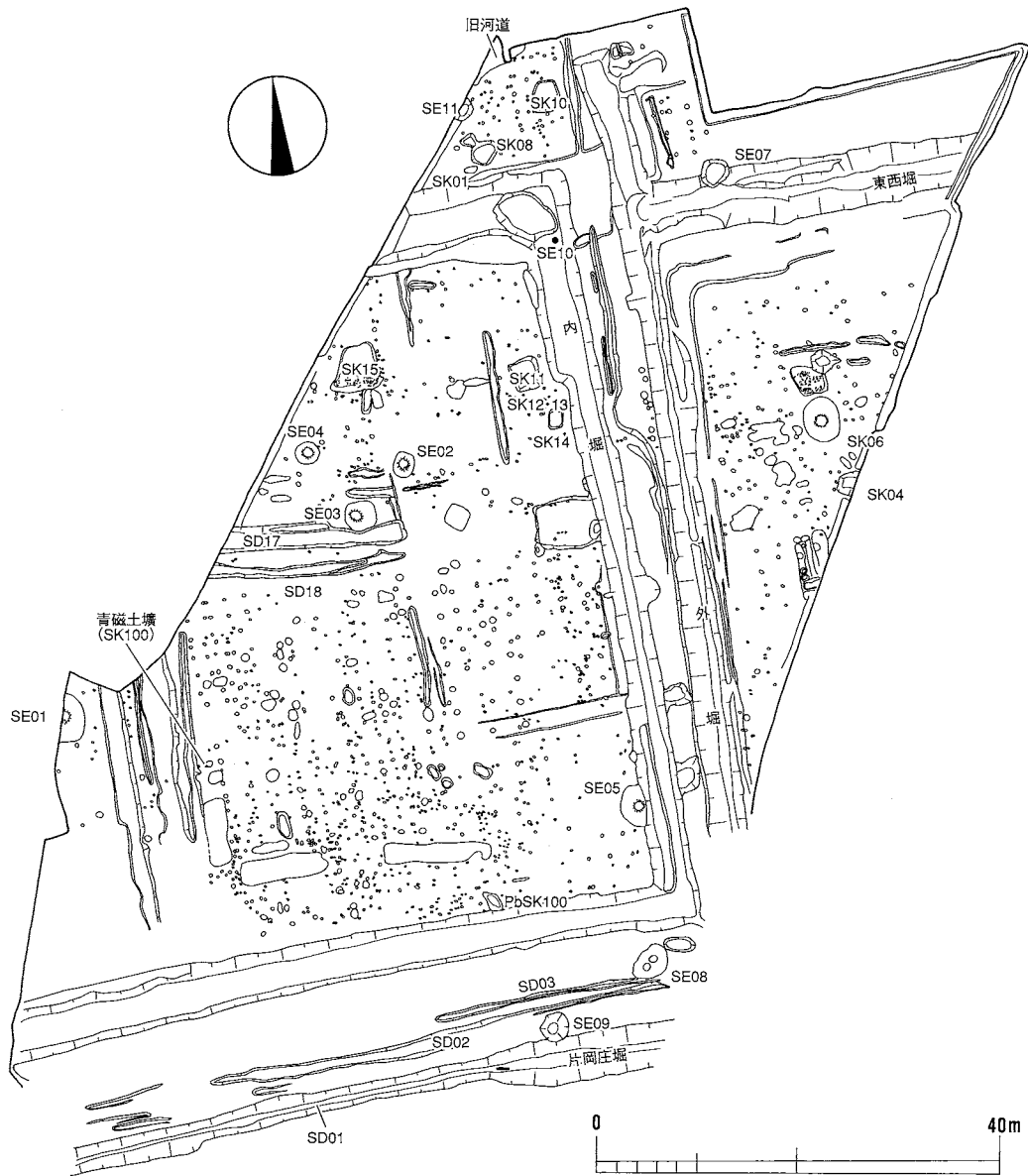


插图14 C地区遺構全体図

質土層で、木製品、巻貝・二枚貝などの自然遺物の残存状態も良好であり、木札や草鞋の出土があった。また、堀から瓦磚の出土も多いが、軒丸瓦は三巴文文様が唯一出土している。

外堀は、幅約4m、深さ約1mで、内堀に比べ側壁の傾斜は緩やかであり、かつ、北辺は自然河道を利用している。内堀と同様に多量の遺物が出土する。

二つの堀から出土した遺物の下限は、16世紀代を示している。堀の間には柵列の柱穴が検出されている。

また、内堀の北辺部際には、火葬跡(SX01)を検出している。長さ1.2mの土坑に河原石を据え置き、遺体を入れた座棺(桶)を焼く施設である。土坑の東半部は、側壁が赤く焼けしまり、坑底からは多量の炭とともに、火を受けた人骨が出土している。共伴遺物がなく時期を特定できないが、内堀より早い時期で、内堀内の他の墓跡と関連する火葬跡であり、14世紀代に遡る。

遺跡東部は、北を東西堀、西を外堀に画された遺構が広がり、複合的な空間の館跡となる。

遺構群のうち、ほぼ中央に井戸SE06がある。直径約1m、深さ2.8m、掘り方直径4.4mで、井側は石組み、井筒は直径60cmの結い桶を用いている。備前焼のほか、井筒内から曲物と底板が出土している。この井戸を取り囲むように柱穴と土壇が点在している。

なお、C地区の調査は昭和56年度の再調査も含め、約6,324㎡を対象とした。

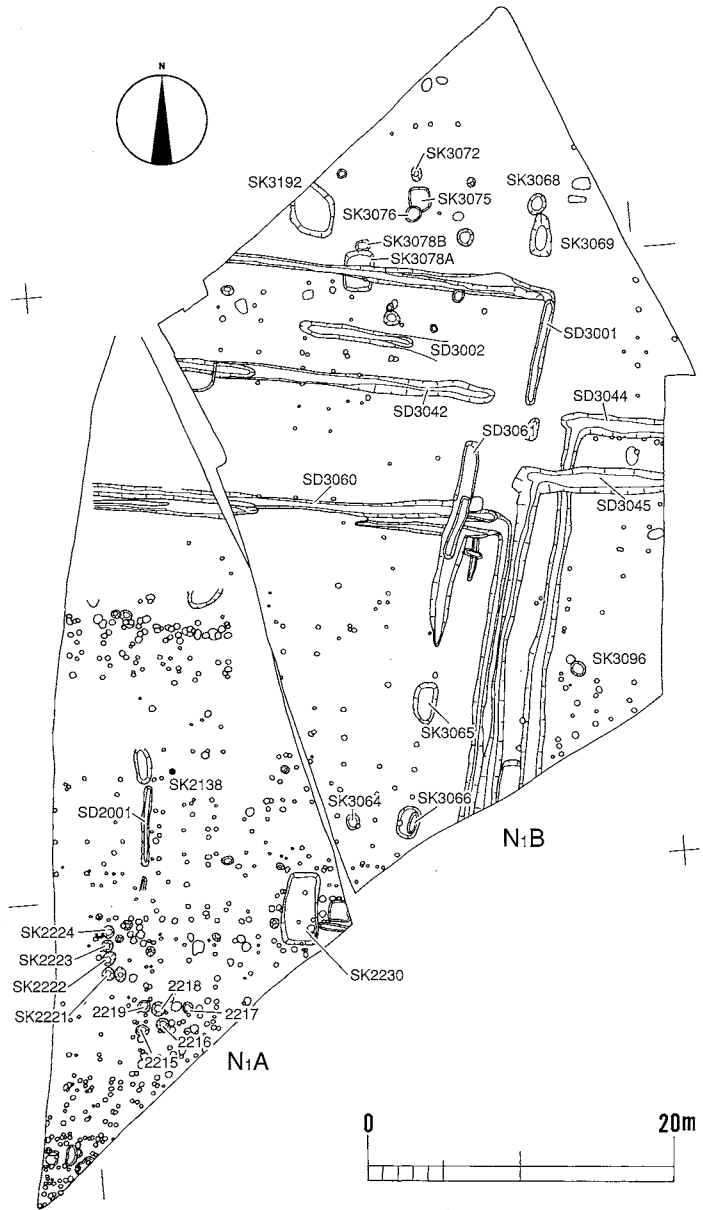
(3) N<sub>1</sub>地区の調査

昭和57年度は北地区のうち東を国道179号線・西を片岡溝・南を市道永久橋で限り、北を施工範囲一杯に取る偏五角形部分—約2,409㎡の調査を実施した。N<sub>1</sub>地区と呼称する。調査は昭和55年度の確認調査の実績をもとに、現表土から約0.5mを機械力によって掘削排除し、以下を人力によって掘削したが、機械・人力掘削土ともに調査区外へ搬出・仮置き出来ないため、調査区を東西2区(N<sub>1</sub>A区・N<sub>1</sub>B区)に分割し、排土を振り替える方法をとった。約2,400㎡を調査した。

調査はN<sub>1</sub>A区より実施し、昭和57年4月より開始し、昭和58年3月に終了した。

調査の結果、近現代・近世・2時期の中世・弥生時代中期の概ね5時期の遺構を検出した。周辺地の地形環境を含めた土層については第5章に詳しく、本章では割愛するが、N<sub>1</sub>地区の基本的な土層堆積と各時期の遺構面との関係については、若干述べておく。

地点によって出現するレベルに違いはあるが、N<sub>1</sub>A区・N<sub>1</sub>B区ともに基本的な堆積層序に違いはない。第Ⅰ層耕土・第Ⅱ層床土・第Ⅲ層灰褐色土・第Ⅳ層褐灰色土・第Ⅴ層灰白色土・第



挿図15 N<sub>1</sub>地区遺構全体図

Ⅵ層黄灰色土・Ⅶ層暗黄色土・Ⅷ層暗褐色土・Ⅸ層礫層の順である。

第Ⅲ層灰褐色土上からは近現代、近世の遺構が掘り込まれている。標高17.30m前後である。第Ⅳ層褐灰色土上からは、室町時代と考えられる遺構が掘り込まれている。第Ⅴ層灰白色土からは鎌倉時代と考えられる遺構が掘り込まれている。第Ⅵ層黄灰色土・第Ⅶ層暗黄色土上では遺構は検出されず、第Ⅷ層暗褐色土上からは、弥生時代中期の遺構が掘り込まれている。第Ⅸ層礫層はその層中に弥生時代中期の遺物を含む層である。この礫層は林田川の氾濫に起因して供給されたもので、幾つもの微隆起と小谷による掌状の微地形をつくりだしているものと考えられる。

N<sub>1</sub>地区ではこの礫層の形成から、N<sub>1</sub>B区の北東半は掌状の微高地の上にあたり、N<sub>1</sub>B区の南西半とN<sub>1</sub>A区は谷部にあたると考えられる。

調査の結果、面的にとらえ得たのは中世の2時期と弥生時代中期の計3面の遺構面であった。第1面-西区において調査した。中世の遺構とともに近現代・近世の遺構を調査した。

近現代の遺構として取り上げたものは、播州電気鉄道の軌道敷に伴う方形の土壌である。播州電気鉄道、所謂『播電』は大正14年に開通し、昭和9年に廃止されるまで、網干・新宮間を結んでいた私営鉄道である。方形土壌内に鉄製ワイヤーが巻きついた丸太材が遺存している。電気鉄道の送電架線を支える鋼索とそのアンカーであったものと考えられる。調査以前の現況でも軌道敷の隆起が若干残存していたが、調査当初は播州電気鉄道に係わる遺構は調査対象ではなく、事前の測量等を行わず機械掘削を実施した。このため、近世の遺構とともに第1面で検出している。近世の遺構は、方形の土壌を1基検出している。土壌内より陶磁器・瓦片が出土している。土壌は床土直下の第3層上面より掘り込まれているが、やはり当初は調査対象ではなかったため機械掘削によって第4層直上まで掘削を行った後検出、調査を実施した。

第1面を構成する中世の遺構はN<sub>1</sub>A区南半において主に検出した。室町時代の遺構面と考えられる。遺構は第4層上面より掘り込まれているが、埋土の複雑さから第5層上面において検出・調査をおこなった。この第4層はN<sub>1</sub>B区では南西半以外には殆ど堆積しておらず、東区では第1・2面を同一面において確認している。

遺構は約80個の柱穴と数基の土壌を検出した。この内、調査区中央の柱穴群の大半は建物跡SB08・SB09に伴うもので、第2面において規模が明確となった。13世紀～14世紀前半と14世紀～15世紀初頭と考えられる建物跡である。土壌SK3065以南の柱穴群のうち、一部はSB18・SB19に伴うもので、第2面において規模が明確となった。15世紀～16世紀初頭と考えられる建物跡である。それ以外の柱穴は建物としての復元が行えなかったが、その柱穴の様相からみて小規模な建物跡の存在が考えられる。また、柱穴内からは15世紀～16世紀代の遺物が若干出土しており、柱穴群の時期を推定できる。SK1001～1006のうち、SK1001・SK1002からは、土師器小皿等が出土しており、柱穴の検出状況を勘案しても、14世紀に後出するものであると考



えられる。第2面-N<sub>1</sub>地区の調査の中核をなすものである。鎌倉時代の遺構が調査区全域で検出された。遺構は第5層上面より掘り込まれているが、埋土の複雑さから第6層上面において検出・調査をおこなった。

検出・調査された鎌倉時代の遺構は、東西に広がり、次年度にN<sub>2</sub>・N<sub>3</sub>地区の調査を実施した結果、東西に並ぶ2つの屋敷地とそれに付随する施設の一部であることが判明した。これらの屋敷地は溝によって方形に区画されており、N<sub>1</sub>・N<sub>2</sub>・N<sub>3</sub>地区をあわせて、西側の屋敷地の7割前後、東側の屋敷地の2割前後が最終的に調査できたものと考えられる。

本年度は、掘立柱建物跡19棟を含む約360個の柱穴、約40基の土塋、10本の溝検出した。

調査区内の遺構は、建物跡の配置から3つの建物群にわけることができる。また、直角に曲がりを見せる溝（SD3001・SD3044・SD3045・SD3060）はそれら建物群の間に存在し、その配置状況から建物群もしくはその中の幾つかの建物を区画する機能をもっていたものと考えられる。以上の点を勘案し更に調査区北端に存在する土塋群を考慮に入れて以下の4群の遺構群を本年度の調査区内で考えることができる。以下遺構群ごとに概略を述べる。

A群-直角に曲がる2本の溝（SD3044とSD3045）と溝の内側に2棟の建物跡（SB04・SB05）が存在する。SD3044からは土師器皿・土鍋・羽釜・土師器竈片・魚住焼捏鉢・須恵器碗・瓦器碗・灰釉陶器瓶・白磁碗・青白磁皿片等多量の遺物が出土している。SD3045からは土師器皿・土鍋・魚住焼捏鉢・同甕・備前焼甕片等の遺物が出土している。建物と溝の方位、2本の溝の切り合いと出土遺物からみて、SD3044は軸の方位をN8°EにとりSB04に伴い、13世紀～14世紀前半、SD3045はSB05に伴い、14世紀～15世紀初頭にあたるものと考えられる。

B群-直角に曲がるSD3060の内側に建物跡14棟（SB06～SD19）・約40個の柱穴・土塋3基・溝5条が検出されている。SD3060は掘り替えが見受けられる溝である。N<sub>2</sub>地区へと続き、南北方向へ走行をもつSD01に繋がり、方形に巡る可能性が高い。溝内からは土師器皿・羽釜・魚住焼捏鉢・同甕・備前焼拵鉢・白磁碗等の遺物が出土している。

建物跡14棟は軸方位・出土遺物からみて、①群-方位をN6°E～N8°Eにとる建物跡（SB06・SB07・SB09・SB11・SB13・SB14・SB15・SB16・SB17）・②群-方位をN3°E～N4°Eにとる建物跡（SB08・SB10）・③群-方位をN10°E～N12°Eにとる建物跡（SB12・SB18・SB19）に大別される。①群は溝内の全域で建物が存在し、棟数も多く・個々の規模も大きい。方位と切り合いから更に3群に細別される可能性があるが方位の変化は1度前後であり、建物自身が伴う歪み・ひずみを考慮すれば明確に時期差ととらえるべきものではない。SD3060はその方位を①群建物とほぼ同一にとっており、①群の建物に伴う溝であろう。掘り替えによる方位の変化は建物跡の建替えによる方位の変化と同程度である。①群はA群のSB04・SD3044と同方位をとっており、並行する溝の位置関係からみても同時期に存在した可能性が高い。また、柵SA01はその方位からみて①群に属すると考えられる。

②群は溝内の西端中央で2棟検出されている。次年度調査のN<sub>2</sub>地区では②群と同方位をもつ建物が6棟検出・復原されており、②群の建物の中心は西側に偏っているものと考えられる。

③群は溝内の南半で3棟検出されている。SB18・SB19の柱穴の一部は第1面検出時に姿を表しており、①・②群に層的に後出する可能性が高い。SD3061はSD3060と切り合い新しく、その方位を③群の建物と同じくする。③群の建物に伴う溝であろう。SD3061及び③群の建物はA群のSB05・SD3045と同方位をとっており、並行する溝の位置関係からみても同時期に存在した可能性が高いものである。

土壌は4種の土壌が存在する。①-土壌墓と考えられるものである。土壌SK2338がそれにあたる。11世紀後半と考えられる須恵器碗を伴い、第2面の中世遺構の中で最古のものである。②-廃棄土壌、もしくは性格は不明であるが、土器を投入する土壌である。SK3064・SK3065・SK3066がそれにあたる。SK3065・SK3066はSD3060に沿って平行に位置しており、似通った形状をもつ。SK3065には瀬戸産のおろし皿・備前焼Ⅱ期の甕・魚住焼甕を多量に投棄しており、土壌3066には土師器皿のみを投入している。③-径1m前後の規模の土師器土壌が複数かたまり、土壌群を形成する。土壌内には多量の土師器皿を埋納する。SK2221～SK2224とSK2215～SK2219の2ヵ所に顕著に存在する。この内SK2215～SK2219は建物跡SB16の棟行き・梁行き内側に沿って並んでおり、建物跡16に伴う土壌と考えられる。④-大土壌。径もしくは1辺が2m越える規模の土壌。隅丸方形もしくは不整形楕円、浅い皿状を呈するもの。調査区東南端のSK3065・SK3066、調査区北端のSK3192がこれにあたる。大土壌は次年度のN<sub>3</sub>区の調査でも多数検出されており、屋敷地の南東部分に集中して存在している。

B群に伴う溝の内、大きな区画に伴う溝以外にはSD2001が存在する。建物跡SB11の梁行きに接しており、雨落ち溝の可能性はある。

C群-直角に曲がるSD3001と溝の内側に3棟の建物跡(SB01・02・03)が存在する。

建物跡SB01はB群の建物①群とその方位を同じくし、建物跡02・03はB群の建物③群とその方位を同じくしている。SD3001はSD3060と走行を同じくし、SD3001の南北の延長はSD3060の南北の延長と同一線上にのっている。B群・C群の区画は企画性をもったものと考えられる。

D群-C群と重複し、調査区北端に存在する土壌群である。西寄りに存在するSK3192・SK3078A・SK3078Bは集石土壌である。SK3192からは同安窯製青磁小皿・無文青磁碗片が魚住焼捏ね鉢・土師器羽釜・土鍋とともに出土している。SK3078AはSD3001によって切られている。土壌内からは劃花文青磁碗片が出土している。中央部に存在するSK3072には土壌内に羽釜が埋置されており、羽釜内に土師器小皿2枚が埋納されていた。火葬墓等の可能性がある。SK3072に近接する土壌の内、SK3076からは羽釜片が出土している。また、東寄りに存在するSK3068からは土師器碗・皿、劃花文青磁碗片が出土しているが、ここにあげた以外の土壌か

らの出土遺物は少なく、全体として土壙群の性格・土壙群内の時期差を確定することは難しい。

SD3002・SD3042はその性格は明確ではないが、建物の柱穴の残り具合からみて、SD3002はSB03より新しく、SD3042はSB02より新しい溝と考えられる。

その他の遺構として柵SA01がある。調査区北東端にあり、これまでに述べた建物・溝に直接伴う位置にはない。方位N 9° Eにとる。

第3面-弥生時代中期の遺構面は第Ⅷ層暗褐色土の上面より掘りこまれている。第Ⅷ層暗褐色土は第Ⅸ層礫層を覆う層で、礫層の上面レベルが高い微高地部にあたるNiB区北半では薄く、谷部にあたるNiA区を中心とした部分では厚く堆積している。

遺構は昭和57年度の調査では礫層の出現レベルが高く安定した微高地部にあたるNiB区北半において土壙1基が検出されている。このため、次年度、NiB区北半を中心にトレンチ調査を実施し、更に住居跡2棟・土壙4基を検出した。

### 3. 昭和58年度調査（第4次調査）

#### (1) 調査の方法と調査地区

C地区では、昭和56・57年度調査区をC<sub>1</sub>区とし、調査した井戸の断ち割りとは下層トレンチでの調査を中心に行い、C<sub>1</sub>区の以北をC<sub>2</sub>区とし、東側道部をC<sub>3</sub>区とし、それぞれ調査を行った。

N地区では、昭和57年度調査地区をN<sub>1</sub>区とし、下層の遺構面を調査し、N<sub>1</sub>区の西側片岡溝以西をN<sub>2</sub>区とし、市道福田永久橋線と皮革工場前の地区を除いて、調査を行い、また、東側道部をN<sub>3</sub>区として、調査を実施した。

S区は、市道太子町永久橋線下の「絵図」にみる「筑紫大道」推定区の調査と、市道付け替え道までの地区をS<sub>1</sub>区とした。S区の西側道部については、調査が急がれたので、トレンチによる調査とした。第1トレンチから第3トレンチを、側道部に設定し、調査を行い、更に南へ続く対象外の地区についても、ユンボ掘削時に立会いを行い、補足の調査を行った。また、来年度のS区の調査方法を検討する資料を得るために、付け替え道より南の本線部分にユンボを使用して、2本のトレンチを設け、それぞれ長さ65m（南第4トレンチ）、50m（南第5トレンチ）の土層観察による調査を主として行い、南第4トレンチで井戸2基（SE14・SE15）の調査も実施した。

ところで、実際の調査にあたっては地元の事情や工事の進行、付け替え道敷設などの条件整備で調査区を移したりしたので、まとまりのある調査が出来ず、困難をきたした。

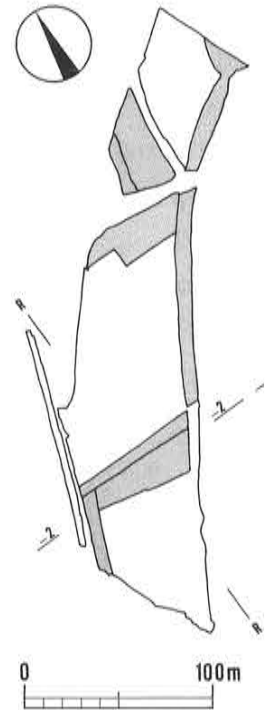
調査は、①N<sub>1</sub>区下層→②S<sub>1</sub>区（筑紫大道区）・C<sub>1</sub>区井戸断ち割り・下層トレンチ→③N<sub>2</sub>A区→④C<sub>2</sub>区→⑤S<sub>2</sub>区（第1～3トレンチ）→⑥N<sub>2</sub>B区→⑦S<sub>1</sub>区→⑧S<sub>3</sub>区トレンチ→⑨N<sub>3</sub>区→⑩C<sub>3</sub>区の順に変則区的に実施した。

#### (2) N<sub>1</sub>地区下層の調査

昭和57年度調査のN<sub>1</sub>区についてA～Hの8本のトレンチを設け、中世遺構面より下層について調査を行った。遺構を検出した地点、遺物量が多い地点について随時拡張し、調査を拡大した。

トレンチ調査による結果、Aトレンチでは弥生時代中期の土壌を検出。D・Fトレンチでは弥生時代中期の竪穴式住居跡を検出した。Fトレンチでは住居跡の東隣で同時期の多量の土器を伴う3基の土壌を検出した。Hトレンチでは集石土壌1基を検出し、いずれも精査を行った。

住居跡は礫層上面にあり、南北約5m、東西約4mの楕円形を成し、中央に二つの土壌を持つ。遺物は壺・高杯などの土器、剥片石器・磨製石鏃の石器が出土している。



挿図16 昭和58年度調査地区位置図

A・Fトレンチの土壌群は、住居跡を囲むように位置して同時期の遺構である。1基の土壌に10～20個体の土器が検出され、完形に復元されるものが多い。2号土壌からは、約1,000粒の炭化米が出土しており、興味深い。

Hトレンチ集石土壌は、弥生時代中期の谷部に堆積した土を掘り込んで作られ、長径約2m、幅約1m、深さ50cmの舟形土壌で、時期は不明である。Hトレンチの東端で礫層の上に、砂に混じって弥生時代中期の土器が密集して検出されたため、トレンチを拡張して調査をしたが、遺構は無く、北東方向から流れた遺物である。

Bトレンチでは、トレンチ底約1mの深さでも鎌倉時代の中世須恵器碗が出土しており、谷地形にあって流入土による攪乱を受けていた。

Cトレンチでは、中央より南で厚く砂層が堆積しており、トレンチとの交点付近では礫層上面に堆積する砂層中より、多量の弥生時代中期の土器が出土した。Cトレンチ北半では、有機質を含む土層が若干現れており、弥生時代中期の遺構面が東側に広がる可能性があった。

E・Gトレンチでは、遺構は確認されなかった。Eトレンチでは中央より南に向かって、D・Fトレンチで弥生時代中期に相当する面が傾斜を見せており、Eトレンチ以南は氾濫原の堆積とマンガンの集積が著しく、低湿地状態をなす。

### (3) S<sub>1</sub>地区〔筑紫大道〕の調査

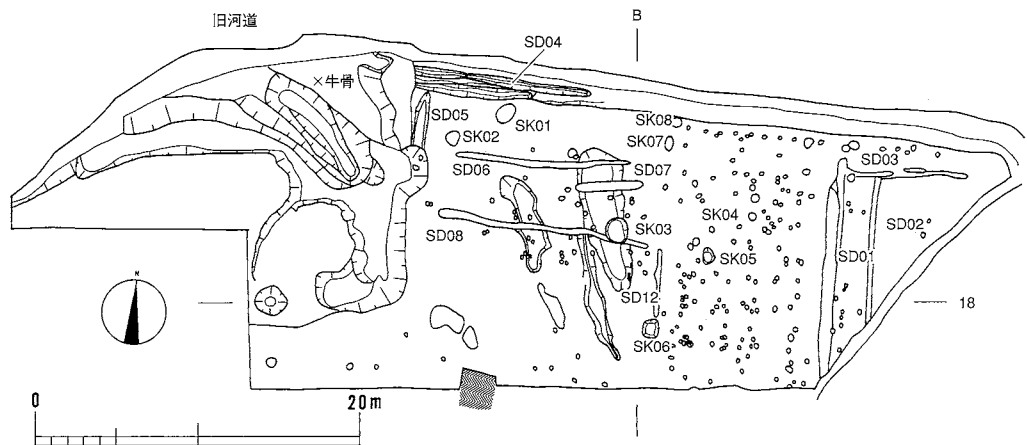
「鶴荘絵図」の復元を行い、嘉暦4年(1329)・至徳3年(1368)の絵図の対比で朱線の加えられた筑紫大道が、西方では十条と十一条の条間を走る。調査区の市道太子町永久橋線が大道と重なるものと考え、市道を付け替え、機械にて上土を除去し調査を開始する。

遺構面は、市道路肩のコンクリート基礎で一部破壊されていたが、井戸2基(SE08・09)、溝6本、土壌1基と堀が調査できた。

「嘉暦4年(1329)の絵図」に対比できるものは、14世紀の遺物が埋められている溝があり、溝を南限とし、北はC<sub>1</sub>区の15～16世紀代の内堀があり、北限は定かでないが、少なくとも幅約6mの東西方向の空白地があり、道状遺構とする。井戸があるが、SE08は底の石組み一段と井筒曲物のみを残して埋め戻されていた。底には12～13世紀代の青磁碗と横櫛を置いており、特に青磁碗については上層の埋め土内で発見された破片と接合する。この井戸を丁寧に埋め戻しており、他の井戸の水神魂鎮めの納め方と異なる。少なくとも「絵図」の時代には井戸は無く、地面に穴はない。SE09は近世の井戸である。

時代が下って15～16世紀になると、C<sub>1</sub>区の内堀を北限とし、南は絵図の「片岡庄」の位置に幅約5mの堀が長さ20mにわたり検出されて、さらに西へは堀に取り付くように幅3mの溝SD01が長さ50m以上直線的に続いており、溝を限りとする幅約11mの東西の空白地を当時の筑紫大道に比する道状遺構と出来る。

「片岡庄」堀内では、備前焼、土師器皿、青磁・青花などとともに漆碗、木札や釘が打たれ



挿図17 C<sub>2</sub>地区遺構全体図

た大型材とアカニシなど巻貝、当時の植生を復元できる木の葉など自然遺物が多く発見された。

#### (4) C<sub>1</sub>地区の調査

昭和57年度調査で7基の井戸を調査しているが、このうちSE01から06までの6基と、昭和58年度に新たに内堀内で発見されたSE10の合計7基の井戸断ち割り調査を行った。

調査の目的は、井戸側の石組の側面写真の撮影、掘り方断面実測と掘り方内の遺物の採取ならびに湧水地点に至るベースの断面観察のためであるが、特に掘り方出土の遺物は井戸の構築時期を示すもので重要な資料となった。ただ、井戸を半截して手掘りで行うには多くの危険が伴うために、調査に際しては発掘調査面積を広げ、土砂の崩壊を極力避ける方法を用いた。

掘り方はSE02・03・04・06では、ほぼ断面がU字形を呈しているが、他のSE01・05・10では中段で径を狭めて2段掘削を採用していることが判る。これは深い井戸を構築するために大きな掘り方を設定し、掘削を行い、湧水点に至る中ほどで石を組むために最小限必要な大きさまで直径を狭め、掘削に費やされる労力の軽減を図っている。また、掘り方から出土した土器の時期は、SE02が14世紀、SE03が14世紀から15世紀、SE04が13世紀、SE05が13世紀末から14世紀初頭、SE06が15世紀、SE10が14世紀、SE01は不明である。

また、SE04の断ち割り作業時に多量の古式土師器が中世遺構面の下から発見されたために、路線の西端部に内堀とSD17の間に幅2m、長さ28m、それに直行する長さ6mのトレンチを3本設けた。その結果、北西から南東に流れる弥生時代の4本の流路と、炭を伴う古墳時代の落ち込みが検出された。出土した遺物は、古墳時代前期の土師器がほとんどであり、前述の自然流路の上面に大量の堆積が認められた。特にSE04周辺に密集しており、本来の該期の遺構は、林田川と路線区との間に形成された自然堤防上に立地しているものである。

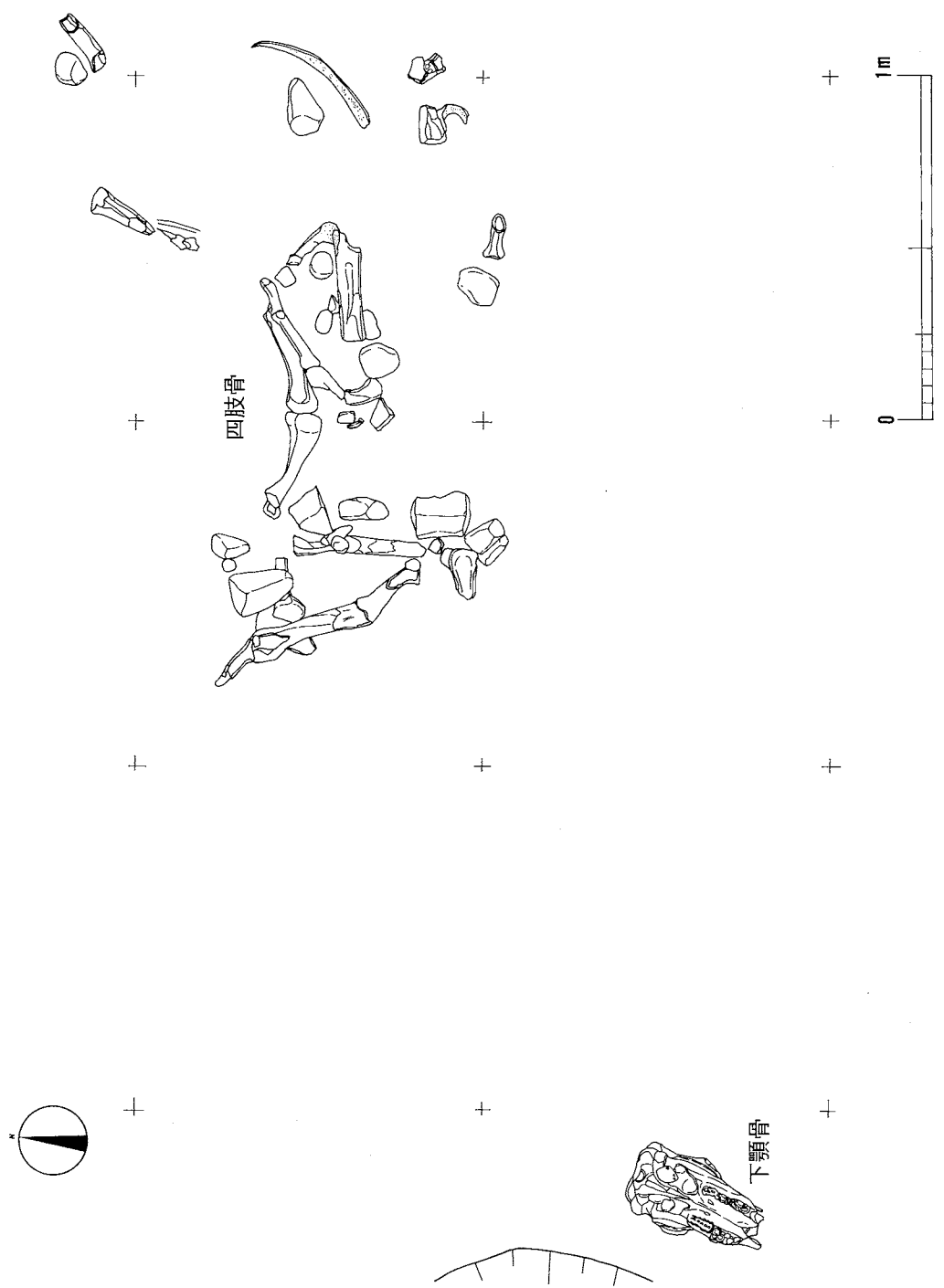


插图18 C<sub>2</sub>地区旧河道牛骨出土状况图



## (5) C<sub>2</sub>地区の調査

C<sub>1</sub>区の北側、市道永久橋福田線以南で側道以西を対象とする。

調査区の東半では溝・掘立柱建物跡、中央では土壙、西半では人為的な改変を加えた自然流路が検出された。

調査区の東端では、南北に溝（SE01・02）二本が走っている。調査区の北端で浅い皿状の落ち込みとなって東へ流れ出している。これに切られた状態で根石をもった柱穴が4つあり、東西に走る柵列に取り付く門である。柵列は西側へ、Hcc区中央から南へ直角に曲がる。検出された柱穴もその中に納まる。

調査区の中央では、若干の柱穴と土壙・溝（SD04）が存在する。なかでもSK09は、底に一辺約25cmの磚を数枚敷いており、特異なものである。SD04は調査区の北端を東西に走る溝で、二三度掘り直されている。「莊園絵図」の九・十条の境に平行して流れているが、溝内から多量の鉄滓が出土しており、製鉄に関連する溝の可能性もある。

調査区西半では、東から南へカーブする幅約4m、深さ2mの自然流路が検出されている。この流路は、東西堀・外堀へオーバーフローして流れ込んだ痕跡がみられる。南肩部には犬走り状の段差をもち、人為的な改変が加わっている。流路の底には、牛の骨が発見された。下顎骨1・前足2・後足4で複数の牛を解体し、投げ込んでいる（図版71）。これは雨乞いなどの中世の祭祀・信仰に伴うものであり、貴重な資料である。流路は15～16世紀で、東半の14世紀代の遺構とは異なる。

また、中世面の調査を終えてから、既に前年のサブトレンチにて古墳時代の前期の土器を検出していることから、前年の調査区にもまたがって7本のトレンチを設け、更には調査区東半部については拡張して下層の遺構の調査を行った（挿図26）。

その結果、拡張調査区の南端で土器群および円形の配石遺構を発見した。出土土器は、古墳時代前期のもので、拡張区中央部を北から南へ点々と検出された。これは土器が微地形の谷部に流入し堆積したもので、N<sub>2</sub>区でも同様に土器が出土している。谷地形の南端では、多量の土器が出土しており、土器は20固体前後あり、甕・壺・高杯・器台と各種出土している。

配石遺構は河原石を円形に廻らせており、径1m程を測る。祭祀的な遺構である。

### (6) N<sub>2</sub>A地区の調査

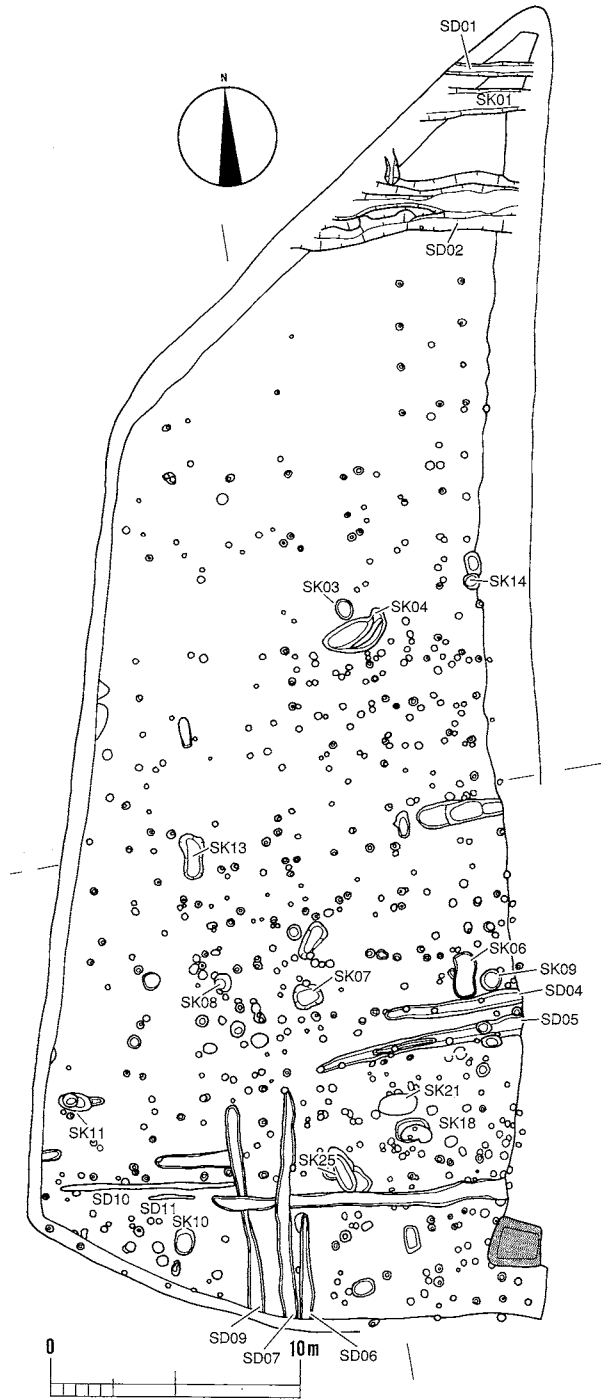
N<sub>2</sub>地区は昭和57年度に調査を行ったN<sub>1</sub>地区の西側、片岡溝を挟んで位置する調査区である。この内、N<sub>2</sub>地区東半部分-約770㎡の調査区をN<sub>2</sub>A地区と呼称する。

調査の結果、中世の遺構面を検出し、更に下層へのトレンチによる断ち割りによって古墳時代前期の遺物を含む砂層、弥生時代中期の自然流路を検出した。

中世の遺構面では、約260個の柱穴・13条の溝・30基の土壌を検出し、12棟と掘立柱建物を復元することができた。中世の遺構面は調査区中央から北半では1面であるが、南半では2面として認識することができた。これは、旧地形が南に向かって若干傾斜しているためでN<sub>1</sub>地区と同様である。

南半でのみ検出した第1面では、約20個の柱穴の他、羽釜を埋納する土壌のほか、東西方向・南北方向に走行をもつ小規模な溝4条を検出している。柱穴は調査区の南東半に多く検出されたが、小規模のものが多く、建物として復元できるものはなかった。以下、南半の第1面で検出された遺構を考慮しつつ第2面での遺構の状況について概略を述べる。

調査区の北端には2本の溝が検出されている。SD01はN<sub>1</sub>地区の



挿図19 N<sub>2</sub>A地区遺構全体図

SD3060に続くものである。N<sub>1</sub>地区では重複し、掘り替えとして認識されたSD3060はN<sub>2</sub>地区では1本の溝として検出された。他の1本のSD02はN<sub>1</sub>地区には続かず、N<sub>1</sub>・2地区間で収束するか、或いは片岡溝に沿って直角に曲がり南北どちらかへと延びる。

12棟の掘立柱建物跡はいずれも3本の溝の南側に存在しており、N<sub>1</sub>地区でB群とした建物址群に含まれるものである。12棟の建物址は軸方位・出土遺物からみて3群に大別できる。以下、N<sub>1</sub>地区のB群建物の大別によって分ける。

①群－方位をN 9° E～N 8° Eにとる建物跡 (SB20・SB21・SB22・SB31)・②群－方位をN 3° E～N 4° Eにとる建物跡 (SB23・24・25・28・29・30) である。①群の建物の内、建物跡SB31の柱穴には和泉型瓦器椀が柱根抜き取り時に埋納されている。13世紀前半代と考えられる。また、SA03・04は軸方位からみて②群に伴うものと考えられる。共に建物址の可能性も残る。

N<sub>1</sub>地区で③群と認識した方位をN 0° E～N 2° Eにとる建物はN<sub>2</sub>A地区では存在しない。④群－方位をN 0° E～N 2° Eにとる建物跡 (SB26・27) である。④群の建物はN<sub>1</sub>地区では存在しない。C地区・S地区において同様の方位をもつ建物をみることができる。

土壌は26基検出されている。調査区の南半に多く見られるが、規則性は見受けられない。SK03からは丹波焼壺、SK10からは魚住焼甕と土師質羽釜、SK11からは白磁小皿が出土している。SK07・08からは「元豊通寶」が出土しており、SK08からは輸入磁器と考えられる褐釉陶器が伴って出土している。また、SK18・21には密な集石がみられた。

溝は先に述べたSD01・SD02以外には調査区の南半で9本検出されている。SD04・SD05は溝内に柱穴が幾つか検出されており、板塀もしくは柵となる可能性がある。また、SD10・SD11は建物跡SB31と並行しており、雨落ち溝として伴う可能性がある。その他の溝は何れも第1面において検出されたもので、浅く、鋤跡である可能性が高いものである。

中世面調査後、調査区の基準線にそって南北方向に全長38m・幅2mのトレンチを1本、東西方向に全長8m・幅2mのトレンチを4本設定し、下層の確認を実施した。中世面下約0.2～0.6mに礫層の起伏があり、北西から南東方向へ流れる複数の自然流路となっている。自然流路からは弥生時代中期の土器が出土している。また、礫層の上面に堆積する砂層からは古墳時代前期の土師器壺・小型器台が出土している。

弥生時代中期・古墳時代前期ともに遺構と認識できるものは確認されなかった。

(7) S<sub>2</sub>地区の調査

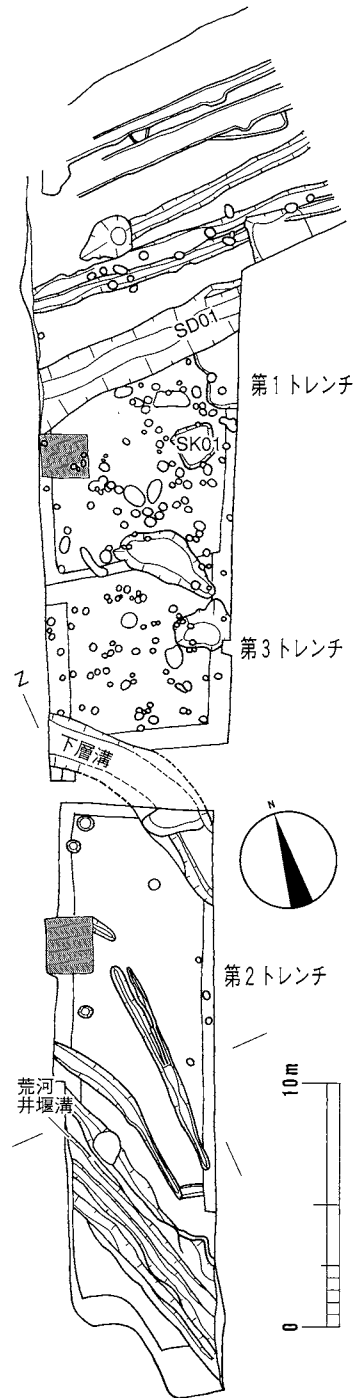
S区の西側道部について、付け替え道の工事などのため、3つのトレンチに分けて調査を行い、図面上で遺構復元をする地区となった。調査の順に南第1(北)・2(南)・3(中央)トレンチと呼称した。

遺構面は、近・現代まで使用された石組の溝を南限とし、16世紀代の「大道」南側溝とバラスを埋土としたピット、14世紀代は土壙とピット、12・13世紀代は溝とピットおよびサブトレンチでは下層溝と水田畦畔の4枚が確認された。

14世紀代の土壙には、土師器器皿を伴う楕円形土壙と土師器鍋・魚住産の捏ね鉢・白磁の口禿げ皿などの土器と馬歯が共伴する方形・不定形の土壙がある。

他に各時期のピット・溝が多く検出しており、建物跡・柵の復元が難しい。

溝と水田畦畔遺構については、調査が細切れのトレンチ調査となり、S<sub>1</sub>地区の下層、S<sub>3</sub>地区の水田遺構と併せて検討復元できる。



挿図20 S<sub>2</sub>地区遺構全体図

(8) N<sub>2</sub>B地区の調査

N<sub>2</sub>B地区はN<sub>2</sub>地区西半部分、面積約90m<sup>2</sup>の調査区である。S<sub>2</sub>地区のトレンチ調査に続き、調査を実施した。

調査の結果はN<sub>2</sub>A地区と同じく、中世の遺構面を検出し、更に下層へのトレンチによる断ち割りによって古墳時代前期の遺物を含む砂層、弥生時代中期の自然流路を検出した。

中世の遺構面は2枚検出、調査を実施した。

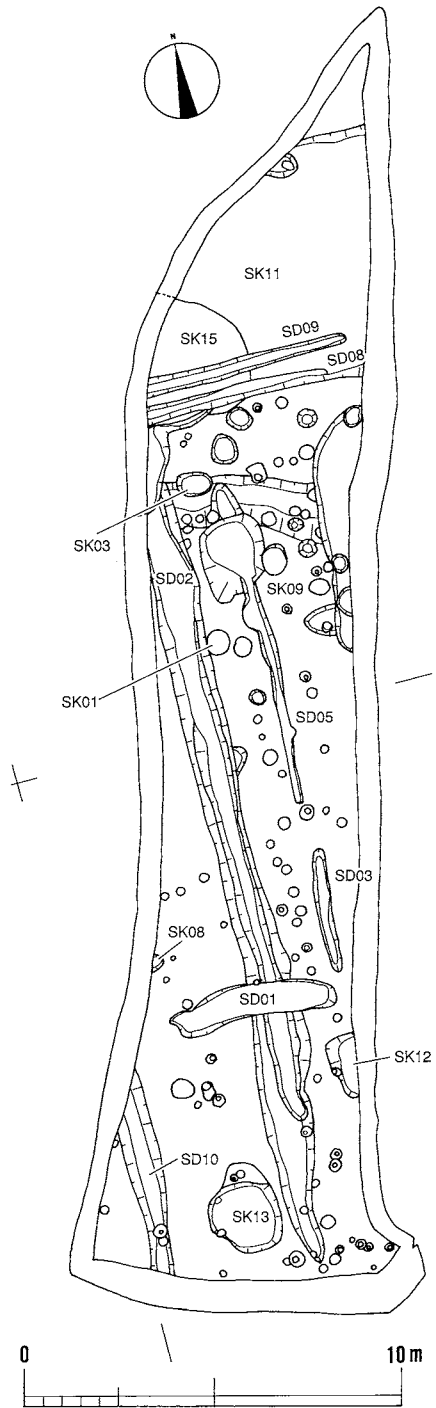
第1面では、約80個の柱穴・土塋3基・溝5条を検出した。

柱穴はSD02の東側、SD08・09の南側の溝で囲まれた内側に集中しており、他の場所には殆ど検出されていない。この内、建物として復元出来たものは少なく、N<sub>2</sub>A地区から延びる建物址SB27にともなうもののみである。

土塋は調査区の北半に集中しており、中央部以南には乏しい。SK01・02・10・11からは土師器小皿・皿が出土している。時期は14世紀代と考えられるものである。

SK11は調査区の北端を占める遺構である。幅約6m・深さ約0.3cmを測る。落ち込みの南辺・北辺はともに直線的な形状をしており、東辺がN<sub>2</sub>A地区において検出されないことからみて長方形の落ち込みであった可能性が高い。土塋内より土師器皿とともに備前焼甕（Ⅲ期）が出土している。溝の内、SD01は東西方向に走るが、浅く、N<sub>2</sub>A地区第1面において検出したSD06・SD07と同様に鋤跡である可能性が高いものである。

調査区中央のSD02は調査区南半で終息し、溢れた流れの痕跡が調査区南端に到っている。走行はN2°E前後にとり、建物跡SB27の軸方位に近い。溝内からは、溝を埋める際に故意に投棄したと考え



挿図21 N<sub>2</sub>B地区遺構全体図

られる多量の河原石と共に土師器皿、備前焼播鉢・甕、魚住焼捏鉢、青白磁梅瓶片等14世紀代と考えられる遺物が出土している。

SD02の東側を走るSD03・04・05は切々に検出される溝であるが、走行を同じくし、1本の溝と考えることができる。建物跡SB27と近接・並行しており、溝の北端は土壙（SK10）に取りついた状態で検出されている。

SD08・09は調査区北端において東西方向に走る溝である。SD02と直交するが先後関係は不明である。土壙（SK11）とは切り合い古い。

第1面の遺構の時期は上記の遺構から出土した遺物から14世紀～15世紀を中心とした時期が考えられる。

第2面では、数個の柱穴・土壙2基・溝1条を検出した。

柱穴は検出された数も乏しく、建物として復元出来たものはない。柱穴の幾つかからは土師器皿等が出土している。

調査区北端のSK11は検出された規模は6m×6m、深さ0.3mを測るが、土壙の大半が調査区外にある不整形な土壙である。検出された部分からは土鍋・備前焼播甕、魚住焼捏ね鉢とともにコンテナにて20箱近い多量の土師器皿が出土している。また、SD02に切られるSK20からは土師器皿が出土している。SK15はSK11及びSD02・08・09と切り合い古いと考えられる。

溝（SD11）は調査区の西端を南北に走る溝である。検出範囲が狭く、正確な走行は明確ではない。溝内からの出土遺物は乏しく、性格・時期を決定することは難しいが、層位的にはSD02に先行する溝である。

第2面の遺構の時期は上記の遺構から出土した遺物から13世紀～14世紀を中心とした時期が考えられる。

中世面調査後、N<sub>2</sub>A地区と同様に調査区の基準線にそって南北方向に全長20m・幅2mのトレンチを1本、東西方向に全長6m・幅2mのトレンチを3本設定し、下層の確認を実施した。中世面下約0.6～1.0mに礫層の起伏があり、北西から南東方向へ流れる複数の自然流路となっている。自然流路からは弥生時代中期の土器が出土している。また、礫層の上面に堆積する砂層からは古墳時代前期の土器が出土しており、N<sub>2</sub>A地区と同様の状況である。

弥生時代中期・古墳時代前期ともに遺構と認識できるものは確認されなかった。

(9) N<sub>3</sub>地区の調査

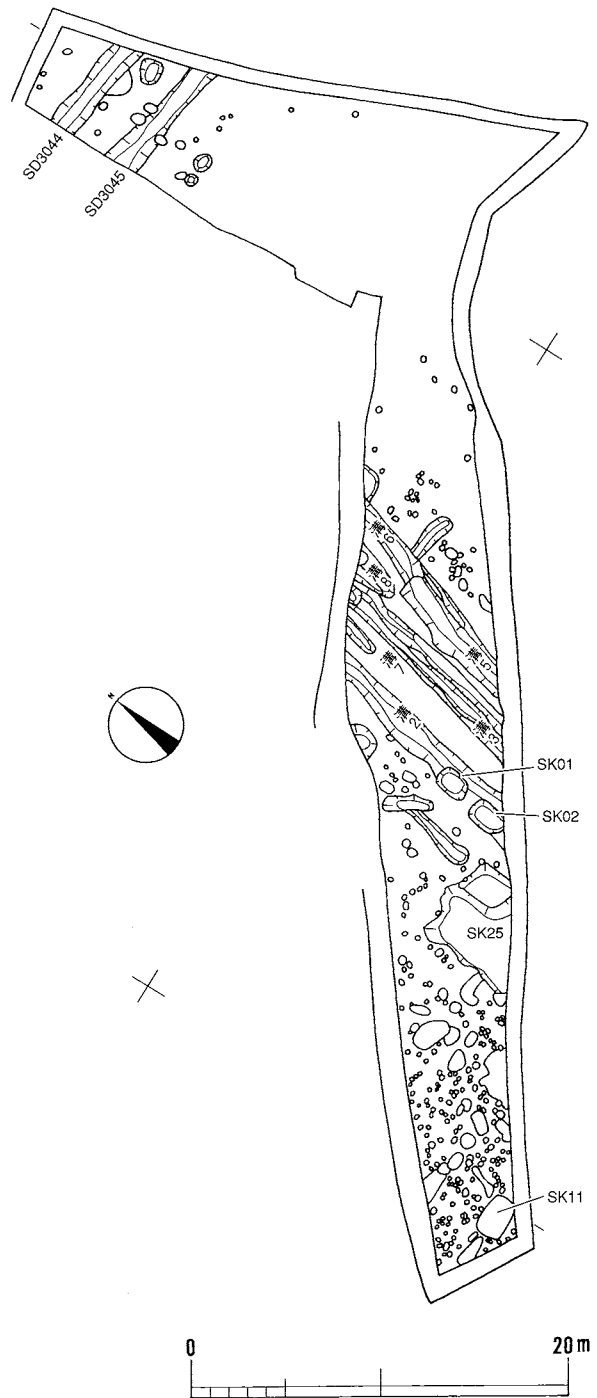
N<sub>3</sub>地区はN<sub>1</sub>地区の東側・南側部分、面積約390m<sup>2</sup>の調査区である。S<sub>3</sub>地区第2次確認トレンチ調査に続き調査を実施した。N<sub>1</sub>地区・N<sub>1</sub>地区と一連の遺構群である。

調査の結果はN<sub>1</sub>地区と同じく、中世の遺構面を検出した。更に下層において次年度、弥生時代中期の住居跡（住居跡2）を検出している。中世の遺構は、約140個の柱穴・土壇約20基・溝10条を検出した。

中世の遺構面の調査はN<sub>1</sub>地区の調査結果を受けて、西半部については2面の調査を実施したが、第1面についてはN<sub>1</sub>地区と同様に、建物を復元することは出来なかった。以下、第2面の成果を主として概要を述べることとする。

溝は、調査区の北端に2条と中央に8条存在する。北端の2条はN<sub>1</sub>地区で検出したSD3044・3045の延長である。中央の8条のうち溝1・5・6はN<sub>1</sub>地区で検出したSD3044・3045・3060の延長である。また、溝2はSD3061の延長の可能性が高い。それ以外の溝についてはN<sub>1</sub>地区では確認出来なかった。溝1・5・6の掘り替えによる溝と考えられる。出土遺物からみて12世紀から14世紀にかけて掘り替えられたものと考えられる。

約140個の柱穴は主に3箇所に固



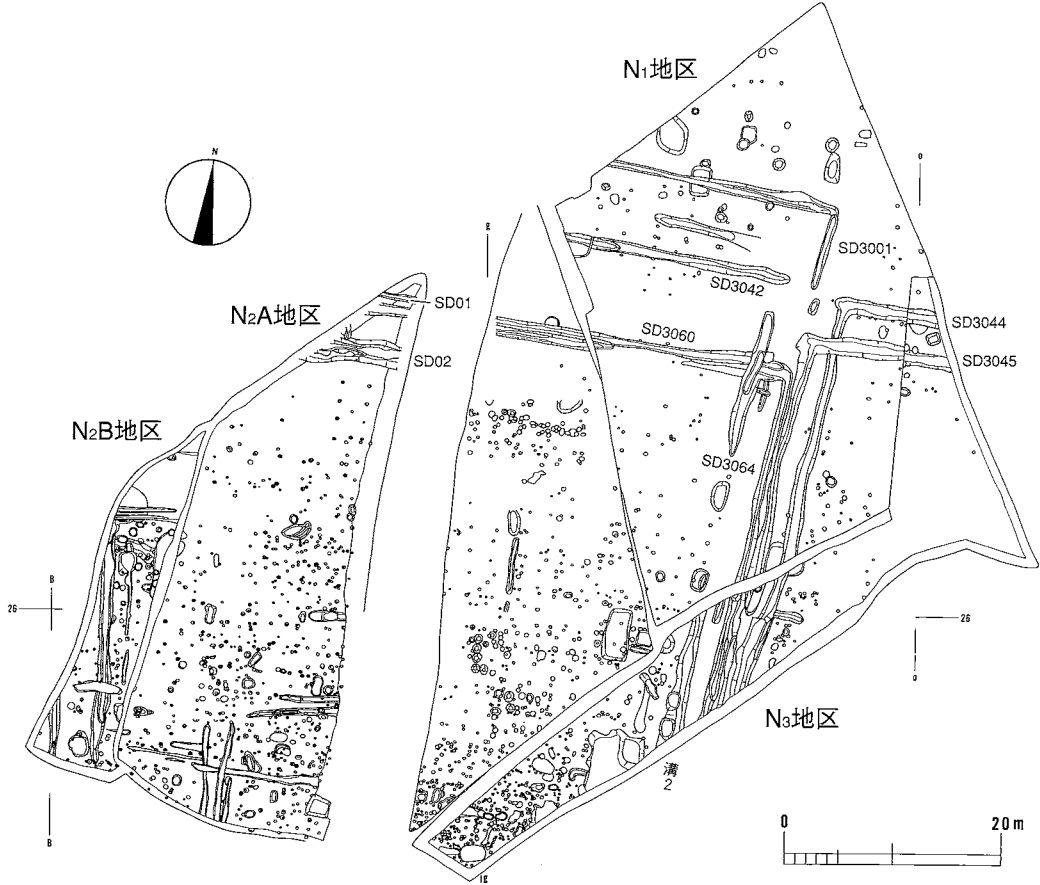
挿図22 N<sub>3</sub>地区遺構全体図



まって分布している。1箇所は、北端の2条の溝の南側、1箇所は中央の8条の溝の東側、今一つは中央の8条の溝の西側、特に土壌群を挟んだ調査区の西端である。

中央の8条の溝の東側にある2箇所の柱穴群はN<sub>1</sub>地区でA群とした建物跡群に含まれるものである。何れも柱穴の数が乏しく、建物址として復元できるものはなかった中央の8条の溝の西側にある柱穴群は、N<sub>1</sub>地区でB群とした建物跡群に含まれるものである。この内、建物として復元出来たものは少なく、N<sub>1</sub>地区から延びる建物跡SB12・16にともなうもののみである。

土壌は全てこのB群とした建物跡群とともにあり、N<sub>1</sub>地区の土壌とあわせ、溝で囲まれた屋敷地の南東隅に集中する傾向が身受けられる。このうち、SK01・SK02・SK25といった、比較的規模の大きな土壌は柱穴が疎らな東寄りに位置しており、径1m前後の比較的小規模な土壌は主に調査区西端部の柱穴群中に存在している。



挿図23 N地区遺構全体図(合成)

SK01・SK02はN<sub>1</sub>地区のSK3065・3066と直列する位置関係にあり、ほぼ同じ規模と時期を示す集石土壙である。

SK25は、東西5m・南北6m以上の規模をもつ大形の方形土壙である。土壙内には河原石が多量に入っており、常滑焼・備前焼甕、魚住焼捏ね鉢、土師器皿等の土器とともに鉄釘が出土している。土壙の形状・土壙の底部のレベル・河原石の集積状況からみて、もともとは一辺3m前後の方形土壙が数基集まって出来た土壙と考えられ、河原石の分布、遺物の出土状況からみて火葬墓址群の可能性もある。また、SK25の南西隣にあるSK20も土壙底に石が散乱しており、同様の性格を持つものと考えられる。

調査区西南端に位置するSK11は、2.2m×1.5mの方形プランの土壙内に河原石を水平に敷き詰め、側縁に石を巡らせ石室様の構造をもつものである。他遺跡の例から見て墓跡と考えられる。石組内からは刀子と考えられる鉄器が出土している。

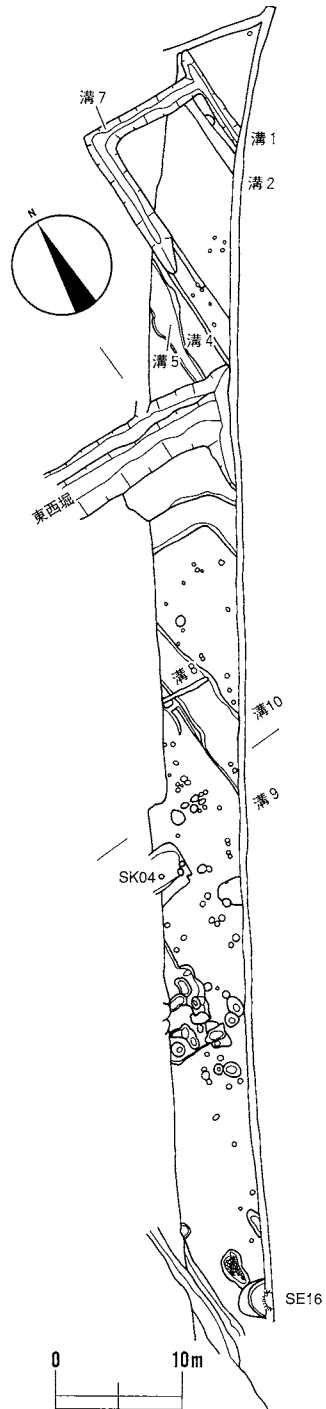
(10) C<sub>3</sub>地区の調査

C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>地区の東隣接の側道部分の工事用道路として埋められていた地区である。C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>地区で発見された遺構が続いて検出された。昭和55年度に龍野市教育委員会が調査した坪（グリッド）〔O-30・O-38・O-42〕にて遺構を確認した地区である。

遺構の主なものは、15・16世紀代の外堀と東西堀と井戸1基（SE16）、12・13世紀-14世紀の溝が北部に5本検出されている。東西堀以南には浅い溝と根石を持つ柱穴と土取りの土壙が発見されている。

外堀は上幅約10mを計るもので、調査区の東で南へ曲折しており、現在の水田形状と同じ方向を示し、「筑紫大道」へと向かっている。大道北で外堀と繋がると想定され、規模は南北約60m、東西約35mとなり、一つの郭を形成する。

また、溝1・2は14世紀の土師器皿と備前焼壺が伴い、溝5は12・13世紀代の石鍋と備前焼の甕を伴う土壙を壊している。



挿図24 C<sub>3</sub>地区遺構全体図（合成）

### (11) S<sub>1</sub>地区の調査

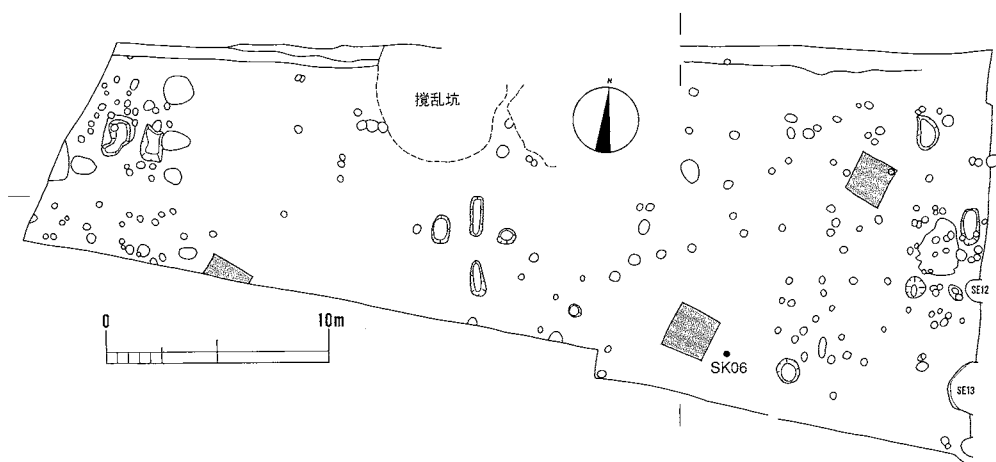
S<sub>1</sub>地区においては、16世紀・14世紀・12世紀の3枚の中世の遺構面、水田跡（古墳時代後期から12世紀）や古墳時代前期の土器が確認されている。

中世の遺構は、調査区の西半部では南第1トレンチに続くピット・土壙群とともに埋甕1基、井戸2基（SE12・13）、溝が検出されている。調査区の中央部では2つの現代の大きな攪乱土坑（ゴミ穴）があいており、概して、ピット等の遺構も少ない。

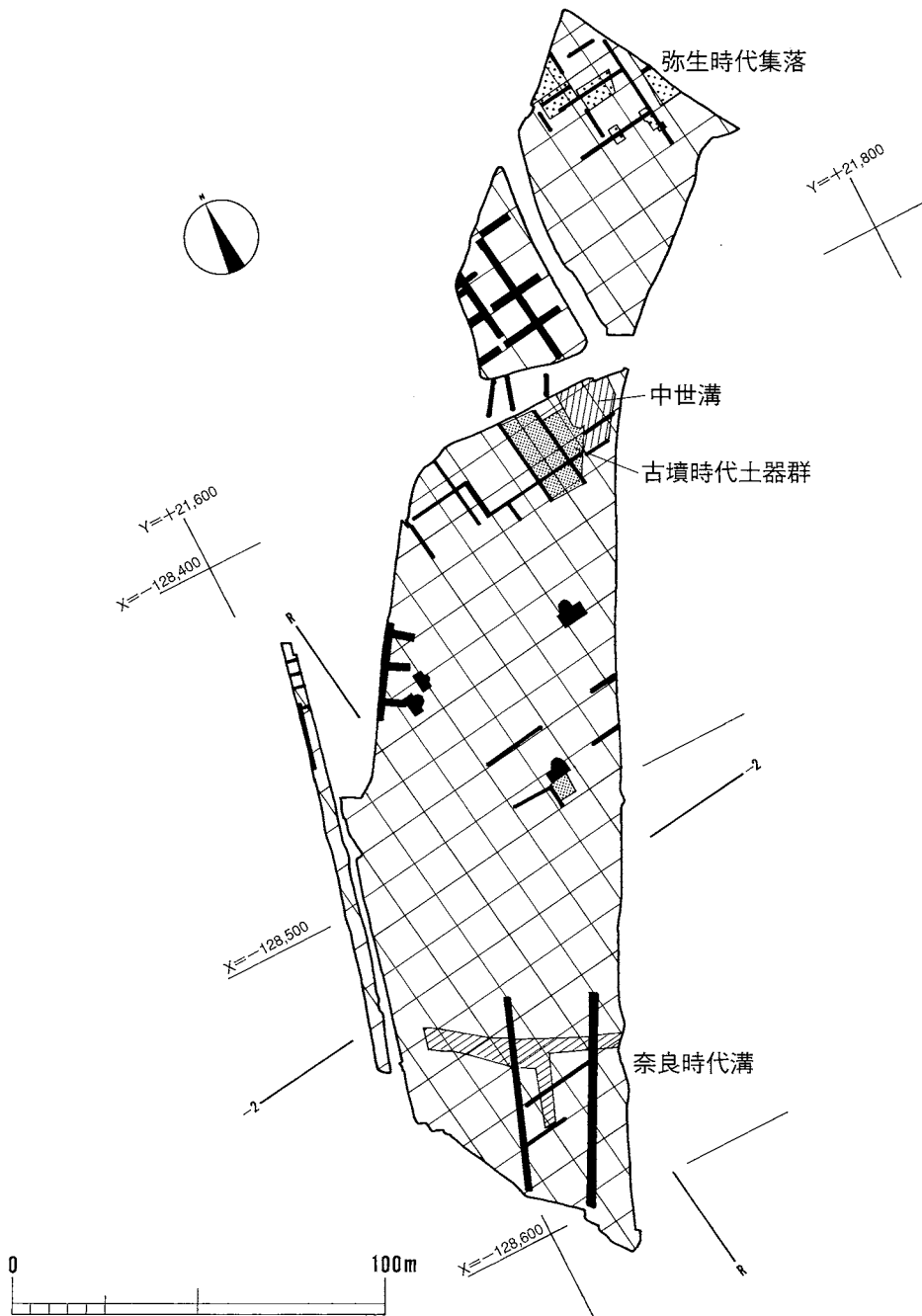
16世紀代の遺構は、調査区西半部でピット・土壙群が東半部では埋甕（備前焼甕）、井戸（SE12）が検出されている。調査区東半部については水田面の段差があり、低くなっており、遺構面が削平受けているため埋甕・井戸以外の遺構は検出されていない。14世紀・12世紀の遺構は、主として調査区東半部と西半部にピット・土壙群が検出されている。水田段差より東側については、14・12世紀両時期の溝が検出されている。この14世紀代の溝は、南北方向に走り、「片岡庄」堀に流れ込んでいる。12世紀代の溝は、14世紀代の溝と同じ方向に向かい、中央部で東側へ直角に曲がっている。館跡に伴う溝である。

水田跡は調査区の東および南側のサブトレンチ断面で畦畔が確認されている。時期は12世紀代の遺構面より下層、古墳時代前期の層よりも上層ということでおさえられ、数枚の水田面が確認できた。

古墳時代前期の遺物については、南側のサブトレンチ底で土器が検出されている。C<sub>2</sub>地区と同様に、谷地形部に流入したものである。



挿図25 S<sub>1</sub>地区 I 面遺構全体図



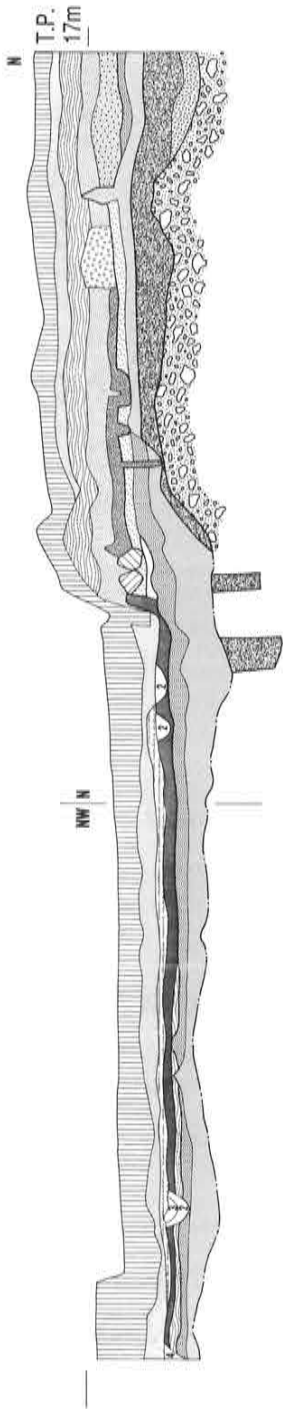
挿図26 下層確認トレンチと下層遺構調査区

## (12) S<sub>3</sub>地区の調査 (1)

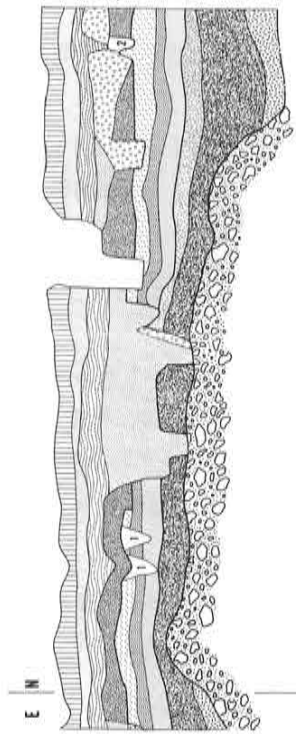
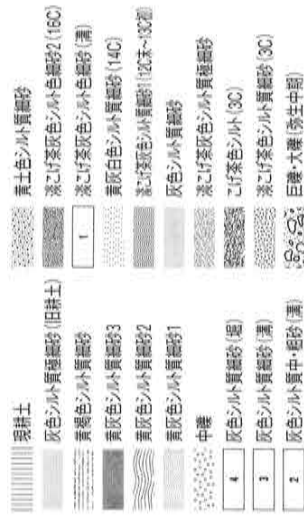
昭和55・56年の南地区確認調査及び本年度のS<sub>1</sub>地区 (1) 市道太子町永久橋線の調査において土層断面観察により、16世紀代後半以降の堆積土が厚く遺跡を覆っているため、発掘調査を実施するに当たって正確な資料が得られないため、改めて機械 (バックホウ) を使ってS<sub>3</sub>地区に南北2本のトレンチを設け確認調査を実施した。道路工事が開始されており、残る調査地区の調査量を掴むことが急務であり、S<sub>1</sub>地区・S<sub>4</sub>地区で発見した水田跡及び下層の遺構の存在の広がりを押さえることを目的とした。

トレンチは幅2m、長さ50mと65mの2本で顕著な遺構としては井戸SE14・SE15を発見した。土層の調査を主体としている。遺跡の最下層を構成するのは1m以上起伏を有する砂礫層であり、その砂礫層は北地区・中央地区南側で特に顕著な微高地をなしており、現耕土直下に認められる。砂礫層の堆積した時期は、砂礫層中に弥生時代中期の土器が含まれており、更に礫層上には弥生時代中期の遺構が存在することから、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡の事例 (5,500年以降3,270年B.P.頃) より新しい。ただ、砂礫層中の遺物は僅かで河道中に堆積した可能性が無いわけではない。砂礫層を覆うのは淡こげ茶色シルト質細砂とこげ茶色シルトから構成されるから構成される後背湿地堆積物である。層中から弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物が比較的保存の良い状態で出土している。南地区ではこの層上面に畦畔状の高まりが認められており、水田として利用された可能性がある。遺物が無く、細片から6世紀代に属するかもしれない。次に北地区・中央地区で顕著な遺構面を構成している淡こげ茶色シルト質細砂1は南地区の西半部において柱穴が検出し、東半部は水田として利用されていた可能性が高い。12世紀末～13世紀初頭には起伏が殆ど消滅して平坦な地形が広がっていた。14世紀の遺構面を構成する黄灰白色シルト質細砂は現地表面の水田を区画する畦畔と同じ位置に畦畔状の高まりがあり、南地区ではこの時期まで現地割りが遡りうる可能性がある。16世紀の遺構面となる淡こげ茶色シルト質細砂2にも現地割りと同じ位置に畦畔が認められる。しかし、西半部では柱穴が多く検出されており水田ではなかった。この時期には、再度起伏が大きくなり出している。次に中礫層・黄灰色シルト質細砂層はかなり人為的に乱されており、一時的な地表面を構成していた。これ以降、急速な自然堤防の形成された。層は厚い所で1.5mに達する。

(「福田片岡遺跡の古地形環境〔概略〕」高橋 学を要約)



凡例



挿図27 S<sub>3</sub>地区下層確認トレンチ土層図



#### 4. 昭和59年度調査（第5次調査）

##### (1) 調査方法と調査地区

昭和56年度から約14,900m<sup>3</sup>の発掘調査を行い、最終年度にあたる昭和59年度は残り約4,450m<sup>3</sup>について発掘調査を実施した。南地区（S）を対象としているが、S<sub>1</sub>地区の筑紫大道部分を除く部分の第II面の調査、およびS<sub>4</sub>地区の調査を行い、昭和58年度の2本のトレンチ調査にて確認されたS<sub>3</sub>地区の全面調査を実施している。

なお、昭和58年度の調査において、未了の下層遺構の調査については、N<sub>3</sub>地区では弥生時代中期の住居跡2の調査、C<sub>3</sub>地区では遺構実測の補足調査と併せて下層遺構確認のための断ち割り調査を実施した。

調査期間 昭和59年4月9日～11月9日

調査体制 社会教育・文化財課長 西沢良之／参事 大西章夫  
／副課長 森崎理一／埋蔵文化財調査係長 櫃本誠一  
／事務担当 大平 茂

調査担当 岡崎正雄・別府洋二・平田弘幸

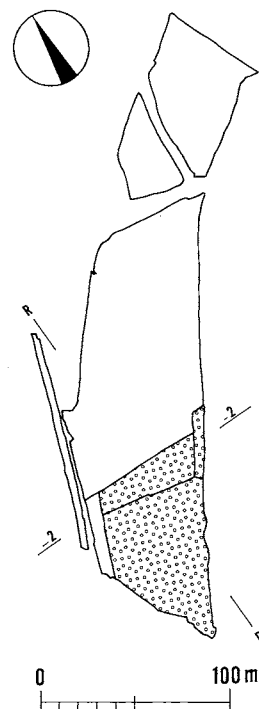
調査補助員 黒田卓也・高橋 学・内田忠賢・

山本慎子・高橋 弘・富士田 剛・花畑英豊

整理作業員 山口みさえ・三木明美・三木満子・長谷川峰子・土井基世・

土井雅世・池田早苗・鈴木小夜子・吉川千晴・齊藤ゆかり

運転員 佐藤登志夫・松原 肇



挿図28 昭和59年度  
調査地区位置図

##### (2) N<sub>3</sub>地区下層遺構の調査

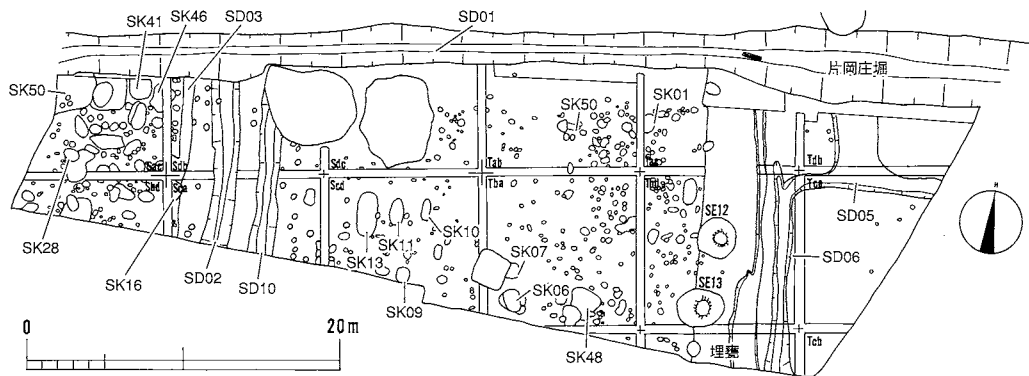
弥生時代中期の住居跡2は竪穴式住居であるが、北・西側は中世遺構調査時の下層遺構確認のために設けられたサブトレンチによって、消失しており、また中央部と南側は東西方向の中世溝（SD3044など）で破壊されていた。住居跡の中央部やや北側と思われる所に大きな土壇があり、完形に近い土器と炭化米が少量発見された。柱穴も明瞭ではないが、住居跡である。

##### (3) C<sub>3</sub>地区の下層遺構調査

弥生時代中期から古墳時代前期の下層遺構を確認するために、設けたトレンチにおいて、上層遺構面で把握できなかった12世紀～13世紀代と14世紀代の遺物を含む溝が数条確認できた。

##### (4) S<sub>1</sub>地区の調査 (3)

前年度までに、筑紫大道部や第I面の調査が行われており、引き続きSE12・SE13の断ち割りおよび完掘、SE08の完掘と片岡庄堀とSD01の連結部やSD01の土橋等を調査した。その結果、SE08では底の部分でもう一つの曲げ物を検出し、古い井戸を切る形で新しく井戸を作っている。

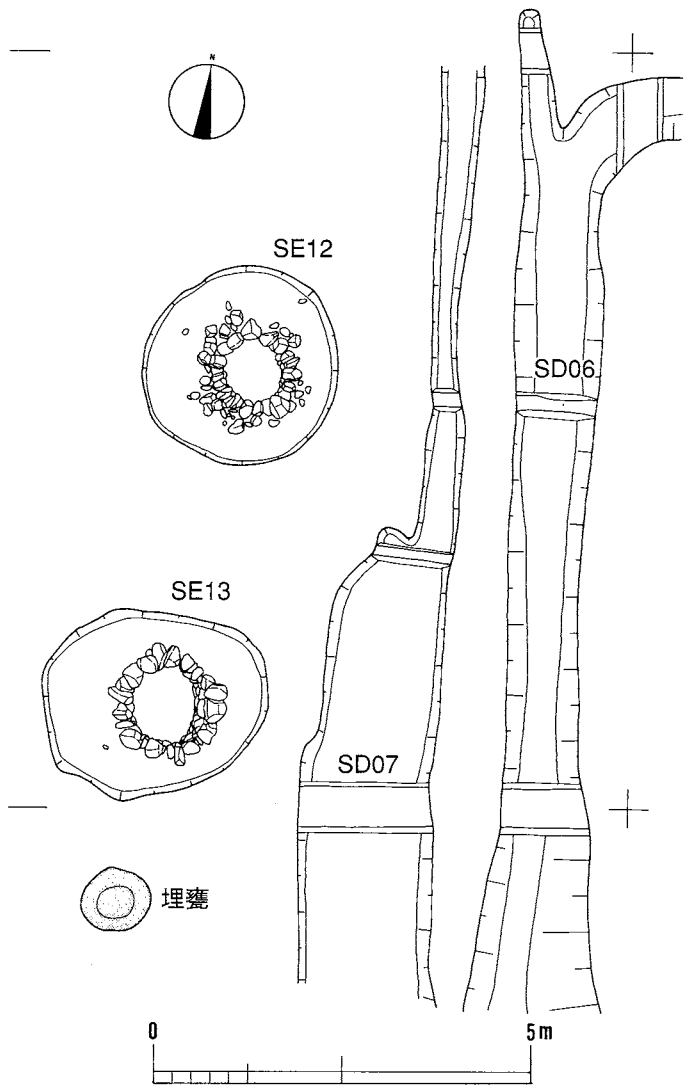


挿図29 Si地区Ⅱ面遺構全体図

たことが判明した。また、片岡庄堀とSD01の連結部から木簡が出土した。

その後、第Ⅱ面の遺構調査を実施し、南北方向に走る溝によって大きく3つの区域に分かれることが判った。東端の区では直角に曲がる溝に沿った形でSB65の一部を検出した以外は目立った遺構はなかったが、更に下層の第Ⅲ面からは牛と思われる足跡や耕作跡などが検出され、犁を使った牛耕と考えられる。中央の区では東半にはSB66やSB68の一部等の柱穴群を検出し、居住区的性格を示しているが、西半では3基並んだSK10・11・12や「コ」字形に石を並べたSK06等はカマド跡と考えられる土壇である。

西端の区では土壇が切り合った状態で密集してされた。これらの中には立石や集石を持つものや釘・銭・骨蔵器と思われる土師器鍋や東播系須恵器鉢が出土しているもの、硯や青磁碗や漆片等が出土した土壇があり、墓跡と考え、その集中した一角と言える。



挿図30 S<sub>1</sub>地区SE12・SE13と埋甕

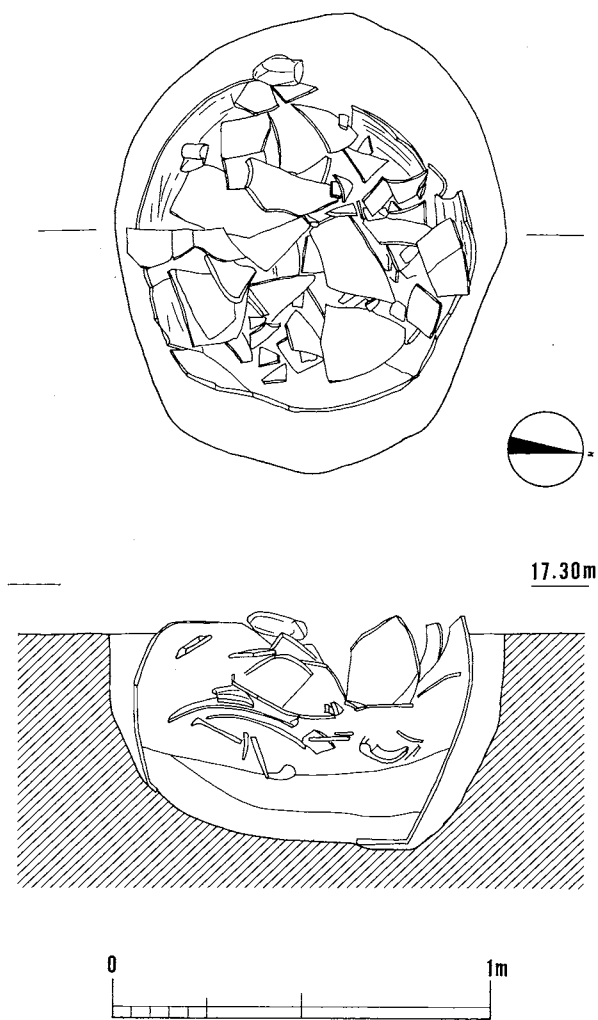


插图31 S<sub>1</sub>地区埋甕

#### (5) S<sub>4</sub>地区の調査

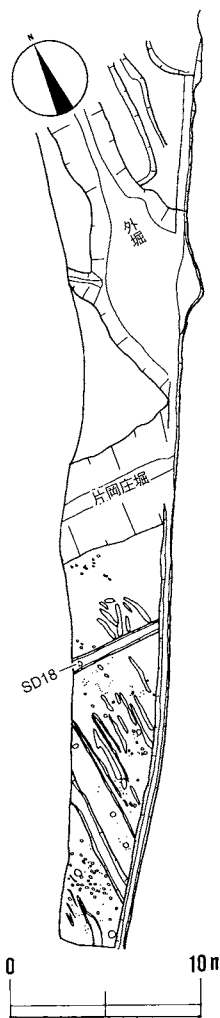
調査区は道路の側道路線内に当たるため、延長は50m弱・幅は6mから3mと細長く、北東から南西の方向に延長を向いている。調査区の中央部には筑紫大道が東西に通り、大道以北には館跡を取り巻く堀等の遺構が、以南には水田関連の遺構が検出された。

筑紫大道は想定どおり南側溝を伴いながら調査区の東壁まで延びていたが、外堀は大道に突き当たった所で東に屈曲せず、そのまま大道を横切って南側溝にまで達するように南下していることが判明した。ただ大道の中軸線部分で幅が現長で4m以上と大きく膨らんでおり、深さも150cmあまりと深くなる。土層の堆積状況などから判断すると、この外堀はそのまま南側溝をも通り超して南に流れるのではなく、幅が大きく膨らんだ箇所ですでにほぼ直角に東に屈曲し、調査区外へと出てしまうものと思われる。この状態では大道はまったく機能していないことになるが、このコーナーと思われる箇所から出土する土器を見ると、15世紀後半から16世紀初頭のものであるため、13世紀末に構築された筑紫大道はこの時期にはすでにその機能を失い、道代のみが残存していたものと思われる。大道の北側溝になる内堀のコーナー部からも外堀と結ぶ、バイパス状の細い溝が設けられており、水の管理等に使用されたものかと思われる。このように考えると大道側溝は、15世紀後半から16世紀初頭には館を囲む堀、もしくは水田用水としての水路の機能が重視されていたものと思われる（挿図32）。

また外堀コーナー部の西面（屈曲部の外側に当たる面）には、人頭大の川原石が貼り付けられている。北から流れ込む用水の勢いのためにコーナーの外面が抉り取られ崩壊し一部は水が、オーバー・フローしたためにそれを防ぐ目的で護岸用として設置されたものと思われる（挿図33の網掛け範囲）

南側溝内および内堀内からは少数の土器も出土しているが、外堀のコーナー部では漆器をはじめとして多数の木器が集中して出土している。堀の深度が他より深く、その下半が粘土質の埋土によって充填されていたため、木器類は比較的良好な状態で出土している。

南側溝より北側の地区は上記したように14世紀前半から16世紀初頭にかけての館関連の遺構であるが、南側は12世紀後半の水田遺構が中心となる。水田面は10cm前後の洪水砂によって覆われており、水田遺構は比較的良好な状態で確認できた。特に南西端部で確認できた畦畔状遺構は両側に側溝を伴っており、その方位も現在の水田と同一方向（ほぼ南北方向）を示してい



挿図32 S<sub>4</sub>地区  
遺構全体図

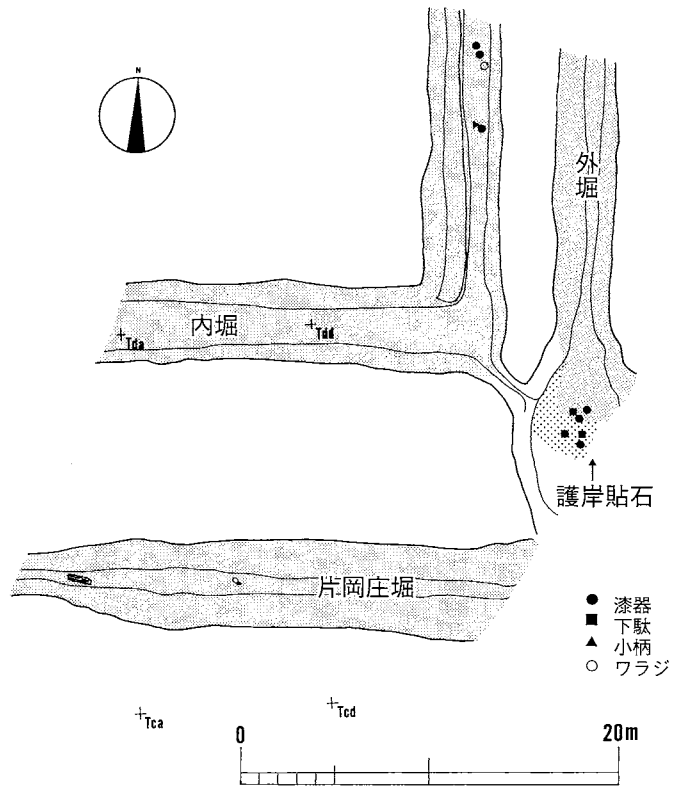
る。

畦畔の東側には犁の痕跡と思われる幅約10cm強、長さ40～50cmの細長い溝状の遺構が多数検出されている。この鋤跡も畦畔と同じ方向を示しているため、鋤は南北に移動しながら水田を耕していたものと思われる。犁の跡と共に牛のものと思われる偶蹄類の足跡が多数検出できた。この偶蹄類の足跡に混ざって少数ながらヒトの足跡も確認できている。いずれの足跡とも遺存状況は良く、前後の識別ができるため、両者が畦畔に沿って南北方向に移動していったことを推定することができる。これは唐鋤の方向とも一致しており、両者の有機的な

関係＝耕作者が牛に唐鋤を引かせながら水田を耕していたことを想起させるものでもある。この水田はS<sub>3</sub>地区にも広がっており、調査区外の東側にさらに拡大すると思われる。南西端部の極一部では、下層の水田遺構の一部と思われる鋤跡等が露出しているが、12世紀後半の水田遺構とはその方向を大きく異にしている。

#### (6) S<sub>3</sub>地区の調査

昭和58年度に行ったトレンチ調査の結果を踏まえて、表土および16世紀以降の堆積した洪水砂を重機によって掘削し、その後調査地区の全周囲にサブトレンチを設けて土層を確認しながら遺構検出を行った。重機掘削の際に永楽通宝や白磁碗等が出土しているが、遺構の確認はできなかった。遺構検出は2面に分けて調査を行っているが、地形の微起伏や埋没状態の差などから明確に2時期の遺構群を面毎に捉えられたわけではない。掘立柱建物跡は両者の面を併せて復元している。I面ではSK98などの土壌や井戸、C地区で検出されたものと同規模と思われる堀のコーナー部を検出したSD20が見られる。また、II面では本遺跡では初めての木棺の痕跡を確認しII SX01・II SK01を検出した。調査中に高橋 学氏から航空写真や写真撮影用足



挿図33 内堀・外堀・片岡庄堀遺物出土ドット図

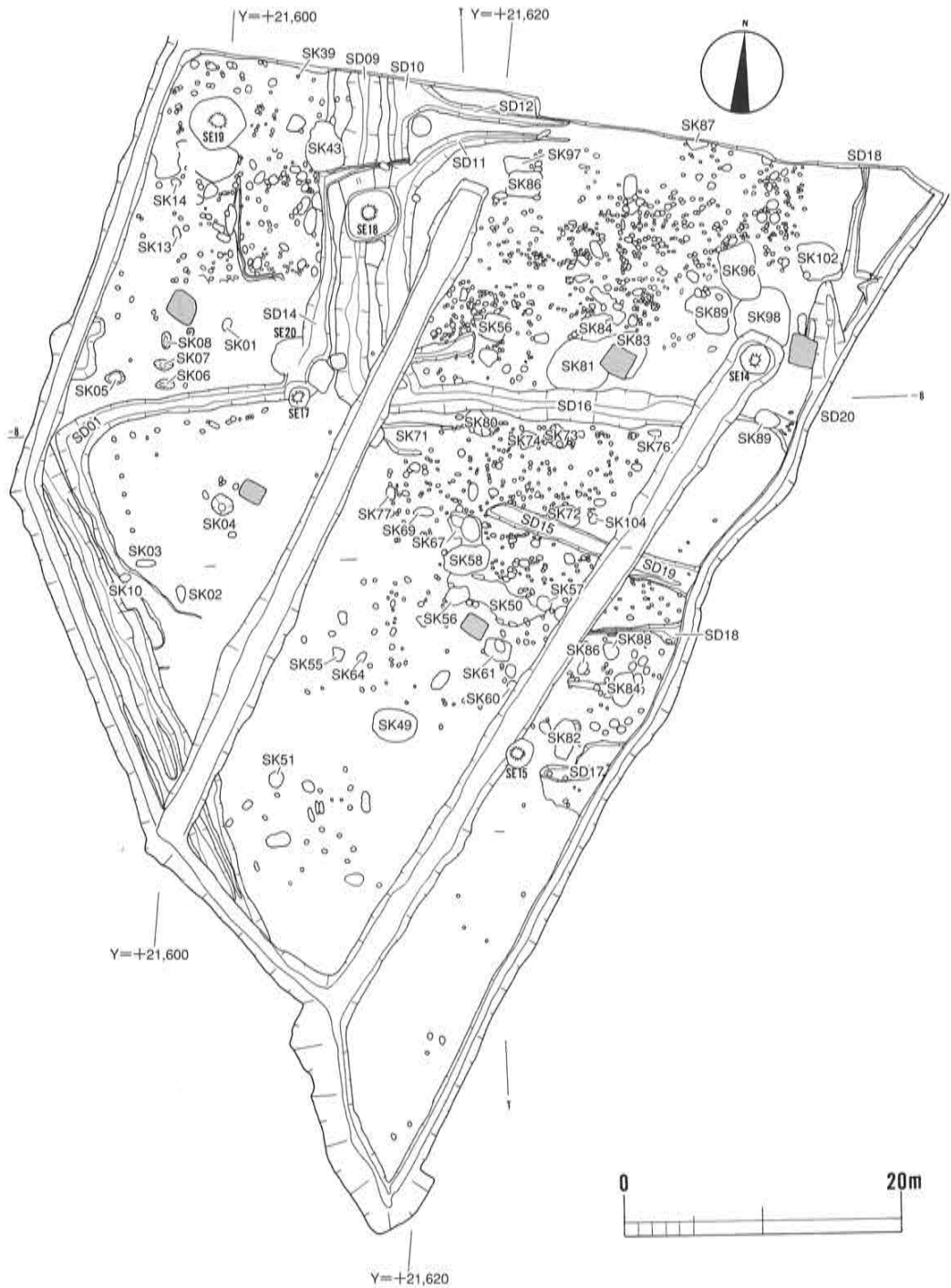
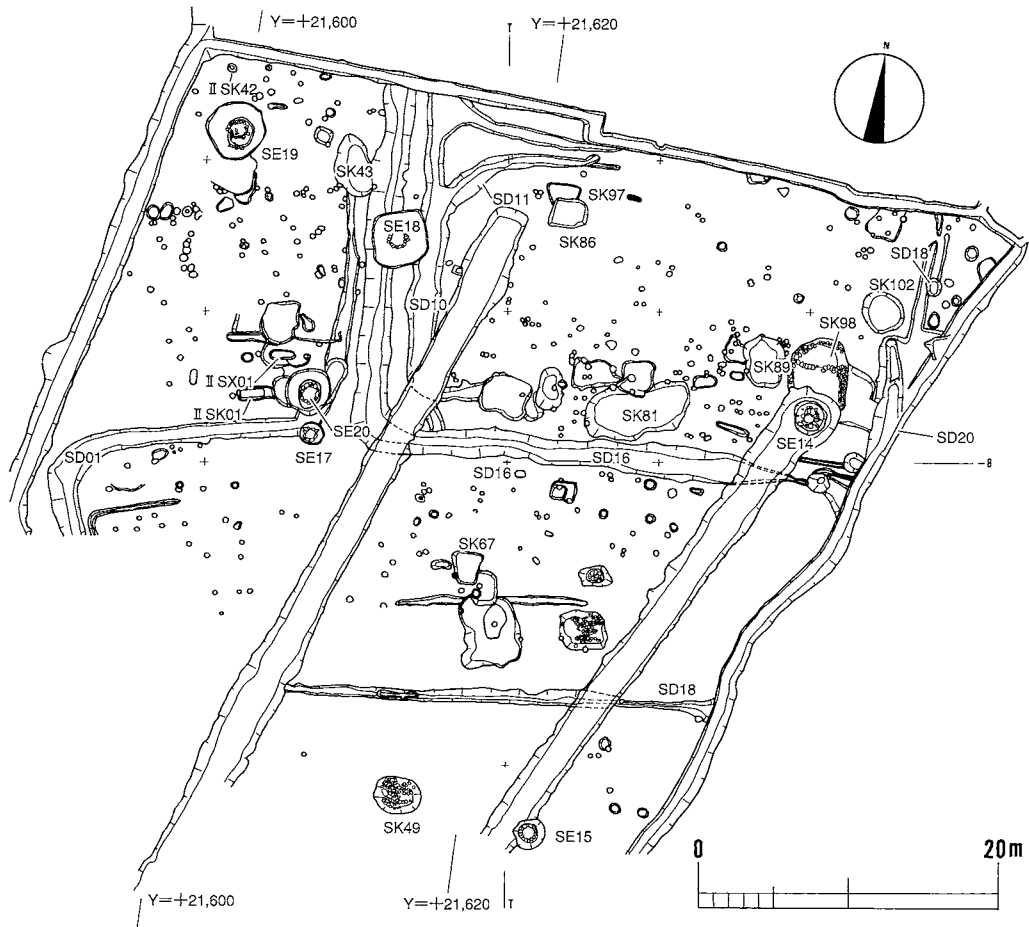


插图34 S<sub>3</sub>地区 I 面遺構全体図



挿図35 S<sub>3</sub>地区Ⅱ面遺構全体図

場の上から見ると更に下層の溝が走っているとの指摘を受け、その部分を掘り下げるⅢ面の遺構調査を部分的に行ったところ、T字形に枝分かれする溝を検出することができた。溝内からは奈良時代後半の須恵器が出土した。

調査地区は福田片岡遺跡の最南端部にあたり、その南西を限っているのが荒河井堰溝である。荒河井堰は現在も林田川から農業用水を取り入れる水路として利用されているが、発掘調査では石垣を伴う近世の溝の下から数面に分層できる溝が検出された。ここからは、12世紀代に比定できる備前焼等が出土しており、12世紀から水路として利用されてきた。

遺構は調査地区の北東部分に集中しており、荒河井堰に沿った部分にはあまり見られない状況である。明確な遺構としての痕跡は確認できなかったが、この部分は水田として機能していた可能性がある。



調査地区は検出された南北方向の溝や柵列によって5区画以上の方形の区画に分けることができる。溝の規模は幅約2m、深さ0.5m程度でC地区で見られるような堀状のものではない。但し、調査地区の北東部分で検出できたSD20は大きな規模を持ち、ここを北西角とする堀を廻らした区画が調査地区外に広がる。

検出できた遺構は、柱穴群およびそれから復元した掘立柱建物跡や柵列、墓跡を含む土壙、井戸、溝などである。以下に主な遺構について記述する。

**溝** S<sub>1</sub>地区の東半で検出されたSD06はSD18に続き、更にSD20に切られる。SD20は堀状の溝で南側および東側に延びる。ここからは大小の礫とともに16世紀の備前焼陶片が出土している。

S<sub>1</sub>地区で検出したSD01はSD10に続き、調査区の北端でSD11・SD12が東へ枝分かれする。S<sub>1</sub>地区で検出したSD02はSD09に続き、東へほぼ直角に折れてSD16に繋がる。SD16は幅約2m、深さ0.5mの溝で、一部に川原石を積んだ護岸を残していた。SD16の一角からは土師器へそ皿や鍋などが纏まって出土している。また、S<sub>1</sub>地区で検出されたSD03はSD14に続き、東へほぼ直角に折れてSD01に繋がり、荒河井堰の溝に平行して更に南に屈曲してSD10となる。この部分では深さを保てなくなるが、南端で西に折れて荒河井堰の溝に繋がるものと、東に折れるものに分かれる。このSD01はSD16と同軸線上にのる。これらの溝は他の地区の溝と同様に、屋敷の区画溝である。

調査区の南端を限る荒河井堰の溝は、下流の阿曾地区や馬場地区の用水として機能しているが、出土遺物からは12世紀に遡る。なお、この荒河井堰の溝と同様の機能を持つと考えられる溝は、第Ⅲ面下層溝があり、奈良時代後半の須恵器が伴う。

**土壙** 鉢土壙は規模・形態等は様々で、その性格・機能等は全て判別できないが、墓跡がある。第Ⅱ面のWad地区のS<sub>3</sub>ⅡSX01やS<sub>3</sub>ⅡSK01は、長方形の土壙である。S<sub>3</sub>ⅡSX01からは歯と頭骨の一部と大腿骨の一部が認められた。頭位は西を向く。頭骨の左側からは白磁碗1点、白磁皿3点が出土している。墓壙の壁は緩く立ち上がり、底も皿状を呈する。S<sub>3</sub>ⅡSK01は、1.9m×0.9mの長方形の木棺の痕跡があり、その隅から釘が出土している。棺の東端近くに須恵器碗1点と白磁片が、またその西側から白色を呈した玉が出土し、玉は顕微鏡観察の結果ガラス製品であった。おそらく念珠玉である。

この一角には同様の東西に長軸方向をとる長円形のS<sub>3</sub>ⅡSX03もある。この他、供養塔の下部構造と考える石積みのある土壙がある。SK98は井戸SE14に切られており、全容を知り得ないが、東西約3.8m×南北2.2m以上の方形石積みの土壙の北側に一段高く半円形に石積みされた土壙が付随している。ここからは、青磁碗・皿、青白磁合子、備前焼壺、東播系捏ね鉢、銭、釘と土錘などが出土している。

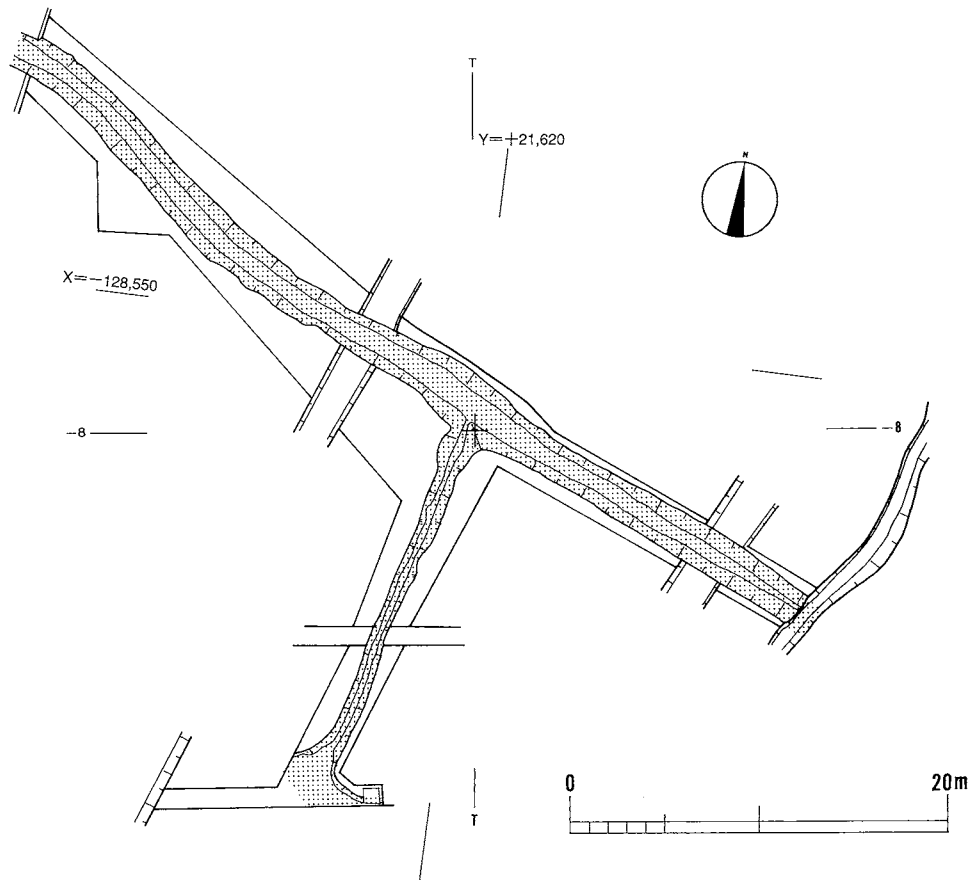
この他に骨蔵器と思われる土師器鍋・羽釜が出土した土壙は、SK01・SK08・SK09・

SK67・SK72・SK77・SK84・SK96・SK102・SK103・SK15・SK28・SK101があり、鉢が出土した土壙は、SK69・SK74・SK83・SK64・SK84・SK15・SK101・SK28がある。また、釘が出土した土壙は、SK60・SK61・SK97・SK103がある。また、SK16からは刀子が出土している。

集石を持つ土壙は多く見られる。比較的大形で浅く底が皿状を呈するもの、比較的深く壁がほぼ直立し、その底に集石するものがある。前者にはSK98と同様に土壙に方形に石を積んだ第I面のSK58やSK59がある。SK58からは白磁碗、備前焼甕の他に釘や銭が出土している。後者にはSK49やSK22などがあり、SK49は調査区の南端にあり、直径3.2m×短径2.4m、深さ0.6mの楕円形土壙で、底に集石がある。集石には長形状に拳大の石を並べた部分と、頭大から拳大の石を比較的乱雑に集めた部分が見られる。中から瓦質の火鉢や白磁碗、土師器鍋・鉢が出土した。集石の下部には特に施設は設けてはいない。SK61のように長円形の土壙内に人頭大の石を4つ並べたものもある。また、第I面のSK01はほぼ正方形の土壙で、うち二辺に石積みが残っていた。ここからは白磁碗・皿などの他にスラッグが出土している。同様にスラッグが出土した土壙にはSK103・SK15・SK29がある。

**井戸** 井戸は合計5基あるが、内1基は確認トレンチ掘削時に調査したSE15で、現代に埋められた井戸である。また、同じく確認トレンチで検出したSE14は石積みの供養塔と考えているSK98を壊して作られており、出土遺物から14世紀代である。SE17は17世紀代の井戸である。SE15やSE17のように新しい時期のものは比較的掘形が小さい。調査区の北西部のSE19からは木簡が出土している。これらの井戸は、全て川原石積みで、底に曲げ物を置いて水溜としている。

**建物跡** 掘立柱建物跡としてSB67・SB68・SB69・SB70・SB71・SB72・SB73・SB75・SB76・SB77・SB78・SB79・SB80・SB81が柵SA34・SA35・SA36とともに復原できる。建物規模は1×4間、2×4間、3×2間、3×5間、4×6間、4×7間、5×3間、5×4間である。方位はN2°W、N0°E、N0°30'E、N1°15'E、N1°30'E、N3°E、N4°E、N6°Eがある。



挿図36 S<sub>3</sub>地区Ⅲ面下層溝

(7) S<sub>3</sub>Ⅲ面の調査

Ⅲ面は、S<sub>3</sub>地区の最終遺構面にあたる。土層観察によって調査区の東側に水田土壌が広がっていることを確認していたが、調査期間の都合等によりその全域にわたっての調査ができないため、東西サブ・トレンチで確認していた溝（下層溝）部分のみの調査とした。

下層溝は本調査区の中央部を北西から南東に向かって、わずかに蛇行しながらもほぼ直線的に流れている。現長は約50mあり、断面は「U」字形を呈している。幅は2.5m前後、深さは約50cmあまりで極端に前後することはない。調査区の中央部は下層礫が高まっているが、この礫層を掘抜いて構築しているため、人工的な水路と思われる。溝を掘削した時の排土は、水田の畦畔を思わせるように溝の両側に積上げられている。

この南西端から約20mの箇所、幅約1mの細い溝がほぼ直角に南西側に分岐する。この溝の延長は約17mあり、その端は南側に広がるとされる谷状地形内に流れ込んでいる。

下層溝の両端付近は下層礫が低くなるため水田土壌が広がっており、土層関係でも下層溝とつながるため、この水田跡に用水を供給するための灌漑用水路と思われる。当然のことながら、北西の延長上にある林田川から取水しておいる。溝内下層には砂が厚く堆積し、そこから出土する土器からみて8世紀後半の遺構のため、上層の水田遺構とも時期的に矛盾しない。

## 調査日誌

### N<sub>3</sub>調査区

4月9日・10日：弥生時代中期の竪穴住居址2検出および掘削開始。サヌカイト片出土。床面は焼ける。

4月12日～17日：弥生時代竪穴住居址2遺物出土状況写真撮影。同平面図と遺物の取り上げ。平面実測。

### C<sub>3</sub>調査区

4月18日～24日：北半分の平面実測および遺物の取り上げ。SD1～SD5の断面実測。下層面で確認した新たな溝（溝7）は、西端が南に屈曲し、溝1に取り付くことが判明。東西溝平面実測。

4月25日：気球による写真撮影。溝7割り付け、平面実測開始。

4月26日：下層面（弥生時代中期土層）の立ち割り用トレンチ設定。東西溝以北・溝9の平面実測。SD04平面実測終了後遺物の取り上げ。

5月7日～10日：中央部・南部実測終了。下層立ち割りによって、古墳時代土器出土。SK8平面実測。SE06内部の掘り下げ開始。外掘り西肩の平面実測。

5月15日：内堀コーナー部下層土器の実測および取り上げ。

5月18日：SE16平面および断面実測。井筒内より木器椀出土。

5月21日・22日：SE16完掘状況の写真撮影。その後井筒の立ち割り、曲物の取り上げ。下層面（弥生時代後期）の立ち割りを終了し、本調査区的全調査を完了する。

### S<sub>1</sub>調査区

4月18日：第2遺構の検出開始。

4月25日：調査区全径を気球によって写真撮影。

5月15日～18日：片岡庄堀を平面・断面実測。片岡庄堀内石橋の写真撮影および平面実測。

5月21日～25日：SE16平面実測。第2遺構面の遺構を検出（SK10・SK11・SK12等確認）し、平板測量。SE12・SE13の平面実測。埋甕1の実測。外堀内より羽子板出土。

5月28日～6月6日：中央部分の遺構掘削。SK12の再確認。SD01内集石の実測。SE08平面実測および井筒の完掘SE01～SE03の掘削開始。SE03以西の土器群の掘り下げ。

6月11日・12日：SE11・SE12掘削。SK12壙内より鉄製品が出土。埋甕1を完掘し、鉄製品2点出土。

6月13日：水田遺構面上で足跡を検出し、掘削する。

6月14日：第2遺構面全域の航空測量。

6月15日：片岡庄堀内の木器の取り上げで、木簡が出土。東端で水田遺構の調査。S<sub>4</sub>調査区の続き。

6月18日：第3面遺構の検出。水田面の精査で畦畔・溝を確認。第2面SD04・SD06・SD07の平面図作成。

6月19日～28日：第2面SK06（石室状構造）、SD01～SD03の遺構図作成。SK28・SK43の掘削と平面実測。第3面の遺構検出。水田面では鋤跡が筑紫大道南側溝際で反転することを確認。写真撮影。

6月29日～7月6日：水田遺構面の平面実測。西区・中央区第3面の平面実測。片岡庄堀内集石実測。筑紫大道の下層で南側から続く水田遺構を検出。

7月15日：兵庫県教育長・次長等来跡。

7月23日～30日：SE12・SE13立ち割り。南端溝を完掘。

### S<sub>3</sub>調査区

7月25日：機械掘削を開始する。

7月26日～8月9日：南端現代溝の石列実測。北西部より遺構検出を行ない、平板測量。

8月10日・11日：SE17の平面実測。SD01を初めとしてS<sub>1</sub>調査区から連続する遺構が、SE17集石土壙等と複雑に切り合う。引き続き遺構検出および平板測量を行なう。

8月12日～16日：お盆休み。

8月17日～30日：西区北半分の遺構掘削および平板測量。SE19内部の調査完了。SE18・SE19掘削完了後の全景を写真撮影。SD08～SD10の掘削を開始しする。

8月31日～9月6日：SD08を完掘する。中央区南側の遺構検出と平板測量を行い、遺構掘削を開始する。ピット内より銅銭が出土する。西区中央部の遺構を検出し、SK2～SK8を掘削。

9月7日：調査区西・中央地区を気球によって写真撮影を行なう。SK61から銅銭13枚出土する。

9月11日～9月14日：SD16内より多量の土器出土。中央区を遺構掘削し、ピット内より銅銭多数出土。SK61の遺物出土状況の写真撮影および平面実測。東区北側の遺構検出を開始する。

9月19日：中央区北部の遺構を掘削する。SD16を完掘する。SK49・SK67平面実測をし終了。

9月25日～9月21日：北東区各遺構の掘削。SD11・12・18とピット群を完掘。SK86・SK89の

写真撮影。

9月28日：第1遺構面をヘリコプターによって写真撮影する。

10月1日・2日：SD02～SD06の立ち割り。SE18全景の写真撮影。西区の南部に下層遺構確認用のトレンチを設定。SD02～SD05を立ち割り、新旧関係を確認。SE17断面実測。第2面の遺構検出開始。

10月4日～10月10日：中央区第2面の遺構検出および遺構掘削。SE15・SE17は平・断面実測。SX01より骨・白磁皿2点・青磁が出土し、墓跡であることが判明。SX02では木棺の痕跡確認、歯が数点出土。中央区中央の下層確認用トレンチで溝を確認。SD01より玉3点出土。SX02からガラス玉8個出土。

10月11日～16日：中央区北半分の遺構掘削。SE20を完掘し、写真撮影。SK98を写真撮影・平面実測。

10月18日～25日：東区と西区の北半分を遺構掘削。SD28・SD32～SD34・SD98の掘削。中央・東区中央の第1面遺構掘削。SK15・SK49平面図。SE14平面実測、SE18断面実測。

10月26日：第2遺構面のヘリコプターによる空中写真の撮影。主だった遺構の個別写真撮影。

10月29日・30日：SE14の断面実測。SE15根太の平面実測。下層トレンチの掘削。

10月31日～11月2日：下層トレンチにより、下層水田・奈良時代の大溝検出。SK98立ち割り。

11月4日～12日：下層水田は北東部の極狭い範囲でおさまる。奈良時代の大溝は現地割りと大きく違う方向で東西方向に走り、調査区外に伸びることが判明。

11月13日：SE14・SE19の断面壁より土壌サンプリング。保存遺構の埋め戻し開始。

12月8日：現地説明会。

#### **S4調査区**

4月26日：機械掘削開始。

5月7日～11日：遺構検出をし、外堀コーナー部を確認。片岡庄堀を完掘し、漆椀等出土。SD05完掘

5月17日～23日：外堀コーナー部（護岸石を敷きつめる）完掘、写真撮影。下駄・漆椀等出土。

5月24日～6月13日：水田面（第2面）の調査。南北の大畦畔とそれに伴う溝を確認。水田面に南北に移動する多くの足跡を検出。外堀内の木器の取り上げ。埋甕1の完掘状態の写真撮影。

6月14日：調査区全域の航空測量。水田面足跡に石膏を入れ、写真撮影。

## 5. 荒河井堰の調査 (C<sub>4</sub>地区)

### 調査の経過

この調査は、本来林田川東岸の荒河井堰改良工事に伴う関連事業として行なわれた側道工事に伴う調査であり、太子・竜野バイパス建設工事に伴う調査とは直接的には関係していない。ただ明らかに同一の福田片岡遺跡内の調査であり、両者の調査結果を別のものとして取り扱うことは、本遺跡の正確な理解と学問的見地の上で望ましいことではなく、むしろ避けなくてはならないことと考え、ここに報告するものである。

### C<sub>4</sub>地区の調査

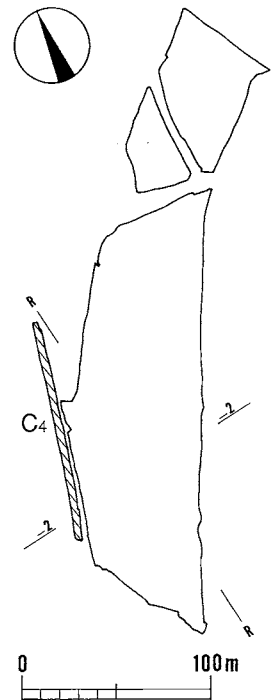
本調査区を上記のような理由により、太子・竜野バイパス工事に伴う調査と一連のものとして取り扱うため、C<sub>3</sub>地区に続く「C<sub>4</sub>地区」として呼称することとする。

本調査区は林田川東岸堤の東側に沿う側道部分の調査のため、北東から南西に延長を約130mとする調査区である。幅は約7mであるが東壁に沿って現道の要壁があり、その攪乱が幅約2mで入っているために遺構が破壊されており、遺構の残存するプライマリーな面は幅がわずかに約5mの著しく細長い調査区となってしまった。

太子・竜野バイパス工事に伴う調査区との位置関係は右の挿図10に示すように、同調査区の西辺に近接しており、本調査区の南西側の半分以上はそのC<sub>1</sub>・S<sub>1</sub>・S<sub>3</sub>の調査区と接することになる。調査の結果、少なくとも4面の遺構面を確認することができた。

最上層の遺構面は、13世紀末に構築される筑紫大道をはじめとする遺構から16世紀初頭の館址関連の遺構が中心となる。まず筑紫大道はC<sub>1</sub>・S<sub>1</sub>の各調査区で確認したように、北側に南内堀・南側に側溝を伴って続いており、さらに調査区の西側(林田川側)に伸びていることが判明した。南内堀・南側溝とも二段掘状になっているが、特に南内堀はこの状態を顕著に確認することができる(挿図38)。また土層断面を見ると下層と中層に著しい礫層が入っており、林田川の冠水を受けた可能性もある。調査区の北東端近くでは、C<sub>1</sub>地区で西に向いていた内堀の延長上が確認できた。この北内堀も調査区の西外に伸びており、大道の両側溝と同じ状況にある。西調査区外で北内堀から幅約1.5mの浅い溝が南に直角に分岐しており、廓のなかを区画していたものと思われる。ただC<sub>1</sub>地区で北内堀と同様に西に向いていた北外堀は確認できず、その想定箇所には旧林田川と思われる旧河道が入り込んでいるため、C<sub>1</sub>地区から本調査区の間で旧河道の一部を外堀として利用していたものと思われる。

一方調査区の南西端部では、S<sub>3</sub>地区で確認されていた荒河井堰の水路が見られる。やはり



挿図37 C<sub>4</sub>地区位置図

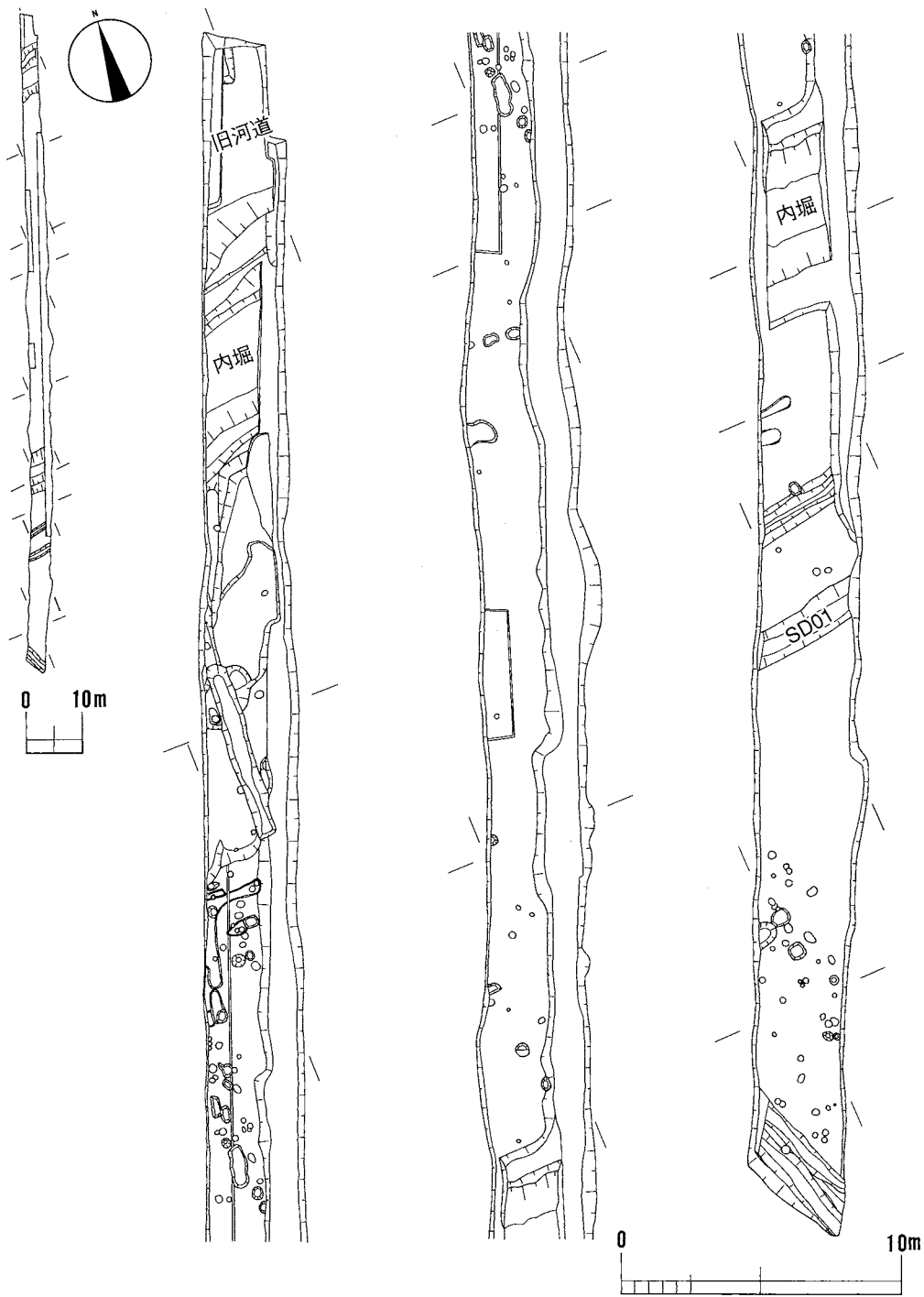
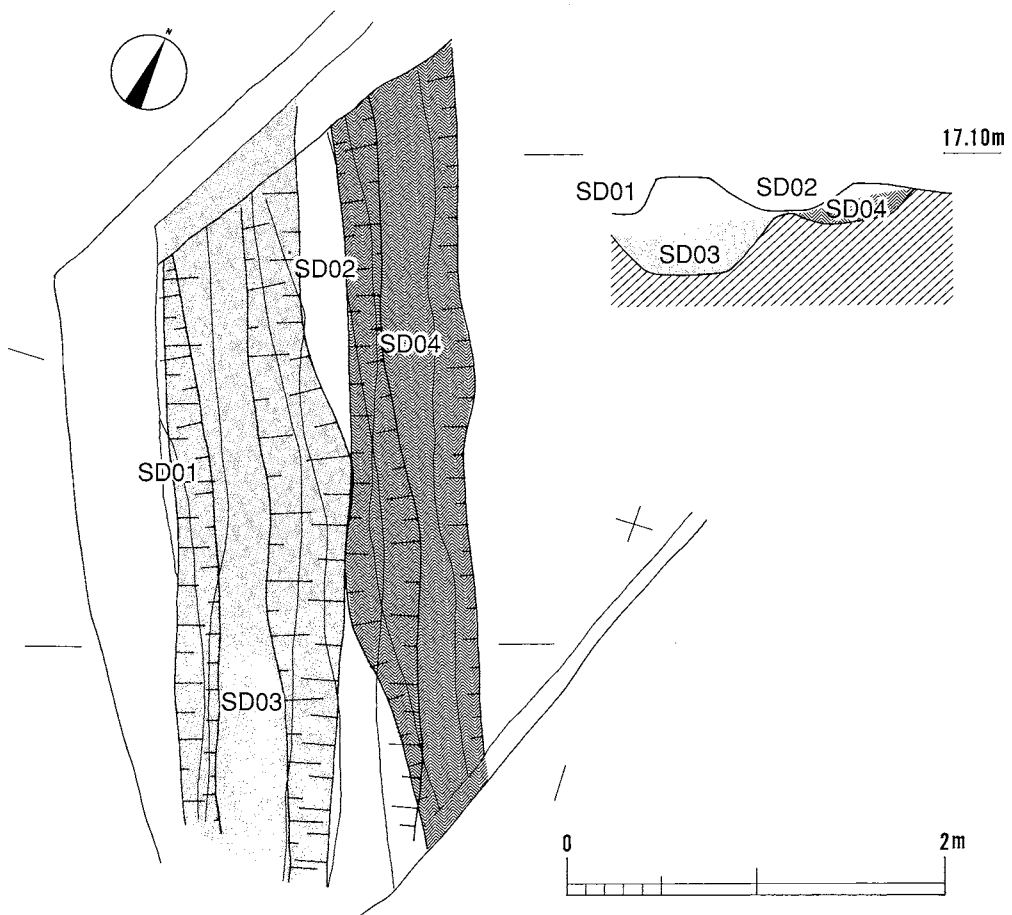


插图38 C4地区遺構全体図



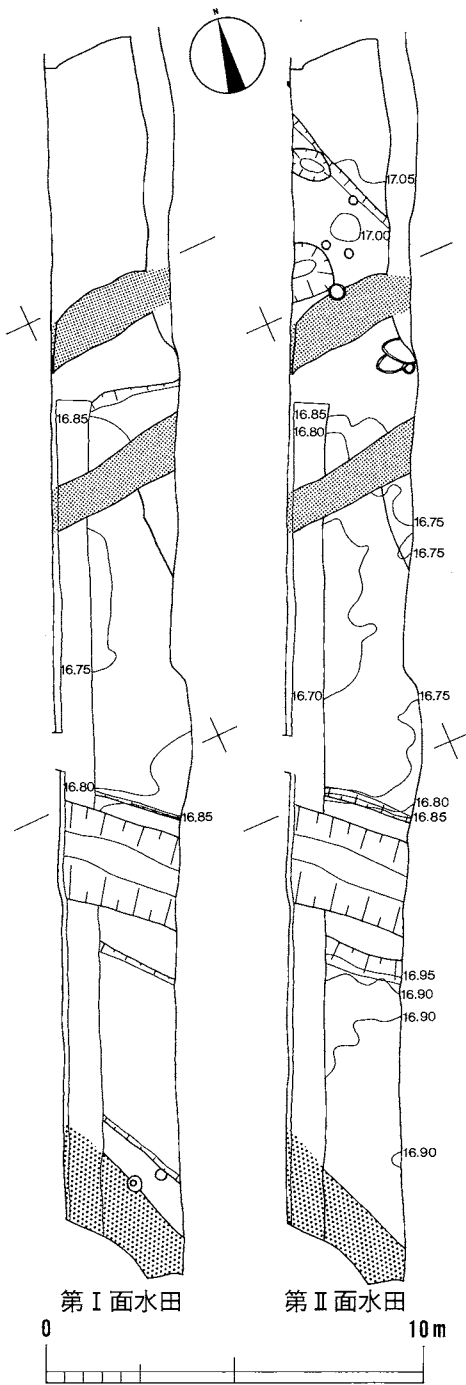


挿図39 C4地区南端下層溝

西調査区外へと続いており、数時期にわたって改修している状況も同様である。

調査区の中央部は下層礫が高まっているため、第2遺構面は南内堀から南側の地区にだけ見られる。この内堀から南西端までの地区の中央部では、S<sub>3</sub>地区を中心として確認された下層溝が西調査区外へ向けて走っている。この下層溝もS<sub>3</sub>地区の調査結果同様、両側に畦畔状の高まりを伴っているが、鋤跡等の耕作関連の遺構は検出できなかった（挿図40左側と土層断面図のⅠ層）。この水田遺構の下層には、薄い洪水砂層を挟んで第3遺構面となるもう一枚の水田遺構が存在している。こちらもやはり、下層溝に用水源を持った水田（挿図40右側と土層断面図のⅢ層）と思われるが、どちらの水田跡がS<sub>4</sub>地区を中心として確認されて水田跡と層位的につながるかの判断はできない。

この2面の水田土壌層に関し、下層溝北側の西調査区断面で宮崎大学農学部の藤原助教授にプラント・オパール定量分析をして頂いた結果、挿図40土層断面図のⅠ～Ⅲ層からのサンプル



挿図40 C<sub>4</sub>地区下層水田遺構図

が栽培イネ・イネ粉とも植物体乾重の数値が著しく高く、この点からもⅠ・Ⅲ層を伴う遺構が水田跡であることが確認できる。ただS<sub>3</sub>地区の東で確認した下層溝に伴う水田跡が、本調査区のどちらの水田面と時期的に一致するかの判断はできない。また、S<sub>4</sub>地区を中心として確認した12世紀後半の水田跡は本調査区には存在しないようである。南内堀より北東側は下層礫が高まっているため水田土壌は途絶えるが、他の三方には連続している。

最終遺構面は中央部の下層礫より北東側の地区であり、土壌状遺構等弥生時代後期の遺構が少数確認されているため、下層礫層上に同時代の集落跡があったものと思われる。

本調査の結果北東隅部では林田川の旧河道を確認したが、他の地区では太子・竜野バイパスで確認した福田・片岡遺跡のプライマリーな遺構面が連続しており、林田川の浸食を受けていないことが判明した。翌年同じ地区の堤の西側（林田川の中位床）部分をトレンチ（現荒河井堰から上流に向かって約45mの延長）によって確認調査したところ、深さ150cm以上にわたって極新しい時期の遺物を含む河川堆積による礫層が形成されており、プライマリーな遺構面が存在していないことが判明した。結局、福田片岡遺跡の西側へ伸びる遺構面は、幅20mの堤の中で終息してしまい、現河川敷内は、完全に河川内となっていることが明らかとなった。遺跡の西端は後世に林田川の侵食されているとは思われるが、その林田川が西側の内・外堀を兼ねる自然の堀となっていたものと思われる。

## 調査体制

社会教育・文化財課長 西沢良之／参事 大西章夫／副課長 森崎理一／課長補佐 池田義雄／埋蔵文化財係長 櫃本誠一／事務担当 大平 茂

調査担当 岡崎正雄・平田博幸・別府洋二

調査補助員 黒田卓也・高橋 学・内田忠賢・山本慎子・高橋 弘・富士田 剛  
谷口健次郎・花畑英豊・福本晴夫

整理作業員 山口みさえ・三木明美・三木満子・長谷川峰子・土井基世・土井雅世  
池田早苗・鈴木小夜子・吉川千晴・斉藤ゆかり

運 転 員 佐藤登志夫・松原肇

## 調査日誌

### C<sub>4</sub>調査区

11月14日：機械掘削開始、測量用杭打ち。

11月16日～21日：遺構検出を開始。内・外堀を検出。片岡庄東西堀・筑紫大道南側溝・内堀・等各溝内を掘削し、平面図を作成。SD01～04を掘削し、完掘状況を写真撮影。北側の内外堀完掘。

11月26日：南側第2遺構面の調査開始。宮崎大学藤原 宏助教授が土壌のサンプリングを行なう。

11月27日～30日：中央区平面実測を開始。第1水田面実測後第2水田面を検出へ。

12月4日：調査区全景を気球撮影。水田面のエレベーションをとる。

12月7日～13日：遺構の平面実測開始。下層立ち割りトレンチを掘削し、北端部下層遺構を掘削する。

12月8日：現地説明会。地元の方を初めとして約50名の方々が見学にこられる。

12月14日：遺物コンテナを魚住分館に搬出する。調査区北部分において、弥生時代後期の土壌状遺構確認。本日をもって、福田・片岡遺跡の全調査を終了する。

## 第3節 整理作業

兵庫県教育委員会が福田片岡遺跡において、昭和56年から昭和59年の4箇年の発掘調査を通して発見した遺物はコンテナにすると土器1,200箱・石器5箱・鉄器5箱・木器90箱と自然遺物（米・麦などの種子類、獣骨など）17箱があり総点数は20,000点を超える。

窯跡の調査に次ぐ遺物量があり、できるだけ調査現場において整理作業の見通しを立てるため、土器類については種類（須恵器・土師器・弥生土器・古式土師器・輸入陶磁器・国内産陶器・瓦器など）に分け、遺物台帳を作成した。ただ、国内産陶器は主に備前焼であり、壺・甕が復元出来る物が多く、重量・破片点数など他の遺物と同じ整理作業ではできない。

また、木器は調査現場においてできるだけ水洗いを行い、形状を観察し、水漬けで保存しておいた。中世の遺構、特に井戸・土壇・墓の埋土から数多くの種子類等が出土したため、現場において簡易な水洗選別を行った。同じく弥生時代の土壇の埋土も水洗選別を行い多くの成果があった。

調査終了の翌年、昭和60年度から兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 兵庫県埋蔵文化財調査事務所において、整理作業を開始した。土器1,200箱等を一度に整理できないため、明石魚住分館（遺物収蔵庫）に600箱を置いて、分離収納し、整理作業を開始した。

### 1. 昭和60年度整理作業

600箱の土器のネーミングから始め、接合・復元を試みた。また、輸入陶磁器・木器台帳・石器台帳と鉄器台帳を作成した。鉄器は形状観察から始め、一部錆落としも実施した。そして、土製品の面子・土錘から実測を開始した。

この年は、発掘調査が大変忙しく福田片岡遺跡の整理事業開始の年に当たりながら、調査担当職員は充分に対応する事ができなかった。

#### 整理作業体制

社会教育・文化財課長 北村幸久／参事 森崎理一／副課長 黒田賢一郎／課長補佐 和田富雄／埋蔵文化財調査係長 櫃本誠一／事務担当 森内秀造  
整理作業補助員 中澤貴美子・渡辺二三代・藤沢まゆみ・大北真理・表具冴子

### 2. 昭和61年度整理作業

初年度の継続として、400箱の土器のネーミング・接合作業を行い、木器・土器の実測を開始した。

#### 整理作業体制

社会教育・文化財課長 北村幸久／参事 森崎理一／副課長 黒田賢一郎／課長補佐 和田富雄／埋蔵文化財調査係長 櫃本誠一／事務担当 森内秀造  
整理作業補助員 表具・中澤・松本美千代・和田マユミ・岡田依理子・植田弥生・中田明美・石野照代・渡辺・藤沢・古谷章子

### 3. 昭和62年度整理作業

残りの200箱の土器のネーミング・接合作業を行い、土器・木器・鉄器・陶磁器の実測を行い、一部写真撮影を森 昭氏に委託して実施した。

#### 整理作業体制

社会教育・文化財課長 北村幸久／参事 森崎理一／副課長 黒田賢一郎／課長補佐 福田至宏／〔保存担当課長補佐〕松下 勝／事務担当 小川良太・岡田章一  
調査員 岡田章一  
整理作業補助員 表具・中澤・松本美・和田マ・岡田・植田・中田・石野・渡辺

### 4. 昭和63年度整理作業

整理が本格化し、土器の実測・復元・写真作業が軌道に乗り出した。遺構図整理・磚分類及瓦・土器類の拓本を行った。

#### 整理作業体制

社会教育・文化財課長 中根孝司／参事 森崎理一・日野和広／副課長 高坂 隆／課長補佐 福田至宏／〔保存担当課長補佐〕松下 勝／事務担当 小川良太・岡田章一  
調査員 岡崎正雄  
整理作業補助員 表具・中澤・松本美・和田マ・岡田・植田・中田

### 5. 平成元年度整理作業

この年、教育委員会の機構改革により社会教育・文化財課から地方機関、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所として独立し、整理作業を継続する。新たに整理・普及課ができ、調査担当していた岡崎が他の遺跡の整理も含め、報告書作成の仕事に当たった。

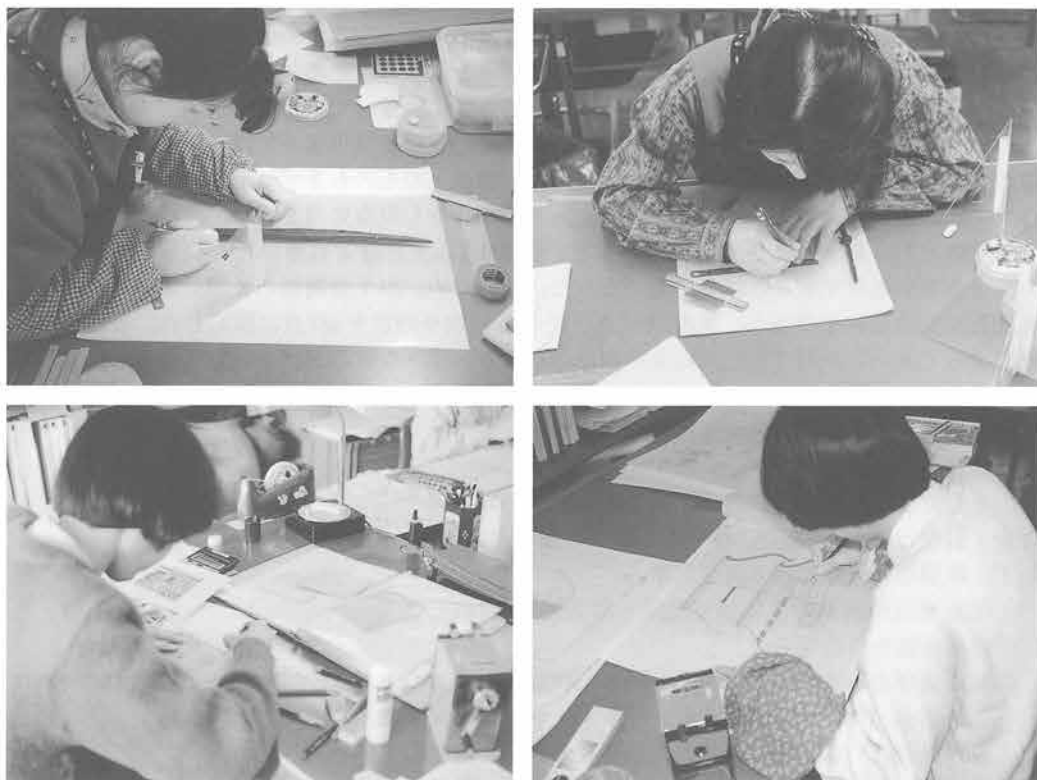
土器の実測とトレースを中心に作業を進め、鉄器の保存処理作業と並行して実測を行った。また、遺構図整理を進めトレースを行った。

#### 整理作業体制

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所長 大江 剛／副所長 村上紘揚／所長補佐 大村敬通／整理・普及課長 松下 勝／事務担当 岸本一宏／保存処理担当 加古千恵子・別府洋二／整理担当 岡崎正雄／嘱託員 表具・中澤・松本美・和田マ・植田・中田

## 6. 平成2年度整理作業

整理事業の最終年に当たり、報告書刊行の為の作業（実測・トレース・レイアウト・保存処理）を実施して終了し、報告書刊行に至った。



挿図41 整理作業風景（木製品実測・金属製品実測・トレース・レイアウト）

### 整理作業体制

兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所長 内田隆義／副所長 村上紘揚／所長補佐 大村敬通／整理・普及課長 松下 勝／事務担当 岸本一宏／保存処理担当 加古千恵子・別府洋二／整理担当 岡崎正雄／嘱託員 表具・中澤・松本美・和田マ・植田・中田・石野 齊藤海予子

また、特に金属器・木器の保存処理については、当事務所において行い、その作業については第3・4節に担当が述べるが、大量の金属器・木器の保存処理作業に当たっては野村純子、石野照代、齊藤海予子他の嘱託員の苦勞の賜物であることを明記しておく。

## 第4節 出土金属製品の保存処理作業

福田片岡遺跡からは金属製品は約1000点出土している。遺跡から出土した金属製品は長い間土の中で腐食が進行し非常に脆弱な状態になっている。そのまま放置すると錆が進行してバラバラになってしまい、もとの形状を復元することは不可能となるため早急な保存処理が必要となってくる。本遺跡出土の金属製品は物理的な錆落としのみを昭和60年に一部行ったものがあったが、化学的処理(脱塩処理・樹脂含浸)を施さずに放置していたために内面より腐食が進んでバラバラになっていた。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では、昭和61年より金属器の保存処理作業が開始されたため、福田片岡遺跡出土のものもまず処理前の形状観察記録を作成することからはじめ、昭和62年から1～2年を費やし脱塩処理を行い、平成元年度に錆取りを開始した。しかし、出土金属器の点数が約500点以上と非常に多いため限られた処理期間内に全点数を処理することは不可能であった。そのため、出土金属器のX線透過試験を全点数実施して元の形状を確認し、製品別を選びだして錆取りの数を387点に限定した。X線透過試験によって透かしが施された火打金が確認されたり、様々な釘の形状が観察される等、金属器の保存処理を実施することによって本遺跡の性格を知るうえで非常に興味深い事実が提供された。

### 1. 鉄製品の保存処理

出土した鉄製品には刀・刀子・鋤先・鍋・銚・鎌・火打金・釘など約290点あり、そのうち釘が8割を占める。以下、鉄製品の保存処理工程を示す。

- ①保存処理作業前の形状観察記録・写真撮影を行い、処理台帳を作成する。
- ②脱塩処理を行う。—水酸化リチウムの0.2%アルコール溶液(エタノール・メタノール・イソプロパノール混合液)に含浸、溶液の交換を繰り返して遺物中の塩化物を除いたのち、メタノールで洗浄、乾燥保管する。
- ③X線透過試験を行い、内部構造を調べる。(奈良国立文化財研究所に依頼。)
- ④脱塩処理後、遺物が脆弱なため非水系のアクリル樹脂(商品名:パラロイドB72)の10%トルエン溶液内で減圧含浸して仮強化を行う。
- ⑤X線撮影フィルムで形状を確認しながら、小型グラインダーにて錆を落とす。また、噴射加工器にてアルミの微細粒を高圧で吹きつけ、細部を仕上げる。
- ⑥非水系アクリル樹脂(商品名:パラロイドNAD10)内で真空樹脂含浸する。
- ⑦真空樹脂含浸した金属器を常温乾燥したのち、熱風恒温乾燥機内で70℃で1週間かけ強制乾燥させる。
- ⑧⑥と⑦を4回繰り返した後、折損部をα-シアノア

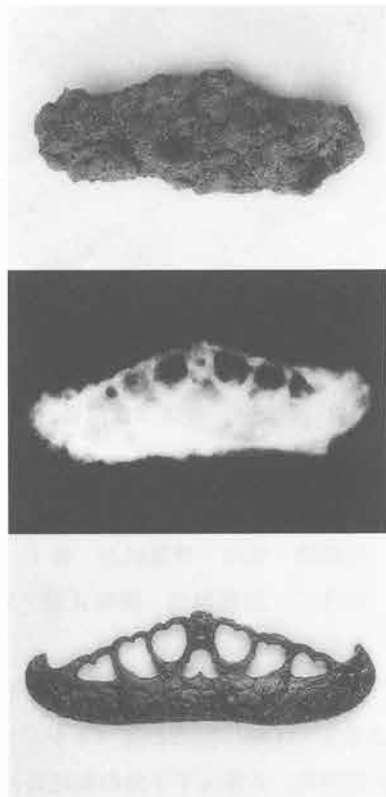


插图42 火打金の処理工程  
上: 処理前  
中: X線透過写真  
下: 処理後

クリレート系接着剤（商品名：ボンドアロンアルファ）・エポキシ系接着剤（商品名：アラルダイト）にて接着し、欠損部分はエポキシ系補填剤（商品名：ボンドオール）にて補填する。

- ⑨保存処理の終了した遺物をビニール袋内にシリカゲルを封入して密閉乾燥保管する。

## 2. 銅製品の保存処理

出土した銅製品には銅銭・煙管・刀装具など約100点、そのうち銅銭は91点含まれる。以下処理工程を示す。

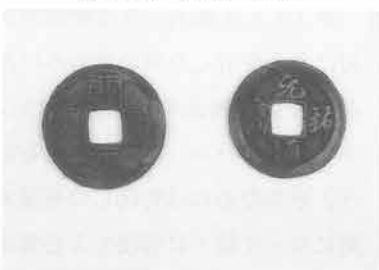
- ①処理台帳を作成する。
- ②脱塩処理—ベンゾトリアゾール0.3%メチルアルコール溶液内で減圧含浸したのち乾燥させる。
- ③X線透過試験を行う。銅銭は腐食の状態及び文字の確認が出来るので内部強化のための樹脂含浸の回数や錆び落としの際の処理計画を立てる。
- ④パラロイドB72の5%トルエン溶液内で減圧含浸。
- ⑤1日常温乾燥後、乾燥機内で1週間強制乾燥する。
- ⑥④と⑤を7回繰り返す。
- ⑦パラロイドB72の10%トルエン溶液内で減圧含浸。
- ⑧⑦と⑤を5回繰り返して内部を強化した後、噴射加工機にてガラスの微細粒を高圧で吹きつけて錆落とし。
- ⑨接着は $\alpha$ -シアノアクリレート系接着剤（ボンドアロンアルファ）を使用。
- ⑩⑦を行い、表面を樹脂膜で保護したのち乾燥させる。
- ⑪保存処理の終了した遺物をビニール袋内にシリカゲルを封入して密閉乾燥保管する。



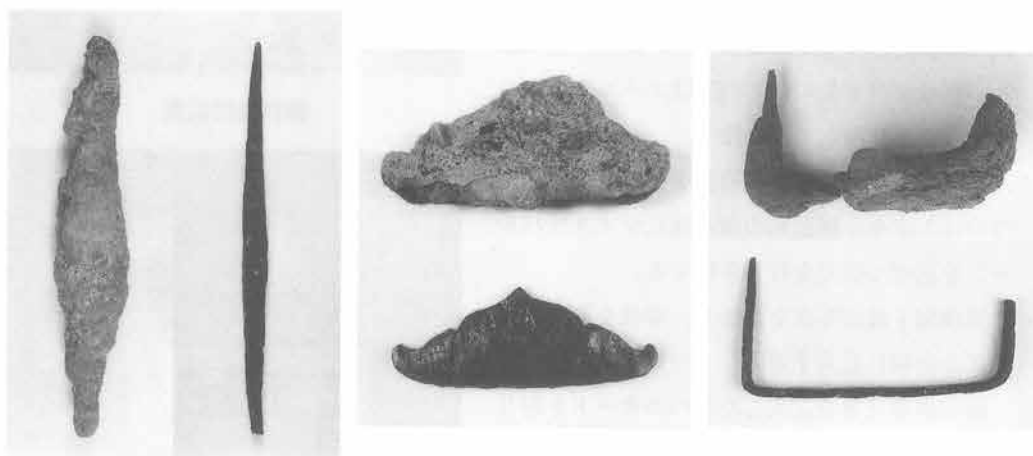
挿図43 真空樹脂含浸作業



挿図44 錆取り作業



挿図45 処理された銅銭



挿図46 保存処理された鉄製品（処理前・処理後）



## 第5節 出土木製品の保存処理作業

福田片岡遺跡の木製品は、堀の底や井戸の中から出土しており、水浸状態にある。これらの木製品はそのままで放置していると、腐敗したり乾燥してひび割れや収縮・変形をおこして文化財としての資料価値を失ってしまう。そのため、科学的な処理を施して恒久的に保存をはかる必要がある。

1. 遺跡から出土した木製品は丁寧に水洗いを行った後、形状観察を行って台帳に登録する。

その後、実測・写真撮影・分析を実施する間は腐敗を防ぐためにホウ酸・ホウ砂の水溶液中に浸したり、或いは、ポリシート中に封入する「仮パック」を行って保管する。

2. 木製品は一点ずつ耐水性のラベルカードを取り付け、不織布やネットで梱包して保存処理に備える。

3. 出土した木製品は主な樹脂分が流失し、過飽和に水を含有した極めてもろい古材である。保存処理は木製品中の水分をPEG（ポリエチレン・グリコール）に置き換えることによって行う。そのためには約60℃の恒温水槽に浸し、長期に亘って徐々に含浸する必要がある。

4. 約100%のPEGの含浸が終了した後、恒温水槽から木製品を取り上げ、表面に残る余分なPEGを拭き取ったり、温水で洗い流す。更に細かい部分に付着しているPEGはエチルアルコールで表面を洗浄して取り除く。

5. 乾燥させた後、接着・補強を行い、欠落した部分はエポキシ樹脂系の接着剤にマイクロバルーンを混ぜて復元を行い着色する。

6. 処理完了後の写真を撮影し、形状を観察した結果を台帳に記入する。

7. 報告書番号等を記入したラベルカードを取り付け、アクリルケースやビニール袋中に梱包して温湿度の保てる部屋で保管する。



保存処理台帳作成



保存処理装置



挿図47 接着・補強・復元作業

## 第3章 遺跡の環境

### 第1節 地形的環境

福田片岡遺跡は林田川左岸の完新世段丘上に位置している。しかし、段丘崖が明確なのは揖保川に対してであり、林田川の氾濫によっては地形変化を受けるといった特徴を持っている。

遺跡の最下層を構成するのは1 m以上起伏を有する砂礫層である。この砂礫層は北区、中央区南側で特に顕著な微高地をなしており、現耕土直下に認められる。したがって、この部分では、砂礫堆積後現在に至るまで、ほとんど同一面が地表面を構成してきたのである。さて、この砂礫層の堆積した時期についてみると、従来、これに類似した砂礫層として大津茂川沿いの丁・柳ヶ瀬遺跡の事例があった。それによれば5,500年B.P.以降3,270年B.P.頃のC14年代測定結果が得られている。これに対し、当遺跡では弥生時代中期の土器が含まれており、かつ砂礫層上には弥生時代中期の遺構が存在することから、丁・柳ヶ瀬遺跡と比べて新しいものであると判断される。しかし、播磨平野では今まで、このような事例が報告されたことはなく、また、砂礫層中から得られた遺物も僅かなので、今後の慎重な検討が必要である。遺物の得られた砂礫層は遺構の立地するものと異なり、河道中に堆積したものである可能性もないわけではない。

砂礫層を覆うのは淡こげ茶色シルト質細砂とこげ茶色シルトから構成される後背湿地堆積物である。この層は詳細に観察すると2度の時期に区別することができる。しかしながら、いずれの層からも古墳時代前期の遺物が比較的保存の良い状態で出土している。南地区においては、この層上面に畦畔状の高まりが認められており、水田として利用されていた可能性がある。さて、淡こげ茶色シルト質極細砂と灰色シルト質細砂は共に南地区の一部でしか検出されていないが、これらには明らかに畦畔状の高まりが存在しており、水田として利用されていたことは、ほぼまちがいが無い。この時期については遺物をほとんど含まないために明確にしえないが、唯一出土しているものは6世紀に属する。次に、北地区・中央地区で顕著な遺構面を構成している淡こげ茶色シルト質細砂1についてみると、南地区では西半部において柱穴と思われるピットなどが検出されているものの、東半部では水田として利用されていた可能性が高い。この時期(12C末~13C初頭)には、前に形成された起伏がほとんど消滅して平坦な地形が広がっていたようである。

14世紀の遺構面を構成する黄灰白色シルト質細砂は、現地表面の水田を区画する畦畔と同位置に畦畔状の高まりをつくっており、南地区での現地割は少なくとも、この時期までに遡るものであるといえよう。なお、北地区に関しては、すでに12C~13C初頭に現地割とかなり類似した方向をとる溝が検出されている。

16世紀の遺構面となる淡こげ茶灰色シルト質細砂2にも、現地割と同地割と同位置に畦畔が認められている。しかし、西半部では柱穴状のピット等が多数検出されており、水田ではなかったようである。この時期には、再度起伏が大きくなりだしている。

中礫層・黄灰色シルト質細砂層はかなり人為的に乱されており、一時的な地表面を構成していたことが判る。そして、これ以降、南地区においては急速な自然堤防の形成が認められるようになった。黄灰色シルト質細砂2は、本来の自然堤防構成層である。これに対し、黄灰色シルト質細砂3は、それを人為的に攪乱したもので、畑として土地利用されたために区別されるようになったものである。これらの地層は厚い所で1.5mに達する。現在地形図や空中写真で容易に判読される自然堤防は、まさにこの極めて新しい時代に形成されたものである。なお、この自然堤防は一部で削平されて水田とされているが、その面積は比較的狭いものである。

【高橋 学氏「福田片岡遺跡の古地形環境（概略）」報告から抜粋】

## 第2節 歴史的環境

西播磨の景観は、流紋岩質凝灰岩からなる山塊と沖積平野により構成されるため、旧石器時代の遺跡が発見される機会は、極めて限定されると言われる。このため、近辺に散見される当該時期の遺物も、溜池の改修工事などで偶然発見されたものが多い。例えば、大住寺遺跡ではサヌカイトのナイフ形石器が表採されているが、付近では時間指示者としての始良火山灰の検出もみられるため、将来良好な遺跡になる可能性は高いと考えられる。この他、太子町坊主山遺跡(5)ではナイフ形石器と有舌尖頭器、同広坂向池遺跡ではナイフ形石器と両面加工の楕円形石器、同原新池遺跡ではナイフ形石器が発見されている。いずれにしても、今後資料が爆発的に増大することは、期待できない。

縄文時代に入れば、近年、その具体相が次第に明らかにされつつある。とは言え、揖保川下流域では早期の遺跡の展開は認められず、前期に出現する遺跡を最古として、中・後・晩期の土器が散見される程度である。片吹遺跡(43)は、同じく太子・竜野バイパス建設のために調査が行われた遺跡である。そこでは前期末から晩期中葉にわたる遺物が検出されており、中でも、中期に最盛期をもつようである。また、4棟の堅穴住居と、炉の存在から推定される3棟の堅穴住居が検出された点は注目される。遺物も良好な出土状況に恵まれ、石器は器種・量とも豊富である。中期の資料は、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡(74)や新宮町新宮・宮内遺跡から検出されている。続く後期に入ると、資料数の増加が認められている。例えば、太子町東南遺跡(23)も発掘調査を経た縄文遺跡であり、配石遺構や埋甕が検出されており、後期前半の時期の土器を出土する。また、土偶の出土も注目に値するであろう。この他の後期の遺跡としては、上福田遺跡、太子町城山遺跡(11)、同町川島川床遺跡、姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡などで資料が



插图48 福田片岡遺跡周辺遺跡分布图

確認される。さらに晩期の遺跡は、上福田遺跡、上横内遺跡、揖保町門前遺跡（14）、太子町城山遺跡、同町川島川床遺跡（76）、同町常全遺跡（40）、同町立岡遺跡（38）などが展開してゆく。とりわけ、門前遺跡・常全遺跡や丁・柳ヶ瀬遺跡などは確実な共伴資料ではないが、晩期と弥生前期の資料が出土しており、いわゆる突帯文土器の様相を知る上で重要である。以上の遺跡は主として揖保川東岸に認められるが、その西岸では揖西町子犬丸遺跡、清水遺跡、揖保川町養久・谷遺跡などを挙げるのみで、その詳細は不明と言わざるを得ない。

弥生時代の遺跡の分布は稠密になる傾向を示す。前期の遺跡は、縄文晩期の土器を出土する先の遺跡以外には類例が少なく、太子町福地相坂遺跡、同町斑鳩寺遺跡、同町平方遺跡（7）などが散見される。中期以降は遺跡は平野部に集中し、近辺では福田八軒屋遺跡、内山遺跡（64）、太子町枝重・助久遺跡、同町鶯遺跡、同町川島遺跡（33）など枚挙に暇がない。また、姫路市壇特山遺跡は銅剣形石剣を保有する高地性集落であることも明らかにされている。以上の遺跡では、土器の出土量は大量であっても、編年が解明される中期土器に対比して、後期の土器様相はいまだ不明な点が多い。この時期、尾崎遺跡、北山遺跡、竹万遺跡、清水遺跡、太子町鶯遺跡（21）、同町山田峠遺跡群から分銅形土製品が検出されており、その分布圏の東辺の中核を占める状況を呈していることも特徴的である。また、青銅器に関して、北山遺跡から検出された銅塊は鉛同位体比の分析の結果、華北産の原料と断定された。それが弥生時代の所産であることが明らかにされると同時に、青銅器の鑄造遺跡であった可能性も高いと考えられる。弥生時代から古墳時代の墳墓についても、実例が多い。弥生時代前期のものでは、揖保川町半田山遺跡（46）、同町袋尻浅谷遺跡があり、中期には揖保川町養久山墳墓群32号墓（46）が著名である。後期以降には、揖保川右岸での遺跡の展開が注目される。先の半田山遺跡1号墓は、小形仿製鏡を副葬しているし、白鷺山1号墓には「位至三公」、「金石如寿」の銘の刻まれた漢鏡6期の蝙蝠文鈕座内行花文鏡、2号墓には高倉洋彰氏分類Ⅱaの北部九州製小形仿製鏡が添えられていた。墳形で特徴的なものは、養久山墳墓群5号墓であろう。長方形の墳丘の両側に突出部を付設しており、前方後円墳の起源を考える上で看過できない遺跡として周知されている。このほか、御津町岩見北山1号墓の石室からは、破碎された漢鏡5期の斜角雷文帯内行花文鏡が発見されており、共伴したと伝えられる吉備系の土器とともに、当地の墓制を考える上で興味深い遺跡であろう。また揖保川左岸にあたる、当該遺跡の近辺でも、片山東山墳墓群、中臣山壺棺墓、明神山墳墓群、笹山墳丘墓、内山壺棺墓、内山墳墓群などの多数の遺跡が知られている。

前方後円墳を輩出する段階では、新宮町吉島古墳や養久山1号墳がその代表として例示される機会が多いが、近年調査された御津町権現山51号墳が衆目を集める。この古墳は、全長42.7mの前方後方墳であり、墳頂付近からは特殊器台形埴輪と特殊壺形埴輪が、そして石槨からは5面の三角縁神獸鏡のほか多数の副葬品が出土した。その意義については、近藤義郎氏が詳述

するところである。一方、この時期の盟主墳は、全長約104mで沖積地に立地した、姫路市丁・瓢塚古墳と考えられている。そしてその系譜は御津町輿塚古墳へと継承され、姫路市壇上山古墳を創出することになる。中期の古墳は、長尾・タイ山古墳群、揖保川町片島古墳、相生市宿禰塚古墳などが挙げられるが、いずれも揖保川西岸に構築される古墳であり、東岸の動静は十分には解明されていない。また規模の小さな木棺直葬墳も、養久山41号墳・43号墳、天神山古墳、長尾・タイ山古墳群、揖保川町笹田古墳などに散見され、中期から後期にかけての間隙を埋める資料となっている。横穴式石室が採用されて、全長34.6mの前方後円墳である西宮山古墳が登場する。円筒埴輪や形象埴輪をもち、石室から出土する装飾付須恵器や垂飾付耳飾りなどの豊富な副葬品は、この古墳の性格を雄弁に物語るものである。同様の古式の横穴式石室は、御津町小丸山1号墳、新宮町姥塚古墳などに導入されており、揖西平野北縁地域の優位性を説く根拠となっている。その後、前山古墳群、片山古墳群、中垣内古墳群、内山古墳群、新宮町馬立古墳群、姫路市丁古墳群などに代表されるように、平野周辺部の山麓に展開してゆく。この中では、狐塚古墳、中垣内1号墳、中井1号墳・2号墳が大型の横穴式石室を内包しており、注意を要する。また、太子町鶺鴒石田遺跡では正方形プランを呈する竪穴住居址が5棟検出されたことを明示しておきたい。そして終末期になり、姫路市西脇古墳群が高い密度で造墓されるとともに、野森古墳などに収束してゆく様相も窺える。この時期の生産遺跡では、中井窯跡や相生市那波野丸山窯跡などが知られており、断続的に須恵器生産を開始している。

奈良時代に入り、市域を東西に走る古代山陽道を中心として、寺院や駅家などの遺跡が顕著となる。とりわけ、小神廃寺では飛鳥時代に遡上する瓦が出土し、播磨最古の寺院跡と目されている。さらに、山陽道に接して、中井廃寺(51)、中垣内廃寺、また山陽道の支道である美作道には奥村廃寺が展開している。小犬丸遺跡は、「驛」や「布勢」の墨書土器や、駅館院の建物区画などが検出されており、延喜式に記載された布勢駅家であることが証明された。さらに、姫路市向山遺跡は、太市駅家に比定されている。このように、古墳時代末期に隆盛をみる地域と律令期の遺跡が集中する地域が重複していることは、興味深い事実であろう。

平安時代の遺跡は、奈良時代から引き継がれたものが散見されるほか、生産遺跡の痕跡が認められる。中井瓦窯跡は中井廃寺の東150mの位置に構築された、杓子形プランのロストル式平窯である。平安前期を遡るものではなく、それ以降、中井廃寺の補修用瓦を供給していたものと想定されている。また、須恵器窯跡も相生市から龍野市にかけて数多く発見されている。相生市緑ヶ丘窯跡群は発掘調査が実施され、椀を中心として生産を行った半地下式窯の実体が明らかとなった。大陣原窯跡群は奈良時代後半から平安時代にかけての遺跡で、新しい窯では瓦と須恵器を生産している。出土した平瓦には、「小上」とヘラ書きされたものがあり、小神廃寺の新しい段階で交渉があった可能性も考えられる。

さて、都に比較的近い播磨では、早い時期に荘園が成立している。本遺跡が帰属する鶺鴒も

例外ではなく、『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』によると推古天皇6年(598)、『日本書紀』によると推古天皇14年(606)、聖徳太子が布施として天皇から賜った播磨国揖保郡の水田を法隆寺に施入し、このほかの蘭地・山林とともに立券荘号して成立したとされる。その荘域は太子町と龍野市の一部にまたがり、『播陽萬寶知恵袋』33によれば、宿村(福田)、同出屋敷(舍利田)、内山村、馬場村、鶯村、助久村、平方村、同出屋敷(柳)の8ヶ村、さらに東保村、東南村、東出村、松田村を包括している。なお、法隆寺には嘉暦4年(1329)4月と至徳3年(1386)5月の年紀をもつ2幅の絵図が伝えられている。これらは、斑鳩寺や京都大学文学部国史学研究室などに写本が残されており、絵図から引き出される多くの情報が鶯荘の研究に裨益することは大である。この絵図の西方一八条垣本坪には、太子信仰の中心寺院である斑鳩寺の記載が見られ、創建以来、寺地の変動はなかったことが証明されている。さらに発掘調査によって、「□治五年」銘のヘラ書きの施された丸瓦が出土しており、寛治5年(1091)もしくは大治5年(1130)の可能性が高いことから、寺院の創建も平安時代後期に遡ることが明らかになった。小林基伸氏によれば、この斑鳩寺に接して、荘園経営の中心地である政所が存在することも想定されており、さらにその北に位置する稗田神社の機能に関する論考も提出されている。本福田片岡遺跡は、絵図の西方条一二坊一六条にあたる。鶯荘の西部は一条院領弘山荘と重複し、両者の境界相論の結果、その一部を弘山荘に相搏されたと想定されている。とりわけ「片岡」の地は林田川の氾濫による河川移動が認められるており、このことも境界相論を引き起こす原因となったと考えられている。荘域内の福田・平方・東出などには「傍示石」が現存しており、領域の占定を明示する指標と考えられている。これらも弘山荘の押領に対する荘域の境界を明示する必要から生まれたものであろう。ただし、絵図に示された「御傍示石」とは位置が異なるものや存在しないものも認められるが、「太子の投げ石」として親しまれていることは、当地における聖徳太子信仰の厚さを物語っている。また、斑鳩寺と鶯荘に関する応永5年(1398)から天文14年(1545)までの古文書・記録を断片的に記載した『鶯荘引付』や『峯相記』などが斑鳩寺に残されており、貴重な文献資料となっている。

## 第4章 遺 構

中世鶴荘の荘園遺跡の調査に取り組んだが、下層に弥生時代中期の住居跡2棟・土器廃棄土壙5基等の集落遺構をはじめ、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての配石遺構と土器群が発見された。弥生時代中期の集落は北地区を中心としており、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺構は中央地区を中心としており、土器は各地区から出土している。

奈良時代後半の須恵器杯蓋が底に残る溝（下層溝）や平安時代の水田跡もあり、中世の遺構と分けて記述する。

### 第1節 弥生時代（中期）の遺構

弥生時代中期の遺構は全て調査地の北部即ち北地区において検出されている。

弥生時代中期ののる遺構面は、北地区では、鎌倉時代の遺構面の約10cm下層にあり、林田川の氾濫によって供給された礫層の上に堆積した暗褐色土（約10cmの厚さ）の上面から切り込まれた状態で検出されている。

北地区では調査の都合上、北半では中世の遺構面検出時に既にほぼ弥生時代中期の遺構面までの掘削がなされていたが、遺構面構成土の土壌化が激しく、多量の土器の出土を見ながらも遺構の検出は難しい状態であった。このため、調査区北半を中心に8本のトレンチを設定し、遺構の確認を行った。

その結果、竪穴住居跡2棟・土壙5基を検出した。この他、遺構とは認識できなかったが、数ヶ所で土器の集中点（土器溜）を検出している。

遺構の検出は北地区北半に限られたが、弥生時代中期の遺物包含層は中央地区においても確認されており、遺構ののる面を構成する礫層内からも弥生時代中期の遺物が検出されている。

#### 1. 住 居 跡

##### 住居跡1

北地区北半中央で検出された。設定したトレンチの内の2本によってその存在が明らかとなった竪穴住居跡である。

住居跡は礫層の上に約10cmの厚さで堆積する暗褐色土上面から礫層を掘り込んで造られている。楕円形を呈しており、その長軸をN44°Wにとる。規模は長径6.9m、短径5.0m、柱穴・土壙を含めた床面積約27㎡を測り、平面において確認できる住居跡の壁は約10cm。土層断面においては約15cmの深さが確認できる。



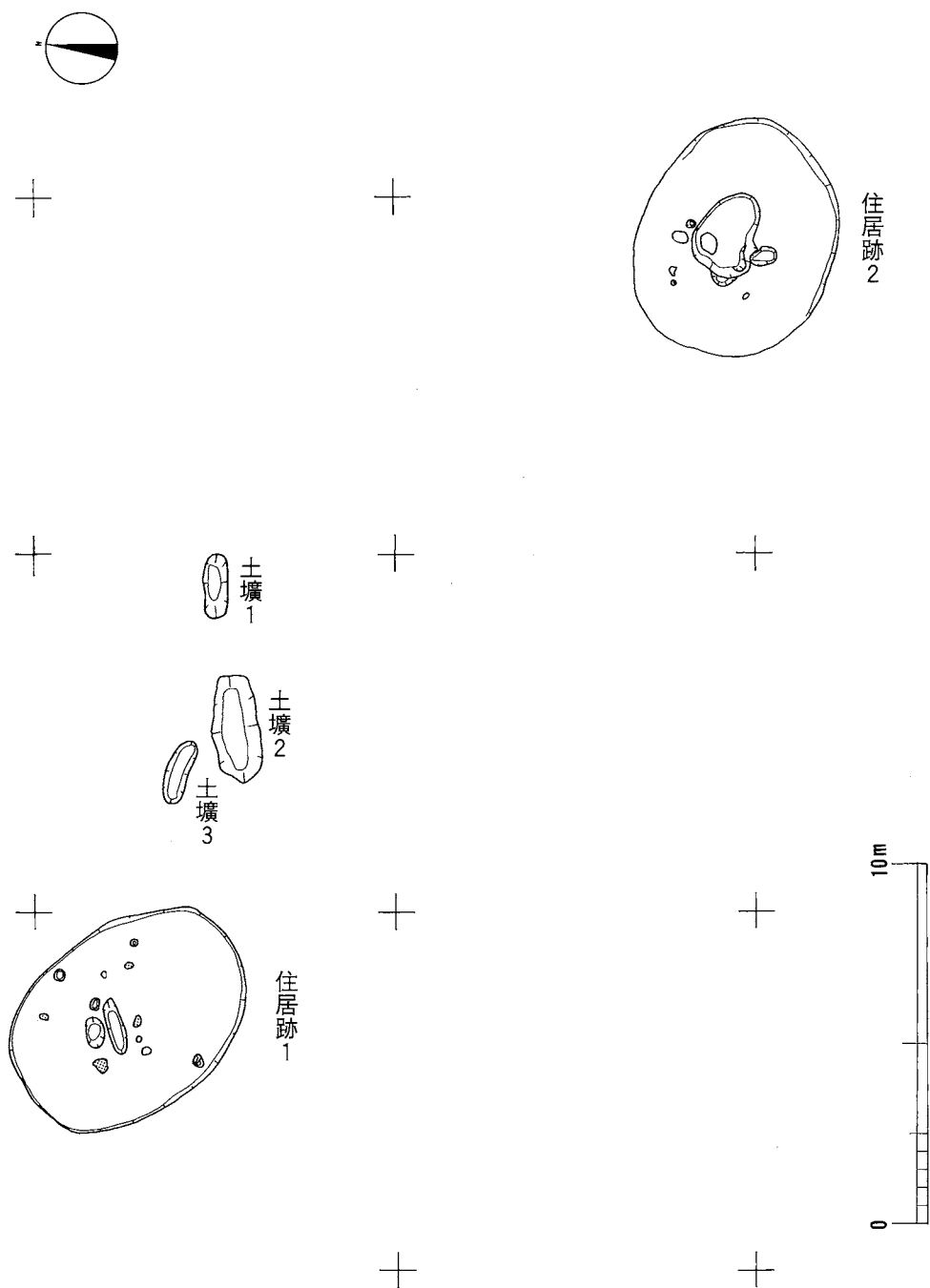
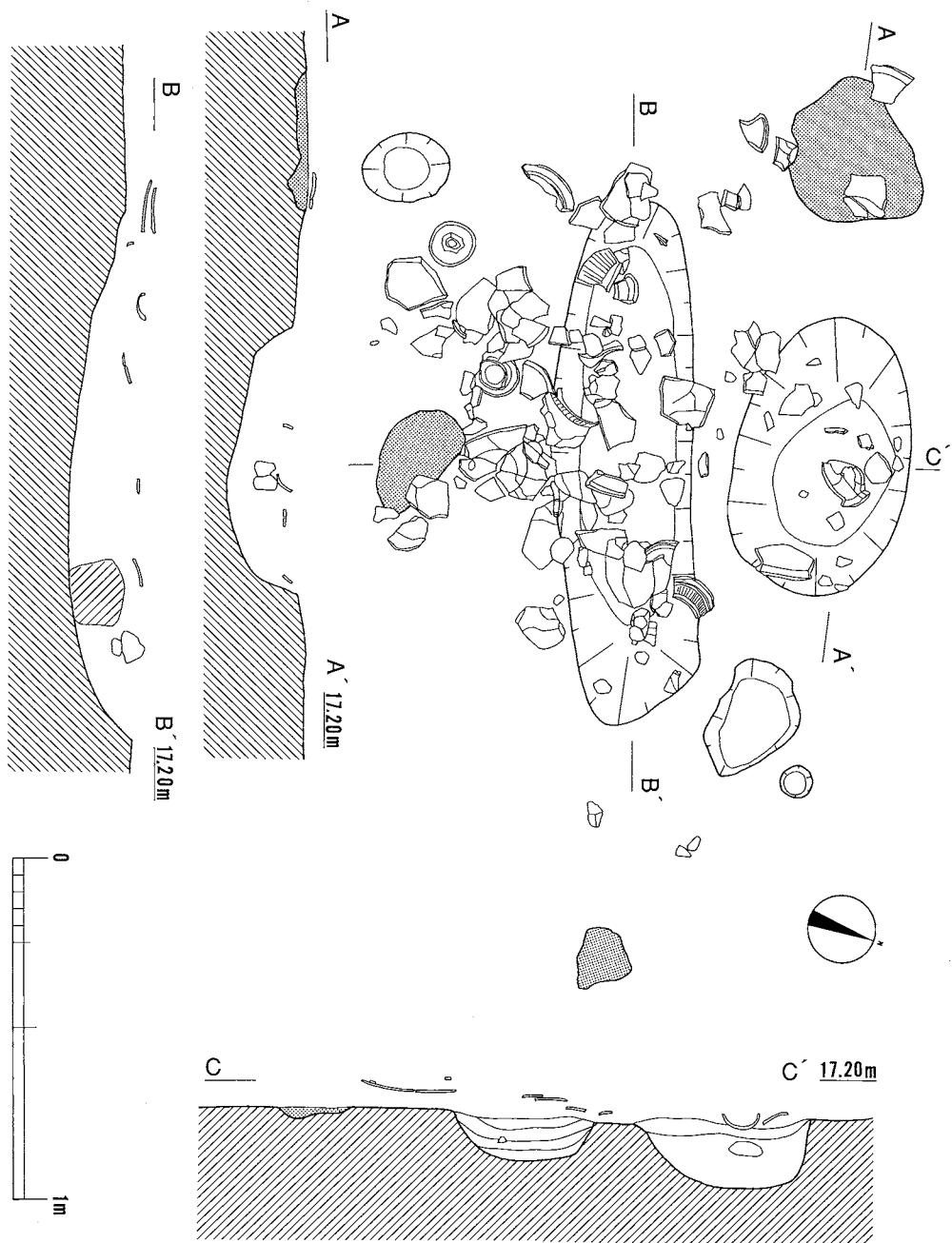


插图49 弥生时代遺構位置图



挿図50 弥生時代住居跡 1



挿図51 弥生時代住居跡 1 中央土壇

壁溝・排水溝は検出されていない。柱穴は7本床面上より検出されている。うち3本は壁際に近く、3本は中央の土壌の周辺に位置する。残る1本はその中間に位置するもので、住居跡に伴う時期と考えられる土器によって埋められた状態となっている。

検出された柱穴のみでは上屋の構築には無理があり、未検出の柱穴もしくは削平された柱穴の存在を考えるべきであろうが、調査時点では精査によってもさらなる柱穴は検出できず、削平された柱穴の存在は床面の遺物の出土状況からみて考え難いものである。柱穴の配置については宿題を後に残すものである。

床面の中央よりやや北西よりに2基の土壌が並んで存在している。

1基は長径80cm、短径50cm、深さ約18cmの規模をもつもので、卵を縦半截した平面・断面形状をもつものである。土壌底が焼けた痕跡はない。土壌内より磨製石鎌・打製石包丁が出土している。

もう1基は長径155cm、短径43cm、深さ約15cmの規模をもつもので、長楕円形の平面形状に浅い船底形の断面形状をもつものである。土壌内には炭が充満しているが、土壌が礫層に掘り込まれているため土壌底が焼けているか否かは明瞭ではない。土壌の周囲には4ヶ所で焼土が検出されている。炭を若干含んでおり、その地点で焼成があったものと考えられる。

遺物は土壌内出土の石器以外に土器が、2基の土壌内・土壌の周囲を中心に床面上・住居跡埋土内から出土している。特に土壌周辺からの出土が著しい。住居跡廃絶時に2基の土壌内に土器を廃棄したのと考えられ、土壌内に収まらない土器が周囲に溢れた状態を呈している。

## 住居跡2

北地区北半東端で検出された。住居跡は、多分に削平を受けており、加えてSD3044・SD3045といった中世の遺構による攪乱及び昭和57年度調査時のサブトレンチによる掘削を受けてズタズタの状態となっている。このため、形状・規模ともに不分明な部分が多い。幾分残存する壁を結び、形状・規模を復元することができた。形状は楕円形を呈しており、その長軸をN76°Wにとる。規模は長径6.5m、短径5.5m、柱穴・土壌を含めた床面積約28㎡を測り、平面において確認できる住居跡の壁は約20cm。

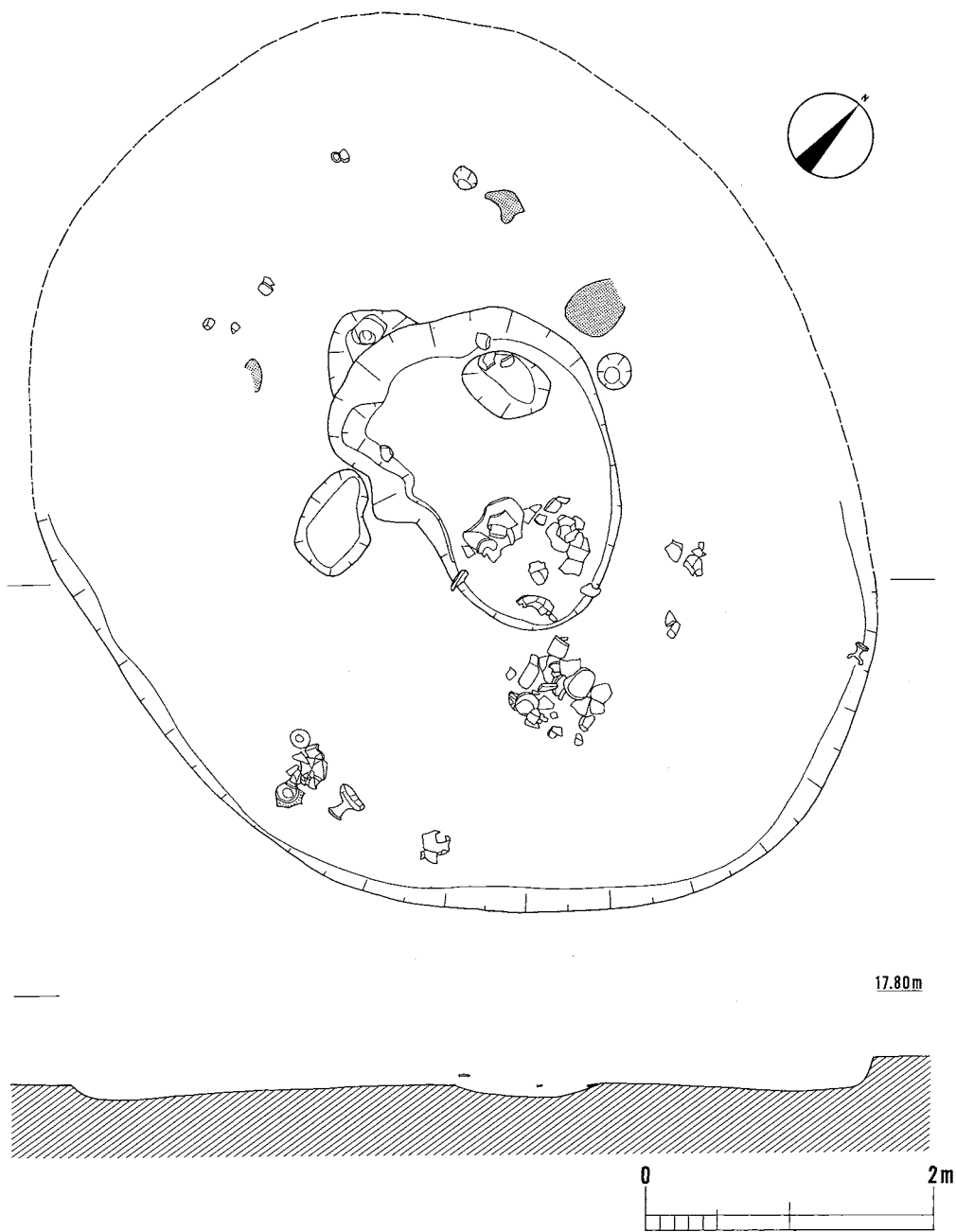
壁溝・排水溝は検出されていない。

柱穴は1本床面上より検出されている。中央の土壌の周辺に位置する。柱穴の配置については宿題を後に残すものである。

土壌は床面の中央よりやや北よりに2基が並んで存在している。

1基は長径240cm、短径150cmの規模をもつもので、卵を縦半截した平面・断面形状をもつものである。土壌内に多量の土器が投入されている。

もう1基は長径120cm、短径80cm、深さ約5cmの規模をもつもので、おむすび形に近い長楕



挿図52 弥生時代住居跡 2

円形の平面形状に浅い船底形の断面形状をもつものである。土壙内には炭とともに土器が検出されている。

2 基の土壙の周囲には3ヶ所で焼土が検出されている。

遺物は土壙内出土の土器以外に床面上・住居跡埋土内から出土している。

## 2. 土 壙

### 土壙1

土壙1は当初土器が多量に集中している所謂土器溜まりとして検出され、上部の土器を取り上げた時点で土壙が存在することが認識された。

調査区北東隅、土壙2・3の東隣に位置する、長軸をほぼ東西にとり平面形状は不整形な隅丸方形、極端な表現をすれば靴底様の形状である。断面形状は縦断面は中央に向かって窪む楕円状、横断面は深いU字形を呈する。規模は長辺約1.8m・短辺約0.7m・深さ約0.5mを測る。

茶褐色極細砂を土壙埋土とし、更に土器の包含状況によって上下2層に分けることができる。土器は土壙上半から集中して出土しており、土壙下半・底からの出土は極めて少ない。検出された土器は水平に近い状態で重なって堆積しており、立った状態のものはない、このことから土器はすでに半ばまで埋まった土壙へ一時に廃棄され土壙を埋没させたものと考えられる。

### 土壙2

土壙は当初土器が多量に集中している所謂土器溜まりとして検出され、上部の土器を取り上げた時点で土壙が存在することが認識された。

調査区北東隅、土壙1の西側、土壙3の南隣に並んで位置する、長軸を東西方向にとり平面形状は極端に間延びした偏平な隅丸五角形を呈している。断面形状は縦断面・横断面ともに深い逆台形を呈する。規模は長辺約3.0m・短辺約1.3m・深さ約0.6mを測る。

土壙は茶褐色極細砂を土壙埋土とし、更に土器の包含状況によって2層に分けることができる。土器は土壙の下半から集中して出土しており、土壙上半・底からは極めて少ない。

土器は断面図からも分かるように、土壙下半にいずれも水平に近い状態で重なって堆積しており、土壙の底に据えられたものはない。このことから土器はすでに一部埋まった土壙へ一時に廃棄されたものと考えられる。また、土壙東肩より外側で多量の土器が出土しており、一見すると土壙より土器が溢れ出た態をなしている。このことは土器の廃棄が土壙東肩より行われ、その廃棄の仕方が非常にルーズであったことを示すものであろう。また、廃棄された土器の上には炭が堆積しており、土器を廃棄した後にその窪み内で火を使ったことを伺わせる。

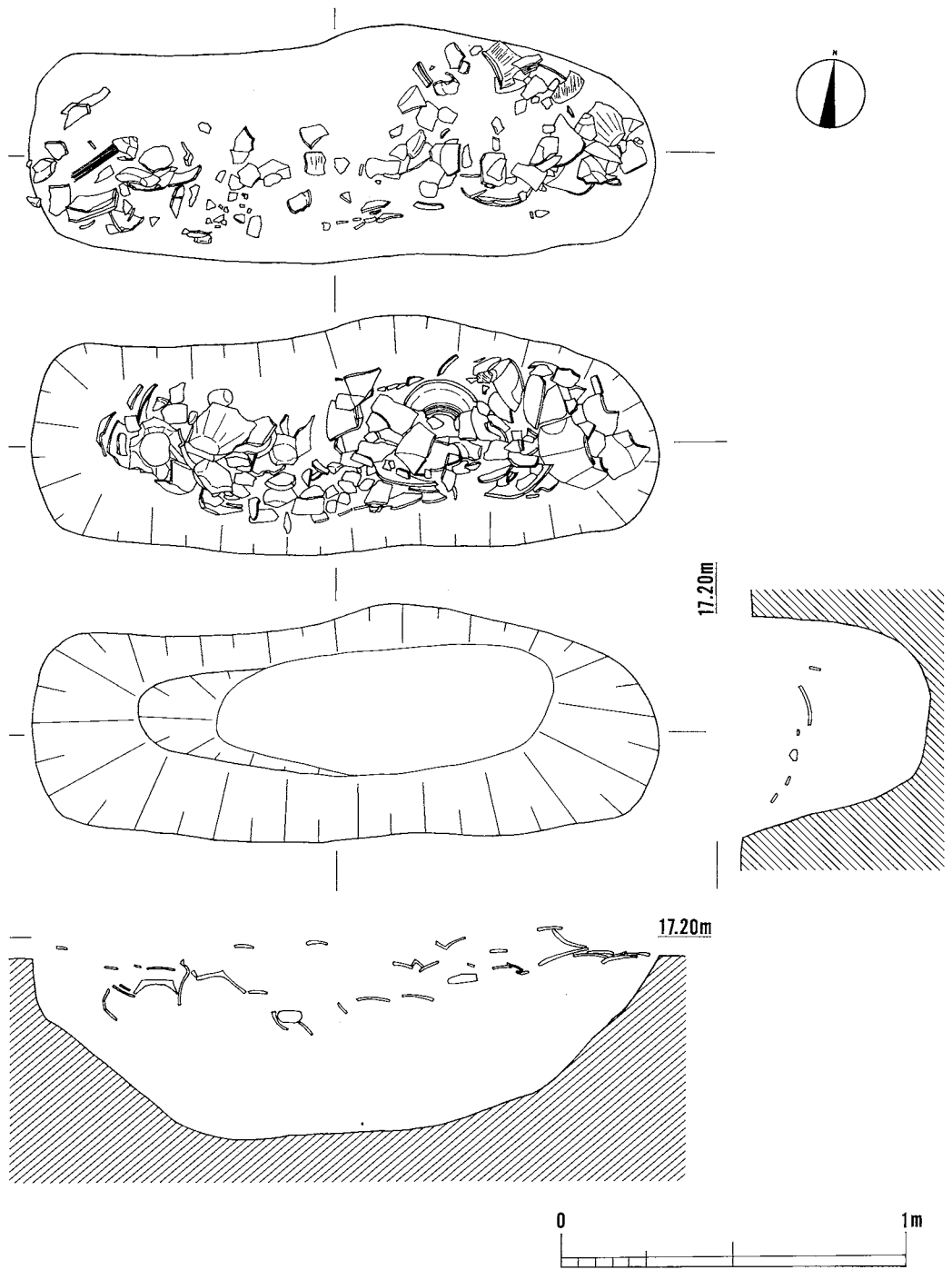


插图53 弥生時代土壙 1

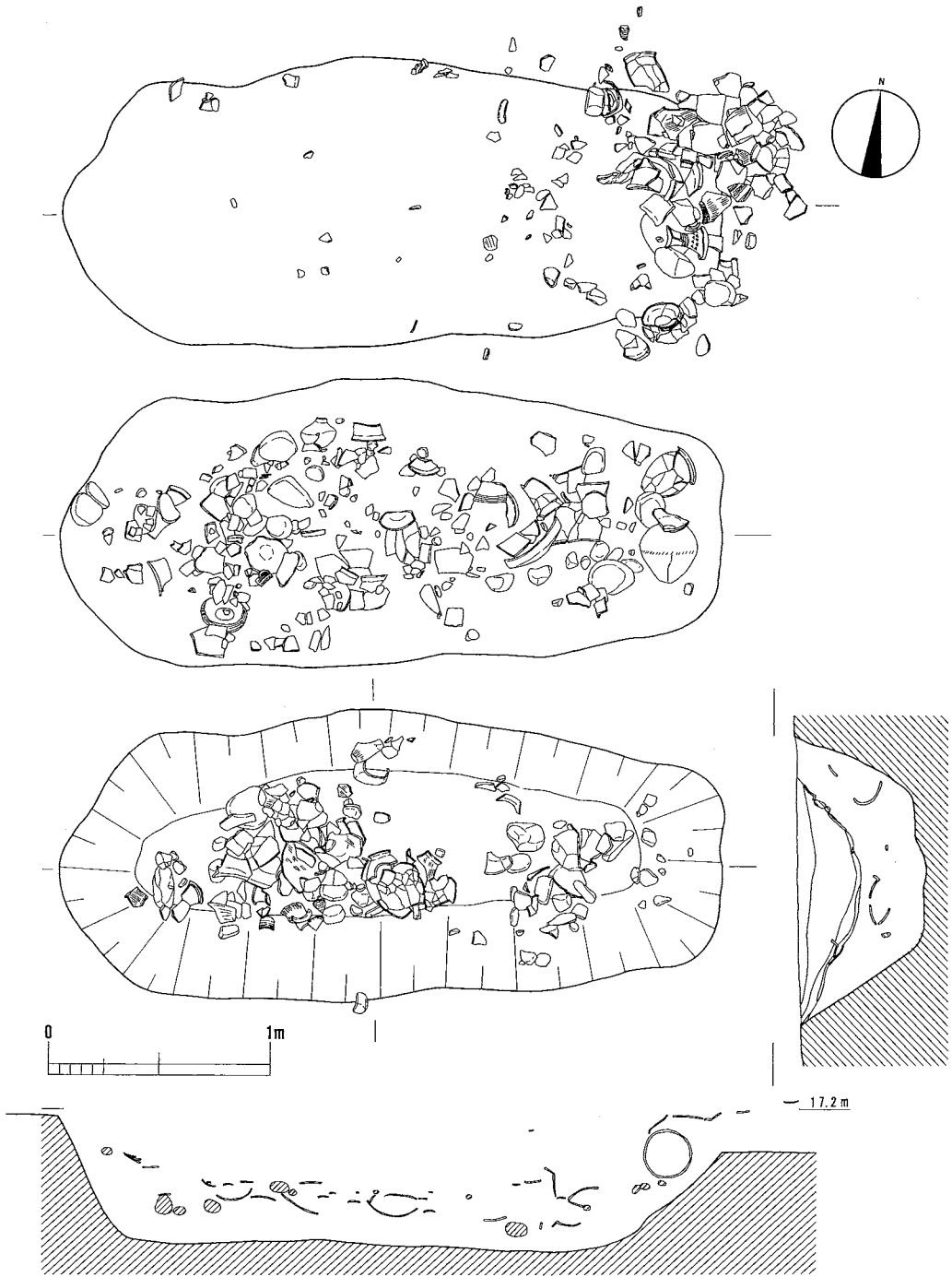


插图54 弥生时代土坑 2



### 土壙 3

土壙は当初土器が多量に集中している所謂土器溜まりとして検出され、上部の土器を取り上げた時点で土壙が存在することが認識された。

調査区北東隅、土壙 1 の西側、土壙 2 の北隣に並んで位置する。長軸を東西方向にとり平面形状は極端に間延びした扁平な楕円形を呈している。断面形状は浅い皿状を呈する。規模は長辺約1.8m・短辺約0.7m・深さ約0.1mを測る。

土器は土壙底から土壙上面まで浅い土壙内に多量に入っており、さらに、当初の検出状況を勘案すると土壙の容量を遙かに越える分量の土器が一時期に廃棄されたことが伺える。土壙内には土器が廃棄される以前に堆積したと考えられる堆積土は乏しく、土壙が掘られてからあまり時間を置かずに土器が廃棄されたものと考えられる。この点では土壙 1・土壙 2 と埋没の様相を異にしていると言えよう。

### 土壙 4

調査区北端、住居跡 1 の北方に位置する、長軸をほぼ東西にとり平面形状は不整形な台形である。断面形状は深い皿状を呈する。規模は南北長辺約0.60m・短辺約0.35m・東西辺約1.25m、深さ約0.25mを測る。

土壙内の東にかたまって、高杯・甕片が出土している。土器は土壙下半より検出されるが、土壙底に密着してはおらず、若干埋没した時点で投棄されたものと考えられる。

### 土壙 5

調査区北半部、住居跡 1 の西隣に位置する。長軸をほぼ東西にとり平面形状は不整形な隅丸方形、断面形状は箱形である。規模は長辺約1.5m・短辺約1.0m・深さ約0.2mを測る。

土壙内の北側にかたまって甕・鉢を主とした土器が出土している。土器は土壙の上半に水平に堆積しており、土壙が半ば埋没した時点で投棄されたものと考えられる。

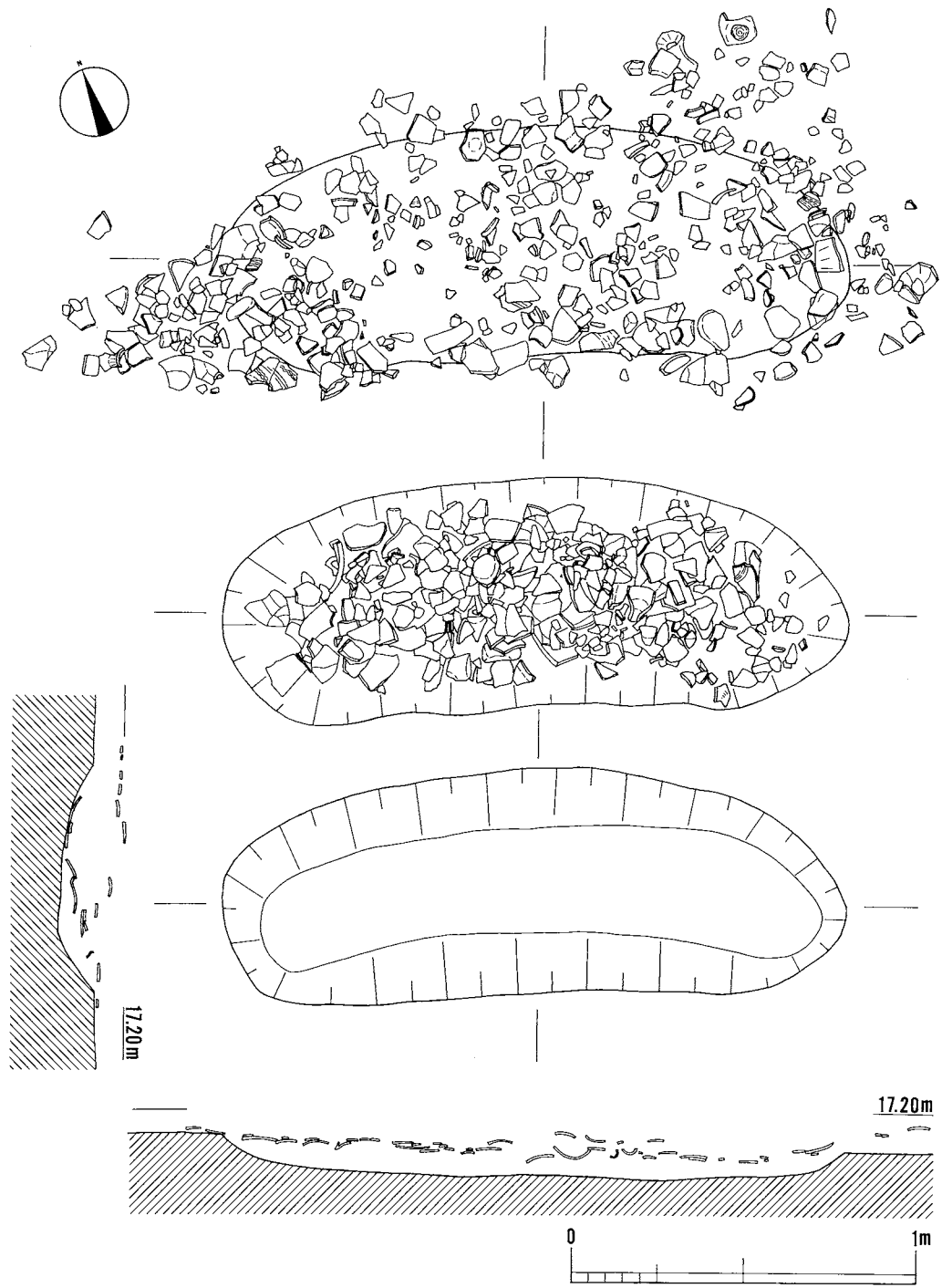
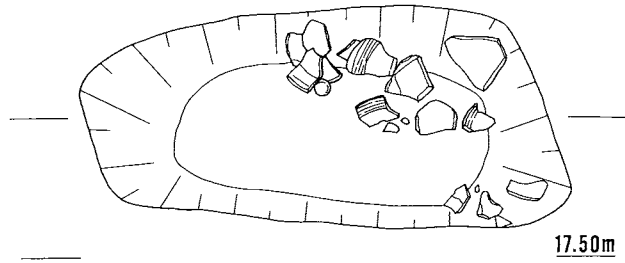
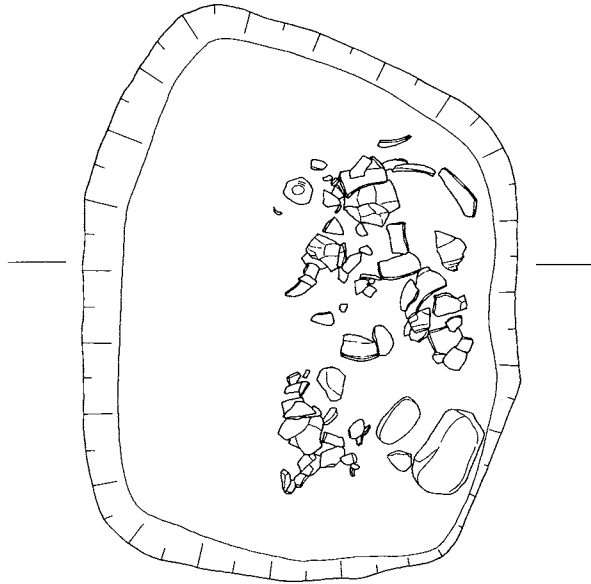
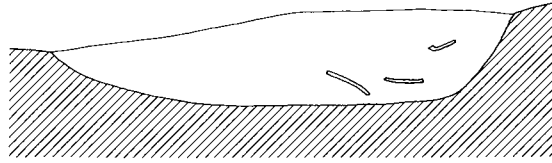


插图55 弥生時代土坑 3



17.50m



17.00m

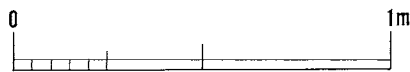
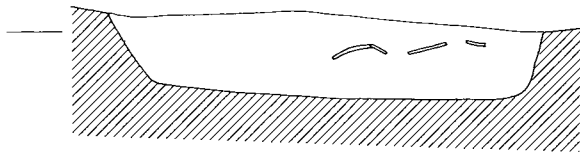


插图56 弥生时代土坑 4・土坑 5

## 第2節 古墳時代の遺構

北地区の下層の調査時に弥生時代中期の住居跡を発見したため、改めて下層の調査ためトレンチを設けた。住居跡の立地する砂礫層が起伏しており、砂礫層を覆う淡こげ茶色シルト質細砂とこげ茶色シルトから構成される後背湿地堆積物を調査すると弥生時代終末から古墳時代初頭の土器が完形品を含め出土した。N<sub>2</sub>A地区・N<sub>2</sub>B地区・C<sub>2</sub>地区・C<sub>3</sub>地区・C<sub>4</sub>地区でトレンチ調査を実施し、C<sub>1</sub>地区では調査年度が先行していたため井戸の断ち割り時に少し確認でき、かつ堀の断面の再精査において追認できた。少し時間的な余裕の持てる箇所においては部分的に調査区を設けた。

弥生時代中期の砂礫層が比較的楽に検出できるためトレンチ調査を活用した。

古墳時代の遺構としては、C<sub>2</sub>地区でトレンチ調査において土器が多く検出されたため、東半部を掘った際に配石遺構を1基発見した。他の遺構は不明で地形起伏の凹部に土器が多量に出土した。

### 1. 配石遺構

C<sub>2</sub>地区東半部の下層調査で、C<sub>1</sub>地区際の東西堀近くの標高16.60mに直径1.0～1.2mの円周上を20cm大の20数個の川原石が並んでいる。平面形がやや尖った方を中心にしており、ずれてはいるが中央に近くに1石がある。日時計が思い浮かぶ。下層を断ち割ってみても遺物は出土しなかった。ただ、皿状に水の浸透した土層の変化を認めるが石を埋める掘り方などは判らない。配石が重さで沈んだ程度である。また、配石遺構は10cmで等高線を引くと凸部にあたり、土器群のある凹部の溝あるいは水筋とは異なる。約360㎡の調査区では標高16.4～17.0mの微地形を調査したが、配石遺構は1基で、他はやや上層の柱穴を数個検出したにとどまり、古墳時代の遺構は他にない。

### 2. 土器群

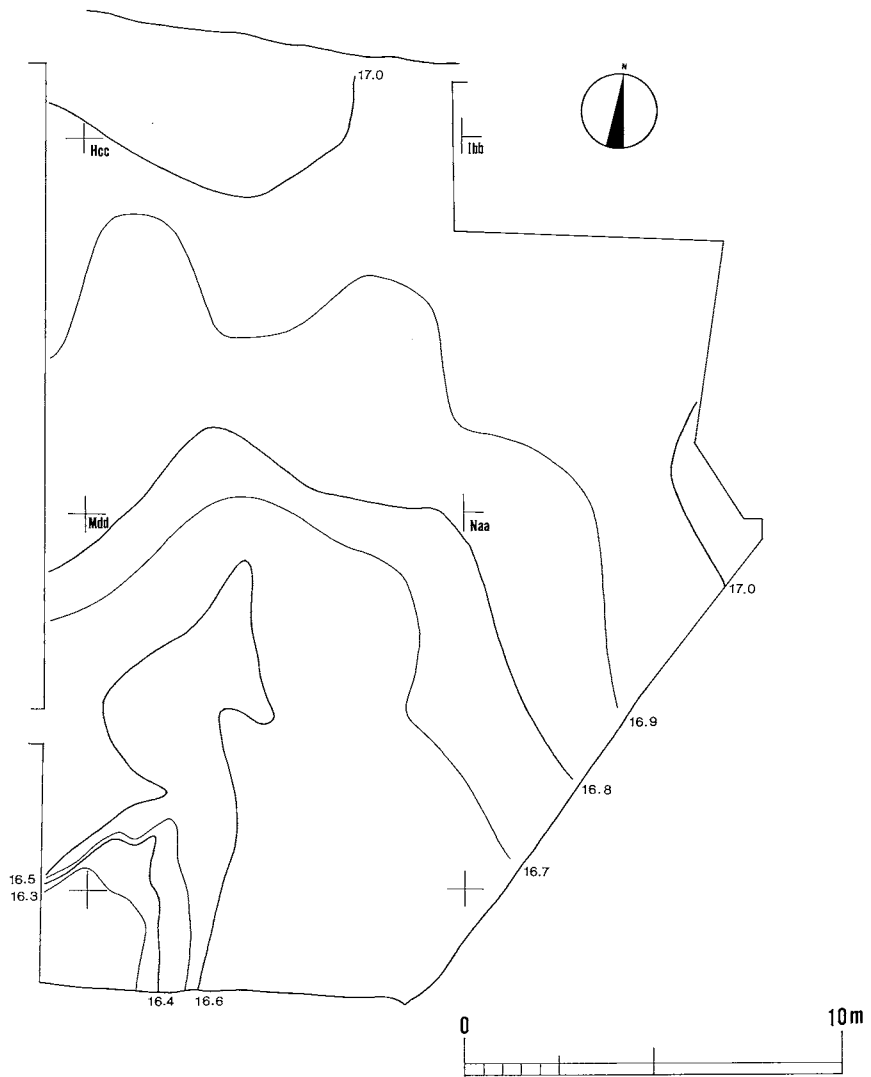
第5章第2節の1. 古式土師器で詳しく述べられるがC<sub>1</sub>地区・C<sub>2</sub>地区・C<sub>3</sub>地区の調査でそれぞれ土器群を検出した。

#### C<sub>2</sub>地区

配石遺構で説明した通り、水筋の凹部に4箇所ほどの土器が纏まりが見られた。特に配石遺構の西側では、10数個体の土器が纏まっている。器種は壺・甕・高杯がある。

#### C<sub>1</sub>地区

井戸SE05の断ち割り調査時に堀の露頭断面の再精査を兼ねて、トレンチを設け一部掘

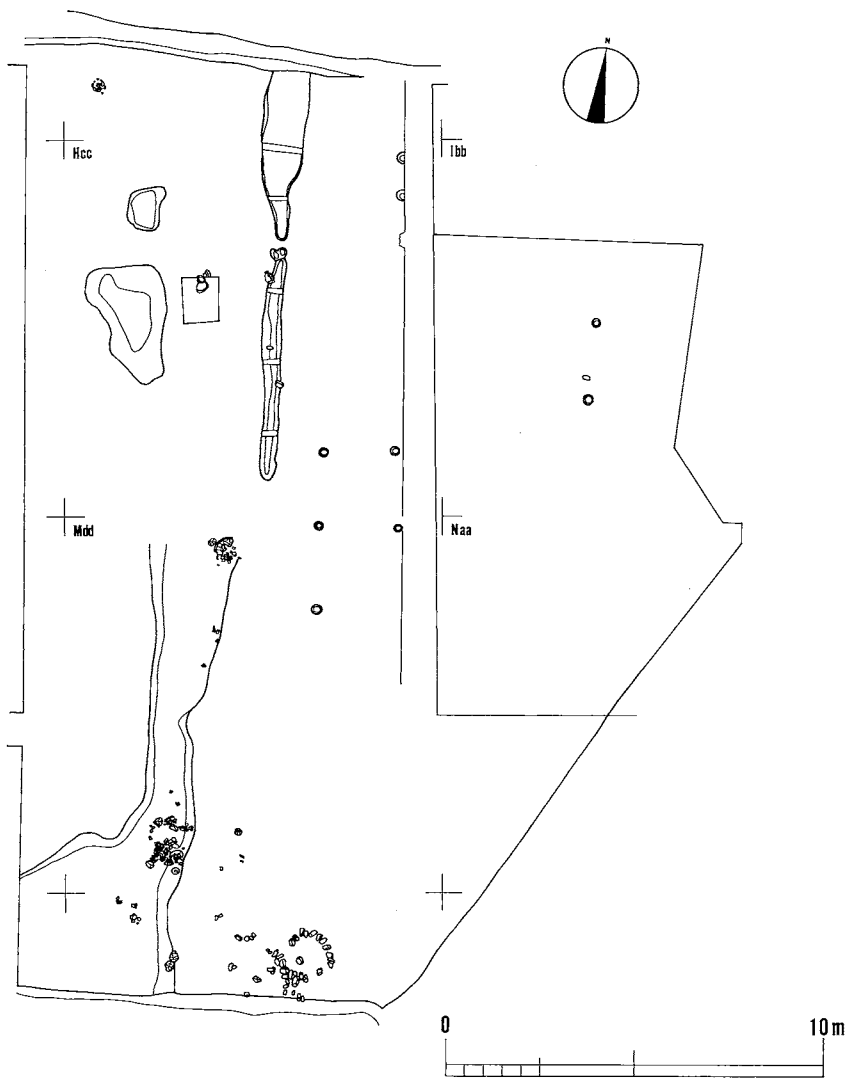


挿図57 C<sub>2</sub>地区下層調査区地形図

張した。面的に広がらないが集積状態で土器群が発見された。器種は壺・甕・高杯・鉢がある。

### C<sub>3</sub>地区

それぞれのトレンチ（挿図26）によって、弥生持代中期の砂礫層を確認する折りに土器の集中する箇所を検出している。いずれも砂礫層の起伏が有るところで凹部に凸部から転落したようで、水筋を遠く流されて溜まったものではない。ただ、時間が無く全面に亘っての調査は実施できなかったが、古地形環境の復元とともに、遺構・遺跡の存在を示唆できた。



挿図58 C<sub>2</sub>地区下層遺構全体図

### 3. 下層トレンチ

先にも述べたが、古式土師器の発見はN<sub>1</sub>地区の弥生時代中期住居跡の検出によるもので、C<sub>2</sub>地区・N<sub>2</sub>A地区のトレンチ調査に始まる。各地区で時間の許す限り、トレンチを設けた。サブトレンチ・排水溝、堀の露頭断面、井戸の断面などで調査を綿密に行い、調査の精度を高めた。

N<sub>2</sub>A地区のトレンチでは標高16.70mに長頸壺95を発見し、それは中世遺構面より約30cm下がっており、かつ弥生時代中期の砂礫層から約20cm上がっていた。同じ地区内の別の地点では、

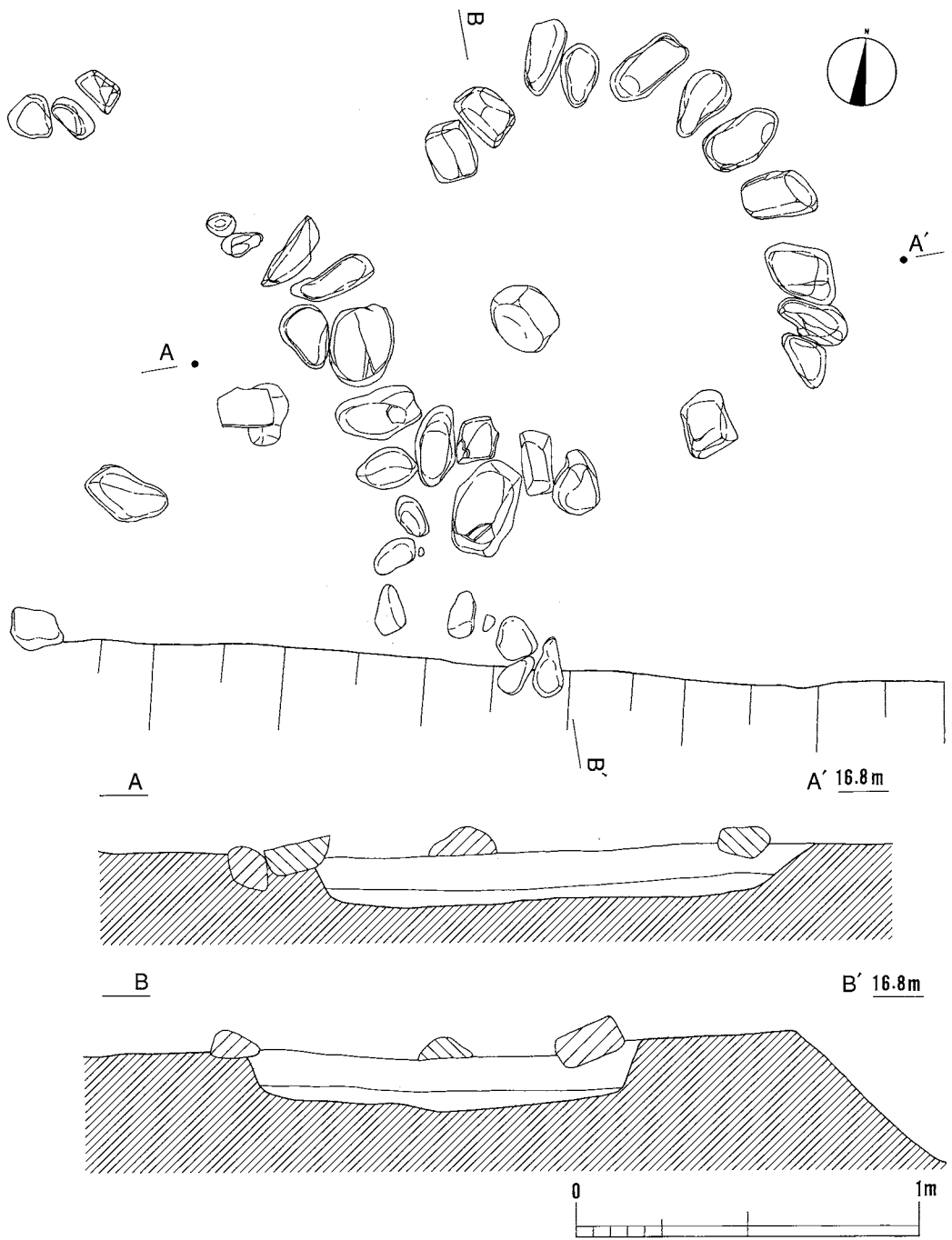


插图59 C<sub>2</sub>地区下層配石遺構

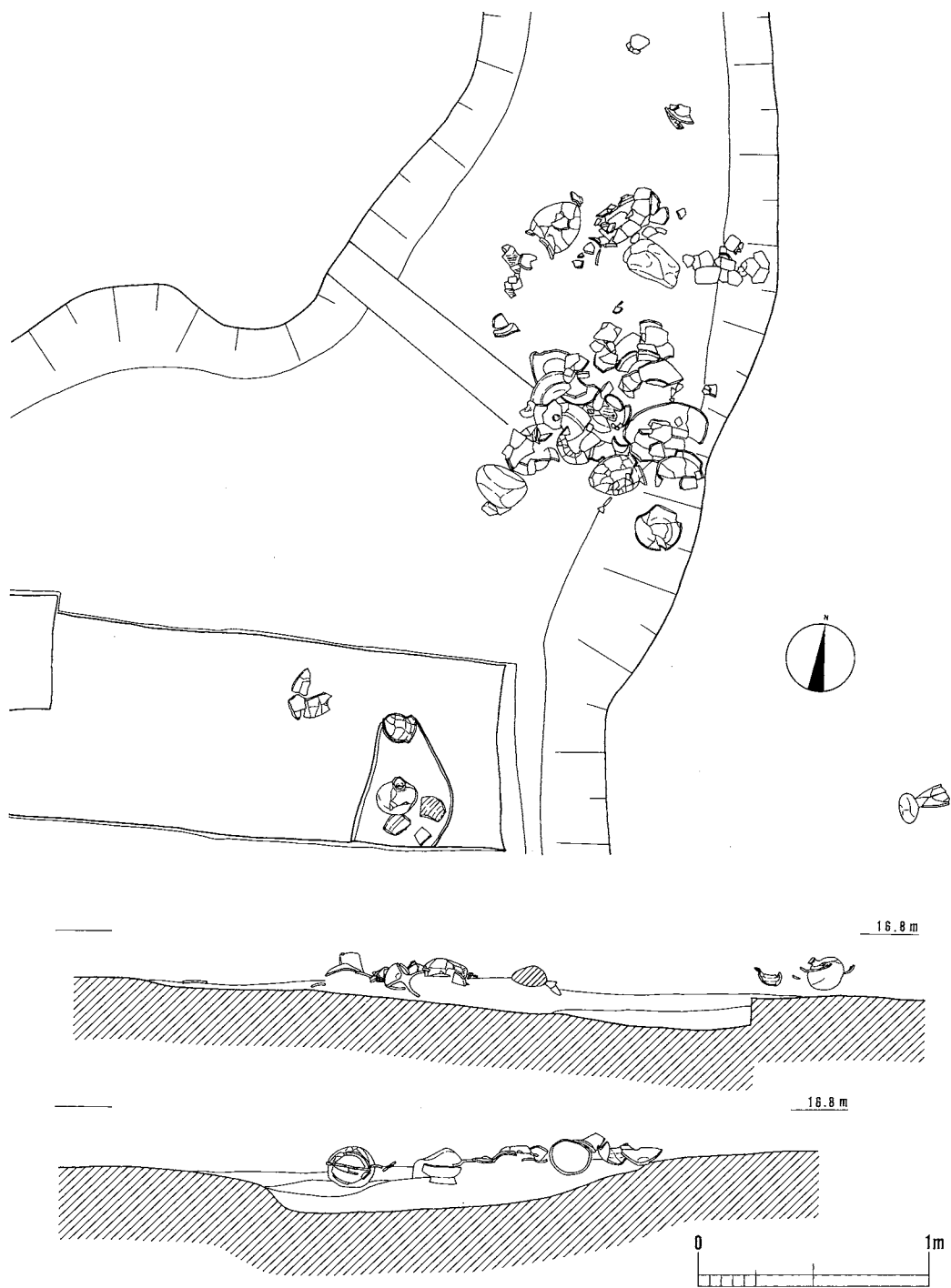
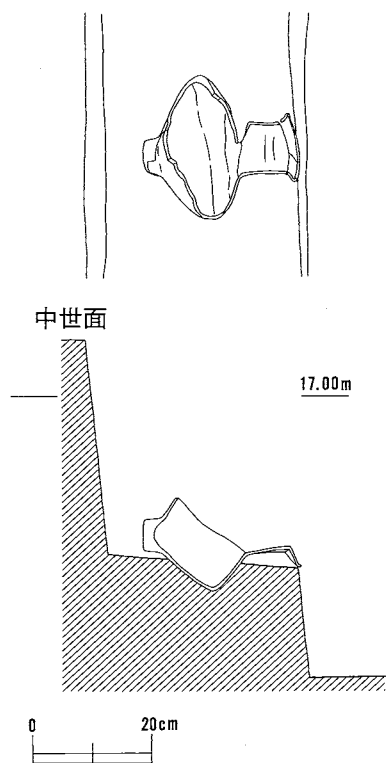


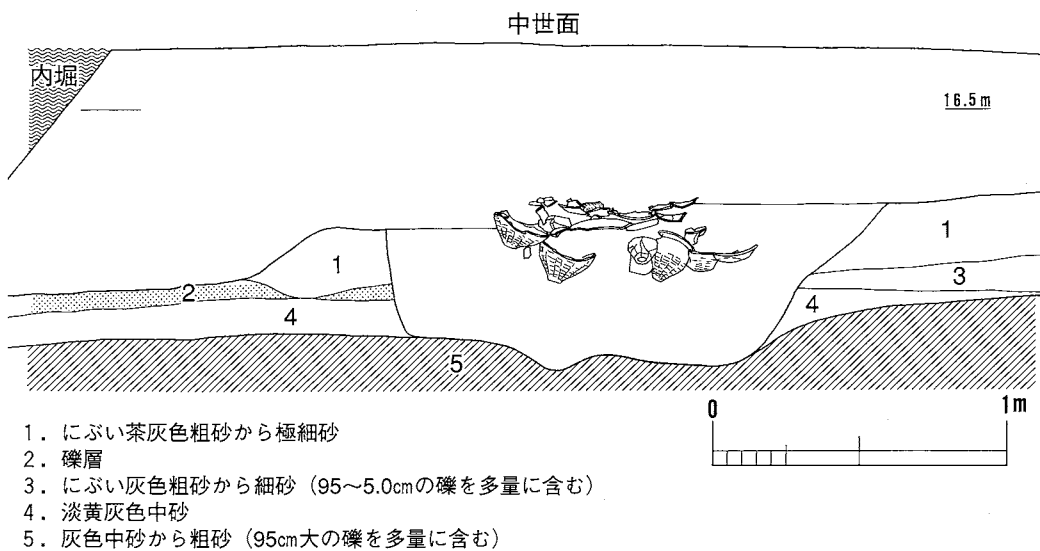
插图60 C<sub>2</sub>地区古式土師器出土状况细部



砂礫層上面に弥生時代中期土器片が出土している。



挿図61 N2A地区下層トレンチ  
古式土師器出土状況



1. にぶい茶灰色粗砂から極細砂
2. 礫層
3. にぶい灰色粗砂から細砂（95～5.0cmの礫を多量に含む）
4. 淡黄灰色中砂
5. 灰色中砂から粗砂（95cm大の礫を多量に含む）

挿図62 C1地区Pc区内堀コーナー古式土師器出土状況

### 第3節 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構はS<sub>3</sub>地区Ⅲ面において、調査した下層溝がある。Ⅱ面の遺構調査時に空中写真や写真用足場上からの観察において溝状遺構の発見をしたもので、調査の都合上、十分に調査面積を確保出来ずに、溝を中心にのみ発掘調査を行った。

下層溝はS<sub>3</sub>地区Ⅲ面として、Ⅱ面の遺構調査後に溝の方向を追跡するトレンチ調査として東西に設定し、挿図36に見るとおり、やや蛇行はするが直線的に東西走行し、幅約2.5m、長さ約50mを確認している。また、深さは約50cmで「U」字形を呈している。調査区の中央部にある下層の礫層をも掘抜いており、人工的な溝である。溝の下層には砂が厚く堆積しており、溝底近くから奈良時代後半の須恵器杯蓋などが出土した。なお、溝を掘削した時の土を溝の両側に積み上げ畦状を呈しており、周辺に水田を想定できる。このことは、平安時代後期に開削され中世鵜荘を潤したと考える灌漑用水としての荒河井堰に遡る古代鵜荘への灌漑用水の役目が考えられ、西端は現林田川から取水し、東南へ溝を走行させている。また、溝は調査した西端から約32mのところ、南に直角に折れて分岐している。溝幅は約1mと細くなり、約17m南のところ、計画性のある溝と言える。調査を溝の追求のみとしたので周辺に展開している水田遺構は不明であるが、溝の両側には断面観察のみであるが水田土壌が確認されており、また、上層の東北隣接部で確認された平安時代後期以降に埋没した水田遺構からも証明される。

そして、付図1や挿図40にみるとおり、S<sub>3</sub>地区、C<sub>4</sub>地区でも下層溝を検出しており、下層水田遺構の広がりとの関係で扱っている。

なお、古墳時代後期から奈良時代・平安時代前半の須恵器片はN<sub>1</sub>地区・N<sub>2</sub>A地区・N<sub>3</sub>地区・C<sub>1</sub>地区・C<sub>2</sub>地区・C<sub>4</sub>地区・S<sub>1</sub>地区・S<sub>2</sub>地区・S<sub>3</sub>地区で若干出土しているが遺構に結びつくものはS<sub>3</sub>地区Ⅲ面下層溝のみである。

## 第4節 平安時代の遺構

奈良時代の遺構のS<sub>3</sub>地区Ⅲ面下層溝が揖保川・林田川による段丘崖の成立による機能を果たさなくなり、しかも洪水砂のために徐々に埋没していく中で、下層溝から取水するのではなく、より上流からの水系を確保し、経営されている水田が中世遺構面の下に発見されている。段丘崖の成立により、より下流域への大規模な取水のため荒河井堰が設けられたと推定され、下層溝の南に現代まで続く溝群の開削は平安時代まで遡る。水田跡と荒河井堰の溝とを記述する。

### 1. 水田跡

本遺跡の調査で水田土壌を確認したのは調査区（挿図63）とC<sub>4</sub>地区の南西部を中心として地区だけであり、他の地域ではまったく確認できなかった。調査区の範囲は、C<sub>3</sub>の南東隅・S<sub>1</sub>の東端・S<sub>3</sub>の北東隅とS<sub>4</sub>の全域の地区であり、具体的には筑紫大道以南、SE12・13を結ぶ南北線以東、SK98以北に限られた約650m<sup>2</sup>の範囲である。水田面は調査区を越えてさらに東側の地区に広がる状況を示している。こうした水田面（水田土壌層）が確認できるのは下層の基盤礫層が低くなっている範囲に限られ、そこにたまった土壌を耕作土として耕していたようである。逆にこの基盤礫層の高い部分は水田としては利用できないため、生活域として利用されており、水田域に近接する所まで建物跡や墓跡が営まれている。

水田面を覆う洪水砂は10cm以上に及ぶ厚さであり、水田土壌層自体もかなり土壌化しているため水田面の平面的な検出は比較的容易であった。水田面の精査の結果、S<sub>1</sub>からS<sub>4</sub>の地区にかけてほぼ南北の方向に向いて走る畦畔状の高まりを検出した。その方向は現水田畦畔とまったく同一の方向を示している。この遺構はおそらく水田畦畔であり、幅約50cm、現長で約17mを計るが、南端は調査区外へと伸び北端は大道の南側溝によって切られている。さらに畦畔の両側には極浅い溝状の遺構が伴っている。これも畦畔と同時に機能していた水路と思われる。北端が高く南に低くなっている。この水路の北端は、南側溝を越えた大道の道路敷き（C<sub>3</sub>地区）にも見られるため大道南側溝以北から水を引いて来ていたものと思われるが、その先端が15世紀以降の内外堀と重複するため、南内堀もしくは東外堀の下層にかつて存在していた用水路から取水したのか明確なルートは限定できない。ただ水田跡より海拔の低くなる荒河井から用水を得たとは考え難いため、当然大道南側溝以北からの用水と思われる。また、S<sub>1</sub>・S<sub>4</sub>地区に見られる水路の幅は西側が約70cmであるが、東側は若干前後する幅をもっている。

水田面には畦畔と水路以外に、犁跡と思われる細長く浅い溝状の遺構が多数確認できる。この犁跡は畦畔を挟んだ両側の水田面に見られるが、特に西側のものはかなり顕著に確認することができる。西側の犁跡は幅約10cm内外であり、長さも40cm前後のものが多い。ただ基本的には畦畔にそって移動したであろうと思われるため、断続的に見える溝状の遺構からもある程度

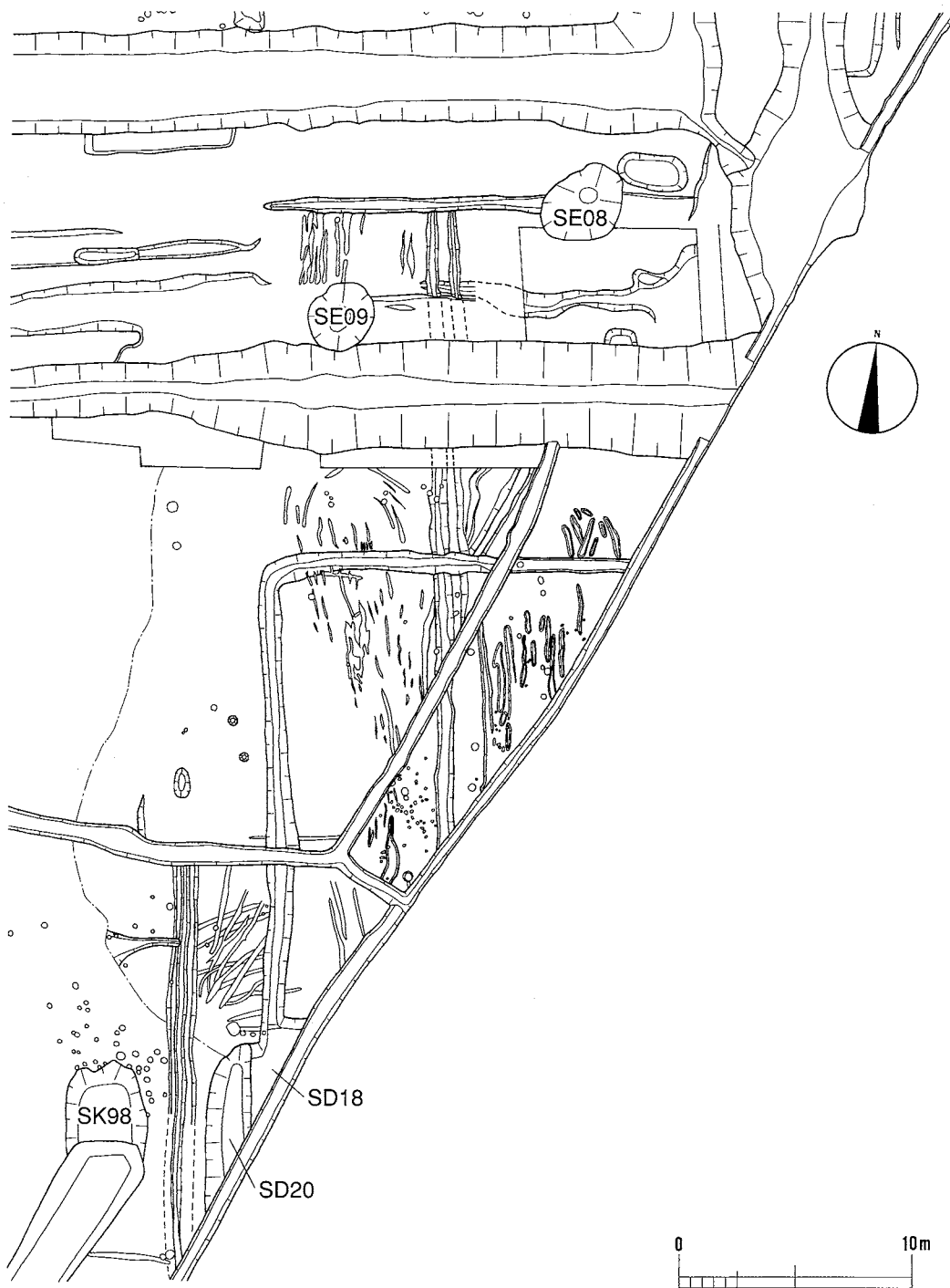


插图63 S<sub>1</sub>・S<sub>3</sub>・S<sub>4</sub>地区下層水田跡

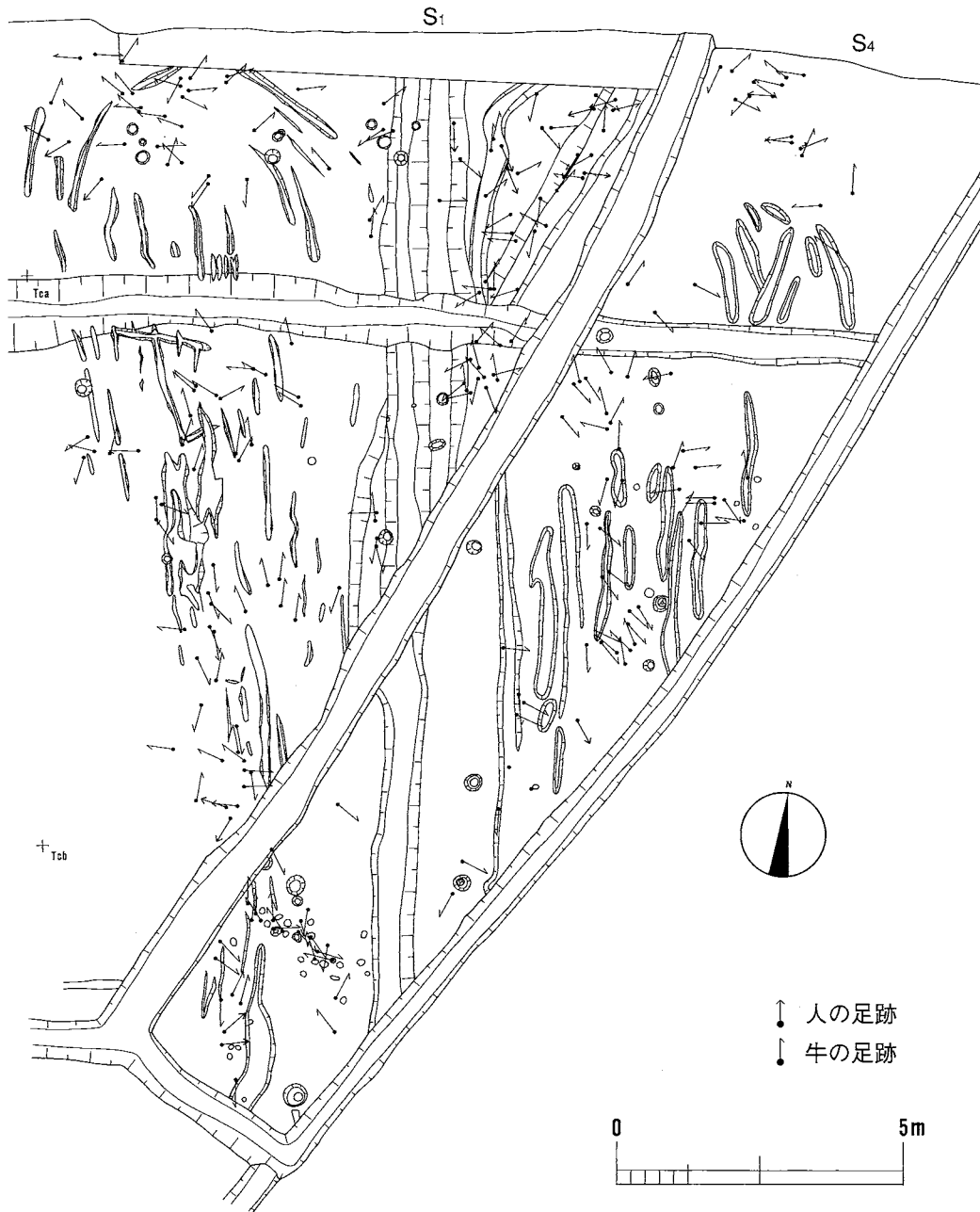
の犁の動きを復元することができる。特に大道の南側溝際ではこの犁跡が半径2 m強の大きさで弧を描いており、犁が反転していった状況がうかがえる。これはかつて大道の南側溝がある地点に東西方向の畦畔があったために生じた現象と思われる。畦畔に沿って動いたはずの犁も反転するために北端では大きく東西に膨らんでおり、詳細に見ると瓢箪型を呈しながら犁が耕していったことが分かる。東側の犁跡は西側のものに比べるとかなり幅が広がっており、明らかに耕作者が異なっていたものと思われる。ただこちらは北端で犁跡が確認されていないため反転の状況は何えないが、最も北側にある犁跡に弧を描きはじめようとしている様子が見られるため、西側同様反転していたものと思われる。

東側の水田面は調査範囲が狭いため断定できないが、西側で見るとかぎり犁跡の見られる範囲が畦畔から約10mまでであり、長地型に地割りされた水田を耕作していた可能性が高い。

S<sub>3</sub>地区の北東部には、上記した犁跡とは方向の異なる犁跡が2種類見られる。そのうち東西方向を示しているのは上記の犁跡とほぼ直行するものであるため、同一地割りに基づく別の水田を耕作した犁の痕跡と考えられる。これと大きく方向が異なり、北東から南東の方向を示す犁跡は、この下層に見られる8世紀後半の水路に直行する方向を示すため、一段階古い時期の水田面が露出していた可能性がある。東側の水田の北西部にも方向の異なる畦畔状の帯が見られるが、この方向とほぼ一致している。またこの畦畔状遺構の上にも多くの足跡があるため、やはり本水田址よりも古い段階の水田遺構が下層にあるものと思われる。

水田面には犁跡と共に多くの偶蹄類の足跡が検出できる。この足跡はその大きさと犁跡の存在を考え合わせると、牛のものと思われる。この偶蹄類の足跡に混ざって少数ではあるがヒトのものと考えられるものも確認されている。当然のことながら、この水田を耕作した主の足跡であろう。この2種類の足跡からは規則正しい足の運びを想起することはできないが、大まかな動きは挿図64に示した足跡の方向から推定できる。西側の水田ではこれらの足跡はまず畦畔横の南端から北に向かって動き、大道の南側溝の手前（かつてここには畦畔があった）で反転し、再び南に向かって移動していったことが分かる。東側の水田では畦畔の横の部分にしか確認されていないが、北から南に向かって動いていることが分かる。ここでも北端の足跡が西から南を向く方向を示しているため、反転する犁跡はないものの西側の水田同様左に反転する唐犁耕がなされていたものと思われる。（犁頭部の出土例などからみても、右反転のものは少なく、その多くは左反転をするための犁頭のようなものである）

この水田遺構の時期であるが、耕作土層を覆っている洪水砂の中にはほとんど土器が含まれていないため、その年代を確定することは非常に困難な状況にある。土層関係から類推するならば、14世紀代の遺構が洪水砂の上に築かれており、下層には前記したとおり8世紀後半と推定される方向の異なる水路を伴った水田遺構（？）が存在するため、本水田遺構の時期はその間に属することとなる。遺跡全域の土層関係・前後の包含層に含まれる土器の時期等から推



挿図64 S<sub>1</sub>・S<sub>4</sub>地区水田跡・犁跡と牛および人の足跡の方向

し量ると、12世紀代取り分けその後半に当てはめるのが最も妥当なように思われる。

## 2. 荒河井堰の溝（荒河井）

奈良時代の土器が溝底に残るS<sub>3</sub>地区Ⅲ面下層溝が用水として機能しなくなった時点、それは揖保川・林田川による段丘崖形成による水利の変化を伴った。

平安時代後期の段丘崖形成により従来の取水では水が廻らなくなり、新たに林田川からの水口を設けた。つまり、荒河井堰は少なくともこの時期には成立していたと考える。

C<sub>4</sub>地区（挿図38）・S<sub>2</sub>地区（挿図20）・S<sub>3</sub>地区（挿図34）それぞれの調査区の南端部で重複する溝を何条も確認した。いずれも、現代の石積み溝の下層に位置し、水系の変化、時期の変遷により改修・移設を続けたものである。

現代の溝は、龍野市と揖保郡太子町との境界溝となっており、下流の太子町馬場地区・阿曾地区の水田を潤している。つまり、平安時代以降この水利は生き続け、現在に繋がっている。各溝が廃棄された時に溝内に土器片が捨てられている。新しい溝を構築する際に埋め立てに土器片を使用したとも考えられる。

S<sub>3</sub>地区では、一番北側に位置する中世後半（14世紀後半から15世紀代）のSD01と現代石積み溝との間に平行して走行する溝4・5などから備前焼播鉢、須恵器椀や白磁碗片が出土しており、少なくとも12世紀代までに遡ることは確実である。溝間の前後関係は遺構では判断しにくい、含まれる遺物でそれを補完した。

C<sub>4</sub>地区の調査では、ほぼ現代の荒河井堰と近くに位置するために、溝の起点部を押さえることができると思われたが、4本の溝を前後して確認した。この溝では殆ど遺物が発見されなかったが、溝はS<sub>3</sub>地区の溝へ繋がる。

また、S<sub>2</sub>地区でも溝は確認しているが、他の地区と違って現代の溝で主要部が壊されており不明確であった。

3地区とも調査地区の南端にあたり、すぐ南側が既に道路として工事が終わり、盛土して橋脚台が完成しているために、荒河井堰溝の十分な調査をすることはできなかった。

## 第5節 中世の遺構

中世の遺構として柱・根石・柱掘り方・雨落ち溝から掘立柱建物跡が復元され、掘立柱建物跡や井戸、土壙を囲む方形区画溝があり屋敷が復元できる。また、墓・火葬跡などを囲む溝も考えられ寺あるいは三昧の施設を復元できる。時期が下ると幅4mを越す水を溜めていた堀を廻らす方形館跡がある。絵図にみる筑紫大道に比定できる空間地がある。以下にそれぞれの遺構について述べる。

### 1. 掘立柱建物跡

調査時に多くの柱穴が検出され、根石があり柱通りのあるものについては現地で復元し、掘立柱建物跡（SB）としたが、他の多くは柱通りの一辺がしっかりとしているが他は不確定な柱列が多かった。自然堤防上に位置し、かつ洪水砂に覆われる残存状況が悪く、時代が重なっているため調査は難渋した。

柱穴列について主軸方向が異なる掘立柱建物跡が復元されることが現地で理解していた。また、方形区画溝や堀が掘立柱建物跡を取り囲むように位置しているためその方向からも検討して掘立柱建物跡を81棟復元（N地区31棟、C地区35棟、S地区15棟）し、真北に対して主軸方向により5分類した。

A. N-2~5° - E……SB02、SB03、SB05、SB12、SB18、SB19、SB38 計7棟

B. W-2~0° - N-0~2° E

……SB01、SB04、SB06、SB07、SB09、SB11、SB13、SB14、SB15、  
SB16、SB17、SB20、SB21、SB22、SB31、SB41、SB47、SB51、  
SB57、SB80 計20棟

C. W-5~2° - N……SB08、SB10、SB23、SB24、SB25、SB28、SB29、SB30、SB32、  
SB33、SB34、SB35、SB36、SB46、SB48、SB50、SB54、SB55、  
SB58、SB59、SB62、SB63、SB65、SB67、SB70、SB71、SB72、  
SB76 計28棟

D. W-5~10° - N……SB26、SB27、SB37、SB39、SB40、SB42、SB43、SB44、SB45、  
SB49、SB52、SB53、SB56、SB60、SB61、SB64、SB66、SB68、  
SB69、SB73、SB74、SB75、SB77、SB78、SB81 計25棟

E. W-17° - N……SB79 1棟



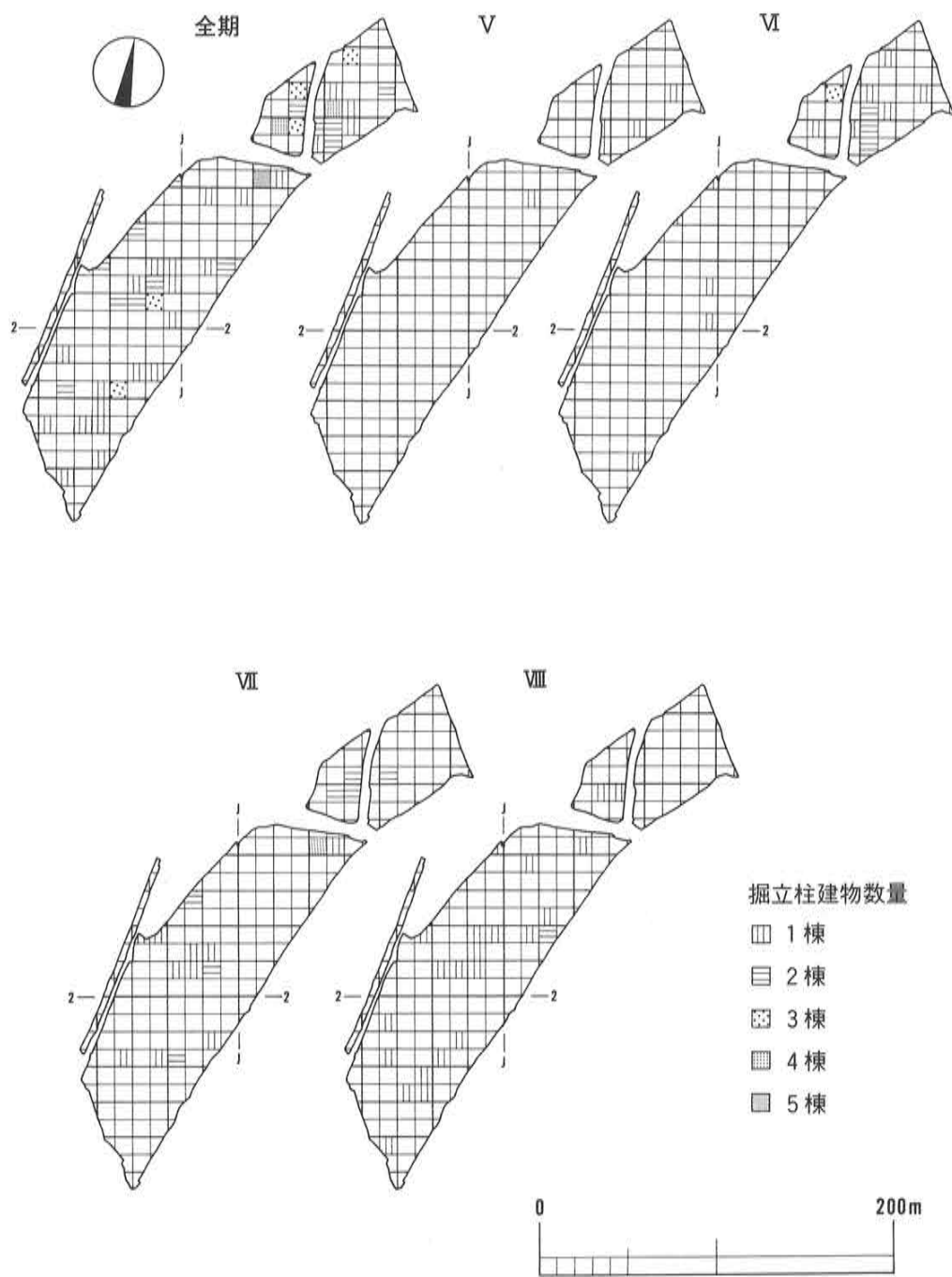
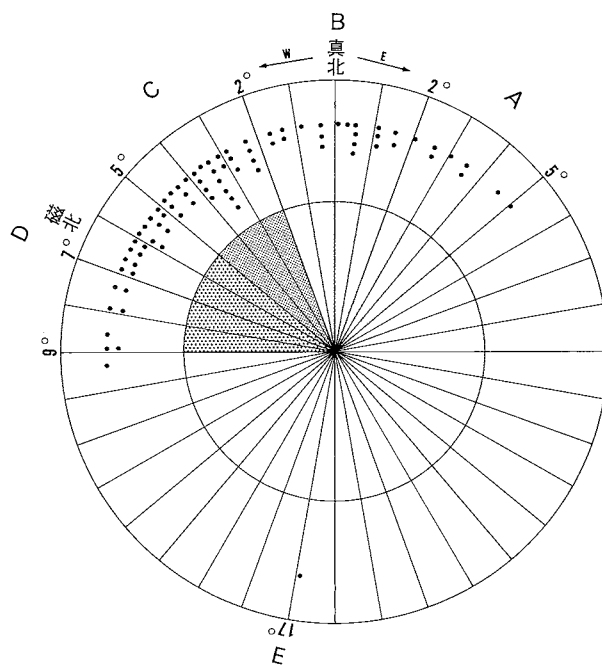


插图65 調査区と掘立柱建物数量



挿図66 掘立柱建物主軸方向

また、建物規模から25分類する。

- a. 1 × 1 間……SB02、SB32 計2棟
- b. 1 × 2 間……SB17、SB38、SB64 計3棟
- c. 1 × 3 間……SB26、SB33、SB51 計3棟
- d. 1 × 4 間……SB81 1棟
- e. 2 × 1 間……SB57 1棟
- f. 2 × 2 間……SB05、SB10、SB60、SB65 計4棟
- g. 2 × 2 間 + 1 × 1 間……SB25 1棟
- h. 2 × 3 間……SB03、SB19 計2棟
- i. 2 × 4 間……SB15、SB40、SB52、SB55、SB66、SB75、SB76 計7棟
- j. 2 × 5 間……SB30 1棟
- k. 3 × 1 間……SB22 1棟
- l. 3 × 2 間……SB18、SB36、SB70 計3棟
- m. 3 × 3 間……SB08
- n. 3 × 3 間 + 1 × 2 間……SB07 1棟
- o. 3 × 4 間……SB31、SB46、SB54、SB74 計4棟
- p. 3 × 5 間……SB59、SB79 計2棟

- q. 4 × 2 間……SB11 1 棟
- r. 4 × 3 間……SB01、SB27、SB72 計 3 棟
- s. 4 × 4 間 + 3 × 3 間……SB58 1 棟
- t. 4 × 5 間……SB09 1 棟
- u. 4 × 6 間……SB68 1 棟
- v. 4 × 7 間……SB69 1 棟
- w. 5 × 3 間……SB77 1 棟
- x. 5 × 4 間……SB63、SB71、SB78 計 3 棟
- y. 6 × 4 間……SB73 1 棟

SB67、SB43、SB44、SB61、SB81は調査範囲が充分でなく建物規模は変化する。

掘立柱建物跡主軸線の分類を含めると

[A a / SB02、A b / SB38、A f / SB05、A l / SB18]

Aは1 × 1 ・ 2 間、2 × 2 間 ・ 3 × 2 間のあまり大きくない建物である。

[B b / SB17、B c / SB51、B e / SB57、B i / SB15、B k / SB22、B n / SB07、  
B o / SB31、B q / SB11、B r / SB01、B t / SB09]

Bは1 × 2 ・ 3 間、2 × 1 ・ 4 間、3 × 1 間、3 × 3 間 + 1 × 1 間 ・ 3 × 4 間 ・ 4 × 2 ・  
3 ・ 5 間のやや大きめの建物もある。

[C a / SB32、C c / SB33、C f / SB10、SB65、C g / SB25、C i / SB55 ・ SB76、  
C j / SB30、C l / SB36 ・ SB70、C m / SB08、C o / SB46 ・ SB54 ・ CP / SB59、  
C r / SB72、C s / SB58、C x / SB63 ・ SB71 ・ SB78]

Cは1 × 1 ・ 3 間、2 × 2 間 + 1 × 1 間、2 × 2 ・ 4 ・ 5 間、3 × 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 間、4 ×  
2 間、4 × 4 間 + 3 × 3 間、5 × 4 間の規模が多様化する。

[D b / SB64、D c / SB26、D d / SB81、D f / SB60、D i / SB40 ・ SB / 52 ・ SB66 ・  
SB75、D o / SB74、D r / SB27、D u / SB68、D v / SB69、D w / SB77、D y / SB73]

Dは1 × 2 ・ 3 ・ 4 間、2 × 2 ・ 4 間、3 × 4 間、4 × 3 ・ 6 ・ 7 間、5 × 3 間、6 × 4 間  
の規模が大きくなる。

[E P / SB79]

Eは3 × 5 間の1 棟のみである。

さらに柱間の規模によって8分類できる。

ア. 145cm    イ. 155cm    ウ. 175cm    エ. 190cm    オ. 215cm    カ. 280cm

キ. 300cm    ク. 320cm以上

つまり尺 (30.3cm) 寸 (3.03cm) に直すとほぼ

ア. 4尺8寸　イ. 5尺　ウ. 5尺8寸　エ. 6尺3寸　オ. 7尺　カ. 9尺  
ク. 10尺5寸以上となる。

最短で75cm、最長で450cmを測り、ウ. エ. の175～190cm柱間が最も多い。

ただ、当間の建物は少なく、一柱通りが当間に近い柱間を持つ掘立柱建物跡はSB07、SB20、SB31、SB35、SB48、SB49、SB54、SB55、SB58、SB79である。この11棟を検討するとア～カの柱間を持つ。

柱穴に根石（柱根固め石）が残っているのはSB05、SB13、SB16、SB31、SB32、SB35、SB36、SB38、SB43、SB44、SB48、SB50、SB51、SB54、SB59、SB61、SB63、SB64、SB67、SB69、SB73、SB77、SB81の23棟である。中でもSB13、SB32、SB77は良く残っており、SB32は柵SAと門を構成している。

柱穴掘り方の大きさはSB32のように径80cmと大きいものから径30cmと小さいものまで在り、本来の掘立柱建物が立っていた地面（生活面）が洪水や後世の人為的な削平によって不明確となっていた。ただSB50とSB51の前後関係が土層断面によって理解でき、かつ根石が残っており柱根の大きさも約径20cmと復元できる。他の柱穴の根石で掘立柱建物が火災で消失したものがあ、根石の柱当たりの回りが焦げついている事から約径18cmの柱を復元することができる。先にも述べたように当時の地面をなかなか検出できないため、そして地形の起伏が古くからあるため柱穴をどの程度掘り、どのような規模・重量感のある上屋を想像することは難しい。堀には瓦類が多く発見されているが軒瓦は1点の出土のみであり、瓦を葺いた建物はない。

掘立柱建物跡の年代は柱掘り方内の遺物や後述する方形区画溝や堀で巡らされた屋敷・館跡と考えるにおいて掘立柱建物跡の主軸線分類のAは13世紀後半、Bは12世紀末～13世紀前半、Cは14世紀～15世紀前半、Dは15世紀後半～16世紀初頭、Eは平安時代荒河井堰溝の方向に規定されるため少なくとも12世紀前半までの時期を与えたい。建物の性格付けは後論に譲る。

柱穴 N<sub>2</sub>A地区・S<sub>3</sub>地区には柱穴を調査すると瓦器椀、須恵器甕・椀・皿の完形品を割ったりして柱を抜いたあとを丁寧に埋めている状況が観察される（N<sub>2</sub>APit35）。また、柱穴の根石を残し、その上に川原石を重ね埋めている。

C<sub>2</sub>地区の柵を持つ門と復元しているSB32の柱穴は60×70cmと大きく25～40cmの深さの掘方に40×50cm大の高さ10～20cmの石を使用している。しっかりした上屋がのる。同じ規模の石を使用した掘立柱建物はC<sub>1</sub>地区SB65がある。中央地区の北と南の門と考えても良い物である。地面が洪水により流失されており、根石が遺構検出面に顔を出してしまった物もあり礎石建物と間違うが掘立柱建物跡の柱穴である。ただ、掘立柱建物跡を復元する際にも述べたように根石を持つ柱穴で1棟分の掘立柱建物跡を復元することは難しい。

S地区では銭を柱穴から検出しているが、それが鎮壇・地鎮の行為を復元するに至らないが、柱穴に土器類を埋め込む行為と併せると鎮壇・地鎮を否定することはできない。

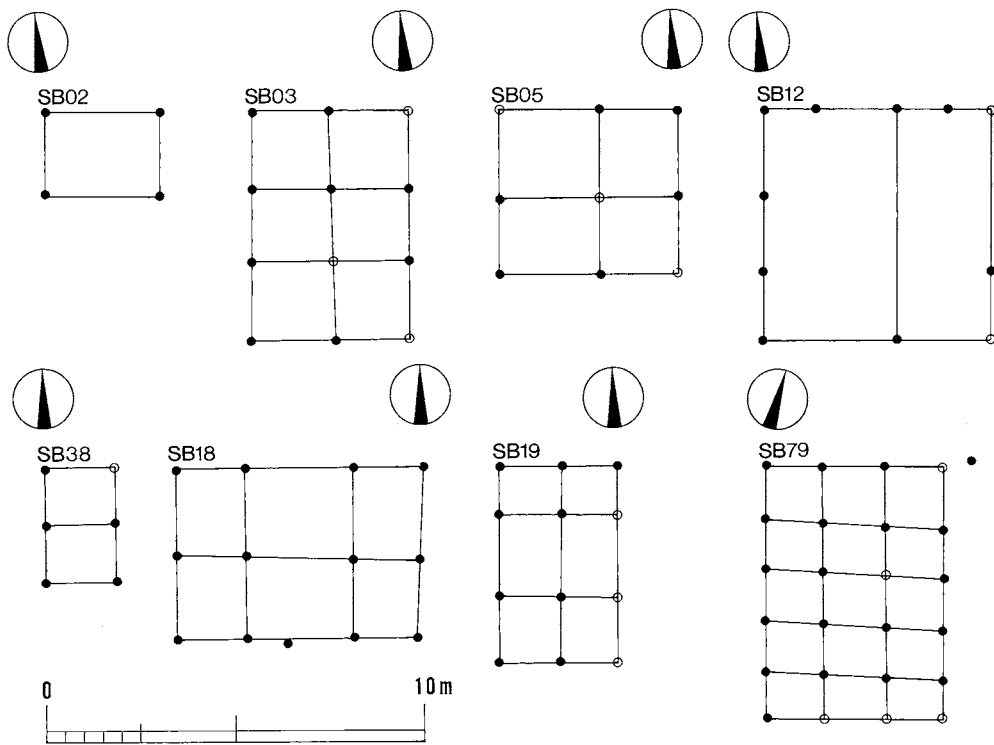
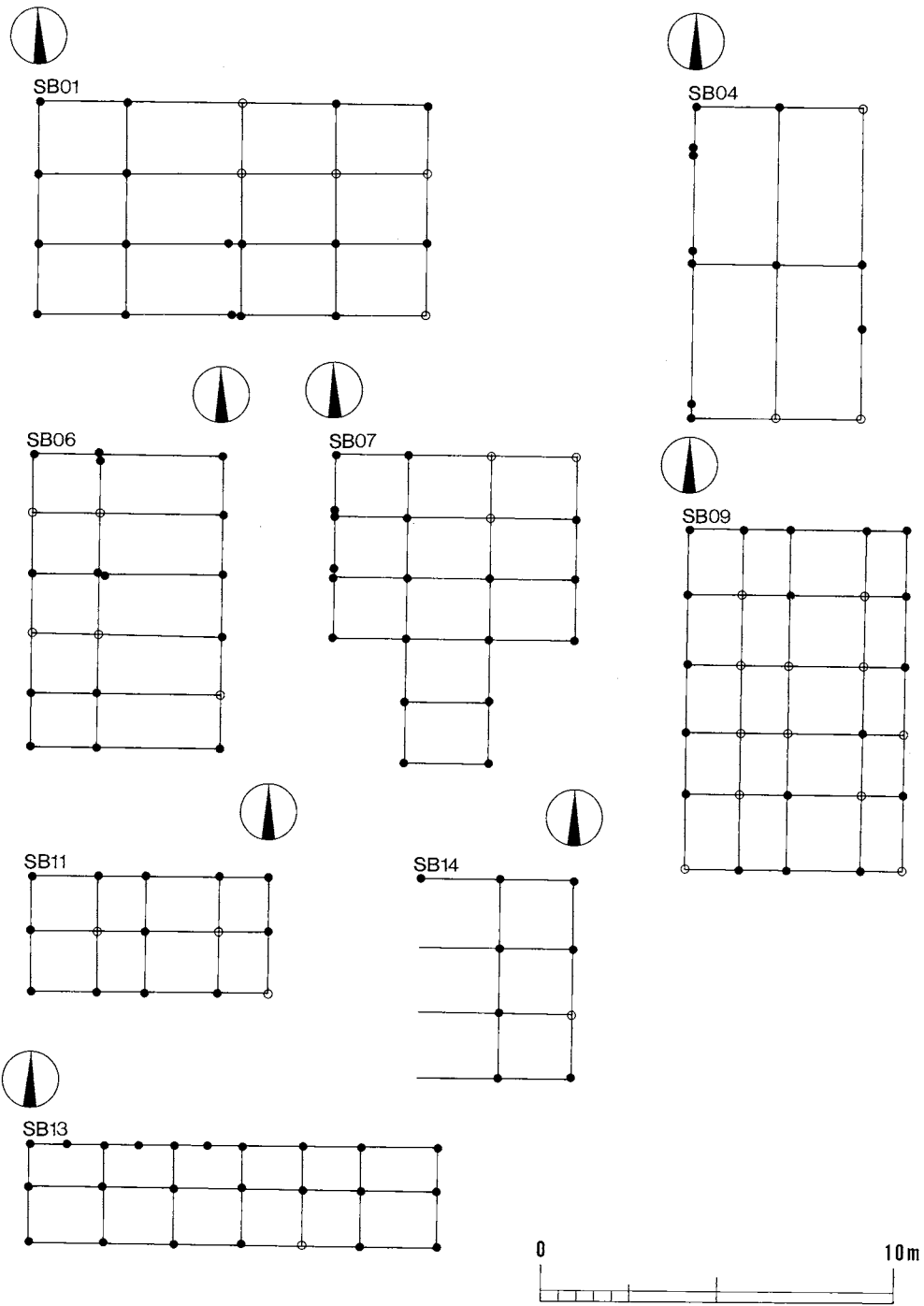


插图67 掘立柱建物跡 (1)



挿図68 掘立柱建物跡 (2)

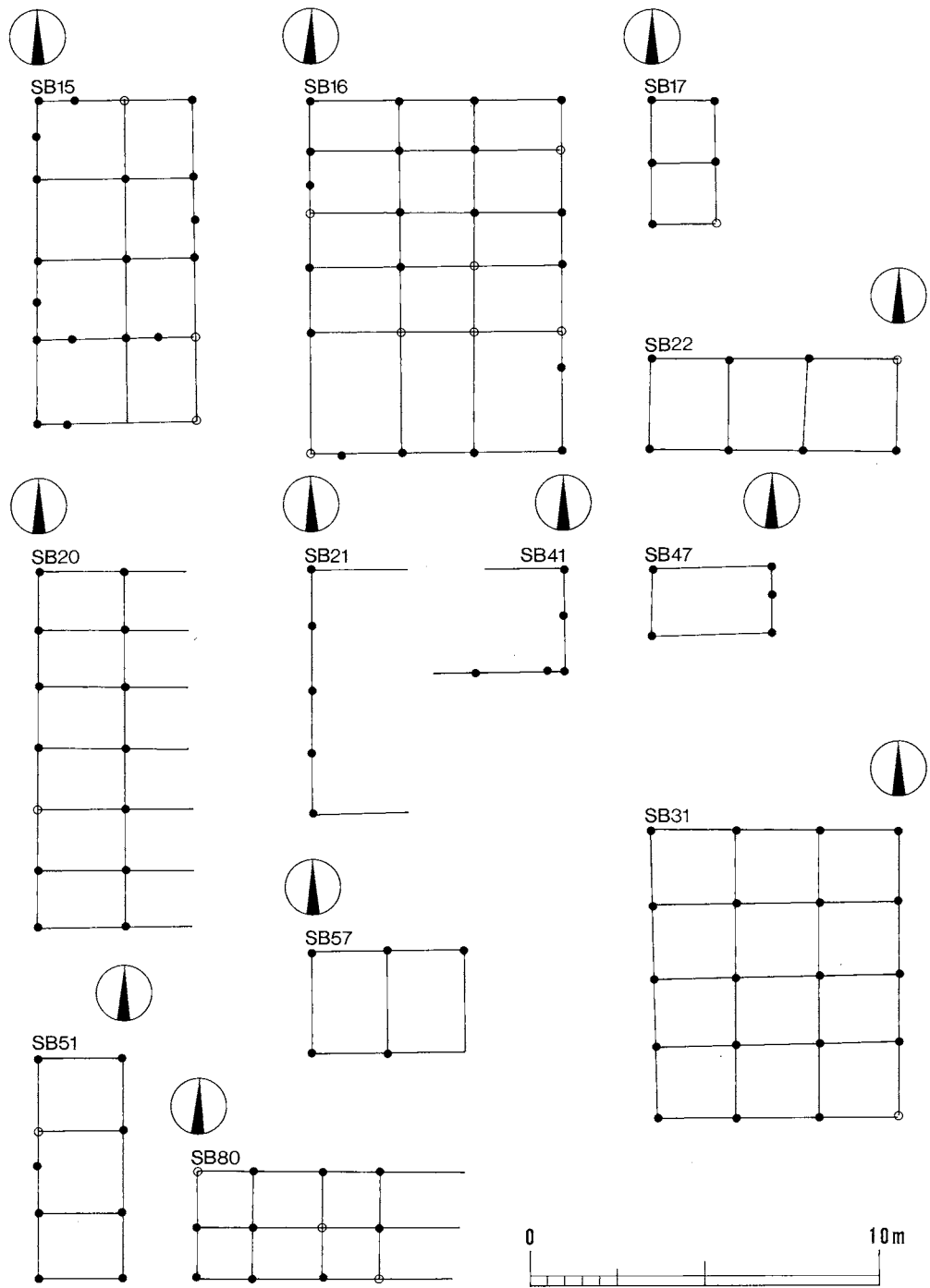


插图69 掘立柱建物跡 (3)

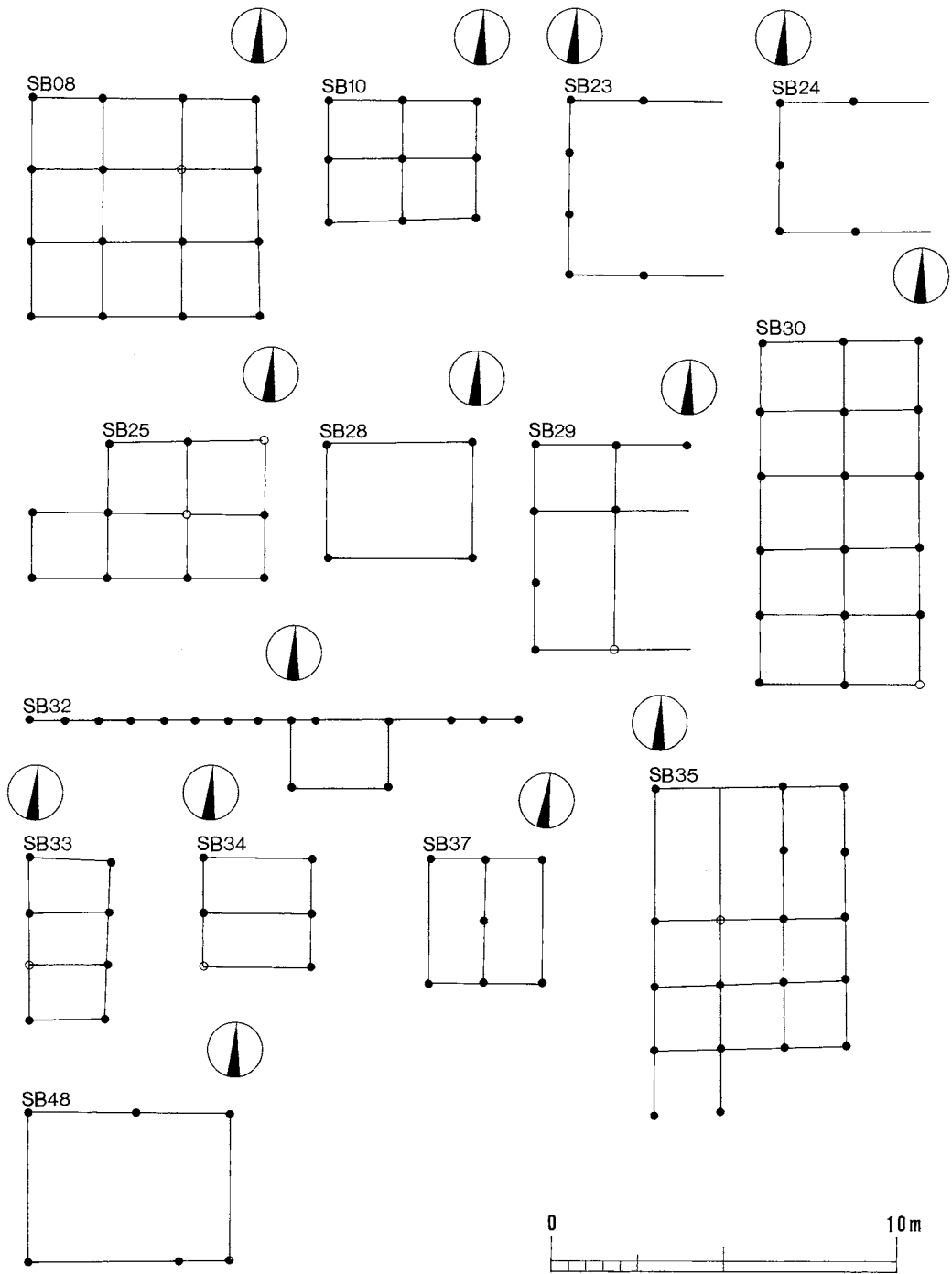


插图70 掘立柱建物跡 (4)



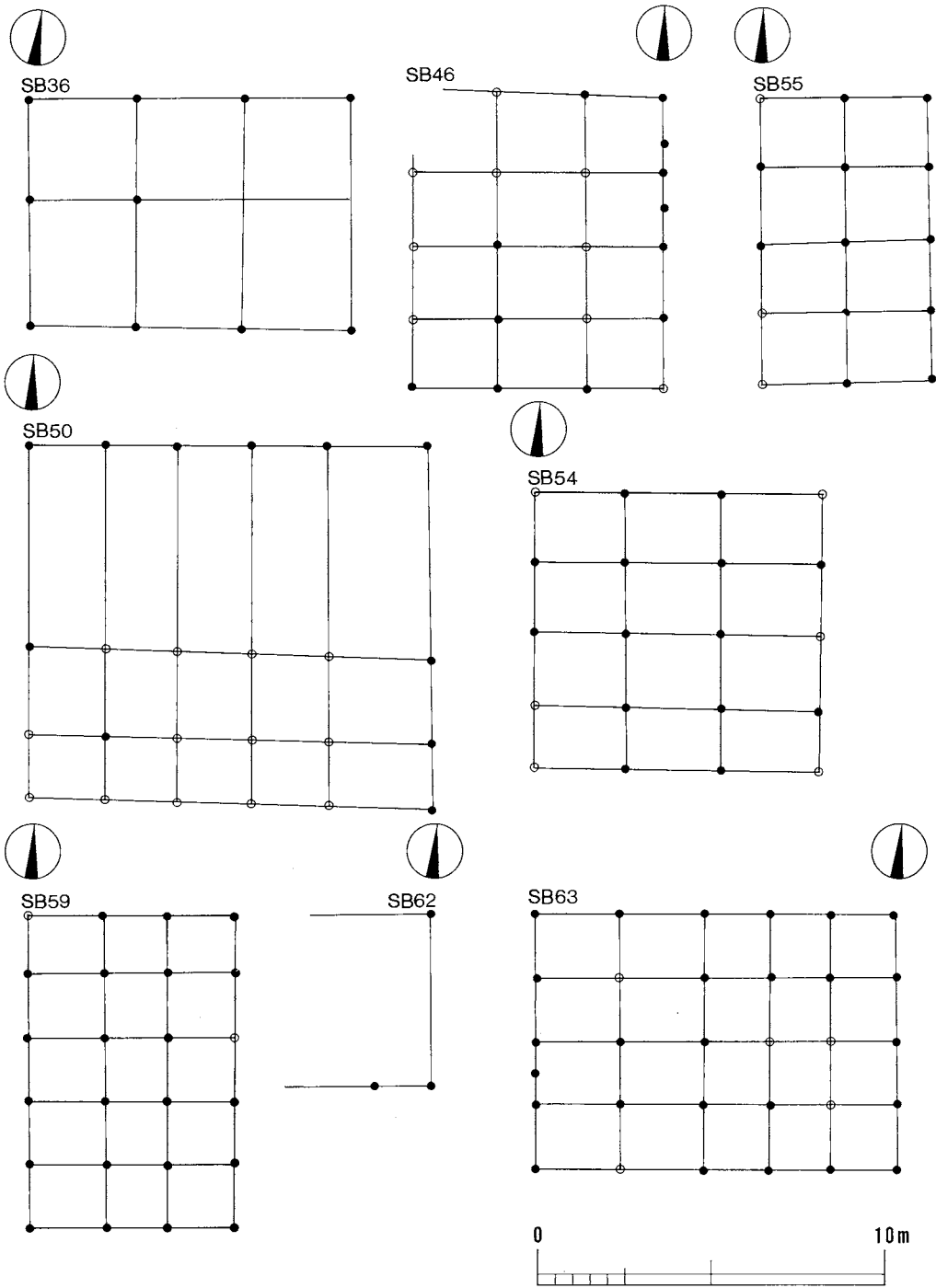


插图71 掘立柱建物跡 (5)

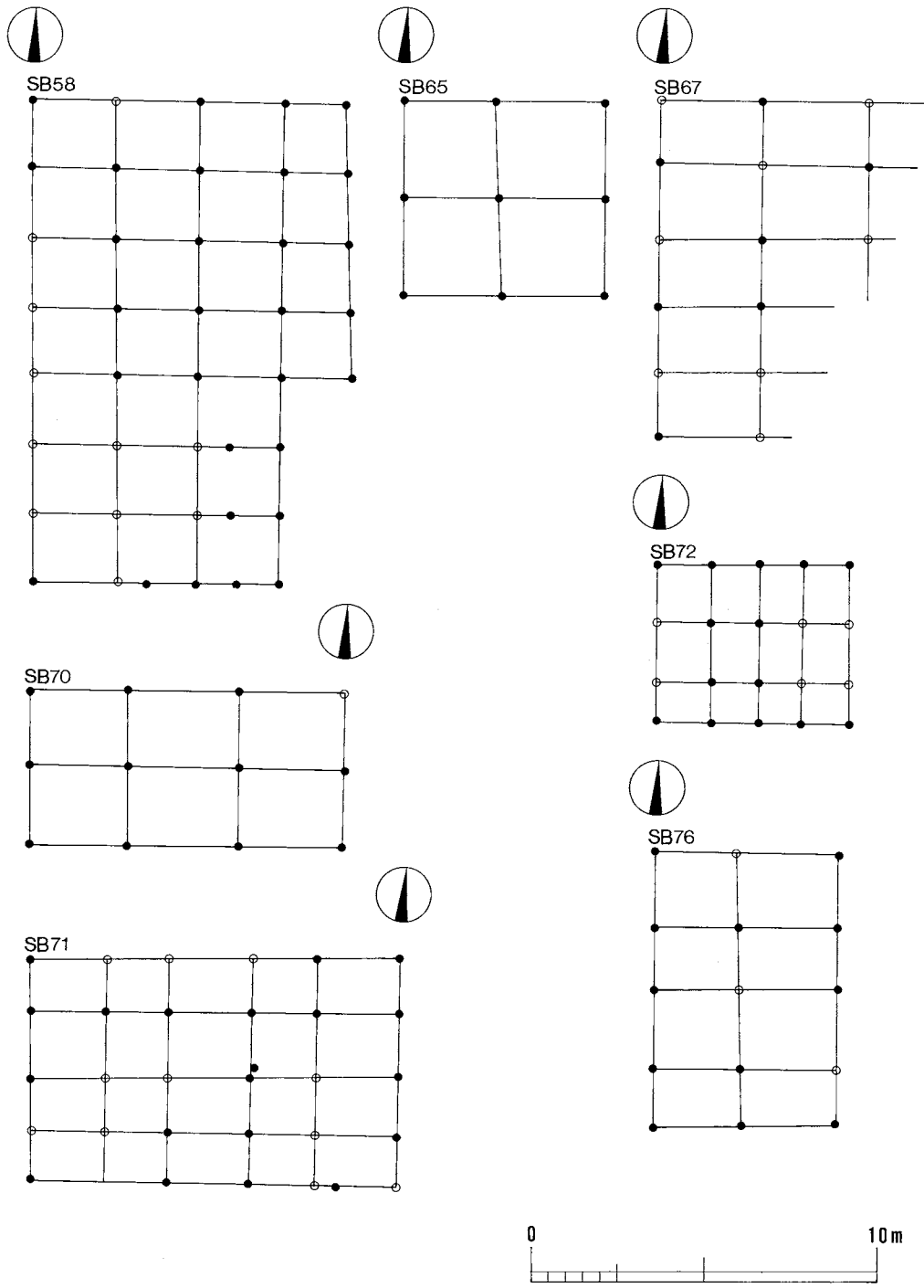


插图72 掘立柱建物跡 (6)

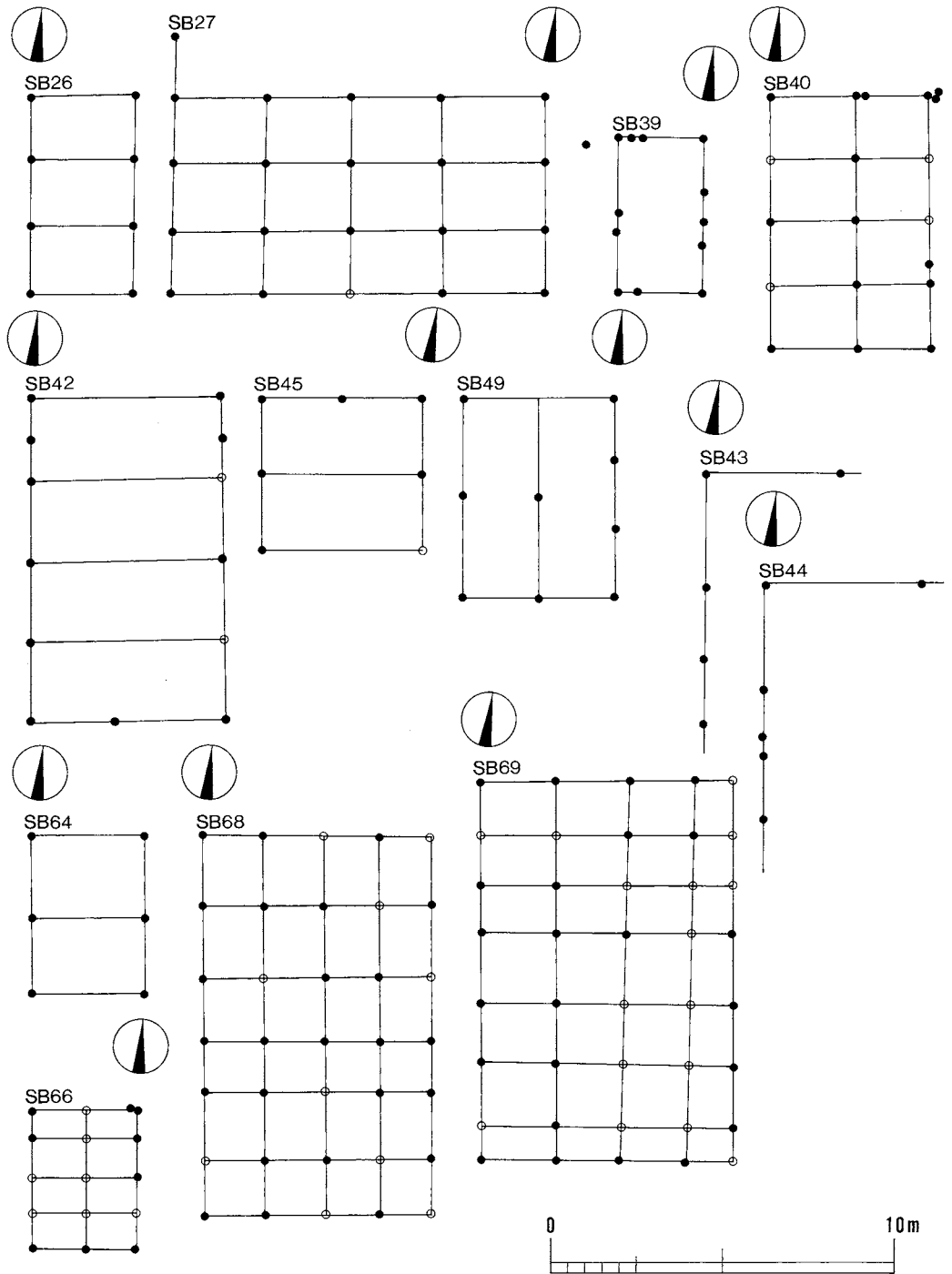


插图73 掘立柱建物跡 (7)

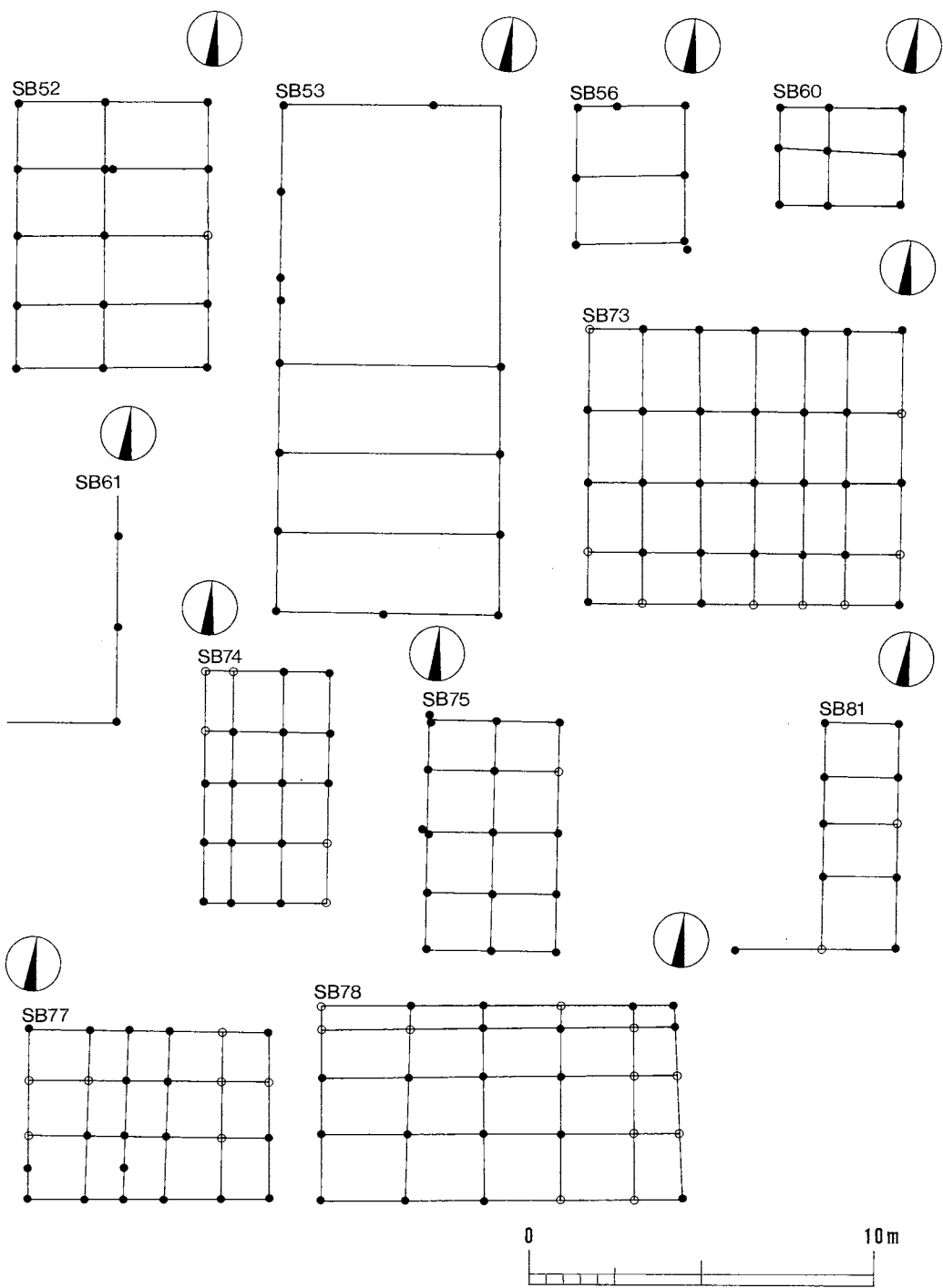


插图74 掘立柱建物跡 (8)

## 掘立柱建物集成

(真北N1° 37' E)

No.	建物番号	地区名	建物規模	建物方向	柱間	備考
1	SB01	N <sub>1</sub>	4 × 3 間	N1° 37' E	197~322	B
2	SB02	N <sub>1</sub>	1 × 1 間	N4° 37' E	222~325	A
3	SB03	N <sub>1</sub>	2 × 3 間 + 1 × 2 間	N3° 37' E	192~225	A
4	SB04	N <sub>1</sub>	2 × 4 間	N0° 37' E	217~240	B
5	SB05	N <sub>1</sub>	2 × 2 間	N2° 37' E	200~267	A
6	SB06	N <sub>1</sub>	3 × 5 間	N0° 37' E	150~185	B
7	SB07	N <sub>1</sub>	3 × 3 間	N2° 07' E	172~242	B
8	SB08	N <sub>1</sub>	3 × 3 間	N3° 23' W	205~230	C
9	SB09	N <sub>1</sub>	4 × 5 間	N0° 23' W	132~215	B
10	SB10	N <sub>1</sub>	2 × 2 間	N3° 53' W	167~215	C
11	SB11	N <sub>1</sub>	4 × 2 間	N1° 37' E	125~207	B
12	SB12	N <sub>1</sub>	2 × 3 間	N5° 07' E	175~250	A
13	SB13	N <sub>1</sub>	6 × 2 間	N1° 23' E	125~210	B
14	SB14	N <sub>1</sub>	2 × 3 間	N0° 23' W	182~230	B
15	SB15	N <sub>1</sub>	2 × 4 間	N1° 07' E	202~257	B
16	SB16	N <sub>1</sub>	3 × 6 間	N1° 38' W	147~275	B
17	SB17	N <sub>1</sub>	1 × 2 間	N0° 37' E	175~185	B
18	SB18	N <sub>1</sub>	3 × 2 間	N3° 37' E	170~280	A
19	SB19	N <sub>1</sub>	2 × 3 間	N3° 07' E	127~215	A
20	SB20	N <sub>2</sub> A	1 × 6 間	N1° 07' E	160~250	B
21	SB21	N <sub>2</sub> A	× 4 間	N0° 37' E	160~182	B
22	SB22	N <sub>2</sub> A	3 × 1 間	N0° 22' E	212~265	B
23	SB23	N <sub>2</sub> A	1 × 3 間	N3° 53' W	155~212	C
24	SB24	N <sub>2</sub> A	1 × 2 間	N2° 53' W	182~220	C
25	SB25	N <sub>2</sub> A	2 × 2 間 + 1 × 1 間	N4° 23' W	187~230	C
26	SB26	N <sub>2</sub> A	1 × 3 間	N6° 38' W	185~295	D
27	SB27	N <sub>2</sub> A	4 × 3 間	N5° 08' W	185~292	D
28	SB28	N <sub>2</sub> A	2 × 2 間	N3° 53' W	165~212	C
29	SB29	N <sub>2</sub> A	2 × 3 間	N3° 08' W	190~230	C
30	SB30	N <sub>2</sub> A	2 × 5 間	N2° 23' W	175~242	C

No.	建物番号	地区名	建物規模	建物方向	柱間	備考
31	SB31	N2A	3 × 4 間	N1° 07' E	195~235	B
32	SB32	C2	1 × 1 間	N2° 23' W	197~280	C
33	SB33	C2	1 × 3 間	N4° 53' W	147~217	C
34	SB34	C2	2 × 2 間	N4° 53' W	155~160	C
35	SB35	C2	3 × 4 間	N3° 08' W	177~192	C
36	SB36	C2	3 × 2 間	N3° 53' W	292~365	C
37	SB37	C2	2 × 2 間	N6° 08' W	160~180	D
38	SB38	C2	1 × 2 間	N2° 37' E	150~185	A
39	SB39	C2	1 × 2 間	N5° 23' W	225~247	D
40	SB40	C1	2 × 4 間	N5° 38' W	180~252	D
41	SB41	C1	1 × 2 間	N0° 23' W	137~255	B
42	SB42	C1	2 × 4 間	N6° 23' E	227~317	D
43	SB43	C3	1 × 3 間	N7° 23' W	180~387	D
44	SB44	C3	1 × 3 間	N6° 38' E	180~450	D
45	SB45	C1	2 × 2 間	N8° 53' W	220~235	D
46	SB46	C1	3 × 4 間	N2° 23' W	202~257	C
47	SB47	C1	2 × 1 間	N0° 53' W	175~190	B
48	SB48	C1	3 × 2 間	N3° 23' W	195~217	C
49	SB49	C1	2 × 3 間	N5° 53' W	180~222	D
50	SB50	C1	5 × 5 間	N3° 23' W	182~297	C
51	SB51	C1	1 × 3 間	N1° 38' W	185~242	B
52	SB52	C1	2 × 4 間	N5° 23' W	180~300	D
53	SB53	C1	2 × 6 間	N5° 08' W	230~310	D
54	SB54	C1	3 × 4 間	N2° 53' W	180~285	C
55	SB55	C1	2 × 4 間	N2° 23' W	197~245	C
56	SB56	C1	2 × 2 間	N7° 53' W	110~205	D
57	SB57	C1	2 × 1 間	N0° 07' E	217~290	B
58	SB58	C1	4 × 4 間	N2° 53' W	190~245	C
59	SB59	C1	3 × 5 間	N3° 38' W	165~220	C
60	SB60	C1	2 × 2 間	N6° 53' W	117~212	D

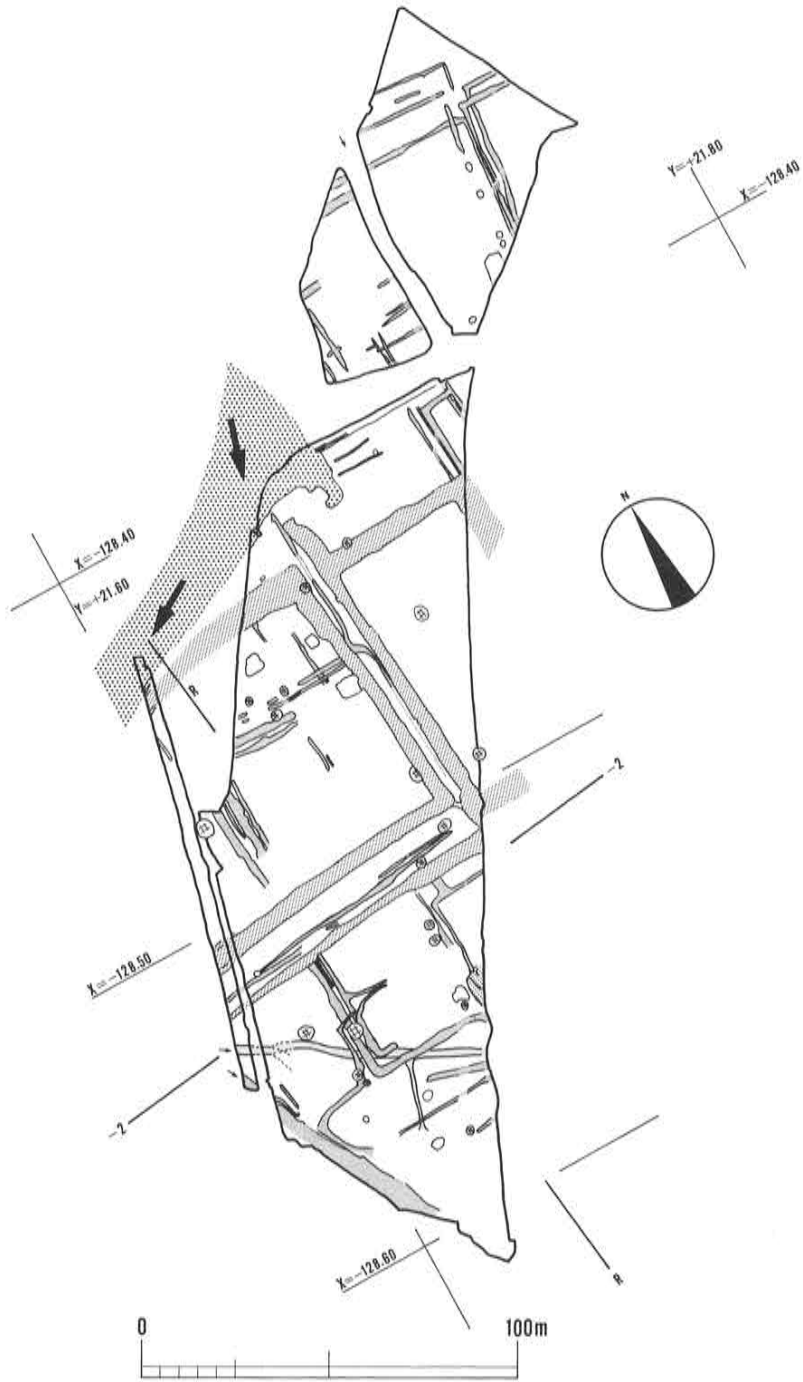
No.	建物番号	地区名	建物規模	建物方向	柱間	備考
61	SB61	C <sub>1</sub>	× 2 間	N6° 08' W	265~275	D
62	SB62	C <sub>1</sub>	1 × 3 間	N4° 08' W	157~165	C
63	SB63	C <sub>1</sub>	5 × 4 間	N4° 53' W	177~240	C
64	SB64	C <sub>1</sub>	1 × 2 間	N6° 23' W	220~327	D
65	SB65	C <sub>1</sub>	2 × 2 間	N4° 38' W	277~296	C
66	SB66	C <sub>1</sub>	2 × 4 間	N5° 23' W	82~155	D
67	SB67	S <sub>1</sub>	2 × 5 間	N 3° 23' W	180~310	C
68	SB68	S <sub>1</sub>	4 × 6 間	N6° 53' W	145~210	D
69	SB69	S <sub>3</sub>	4 × 7 間	N8° 53' W	97~217	D
70	SB70	S <sub>3</sub>	3 × 2 間	N3° 23' W	220~320	C
71	SB71	S <sub>3</sub>	5 × 4 間	N4° 23' W	147~237	C
72	SB72	S <sub>3</sub>	4 × 3 間	N4° 23' W	115~172	C
73	SB73	S <sub>3</sub>	1 × 4 間	N7° 53' W	140~240	D
74	SB74	S <sub>1</sub>	3 × 4 間	N5° 53' W	75~175	D
75	SB75	S <sub>3</sub>	2 × 4 間	N5° 53' W	145~187	D
76	SB76	S <sub>3</sub>	2 × 4 間	N3° 23' W	170~275	C
77	SB77	S <sub>3</sub>	5 × 3 間	N8° 38' W	110~187	D
78	SB78	S <sub>3</sub>	5 × 4 間	N9° 23' W	70~240	D
79	SB79	S <sub>3</sub>	3 × 5 間	N17° 08' W	125~165	E
80	SB80	S <sub>3</sub>	3 × 2 間	N1° 23' W	145~197	B
81	SB81	S <sub>3</sub>	1 × 4 間	N7° 23' W	135~210	D

## 2. 方形区画溝

上層遺構の幅7～8m・深さ1.5mの堀を廻らす方形館跡と異なり、下層遺構で幅1～2m、深さ数十cm規模の溝が方形に廻り、区画＝屋敷地の範囲を示す遺構が多く検出された。

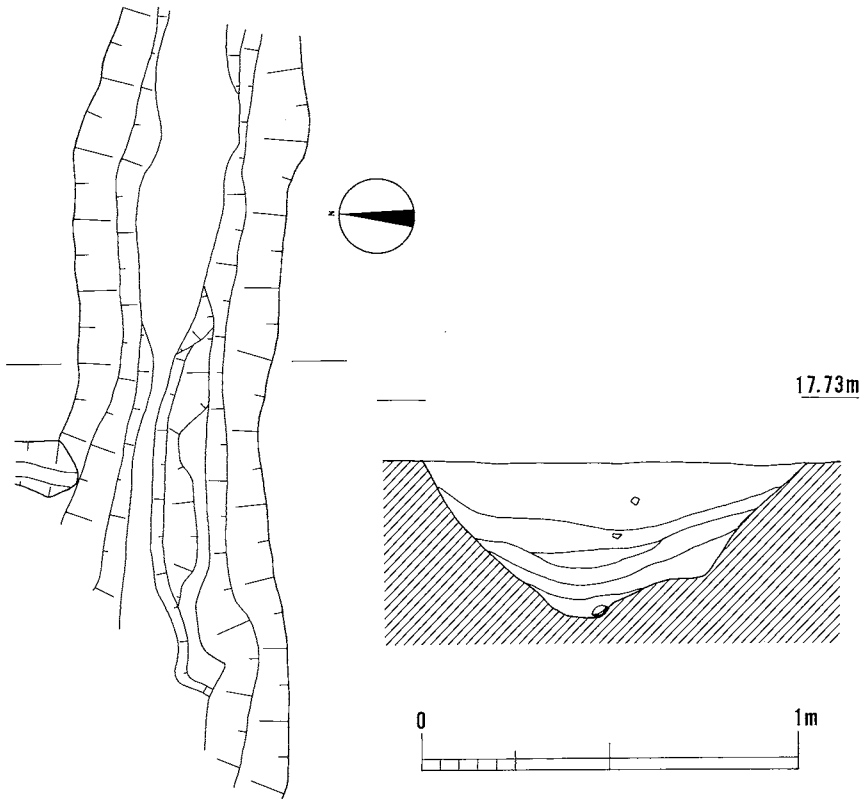
ここでこれらの溝を方形区画溝と呼び、区画＝屋敷地の検討を行う。

調査区別に整理をするとN地区では東から①N<sub>1</sub>地区・N<sub>3</sub>地区にまたがり、重複してはいるがSD3044とSD3045で区画された13世紀代屋敷地がある。区画規模は一辺35mから最大60mを計る。掘立柱建物跡SB04・SB05が僅かに検出された。西に②N<sub>1</sub>地区・N<sub>2</sub>A・N<sub>2</sub>B地区にまたがり、N<sub>2</sub>B地



挿図75 方形区画溝と方形館跡





挿図76 N<sub>2</sub>A地区SD02

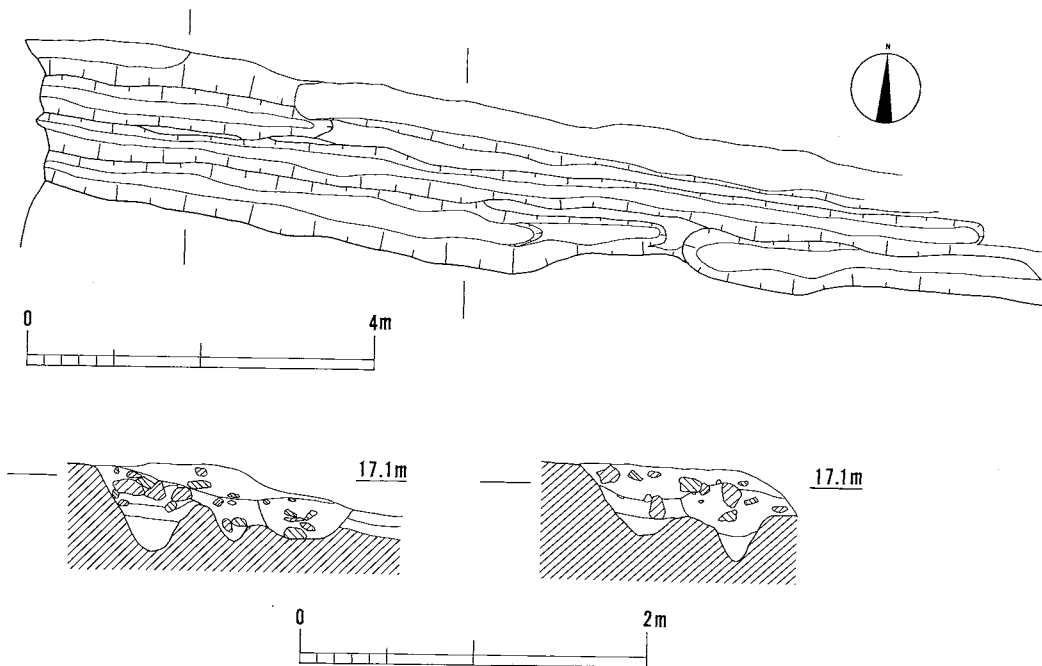
区SD02とN<sub>2</sub>A地区SD01とN<sub>1</sub>地区SD3060で囲まれた区画があり、SB06からSB31までの建物が重複して建てられている。区画規模は60mを計る。この区画も①と同様に拡張が考えられ、建物SB01からSB03が建つ。ただし、区画の東部はN<sub>1</sub>地区のSD3061からその軸線上に13世紀代のSK3065・SK3056の墓、N<sub>3</sub>地区溝7と土壌が並びこの区画の成立するのは、N<sub>1</sub>地区へは繋がらないN<sub>2</sub>A地区SD02などから多く出土する土師器皿の14世紀前半代である。なお、N<sub>2</sub>A地区SD02は北地区では見られない形状を呈しており、幅1m、深さ40cmを計り、長さ4mのみ検出された（挿図76）。

次にC<sub>2</sub>地区では③SD04で区画されているが、区画の纏まりはないが柵SA05より南にSB32からSB38の建物が集中する。SD04は幅約50cm、深さ約50cmの溝が改修を重ねて同じ方向に掘られており、14世紀末から15世紀初頭の土師器皿・鍋・羽釜、備前焼播鉢・甕など遺物が多く出土しており、また鉄滓が出土したことから、鍛冶工房に関連する溝である。

またC<sub>3</sub>地区下層精査のうちに④上層で発見できなかった溝SD07で囲まれたC<sub>2</sub>地区へと続く区画があるが幅6mと狭く性格は不明である。14世紀前半代の土師器羽釜などが出土している。

さてC<sub>1</sub>地区であるが、方形館跡の遺構で区画溝は判りにくいが内堀と外堀の間に溝が検出されており、内堀内の区画を大きく二分している。⑤はSD17の北に断続的に調査された溝をつなぐと一辺60mの北に旧河道まであり、C<sub>4</sub>地区の南北走行の溝ともあう。14世紀前半代の遺物を多く含む。北にはSB40とSE11、SB46・SB47の区画であるが火葬施設や墓が主体である。SE02・SE04・SE10などの井戸を含む。その南に⑥の一辺約60mの区画がある。SE05を含み、建物SB49からSB66までの範囲である。中にSD17・SD18など2条から4条の溝で区画された⑦が有り、25mから30mの規模で区画されている。14世紀前半代の遺物で埋められており、「満願寺」の中核部分となる。方形館跡で多くが壊されており区画のみ残る。

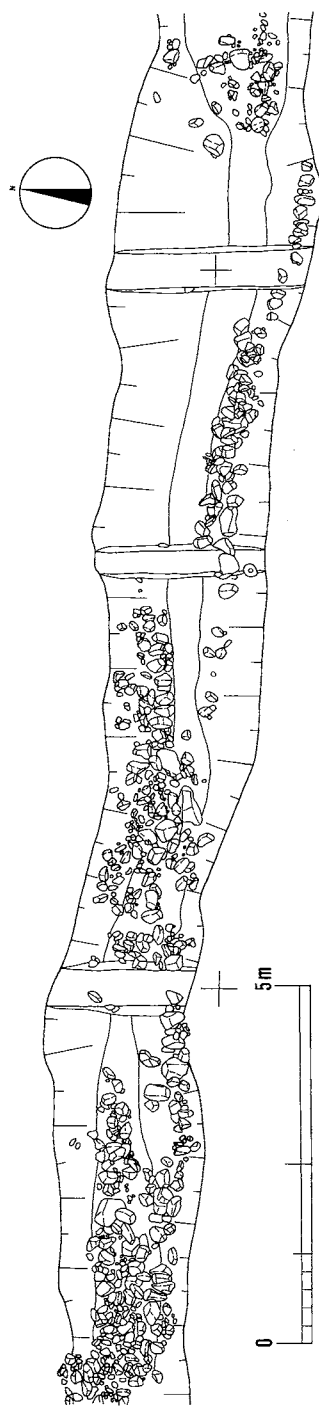
一方、南地区ではS<sub>3</sub>・S<sub>4</sub>地区でSD05・SD06で区画された⑧が有る。一辺最低20m以上の規模であるが建物SB67しかない。S<sub>1</sub>地区では⑨の区画がSD10とS<sub>3</sub>地区SD12で一辺30mに区画されている。北は「筑紫大道」と片岡庄堀・SD01で新しく区画されており不明である建物SB68と井戸SE12・SE13がある。西は墓域までである。S<sub>3</sub>地区では溝SD16・SD10・SD11で区画された一辺20m×35mの規模の⑩がある。建物SB69からSB73と井戸SE14がある。南面のSD16は幅約2m強のしっかりした溝で肩部に石組みが見られ、管理された溝で14世紀後半から15世紀前半の遺物で区画溝が埋まる。S<sub>3</sub>地区西部にはS<sub>1</sub>地区SD02とS<sub>3</sub>地区SD09・SD01で区画された一辺40m区画の⑪があり、建物SB74からSB76と井戸SE19がある。南部はSD01とSD16・SD18



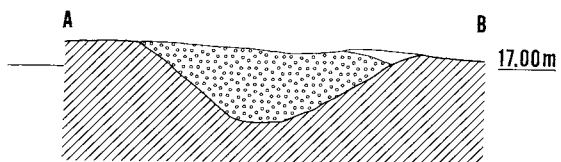
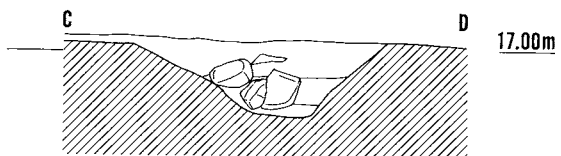
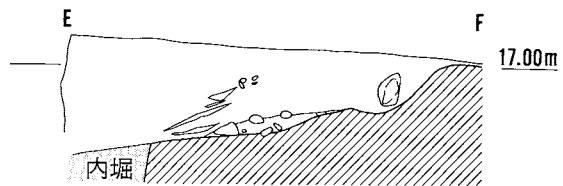
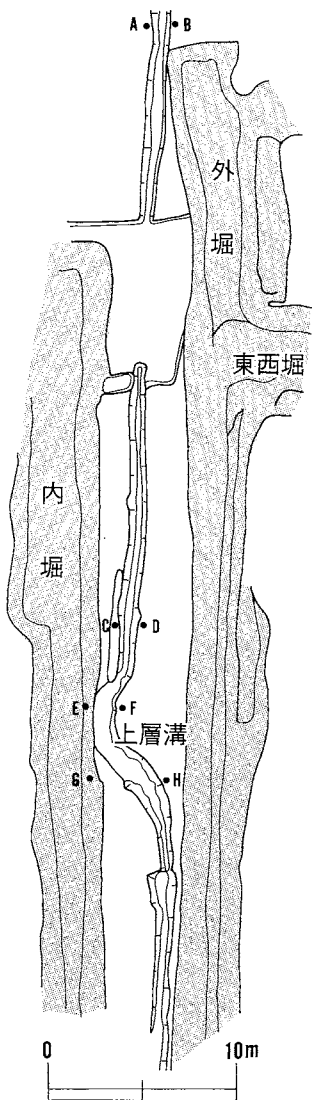
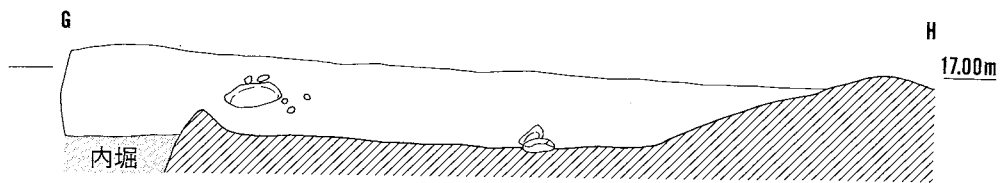
挿図77 C<sub>2</sub>地区SD04

で区画された一辺20m×50mの区画⑫がある。建物SB77・SB78・柵SA36とSB79がある。さらにその南は⑬の区画となりSB80・SB81がある。

方形区画溝は①が最も古く鎌倉時代に遡り、屋敷地がある。これ以前の墓が南地区にもあり、⑨⑩⑪にも墓のみではなく屋敷地も想定される。ただ、北地区・中央地区を中心に②から⑧までは14世紀代を中心に、南地区は14世紀後半から15世紀代に区画されている。これは北地区が最も安定した地形に位置し、中央地区・南地区に南下するに洪水の影響を受けやすく、特に南地区西半部では自然堤防形成が後代に強くなる可能性がある。方形区画溝・屋敷の形成は「筑紫大道」敷設に起因し、南へ展開し14世紀後半以降では都市化したように農村風景を払拭する屋敷が並ぶ。敷地面積は小さくなるが、溝も管理された状況がある。この後、15世紀後半になると防御を厚くした方形館へと変化する。



挿図78 S<sub>3</sub>地区SD16

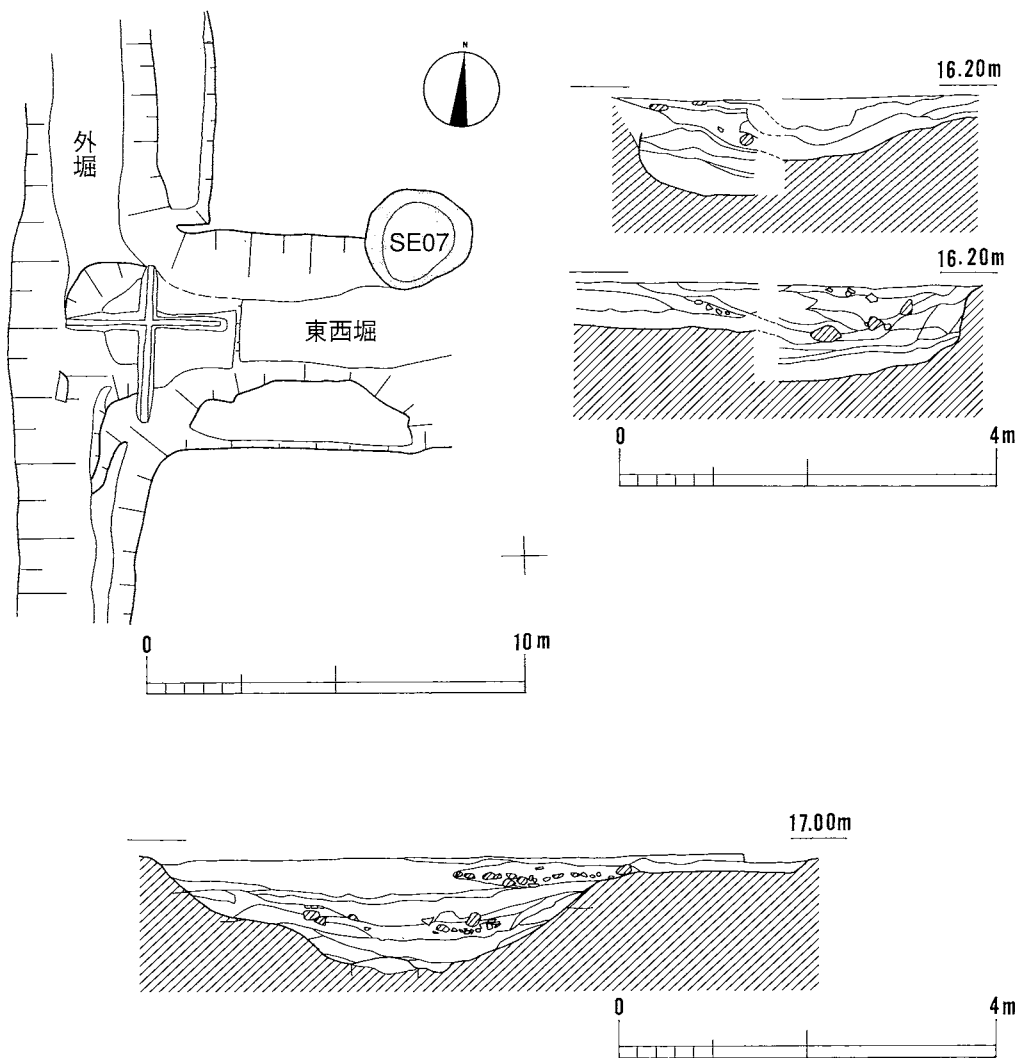


挿図79 C:上層溝

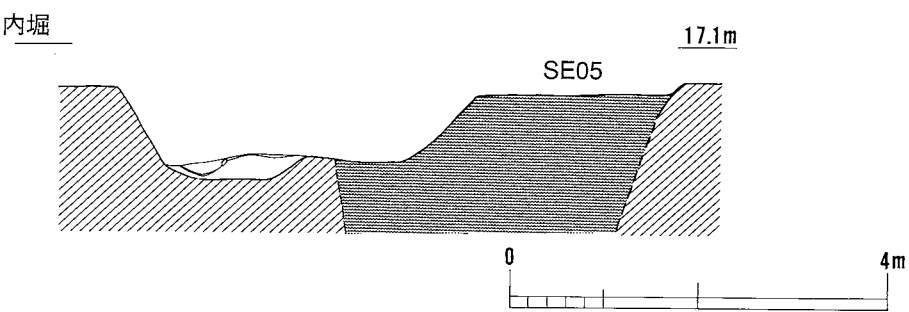
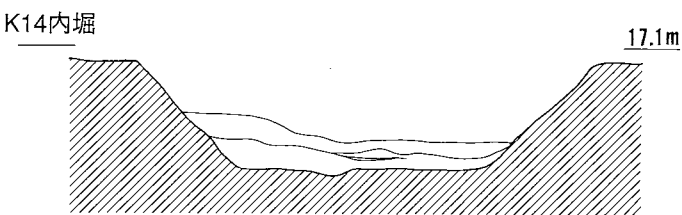
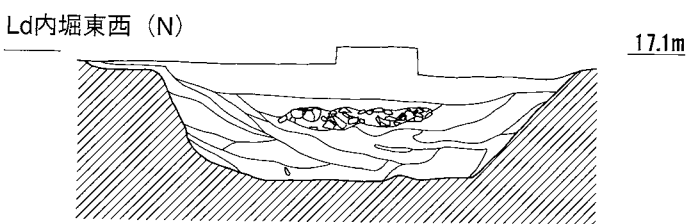
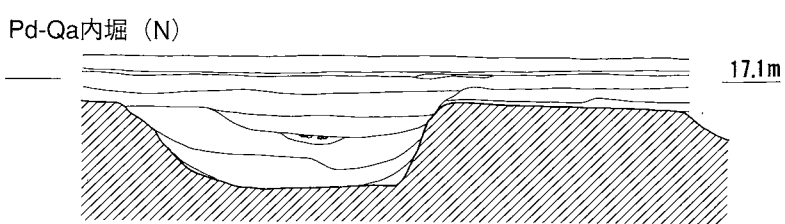
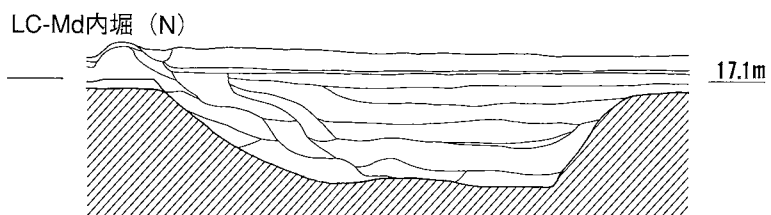
### 3. 方形館跡

昭和56年度から兵庫県教育委員会が始めた福田片岡遺跡の発掘調査の中で、当初から堀で囲まれた中世館跡を如何に成果を得られるかが問題であった。林田川の洪水を受け、後世の開墾も激しく郭内の遺構を明確にすることは難しいと考えていた。兵庫県の中世城館研究が集成されつつある時期の大きな調査となった。

堀で囲まれた方形館跡を意識した調査であったが、始めに手をつけた中央区で堀が屈曲することから方形に堀が廻り、館を防御する中世後半の館の遺構となることが大量に出土した備前



挿図80 東西堀・外堀切合とSE07



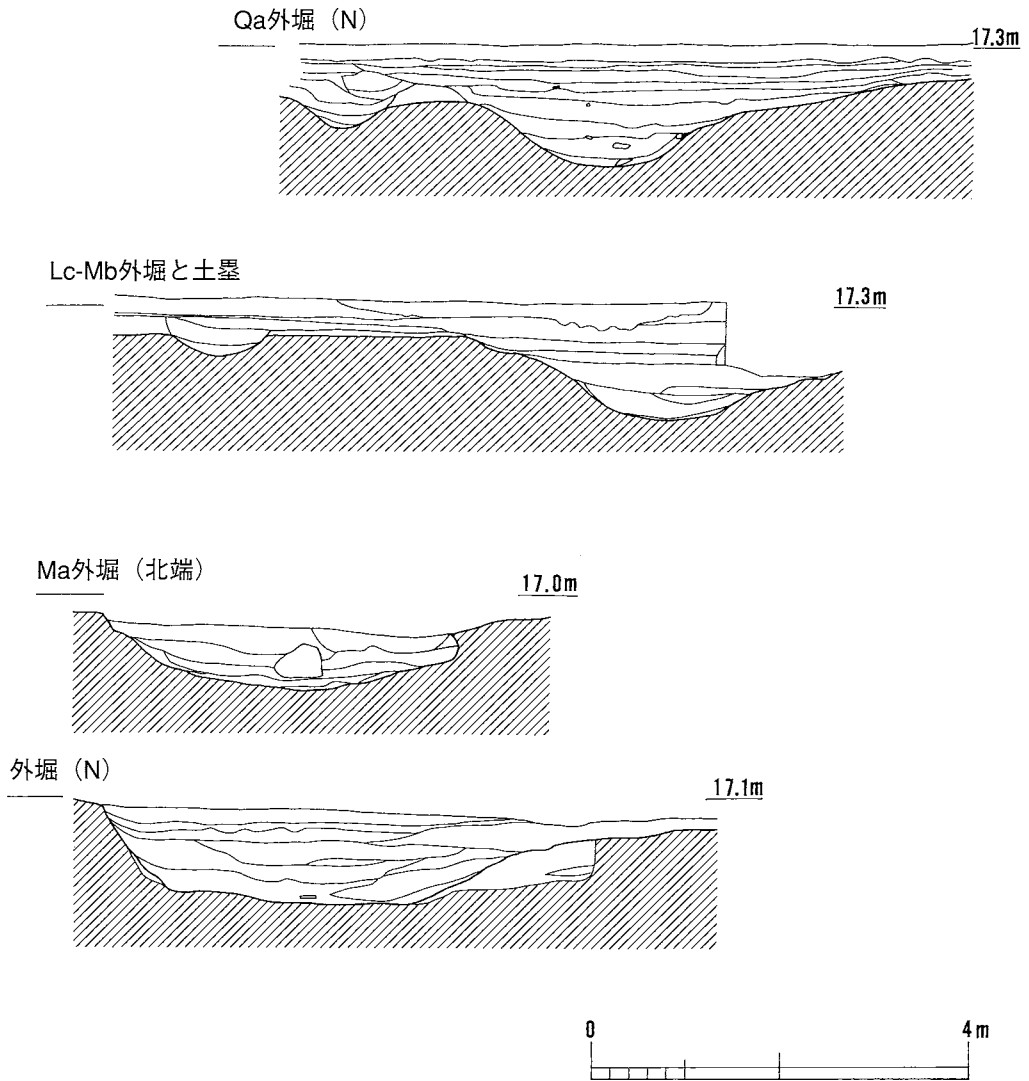
挿図81 内堀土層堆積

焼甕・播鉢の研究から裏付けられ、かつ中世全般の遺物・遺構研究への基礎を確立できる機会となった。

前述したように中世前半の遺構を堀が壊し（挿図79）、遺構の前後関係からも編年体系を編むことになる。遺跡は何度も洪水砂で覆われており、建物の復元は難しい。

まずは堀で囲まれた区画を示すことにする（挿図75）。

中央区の内堀と呼称した幅約4mから6m、深さ約1.2mを計り、逆台形を呈するいわゆる箱



挿図82 外堀土層堆積

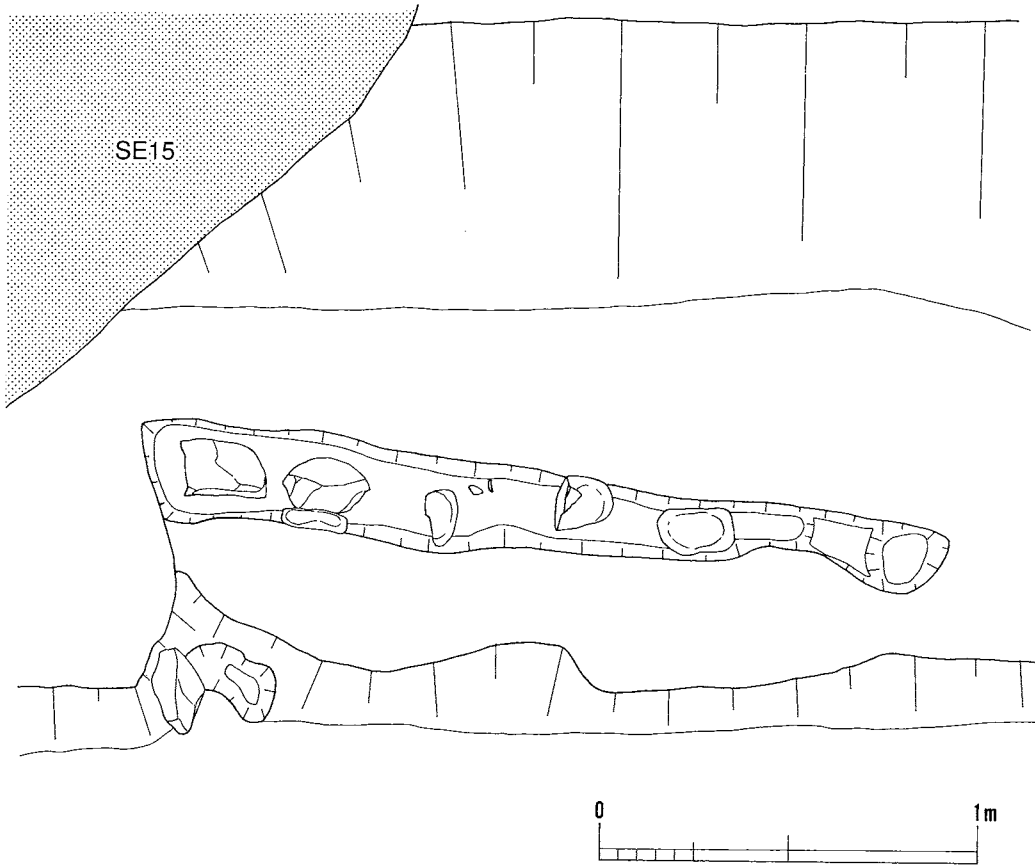
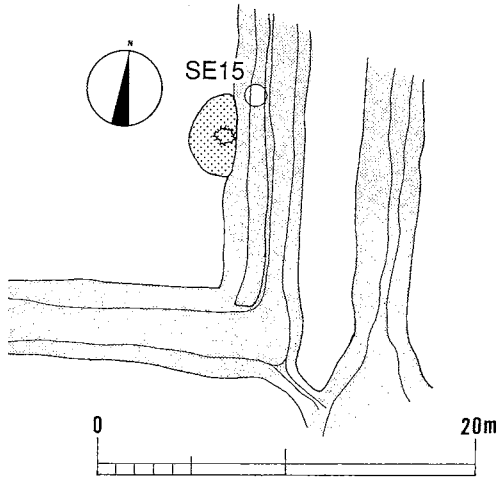
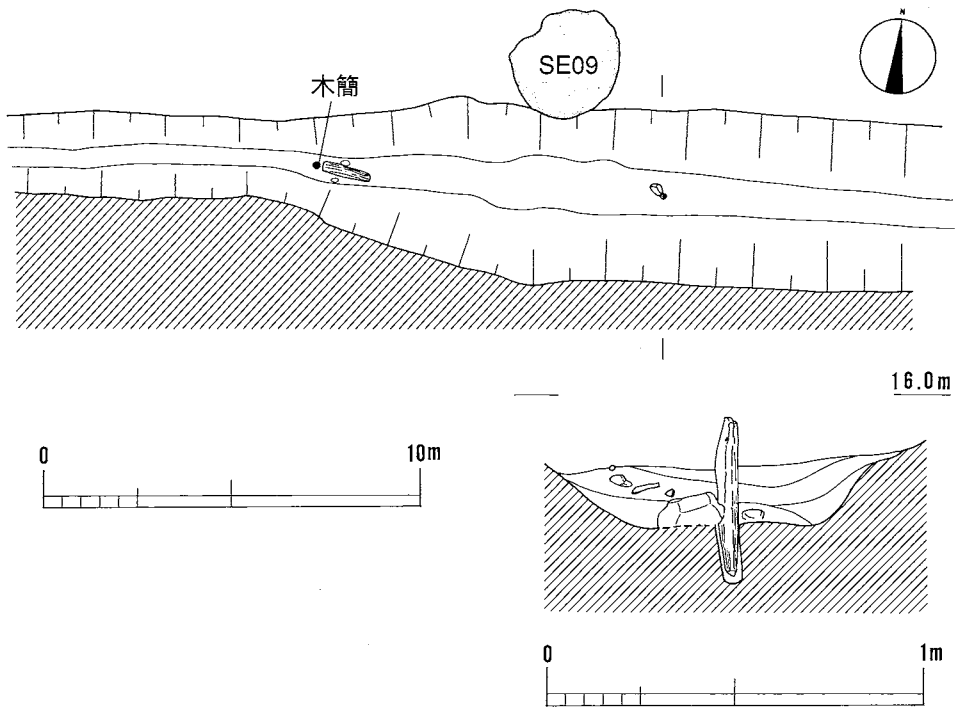


插图83 C<sub>1</sub>地区内堀階段状遺構



堀を成す。部分的には幅を減じて二段堀を呈している。その二段堀を呈している箇所、すなわちSE15を壊して堀を開削した部分では石列の階段状の施設が発見されている（挿図83）。堀は管理され、水が張られていたようで、底には淡水生の二枚貝も棲息していたことから判る（挿図81）。堀は南北65m、東西70mの郭空間を作っている。なお、C<sub>4</sub>地区において内堀と林田川旧河道が背中合わせに接しており、調査区外のすぐ西隣で合流して西の限りは旧河道が自然の堀となっている。郭内に井戸SE01・SE03がある。堀はSE14やSE15を壊して掘削していることや底から出土した土師器皿や漆器碗などから15世紀代後半から16世紀前半に機能していたことが判る。

内堀の東に平行する堀を外堀と呼称してきた。幅は3.6mから約6m、深さは約70cmから1.2mを計る。内堀と平行する南北では長さ約90m以上で東に曲がっている。北の林田川からの洪水をまともに受けて、南端では大きく抉って曲がっているが、その屈曲部を礫を積み補修した状況も認められている。また、北の屈曲部では調査時に東西堀と呼称した堀と会所を設け、林田川からの洪水など水量調整もされていたことが判る（挿図80）。東西堀は幅4m以上、深さ60cmと浅いが東へ約40mの所で南へ曲がり、「筑紫大道」へと向かう。この外堀・東西堀と呼称した堀で区画された郭がある。東西35m×南北70mを計る。ただ、空中写真での現況地形と埋

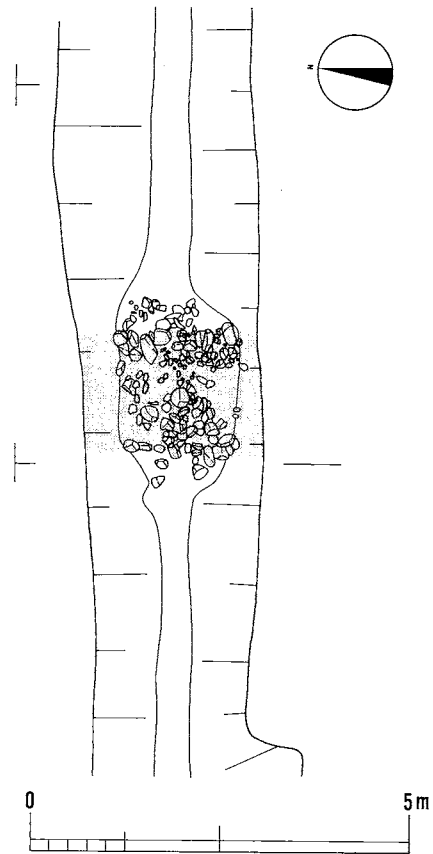


挿図84 S<sub>1</sub>地区片岡庄堀と橋脚遺構

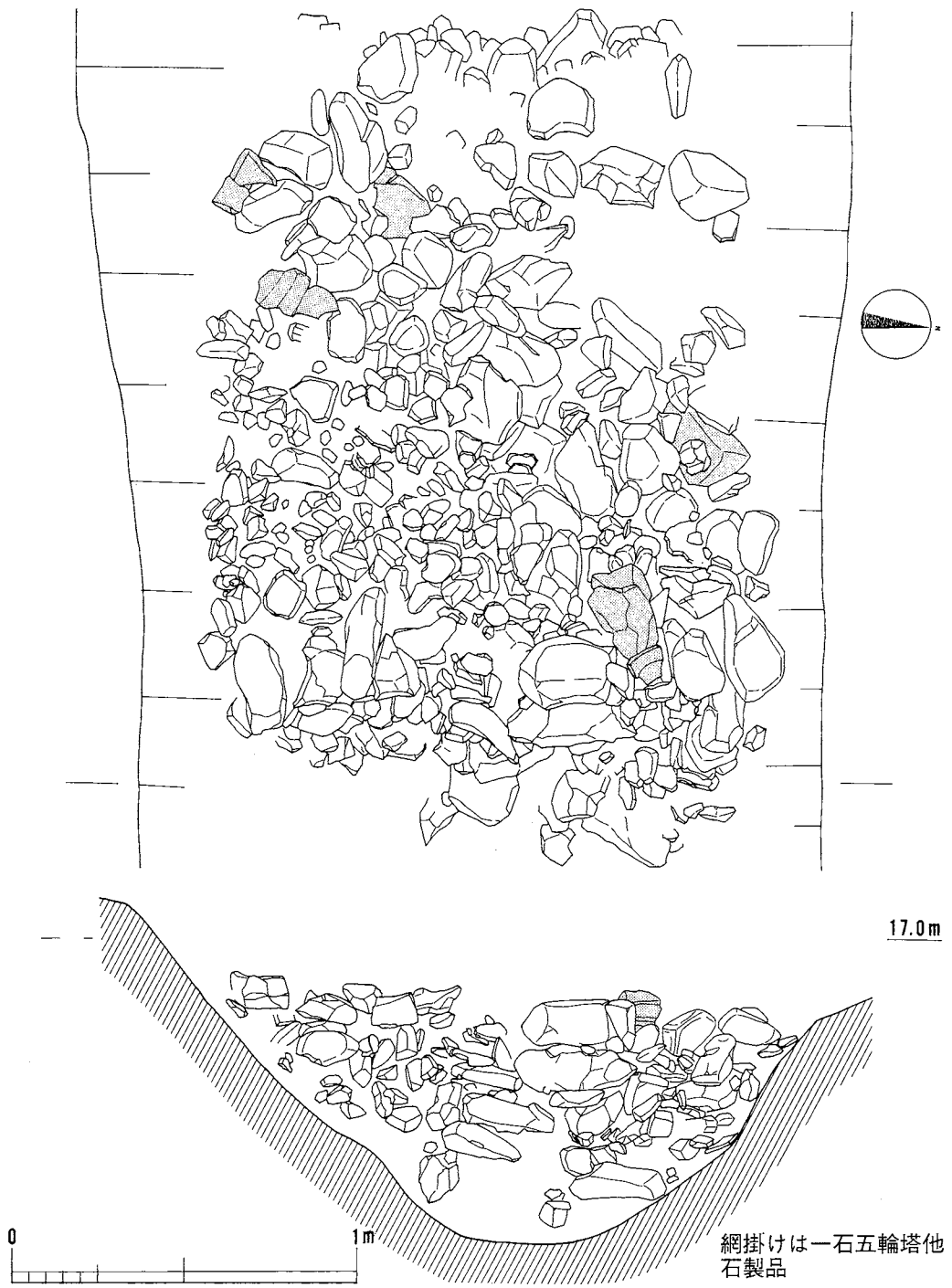
没微地形の判読を試みると現在の水田畦畔幅で東西堀は東では南下しており、同じように少し曲がりながら「筑紫大道」とつながる。郭内にはSE06・SE16がある。内堀で囲まれた郭の従属的な関係とみる。面積も約半分程度の空間をもつ。また北には旧林田川河道が入り込み、二重の堀構造をもつ。この部分を船の停泊する泊まり施設も考慮される。

南区では「筑紫大道」を意識した「片岡庄堀」がある。幅約4mの深さ1.5mを計り、約20mの長さだけ調査をした。底には釘を打ち込まれた橋脚の部材や柱材が打ち込まれていた。西端の堀底で文書木簡と付札木簡が一点ずつ出土している。漆器椀や木製品も良く残っている。片岡庄堀と軸線を一にした溝SD01が西端のC<sub>4</sub>地区でも確認できており、西の限りで林田川と取り付く。SD01は幅2m、深さ1mを計り、片岡庄堀との取り付きから約40mの所に礫と一石五輪塔等の石造品を積み上げた橋が設けられている（挿図85・86）。この片岡庄堀とSD01で区画された南で荒河井堰で区画された中に井戸SE13・SE18と建物がある。また、部分的な調査しかできなかったがSD20がこの空間の東西を割るかのように南北に片岡庄堀と同規模のような堀がある。詳細は不明である。

以上のように調査の当初に想定していた二重の堀を廻らす単純な方形館跡、次には外堀がもう一つの郭を形成する重郭構造でしかも北・西を林田川を利用した二重堀構造で防御を厚くした館跡、さらには「筑紫大道」を館に取り込むために南に片岡庄堀・SD01を開削し、自然堤防が高く厚くなり修復された荒河井堰との間を郭とする三重郭構造をもつ館という変化へ理解を進めることになった。



挿図85 S<sub>1</sub>地区SD01土橋状遺構



挿図86 石積橋状遺構

#### 4. 井戸

井戸は中央・南地区において20基調査を行った。中世に限ると16基で中央地区9基、南地区7基がある。部分的にしか調査ができなかったSE11及びSE08を除くと井側bの石積みが残りに、井戸存続時期より後代の堀などの掘削に因って破壊されている井戸もあるが、井戸は使用を止めた時点で埋められていた。上部の石積みを崩したり、壊れた備前焼の甕類などが放り込まれていた。

ただ、井戸の中位、下位及び溜水施設に完形の土器類・櫛・漆器や鉄鍋片が出土しており、それらの遺物のあり方が問題とはなるが、井戸の廃絶、水神の魂鎮めなどの時期を決定できる資料がある。井側の石の積み上げ技術・形状、溜水施設（曲物桶・結桶）などから井戸の研究が進んでおり、改めて福田片岡遺跡の中世井戸について分類を行う。

SE08については、他の井戸の検出状況とは違って溜水施設（曲物桶）の1段の石組みを残すのみで上部構造は不明である。埋め戻しの仕方が特異な井戸で詳細は後に検討する。

さて、古代から井戸の形状については、上屋を復元することが難しいため、井側の平面形・断面形と素材そして溜水施設などを材料として、井戸の研究が進められてきた。福田片岡遺跡の中世井戸は井側は全て石積みと考えられ、平面形も円形であり、異なるのは井側の断面形状、使用する石の種類、溜水施設である。湧水の高さ、水脈の変化なども考慮したが、中世遺跡の立地する地形の微起伏の違いに依存することが多く、参考程度に止める。

##### 井戸の分類要素

##### ①井側の形状（断面）

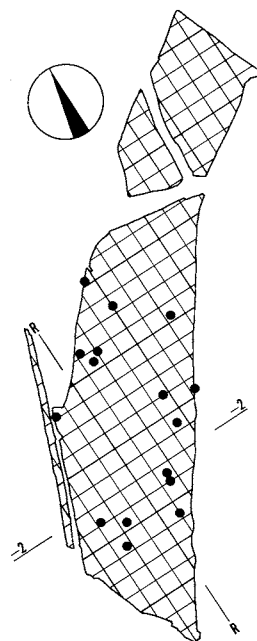
- A. 逆台形状…SE04
- B. 漏斗状 …SE05・SE14・SE19
- C. 短直形 …SE02・SE03・SE06・SE13
- D. 長直形 …SE01・SE18

##### ②井側の石の種類

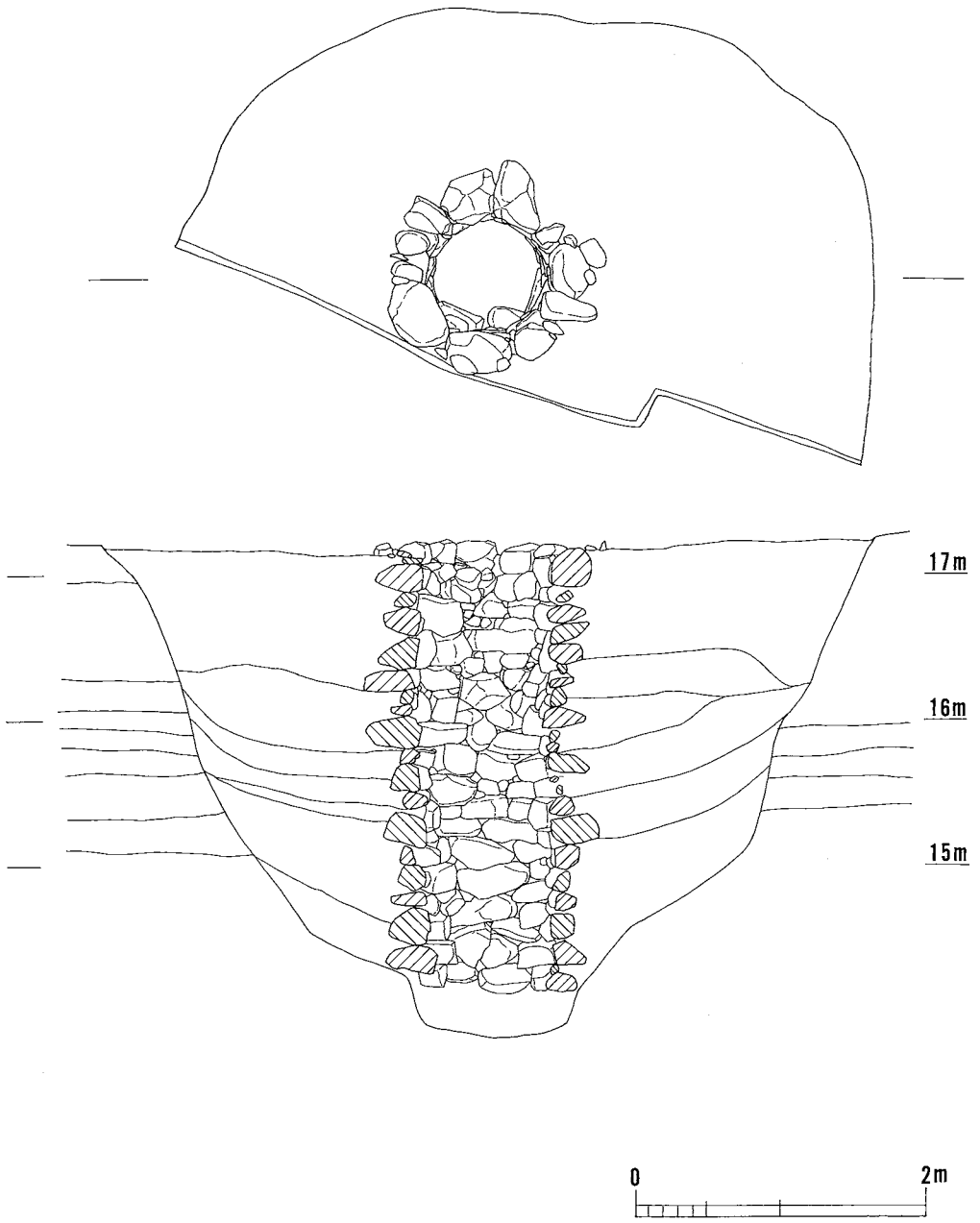
- a. 河原石 …SE04・SE13・SE19
- b. 河原石>角礫岩…SE02・SE03・SE06・SE10・SE12・  
SE14・SE18
- c. 河原石<角礫岩…SE01・SE05

##### ③溜水施設

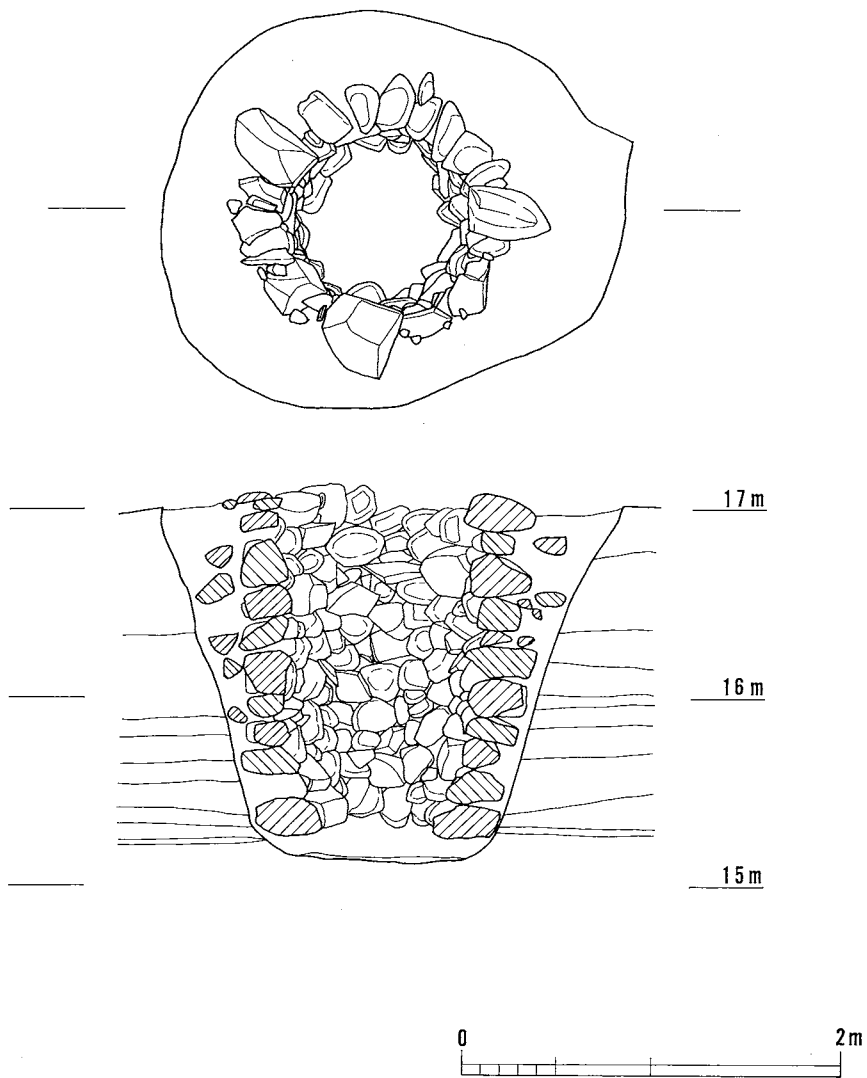
- ア. 縦板横棧型…SE10
- イ. 曲物桶 …SE05・SE08-1・SE08-2・SE13・SE14
- ウ. 結桶 …SE06



以下、この分類要素の組み合わせによって、Aa型（SE04）、挿図87 中世井戸位置図



挿図88 SE01

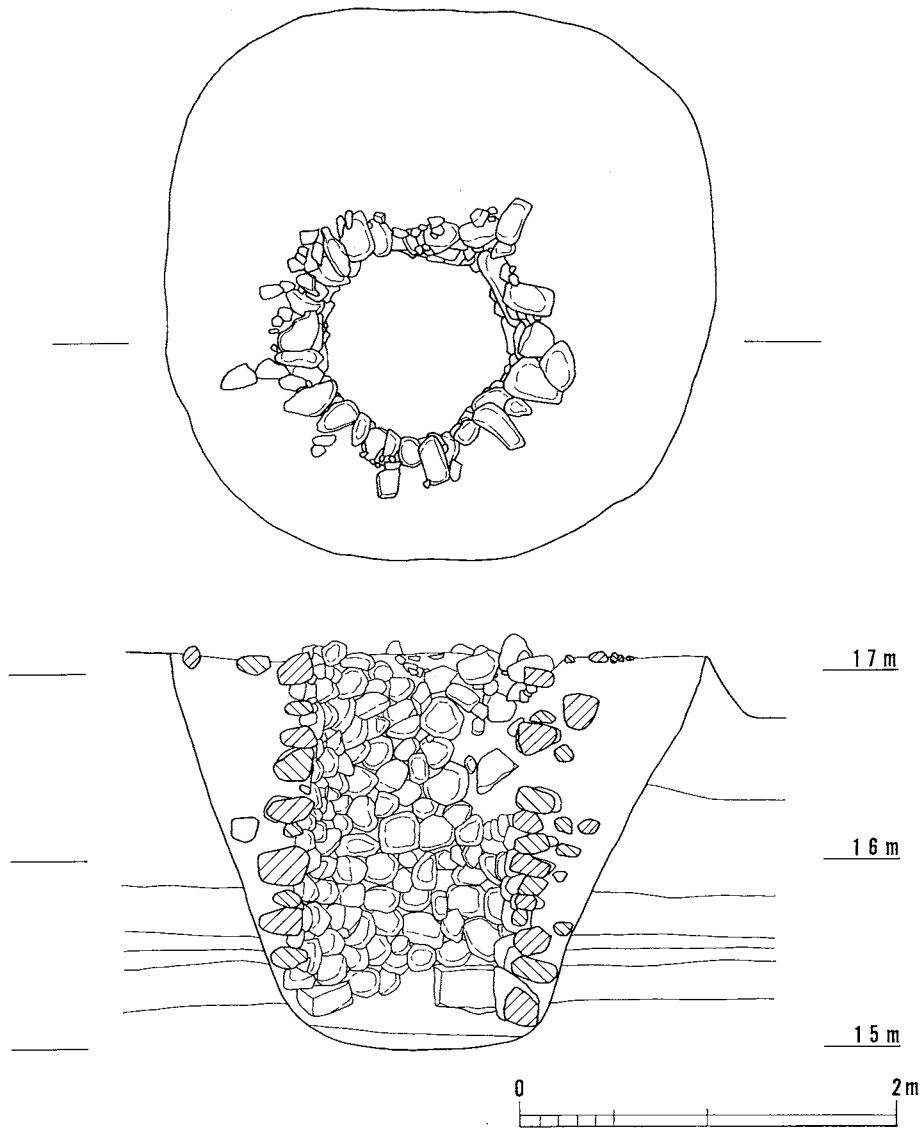


挿図89 SE02

Caウ型 (SE13) Bcイ型 (SE05) というように、この分類に従って各井戸について記述する。

SE01

C<sub>i</sub>地区の西端で発見され、福田片岡遺跡で初めて調査された井戸である。掘り方径が約5.2mと極めて大きく、掘り方深も約3.4mと深い。従って石積高も約3.1mと最も高く、石積径は上径1.45m、下径1.40mの長直型井側形状で石の種類からDc型となる。なお、溜水施設については木質が腐って残っていなかったため不明。井戸内からは瀬戸焼鉄釉播鉢や備前焼壺・播鉢・甕などが出土し、16世紀代 (VI期) まで使用されていることが判る。よって方形館跡に伴

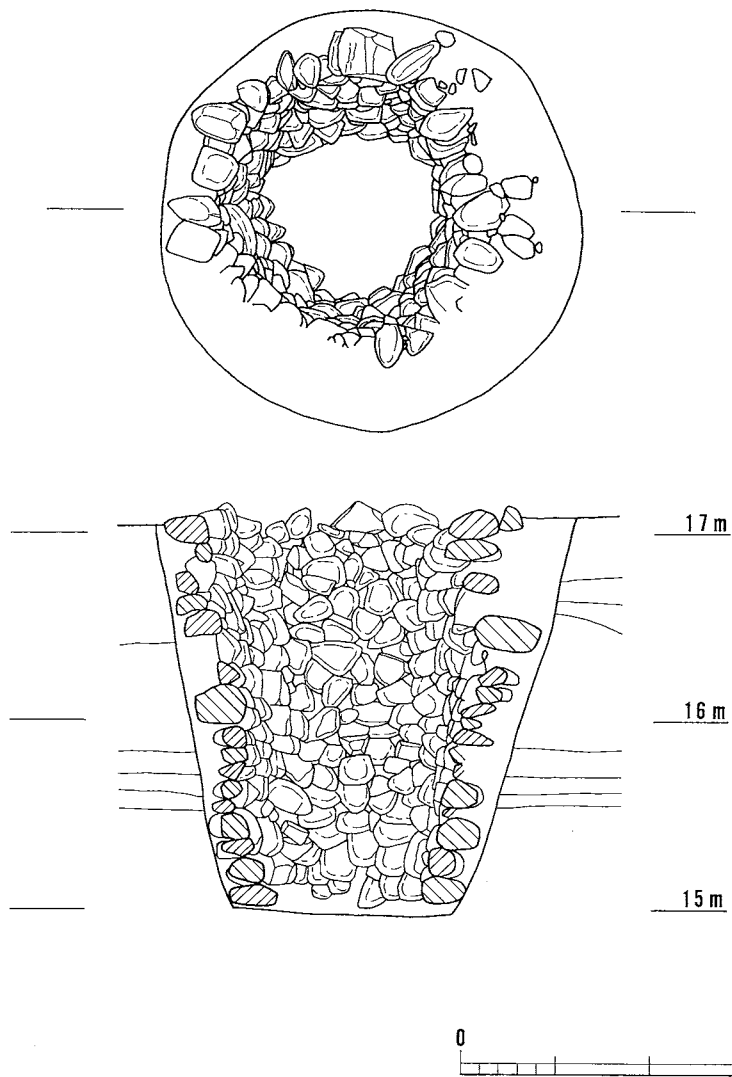


挿図90 SE03

う井戸である。また、水位は14.5mである。

SE02

同じくC<sub>i</sub>地区の井戸で、掘り方径2.5m、掘り方深1.9mを計り、石積高1.9mと浅く、石積径は上径1.55m、下径1.30mと短直のCb型で、水位は15.5mと浅い。出土遺物は少ないが、14世紀～15世紀（IV期）に使用された井戸である。



挿図91 SE04

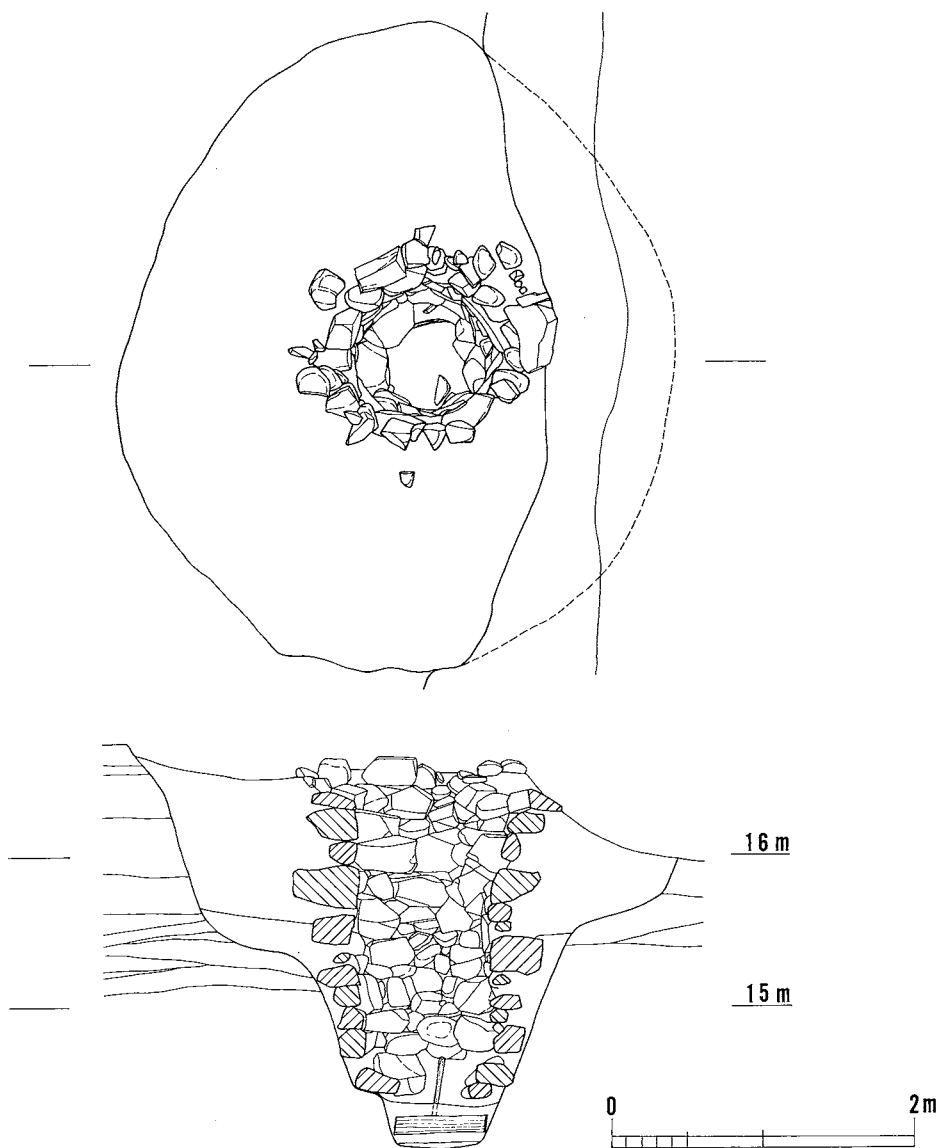
SE03

SE02の西南近くで調査された井戸で、SD17を壊して構築されている。掘り方径2.85m、掘り方深2.10mを計り、石積高1.95mと浅く、石積径は上下径とも1.45mで短直のCb型で、水位は15.5mと浅い。溜水施設は木質が腐って不明である。また、出土遺物は備前碗・壺・甕と土師器鍋・羽釜があり、SE01と同様に16世紀代（VI期）に使用された井戸である。

SE04

この井戸もSE02の西で調査された井戸である。掘り方径2.25m、掘り方深2.15mを計り、石





挿図92 SE05

積高2.15mとやや浅く、石積径は上径1.75mで下径1.25mと逆台形状のAa型で、水位は15.0mと浅い。なお、出土遺物は豊富で土師器皿・鍋・羽釜、瀬戸焼花瓶、魚住焼捏ね鉢、備前焼播鉢・甕などがあり、14世紀代（Ⅲ期）に使用された井戸である。

SE05

内堀開削時に部分的に破壊された井戸で、掘り方径2.85m、掘り方深2.80mを計り、石積高2.25mとやや浅く、石積径は上径1.65mで下径1.05mでやや漏斗状で溜水施設に径65cm、高さ

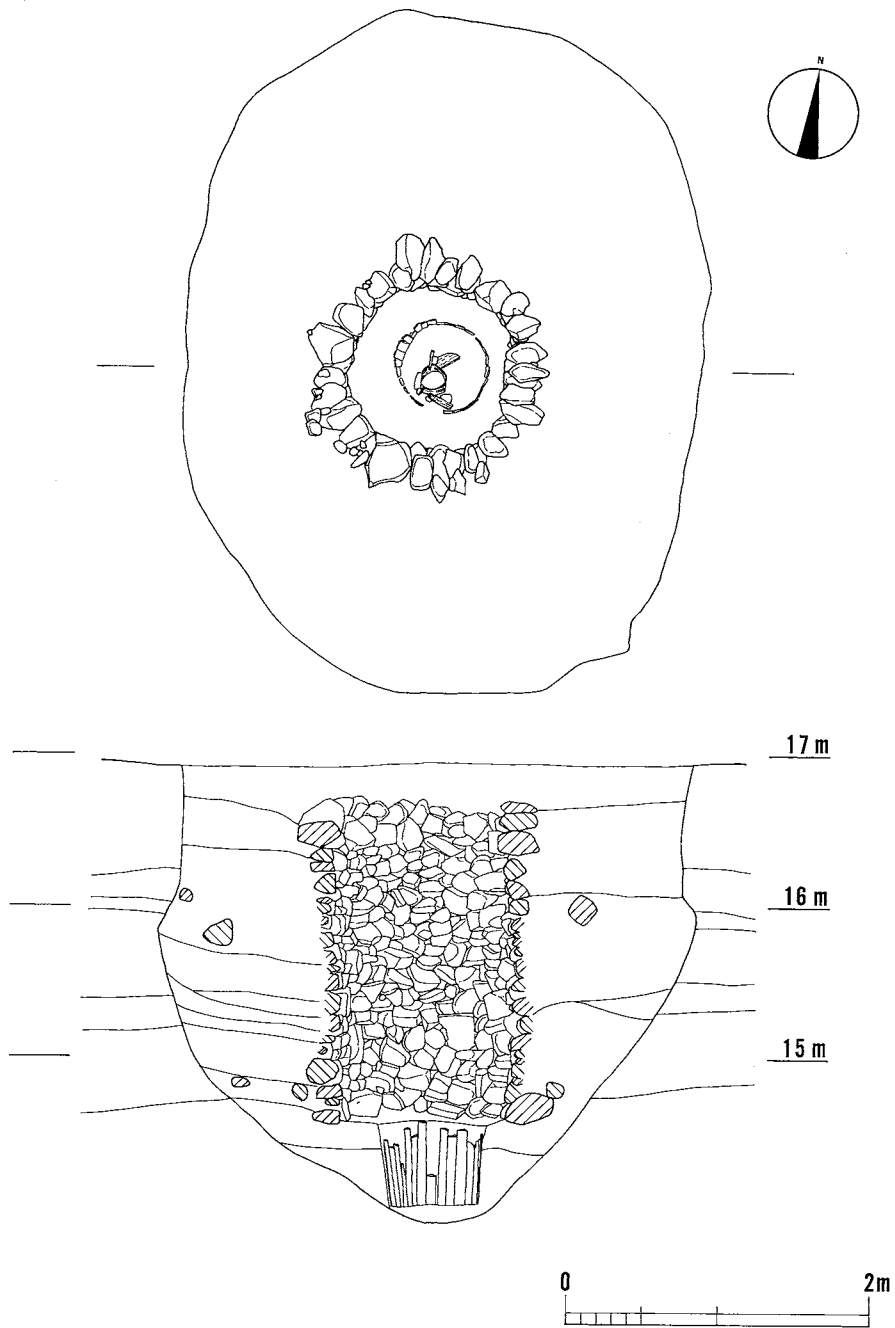


插图93 SE06

35cmを計る曲物桶が使用されているBcイ型で、水位は14.5mと深い。井戸を埋める際の水神の魂鎮めと息抜きの竹が部分的に残っていた。なお、出土遺物は土師器皿・鍋、魚住焼捏ね鉢、備前焼甕などがあり、13世紀代（Ⅱ期）に使用された井戸でC<sub>1</sub>地区では最も古い。

#### SE06

C<sub>1</sub>地区の東部外堀で囲まれた区域に位置する井戸で、掘り方径3.40m、掘り方深3.05mと大きく、石積高2.15mとやや浅く、石積径は上下径とも1.60mを計り、短直型で溜水施設に径65cm、高さ50cmを計る結い桶が使用されているCbウ型の井戸である。北に礫敷の水洗い場遺構が取り付く。出土遺物は少ないが、土師器羽釜、備前焼播鉢・甕などと曲物容器があり、16世紀代（Ⅵ期）に使用された井戸であり、方形館に伴う。

#### SE08

「鶺鴒荘絵図」に朱書き線で記載されている「筑紫大道」部に井戸が調査されている。当初に2基の井戸を調査したのがSE08とSE09とである。SE09は近世以降の井戸であり、特にSE08について井戸構築時期と廃絶時期について問題があった。SE08は掘り方長径4.20m・短径3.0mを計る不定形で、青磁劃花文碗片や亀山焼甕などを含む上層の埋め土を除去するも、井戸の石積みは無く、底に一段分の石組みが現れ、その下に溜水施設の径55cm・高さ35cmの曲物桶が残っていた。桶内に曲物容器の底板と櫛、鉄鍋片などが青磁劃花文碗片とともに出土した。これまでの井戸とは違ったあり方を示しており、井側を残さず移設しており、溜水施設のみ丁寧に残し、埋め戻していた。なお、出土した青磁劃花文碗片は上層と曲物桶内のものは、同一個体で接合した。このことからこの井戸は特殊な埋め方がされたもので、水神など魂鎮めの祀りを施し、一気に埋め戻したものである。掘り方の深さは2.0mと浅い。出土遺物は多く、土師器皿・羽釜、魚住焼捏ね鉢、亀山焼甕などがある。13世紀代（Ⅱ期）に埋め戻された井戸である。

溜水施設の取上から精査を行うと、井戸にしては不定形で不思議な掘り方を呈していたが、2基の井戸の掘り方が重複したものであり、実はより古い井戸を示す溜水施設の径48cm・高さ20cmの曲物桶の痕跡が北に発見され、ここに前述のSE08と呼んだ井戸をSE08-2とし、新発見の井戸をSE08-1とした。SE08-1はSE08-2より古い井戸であり、12世紀から13世紀（Ⅰ期）の井戸と考えている。隣接する井戸でも切り合い関係を持つ井戸は、本遺跡ではSE08以外はなく、このあり方は井戸の構築と廃絶について特異な形状としか言いようがない。どのようにしても井戸を埋め、水神の魂鎮めを執り行わなければならなかった事態を考えると、ここに元寇の防御のためへの急な「筑紫大道」敷設を考える。

#### SE10

北の内堀開削時に上部の石積みが破壊された井戸である。僅か四段分の井側石積みを残し、上部は破壊されていたが、高さ60cmの溜水施設はしっかりと残り、75cm四角に縦板二段横棧で

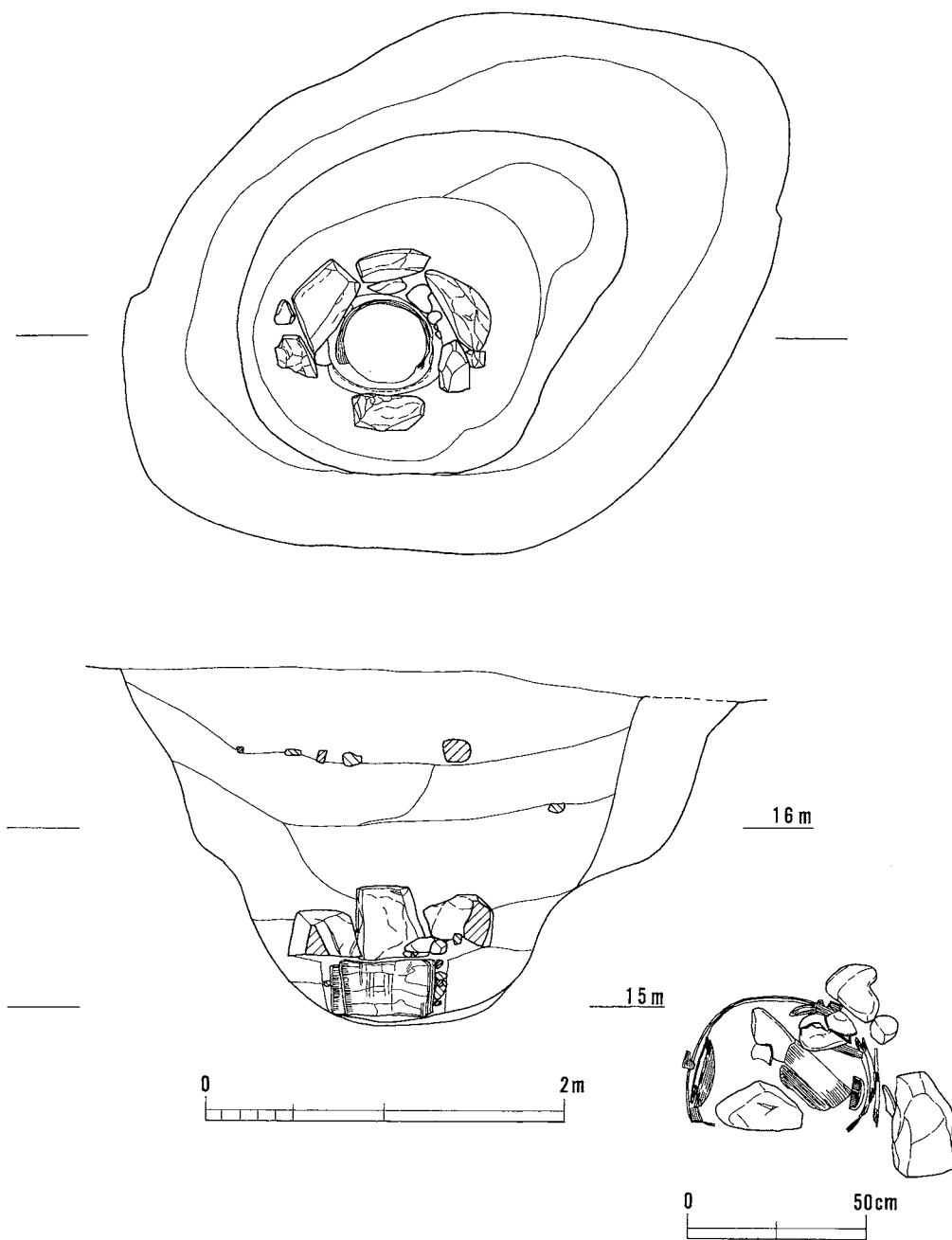
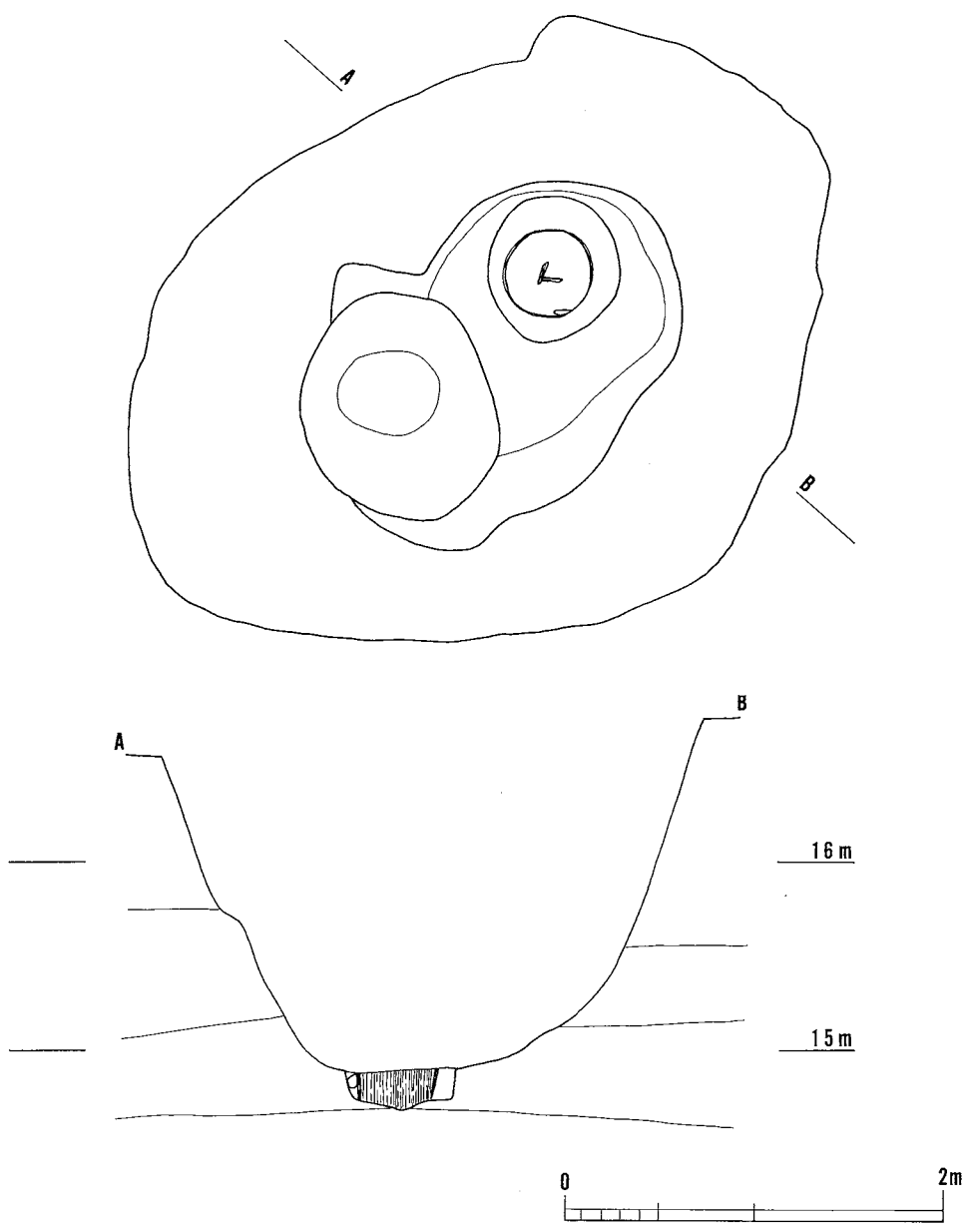


插图94 SE08-1



挿図95 SE08-2

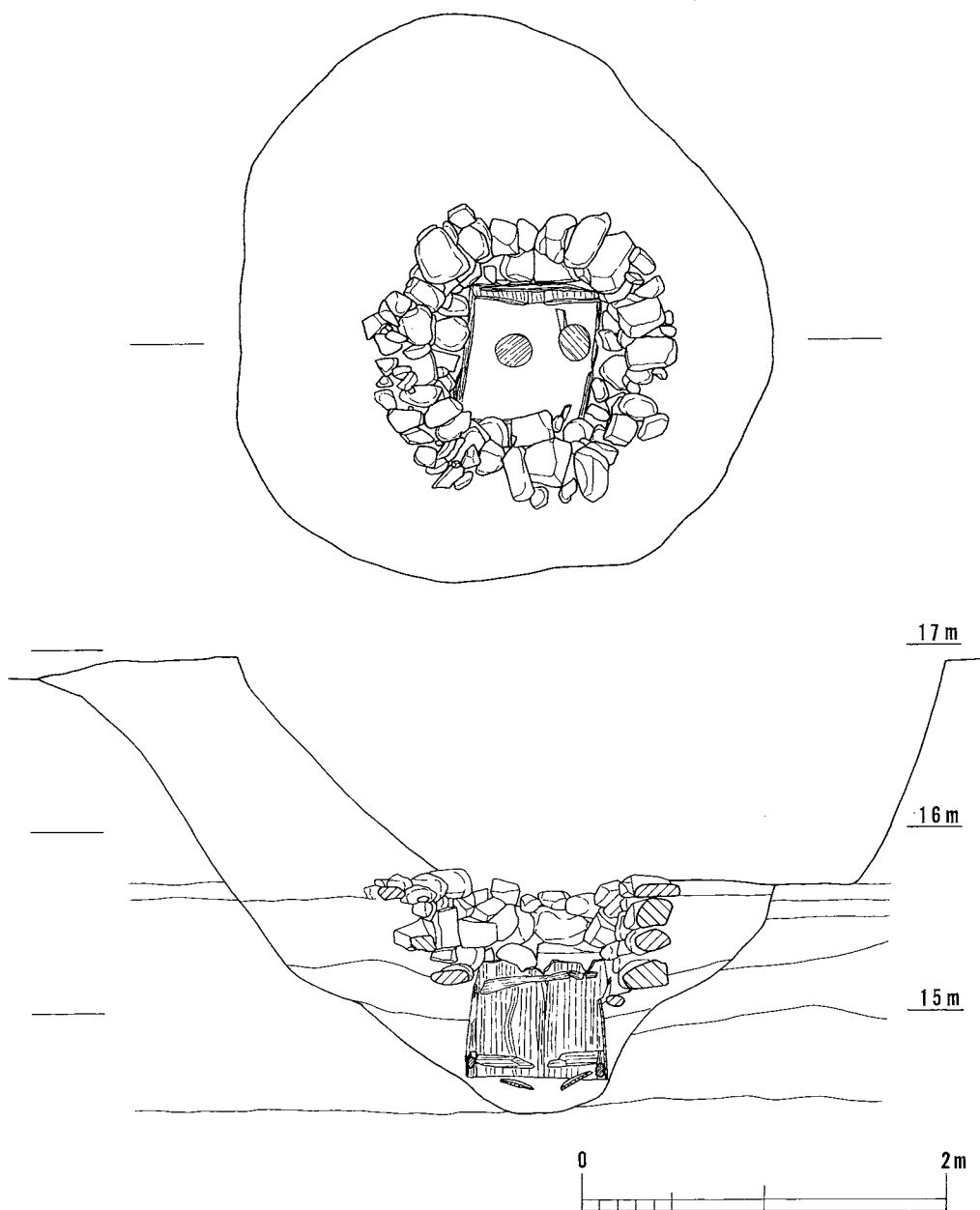


插图96 SE10

組まれ、上を石で固定し、その上に井側を石で組んで構築している井戸であった。溜水施設内には曲物容器の底板2点が出土していた。また、出土遺物としては土師器皿・羽釜・鍋、備前焼播鉢・甕などがあり、14世紀代（Ⅲ期）に使用された井戸である。

#### SE11

SE11はC<sub>1</sub>地区北西端際で部分的に調査した井戸で全容は不明であるが、石積高は50cm確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

#### SE12

S<sub>1</sub>地区でSE13と並んで発見された井戸である。掘り方径は2.45m、掘り方深は1.85mを計り、石積高1.7mで上径1.45m、下径1.25mのやや漏斗状の井側でBb型の井戸である。水位は14.5mと深い。出土遺物は少ないが土師器皿・鍋、魚住焼捏鉢があり、14～15世紀（Ⅳ期）にかけて使用された井戸である。

#### SE13

掘り方径は2.6m、掘り方深は2.0mを計り、石積高1.6mで上下径とも1.35mで、短直型の井側でCaイ型の井戸である。水位は15.5mと浅い。曲物桶の溜水施設を石で裏込め補強した上で松材を四角に組みそこから井側を石積みしている。出土遺物は少なく、備前焼播鉢があり、15世紀後半（Ⅴ期）にかけて使用された井戸である。

#### SE14

S<sub>3</sub>地区の確認トレンチの機械掘削で検出された井戸である。上部構造は掘削時に壊してしまったが、下部井側と溜水施設は良く残っていた。井側石積みは僅か1.5mであるが、漏斗状に積まれている。溜水施設は曲物桶を使用しており、径35cm・高さ40cmを計るBbイ型の井戸である。井戸廃絶時の水神魂鎮めの祀りに草履と土師器皿がある（挿図100）。他に土師器皿、備前焼碗・壺・播鉢・甕などがあり14世紀～15世紀代（Ⅳ期）の井戸である。

#### SE16

C<sub>3</sub>地区の南端で部分的に調査を行った井戸であり、推定すると掘り方径は2.6m、掘り方深は2.8mを計り、石積高2.0mで上径1.2、下径1.0mで、やや漏斗状の井側で溜水施設に曲物桶を使用している。水位は14.6mと深い。土師器皿・鍋、備前焼甕等から14世紀代（Ⅲ期）の井戸である。

#### SE18

S<sub>3</sub>地区のSD09・SD10を壊して掘削された井戸である。掘り方径は4.0m、掘り方深は3.15mを計り大きい。また石積高2.65mと高く、上下径とも1.05mを計る。長直型の井側で溜水施設は不明である。水位は14.5mと深い。井戸内に土師器皿・鍋、備前焼播鉢・甕等から16世紀代（Ⅵ期）の井戸である。

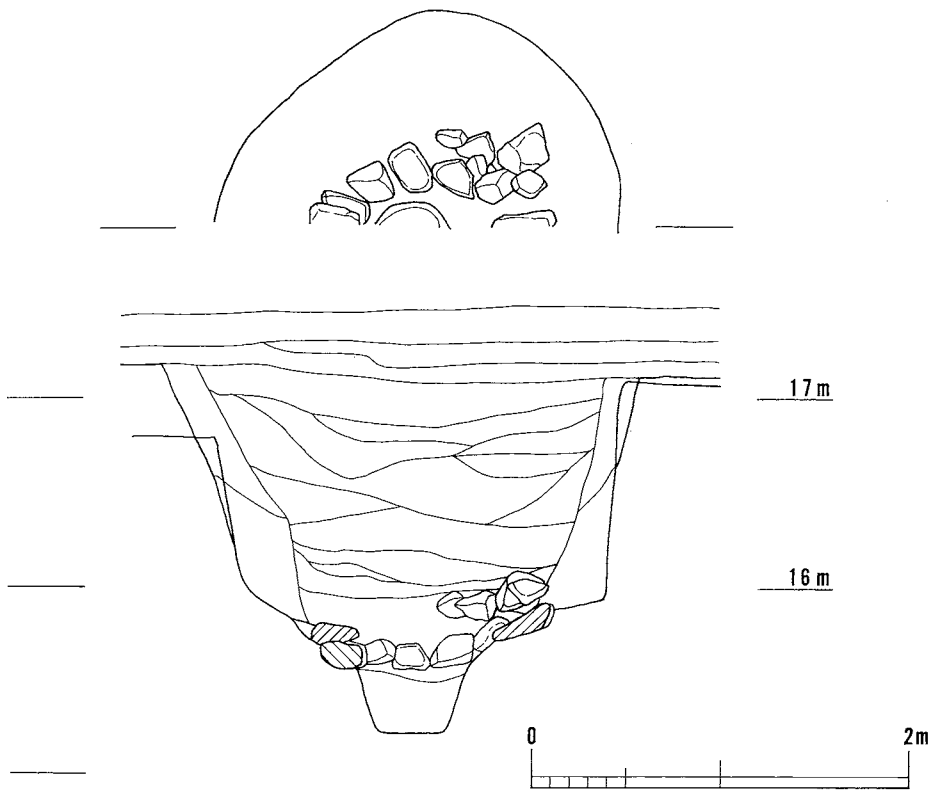
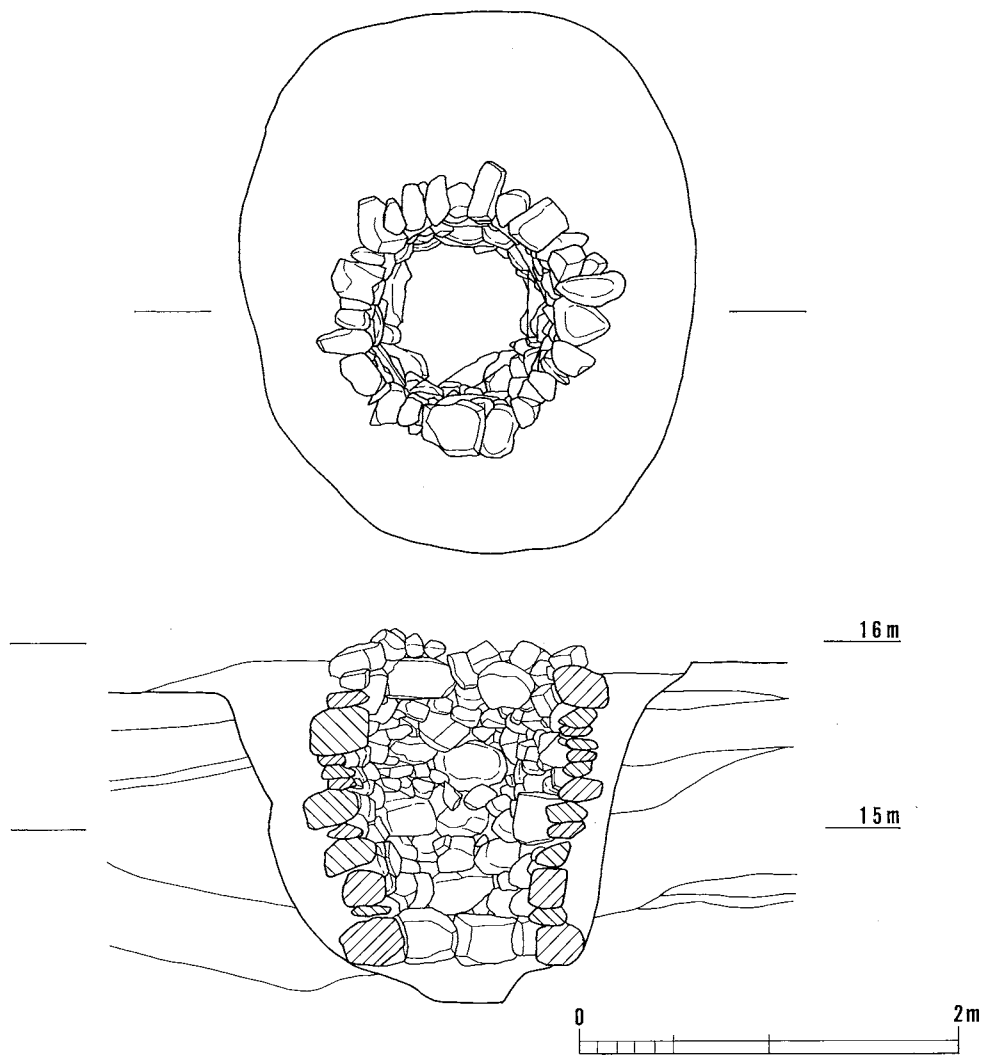
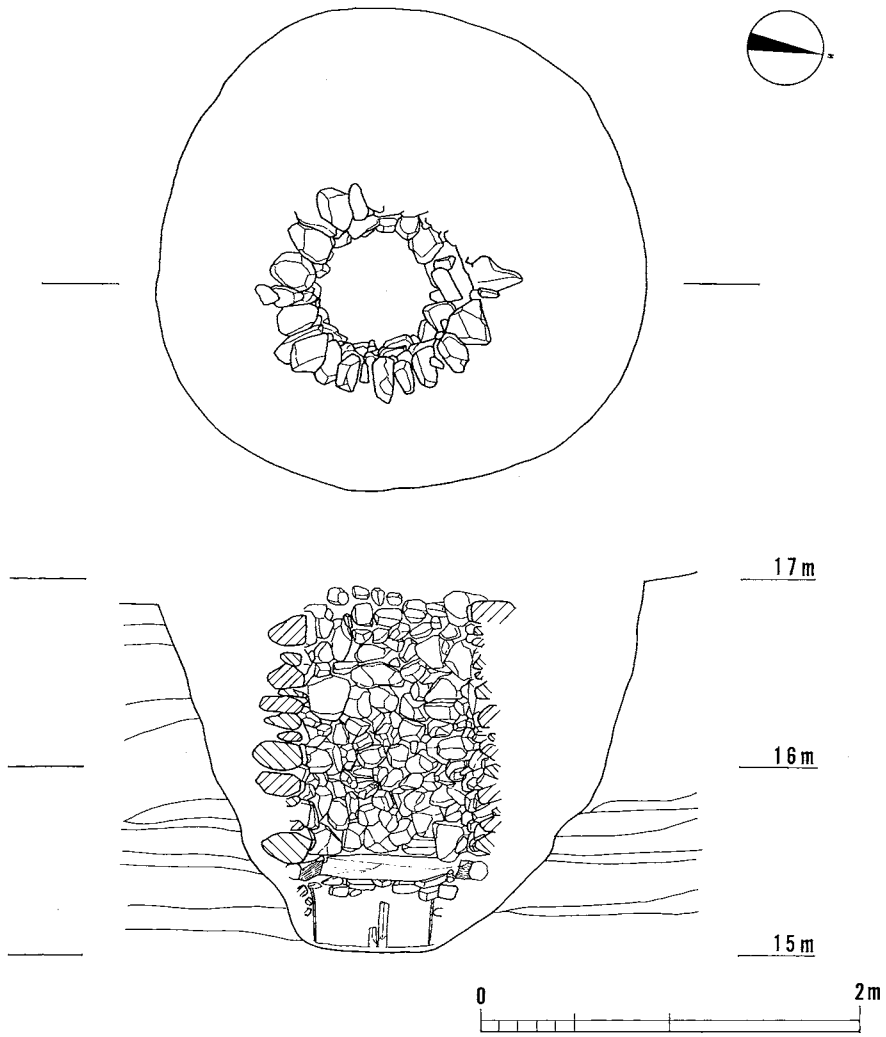


插图97 SE11





挿図98 SE12



挿図99 SE13

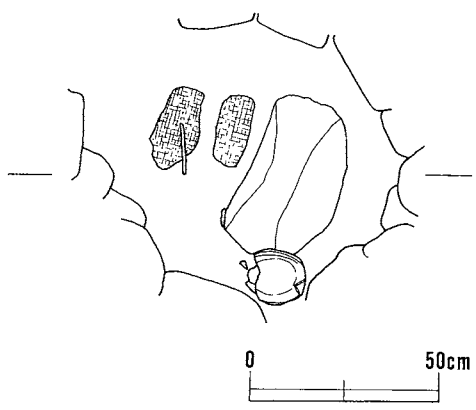
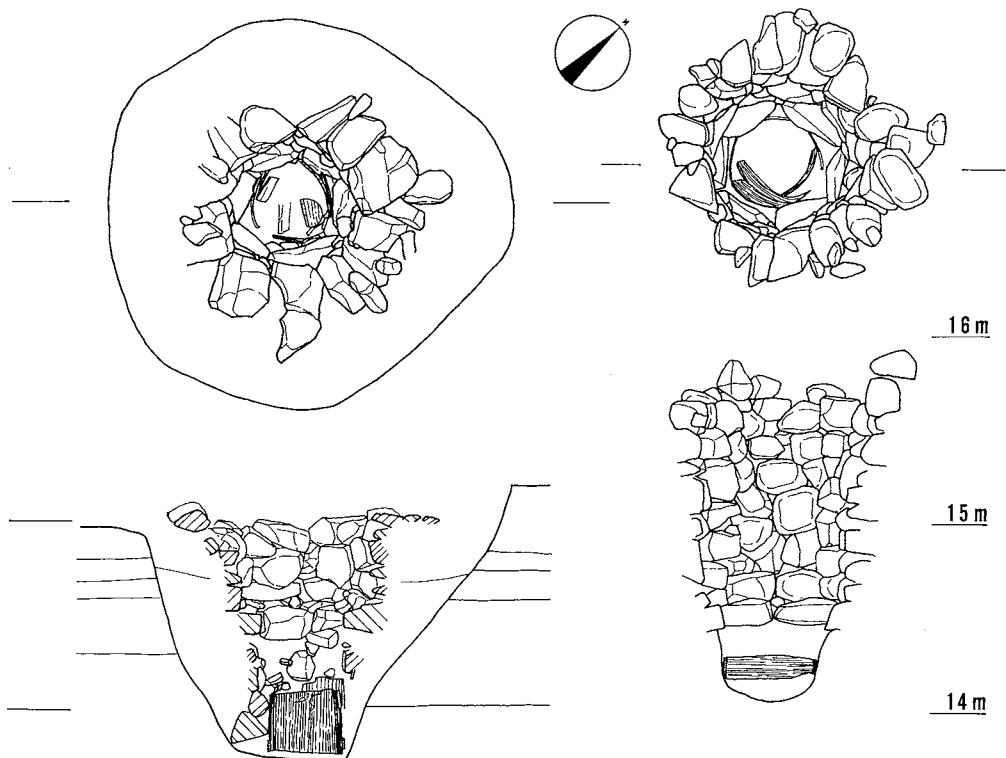


插图100 SE14

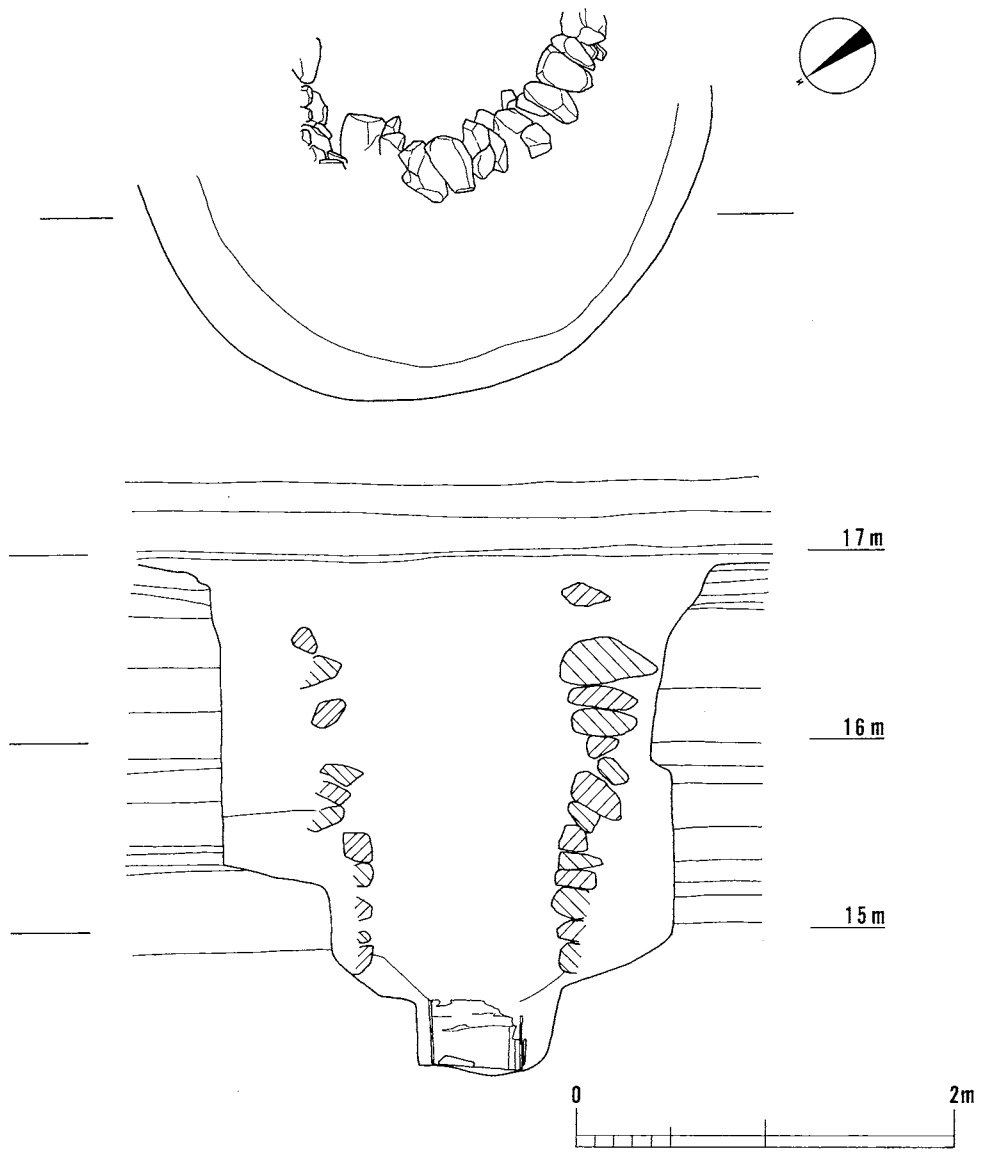
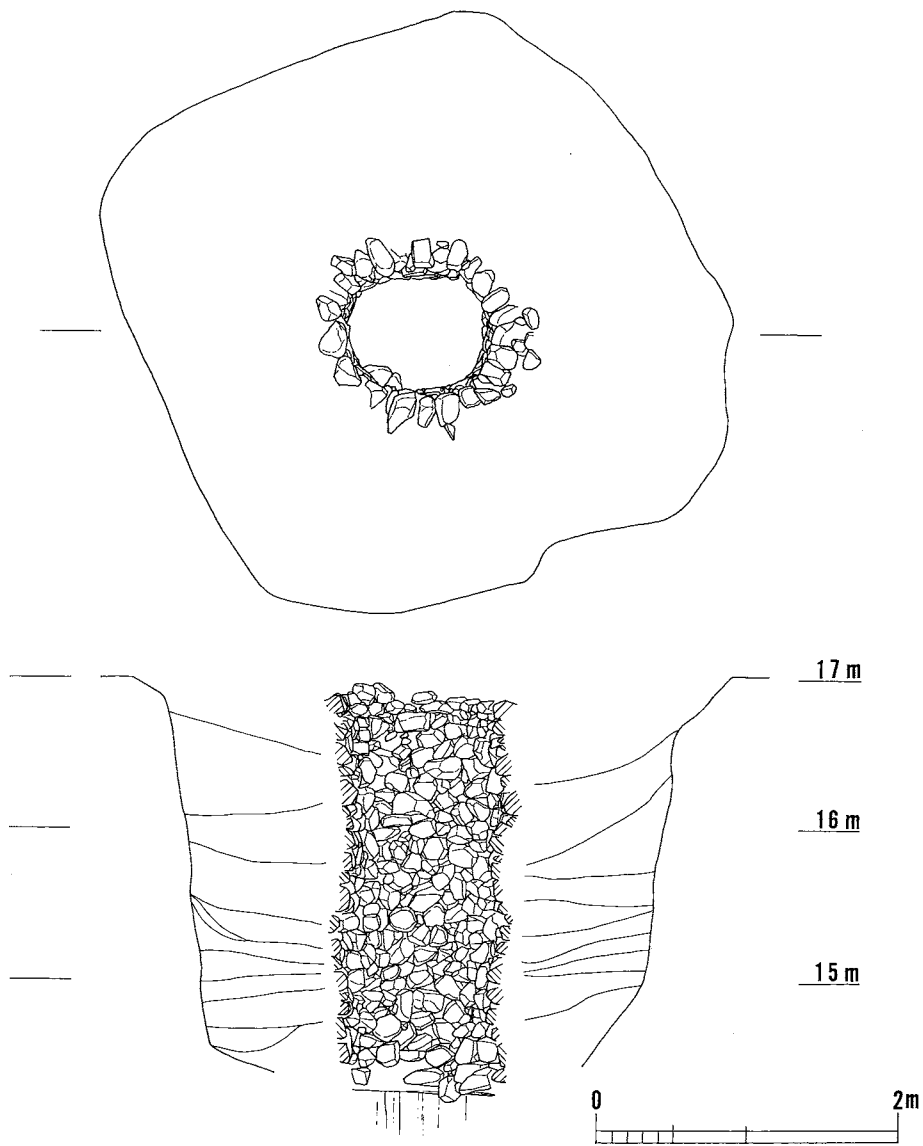
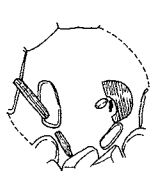
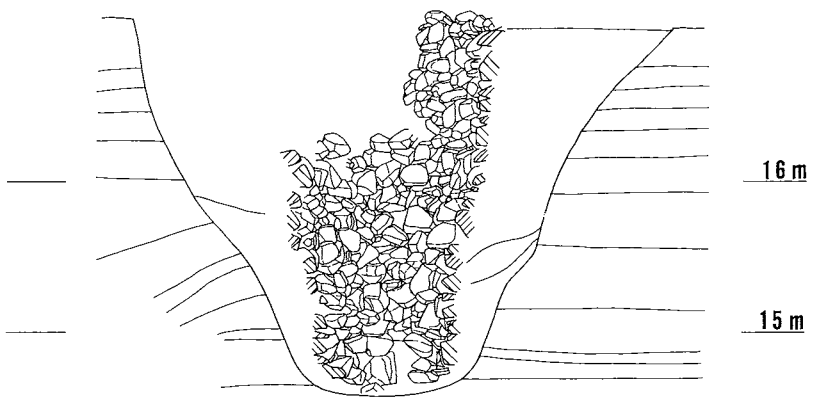
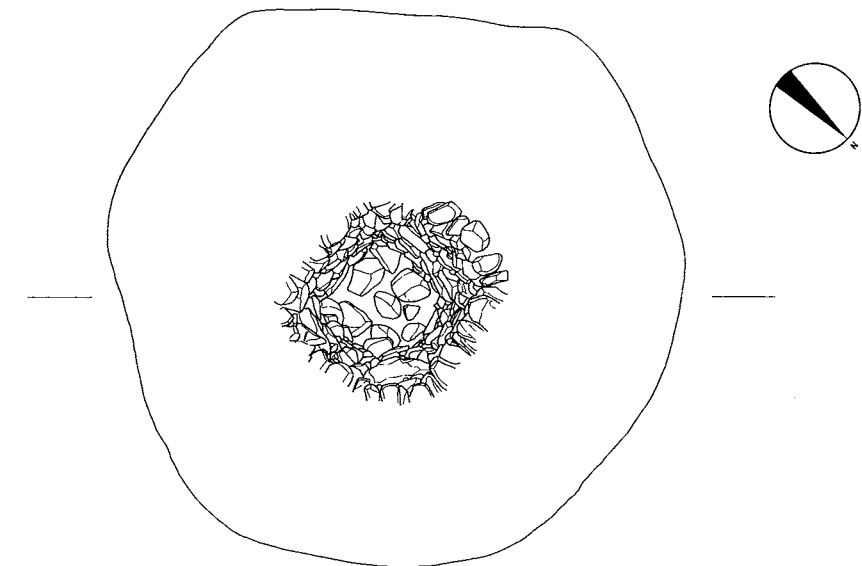


插图101 SE16



挿図102 SE18



L = 14.80m 前後の  
遺物出土状況



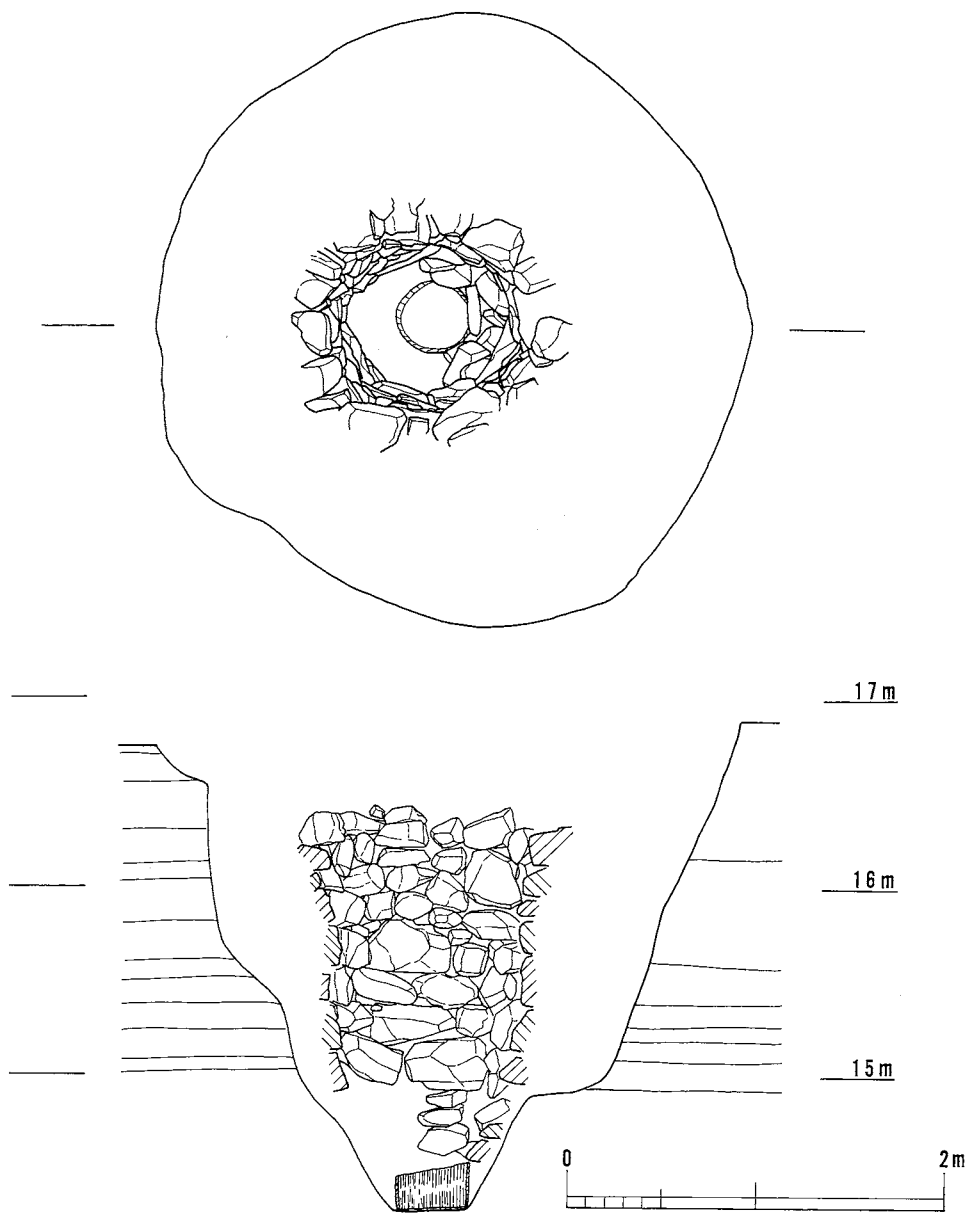
挿図103 SE19

#### SE19

S<sub>3</sub>地区の北西区で調査した井戸でこの地区では最も古い井戸である。掘り方径は3.7m、掘り方深は2.45mを計りかなり大きい。また石積高2.45mと高く、上径1.25m、下径0.75mを計るやや漏斗状の井側でBa型であり、溜水施設は不明である。水位は15.0mとやや深い。井戸の廃絶時のものか深さ14.8mには木筒状木製品と曲物底板が出土している（挿図103）。井戸から大量の遺物が出土しており、土師器皿・鍋・羽釜、須恵器小皿、魚住焼捏ね鉢、瓦器鉢・羽釜等から13世紀代（Ⅱ期）の井戸である。

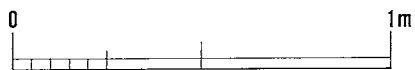
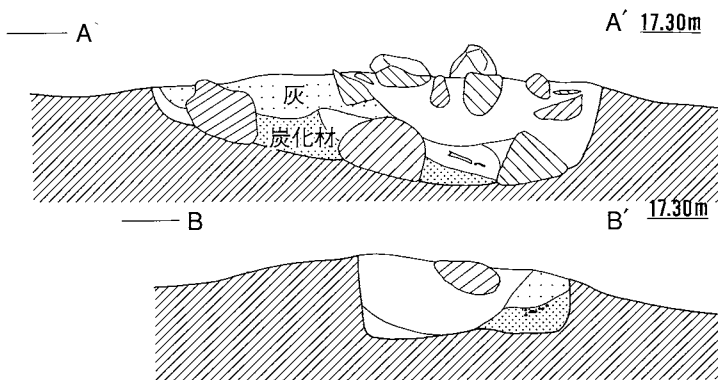
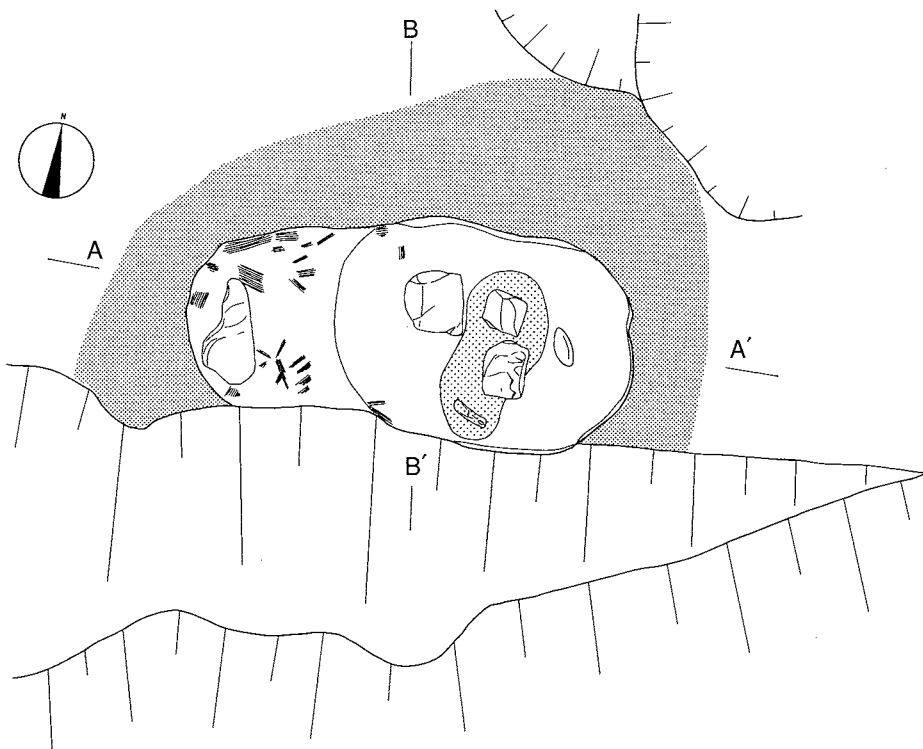
#### SE20

S<sub>3</sub>地区のSD01に上部を壊されているが、掘り方径は3.15m、掘り方深は2.8mを計り大きい。また石積高1.9mを計り、上径1.45m、下径0.9mを計るやや漏斗状の井側であり、溜水施設は曲物桶である。水位は15.0mとやや深い。井戸から土師器皿・鍋、瀬戸焼卸皿・鉢、須恵器碗、備前焼甕・播鉢等が出土しており、14世紀から15世紀代（Ⅳ期）の井戸である。

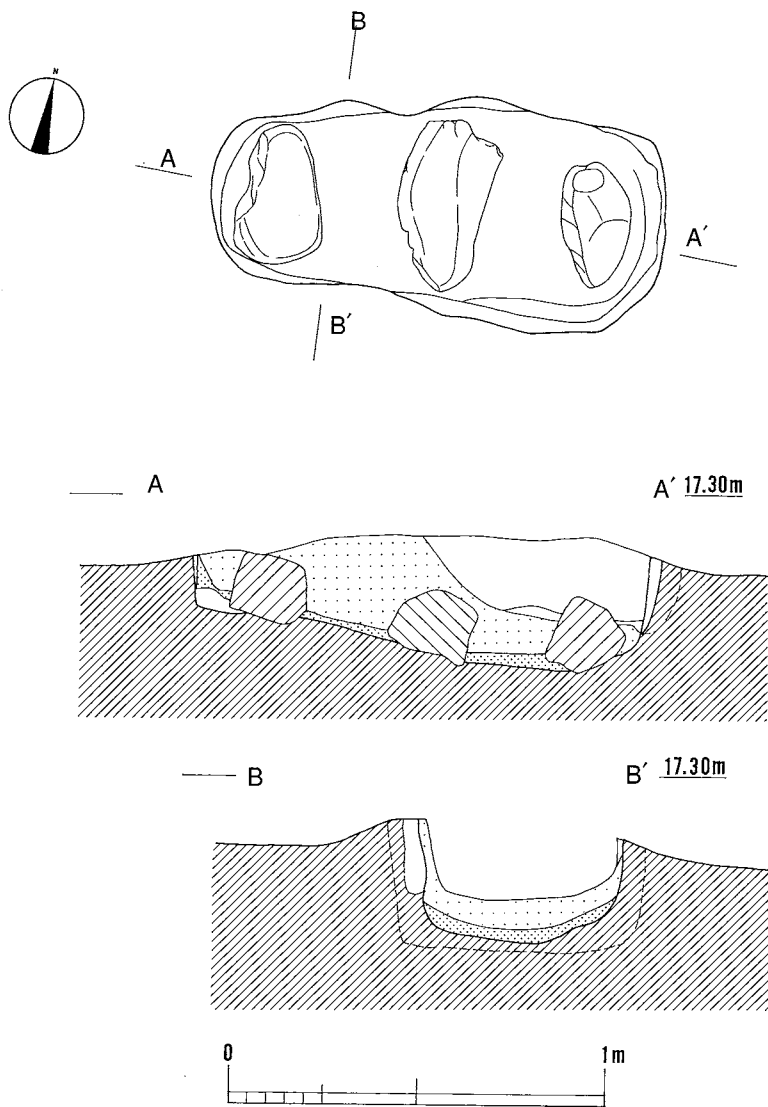


挿図104 SE20





挿図105 C<sub>1</sub>火葬施設SX01 (窯) (1)



挿図106 C<sub>1</sub>火葬施設SX01 (窆) (2)

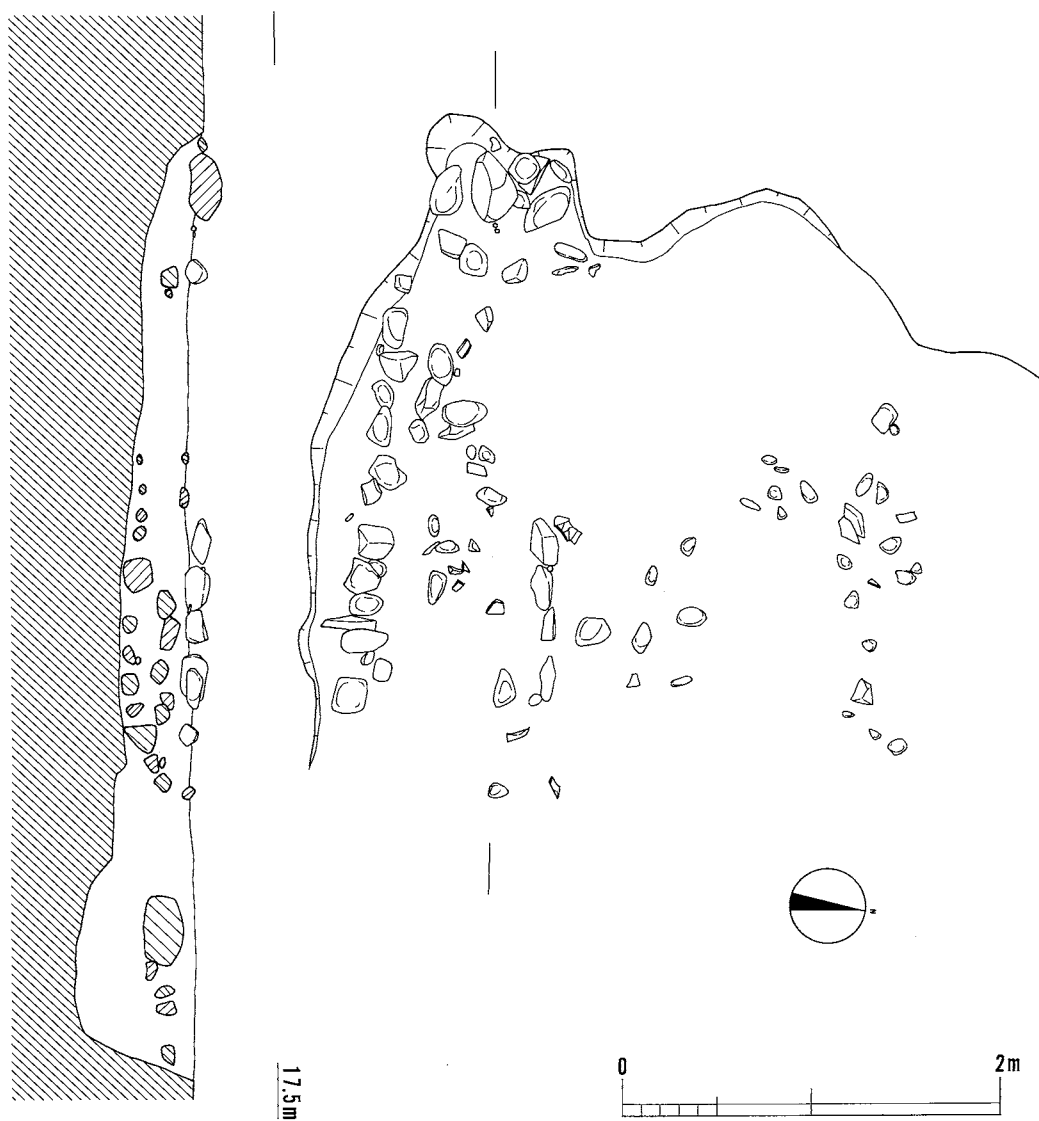
5. 火葬施設 (C<sub>1</sub>火葬施設SX01)

C<sub>1</sub>地区の方形館跡に伴う内堀で周辺の施設を壊されてはいたが、炭化材が詰まり、赤く焼けた石組み施設を発見した(図版64・挿図105)。長径120cm、短径60cmの楕円形の平面を呈するC<sub>1</sub>SX01で、調査を進めると炭化材とともに火化された骨が散見されたので、当時岡山理科大学におられた人類学の池田次郎教授にお願いし、現場で骨を鑑定していただいた。骨は人骨で600度以上に加熱されており、部分的にしか人骨は残っていないとされ、この施設は遺体を茶毘に付すための火葬施設と判断された。次に内部を詳細に調査を進め、桶棺を三石のうち東の

二石に乗せ、西の焚き口から薪をくべ、追い焚きしながら火葬した窯構造の遺構であった（挿図106）。相伴する遺物がないために時期を特定することはできないが、少なくとも方形館成立以前である。

焼骨を集め、墓へと納めるが、数次の火葬を経て残された焼骨がある。

この火葬施設の発見から方形館跡の内郭部の調査で、人骨を伴う墓や蔵骨器が相次いで発見され、いずれも方形館跡成立以前の14世紀前半の備前焼壺、魚住焼捏ね鉢、土師器皿、白磁口



挿図107 C:SK15上層遺構図



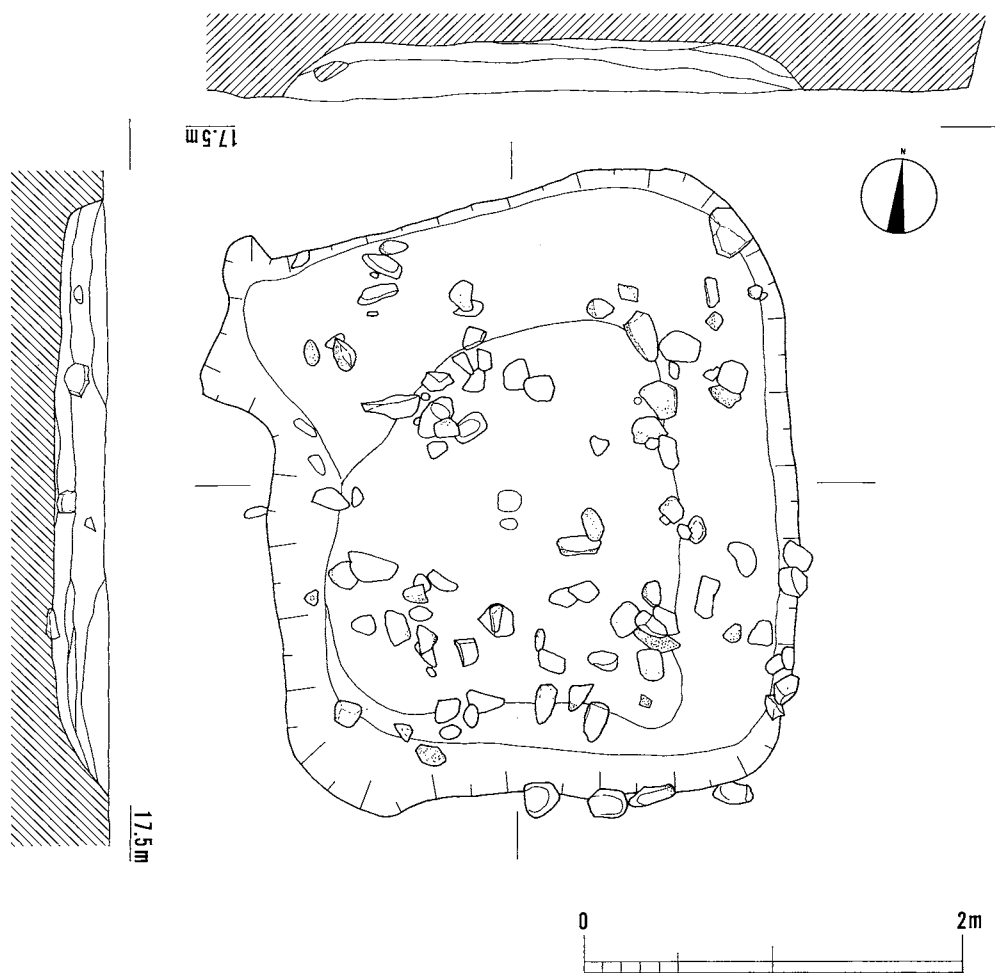
插图108 C<sub>1</sub>SK15下層遺構図

禿げ碗、皿を伴うことから、この火葬施設で焼骨とし、墓へ納めたと言える。つまり、14世紀前半の火葬施設となる。まさに「鶉莊絵図」の「満願寺」の記載にあたる地区でもあり、寺の火葬場と墓地の一画となる。なお、この場所は復元すると北西は林田川河原で画されており、三昧所となる。

## 6. 墓

墓とする遺構は焼骨を納めた墓・蔵骨器、木棺を納めた木棺墓、遺体を納めた土壙墓、木棺を納めた石室墓などがある。

C<sub>1</sub>地区は火葬施設の発見から精力的に「満願寺」の墓所を探り、後世の方形館による部分的

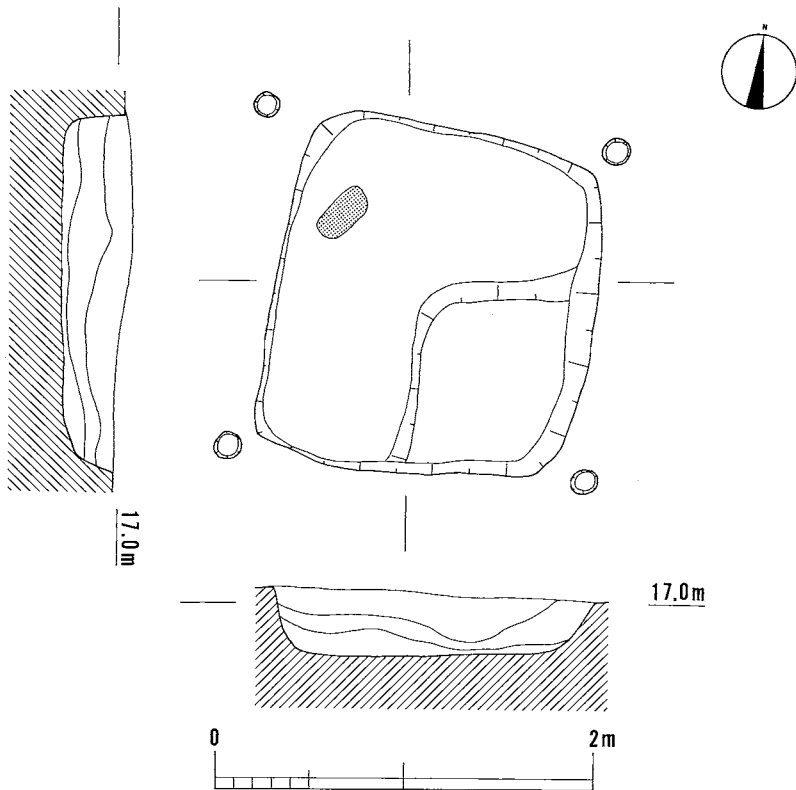


挿図109 C<sub>1</sub>SK11遺構図

な破壊はあるが、多くは14世紀前半代の墓を発見している。N<sub>1</sub>地区、N<sub>3</sub>地区などでは更に古い13世紀代の墓があり、S<sub>3</sub>地区ではⅡ面において12世紀代の墓がある。

C<sub>1</sub>SK12・13とした河原石群と備前焼壺、中世須恵器魚住焼捏ね鉢、白磁碗とともに量は少ないが焼骨が散乱しており、火葬施設の発見から焼骨を蔵骨器に納めた墓とする。上部は方形館跡の遺構で壊されていて不明である。特に魚住焼捏ね鉢は石で底を固定したような出土状況で、中からこぼれた焼骨片が少量周辺に散乱していた（図版61）。

C<sub>1</sub>SK15は墓所で、上部の構造は南と東を石で区画された状況が分かる（図版62・挿図107）。遺構精査時に極細片の骨を認めることからSK12・13と同様な火葬骨を埋葬した施設と判断した。精査を続けると下層平面（4m×4m）の南には上部の石列に対応すべき集石と埋葬施設が入るべき礫群があり、北には祀りの場か祭壇部分と考える広い空間がある（図版63・挿図108）。かつての地表面であったかのように調査直後には苔むした地表面が現れていた。特に南東隅に径約1m、深さ約30cmの土壙が穿たれており上部に礫群で被覆されていたが、埋納した状況では蔵骨器は発見されていない。魚住焼捏ね鉢、土師器皿・鍋・羽釜、備前焼播鉢、白磁



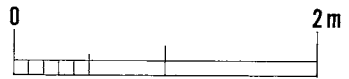
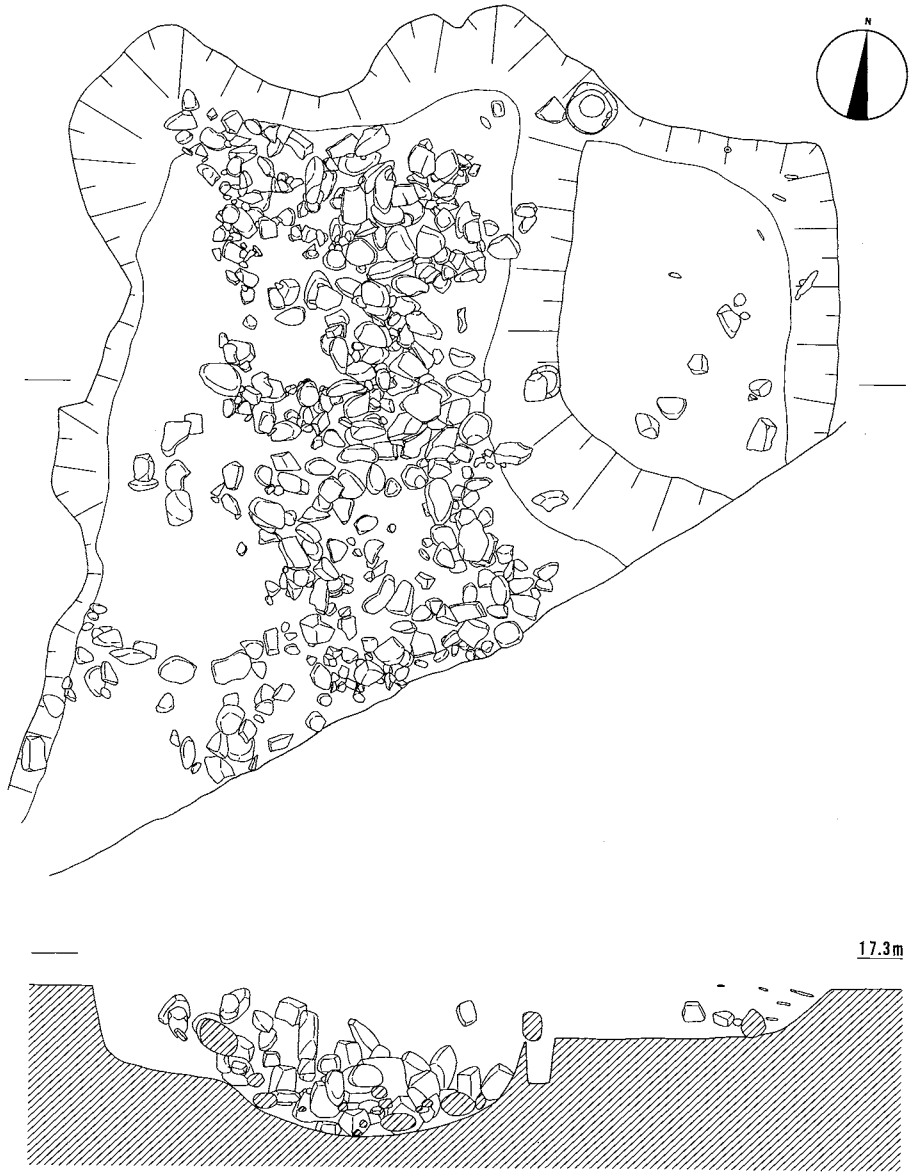
挿図110 C<sub>1</sub>SK14遺構図

皿・碗ほかの出土遺物があり、14世紀前半代である。

CiSK11は2.8m×3.2mの方形の平面に河原石で区画されおり（図版59）、深さ約30cmで中に石が多く落ち込んでおり（挿図109）、SK15やSK12・13と同様に火葬墓である。土師器皿・羽釜、備前焼播鉢、魚住焼捏ね鉢が出土した。

CiSK14はSK11の南東近くにあり、一辺が1.8mの方形で深さ約35cmを計り、南東部がやや浅い。北西の底に焼土塊が残る。炭細片と焼土が多く含まれており、方形のSK11やSK12・13と一群の火葬墓である。出土遺物は少なく土師器皿がある。

更にその南には後の調査で判明した同時期の土師器皿・鍋・羽釜、魚住焼捏ね鉢が大量に出土した一辺が4mの方形土壙（C1pdSK01）がある。火葬施設SX01から南へSK15・SK11・SK12・SK13・SK14・pdSK01と繋がり、SD17・SD18などで区画された外の位置する墓域と呼べる。



挿図111 N<sub>3</sub>SK25



C<sub>1</sub>地区以外で大形の方形掘り方を呈し、集石または区画石・石積みをもつ土壙をN<sub>3</sub>地区とS<sub>3</sub>地区でそれぞれ調査している。C<sub>1</sub>SK15と同様に火葬墓に関連するものであり、N<sub>3</sub>SK25とS<sub>3</sub>SK98である。

#### N<sub>3</sub>SK25

N<sub>3</sub>SK25は東西5m、南北5m以上の規模をもつ大形の土壙であり、東のSK01・SK02と主軸方位を同じくし、区画溝の方位である。土壙の北東に2m四角の一段高いテラス状をもち、西はより低く、土壙内には河原石が多量に入っており（挿図111）、常滑焼甕、備前焼甕、魚住焼捏ね鉢、口禿げ白磁皿、土師器皿・羽釜・鍋等の土器とともに鉄釘が出土している。集石の状況から数基の方形土壙が集まってできたとも考えられるが、土壙中央底（径約2m）には土師器鍋が納められ、中に土師器小皿が入って出土した。土師器鍋に火葬骨を納めた14世紀前半代の集石を伴う火葬墓である（図版44）。火葬骨は不明であるがC<sub>1</sub>SK15と同じ火葬墓である。

#### S<sub>3</sub>SK98

S<sub>3</sub>SK98は方形の大形火葬墓または「餓鬼草紙」に見る中世墓・供養塔の方形の下部基壇部と考える石積みのある土壙である。確認調査トレンチで発見された井戸SE14で南を破壊されてその全容は明らかにできないが、挿図112に見るとおり、東は一辺約1.8mの浅い方形土壙を切っているかのようで、東西約3.8m×南北2.2m以上を計り、約40cmの掘り方の内に石を五段以上積み上げている。また、北は半径1.8mで半円を取り付けた掘り方に石を置き区画していた。中からは青白磁合子、同安窯青磁皿、青磁蓮弁文椀や土師器皿・羽釜・鍋、魚住焼捏ね鉢片が多く出土している。12世紀代から13世紀代の幅のある遺物がある。SE14に壊されていることから14世紀以前までの使用である（挿図107）。

この他にC<sub>1</sub>地区の墓で土葬墓とするものにC<sub>1</sub>Pb木棺墓やC<sub>1</sub>SK101がある。

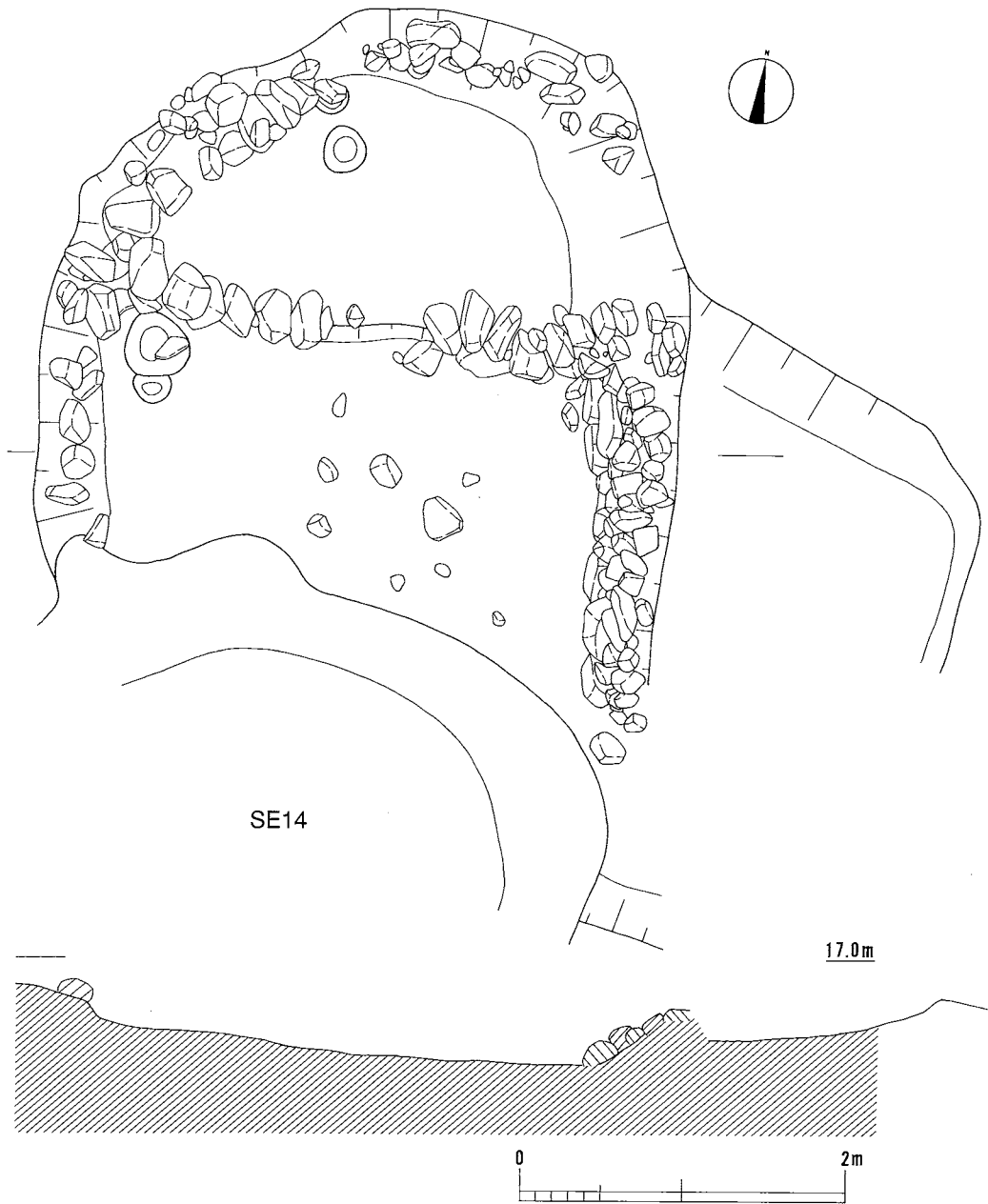
#### C<sub>1</sub>Pb木棺墓

C<sub>1</sub>地区で南の内堀際で調査された不定形土壙であったが、精査すると長辺1.9m×短辺1.2mの長方形掘り方を呈し、深さ約15cmと浅いが土師器皿8枚、小皿1枚、備前焼甕片と鋸1点を伴い、14世紀前半代の木棺墓とした（図版69）。

#### C<sub>1</sub>SK101

C<sub>1</sub>PbSK101とは違って、小型で長径1.2m×短径0.8mのやや楕円形の掘り方を呈し、深さ20cmと浅い土壙がある。中央に土師器皿が3枚出土しており、土壙墓とした（図版68）。

次にN地区での土葬墓はN<sub>1</sub>BSK2138、N<sub>2</sub>ASK18・SK21、N<sub>2</sub>ASK08、N<sub>3</sub>SK11がある。



挿図112 S3SK98遺構図

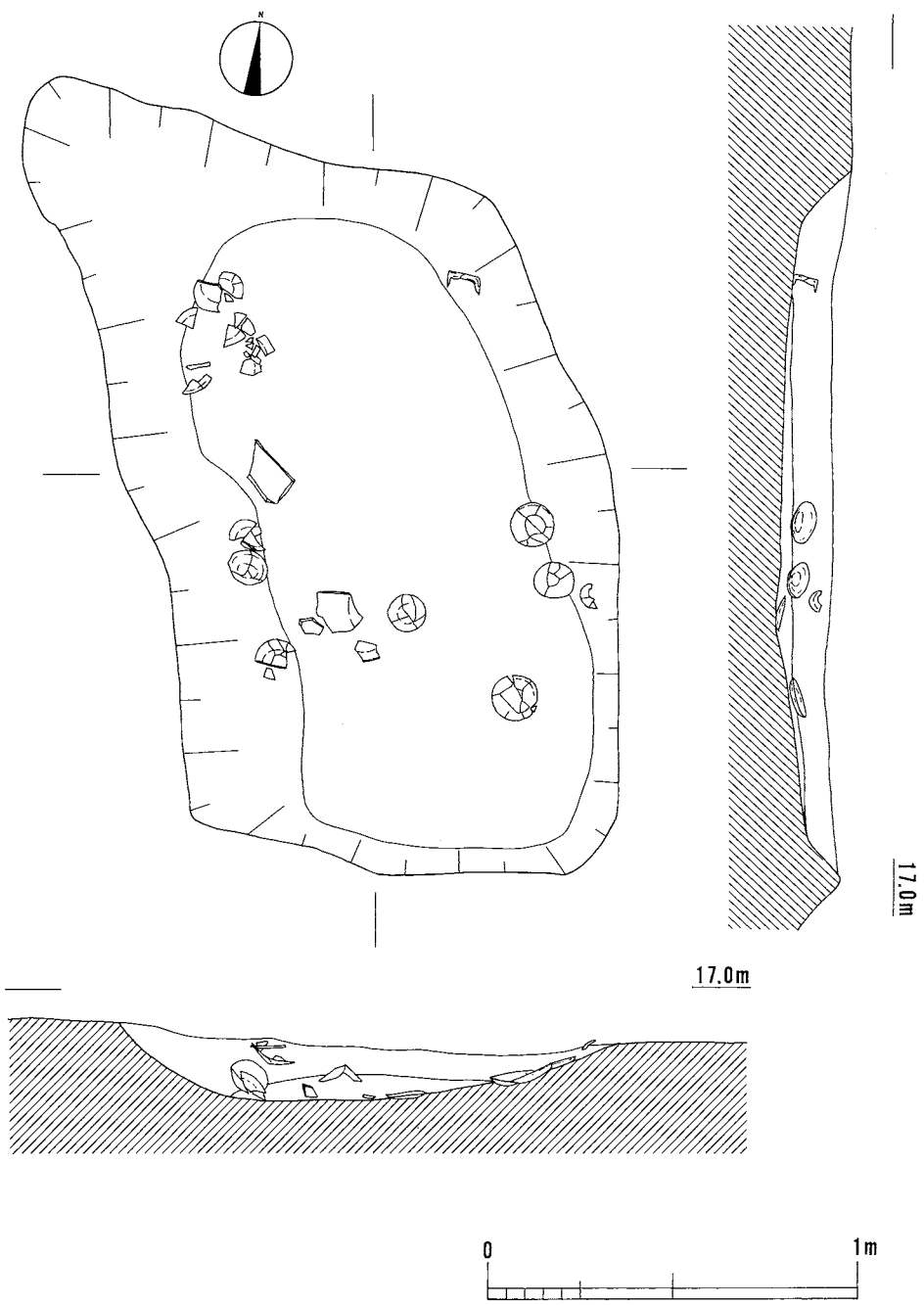


插图113 C:Pb区木棺墓

N<sub>1</sub>BSK2338

11世紀後半の須恵器碗4点を伴う土壙墓で第Ⅱ面の中世遺構の中で最古のものである(図版22)。長径2.0m×短径1.3mの楕円形の掘り方を呈し、深さ20cmを計る。西側が一段低くなっているが高い平らな底近くに北西端・東端・南端にそれぞれ須恵器碗が置かれている。北西端の須恵器碗は2個体が重なった状態であり、東端の須恵器碗は内側に傾いた状態であった。

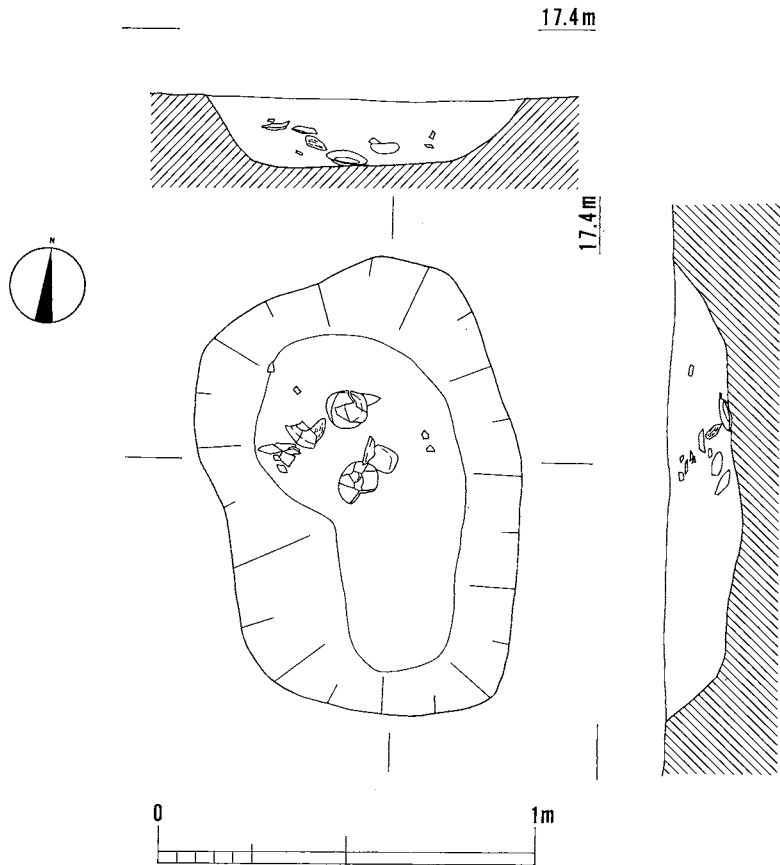
N<sub>2</sub>ASK18・SK21

二つの土壙は重ならず、平行して設けられており、SK18は長径約1.3m×短径0.9m、深さ40cmを計る楕円形の土壙で上部に河原石と土師器皿が出土している。SK21は長径約1.6m×短径0.8m、深さ40cmを計る楕円形の土壙で、土壙を覆っていた石がやや沈んで中層で発見されている(図版27)。いずれも土壙墓である。

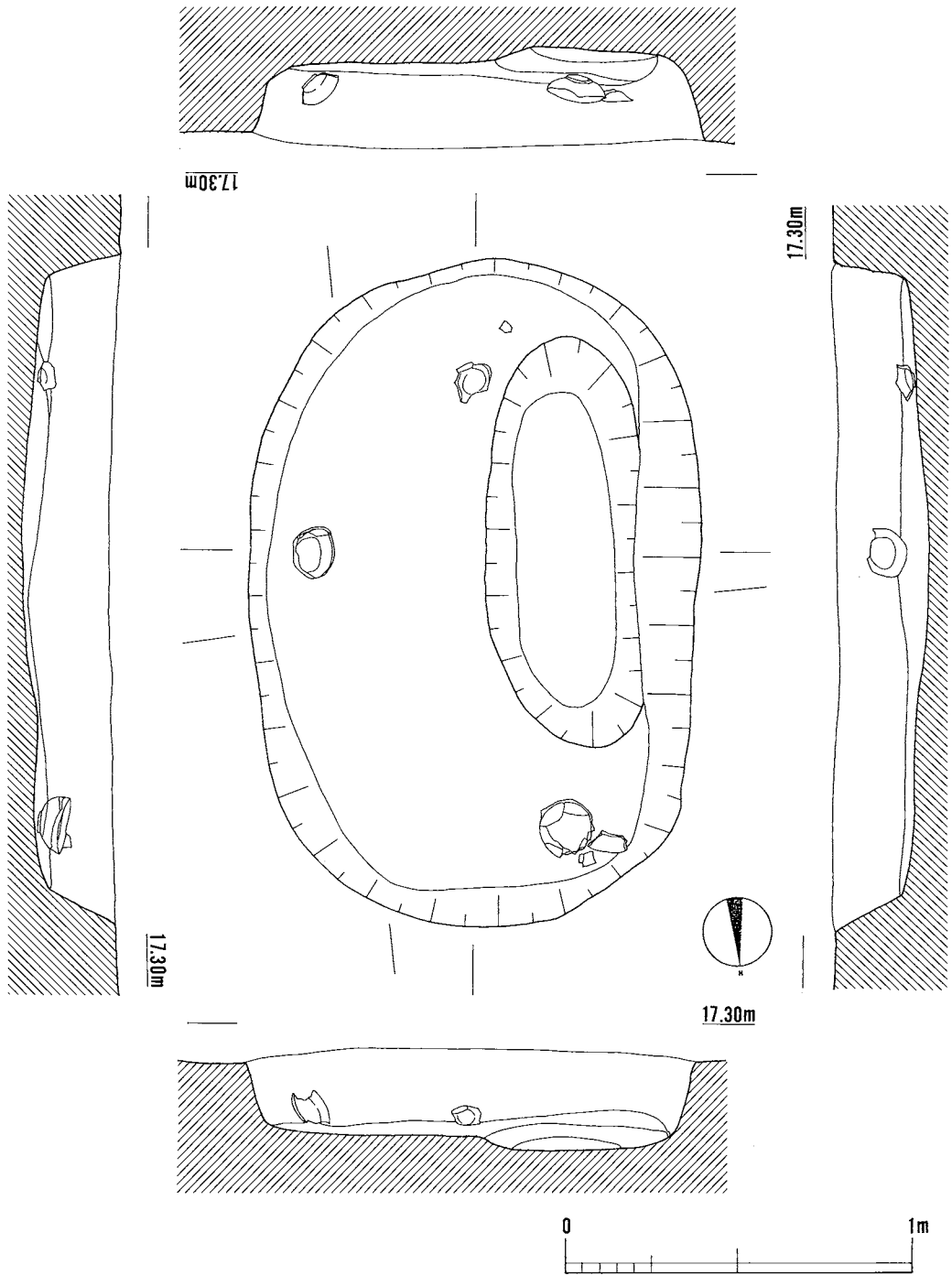
N<sub>2</sub>A地区では他に、常滑焼壺、土師器皿、褐釉陶器壺片と六道銭と考える宋銭が出土したSK08(図版29)があり、火葬骨を埋納した火葬墓である。

N<sub>3</sub>SK11

N<sub>3</sub>地区で発見した他の土壙と主軸方向が90°異なるもので、長辺2.2m×短辺1.5mの長方形の掘り方を呈し、内法長辺1.7m×短辺1mに河原石を底に敷き、側に一段石を積んだもので上部は削平されており、深さ約20cmを残すのみであるが、石室構造をとるものである。中からは釘1点と土師器小皿と魚住焼捏ね鉢片1点があるので、大人が入る大きさの木棺を入れた石室である(図版38)。



挿図114 C:SK102遺構図



挿図115 N1SK2138

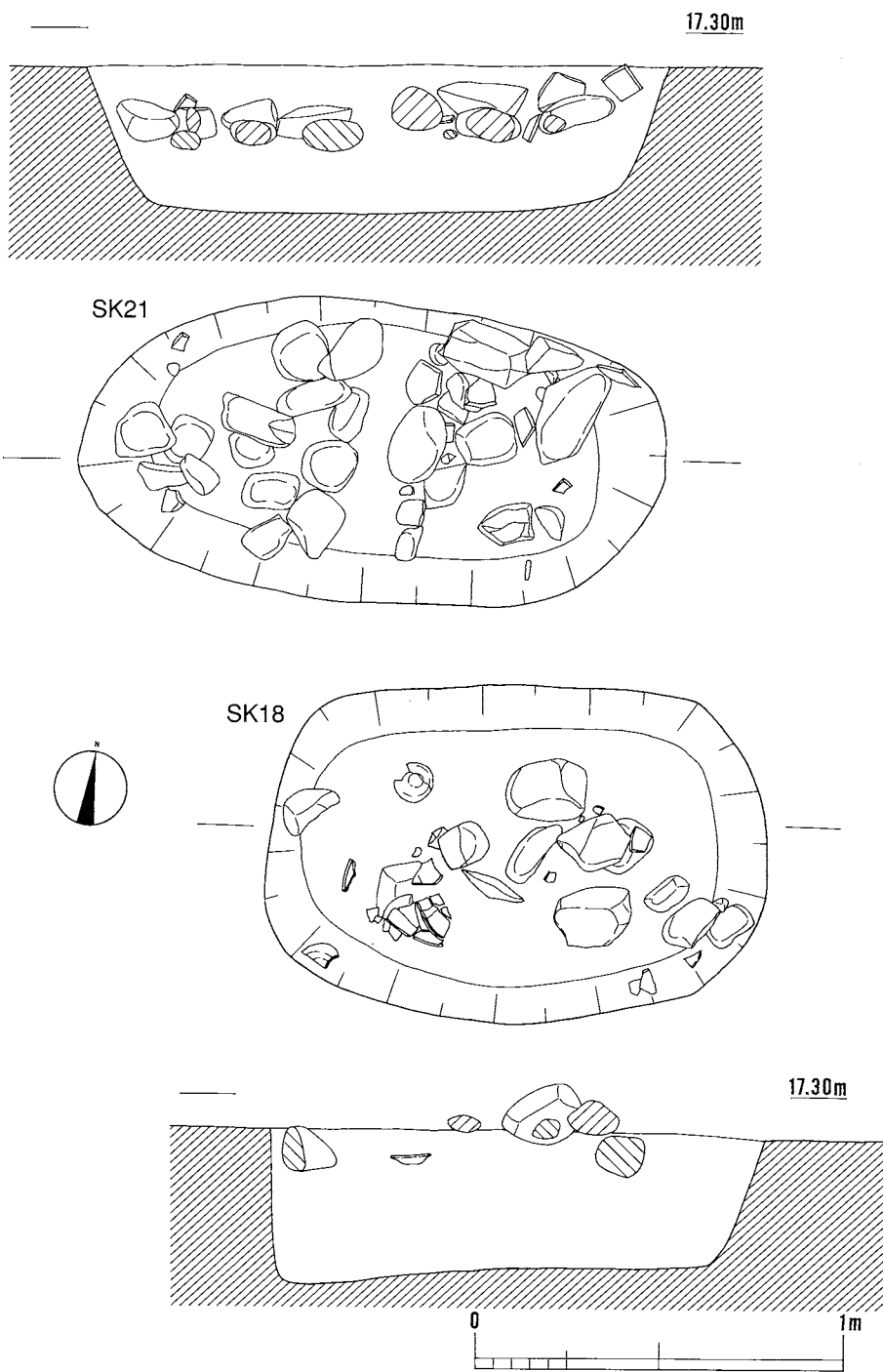
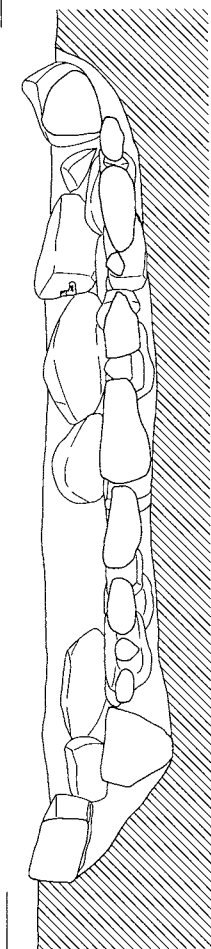


插图116 N<sub>2</sub>A SK18 · SK21

17.3m



17.3m

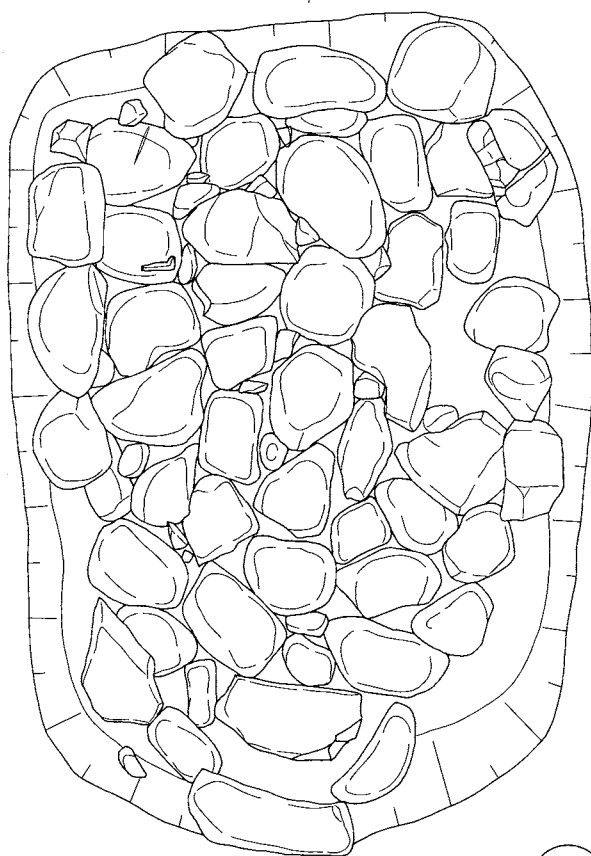
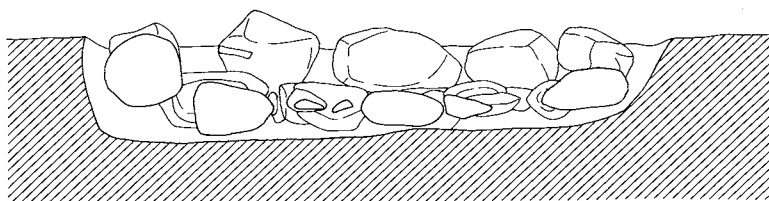


插图117 N<sub>3</sub> SK11

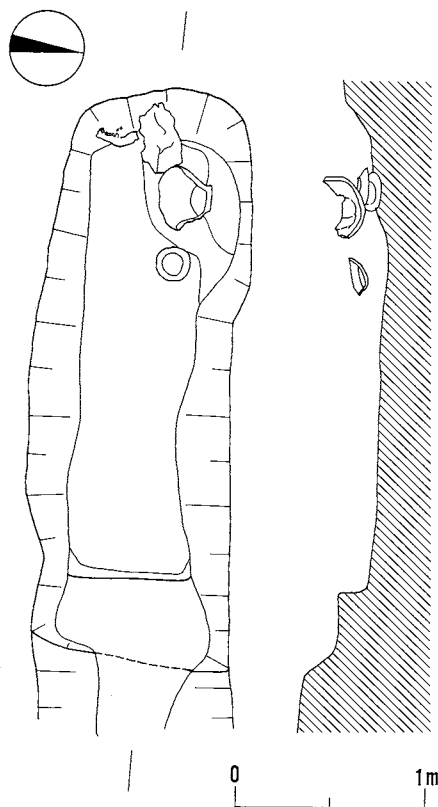
さらにS地区で土葬墓は、S<sub>3</sub>地区Ⅱ面のWad区のS<sub>3</sub>ⅡSX01やS<sub>3</sub>ⅡSK01の長方形土壙とS<sub>1</sub>地区SK28がある。

#### S<sub>3</sub>ⅡSX01

S<sub>3</sub>ⅡSX01からは西端に下顎・歯と頭骨の一部と東に大腿骨の一部が残り、人骨が埋葬されていたことが判る。頭位は西を向き、頭骨の左側に落ち込んで白磁碗1点、白磁皿3点が出土していた。また、土師器皿や須恵器碗片も出土している。墓壙の壁は緩く立ち上がり、底も皿状を呈する。長辺3m×短辺1mの長方形掘り方を呈し、長辺2m分が二段墓壙となり、深さ40cmを計る。白磁はいずれも棺上に置かれていたものが落ち込んだ状況である。なお、白磁碗の下に白磁皿二枚が伏せて重なって出土した(図版110)。高級な白磁を使用する被葬者であり、12世紀代に埋葬されている。

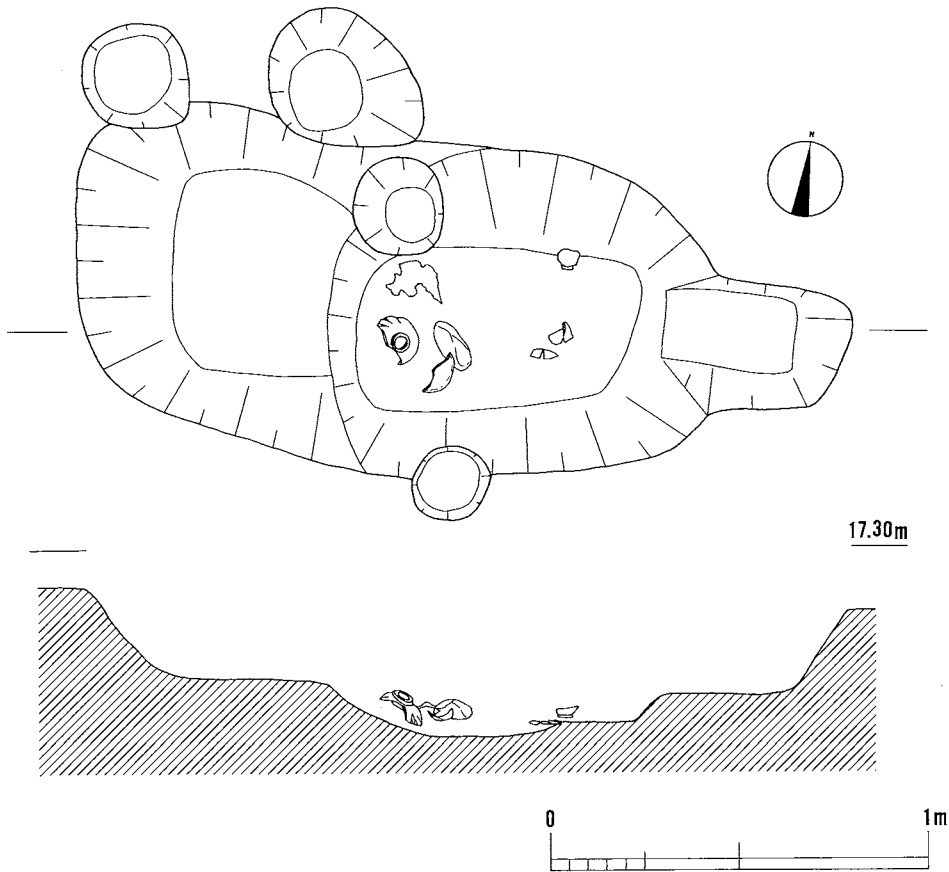
一方、S<sub>3</sub>ⅡSK01は長辺約1.9m×短辺0.9mの長方形の掘り方を呈し、深さ10cmと浅い。精査の結果、中に長辺約1.6m×0.5mの木棺を納めてことが、形状と隅から釘が出土したことで判る。棺の東端近くに須恵器碗1点と白磁細片が出土し、西

側からは白色化した数個の玉が出土した。奈良国立文化財研究所村上 隆研究官に依頼し、玉を顕微鏡観察した結果、ガラス製品と判り、改めて数珠玉の副葬が判り、頭位も西であることが判った【数珠玉は劣化が激しく、表面はかなり荒れており、少し黄色味を帯びた白色を呈する。比較的新しい破面の光学顕微鏡観察によると、数珠玉は緑色ガラスでできており、象牙質のように見える表層部はガラス層の劣化層と思われる。ただし、この時期のガラス製品としては、表面の劣化が激しく劣化層もかなり厚い点など検討の余地を残している。今後、埋納環境との関係も考慮した総合的な解析が必要となろう(村上 隆氏分析・略報から)】。



挿図118 S<sub>3</sub>Ⅱ SX01





挿図119 S<sub>1</sub> SK28

#### S<sub>1</sub>SK28

S<sub>1</sub>地区西端の方に3基の土壙が重なっている中にS<sub>1</sub>SK28はあるが、長辺1m×短辺0.9mのやや丸みを帯びた長方形土壙である。漆が残り木質は不明であるが漆箱が納められていたものか、大蓮弁文青磁碗と土師器皿・小皿が硯とともに出土している（図版95）。

他にS<sub>1</sub>地区にはほとんど遺物を含まない性格が不明である長方形土壙が、規模は異なるが軸線を同じくして並行する。つまりSK10・SK11・SK12の3基がある。

なお、N地区で墓とは言い切れないがやや不定形なる掘り方を呈するが二段掘り方を偏って穿つN<sub>1</sub>BSK3066がある。N<sub>1</sub>地区東区南半で検出した長辺2.3m×短辺1.5mの不整形な楕円形の掘り方を呈し、更に長辺1.4m×0.6mの二段掘り方で深さ40cmを計る。上には集石が見られ、中に落ち込んだように20cm大の石数個と壙底近くに土師器皿11枚・小皿6枚出土し、他に須恵器碗片、備前焼壺底片と土師器鍋が出土している（図版19）。

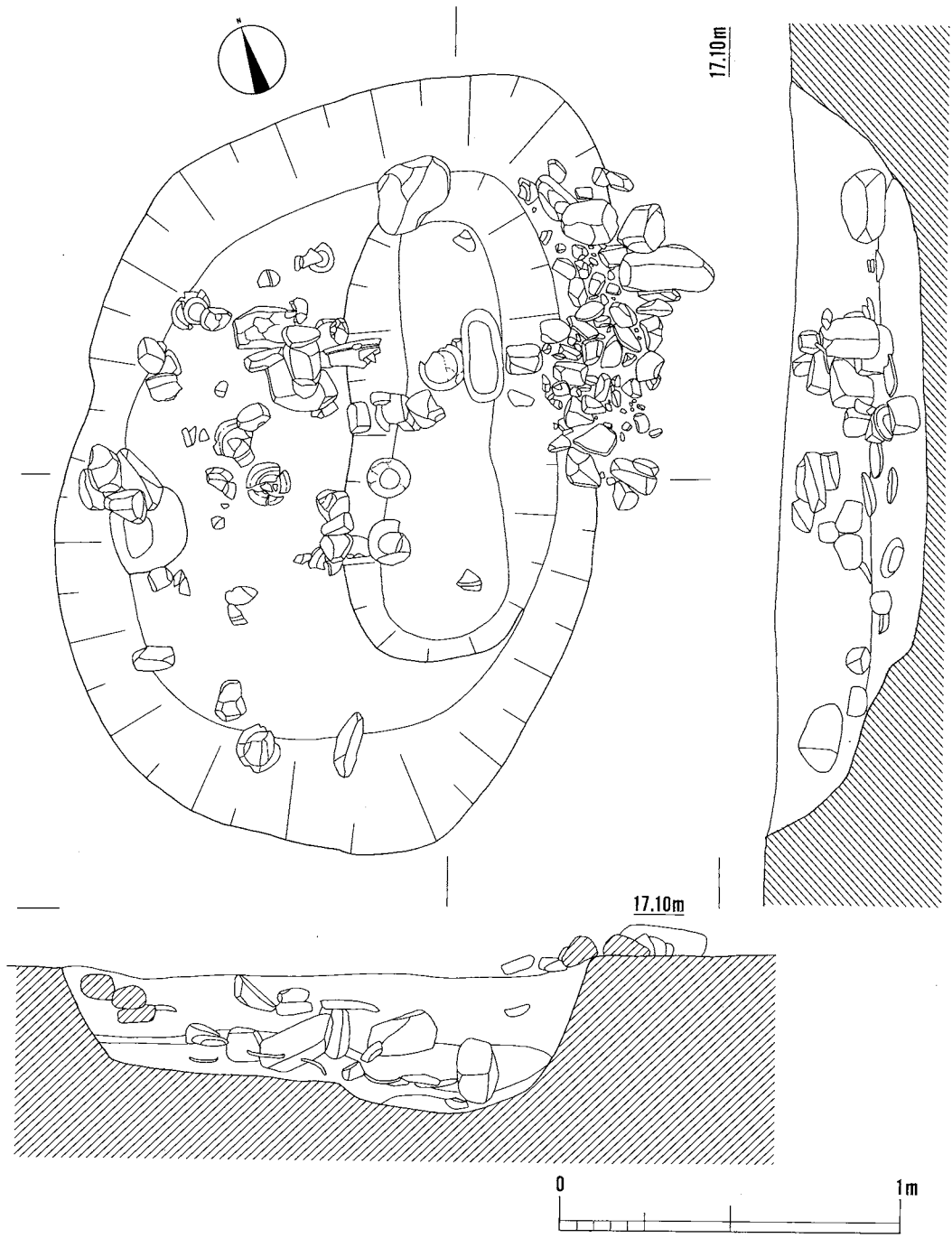
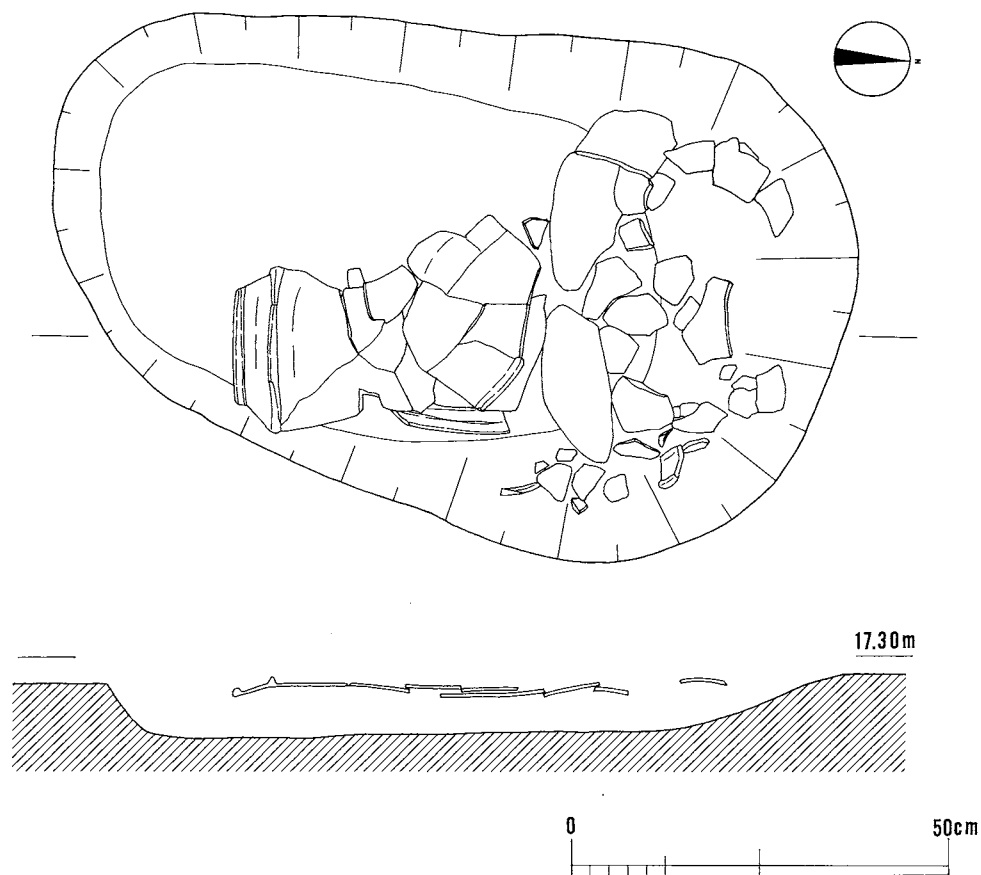


插图120 N<sub>1</sub> SK3066



挿図121 N<sub>2</sub>A SK10

## 7. 土 壙

前述のように火葬墓・土葬墓（木棺墓・土壙墓）以外で際立ったあり方をしている土壙を取り上げる。各地区の調査でも述べられているが遺物の収まり方や集石の状況に特徴的なものを説明する。

はじめにN地区の羽釜を納めた土壙から述べる。

N<sub>2</sub>ASK10（図版30）

N<sub>2</sub>ASK10は長径約1m×短径0.6mのやや楕円形の掘り方を呈し、深さ10cmも残ってはいなかったが、瓦器羽釜と口縁部のない須恵器甕が伏せた状態で土壙に蓋をするかのような状態であった。その下の空間はあまりにも狭い。

N<sub>1</sub>BSK3072（図版21）

直径1.4mのやや歪んだ円形を呈し、深さ60cmを計る土壙内底に羽釜が埋置されており、羽

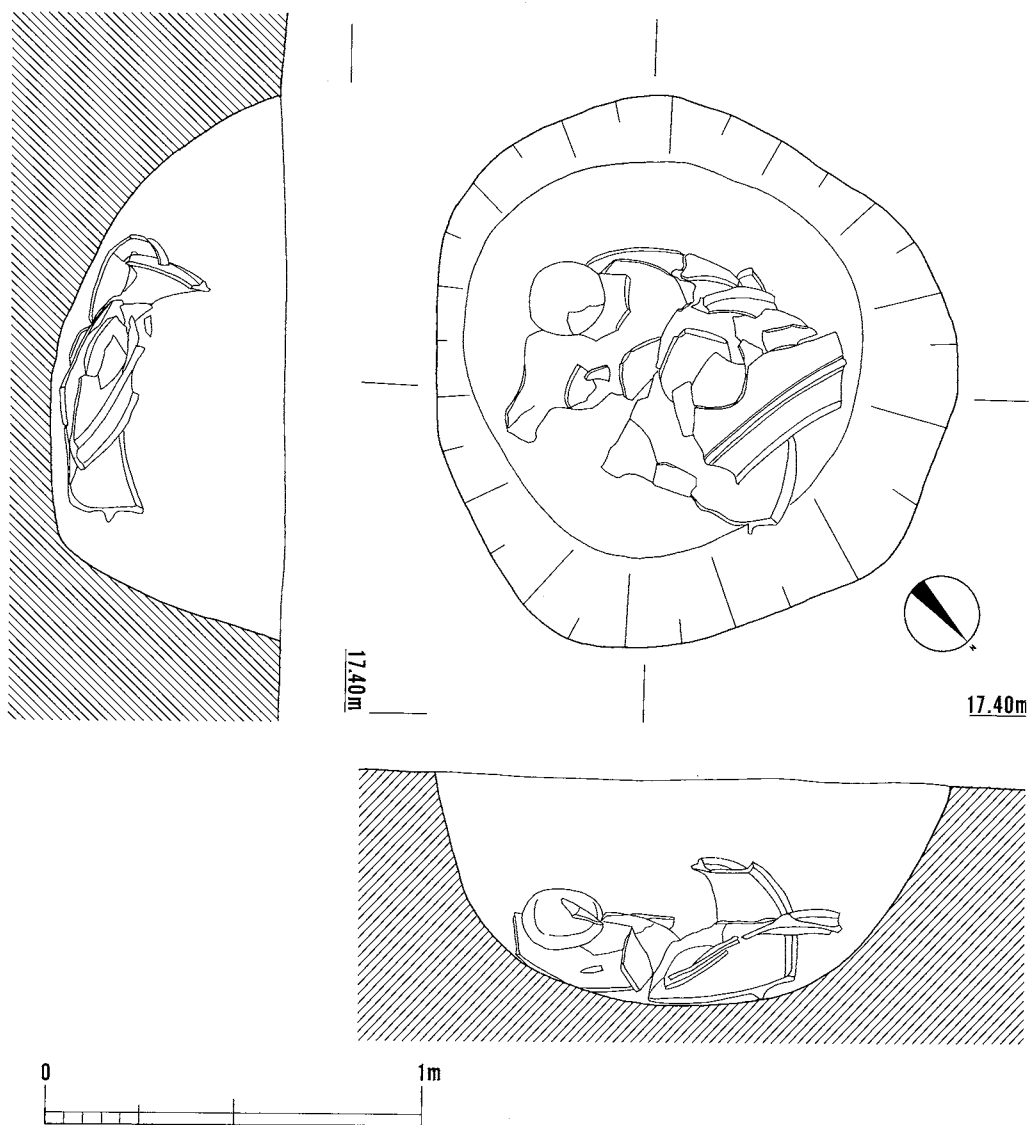
釜内に土師器皿2枚が埋納されていた。火葬墓等の可能性がある。

続いて顕著な集石を伴う土壌がある。

はじめにN地区から述べる。

N<sub>1</sub>BSK3065 (図版20)

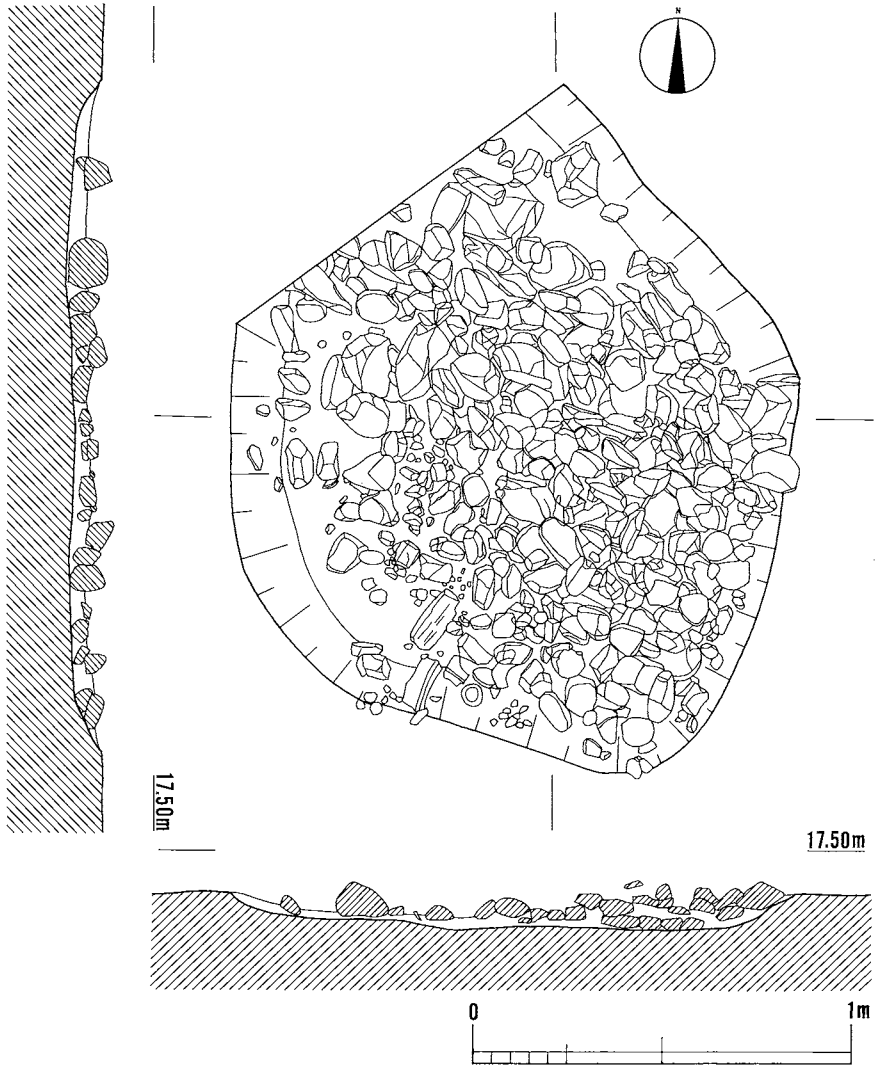
N<sub>1</sub>地区東区南半で検出したSK3066の5 m北側に位置している。SK3066と軸線を同じくし区画溝と平行する。SK3066とは異なり、廃棄土壌または性格不明で土器を多量に投棄した土壌



挿図122 N<sub>1</sub> SK3072



插图123 N<sub>1</sub> SK3065

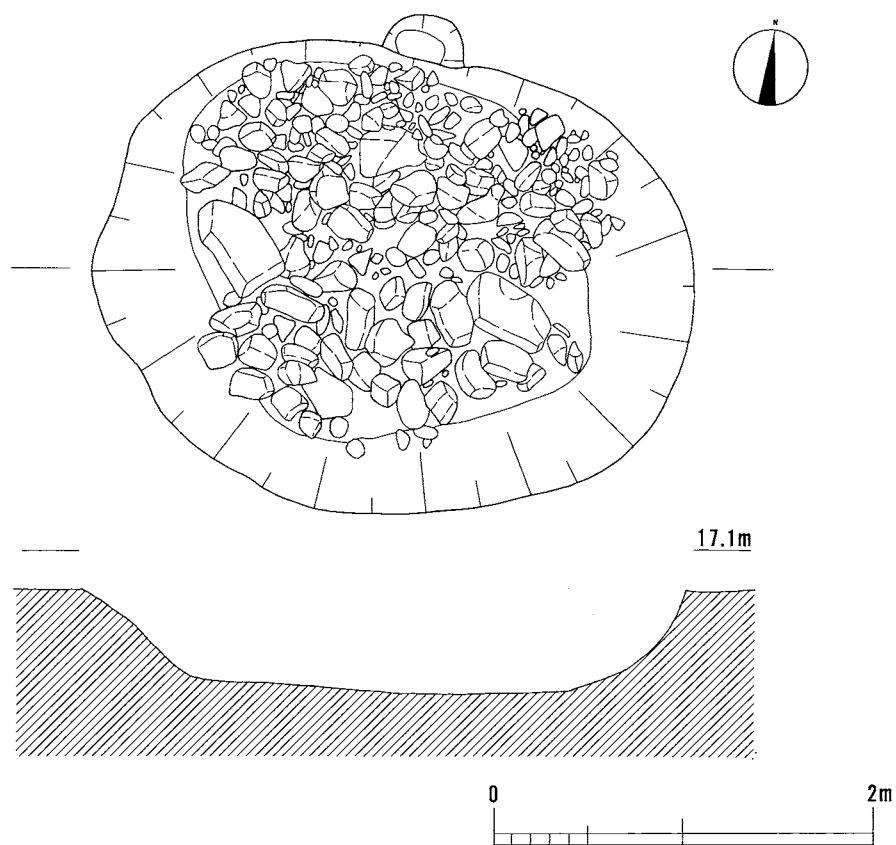


挿図124 N<sub>1</sub> SK3192

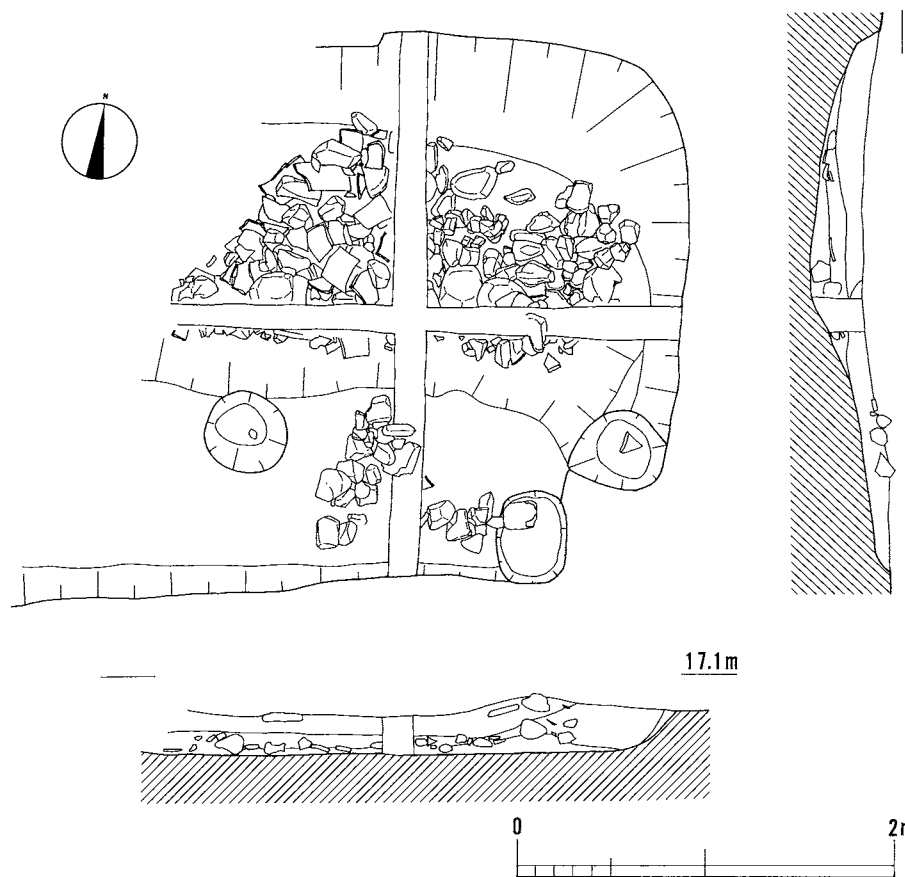
である。長径2.7m×短径1.5mの楕円形掘り方を呈し、深さ45cmを計る。上面は一面に、少しの土師器皿などが混じるが礫を敷きつめたように出土。中面では上と変わって破碎した土器で覆われており、更に下面中央では少し大きな石と土器が埋まっていた。中・下層からは土師器皿、瀬戸焼おろし皿などと、復元ができた備前焼Ⅱ期の甕、魚住焼甕等が出土し、上層の礫面を覆う自然流入土内から土師器羽釜が出土した。

NiBSK3192

また、NiBSK31はN地区北西隅で発見された集石土壙で、長径1.6m×短径1.5mの不定形の掘り方を呈し、深さ10cmと極めて浅い。上部を削平されており、断面から見ると壙底に石を敷き詰めたように並んでいるが、廃棄された状況である。石の間から宋代同安窯系青磁小皿・無文青磁碗片が魚住焼捏ね鉢、土師器羽釜・鍋とともに出土している（図版22）。



挿図125 S<sub>3</sub> SK49遺構図



挿図126 C<sub>3</sub> SK04遺構図

次はS地区に集石土壙について述べる。

S<sub>3</sub>SK49 (図版106)

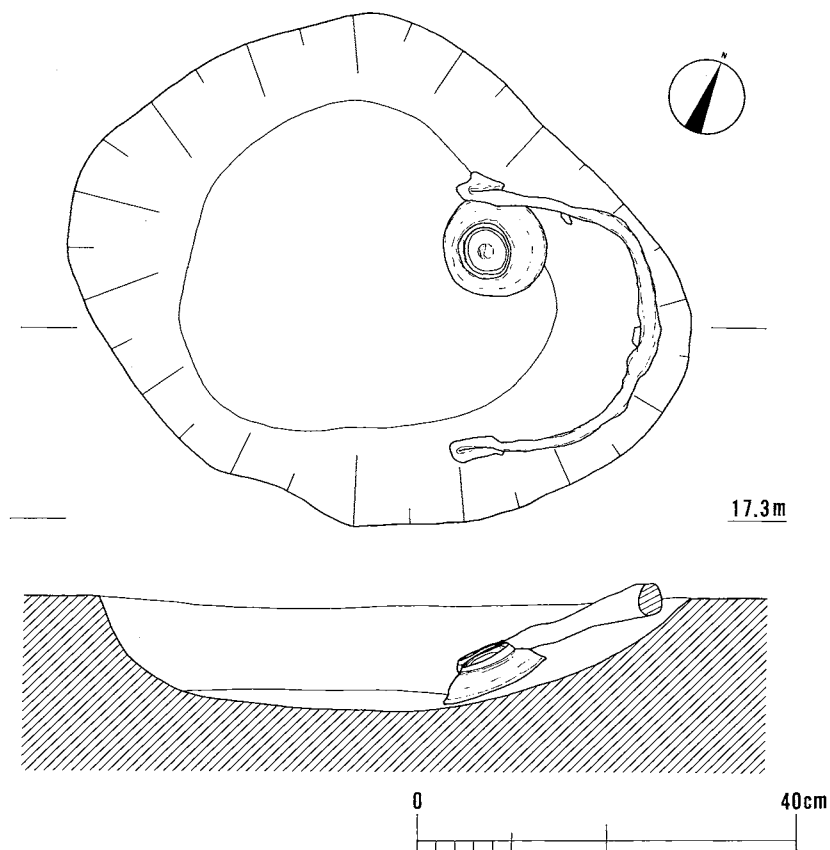
S<sub>3</sub>地区南端近くにS<sub>3</sub>SK49が位置し、長径3.2m×短径2.4mの楕円形で深さ60cmと深い土壙内に2か所の集石がある。北は長辺2m、短辺1mの長方形に拳大の石を並べた部分と、南は頭大から拳大の石を比較的乱雑に集めた部分がある。中から瓦質火鉢や白磁碗、土師器鍋・鉢が出土した。集石の下には特に施設は認めない。

他の用途としての土壙がある。壁土土取りのための土壙で土取り後に壊れた備前焼大甕等を焼け落ちた壁や石とともに埋め込んでいる土壙がある。

C<sub>3</sub>SK04はC<sub>1</sub>SK04につながる土壙で備前焼Ⅳ期からⅤ期の三石入りの大甕が多数出土した。約2m×4m以上の大型掘り方をもつが深さ約30cmと浅い土壙である。

他に長径約65cm×短径48cmの不定形土壙で、深さが10cmと浅く、壙底に15世紀前半代の青磁





挿図127 C<sub>1</sub> SK100遺構図

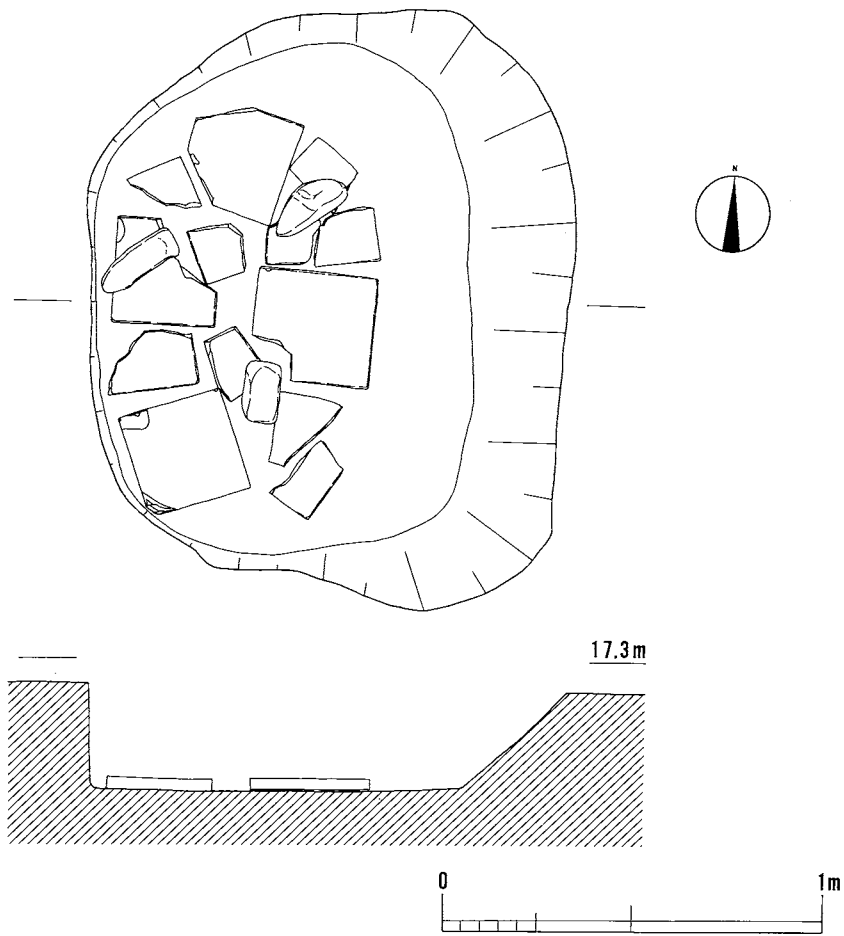
皿完形品とその上に鉄鍋の把手が出土した不思議な土壇、C<sub>1</sub>SK100がある。土壇は洪水砂で埋まっていた。

C<sub>2</sub>地区にも性格不明の土壇底を丁寧に仕上げるためか磚を敷いた土壇がある。

C<sub>2</sub>SK03は、磚土壇といえる。底に一辺25cmの磚を数枚敷いた、長辺1.4m×短辺1.0mの平面方形の深さ30cmの土壇である。磚は内堀などからも出土しているが、このように遺構として使われたものはない。この土壇内からは磚以外出土していない。底を丁寧に作り出すための遺構として以外は不明である。方形館の時期の遺構である。

S<sub>1</sub>SK06は竈ではないかと判断する遺構である。やや三角形状に土壇を穿ち、中に粗い石をまた三角形に組んだものである（図版95）。組まれた石が焼けており、建物68の外に位置するが一考に値する。

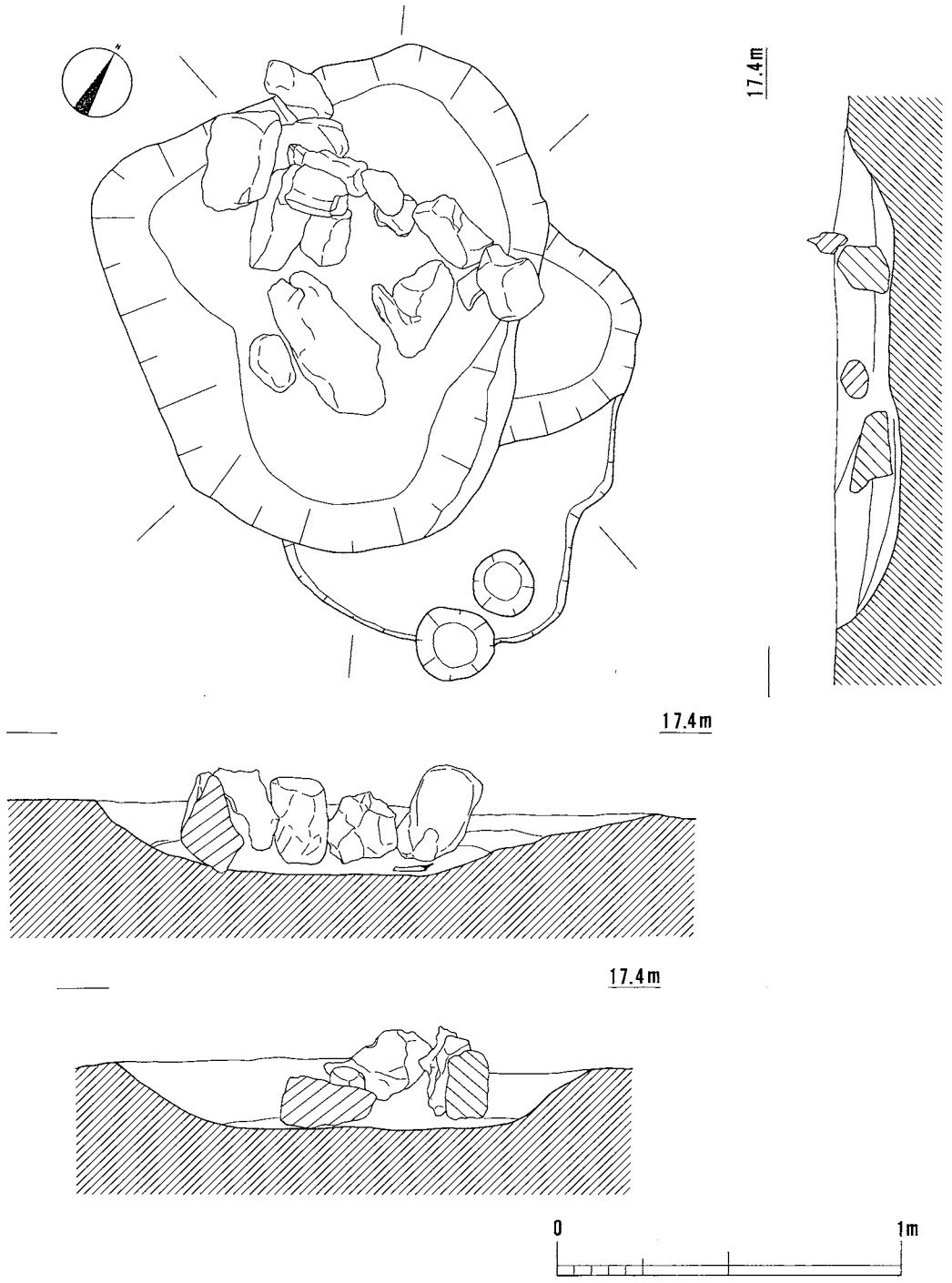
また、S<sub>1</sub>ⅡSK42はS<sub>1</sub>地区西南端でサブトレンチで南は明らかではないが2m四方の方形土壇が復元できる。ピットもあるが定かではなく、石と瓦質火鉢片や土師器皿・羽釜、魚住焼鉢、



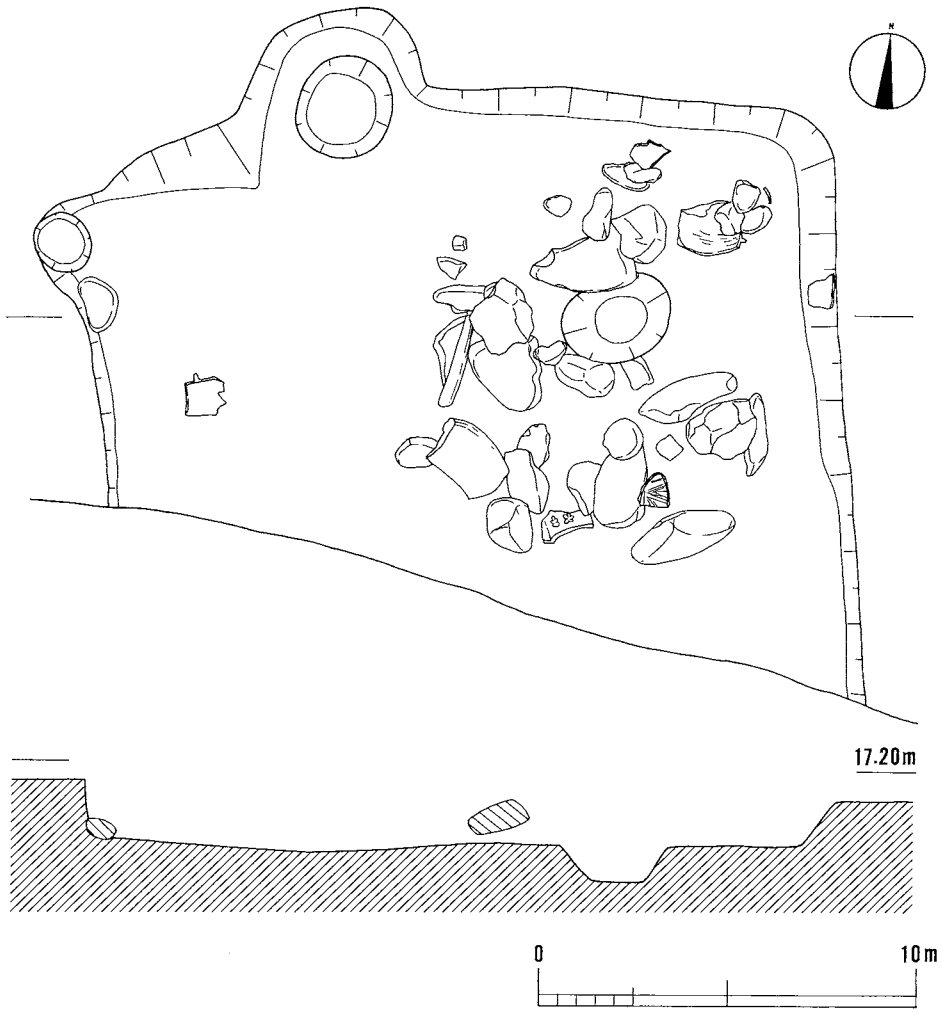
挿図128 G<sub>2</sub> SK03

備前焼甕が出土した土壙である。

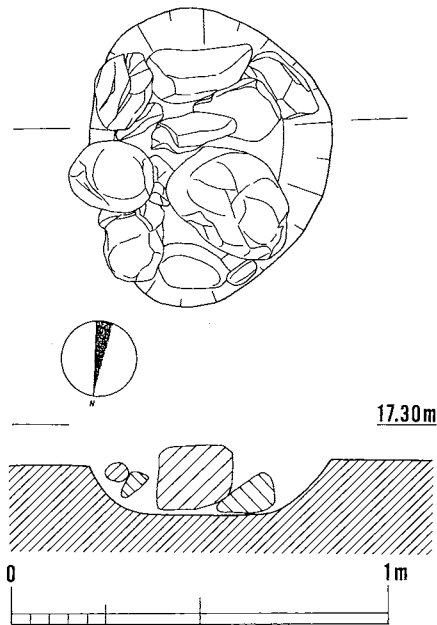
最後にN<sub>2</sub>ASK25は焼けた河原石を詰めた土壙である。用途は不明。60cm×80cmの楕円形を呈する深さ約15cmの浅い土壙である。



挿図129 S1SK06



挿図130 S<sub>1</sub> II SK42

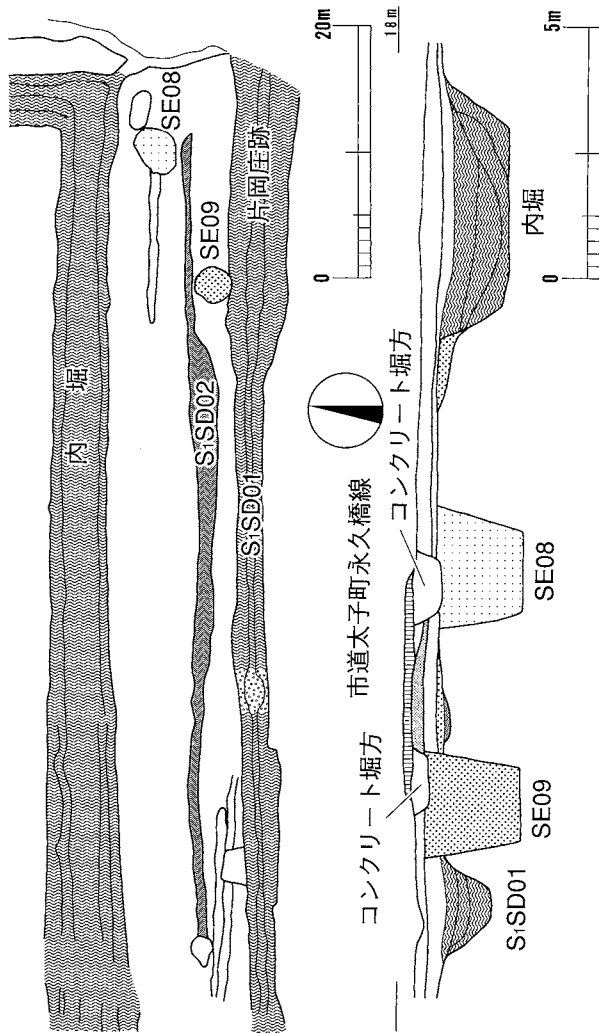


挿図131 N<sub>2</sub>A SK25

## 8. 筑紫大道

嘉暦4（1329）年・至徳3（1368）年の「鶉莊絵図」の復元から、西方十条と十一條との間に朱線で描かれた「筑紫大道」が、現市道太子町永久橋線下に比定できる。ここを調査すると、筑紫大道と井戸の概念図（挿図132）に見るとおり、市道太子町永久橋線の道路舗装面下に旧の道路面と南北両側溝が現れ、その下に検出された近世以降の井戸SE09を除くと、15世紀後半から16世紀にかけての内堀と片岡庄堀・SD01で挟まれた11m幅の空間、14世紀前半代の遺物で埋まったSD02を南限とし、13世紀代に丁寧に埋められた井戸SE08を含めた内堀への空間の広がり、つまり最低南北幅が6m以上はあり、東西は50m以上のびている。これを中世前半期の「筑紫大道」とする。ただし、道路北限は内堀とし、幅は不明である。また、道路面は自然堤防状で礫面が安定して続いた。東のSE08付近で平安時代後期下層面では水田土壌の発見と水田経営に携わる人と牛、犁跡、特に回耕状況などが調査されており、水田や井戸を整理し、区画を新しく設け「筑紫大道」として中世山陽道を整備を急いだ状況が判る。

ただし、後世の方形館跡の外堀が南下した洪水で大きくこの空間を削っている。また、洪水後にこの外堀の西側護岸修復など手を入れて、空間を維持していることから、中世前半期に設けられた「筑紫大道」を館群に組み入れていることなど、中世後半期の状況の一端が判る。



挿図132 筑紫大道と井戸の概念図

## 第6節 江戸時代の遺構

江戸時代以降近代のまでの水田・畑に関係する遺構が調査されている。井戸、荒河井堰と土器廃棄土壌などがある。中央地区・南地区にあり、「播電」の軌道関係の施設で壊されたりしたものか北地区には明確な遺構は発見されていない。

調査地区内の水田・畑呼称の復元により、中央地区では蔵人畑・堀廻り・中町、南地区では高畑・三反田・五反田があり、畑・水田の古い形状が想起できる。その水田・畑と井戸などの遺構との繋がりを考えることにする。

天保8年宿村（福田村）絵図（「龍野市史」第5巻）によると、林田川により西を弘山村と境し、北は内山村、東は松尾村、南は馬場村に囲まれている。天正5年（1577）羽柴秀吉の播磨侵攻により鶴荘が消滅してから幕藩体制となり、姫路藩から新宮藩を経て龍野藩領として推移しながら宿村は江戸時代には環壕を持つ農村となり、調査地点は水田となっている。

荒河井堰と溝、赤井から南に引き込んだ片岡溝で囲まれ、林田川の氾濫原の状況も看取される。絵図ではすべて水田となっているが、水田呼称が江戸時代の状況を示している。

宿呼称は古代山陽道布施駅家推定地小犬丸遺跡（龍野市）の南東に存在し、高田駅家推定地（赤穂郡上郡町）の近くにも在り、中世からの山陽道沿いが考慮され「筑紫大道」の考証に役立つ。

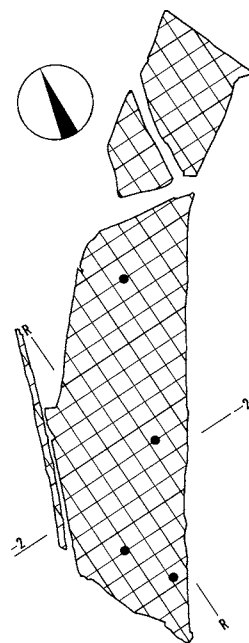
### 1. 井戸（図版、挿図）

A. 杭・竹・筵等を使った井戸状遺構とB. 石組井戸がそれぞれ2基ずつある。

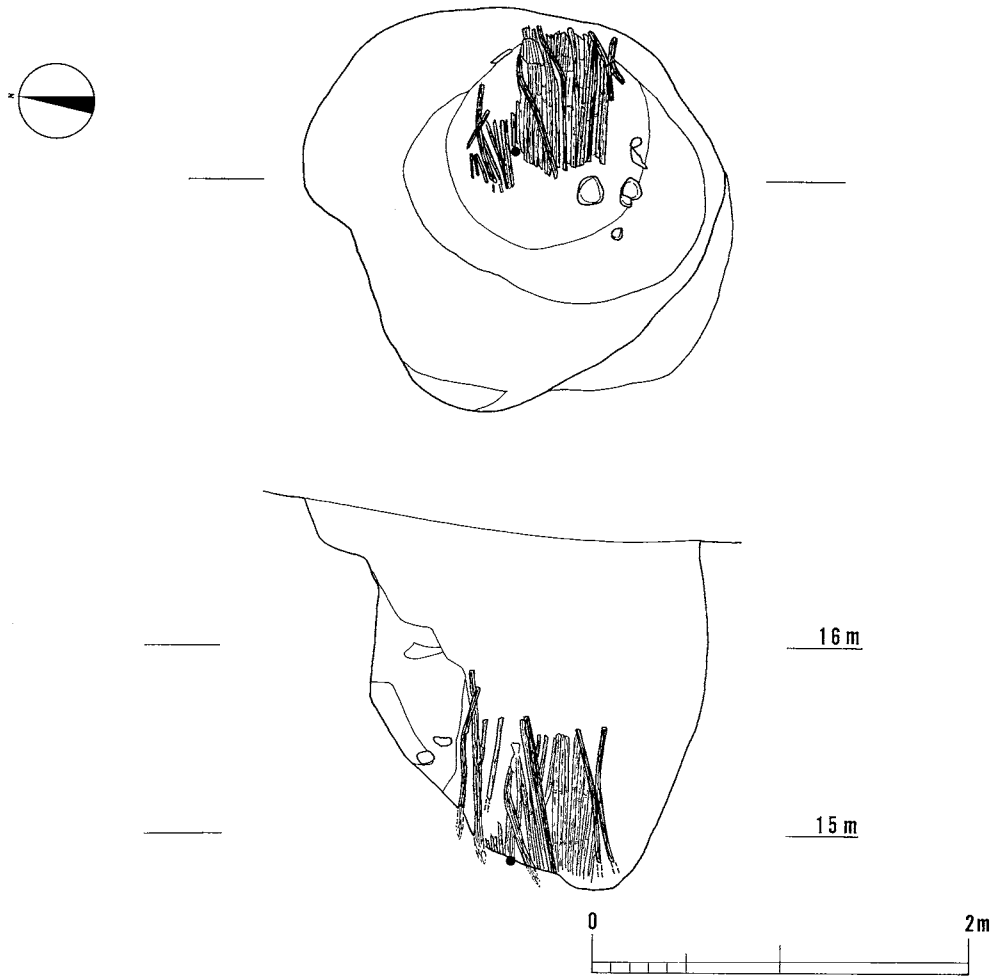
A. 井戸状遺構はC<sub>1</sub>地区SE07とS<sub>1</sub>地区SE09、B. 石組井戸はS<sub>3</sub>地区SE15とSE17である。南地区は16世紀以降1.6m以上の堆積が認められ、湧水点に達するまで深く石組井戸を構築しなければ畑の水を潤すことが出来なかったようであり（SE15とSE17）、荒河井堰からの取水は不可能であった。SE07とSE09は水田の側にあり、上層の方形館跡の堀際に位置している。掘り方の土壌に杭を打ち込んで、壁との間を竹や筵を使って目地を埋める構造が考えられる。

#### A. 井戸状遺構

SE07はC<sub>1</sub>地区東西堀北肩に直径約1.6m程の円形の掘り方を呈し、深さ約1.8mを計る。壁が崩れて残る掘り方は約2.0mを計る。



挿図133 近世井戸位置図



挿図134 SE07

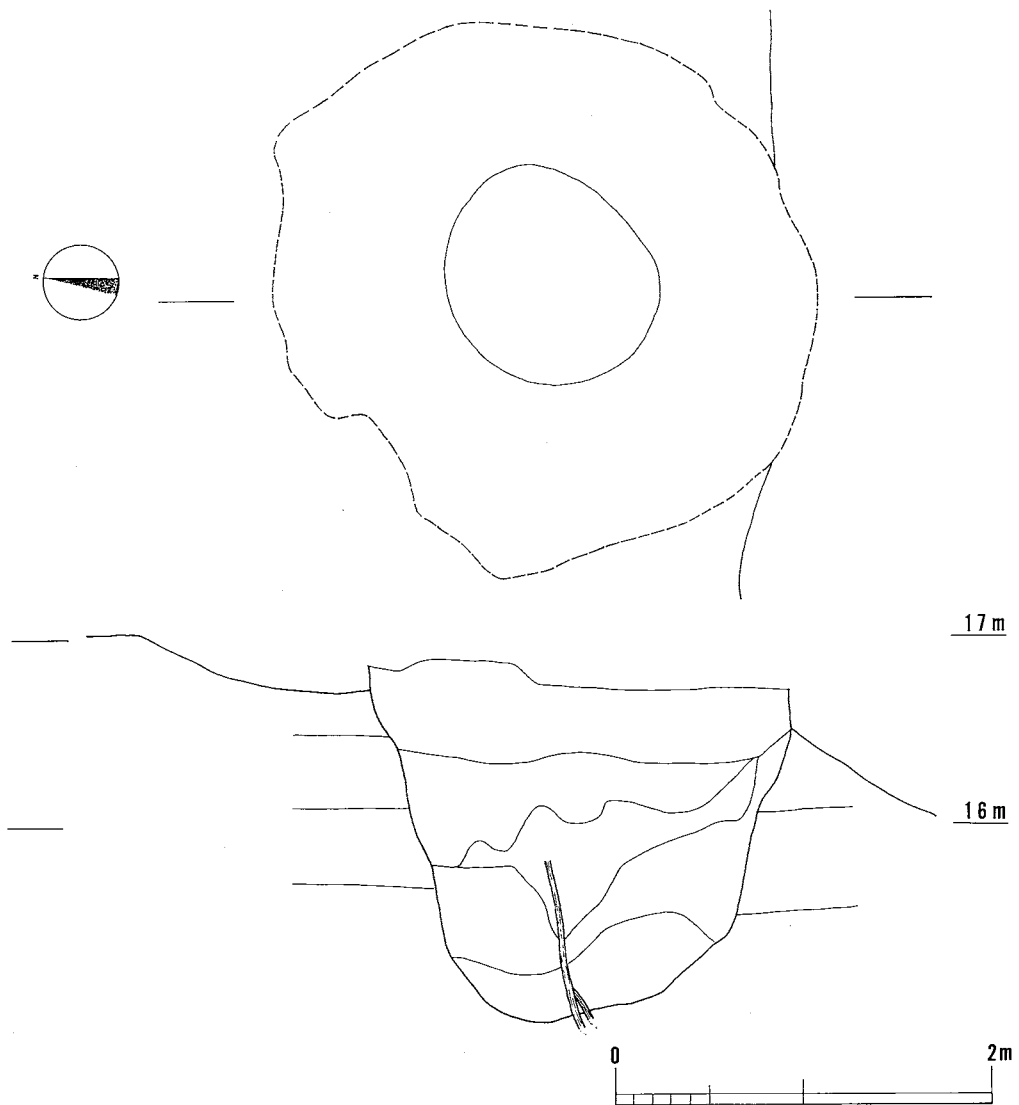
底に長さ1 m以上の太さ数cmの枝が付いた杭が20本以上打ち込まれていた。井戸底は14.8mを計る。

SE09はS<sub>1</sub>地区の「筑紫大道」の上に掘削された井戸で直径約2.0以上の円形の掘り方を呈し、深さは約2.0mを計る。また、壁が崩れて残る掘り方は約2.8mにも広がっている。底中央に長さ約1 mの杭が2本打ち込まれ残っていた。SE07に良く形状が似ている。内堀・片岡庄堀が埋められ再び水田化した折りに用いられた井戸である。SE07・SE09とも遺物を含まず時期は特定できない。

#### B. 石組み井戸

SE15とSE17はいずれもS<sub>3</sub>地区で発見された、自然堤防が1.6以上上がった段階で構築された



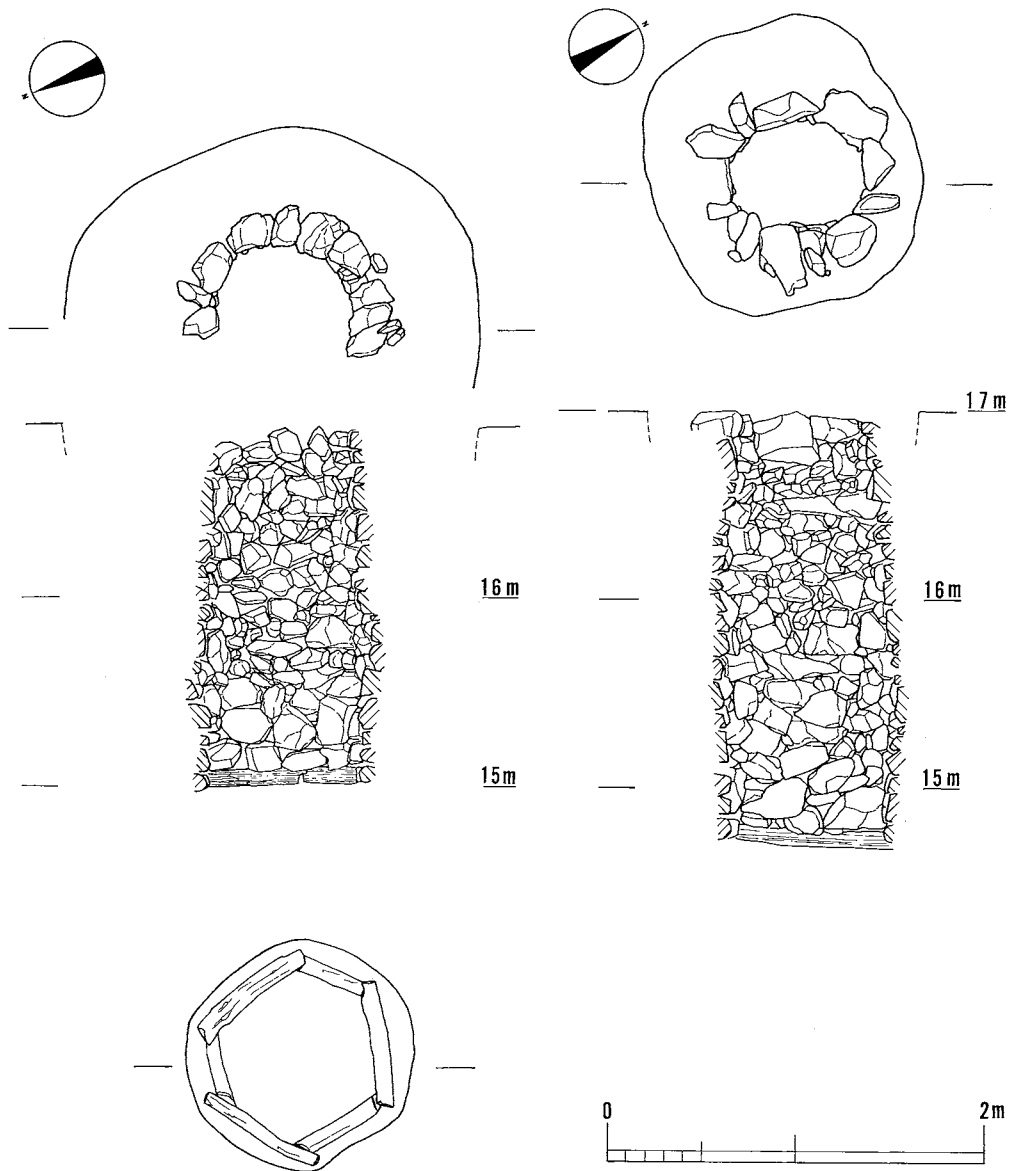


挿図135 SE09

井戸である。

SE15は掘り方が大きく、径が2.2m、深さ2.0m以上を計る。六角に組んだ根太の上に円形に石積みを経約70cm、高さ約1.8mに構築した石組井戸である。水位は15m。確認調査トレンチで機械で半戴したが、現代の遺物で埋められた。

SE17は掘り方は径約1.4mと小さく、深さ2.2mを計る。四角に組んだ根太の上に径約60cmで、高さ2.2m石積みを行っている。水位は14.8mを計る。井戸からは遺物がない。



挿図136 SE15・SE17

## 2. 荒河井堰と市町境溝

3本の荒河井堰の溝の内、北の1本（現龍野市・太子町境溝）が調査されている。平安時代以来、鶯荘の馬場・阿曾地区の水田用水を賄っている溝で、林田川の氾濫等により自然堤防が約1.6m以上上がった現在でも、位置を変えずに溝を維持する施設・構造を替えながら存続し

てきた。江戸時代まで遡る石組みで護岸をしており、調査に置いては北側の一部が裏側から掘られたにすぎない。

### 3. 土 壙

C<sub>1</sub>地区やC<sub>3</sub>地区において、壁土用の土取りの後、土壙には使用されなくなった備前焼瓦片や火災にあった壁土等が礫とともに埋め戻されていた。

## 第5章 遺物

福田片岡遺跡の兵庫県が実施した昭和56年から昭和59年にかけて発掘調査において、整理コンテナにして1,200箱を越す多量の遺物（土器・木製品・金属製品・石製品・自然遺物）が出土している。その遺物量の約90%を占めるのが中世土器（土師器・須恵器・輸入陶磁器・国内陶器）であるが、下層の調査において弥生時代中期、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、また奈良時代と平安時代の住居跡・溝・水田跡などの遺構からも遺物が出土しており、1. 弥生時代中期の遺物 2. 古墳時代の遺物 3. 奈良時代の遺物 4. 平安時代の遺物 5. 中世（鎌倉時代・室町時代）の遺物 6. 江戸時代以降の遺物に分けて述べる。

### 第1節 弥生時代中期の遺物

福田片岡遺跡から出土した弥生時代中期の土器・土製品は壺形土器・甕形土器・高杯形土器・鉢形土器・器台形土器・蓋形土器の他、紡錘車が出土している。その量は、コンテナにして約30箱におよぶ。この内180点を図示した。

遺物は遺跡の全域より出土しているが、その出土量の大半は遺構の集中する北地区のものである。遺物は土壌・住居跡といった遺構出土のものか、遺構とは確認できずに土器溜まり・土器が集中している地点として見つかったものがその大半を占めている。

弥生時代中期の純粋な遺物包含層は殆ど確認されておらず、包含層出土の遺物として扱ったものの多くは遊離した遺物である。

#### 1. 弥生土器の器形分類

弥生時代中期の土器の器形分類を以下に行っておく。器形分類については、『川島遺跡』『尾崎遺跡』等で細分化されており、基本的にはこれらの分類に従うものである。各遺跡間の分類の違いについては表4 弥生土器の器種分類の通りである

#### 壺形土器

壺形土器A - 胴部の中位が張った球形状。頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は肥厚・垂下等の変化をみせ、この形態の差からA1・A2・A3・A4・A5に細分できる。

壺形土器A1 - 口縁部は直立気味にたちあがった頸部から外反し、水平に伸びる。口縁端部は上方に摘みあげられ、外側に面をもつ。

壺形土器A2 - 口縁部は直立気味にたちあがった頸部から外反し、水平に伸びる。口縁端部

器種・分類		川島・立岡	尾 崎	器種・分類		川島・立岡	尾 崎		
壺 形 土 器	A 1	(A 4)	A	鉢 形 土 器	A	A	A・高杯A		
	2	A 1	A 2		B	B	B		
	3	A 2	A 2		C	C	C		
	4	A 2	A 1		D	—	D		
	5	—	—		E	—	—		
	B 1	B	B	高 杯 形 土 器	A 1	〕 A	〕 A		
	2	B・G 1	B		2	—	B 1		
	C 1	C 1	—		B 1	B 1	B 2		
	2	C 2	C 2		2	B 1	B 2		
	3	C 2	C 2		3	B 2	B 3		
	4	C 3	C 3	C	C	—			
	D	(D)	(D)	脚 台 部	A 1	〕 A	〕 D 〕 A 〕 A		
	F	F	F		2			—	(D)
					3			(C)	—
甕 形 土 器	A 1 I	〕 A	〕 A	B	—	—			
	II								
	III								
	2 I								
	II								
	III								
V			3	B	B				
B	—	—	B	—	—				

表 2 弥生土器の器種分類

は上下に拡張され、外側に内傾する面をもつ。面には装飾を施さないものと凹線・波状文・貼文等を装飾を施すものがある。

壺形土器A 3 - 口縁部は開き気味の頸部から外反する。口縁端部は上下に拡張するが、A 2 と比べ斜め下方への拡張が著しく、いわゆる斜下外反の形態をとる。面には凹線・棒状貼付文等を装飾を施すものが多い。

壺形土器A 4 - 基本的な形態はA 3と変わりなく、口縁内に凸帯もしくは凹線をもつもの。

壺形土器A 5 - 口縁部は直立気味にたちあがった頸部から巻き込むように急激に、短く外反

し、端部に至る。口縁端部は上下に拡張され、外側に面をもつ。面には装飾を施さないものと凹線・波状文・貼文等を装飾を施すものがある。

壺形土器B - 筒状の頸部に続き口縁部が多少とも内外に屈曲して立ち上がる壺である。口縁端部は上方に面をもつ。

壺形土器B 1 - 口縁部が斜めに開き、内外の屈曲が僅かなもの。

壺形土器B 2 - 口縁部中位で明瞭に屈曲し直立するもの。

壺形土器C - いわゆる直口壺、筒状の口頸部をもつものである。3形態に分かれる。

壺形土器C 1 - 極端に張った胴部をもつ偏平な器体に長い口頸部がつく、長頸壺形土器がこれにあたる。

壺形土器C 2 - C 1 に比べ短く立ち上がる筒状の口頸部に胴部の中位が張り気味の球形状の器体をもつ。胴部径35cm・器高40cm前後の大きめの法量をもつものである。

壺形土器C 3 - 口頸部の形態はC 2 と同じ。把手付壺である。卵形の器体・胴部径23cm・器高30cm前後の大きめの法量をもつものと、胴部の中位が張ったやや算盤球形状の器体に脚部が付く、胴部径20cm・器高24cm前後の大きさの法量をもつものの2種に分かれる。

壺形土器C 4 - 外方へ逆ハの字に開く口縁部をもつ壺である。口縁端部は上方に面をもつ。卵形の器体・胴部径38cm・器高45cm前後の大きさの法量をもつものと、胴部の中位が張った球形状の器体、胴部径23cm・器高30cm前後の大きさの法量をもつものの2種に分かれる。

壺形土器D - 無頸壺形土器（壺形土器F）にくの字に短く屈曲する口縁部がつくもの。口縁端部は短い斜下外反の形態をとる。大小2種の大きさのものがある。

壺形土器F - いわゆる無頸壺形土器である。

## 甕形土器

甕形土器は体部の形態で長胴（甕形土器A）・短胴（甕形土器B）の2種類がみとめられ、更に長胴形の甕は口縁部の形態から3種類（1. 角頭・2. 撥ね上げ・3. 斜下外反）に細分できる。また法量からは7種類に細分できる。短胴の甕は法量からは2種類に細分できる。

甕形土器A - 胴部最大径と頸部以下の器高の割合が5 / 6 前後に収まるもので、長胴形の体部形態をもつものを甕形土器Aとする。甕形土器Aは口縁部の形態によって3種に細分される。

甕形土器A 1 - 口縁部は端部に面をもつが、拡張・垂下などしないもの。

甕形土器A 2 - 口縁部は端部の外側に面をもち、端部を上方へ摘み上げる - 所謂撥ね上げ口縁の形態をとるもの。面には装飾を施さないものと凹線文・刻み目等の装飾を施すものがある

甕形土器A 3 - 口縁端部は上下に拡張され、外側に内傾する面をもつ。面には装飾を施さないものと凹線文等の装飾を施すものがある。

甕形土器Aは以下の6種の法量をもつものがある。

I 口径13cm・最大腹径17cm・器高21cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量

II 口径15cm・最大腹径20cm・器高26cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量  
 III 口径15cm・最大腹径21cm・器高30cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量  
 IV 口径18cm・最大腹径25cm・器高30cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量  
 V 口径26cm・最大腹径28cm・器高38cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量  
 VI 口径30cm・最大腹径36cm・器高42cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量  
 形態・法量による分類から下表の通りに甕形土器Aは細分される。なお、以下、分類は『甕  
 A 1 - I』と表記する。

	I	II	III	IV	V	VI
A 1	○	○	○			
A 2	○	○	○		○	
A 3	○	○	○	○	○	○

表 3 弥生土器甕の分類

B - 胴部最大径と頸部以下の器高の割合が1 / 1 前後になるもので、短胴即ち球形の体部形態をもつものを甕形土器Bとする。

甕形土器Bは以下の2種の法量をもつものがある。

I 口径17cm・最大腹径21cm・器高21cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量

II 口径23cm・最大腹径27cm・器高27cm前後の法量をもつもの。頸部以下で①程度の容量

#### 鉢形土器

鉢形土器は口縁部の形態を中心に5種類に分類できる。なお、脚部高が杯部高を上回るものについては高杯形土器に含めた。

鉢形土器A - 器体がなだらかに内湾して立ち上がり口縁部が直口する台付鉢。口縁端部は拡張し上部に面を持つ。高杯形土器Aと杯部の形態は同じであり、破片での区別は難しい。

鉢形土器B - 口縁部が内側に斜めに大きく張り出す台付鉢。

鉢形土器C - 底部から口縁部にかけて、胴が張らずに立ち上がり、直口する。桶状の鉢である

鉢形土器D - 口縁部がくの字に屈曲する甕に近い器形、口径が胴部径に勝る器形のものである

鉢形土器E - 器体がなだらかに内湾して立ち上がり口縁部に至る。口縁端部はまるく納められる。ワイングラス型の台付鉢。口径11cm前後、器高11cm前後の小型品。

#### 高杯形土器

高杯形土器A - 器体がなだらかに内湾して立ち上がり口縁部が直口する。口縁端部は拡張し上部に面を持つ。鉢形土器Aと杯部の形態は同じであり、破片での区別は難しい。杯部の立ち

上がりの形状によって2種に細分できる。

高杯形土器A 1 - 杯部が、底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部に至るもの。

高杯形土器A 2 - 杯部が、口縁部で屈曲し、明瞭に稜をもつもの。

高杯形土器B - 水平に延びる口縁部をもつもの。所謂木器模倣形の高杯。口縁端部および口縁部内側に巡らせる凸帯の有無によりB 1・B 2・B 3に分類できる。

高杯形土器B 1 - 口縁部内側に凸帯を巡らせないもの。やや深みのある鉢状の杯部である。口縁端部は若干肥厚する。

高杯形土器B 2 - 口縁部内側に凸帯を巡らせるもの。口縁端部は若干肥厚する。

高杯形土器B 3 - 口縁部内側に凸帯を巡らせるもの。口縁端部は大きく斜方向へ垂下する。

高杯形土器C - 器体がなだらかに内湾して立ち上がり口縁部に至る。口縁端部はまるく納める。ワイングラス型の高杯形土器。口径12cm前後、器高12cm前後の小型品。

### 脚台部

脚台部A - 脚部下半がひらくもので、脚端部が上方に拡張されているもの。3種に細分される。

脚台部A 1 - 脚高が脚部径を同程度か大きく越えないのもの。

壺形土器B 3・台付鉢の脚部と考えられる。

脚台部A 2 - 脚高が脚部径を大きく上回るもの。高杯形土器の脚部と考えられる。

脚台部A 3 - 脚高が脚部径を大きく上回るもので、脚部下半が丸みをもつもの。高杯形土器の脚部と考えられる。

脚台部B - 脚部下半がひらくもので、脚端部が上方に拡張されない、もしくは拡張が著しくないもの。鉢形土器Eもしくは高杯形土器Cの脚部と考えられる。

脚台部C - 円筒形で若干ハの字に開くもの。器台もしくは台付鉢の脚部と考えられる。

## 2. 遺構出土の弥生土器

### 住居跡 1

壺6点・甕8点・鉢2点・高杯2点・脚台部2点を図示した。このうち、2・9・16は住居跡床面直上から出土したものである。それ以外は中央の2基の土壇とその周辺から集中して出土したもので、一括廃棄され、中央土壇を埋没させたと考えられるものである。

1・2は壺A 2。ともに口縁端部外面に3本・4本の凹線を巡らせ、1は頸部に3本の凹線、2は肩部に刷毛原体による列点文を施している。

3・4は壺B 2。3は頸部に指頭圧痕文凸帯を施す。4は川島遺跡の壺G 2にあたるものである。5は壺B 1、口縁部全面に凹線を巡らせるもので川島遺跡に類例がある。

6は壺底部。内面に朱が残る。



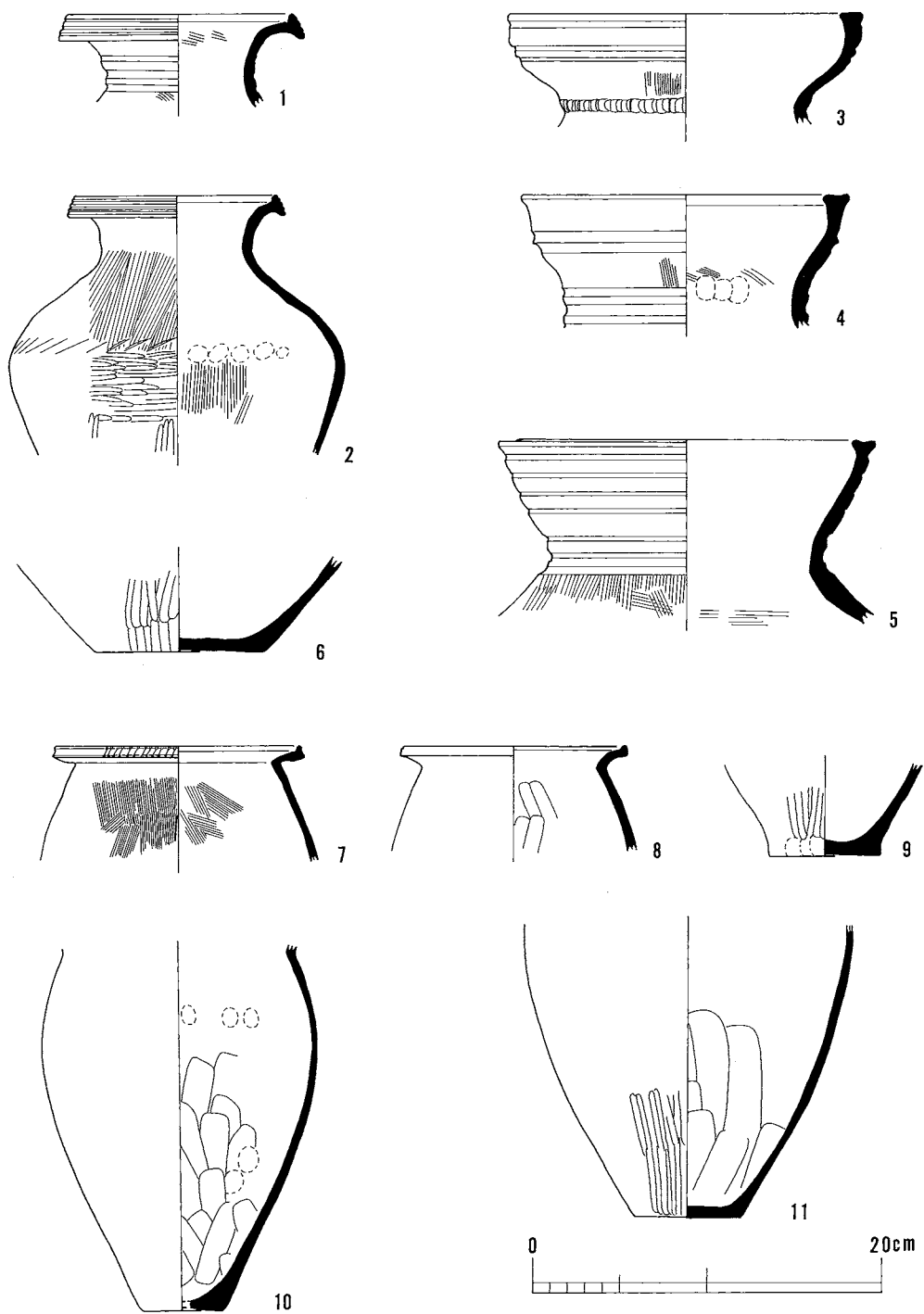


插图137 弥生土器 (1) N<sub>1</sub>地区住居跡1 壺・甕 (1)

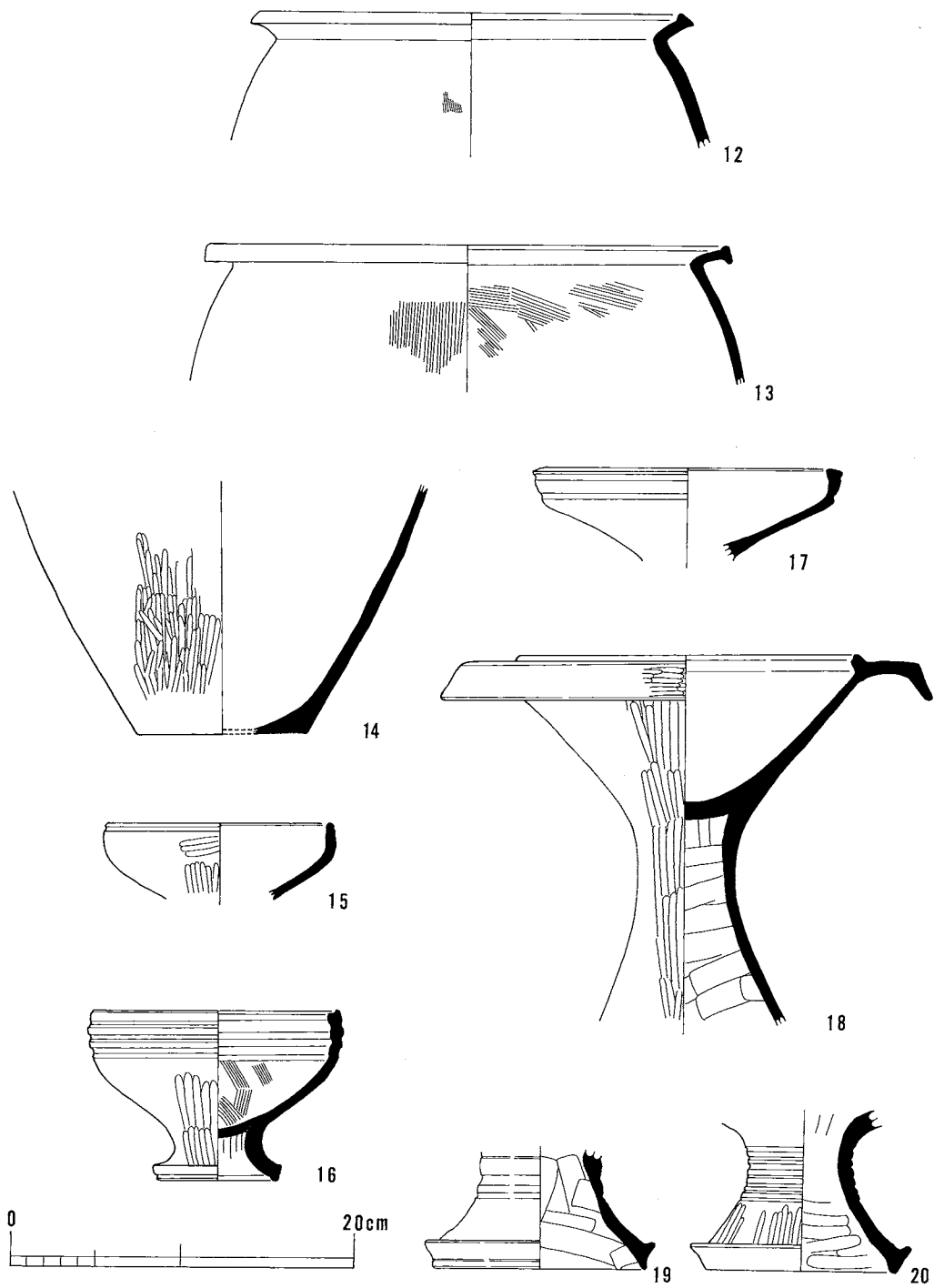


插图138 弥生土器 (2) N<sub>1</sub>地区住居跡1 甕 (2)・高杯・鉢

7・8は甕A2-Iの口縁部。9は甕底部。10は法量Iの甕である。11は法量IIの甕である。12は甕A3-Vの口縁部。13は甕A1-Vの口縁部である。14は甕VIの底部と考えられる。16は鉢Aである。

15は高杯C、17は高杯A2。18は高杯B3である。

19・20は脚台部A1。ともに脚上半に凹線を巡らせる。

## 住居跡2

壺5点・甕8点・鉢2点・高杯3点・土製紡錘車1点・器種不明口縁部1点を図示した。このうち、30・33・39は住居跡床面直上から出土したものである。それ以外は中央土壙とその周辺から集中して出土したものである。

21・24は壺A2。21は頸部に指頭圧痕文凸帯を施す。24は体部の張りが中位にあるもので、張りの著しい球形状をなすものであろう。22は壺A4。頸部に3条の凹線を巡らせる。23は口縁部上半を欠くが、頸部で筒状に立ち上がり、口縁部下半で大きく外反を見せることから壺A恐らくA2もしくはA4と考えられる。25は壺B1。肩部が落ちた形状を見せることから卵形の体部が付くと考えられる。

25は口縁端部を上下に拡張し、外側に面をもつ。壺類の口縁部と考えられるが、頸部に至る部分でやや内湾をみせることから高杯・器台等である可能性もある。

甕Iの27・28のうち、27は甕A1。やや胴部の張りが目立ち、壺Dに近い器形である。28は甕A3。口縁端部の拡張は、もっぱら内側上方へ行い、拡張部には1条の凹線を巡らせている。

甕IIの29・30のうち、29は甕A1。口縁端部はやや肥厚気味である。30は甕A3。口縁端部の拡張は、専ら内側上方へ行い、A2に近い口縁端部である。拡張部の加飾はない。

31は甕の底部である。底部径から推して甕IVもしくはVのものであろう。32・33は甕A3-VIである。口縁端部には1条の凹線を巡らせている。34は甕の底部とも考えられるが、底部径に比べ、体部が大きく開く形態から鉢の可能性もある。35・36は鉢E。38は脚台部A1。端部に透かし孔があく。鉢Bの脚であろう。

37は高杯C。39は高杯A。

40は土製紡錘車。甕の胴部片を利用しており、内面にヘラ削りが顕著である。

## 土壙1 (41~60)

壺5点・甕11点・鉢4点を図示した。

41は壺A4。口縁部上面に1条の突帯、端面に6条の凹線を施した後、棒状浮文を12箇所貼付する。42は壺A5。体部外面を横刷毛と櫛描き波状文によって分割・加飾し、口縁部端面には4条の凹線の後、8本1単位の棒状浮文5単位とその間に1個ずつ円形浮文を貼付し、加飾する。灰白色色調を呈し、摂津地域からの搬入品の可能性がある。43は壺C4。体部上半に刷毛原体による刺突文と5条の櫛描き波状文を施す。44は壺C2。45は壺B1である。46~56

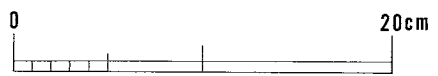
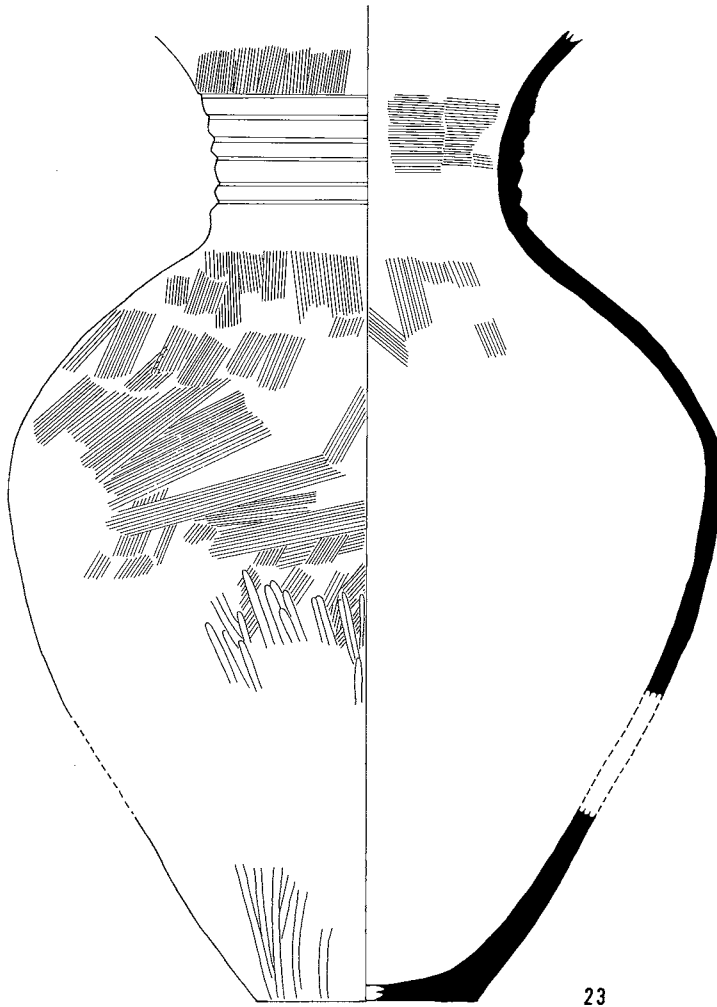
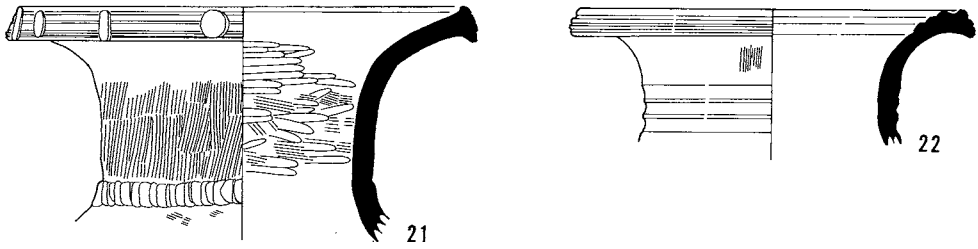


插图139 弥生土器 (3) N<sub>3</sub>地区住居迹 2 壺 (1)

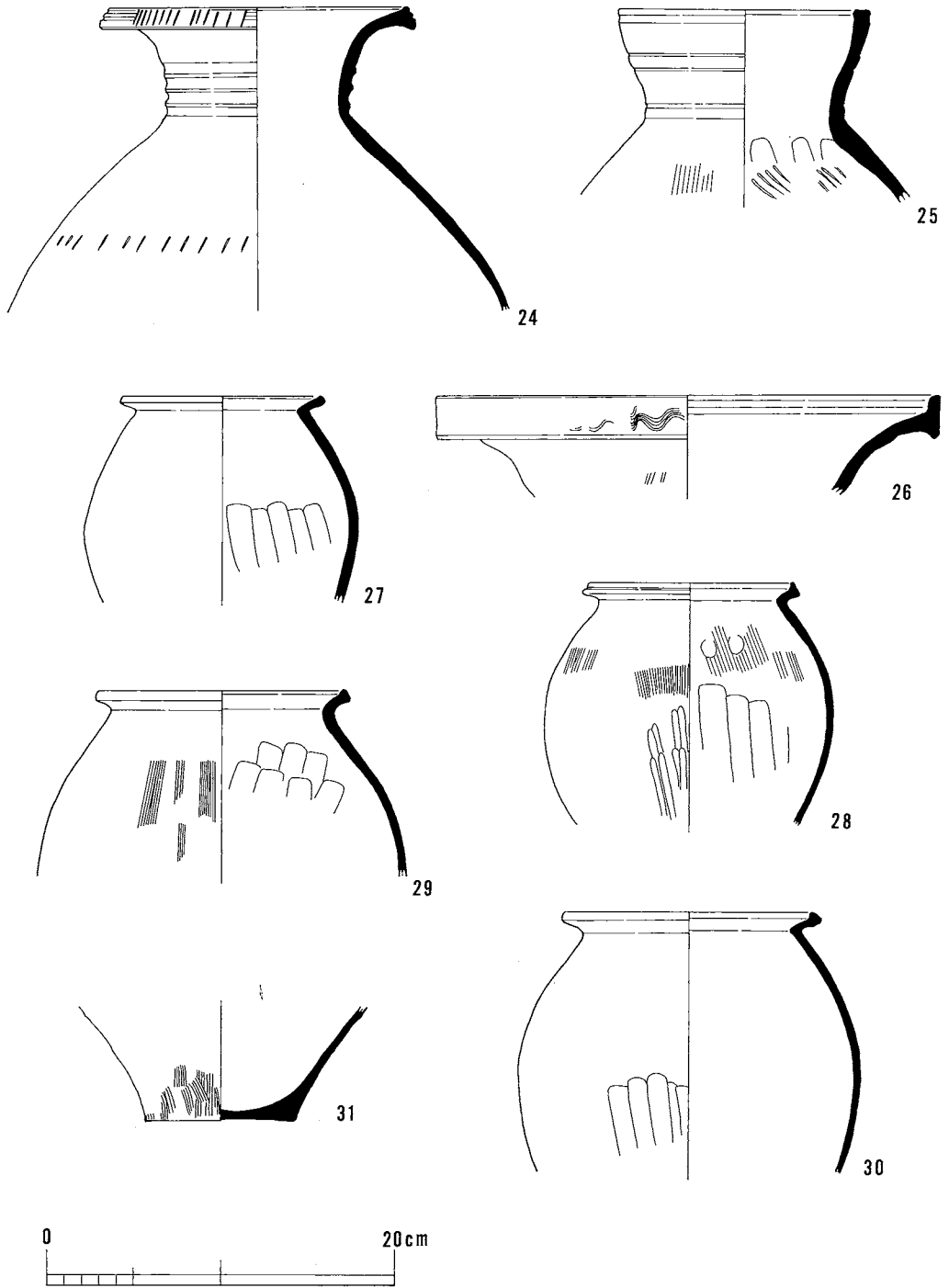


插图140 弥生土器 (4) N<sub>3</sub>地区住居跡 2 壺 (2)・甕 (1)

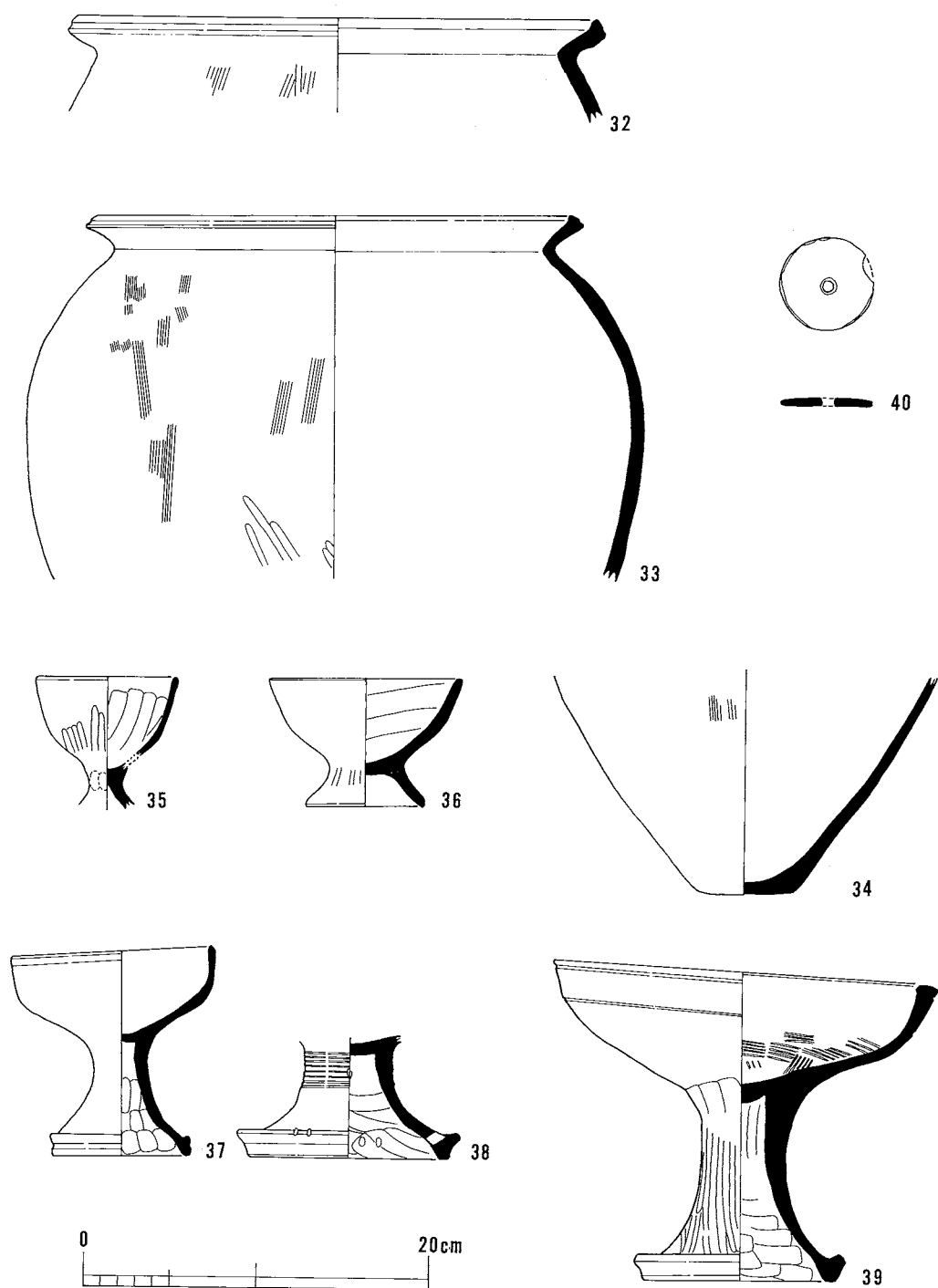


插图141 弥生土器 (5) N<sub>3</sub>地区住居跡 2 甕 (2)・鉢・高杯・紡錘車

は甕形土器である。46は甕A 2・47は甕A 1、ともに甕Iの法量である。48・49は甕の体部下半以下である。残存する部分の最大径と底部径から推して甕IもしくはIIであろう。

50は甕A 3 - IV。51・52は甕の体部下半以下である。残存する部分の最大径と底部径から推して甕IVのものであろう。

53・54は甕A 3 - V。55は底部径から推して甕Vのものであろう。

56は甕A 3 - VI。最大径を体部上半もつ肩の張った器形である。

57～60は鉢形土器である。57・58は鉢A。59は鉢B。60は脚部下半に6箇所の穿孔をもつ。脚台部A 1にはいるが、川島遺跡の例からみて、鉢Bの脚部と考えられる。

### 土壌 2 (61～103)

壺17点・甕19点・坏1点・高杯3点・脚台部2点を図示した。

64は壺A 2、口縁部端面に2個ずつ3箇所に棒状浮文を貼付する。62・63・65・66は壺A 3、65は口縁部端面に3個ずつ4箇所に棒状浮文を、66は4個ずつ4箇所に棒状浮文と4個の円形浮文を貼付する。67・68は壺B 1、61・69は壺B 2である。70は壺C 1、71～73は壺C 3。74・75は壺D。76～78は壺Fである。

79～97は甕形土器である。79・80・84は甕A 2・81・82は甕A 3、ともに甕Iの法量である。85は甕A 3 - II。83・86・87は甕A 2 - IIである。88は甕A 2・89は甕A 3、ともに甕IIIの法量である。91・92は甕A 2・90は甕A 3、ともに甕Vの法量である。94・95は甕底部、底部径から推して甕Vのものであろう。95・96は甕A 3 - VI。最大径を体部上半もつ肩の張った器形である。97は底部径から推して甕VIのものであろう。

98は坏状の器形。指押さえによる成形の後、内外面ともに横刷毛によって調整を施している。

99～101は高杯A 2。102は脚台部B。高杯Cの脚部と考えられる。103は脚台部A 2。高杯の脚部と考えられる。

### 土壌 3 (104～127)

壺9点・甕6点・鉢3点・高杯3点・脚台部3点を図示した。

104は壺1の口縁部。端面に斜格子文を施す。105は壺A 5の体部。106は壺A 2。107は頸部の形状から壺A 1と考えられる。108・109は壺B 1。110・111は壺C 4。112は壺C 3である。

113・114は甕A 3 - II、115・116は甕B - II。117・118は甕A 3 - VIである。

・119～121は鉢E。122・123は高杯A 1。124は口部・脚下半を欠くが高杯A 1と考えられる。

125は脚台部B。高杯Cもしくは鉢Eの脚部と考えられる。126・127は脚台部A 2。

### 土器溜り (128～130)

土壌 2・3 南側の遺物が集中した地点の遺物を包含層とは別にあげた。

128は壺A 3、129は甕A 3、130は甕底部、底径から推して甕VIのものであろう。

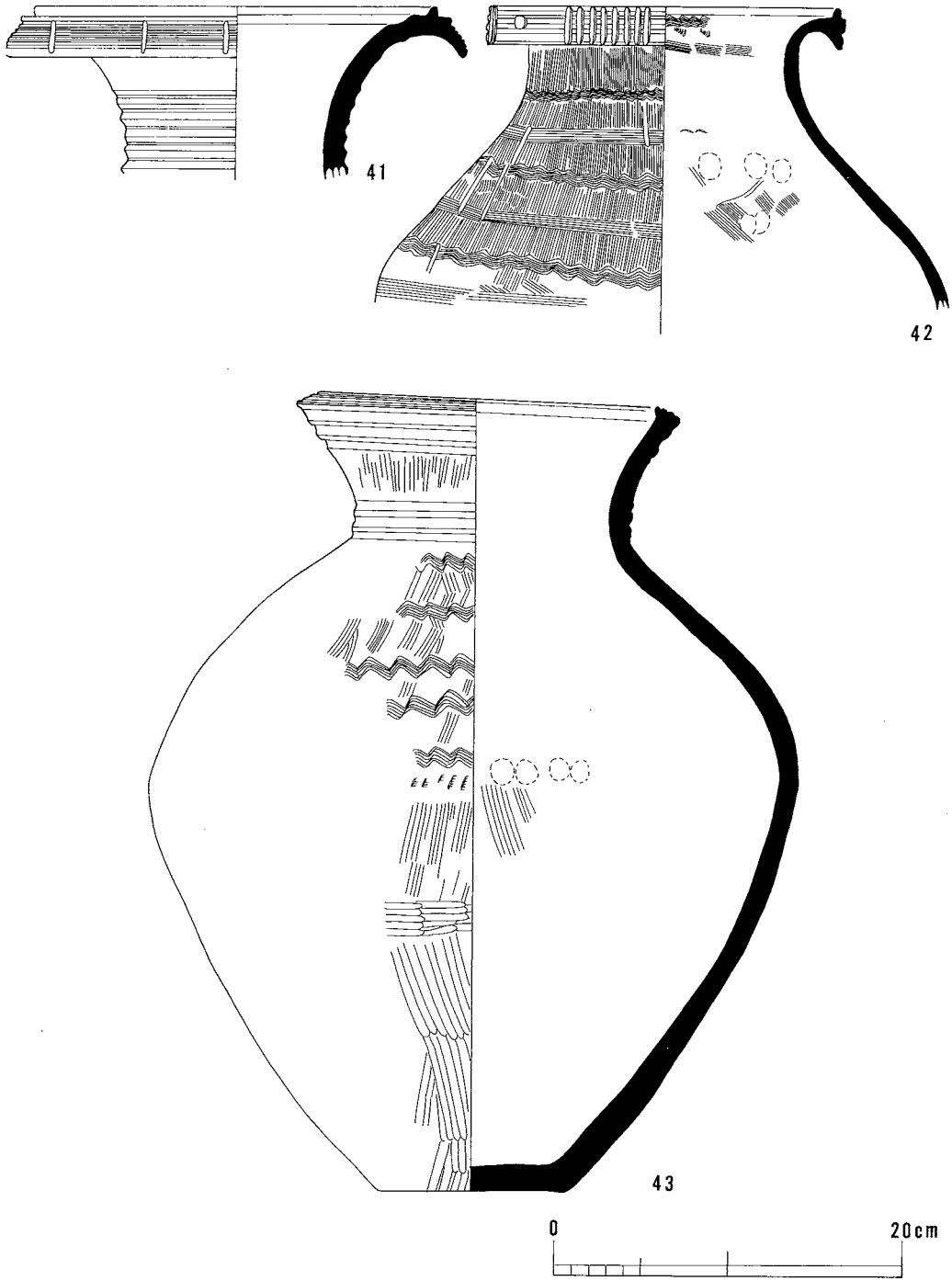


插图142 弥生土器 (6) N<sub>1</sub>地区土境1 壺 (1)



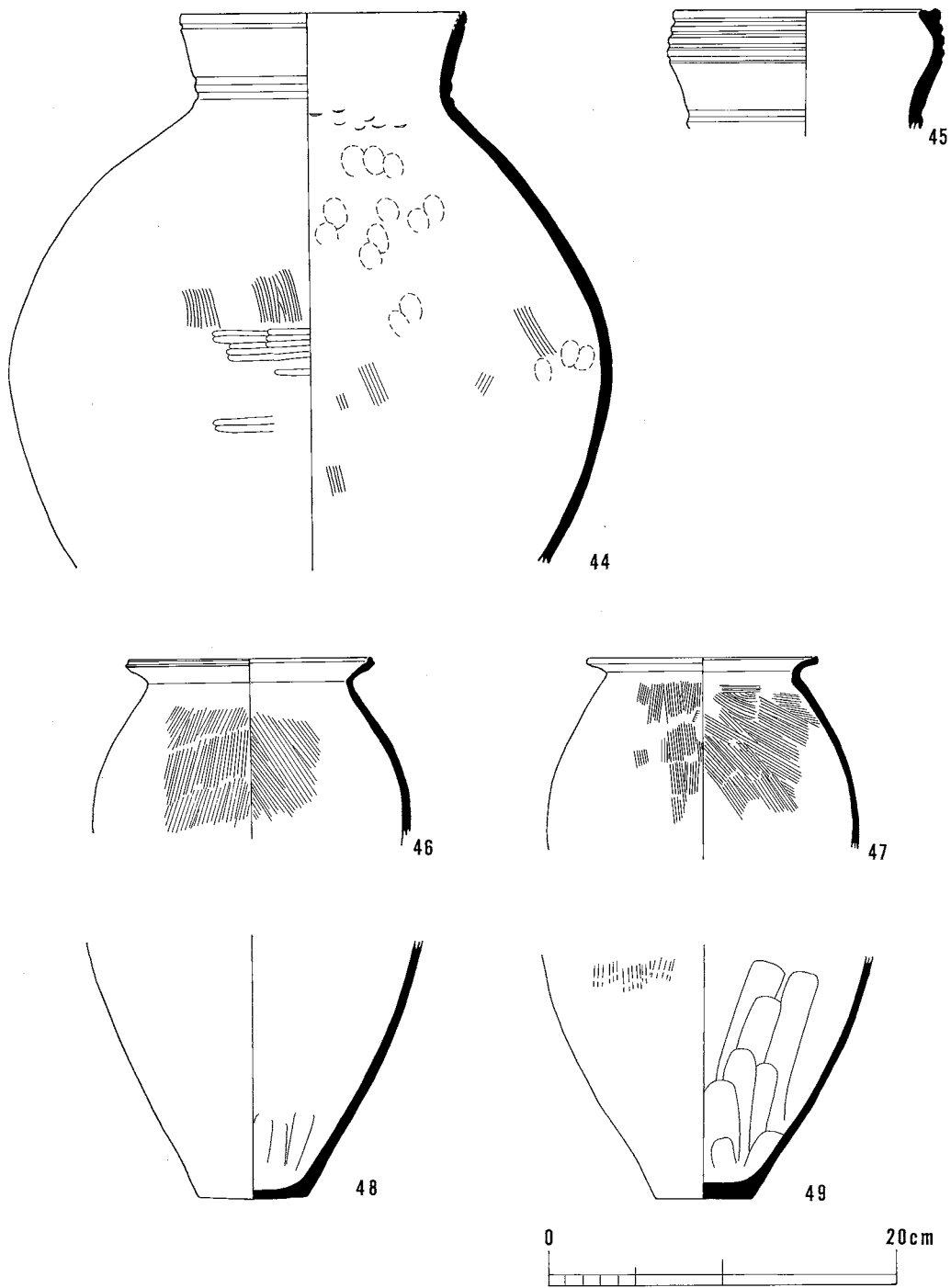


插图143 弥生土器 (7) N<sub>1</sub>地区土坑1 壺 (2) · 甕 (1)

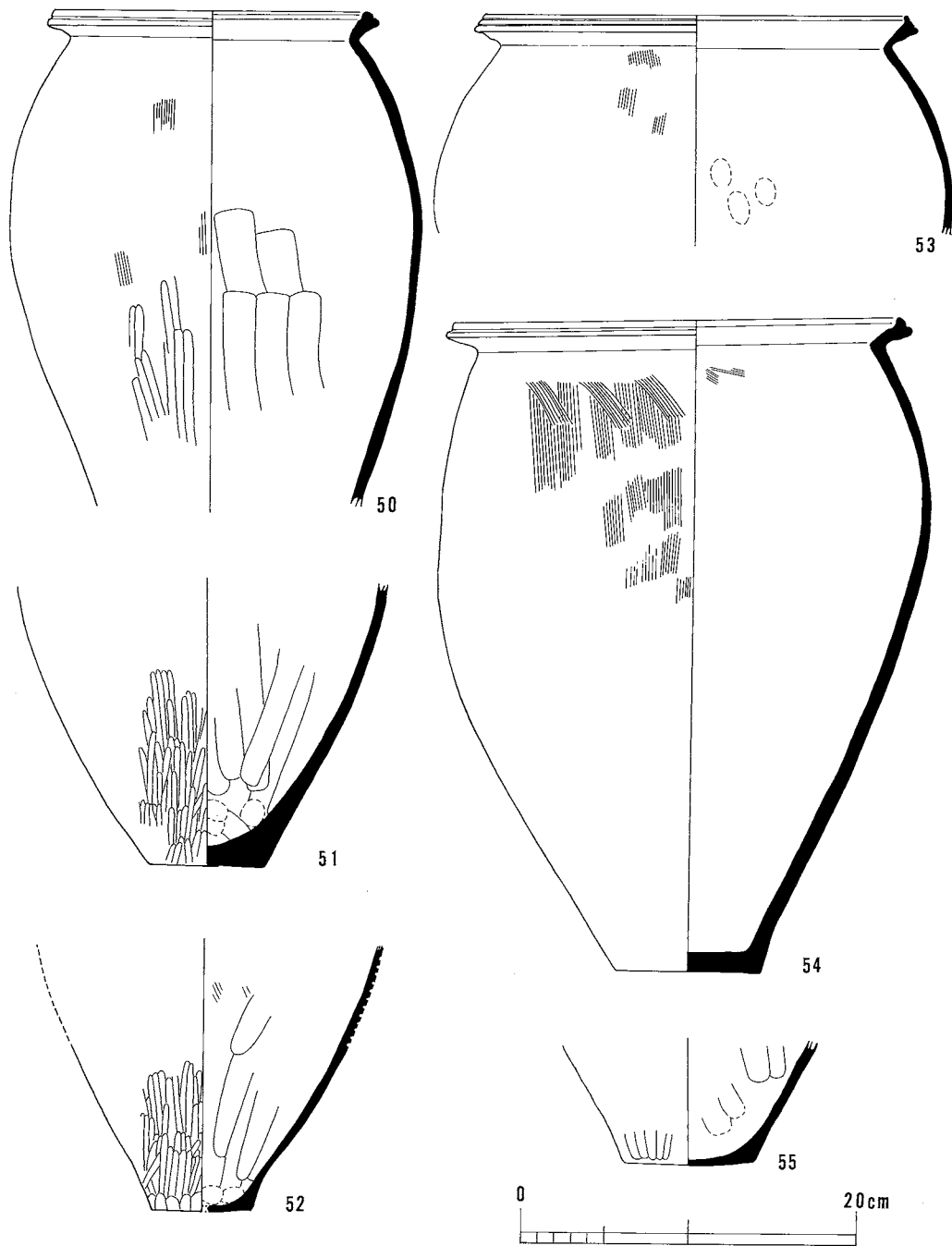
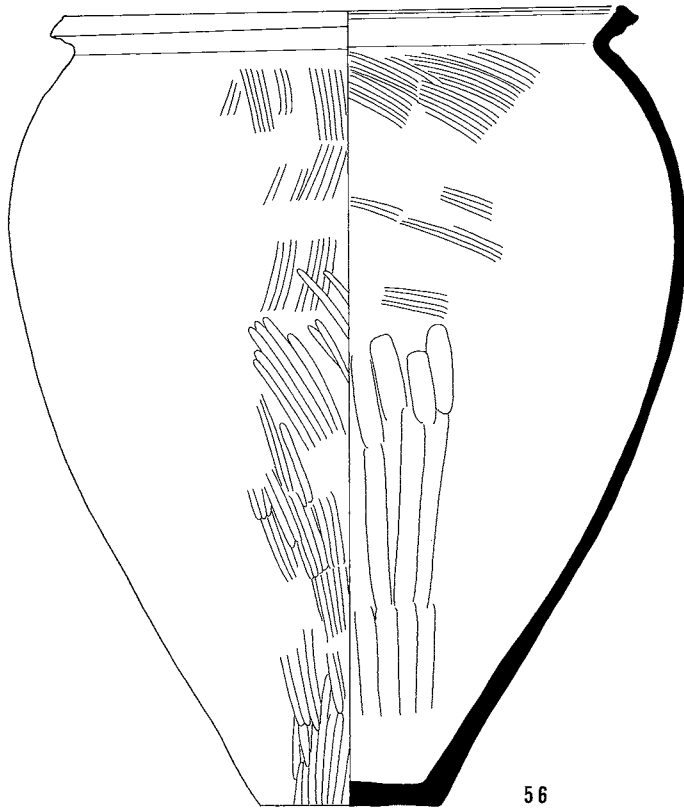
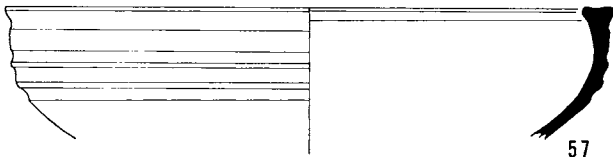


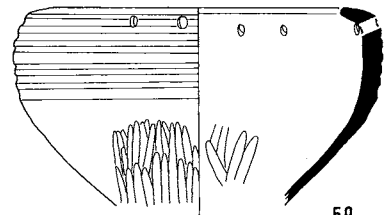
插图144 弥生土器 (8) N<sub>1</sub>地区土坑1 甕 (2)



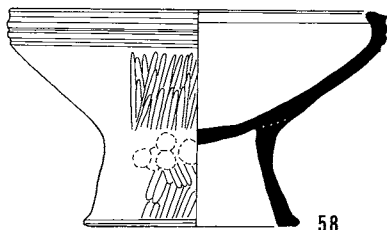
56



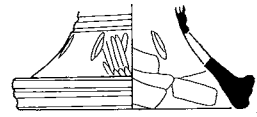
57



59



58



60

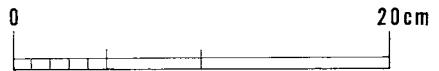
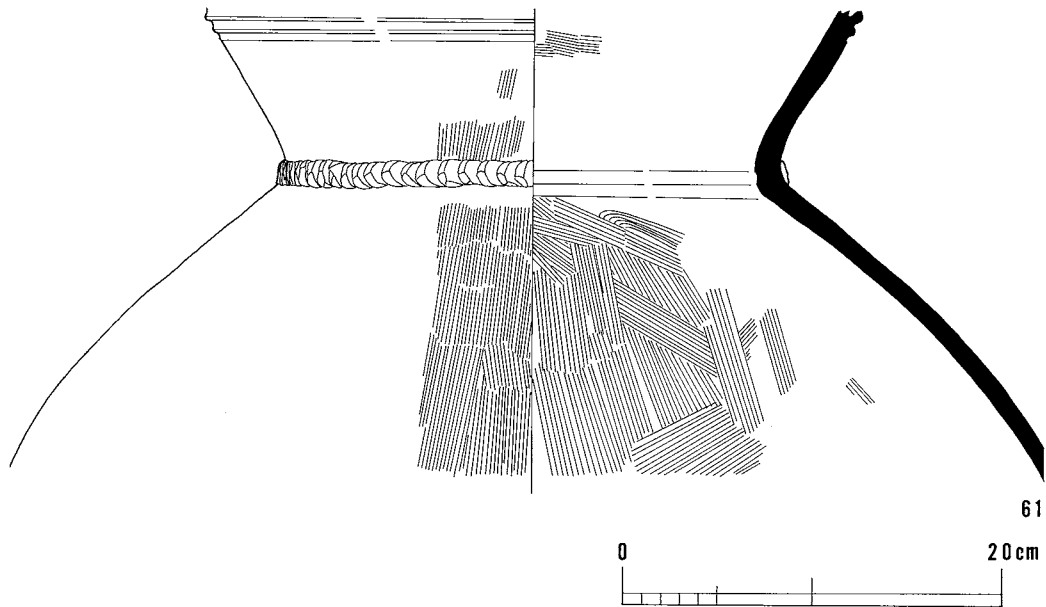


插图145 弥生土器 (9) N<sub>1</sub>地区土坑1 甕 (3)・鉢



挿図146 弥生土器 (10) N<sub>1</sub>地区土壌2 壺 (1)

#### 包含層 (131~180)

131~164はN<sub>1</sub>地区より出土、165以下はC<sub>1</sub>~C<sub>4</sub>地区で出土した。131は壺A 3。N<sub>1</sub>地区第8層より出土した。口縁部端面に10本以上を1単位とした棒状浮文と円形浮文を貼付する。132~134は壺A 2。132は口縁部端面に4条の凹線。N<sub>1</sub>地区下層確認Hトレンチより出土した。133は櫛描き波状文を施す。N<sub>1</sub>地区第8層より出土した。134は櫛描き羽状文を施し、円形浮文を貼付する。N<sub>1</sub>地区下層確認Hトレンチより出土した。135・136は壺A 1。ともに頸部に3条の凹線。135は肩部に刷毛原体による刺突文を施す。135はN<sub>1</sub>地区第8層より出土、136は住居跡2の土器の可能性が強い。

137は壺C 1。橋脚工事 (P 1) 中に出土した。外面は横方向の篋磨き、内面には指押さえ痕が残る。138は壺C 4。頸部に2条の凹線。内外面ともに縦刷毛による調整。N<sub>1</sub>地区第8層より出土した。139は壺C 2。肩部に刷毛原体による施文がある。140は壺C 1。体部中位に半截竹管によるS字文を施し、更に3個1単位の円形浮文を5箇所貼付する。上半には沈線と波状文を施す。141は壺A 5。頸部に2箇所の穿孔がある。N<sub>1</sub>地区下層確認Dトレンチより出土した。142は壺F。口縁部直下に1条の凹線、頸部に2箇所の穿孔がある。N<sub>1</sub>地区SD3045底より出土した。143は甕A 2 - II。肩の張らない器形である。口縁部端面に2条の凹線をもつ。N<sub>1</sub>地区下層確認Hトレンチより出土した。144は甕B - I。川島遺跡では壺Dに分類される。N<sub>3</sub>地区より出土した。145は甕A 1 - III。法量は甕IIIに近い。胴部の張りが少ない器形である。

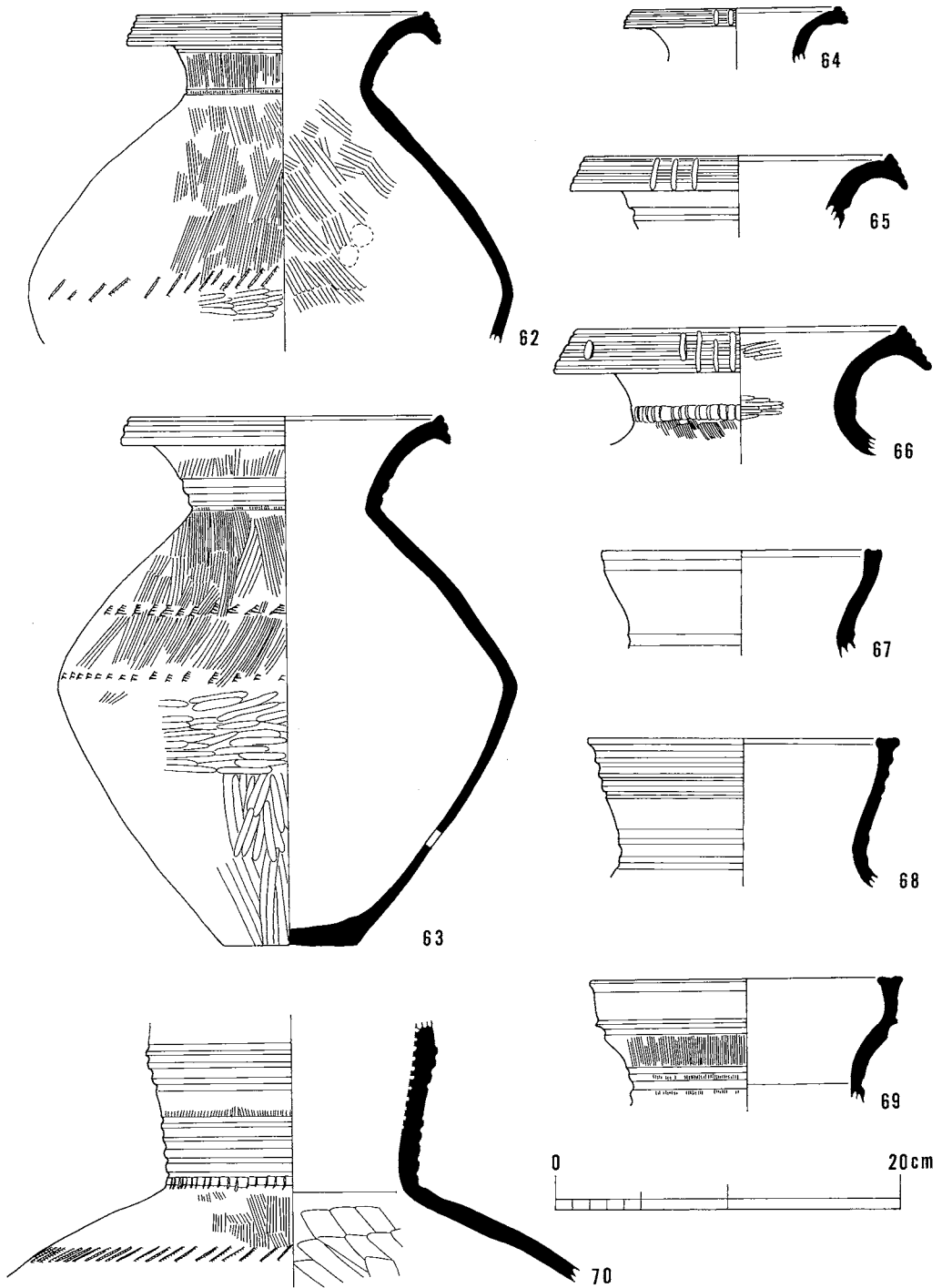


插图147 弥生土器 (11) N<sub>1</sub>地区土坑 2 壺 (2)

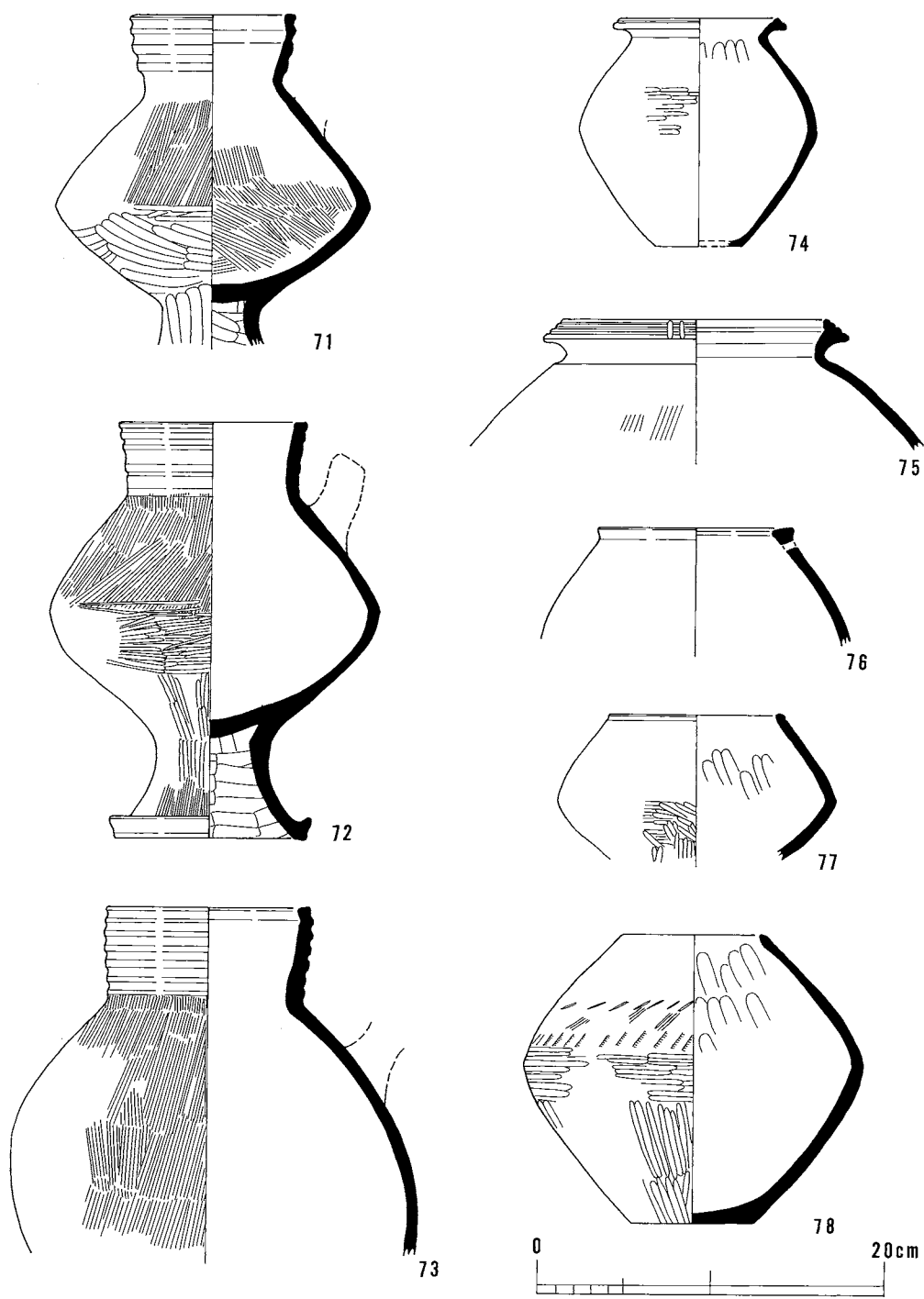


插图148 弥生土器 (12) N<sub>1</sub>地区土坑2 壶 (3)

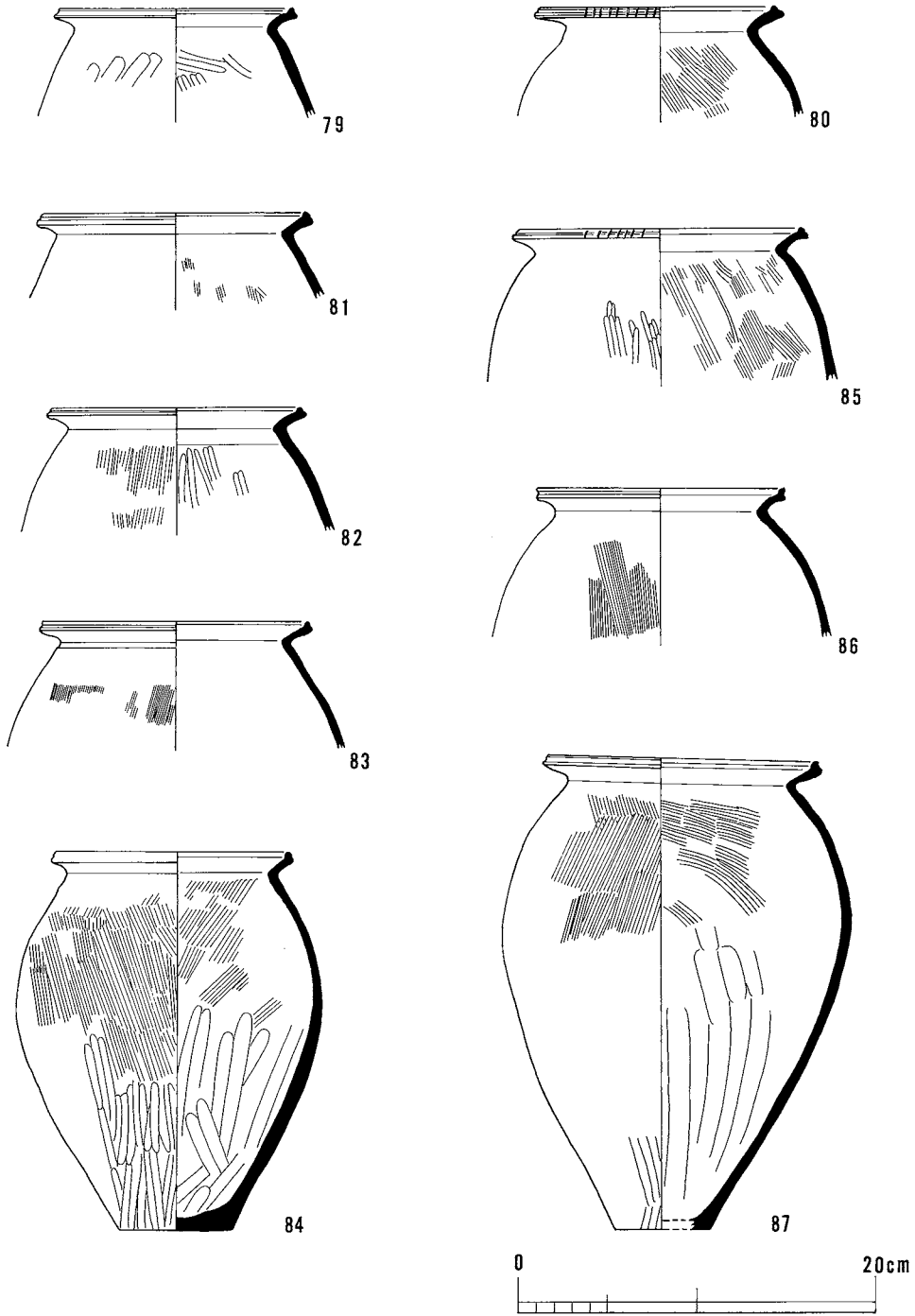


插图149 弥生土器 (13) N<sub>1</sub>地区土坑2 甕 (1)

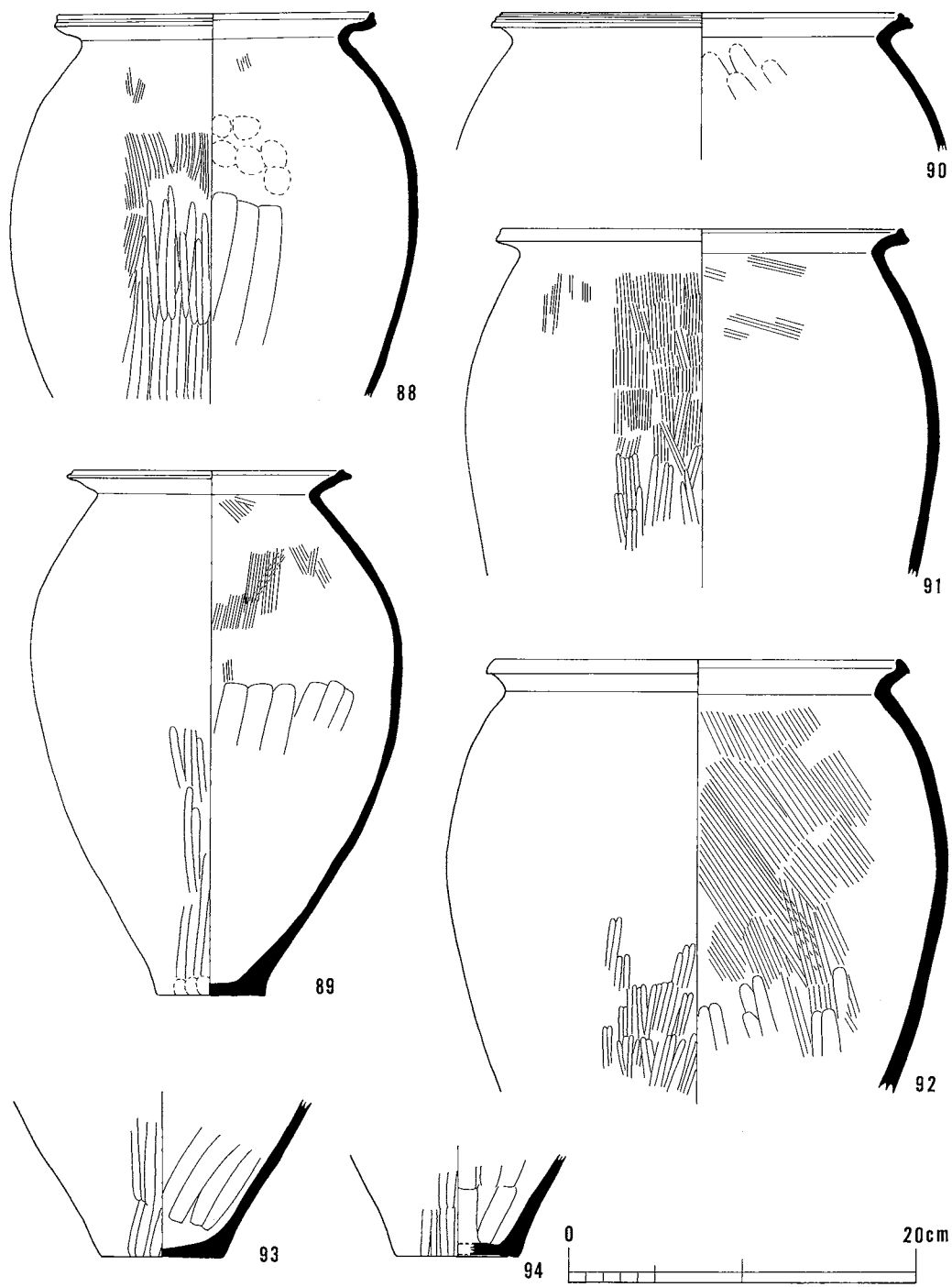


插图150 弥生土器 (14) N<sub>1</sub>地区土坑2 甕 (2)



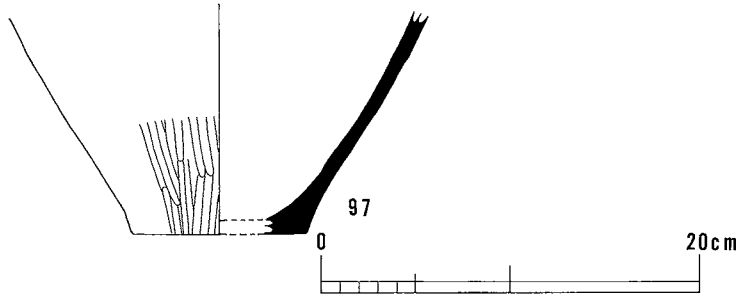
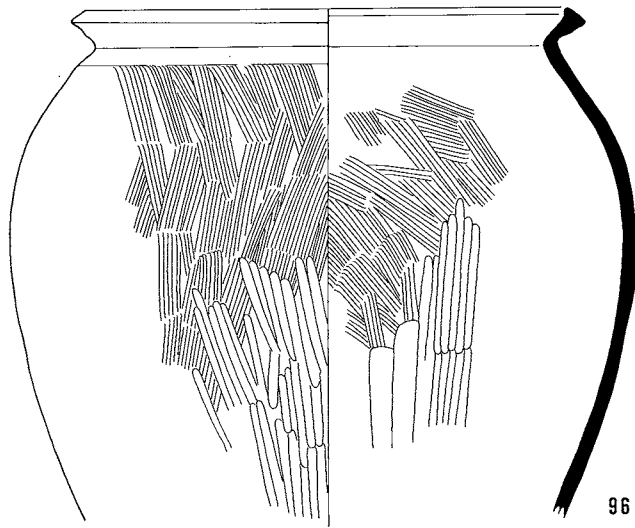
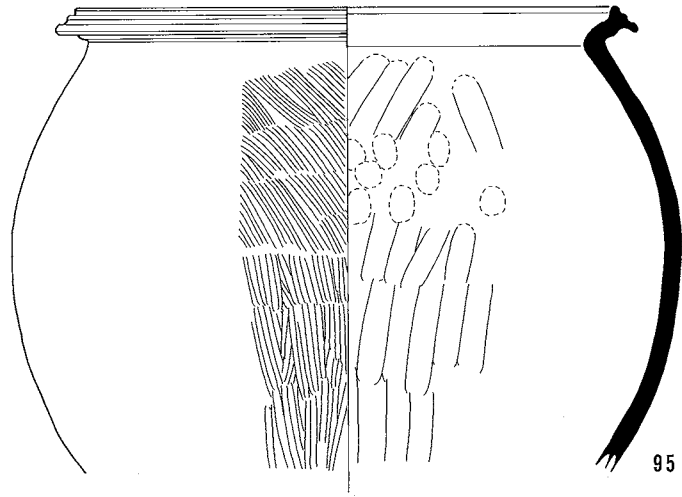


插图151 弥生土器 (15) N<sub>1</sub>地区土壤2 甕 (3)

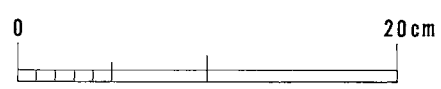
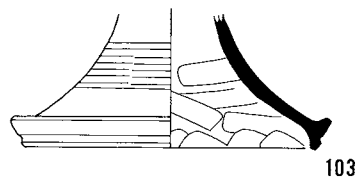
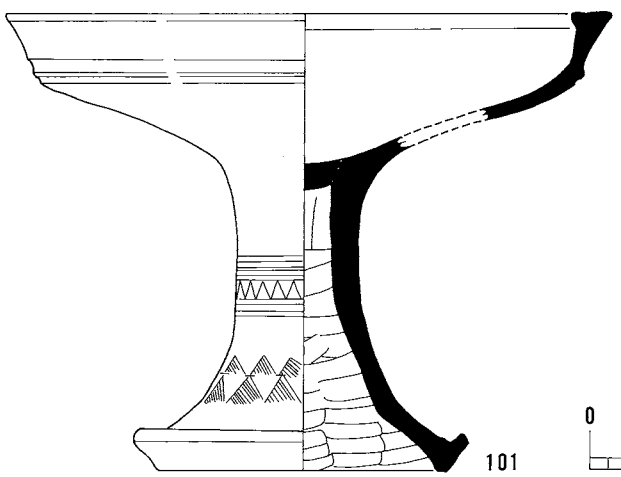
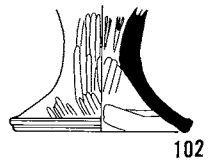
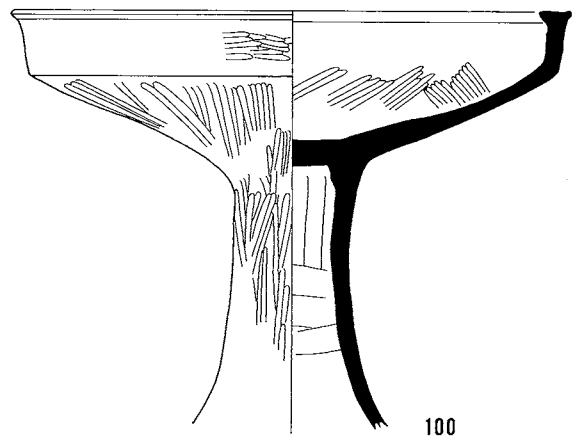
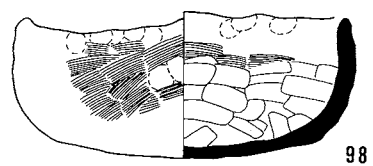
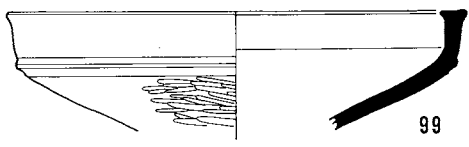


插图152 弥生土器 (16) N<sub>1</sub>地区土境 2 高杯・鉢

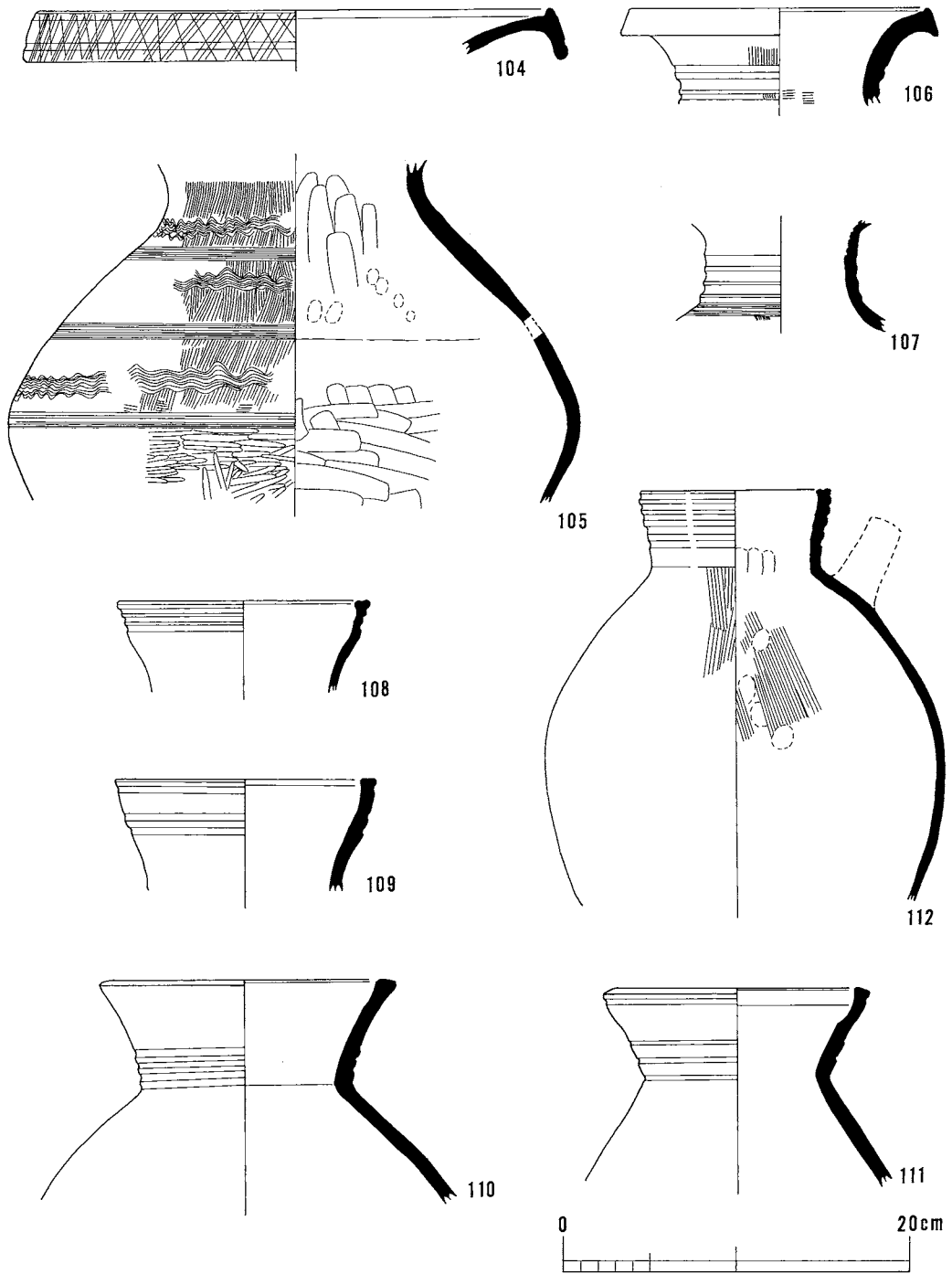


插图153 弥生土器 (17) N<sub>i</sub>地区土坑3 壺

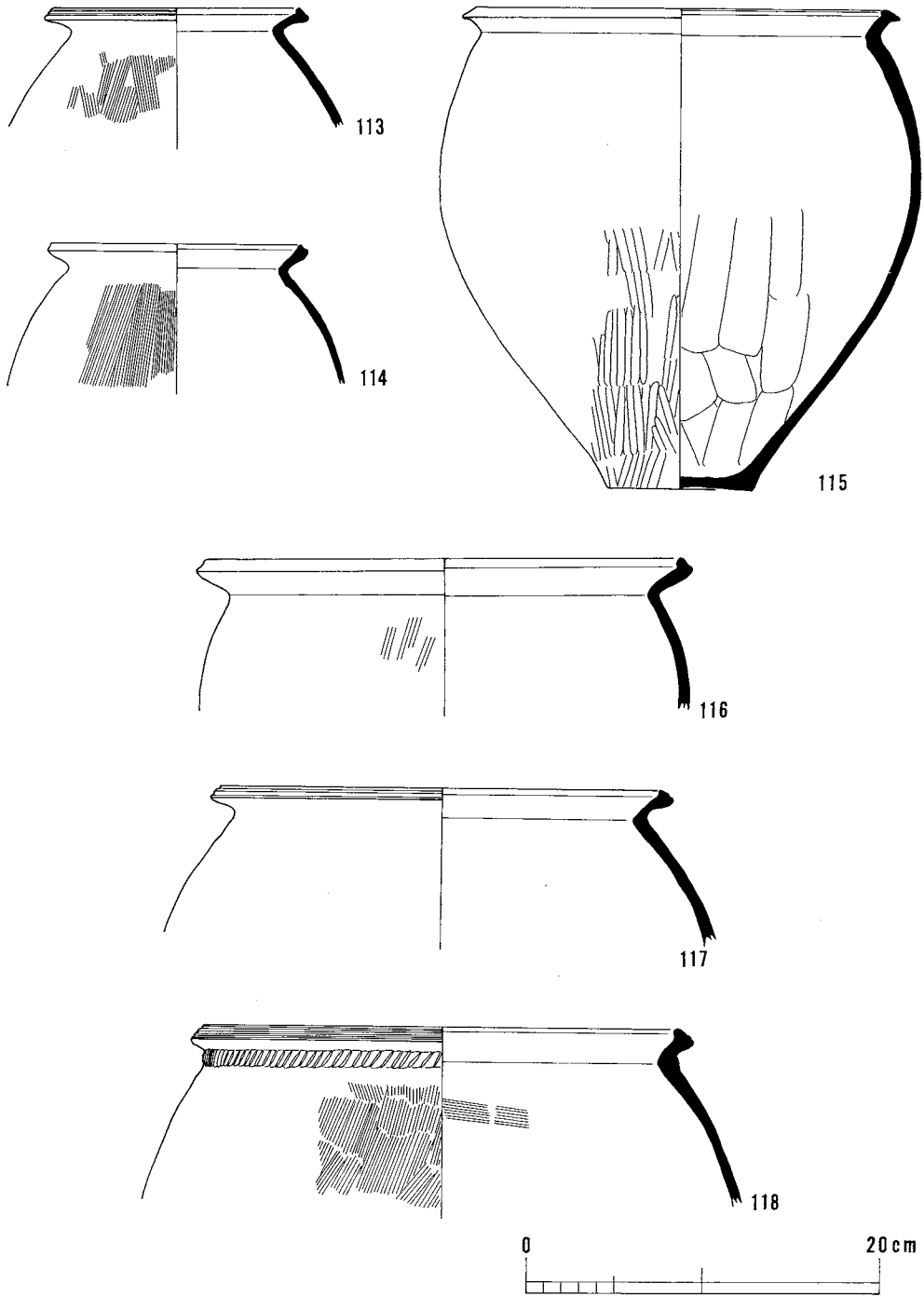


插图154 弥生土器 (18) N<sub>1</sub>地区土坑3 甕 (1)

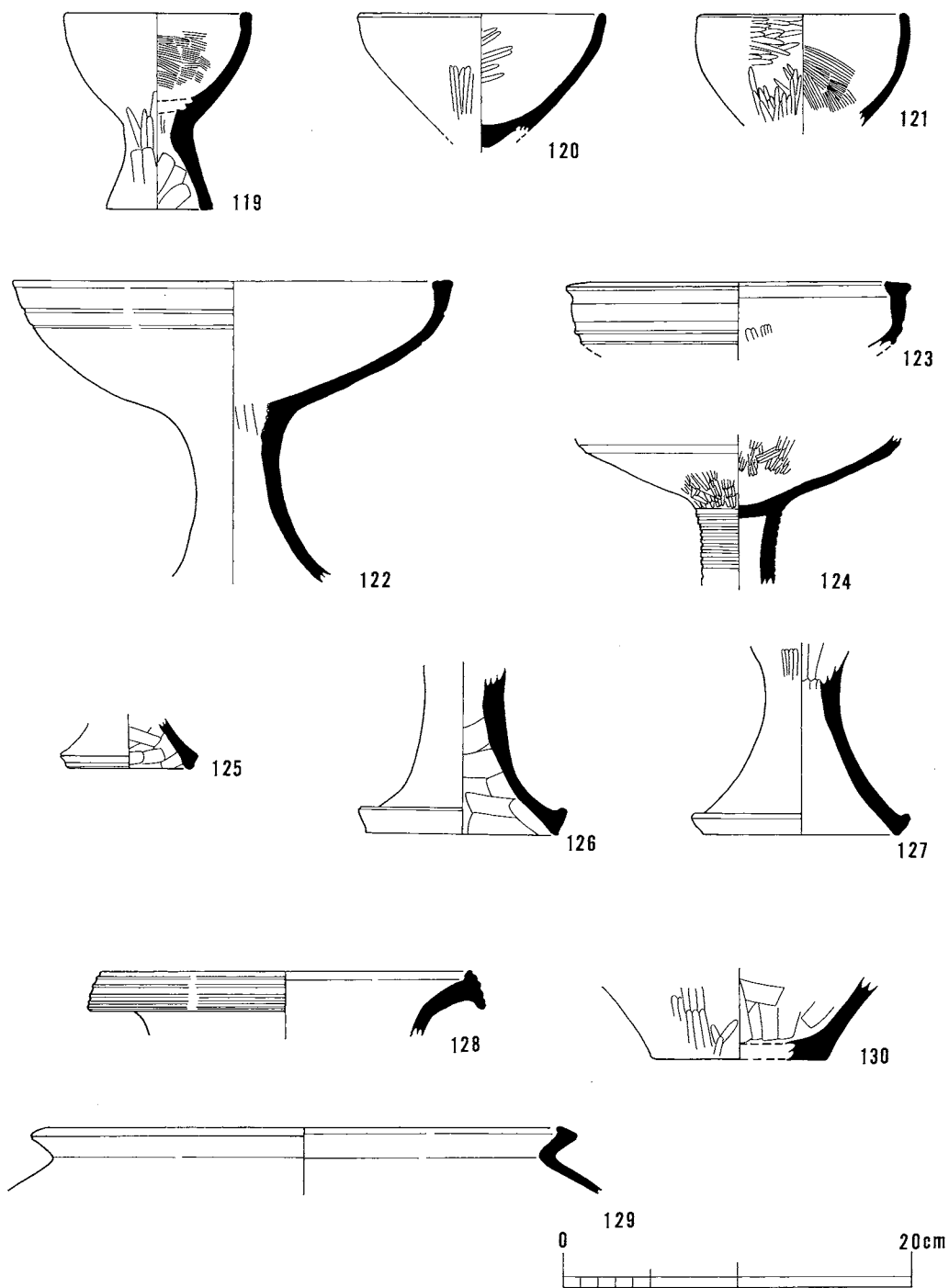


插图155 弥生土器 (19) N<sub>1</sub>地区土坑3 鉢・高杯・甕 (2)

N<sub>1</sub>地区SD3045底より出土した。146は甕A 1 - II。N<sub>1</sub>地区下層確認Cトレンチより出土した。147は甕A 3 - V。N<sub>1</sub>地区下層確認Cトレンチより出土した。149は甕底部。法量VIもしくはそれ以上の法量をもつ甕の底部と考えられる。

150・151は高杯B 1。150は口縁部端面に凹線と刻み目を施す。N<sub>1</sub>地区下層確認Hトレンチより出土した。151は外面を篋磨き、内面には斜め方向の刷毛調整を施す。N<sub>1</sub>地区SD3001底より出土した。152は高杯A 1。口縁部・体部境に3条の凹線を施す。内面の調整は篋磨き。N<sub>1</sub>地区下層確認Aトレンチ土壌5より出土した。153は高杯A 2。口縁部・体部境に1条の凹線を施す。154は磨減が激しく、小破片のため詳らかではないが、高杯A 3と考えられる。凹線の直下に篋描きによる鋸歯文が施されている。N<sub>1</sub>地区より出土した。

155・156は鉢B。ともに口縁部外面に数本の凹線を施す。156は端部直下に穿孔を施す。155はN<sub>1</sub>地区SD3001底より出土、156はN<sub>1</sub>地区北側溝内-第4層褐灰色粘質土より出土した。157は鉢D。甕に近い器形である。N<sub>1</sub>地区下層確認Aトレンチ土壌5より出土した。158は鉢B。体部上半以上を欠く。脚部に10箇所以上の透かし孔をもち、体部との境に3条の凹線をもつ。

159~162は脚台部。159は脚台部B。N<sub>1</sub>地区SD3001底より出土した。160~162は脚台部A 3。160は脚部下半に鋸歯文を施す。N<sub>1</sub>地区坪3第3層上面より出土した。161はやや丸みに乏しく、A 2に近い。4箇所に長方形の透かし孔を施す。N<sub>1</sub>地区より出土した。162はN<sub>1</sub>地区SD3001底より出土した。

163は蓋形土器、164は端部を欠くが、筒形の形状から鉢Cと考えられる。ともにN<sub>1</sub>地区より出土している。

165~167はC<sub>1</sub>地区の第9層-礫層内より出土した土器である。165は甕A 3 - V。口頸部はくの字に屈曲し、口縁端部には3条の凹線を施す。166は高杯B 2。167は脚台部C。脚端部に1条の凹線。内面上半は削りを施す。

168~173はC<sub>4</sub>地区下層より出土した。168・169は壺A 1。168は口縁部が水平に伸びる。時期が若干下るものである可能性がある。170は壺A 5。口縁部端面に3条の凹線を施す。171は壺C 3。口縁部に4条の凹線を施す。172は壺C 2。口縁部に3条の凹線、内面は板状工具によるナデ調整を施す。173は甕A 3 - IIIである。174は甕A 3 - VI。口縁部に3条の凹線を施す。C<sub>3</sub>地区東西掘BS下層褐色中砂内より出土した。175は高杯A 2。口縁部と体部の境に凹線を施す。C<sub>3</sub>地区下層確認Hトレンチより出土した。176は脚台部A 1。脚端部直上に22孔前後の穿孔を施す。脚柱部には6本の沈線を施す。177は脚台部C。脚端部直上に刻み目と沈線を施す。C<sub>4</sub>地区下層確認Aトレンチより出土した。178は甕底部である。179は指押さえによる突出した底部。小型の壺・甕もしくは鉢と器種を特定できない。C<sub>4</sub>地区下層確認Aトレンチより出土した。180は壺底部。S<sub>4</sub>地区外堀コーナー西肩部より出土している。

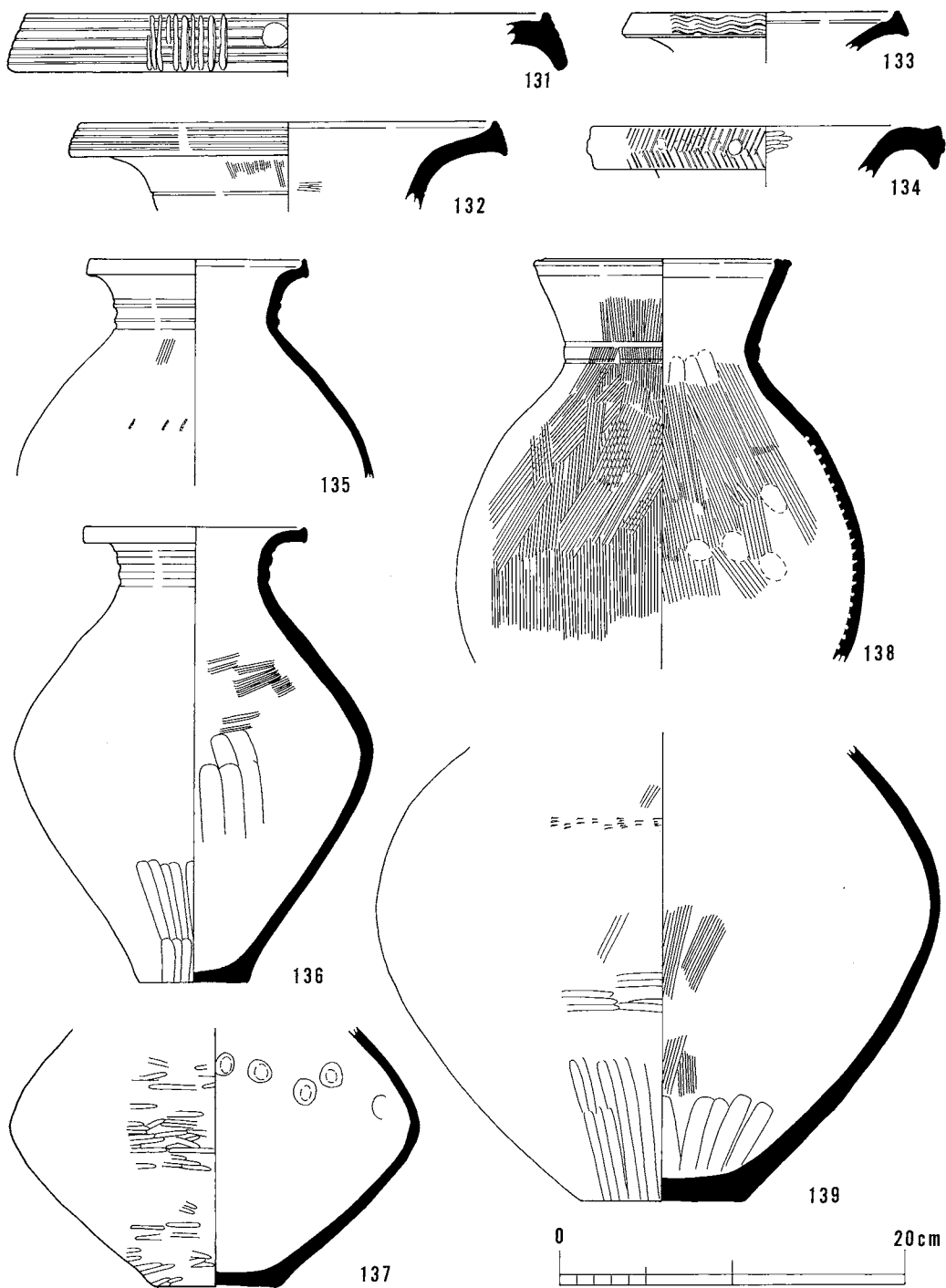


插图156 弥生土器 (20) N<sub>1</sub>地区 壺 (1)

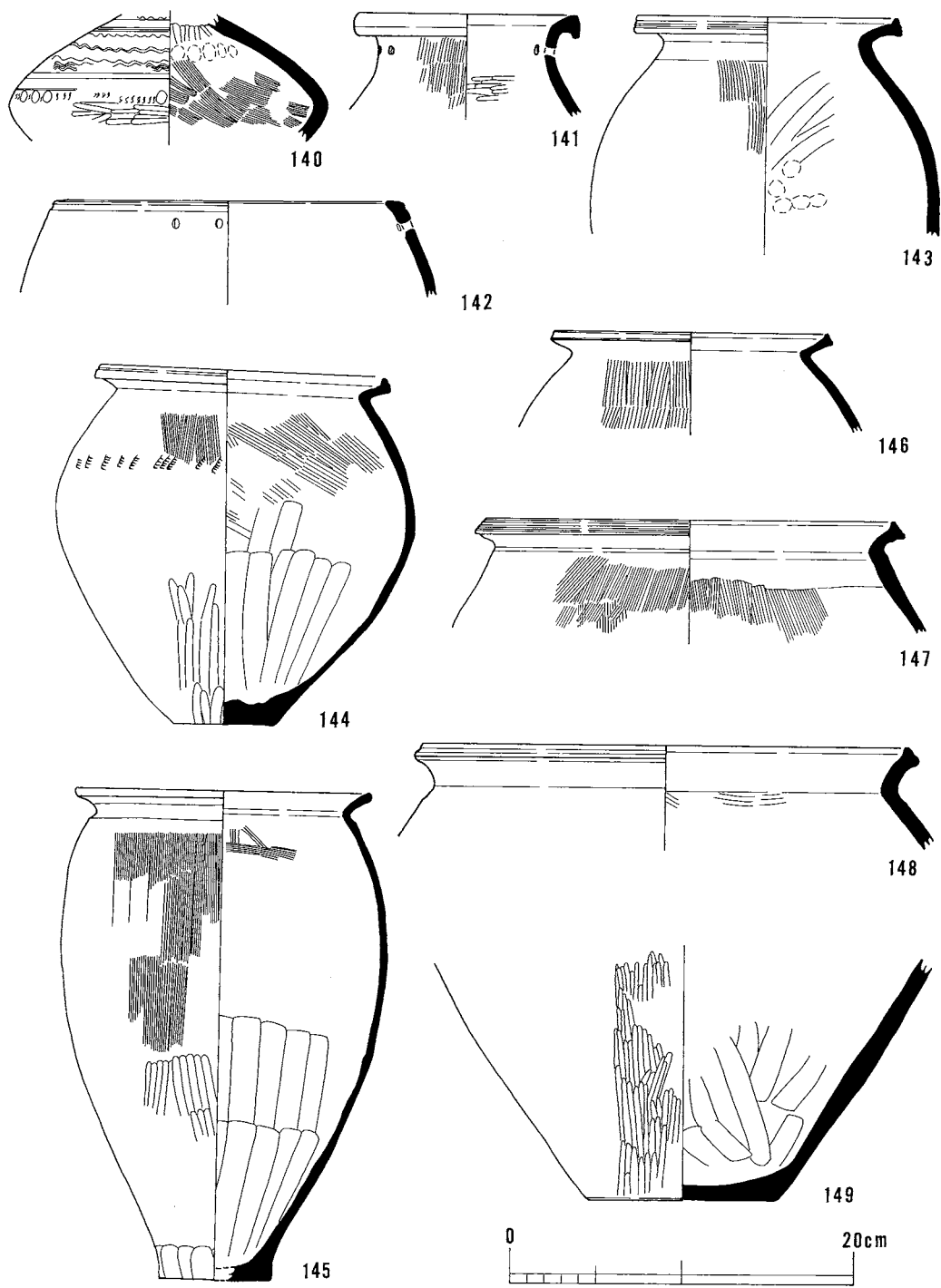


插图157 弥生土器 (21) N<sub>1</sub>地区 壺 (2) · 甕



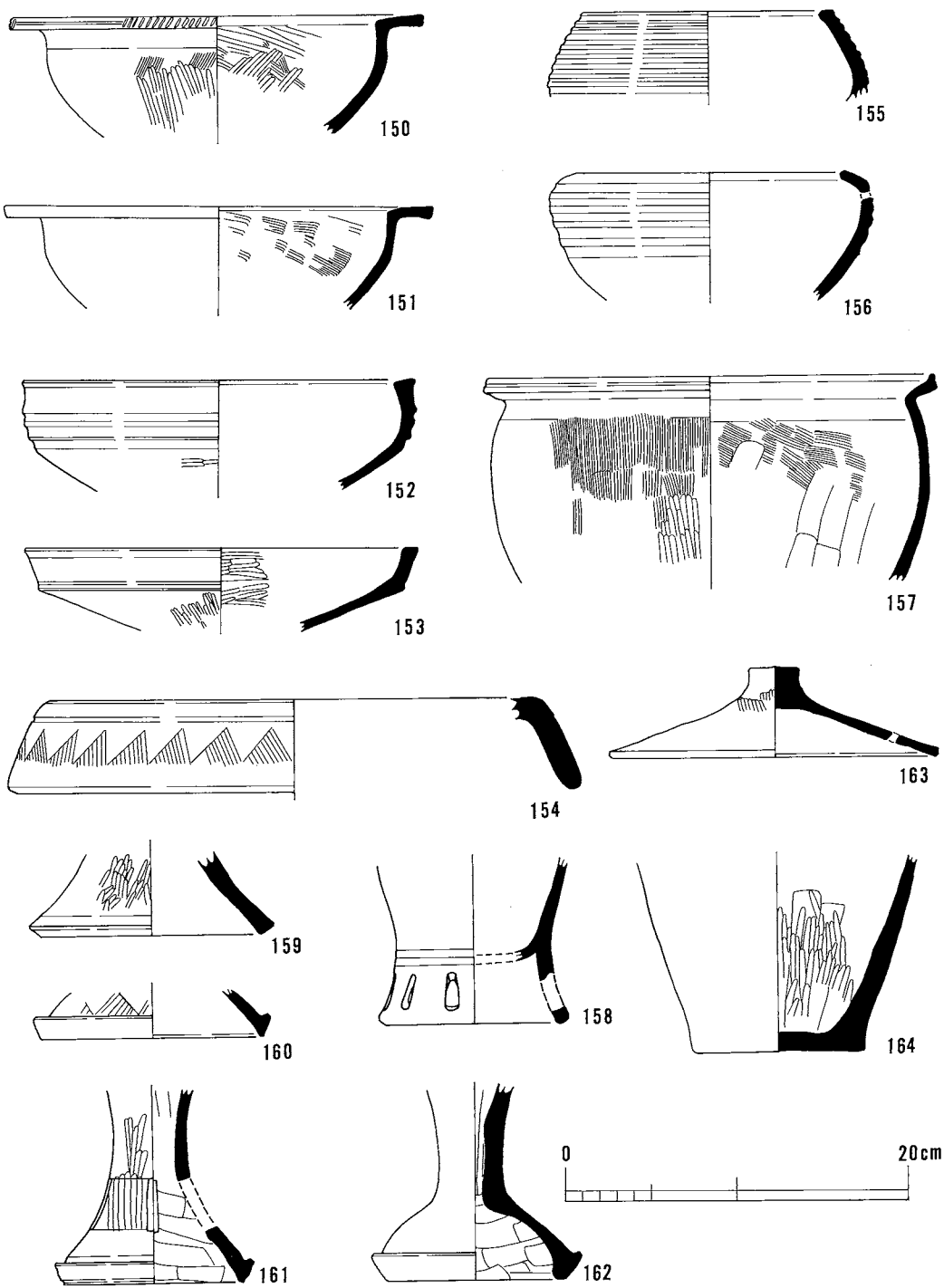


插图158 弥生土器 (22) N<sub>1</sub>地区 高杯・鉢・蓋

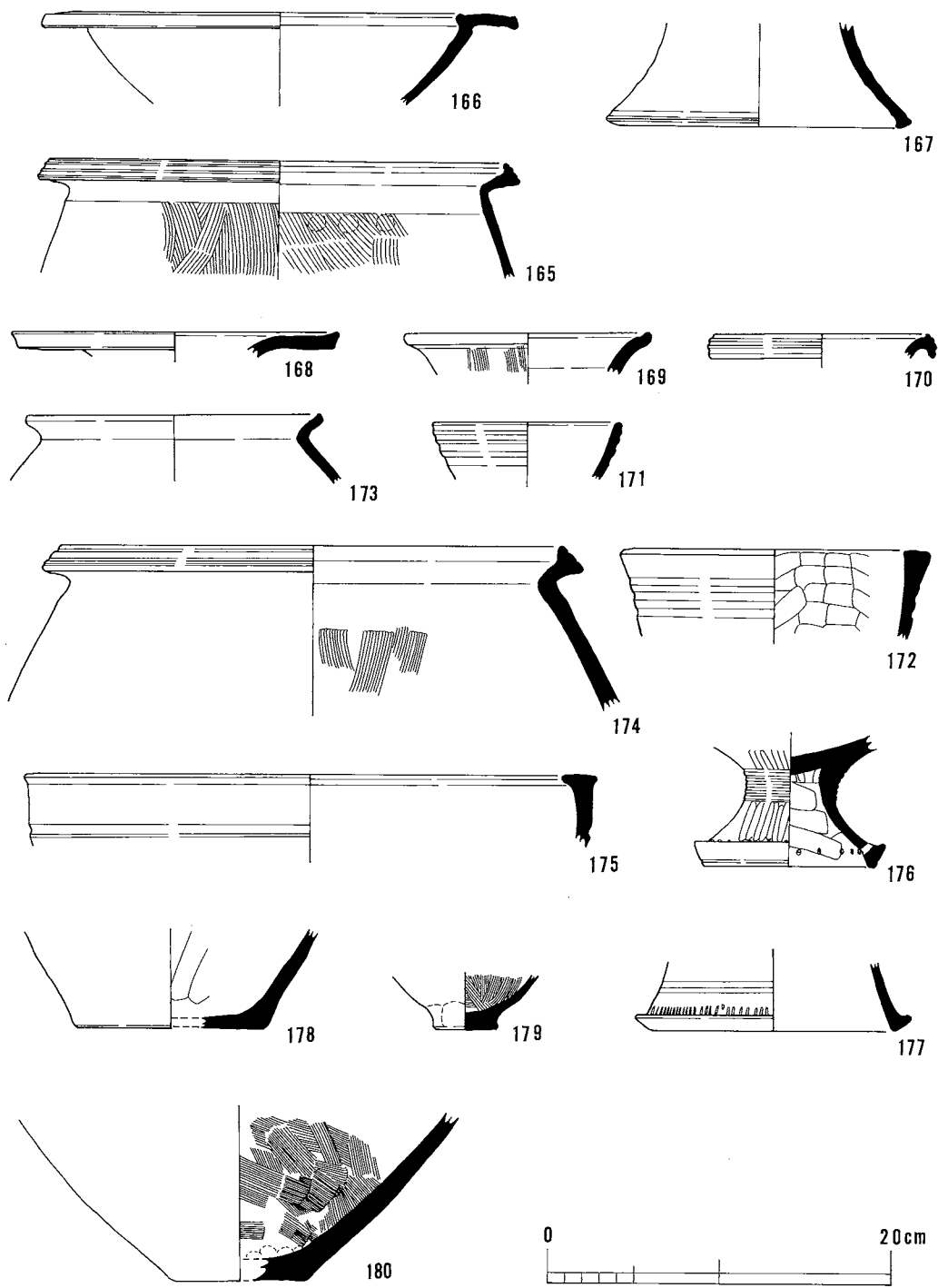


插图159 弥生土器 (23) C<sub>1</sub>·C<sub>3</sub>·C<sub>4</sub>·S<sub>4</sub>地区 甕·高杯·壺

### 3. 石器 (図版280)

N<sub>1</sub>地区・N<sub>3</sub>地区の弥生時代中期の住居跡1・2を中心に石鏃6点(打製石鏃5点・磨製石鏃1点)、石錐1点、石匙1点、石槍1点と剥片石器1点と磨製石斧1点がある。

住居跡1からは磨製石鏃(3)1点、剥片石器(9)1点と定角式磨製石斧(11)1点の計3点が出土し、住居跡2からは石鏃(5~7)3点、石匙(8)1点と石槍(10)1点の計5点がある。

石鏃6点のうち打製石鏃(1・2・5~7)と磨製石鏃1点(3)がある。

サヌカイトの産地分析の結果から6点(石鏃3点、石匙1点、石槍1点、剥片石器1点)中5点(石鏃1点を除く)が四国金山産石材を使用しており、打製石器のうち1・2の石鏃も肉眼観察から金山産石材を用いていることが判る。磨製石鏃は基部と先端部を一部欠損しているが丁寧に磨かれ作られた石鏃である。

石錐は小型の頁岩製のものである。

石匙は凸基が残り、刃部が大きく欠損しているが横刃型の石匙である。

石槍の柄部のみが残るものである。

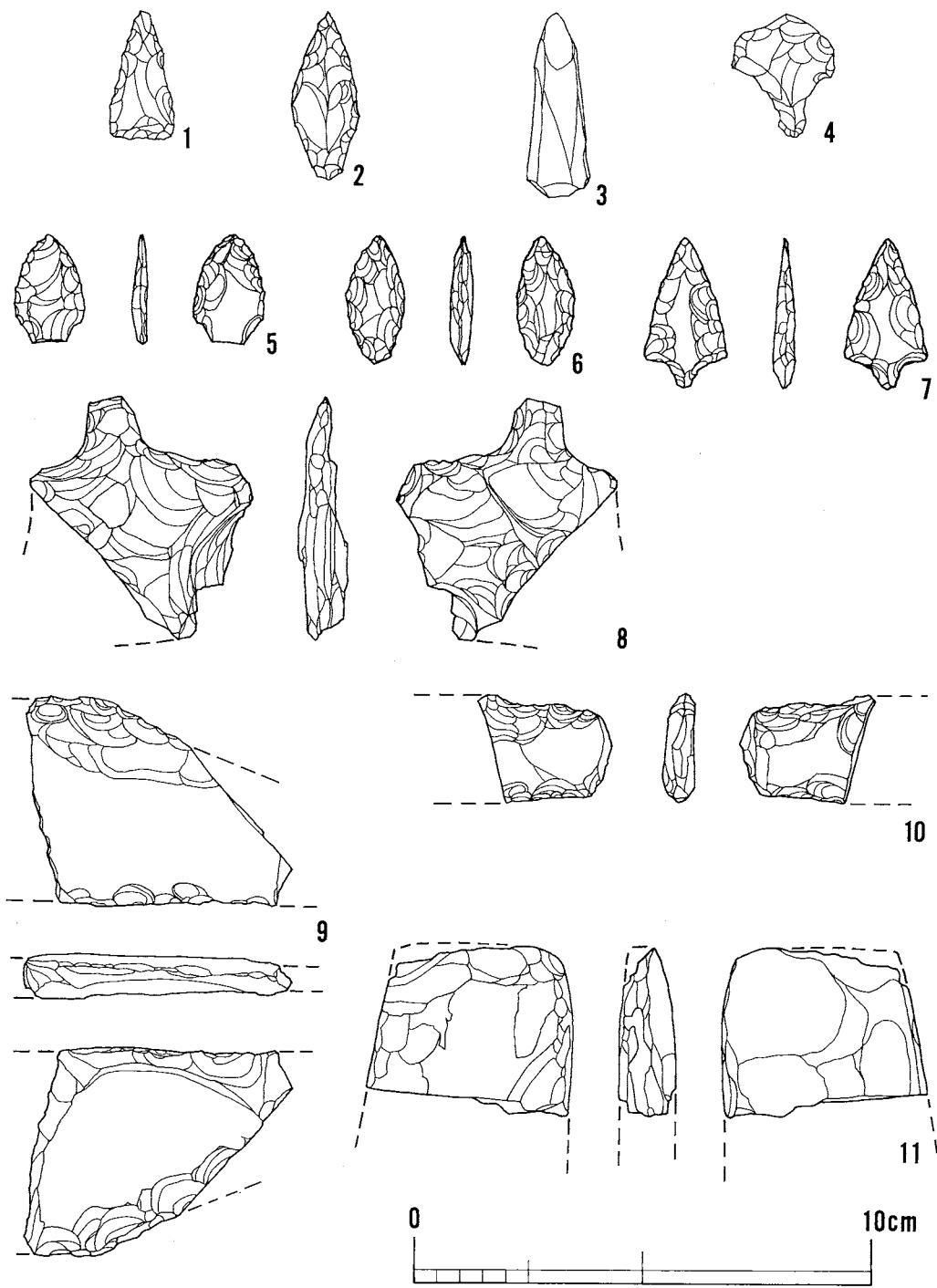
剥片石器は不定形刃器とも言えるもので、打製石包丁としても使えるが使用痕は観察していない。

磨製石斧は刃部が大方欠損しているが定角式の磨製石斧を復元するもので、使用・消耗・再調整・欠損で住居に捨てられたものである。

以上、打製石鏃と石錐を除くと使用時の欠損により、再生できずに住居跡に捨てられたものがほとんどである。

No.	石器の種類	地区	遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (cm)	石材	備考
1	打製石鏃・二等辺平基			2.8	1.3			サヌカイト	不明
2	打製石鏃・凸基			3.6	1.5			サヌカイト	不明
3	磨製石鏃・凸基	N <sub>1</sub> B	住居跡1	3.9	1.3			粘板岩	不明
4	石錐			2.7	2.1			頁岩	不明
5	打製石鏃・凸基	N <sub>3</sub>	住居跡2	2.4	1.5	0.3	1.16	サヌカイト	不明
6	打製石鏃・柳葉	N <sub>3</sub>	住居跡2	2.8	1.3	0.5	1.75	サヌカイト	金山産
7	打製石鏃・凸基	N <sub>3</sub>	住居跡2	3.2	1.8	0.4	1.89	サヌカイト	金山産
8	石匙	N <sub>3</sub>	住居跡2	4.3	4.8	1.1	15.38	サヌカイト	金山産
9	剥片石器	N <sub>1</sub> B	住居跡1	4.6	5.8	1.0	22.43	サヌカイト	金山産
10	石槍	N <sub>3</sub>	住居跡2	2.4	2.9	0.7	5.75	サヌカイト	金山産
11	磨製石斧・定角式	N <sub>1</sub> B	住居跡1	3.7	4.5	1.2	26.84	安山岩	

表4 石器一覧



挿図160 弥生時代石器 石鏃・石錐・石匙・剥片石器・石斧

## 第2節 古墳時代の遺物

### 1. 古式土師器

畿内V様式に併行する時期から、布留式古相に対応する時期の土器をとりあげる。

#### (1) C<sub>1</sub>地区出土土器

壺・甕・高杯・鉢が出土している。

1は口縁部が単純に開く壺である。体部外面は刷毛目、内面はヘラ削りを施し、口径は16.6cmである。2は垂直に立ち上がる頸部から口縁部が外反し、端部に凹線をもつ壺である。頸部には縦方向のヘラ磨きを行い、口径は14.2cm。3は球形の体部から短く頸部が立ち上がり、わずかにつまみ上げる口縁部をもつ小型の壺である。外面はヘラ磨き、内面下半はヘラ削りを施す。器高11.4cm、口径6.5cm、体部最大径11.0cmを測る。4と5は外反する口縁端部を横なでによってつまみ上げ、拡張したものである。4は外面を刷毛目とヘラ磨きを併用し、口径は19.4cm。5は体部が強く張り出し、外面は叩きと刷毛目を残している。器高23.9cm、口径15.2cm、体部最大径25.0cmを測る。6から8は二重口縁壺である。6は頸部の内外面に刷毛目を残し、口径は22.0cm。7の口径は23.2cmである。8は口縁部外面に櫛描波状文を施し、さらに2個1単位の円形浮文に竹管文を配し、口径は22.4cmである。9と10は体胴部である。9は上げ底を呈し、外面はヘラ磨きを行う。10は外面に叩きを施した後、下半はヘラ磨きを加え、内面は刷毛目状工具でなでた痕跡が認められる。底部は上げ底で、叩きを残している。体部最大径は24.4cm、底径は5.9cmを測る。

11から25は甕である。11と12は口縁端部が丸く納まるものである。11は体部最大径が上位にあり、短く屈曲して口縁部となる。外面はわずかに左上がりの叩き、内面は刷毛目を行っている。器高14.4cm、口径13.9cmである。12の外面は口縁部にいたる部分まで叩きを残している。また、ほぼ中位にある体部最大径の位置で叩きの角度が異なっている。内面は板状工具によってなでを行い、底部は叩いて仕上げ、その痕跡を明瞭に留めている。器高14.9cm、口径13.2cmである。13から15は口縁端部をわずかに肥厚させ、丸く納める甕である。13は球形の体部をもち、底部は上げ底となる。外面は右上がりの叩きを行った後にヘラ磨きを雑に加え、内面は削りと刷毛目で仕上げている。器高17.0cm、口径12.3cmである。14は口縁端部に丁寧な横なでを施したため、内外に凹線状の痕跡を残す。外面は叩きと刷毛目を併用し、内面はヘラ削りである。口径は14.8cm。15は外面を叩き、内面を板状工具によるなでで仕上げたもので、口径は14.8cmである。16から19は口縁端部に強い横なでを行ってつまみ上げたもので、外端面には擬凹線文を残すものもある。16は外面に右上がりの叩きの後刷毛目を加え、口径は13.5cm。17は倒卵形の体部をもち、口縁端部は上方に拡張されている。外面は叩きを加えているが、丁寧な

刷毛目によって消している。底部は平底を保っている。器高19.7cm、口径16.0cm、体部最大径17.4cmを測る。18も外面は叩きと刷毛目を加えている。内面は粘土紐の接合痕が明瞭に残る。19は口縁部の屈曲が強く、内面に稜線が残る。外面には右上がりの細かな叩きが認められ、口径は16.0cmである。20はおそらく球形に張る体部に、屈曲して単純に収まる口縁部をもつ甕である。外面は叩きの上にヘラ削りを加え、内面は板状工具によってなでている。21から25は体部から底部の資料である。21の外面は下半がほぼ水平の叩き、上半と口縁部には右上がりの叩きを行い、内面下半はヘラ削りを施す。22は右上がりの叩きが認められ、わずかな上げ底を呈する。23は外面は叩きと刷毛目を加え、内面は刷毛目で調整する。24は小さな底部をもち、外面は叩きの上に刷毛目を加え、内面はヘラ削りを行っている。25の外面は叩きを行った上に刷毛目とヘラ磨きを加えたものである。底部にも叩きの痕跡を残している。

26と27は杯部から屈曲して口縁部が外に開く高杯である。26は剥離のため調整は不明であるが、口径は21.6cmを測る。27は杯部外面にわずかに叩きの痕跡が認められる点が特徴的である。脚部は単純に開き、外面にはヘラ磨きを施し、4ヵ所に円孔を穿つ。器高15.0cm、口径22.4cm、脚部径12.5cmである。

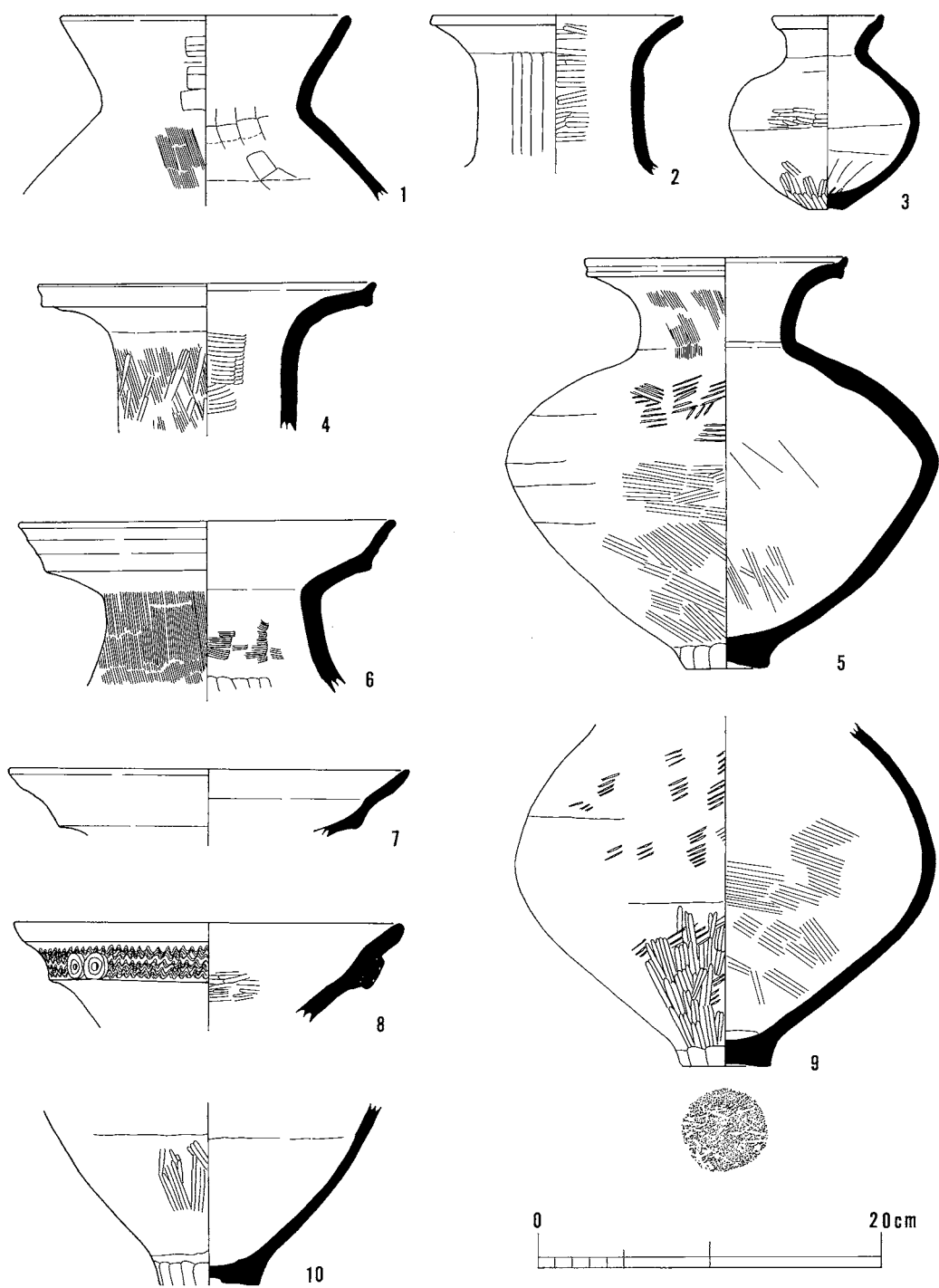
28から30は鉢である。28は体部が内湾して開き、単純に納まる口縁部に続く。外面はヘラ磨き、内面は刷毛目を行う。底部はヘラ削りを施し、わずかに上げ底を呈する。器高8.0cm、口径20.7cmである。29と30は内湾する体部から屈曲して端部に面をもつ口縁部を構成する大型の鉢である。29は体部に叩きを行った後下半はヘラ磨きを加えている。口径は40.0cm。30は口縁部の一部を外方に押し広げ、片口を作り出している。外面はほぼ水平の叩きをヘラ磨きで消している。底部は指で押さえて張り出している。器高26.8cm、口径42.1cmである。

## (2) C<sub>2</sub>地区出土土器

壺・甕・高杯・鉢が出土している。

31は長頸壺である。径13.2cmの扁球形の体部から、内湾気味に頸部が長くのびる。底部は平底を保っている。外面は全面に丁寧なヘラ磨きを施している。器高22.2cm、口径9.8cmである。32は体部だけの資料であるが、31と同様の器形になるものと推定される。体部は張りが強く、平底である。最大径は15.1cmを測る。33と34は二重口縁壺である。33は口縁部に櫛描波状文を加飾するが、流麗とはいえない。頸部にはヘラ磨きの痕跡が認められる。35は屈曲して立ち上がる口縁部を喪失している。内外面ともにヘラ磨きが著しい。35と36は体部である。34はほぼ球形の体部で、外面は叩きの後に刷毛目となでを行っている。底部は平底で、高台状に作り出されたものである。体部最大径は19.2cm。36も同様に球形の体部であり、外面は叩きを刷毛目で消している。最大径は24.2cmである。

37から48は甕である。このうち37から39は口縁部が屈曲して、端部が丸く納まるもので、い



挿図161 古式土師器 (1) C<sub>1</sub>地区 壺

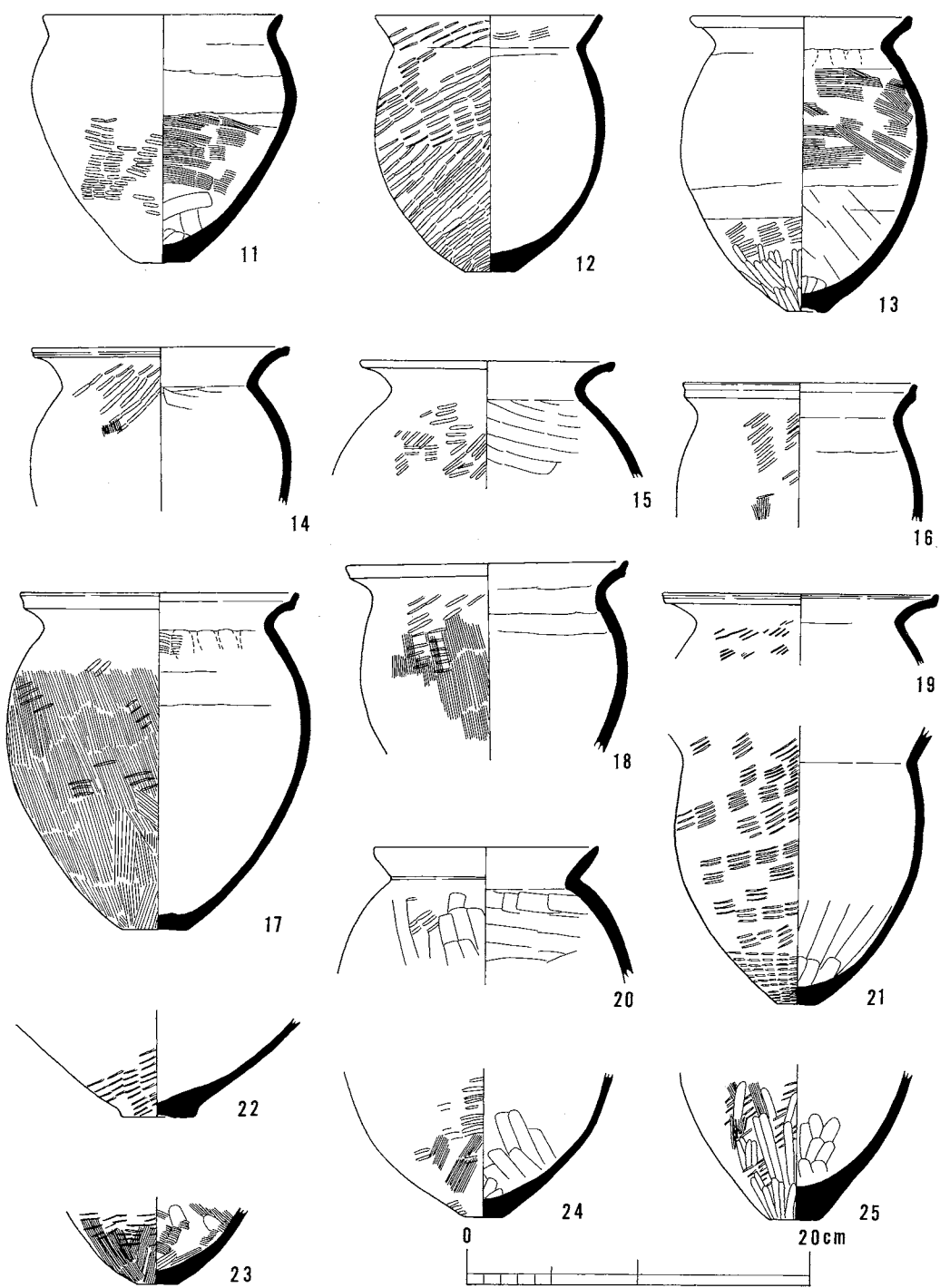


插图162 古式土師器(2) C<sub>1</sub>地区 甕



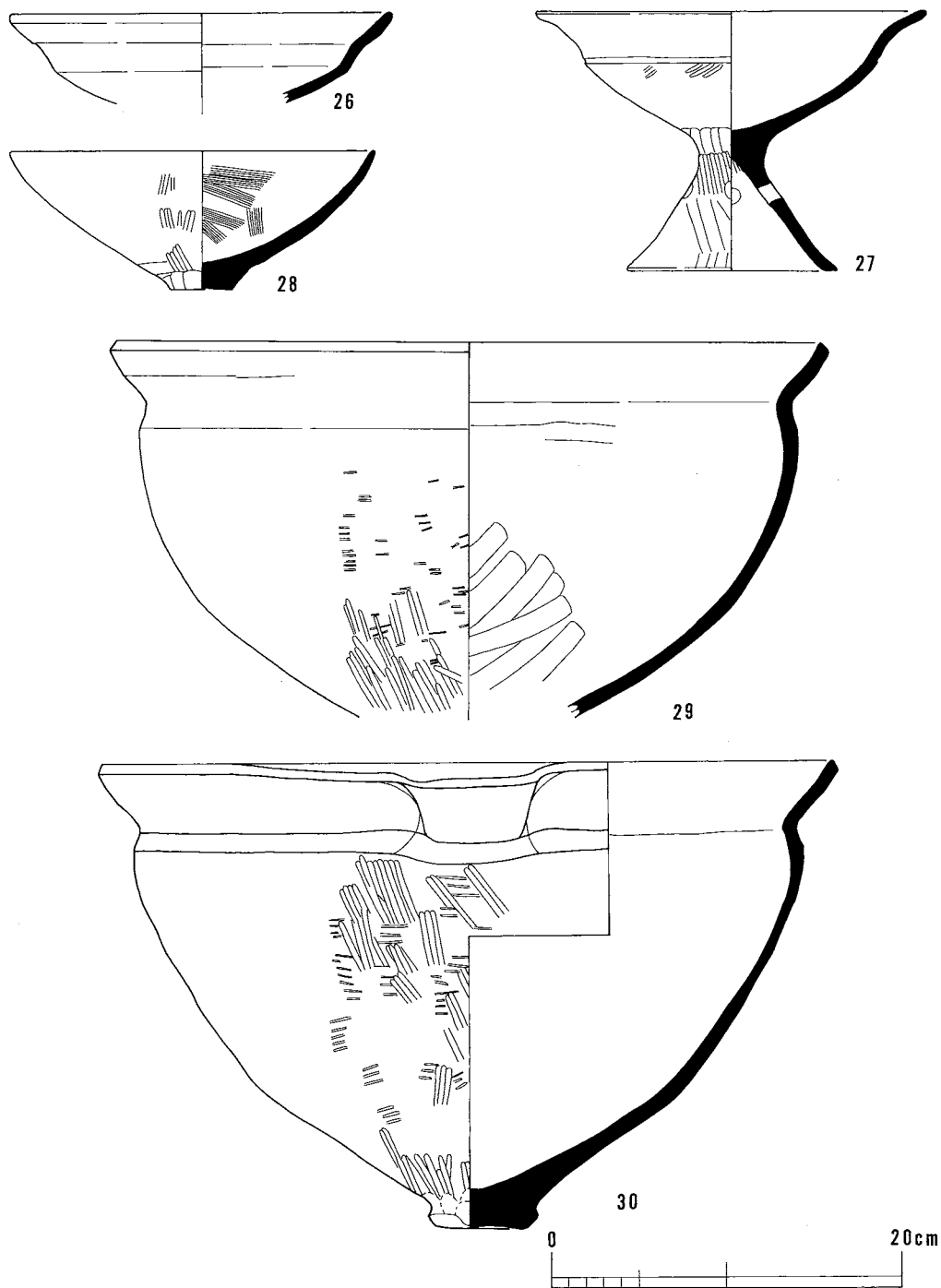


插图163 古式土師器 (3) C<sub>1</sub>地区 高杯・鉢

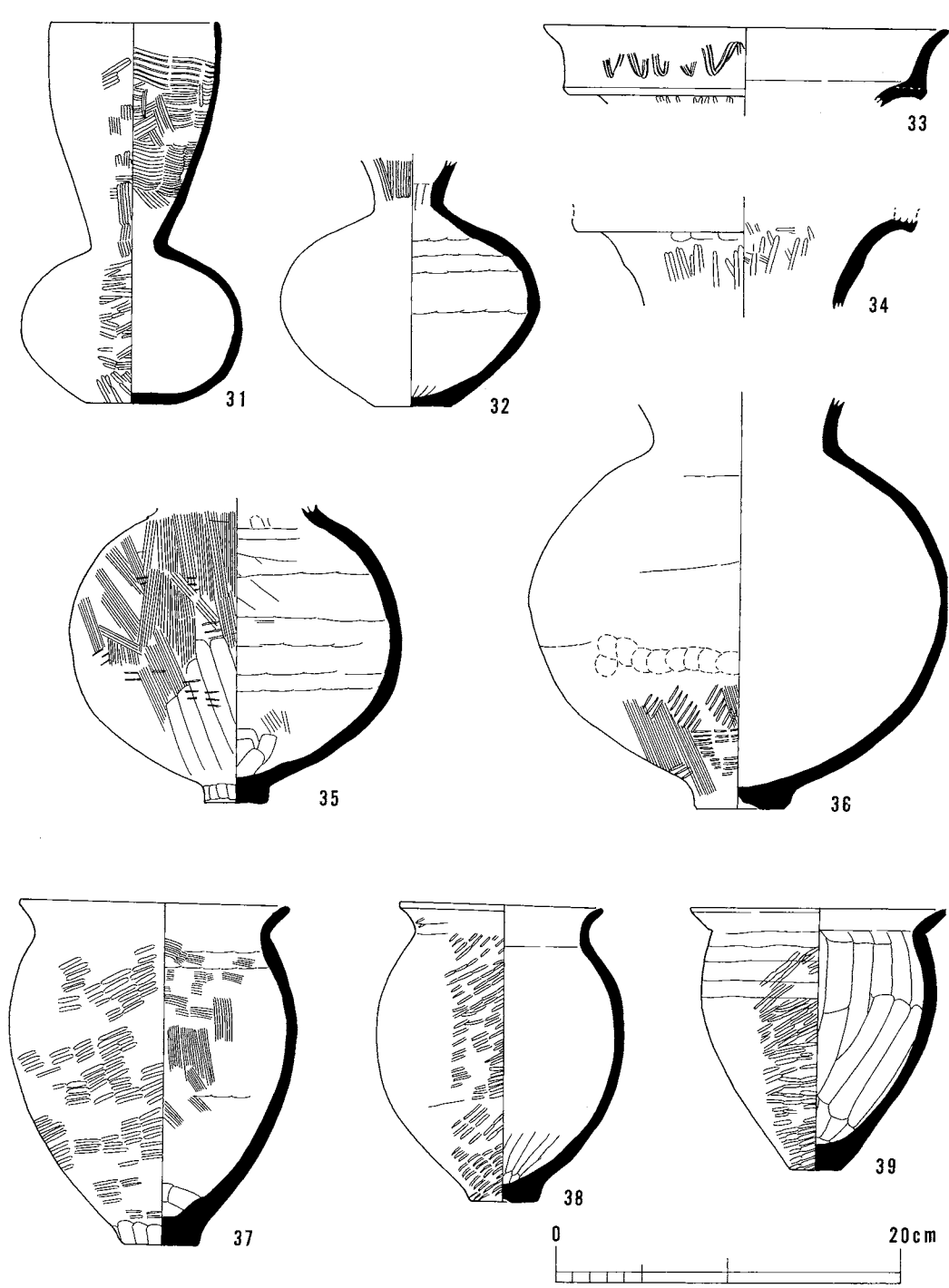


插图164 古式土師器 (4) C<sub>2</sub>地区 壺・甕 (1)

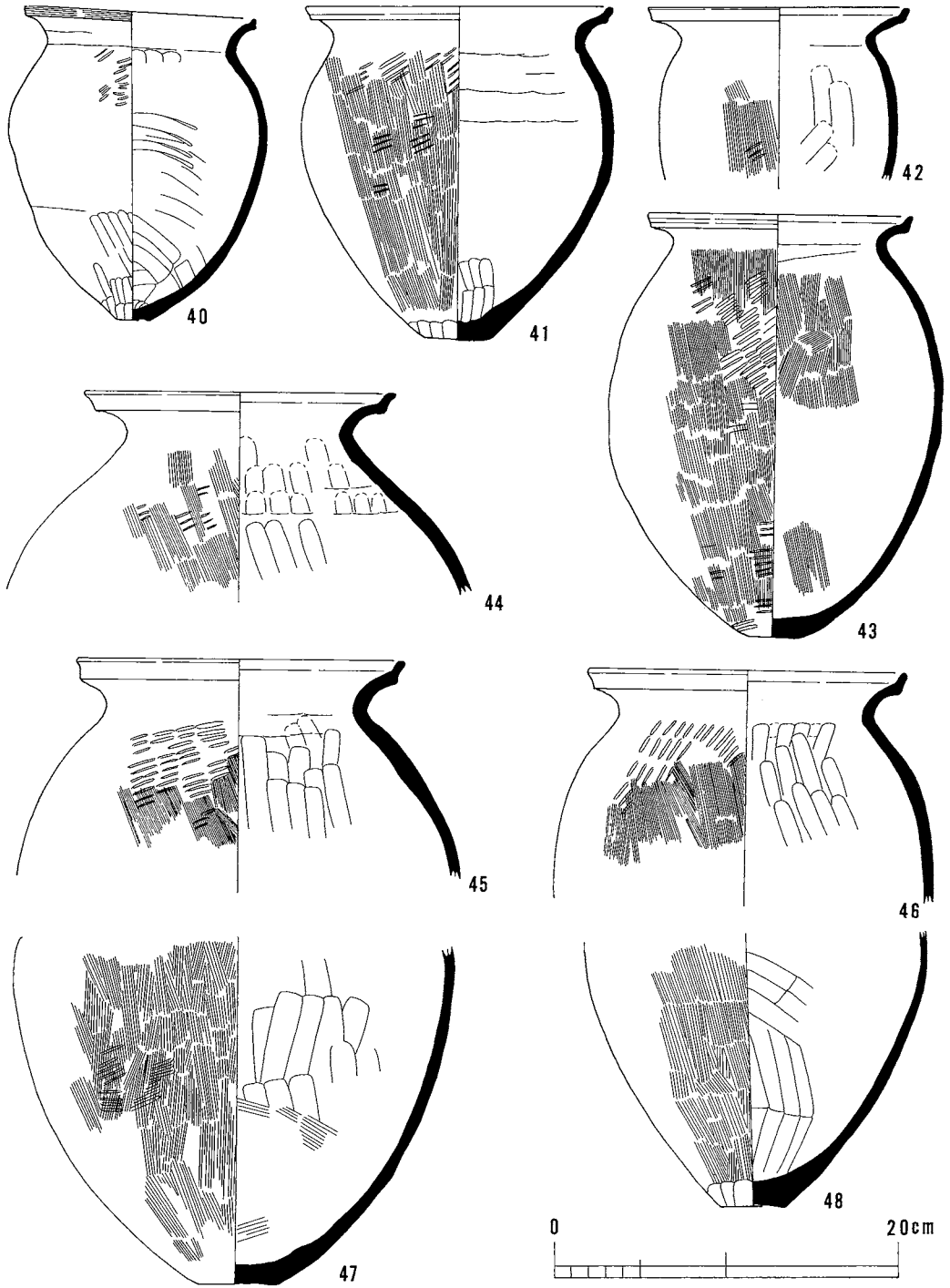
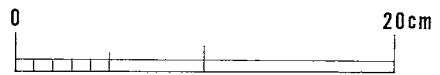
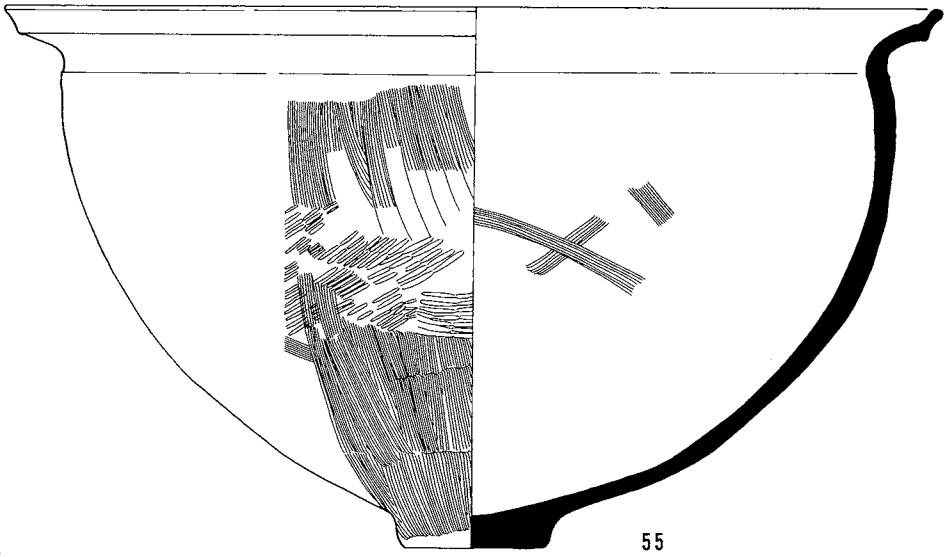
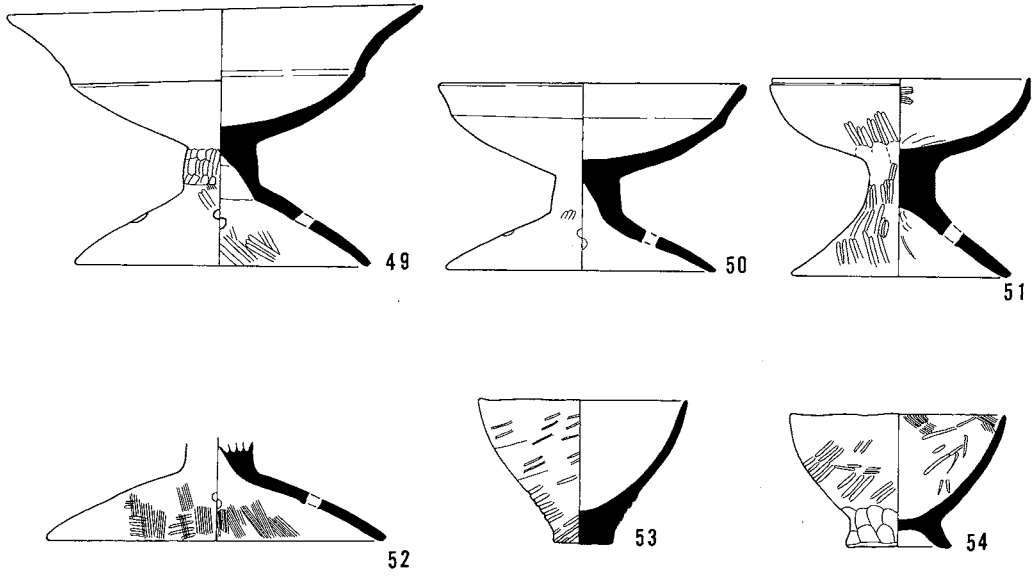


插图165 古式土師器 (5) C<sub>2</sub>地区 甕 (2)



挿図166 古式土師器 (6) C<sub>2</sub>地区 高杯・鉢

ずれも平底を保つ。体部外面は下半がほぼ水平またはやや右上がりの叩き、上半は右上がりの叩きが顕著で、それを消す作業は加えられていない。37は内面刷毛目を行い、器高20.0cm、口径15.7cmである。38は体部最大径がほぼ中位にあり、器高17.3cm、口径11.8cm。39は内面ヘラ削りを行い、器高15.3cm、口径15.1cmは体部最大径13.6cmを凌いでいる。40から43は口縁端部に強い横なで行い、上方につまみ上げるものである。いずれも小さな平底を保つ。40は口縁端部は擬凹線文状の凹凸が著しく、体部外面は叩きとヘラ削り、内面はヘラ削りを行う。器高18.0cm、口径13.3cmである。41は外面は叩きを刷毛目で消し、内面は下半がヘラ削り、上半は粘土紐の接合痕を明瞭に残す。器高19.3cm、口径17.6cm。42は外面の叩きを刷毛目で消している。43は底部が丸底に近づき、体部は倒卵形となる。外面は叩きを行った後に全面に刷毛目を加え、内面も刷毛目で調整している。器高24.6cm、口径15.2cm、体部最大径19.2cmである。44から46は口縁部が強調され二重口縁状に拡張した甕で、体部最大径が口径を大きく凌ぐ点が特徴的である。いずれも外面は叩きを刷毛目で消し、内面はなでと指頭圧痕を明瞭に残していることが共通している。口径は44は16.0cm、45は18.9cm、46は18.2cmである。47と48は体部である。48は外面は叩きと刷毛目、内面はヘラ削りと刷毛目を併用し、小さな平底をもつ。最大径は25.3cm。48は外面刷毛目、内面ヘラ削りを行い、小さい底部はわずかに上げ底を呈する。

49から52は高杯である。49と50は浅い杯部から屈曲して外反する口縁部にいたる。また脚柱部から屈曲して外湾気味に脚部が開き、そこに4カ所程度の円孔を穿つ。49は脚部の内外面にヘラ磨きを行い、器高13.8cm、口径21.7cmである。50は器高9.9cm、口径16.1cmである。51は浅い杯部から単純に口縁部が立ち上がり、体部は椀状をなし、その端部はつまみ上げられている。脚部は脚柱部から外反して開き、円孔を3カ所に施している。全体にヘラ磨きが顕著である。器高10.5cm、口径13.5cmである。52の脚部は49と50のそれに似る。外面は叩きを刷毛目で消している点が特徴的である。

53から55は鉢である。53は器高7.6cm、口径11.0cmの小型の鉢である。外面はラセン状に叩き、甕の調整に類似している。底部は径3.1cmの平底で、木葉痕が明瞭に観察できる。54は口径11.2cmの小型の鉢に短い脚台を付加したものである。外面に叩きを残し、脚台は指で押さえた痕跡が顕著である。55は器高28.7cm、口径49.2cmの大型の鉢である。体部から屈曲した口縁部が端部を横なで拡張している点は、甕44・45などに相似している。体部外面は叩きを行い、その後刷毛目を加えている。内面はわずかに刷毛目を残す。底部は径7.6cmの平底で、わずかに突出している。

### (3) C<sub>3</sub>地区出土土器

壺・甕・高杯・鉢が出土している。

56は頸部から緩やかに屈曲して口縁部をなす壺で、口縁端部は上下につまみ出されている。

外面は刷毛目、内面はヘラ磨きを行い、口径は20.7cmである。57は二重口縁壺である。端部は強い横なでわずかに肥厚し、端面は凹線状を呈する。外面はヘラ磨きを行い、口径は24.0cm。58は長頸壺の頸部・口縁部で、C<sub>2</sub>出土の31と類似する器形のものであろう。外面には刷毛目が顕著である。59は体部が張る小型の壺である。外面は刷毛状工具でなで、内面は下半にヘラ削りを行う。底部は小さな平底である。60はほぼ球形に復元できる体部で、突出して厚い平底をもつ。外面は叩きを残し、内面はヘラ削りを施す。

61から72は甕である。61から67は口縁部が短く屈曲して端部を丸く収めるものである。62と64は叩き、63・65・66は叩きと刷毛目を併用して外面を調整している。64の内面は下半がヘラ削り、上半が刷毛目である。67は口縁部が外腕気味に開き、口径は15.2cmである。外面は叩きを施し、その上半部はヘラ削りを加える。内面はヘラ削りを行う。68から72は端部を強い横なでによってつまみ上げた甕である。68は外面は右上がりの叩きの後一部に刷毛目が認められ、内面は刷毛目を行う。口径14.6cm、体部最大径20.6cmである。69は外面右上がり叩き、内面刷毛目を施し、口径14.2cm、体部最大径24.6cm前後である。70は口径13.2cm、71は14.8cmである。72は外面に叩きを残し、口径14.8cm。73と74は底部に穿孔を行った甕体部である。いずれも外面には叩きが残る。75と76は脚台部であり、鉢に付加された可能性が高い。接合部は指によって押さえた痕跡が明らかである。

77から80は高杯である。77と78は浅い杯部から外反する口縁部がのび、脚部は脚柱部から単純に開き、4カ所に円孔を穿つ。77は脚柱部はヘラ磨き、脚部は刷毛目を施し、器高10.3cm、口径15.8cmを測る。78は杯部で、外面はヘラ磨き、口径は16.0cmである。79と80は脚部である。いずれも脚柱部から脚部が単純に開き、円孔は3カ所に設けられている。脚柱部はヘラ磨きを行っている。脚径は79は14.9cm、80は12.0cmである。

81から83は鉢である。81は体部が直線的に開いて口縁部に達するものである。外面は右上がりの叩き、内面は刷毛目を施している。底部は平底で、穿孔を行っている。器高8.0cm、口径16.8cmである。82は体部が内湾して開くものである。底部は中央部がくぼんでいるため高台状を呈する。器高6.8cm、口径13.6cmである。83は口径40.0cmの大型の鉢である。内湾する体部から緩やかに口縁部が屈曲し、端部はつまみ上げて面を成している。その一部は片口状に折りかえされている。外面は右上がりの叩きをヘラ磨きで消し、内面もヘラ磨きを行う。

#### (4) C<sub>4</sub>地区出土土器

壺・甕・高杯・器台が出土している。

84と85は二重口縁壺である。いずれも口縁部外面に櫛描波状文を加飾しているが、技法は稚拙である。口径は84が23.8cm、85が22.4cmである。

86は口縁部が屈曲して外反する甕である。磨滅のため調整は不明であり、口径は15.4cmを測

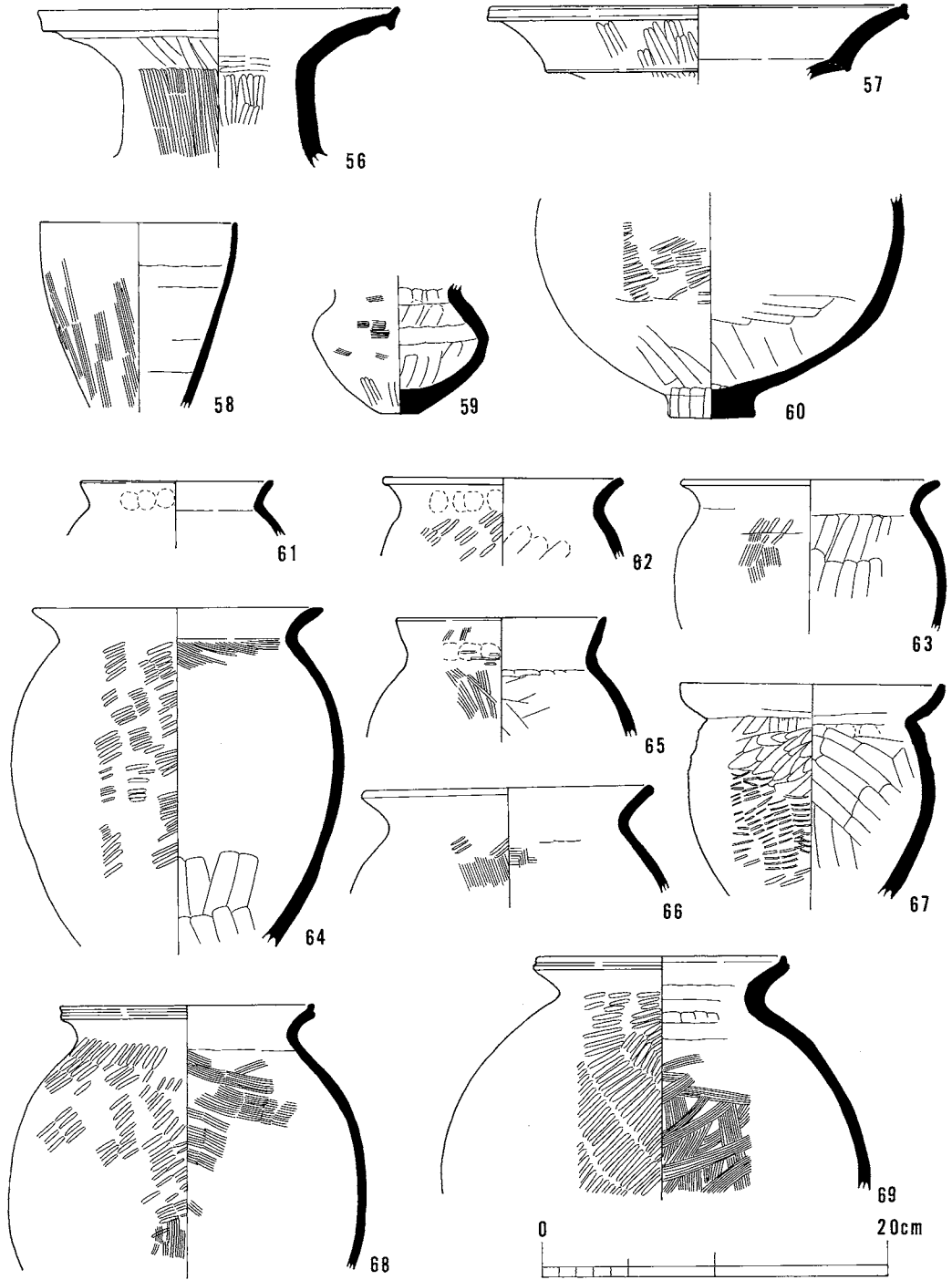


插图167 古式土師器 (7) C<sub>3</sub>地区 壺・甕 (1)

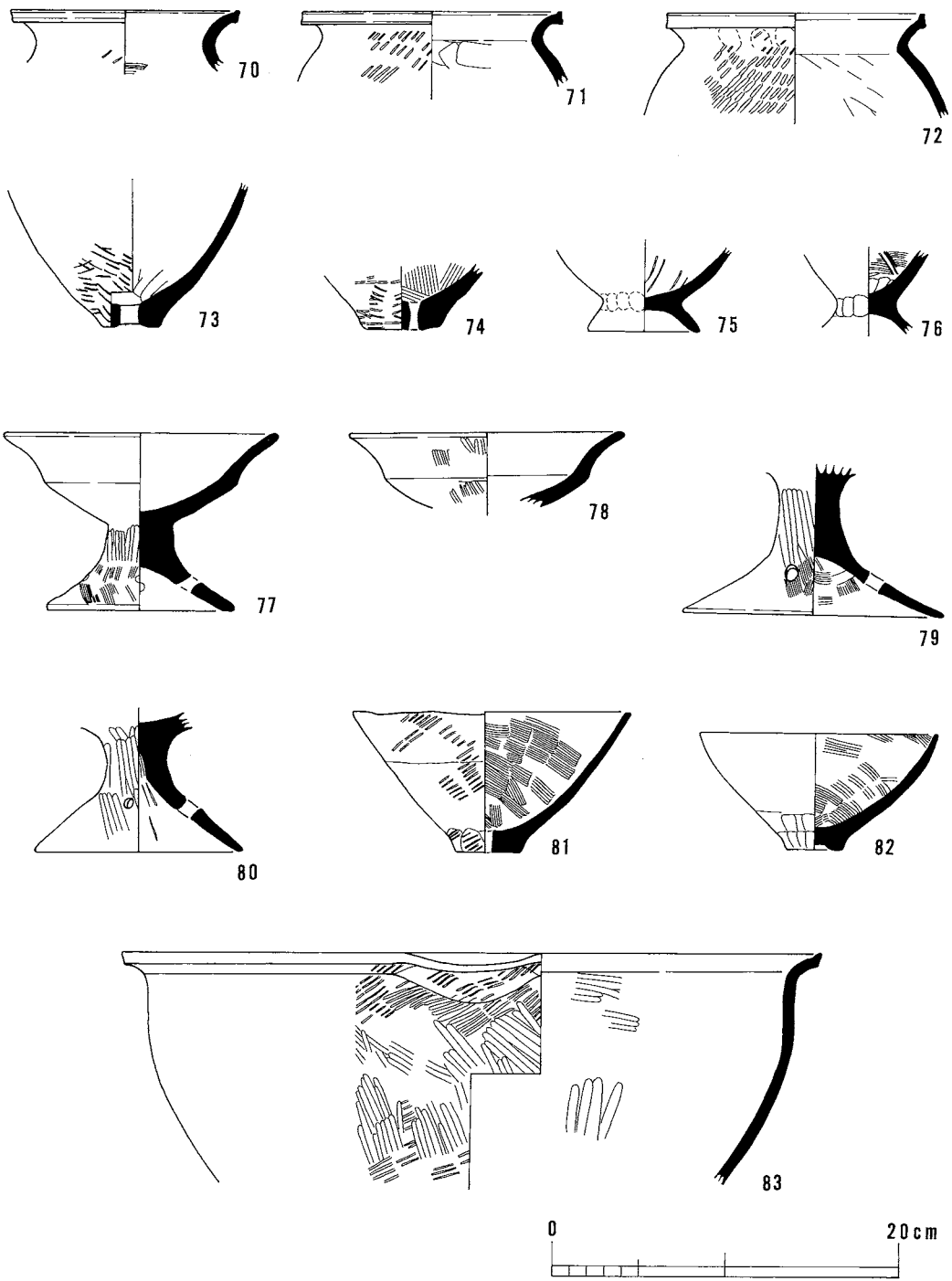
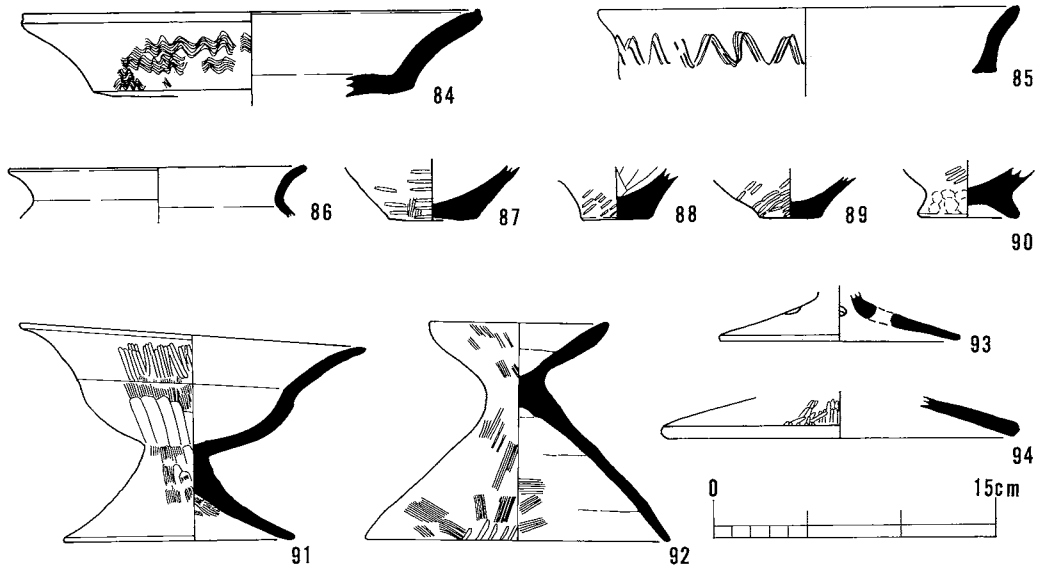


插图168 古式土師器 (8) C<sub>3</sub>地区 甕 (2)・高杯・鉢





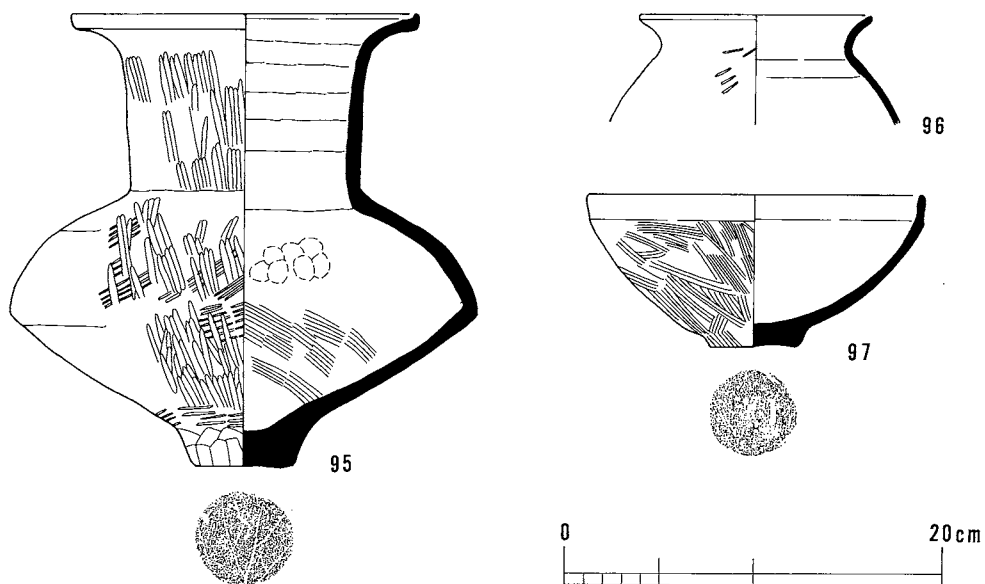
挿図169 古式土師器 (9) C4地区 壺・甕・高杯・器台

る。87から90は外面に叩きを残す甕底部である。90は脚台状に突出している。

91は内湾してやや深い杯部から屈曲して外半する口縁部が開く高杯である。脚は脚柱部から単純に外半して開いてゆき、完存するが円孔は認められない。外面は刷毛目を施した後に、受部はヘラ削り、口縁部はヘラ磨きを加えている。脚部には刷毛目が残る。器高11.7cm、口径18.3cm、脚径12.1cmである。

92は器台である。小さい受部は浅く直線的に開き、脚部は長く直線的にのびる。受部と脚部の接合部分は、中実となる。外面と脚部内面には刷毛目が残されている。器高11.5cm、口径9.4cm、脚径16.0cmである。

93と94は高杯脚部である。93は円孔をもち、脚径は12.6cm、94はヘラ磨きを行い、脚径は18.1cmである。



挿図170 古式土師器 (10) N<sub>2</sub>A地区 壺・甕・鉢

(5) N<sub>2</sub>A地区出土土器

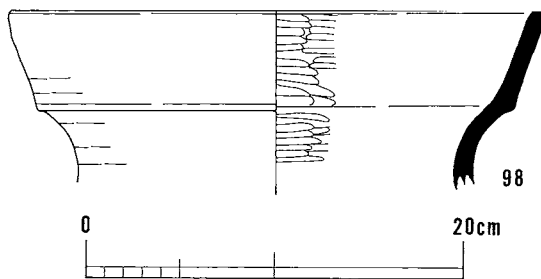
95は壺である。頸部はほぼ垂直にのび、緩やかに屈曲して外反する口縁が開き、端部は強い横なでによってつまみ上げ、端面は擬凹線状に凹凸をもっている。体部は強く張り出して算盤玉状をなし、底部は平底で木葉痕を残している。体部の外面は右上がりの叩きを丁寧なヘラ磨きで消し、内面は刷毛目と指頭圧痕が顕著である。頸部は外面をヘラ磨き、内面には粘土紐の接合痕をとどめている。器高23.7cm、口径18.2cm、体部最大径24.5cm、底径5.1cmである。

96は口縁部が外反し、単純に収まる甕である。外面には叩きを行うが、内面調整は不明である。口径は12.1cmを測る。

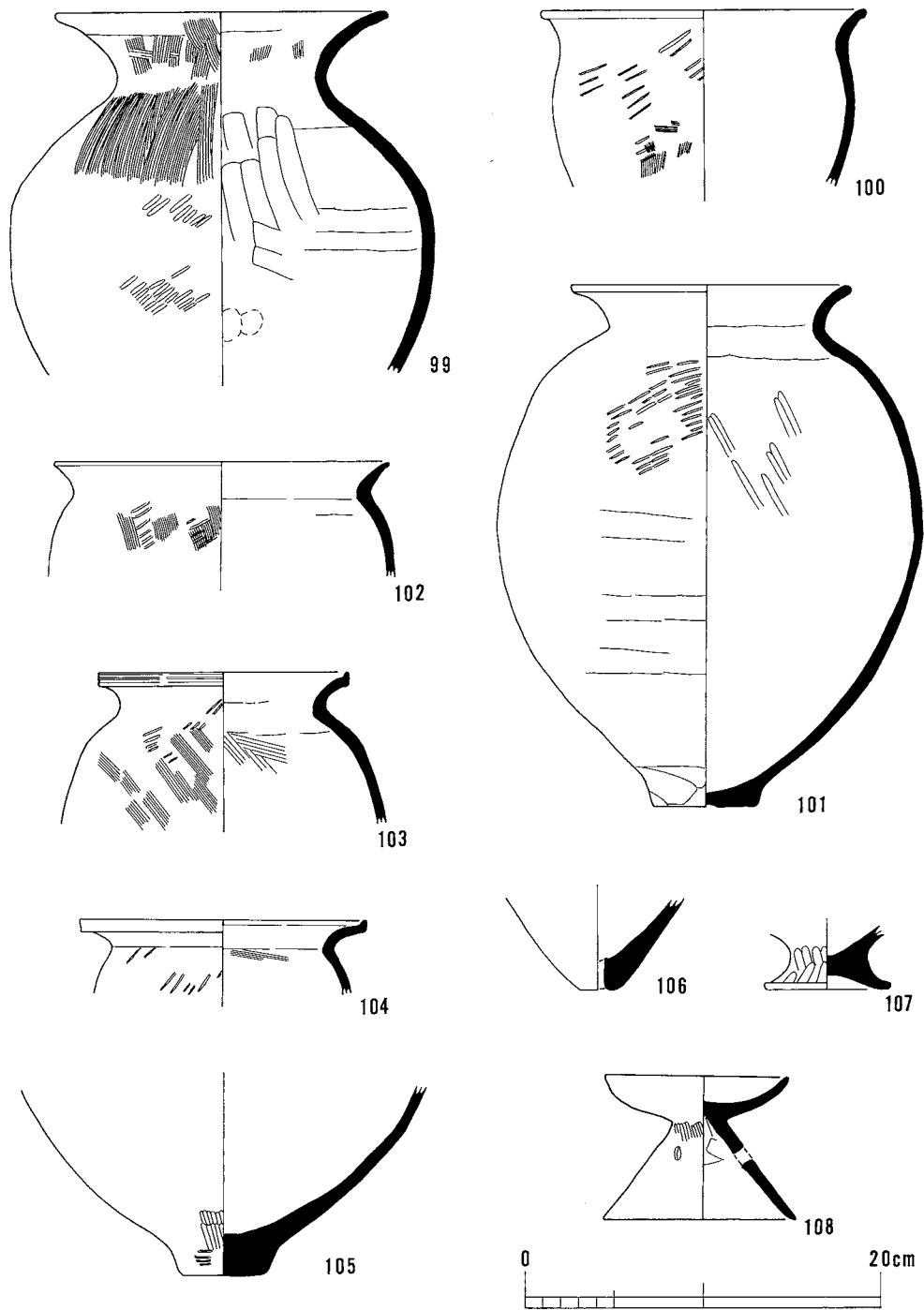
97は外湾して開く体部からわずかに屈曲して立ち上がる口縁部をもつ鉢である。底部は平底で、肥厚して高台状となり、ヘラ削りで調整している。外面は刷毛目を施している。器高8.0cm、口径17.5cm、底径4.7cmである。

(6) S<sub>4</sub>地区出土土器

98は大型の二重口縁壺である。頸部と口縁部の屈曲箇所はわずかに突出し、端部は丸く収まる。内外面はヘラ磨きを行っている。口径は28.2cmである。



挿図171 古式土師器 (11) S<sub>4</sub>地区 壺



挿図172 古式土師器 (12) その他の地区 壺・甕・器台

## (7) その他の土器

99は球形の体部から口縁部が大きく外反する壺である。外面は叩きと刷毛目を併用し、内面は板状工具によるなでと指によるなでを行う。口径は19.3cm、体部最大径は23.9cmである。

100から104は甕である。100・101は口縁部が緩やかに屈曲し、口縁端部を丸く収めるものである。100は口縁端部がわずかに肥厚し、外面は叩きと刷毛目を施している。口径は18.3cmで、体部最大径を凌ぐ。101は倒卵形の体部と平底をもつ。外面には右上がりの叩きが認められる。器高は29.6cm、体部最大径は23.8cmで15.4cmの口径を凌いでいる。102・103は口縁端部をわずかにつまみ上げたものである。102は外面に叩き、内面に刷毛目が認められる。103は口縁端部は強い横なでによって擬凹線状の凹凸を呈している。外面は叩きを刷毛目で消し、内面には刷毛目が認められる。口径は14.0cm。104は口縁端部を薄くひき上げた甕である。外面は叩きを刷毛目で消している。105は肥厚した底部と大きく張る体部である。底径は5.4cm。106は小さな底部に穿孔を施したもので、107は脚台部である。

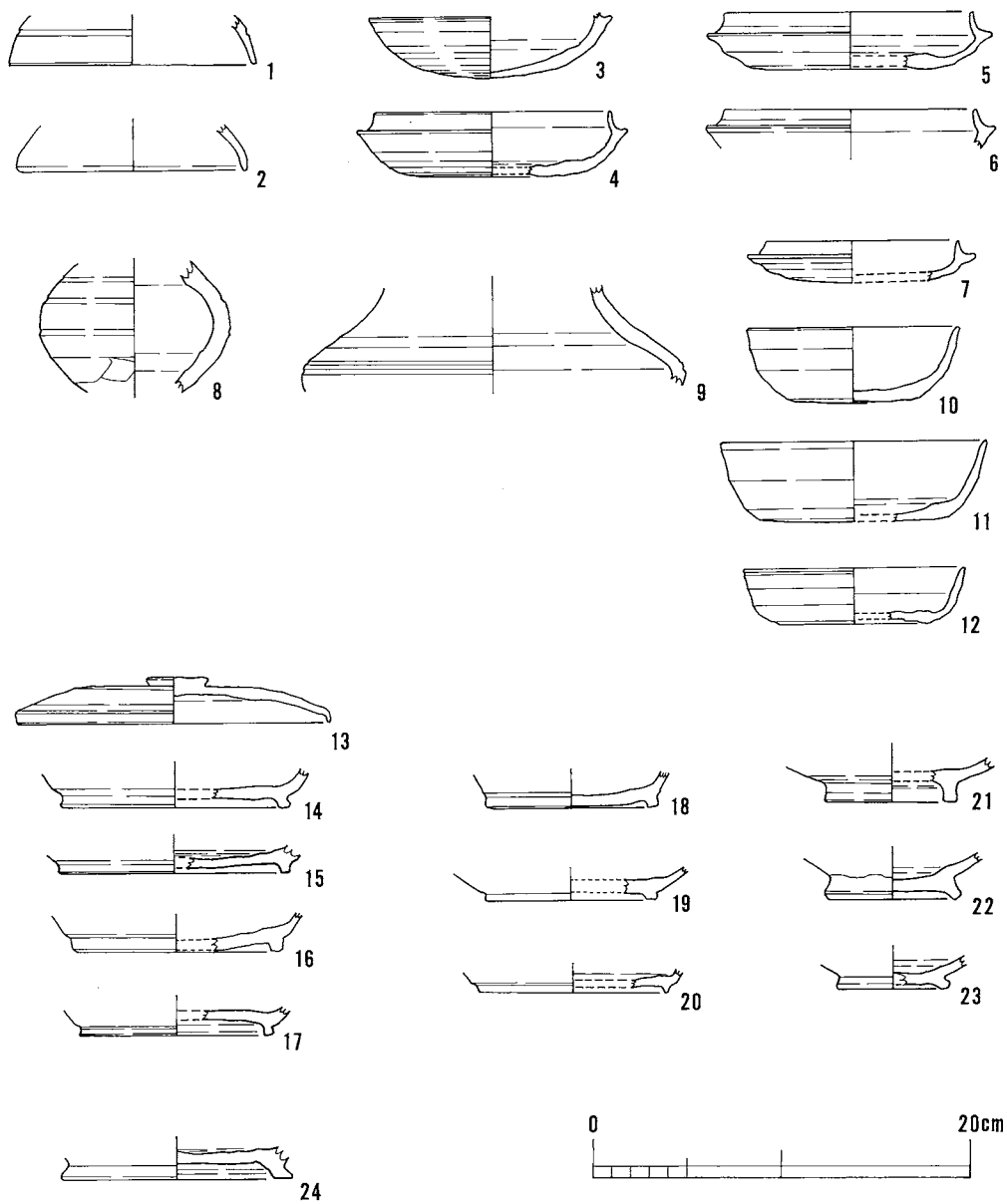
108は浅い受部と直線的に開く脚部からなる器台である。脚部はヘラ磨きを行い、円孔は3ヵ所に認められる。器高8.2cm、口径10.3cm、脚径11.0cmである。

## 2. 須 恵 器

古墳時代後期の須恵器がそれぞれ僅かではあるがC<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>4</sub>・N<sub>1</sub>・N<sub>2</sub>A・S<sub>1</sub>Ⅱの各地区から出土しており、器種に蓋杯と罍がある。

蓋杯のうち、蓋は2点(1・2)で細片で復元は正確ではないが、1は径13cm、2は径12cm余りを計る。杯身は5点(3～7)で、3は口径12.9cm、高さ4cm余りを計り、4～6は口径12.4～13.2cmを計り、高さがなく平底気味である。7は口径10cm余りと小さい。田辺昭三氏の「陶邑編年」と比較すると3はTK43型式、1・4～6はTK209型式、2・7はTK209型式からTK217型式の過渡期に位置する。6世紀後半から7世紀初頭に属する。

8は罍で径10cmを計るもので胴部のみで胴下半は粗い削りが見られる。9は胴径が20cmと大きく短頸壺になるものか。



挿図173 古墳時代～平安時代の須恵器

### 第3節 奈良時代の遺物

南地区S<sub>3</sub>地区Ⅲ面の調査において、下層溝を発見した。溝底に杯蓋の完形が残されており、奈良時代の鵜荘の中心、馬場・阿曾・斑鳩への幹線用水と考えている遺構であった。溝の周辺に少なくとも平安時代後期に経営される水田を覆う洪水砂の中にも古墳時代の須恵器と混じって奈良時代の須恵器が発見される。また、下層溝が洪水のため埋没していく過程において、揖保川・林田川による段丘崖の形成による水筋の変化と対応する下層溝の付け替えによる荒河井堰溝、少なくとも12世紀代に機能しており、その溝の埋土にも奈良時代の須恵器が散見される。

#### 須恵器

S<sub>1</sub>・S<sub>3</sub>・N<sub>1</sub>の各地区から僅かであるが須恵器片が出土しており、杯A・杯B蓋と杯Bと壺の高台がある。

杯A（10・12・11）は口径から見ると11.2～12～14cmを計る。8世紀初頭から後半代の須恵器である。

杯Bの蓋はS<sub>3</sub>Ⅲ面下層溝の溝底に流れ込んだ砂とともに、蓋（13）完形が出土した。

一方、杯Bは高台部分のみで杯部良く残っていない。高台部径は10.4～11.2～12.0～12.4cmを計る（14～17）。

24は鉢高台部であり、高台径は12.4cmを計るが高さは約1cmと低い。

### 第4節 平安時代の遺物

南地区S<sub>1</sub>・S<sub>3</sub>・S<sub>4</sub>地区、中央地区C<sub>4</sub>地区において、水田遺構を調査して水田面を覆う洪水砂中に須恵器が含まれていた。また、現在の荒河井堰の下部に重なる溝の覆土に須恵器・土師器・備前焼Ⅰ期の椀・鉢が発見されている。また、水田面で調査した人及び偶蹄類の足跡を石膏で固めて取り上げており、これも今回遺物の項目で扱う。

#### 1. 須恵器

この時期の遺物は細片が多いが、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・S<sub>1</sub>・S<sub>3</sub>・N<sub>3</sub>の各地区の下層溝遺構や水田遺構の精査時に出土している。須恵器の種類は杯B 3点と高台付き椀 3点がある。

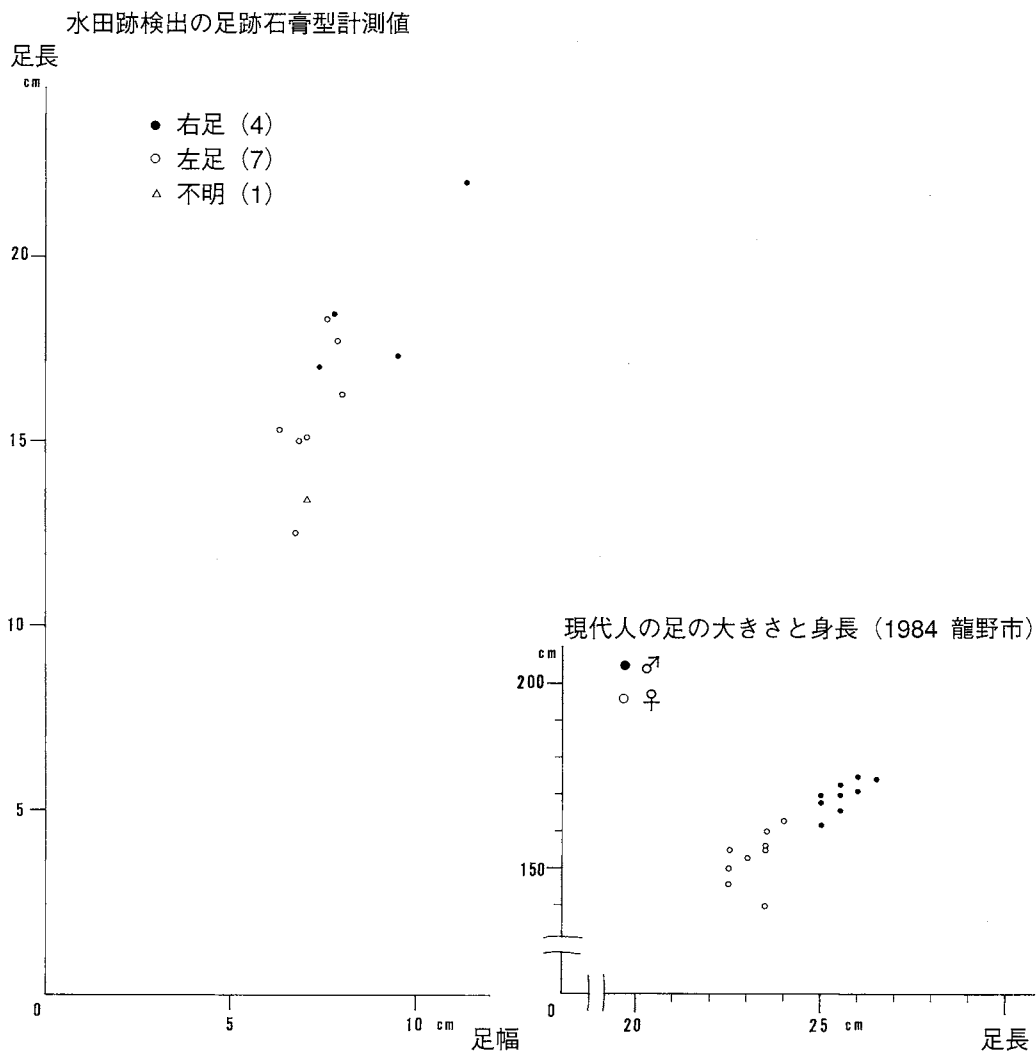
杯B（18～20）は、高台径も9.2～10cmと小さく、高さも低い。9世紀から10世紀初頭に属する。

高台付椀（21～23）は、高台径が杯Bよりさらに小さく、高台の高さも高低差があり時期が下るに従い器形が矮小化する（21～22～23）。10世紀代から11世紀代へと変化する。

## 2. 足 跡

南地区S<sub>1</sub>地区・S<sub>4</sub>地区・S<sub>3</sub>地区の下層で水田遺構を調査しているが、特にS<sub>1</sub>地区・S<sub>4</sub>地区で水田経営状況を観察したが（挿図64）、耕作時の犁痕跡とともに偶蹄類・牛の足跡ともに人の足跡が調査できた。サンプルとするために足跡を石膏で固めて採取していた（図版280）。

水田は洪水砂で覆われており、平安時代から鎌倉時代にかけての土器の他、平安時代前半期の遺物も含まれていた。調査現場事務所の人々に協力的に、足の大きさと身長の間関係を求めている。水田跡での足跡石膏型は長さ22cmが最長で、現代人にみると150cm前後の身長となる。



挿図174 足跡の計測

## 第5節 中世（鎌倉時代～室町時代）の遺物

中世の遺物は出土遺物の90%を超えており、コンテナ1,100箱を超える土器、金属製品（5箱約500点）・鉄滓・古銭（95枚）、木製品（90箱200点）、石製品（5箱105点）、瓦、ガラス玉、土製品、骨と種子の自然遺物の豊富な資料がある。

中世土器には土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶器がある。土師器は在地・西播磨、東播磨系、京都系の土器があり、器種は皿・鉢・甕・鍋・羽釜等がある。須恵器はいわゆる在地・西播磨系もしくは備前系、亀山系、東播系の須恵器があり、器種は皿・椀・鉢・甕がある。瓦器は大阪南部・和泉系、大和系の瓦器があり、器種は皿・椀・鉢・羽釜・鍋・香炉・火鉢・風炉がある。輸入陶磁器は中国産、朝鮮半島産の白磁・青磁・青白磁・青花・施釉陶器があり、器種は碗・皿・小碗・盤・壺・四耳壺・梅瓶・小壺・合子・注口・香炉・天目がある。国産陶器は備前焼、常滑焼、丹波焼、瀬戸・美濃焼があり、器種は壺・甕・鉢・碗・小壺・皿がある。

金属製品は鉄器、銅製品、鉄滓、古銭があり、鉄器は武器・武具類の刀・小柄・刀子・鎌・小札、容器の小壺（蓋・身）・鍋（把手）、道具類の鎌・鋏・火打金・紡錘車、工具類の鑿・楔・鋸・釘・煽り止めなどがある。その内、釘は非常に数多く出土している。鉄製品は遺跡内で生産されているものがあり、鉄滓や鞆羽口が出土している。古銭は初鋳年から見ると古くは唐代の開元通宝から始まり、宋代の銭が最も多く、一部明代の永樂通宝が混じる。

木製品は木器と木簡がある。木器は110点以上出土しており、容器（曲物・漆器）・農具（鎌・木錘）・履物（下駄）・遊戯具（羽子板）・装身具（横櫛）・工具（篋状木器・栓状木器）・串状木器（串状・箸状）・紡織具（紡錘車）・用途不明品と井戸枿材（横木組井戸枿材・縦木組井戸枿材・井戸枿用杭）がある。木簡は付札と文書木簡の3点がある。

石製品は一石五輪塔・石臼（粉挽臼・茶臼）・砥石・硯・石鍋・磨石があり、鉄器の量とともに砥石の出土量も多い。

瓦は平安時代から鎌倉時代、室町時代の軒丸瓦・平瓦・丸瓦・雁振瓦と塼がある。

土製品は土錘・面子・鞆羽口があり、多量的面子は備前焼の甕腹の破片・輸入陶磁器碗片・土師器皿片の側縁を打ち欠いている。

自然遺物も火葬人骨を含め、墓・土壙・井戸・堀から出土しており、当時の食生活や自然環境を復元できる資料がある。



## 1. 昭和56年度（1981）調査から見た中世土器の概観

龍野市教育委員会が全面調査を実施した福田遺跡A地区は福田天神遺跡とし、出土遺構および遺物から中世前期の集落を復元されている。一方、確認調査当初には福田遺跡B地区と呼ばれ、昭和56年度から兵庫県教育委員会が部分的に発掘調査を始めた段階で、堀を廻らした中世館跡発見の可能性が強まり、小字名から福田片岡遺跡と呼ぶことにし、中世後期を中心に調査が始まった。昭和56年度は調査区の包含層掘削と遺構面の検出にとどまったが、堀などから多量の遺物が出土しており、その概観から中世後期調査への手がかりを述べる。

出土遺物は、堀内から出る多量の備前焼片と漆器椀や一石五輪塔などと包含層からの土器がある。出土土器は須恵器、土師器、瓦器、国産陶器（備前焼・瀬戸焼）などがある（挿図175～177）。古代から中世前期にかけての土器と中世後期の土器があり、中世の少なくとも二時期の遺構の調査が必要となった。

中世の土器の概観を述べておく。

中世前期を中心とした土器は、須恵器、土師器、瓦器、国産陶器（備前焼）がある。

須恵は小皿と椀がある。小皿（1）は口径7.0cm、器高1.9cm、底径4.0cmを計り、糸切り底で12世紀代に遡る。椀（15）は口縁部片で復元口径17.4cmを計り、13世紀代の椀である。

土師器は小皿、皿、羽釜がある。小皿（2～7）は口径が7.8～9.1cm、器高1.4～1.7cmを計り、非轆轤系である。皿（8～11）は口径が10.6～11.5cm、器高2.3～3.4cmを計り、非轆轤系である。羽釜（16・17）は口径21.0～22.4cm、器高21.8cm（16）を計り、タタキ整形後にハケメおよびナデ消し調整を行う鋳釜であり、外面に指痕が残り、内面にハケメが残る。13世紀から14世紀にかけての土師器である。

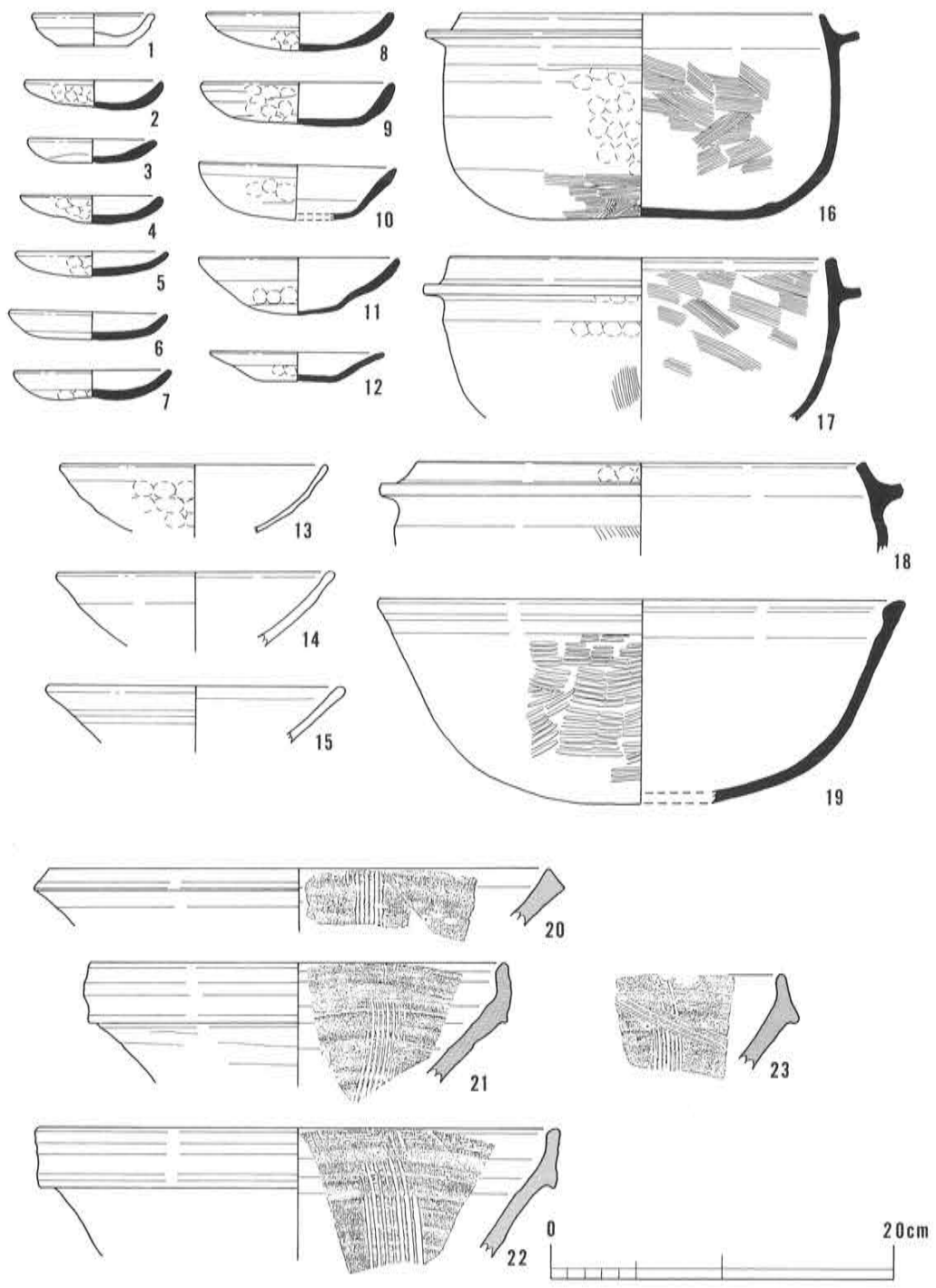
瓦器は椀がある。椀（13・14）は復元口径15.2～16.2cmを計り、大阪南部産の和泉型の瓦器椀である。

備前焼は壺・甕がある。壺（44）は復元口径27cmを計り、甕（46～49）は復元口径43.6～55.1cmを計る備前焼編年のⅡ期からⅢ期にかけてのものである。

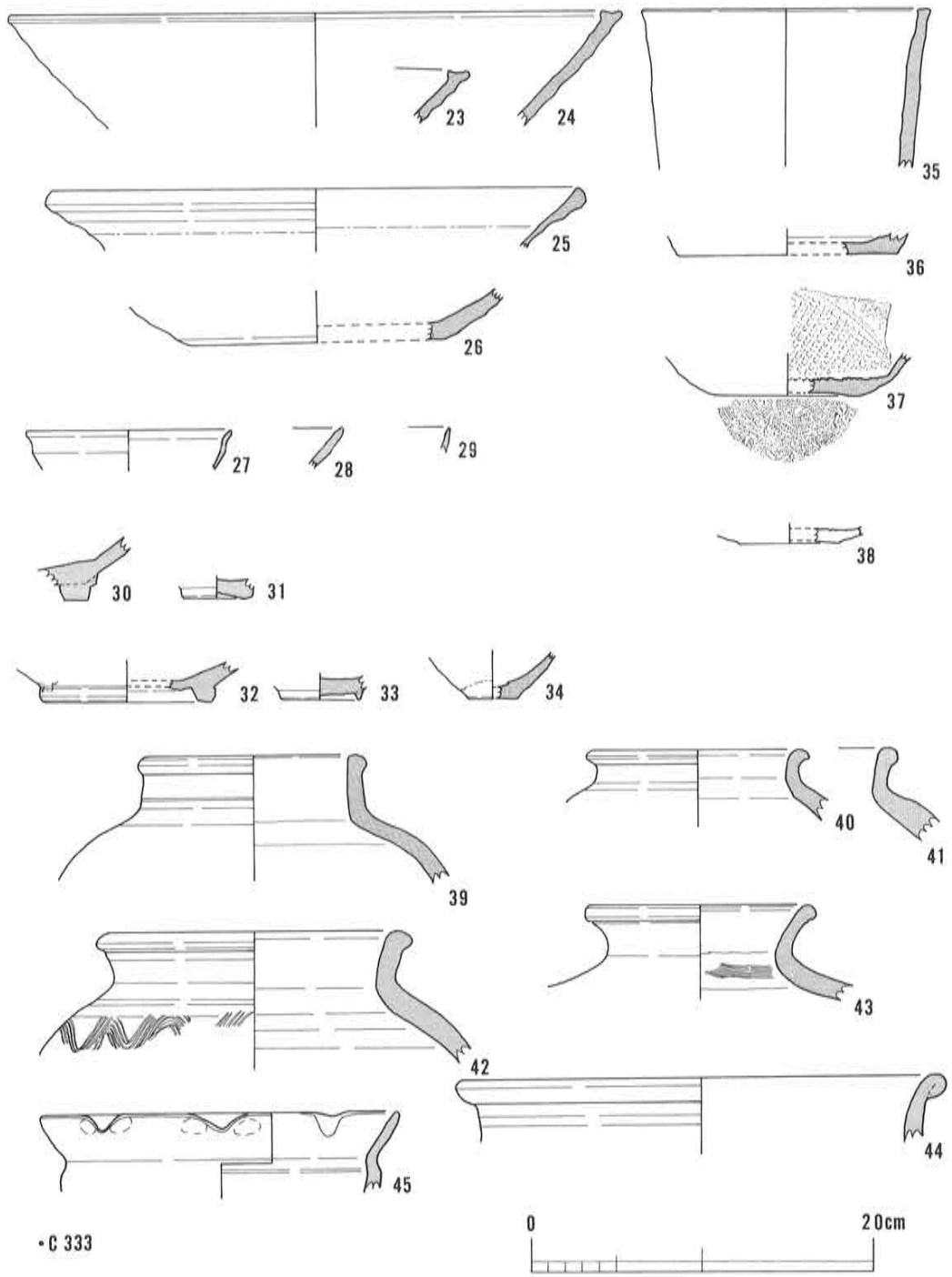
一方、中世後期を中心とした土器は、土師器、国産陶器（備前焼・瀬戸焼）がある。

土師器は皿、羽釜と鍋がある。皿（12）は口径10.0cm、器高1.7cmを計り、非轆轤系京都産の皿で山科寺内町遺跡出土土師器皿に似る。羽釜（18）は復元口径26.0cmを計り、鋳が低くなり、胴部はタタキ整形を残す。鍋（19）は復元口径30.5cmと大きく、口縁が内に一段肥厚し、胴部はタタキ整形を残す。ヘルメット型の鍋である。15世紀初頭以降の鍋である。

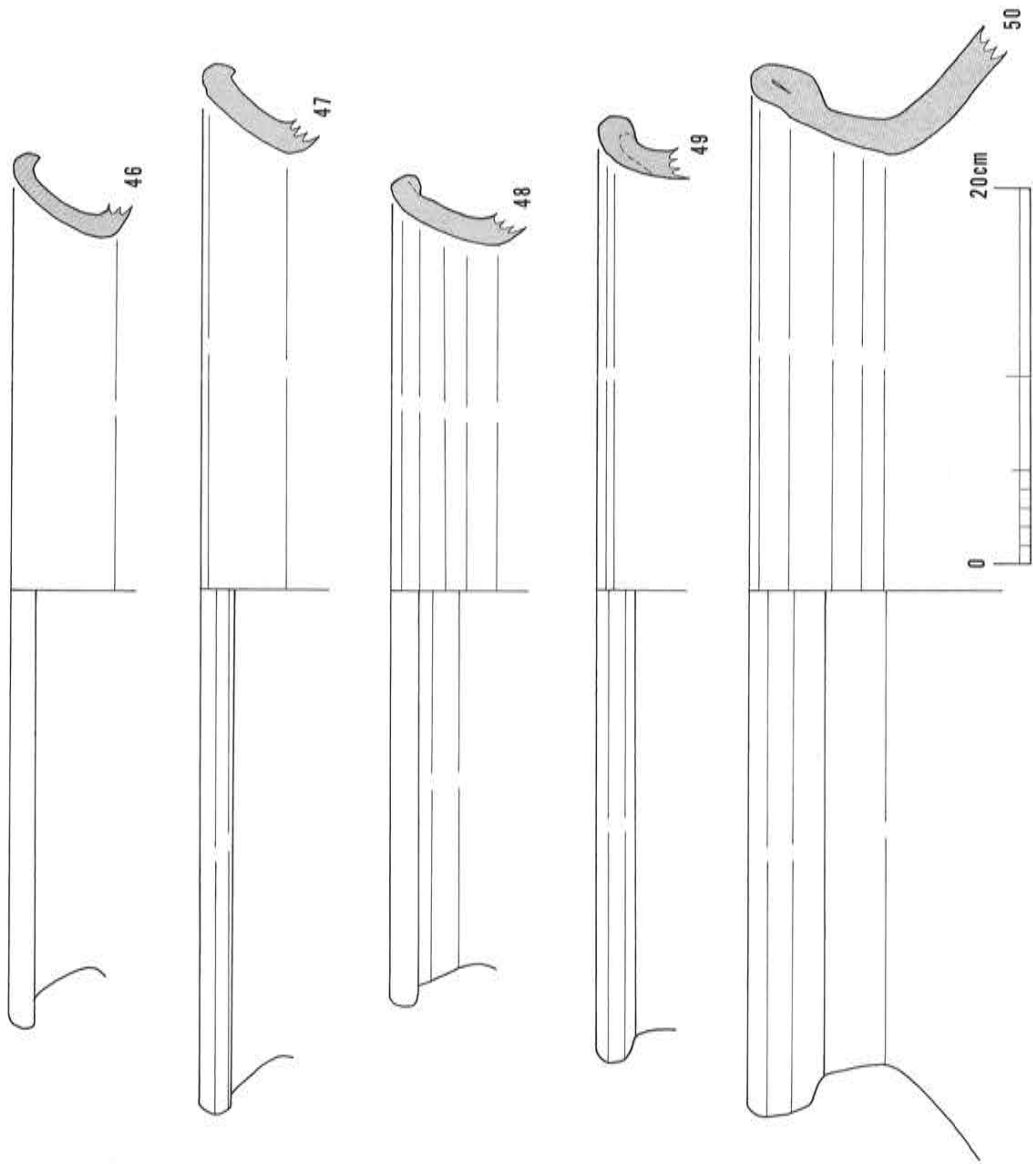
国産陶器は備前焼、瀬戸焼がある。備前焼は壺・甕がある。壺（39～43・45）には胴肩部に櫛描きの波状文が見られる壺（42）や茶巾絞りの口作りをした壺（45）もある。甕（50）もあり、Ⅳ・Ⅴ期に属する。瀬戸焼は灰釉鉢・播鉢（23～26・30）、天目碗（27・31）、灰釉碗（28・29・32～34、壺（35・36）、おろし皿（37・38）がある。大窯Ⅱ期の製品も含まれる。



挿図175 昭和56年度（1981）の中世土器（1）



挿図176 昭和56年度（1981）の中世土器（2）



挿図177 昭和56年度（1981）の中世土器（3）

## 2. 中世土器の組成

昭和56年度調査出土の中世土器の概観から少なくとも中世前期・後期の二時期の調査を目的に昭和57年度から59年度におよぶ3箇年間の成果を中世土器について、一括製の高い遺構出土の土器を中心に、完形品で補い、それぞれの組成について詳述する。ち

### (1) 須恵器

須恵器の器種としては、椀・小皿・鉢（捏ね鉢）・甕がある。

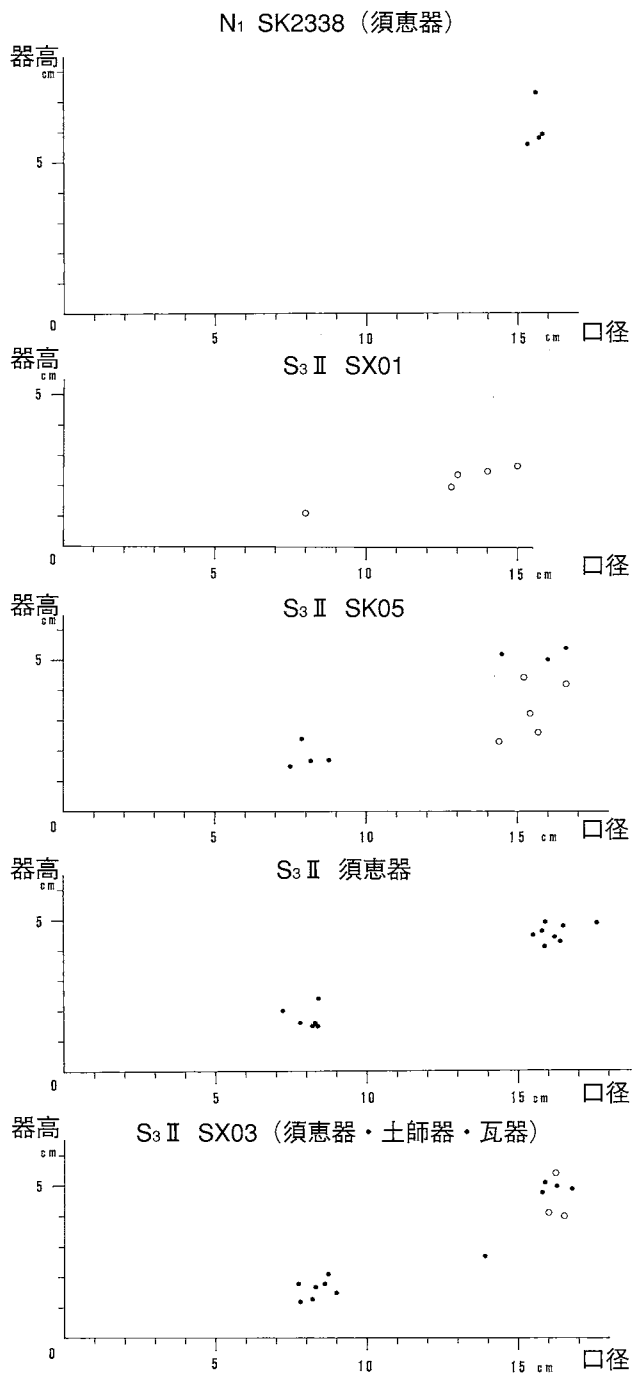
はじめに12世紀から13世紀にかけての供膳具の椀・小皿の法量を見る。

N<sub>1</sub>SK2338、S<sub>3</sub> II SK05、S<sub>3</sub> I 面一括、S<sub>3</sub> II SK03の須恵器法量をち178)。

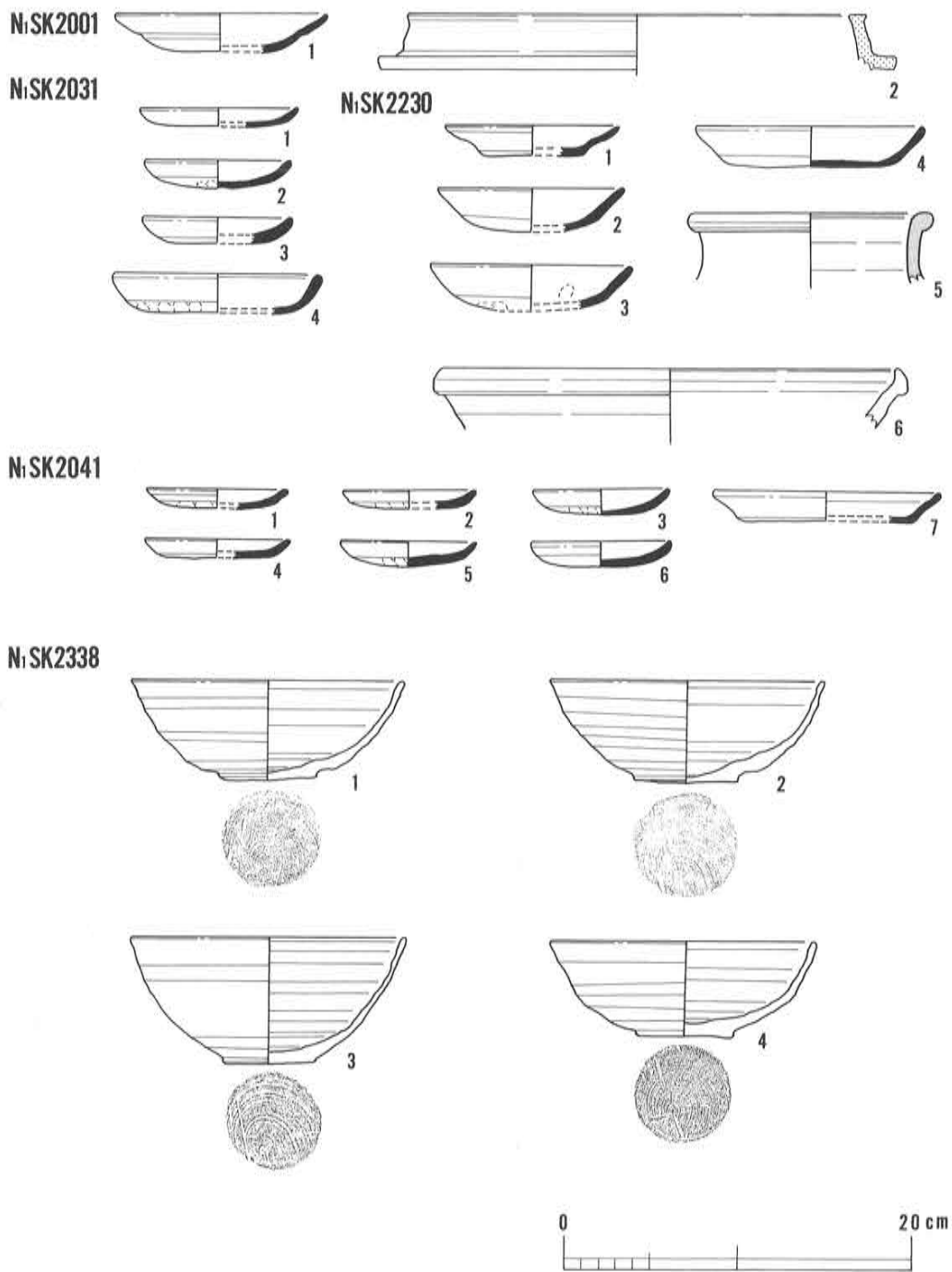
N<sub>1</sub>SK2338の椀は口径15.3～15.8cm、器高5.6～7.3cm、底径5.3～6.0cmを計り、底見込みは一段窪み、糸切り底である。器高/口径指数は36～47である。

S<sub>3</sub> II SK05の椀は口径14.5～16.6cm、器高4.2～5.2cm、底径5.1・5.2cmを計り、糸切り底である。器高/口径指数は31～36である。小皿は口径7.4～8.2cm、器高1.5～1.8、底径4.1～5.5cmを計る。糸切り底である。器高/口径指数は21～24である。

なおS<sub>3</sub> II SK01の椀は口径16.6cm、器高5.4cm、底径5.8cmを計り、

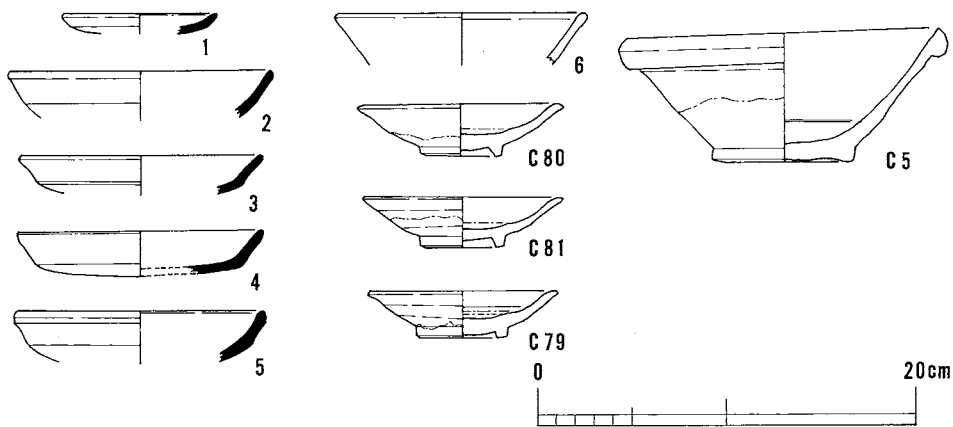


挿図178 須恵器（椀・小皿）と土師器（皿）の法量（1）



挿図179 Ni SK2031・SK2001・SK2031・SK2041・SK2338土器

S<sub>3</sub> II SX01



S<sub>3</sub> II SK03

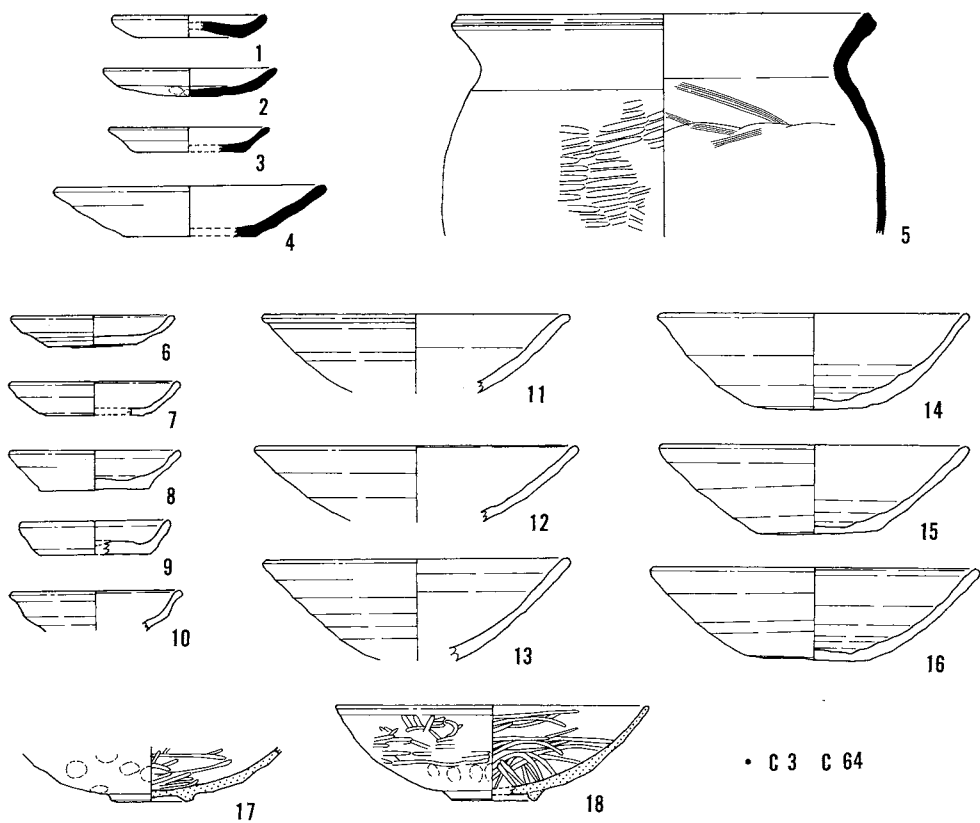


插图180 S<sub>3</sub> II SX01 · SK03土器

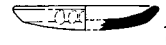
S<sub>3</sub>II SK01



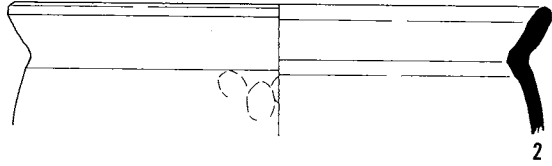
S<sub>3</sub>II SK02



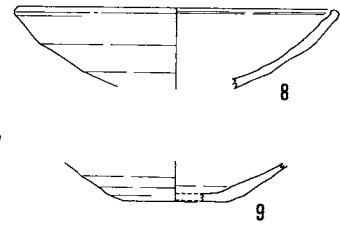
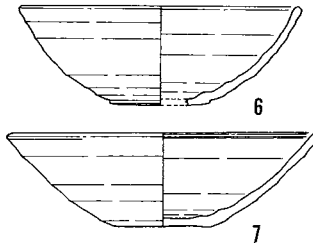
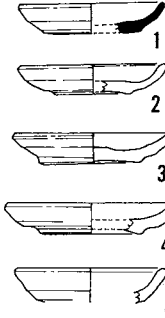
S<sub>3</sub>II SK03



S<sub>3</sub>II SK04



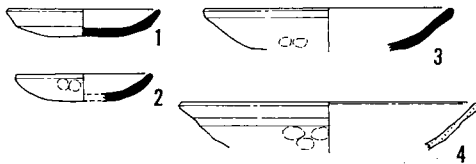
S<sub>3</sub>II SK05



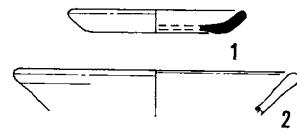
S<sub>3</sub>II SK07



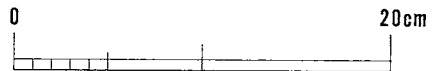
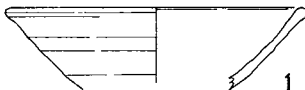
S<sub>3</sub>II SK08



S<sub>3</sub>II SK09



S<sub>3</sub>II SK10

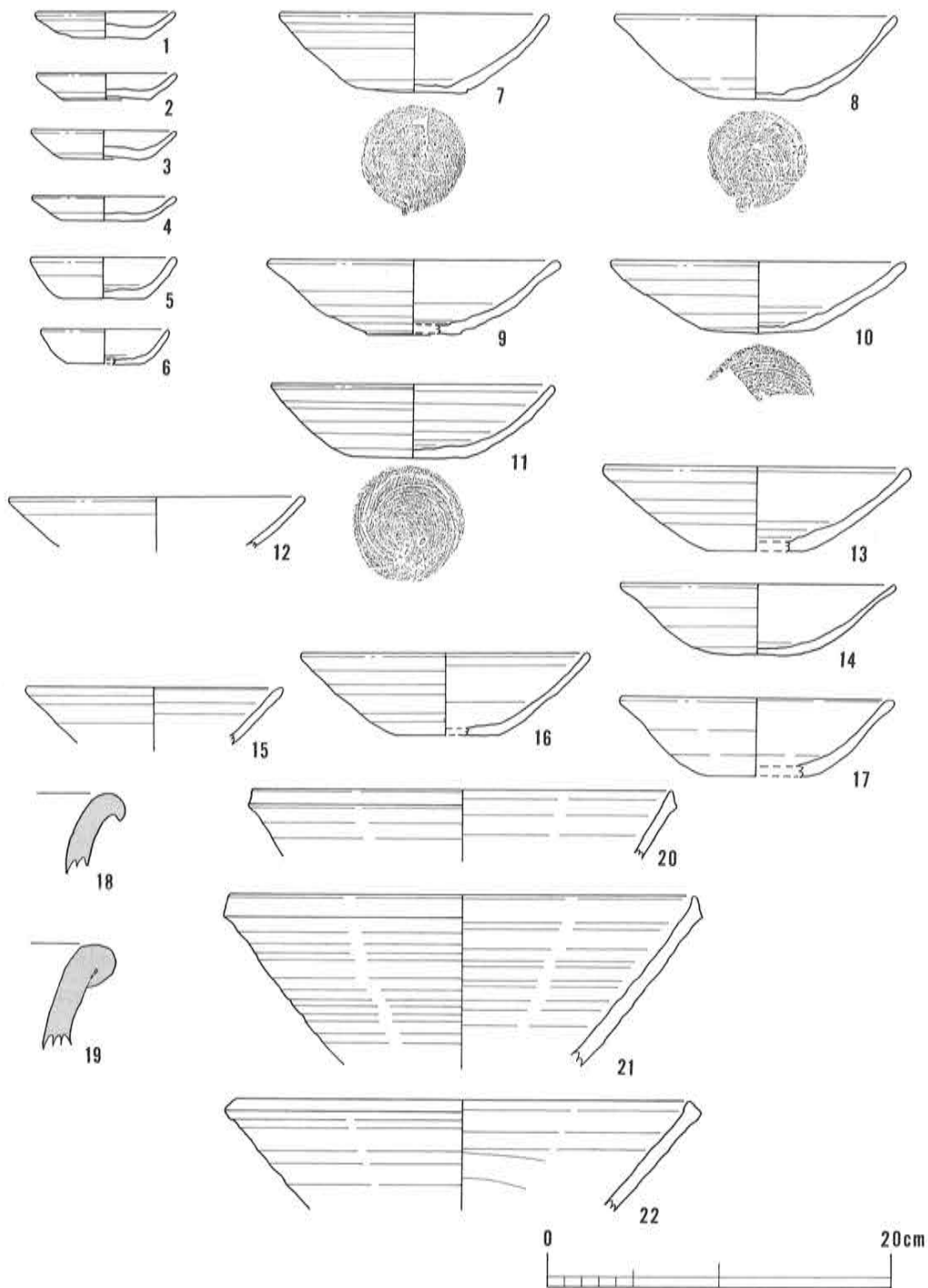


挿図181 S<sub>3</sub>II SK01~SK05、S<sub>3</sub>II SK07~SK10土器

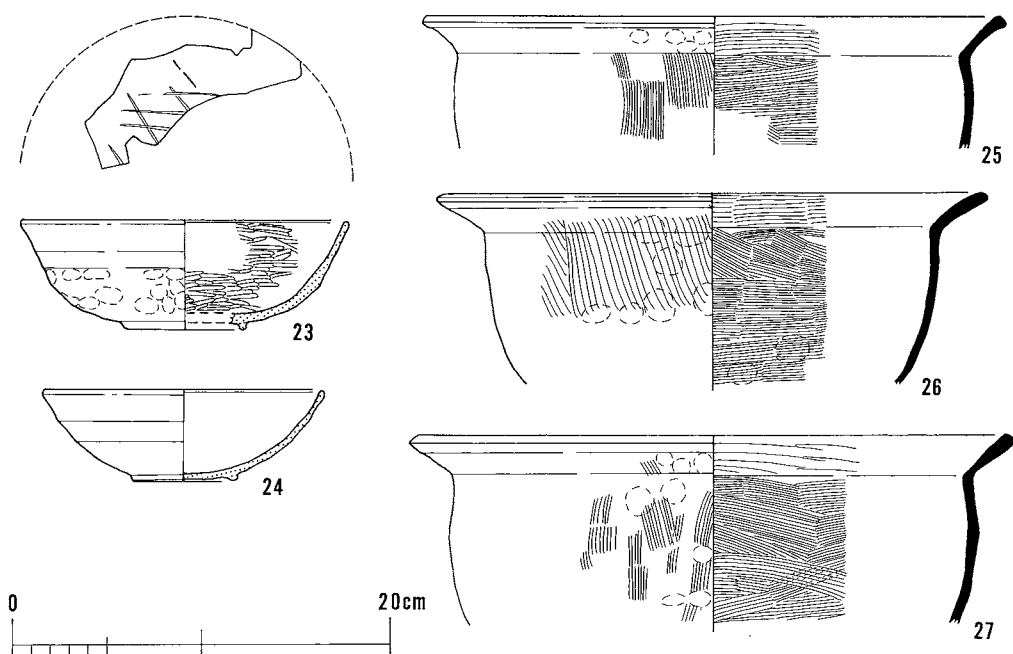


産地	分類	性質	器種	供膳具	調理具	煮炊具	貯蔵具	暖房具	照明具	茶花具	化粧具
播磨産	土師器	土器	皿・小皿 鉢・火鉢 甕 鍋・羽釜	◎	○	◎	○	○	◎		
	須恵器 魚住焼	土器	小皿・椀 捏ね鉢 甕	◎	◎		◎				
国内産	瓦器	土器	皿・椀 鉢 鍋・羽釜 香炉・風炉 火鉢	○	○	○		○		○	
	備前焼	焼締陶器	碗・德利 小壺・壺 播鉢 甕	○	◎		◎				○
	常滑焼	焼締陶器	壺 甕				○ ○				
	丹波焼	焼締陶器	播鉢		○						
	瀬戸焼、 瀬戸・美濃焼	施釉陶器	皿・天目碗 瓶・花瓶 鉢・盤	◎ ○	○ ○		○			○ ○	
中国産	白磁	磁器	皿・碗・杯・四耳壺	◎			○			○	
	青磁	磁器	皿・碗・盤・鉢・香炉	◎	○					○	
	青白磁	磁器	皿・注口・小壺・合子	○			○				○
	青花	磁器	皿・碗	○							
	黒・褐釉陶器	施釉陶器	碗・壺	○			○			○	
朝鮮産	褐釉陶器	施釉陶器	瓶				○				
播磨産	木製品	漆器	漆碗	◎							
	鉄製品	鋳物	小壺・鍋			○	○				
国内産	石製品		石鍋			○					

表5 中世土器他の組成について



挿図182 S<sub>3</sub>I面一括土器(1)



挿図183 S<sub>3</sub>I 面一括土器 (2)

器高／口径指数は32である。また、S<sub>3</sub>II SK02の小皿は口径7.9cm、器高2.4cm、底径4.6cmを測り、器高／口径指数は30である。

S<sub>3</sub>I 面一括の椀は口径15.8～17.6cm。器高4.4～4.9cm、底径5.2～6.2cmを測り、器高／口径指数26～31である。小皿は口径7.2～8.4cm、器高1.5～2.4cm、底径4.4～5.0cmを測る。器高／口径指数は17～29である。指数17～21と28・29に分かれる。

また、瓦椀23・24があり、口径17.2・14.6cm、器高5.8・4.8cm、高台6.0・5.6cmを測る。器高／口径指数は34・33である。23は体部内面は横方向に丁寧にミガキ、底見込みは斜格子にミガキ暗文が施されている。体部外面下位に指痕が残る。24は器面があれど暗文は不明で体部が丸く仕上がる。他に魚住焼捏ね鉢、備前焼甕と土師器鍋が出土している（挿図182・183）。

S<sub>3</sub>II SK03の椀は口径15.8～16.8cm、器高4.8～5.1cm、底径6.1～6.4cmを測る。器高／口径指数は29～32である。小皿は口径7.7～8.7cm、器高1.8～2.1cm、底径4.6～5.9cmを測る。器高／口径指数は20～23である。

また、瓦器椀18は口径16.3cm、器高5.0cm、底高台径4.3cmを測る。器高／口径指数は31である。体部内面は横方向にミガキ、底見込みは螺旋気味にミガキ暗文が施されている。体部外面上位の口縁部は横方向のミガキが一部残り、下位底近くに指痕が残る。なお、他に土師器小皿・皿と鍋が出土している。

N<sub>1</sub>SD3044の椀6・7は口径13.9・15.0cm、器高5.1・4.9cm、底径8.1・8.2cmを測り、器高／口径指数は37・33である（挿図188）。

S<sub>3</sub>切り合い溝の椀10は口径16.1cm、器高4.5cm、底径5.0cmを測り、器高／口径指数は28である（挿図237）。

須恵器椀の器高／口径指数からN<sub>1</sub>SK2338>N<sub>1</sub>SD3044>S<sub>3</sub> II SK05>S<sub>3</sub> II SK03>S<sub>3</sub> I 面となり、指数が減じながら推移する。

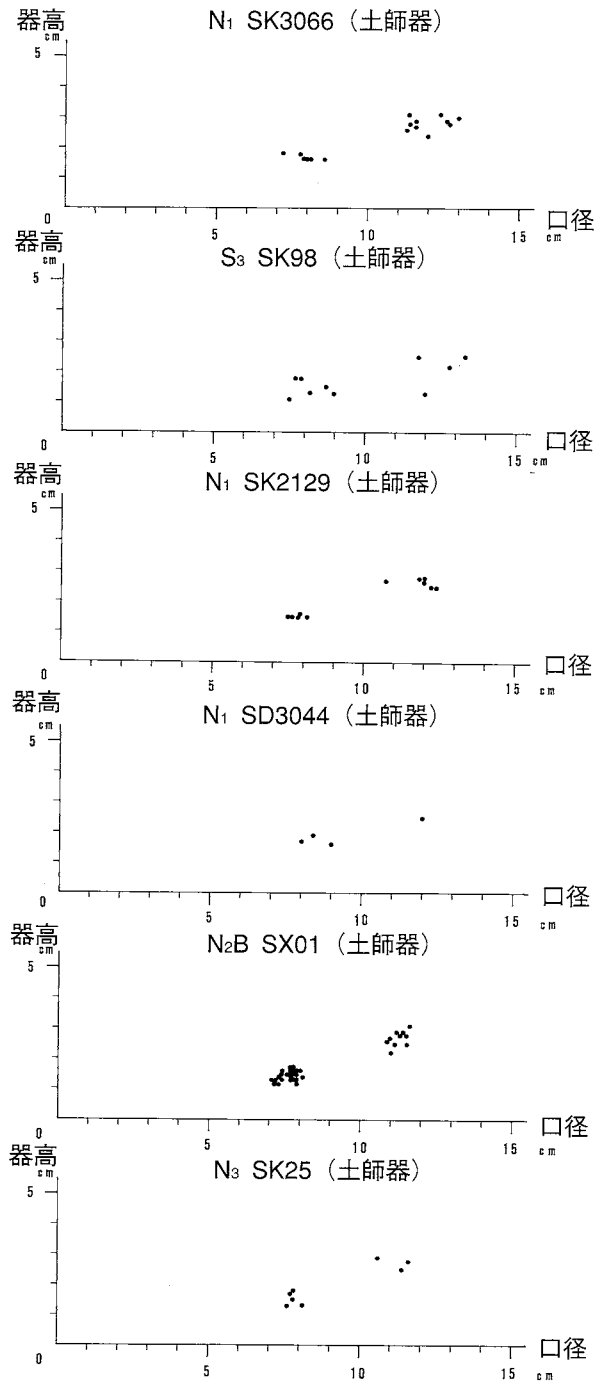
須恵器小皿も器高／口径指数がS<sub>3</sub> II SK02>S<sub>3</sub> II SK05>S<sub>3</sub> II SK03>S<sub>3</sub> I 面となり、指数が減じながら推移する。

椀・小皿は12世紀から13世紀にかけて存在するが14世紀には見あたらない。

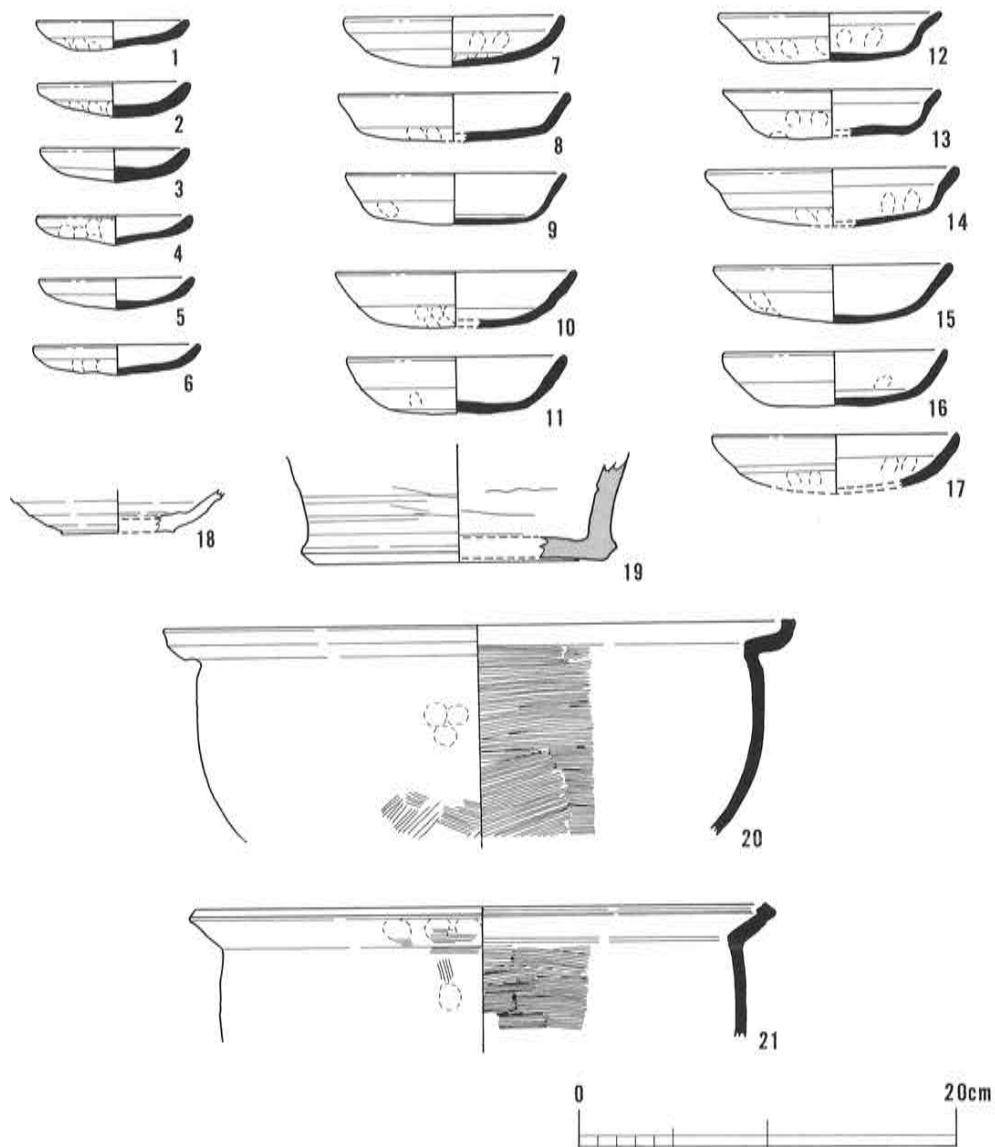
続いて調理具の鉢・捏ね鉢について述べる。12～13世紀から始まり、14世紀後半から15世紀初頭にかけて生産された魚住焼捏ね鉢がある。

N<sub>1</sub>SD3044の捏ね鉢22は、片口鉢で口縁部を斜めに切り断面三角形を呈する。口径28.9cm、器高10.8cm、底径12.3cmを測り、糸切り底で、内面は使用痕が著しい。器高／口径指数は37で、底径／口径指数は43である（挿図191）。

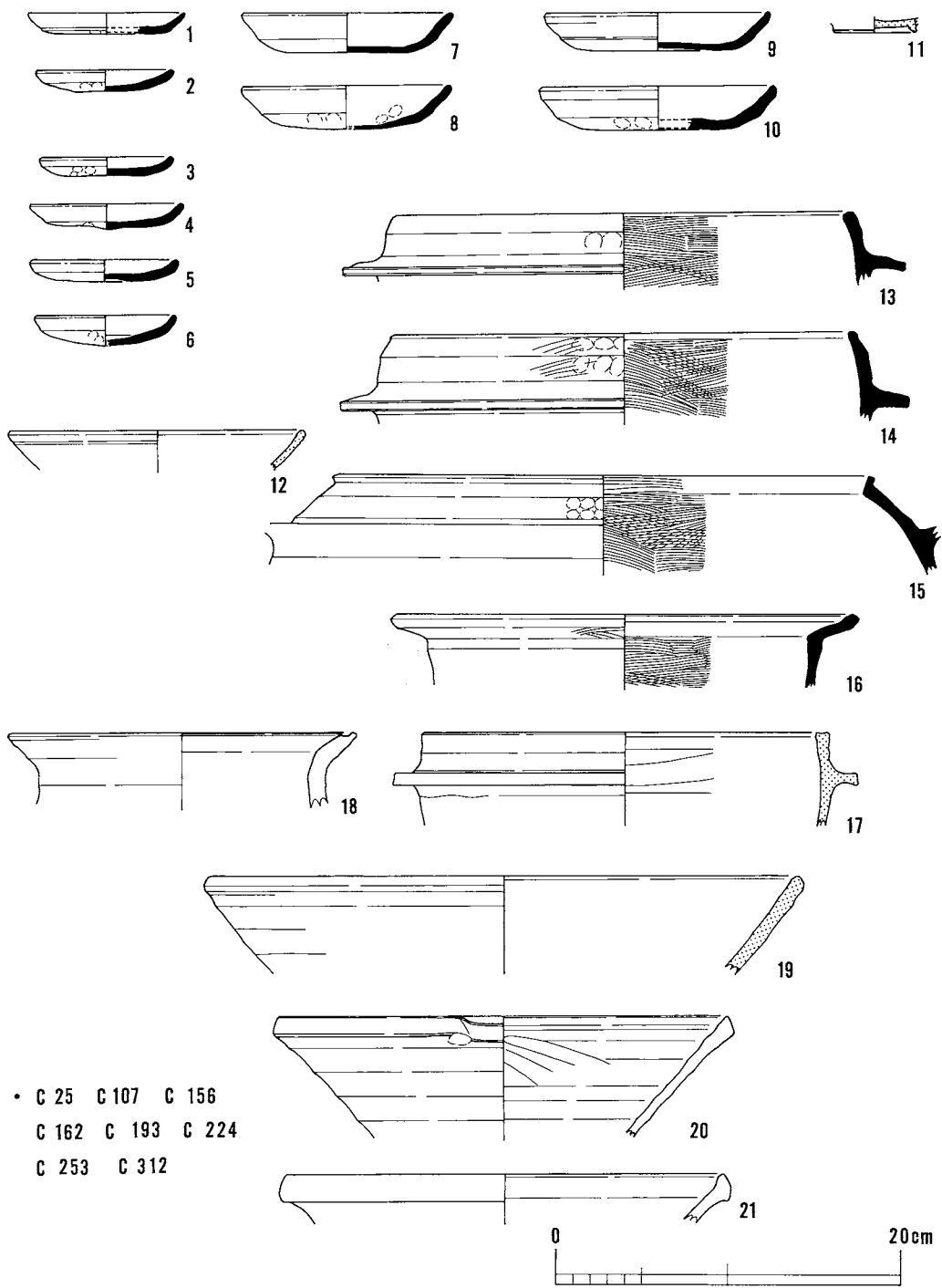
N<sub>1</sub>SK3192の捏ね鉢7は、口縁部が断面三角形を呈する。口径29.6cm、器高11.2cm、底径11.2cmを測る。器



挿図184 土師器（皿）の法量Ⅱ



挿図185 N<sub>1</sub>SK3066土器



• C 25 C 107 C 156  
 C 162 C 193 C 224  
 C 253 C 312

挿図186 S<sub>3</sub>SK98土器

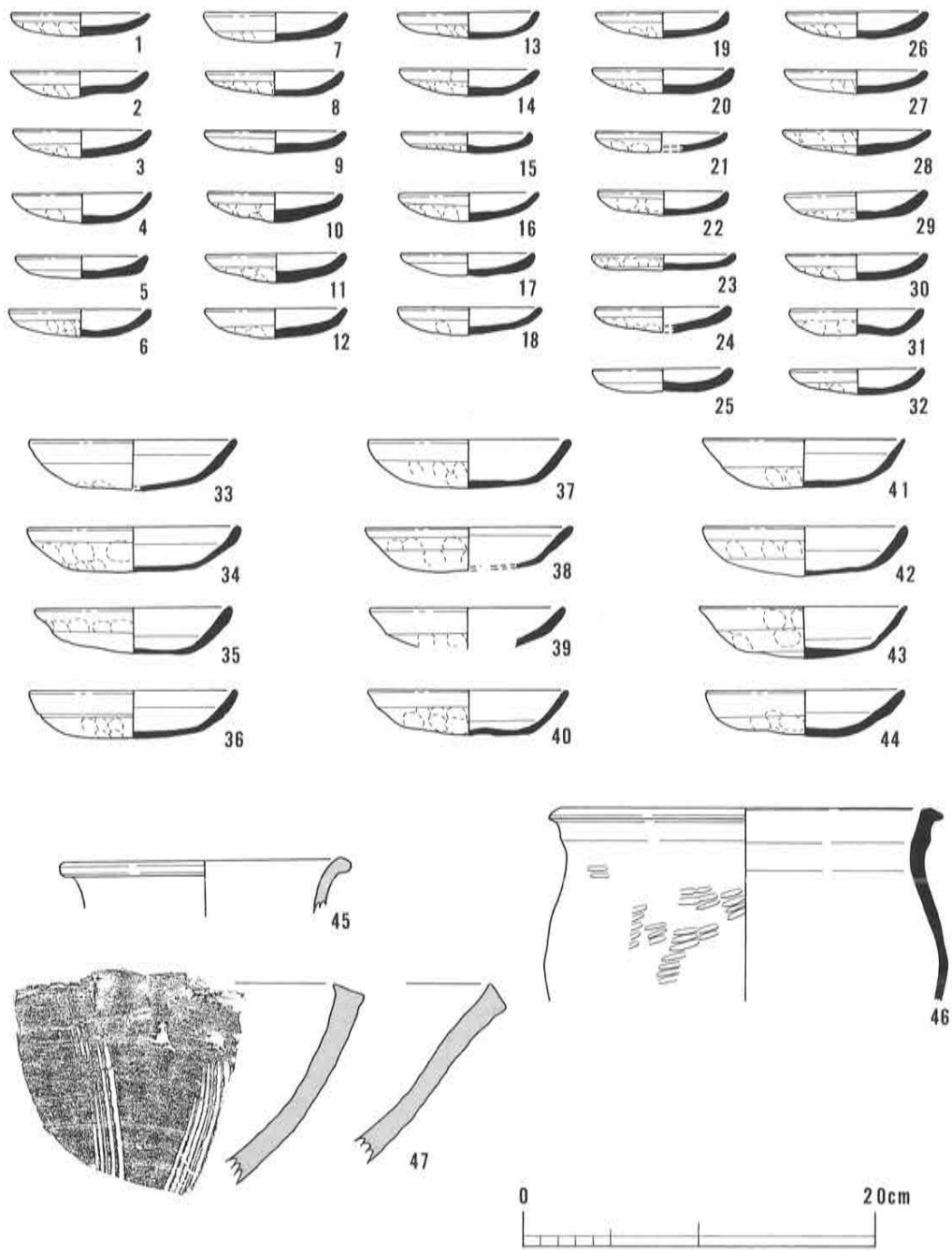


插图187 N<sub>2</sub>BSK11土器

高／口径指数は38で、底径／口径指数は38である。

N<sub>3</sub>SK25の捏ね鉢15は、片口鉢で口縁部が断面三角形へ肥厚するものから上方へ拡張している。口径は32.6cm、器高13.5cm、底径10.6cmを測り、器高／口径指数は41で、底径／口径指数は33である（挿図195）。

C<sub>1</sub>SK12・13の捏ね鉢7は、片口鉢で口縁部が断面三角形へ肥厚するものから上方へ少し丸みを帯びて拡張している。口径29.4cm、器高11.9cm、底径8.8cmを測り、器高／口径指数は40で、底径／口径指数は30である（挿図218）。

C<sub>1</sub>SK15の捏ね鉢12は、口縁部が断面三角形からやや上方へ拡張している。口径は27.8cm、器高7.9cm、底径9.6cmを測り、器高／口径指数は26で、底径／口径指数は35である（挿図219）。魚住焼捏ね鉢は口縁部の形状の変遷からN<sub>1</sub>SD3044>N<sub>1</sub>SK3192>N<sub>3</sub>SK25>C<sub>1</sub>SK12・13>C<sub>1</sub>SK15となる。以後、法量も矮小化し、口縁部も色々変化しながら矮小化する傾向でもある。また貯蔵具の甕は口縁部形状と整形時のタタキ技法痕の特徴（粗いタタキ・平行タタキ・綾杉状タタキ）がみられる。

N<sub>3</sub>SD06（溝6）の甕3は口径26cmを測り、口縁部はシャープに折れて作られ、肩部以下に平行タタキを残す甕である。また、瓦器椀1があり、口径15.5cm、器高5.0cm、底高台径5.4cmを測り、外面は指整形ナデ痕を残し、内面は螺旋状にミガキ暗文を残し、器高／口径指数は32である。

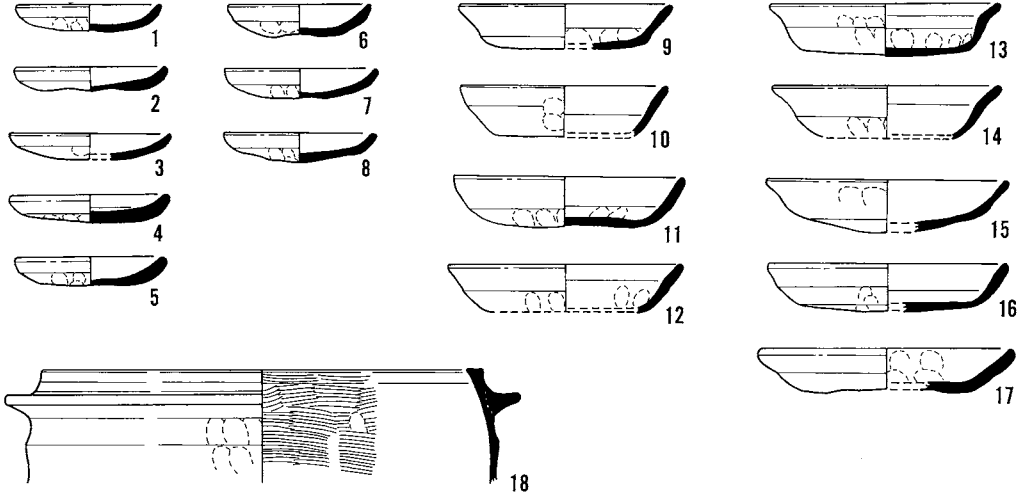
N<sub>2</sub>ASK10の甕2は瓦器羽釜と共伴するもので口縁部を欠くが、体部に細かな平行タタキ整形痕を残し、胴径41.9cm、器高40cm以上で丸く整形されたものである。

N<sub>1</sub>SK3065の甕1は口径27.6cmを測り、口縁部の作りもシャープで頸外面まで平行タタキ痕をのこす。2は口径37.8cm、器高52.6cm、胴径49.0cmを測り、口縁部はシャープさが鈍り、頸部まで平行タタキを残し、肩部以下体部に平行タタキを残し、内面には青海波タタキ当て具痕が部分的に残っている。3は焼成があまい甕で、口縁部は丸く端部を作り、頸部に平行タタキ痕が残り、肩部はタタキの重なりが認められ、口径35cmを測る。4は火を受けており、体部が部分的にはぜ飛んでいるが、形状を復元できる甕で、口縁部は外に少し丸く肥厚し、肩部以下体部の外面に横位の綾杉状タタキが見られる。また内面底近くにハケメが部分的に残る（挿図238・239）。

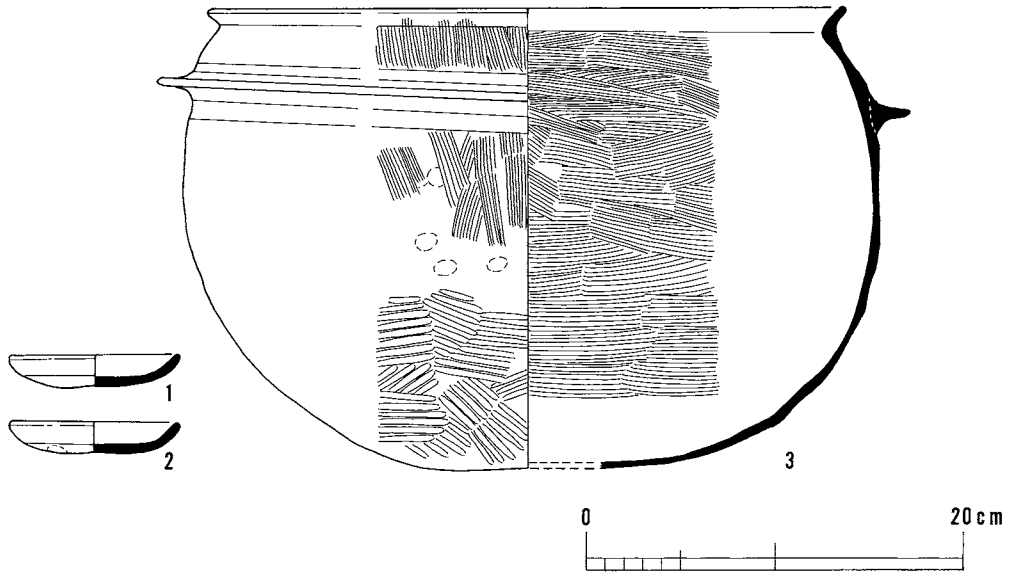
N<sub>3</sub>SK25の甕16は口縁部が突帯状に肥厚し、肩部外面に綾杉状タタキが横位に残り、口径も23cmと小さくなり、14世紀代に下る（挿図194）。



N<sub>1</sub>SK2129



N<sub>1</sub>SK3072



挿図188 N<sub>1</sub>SK2129・SK3072土器

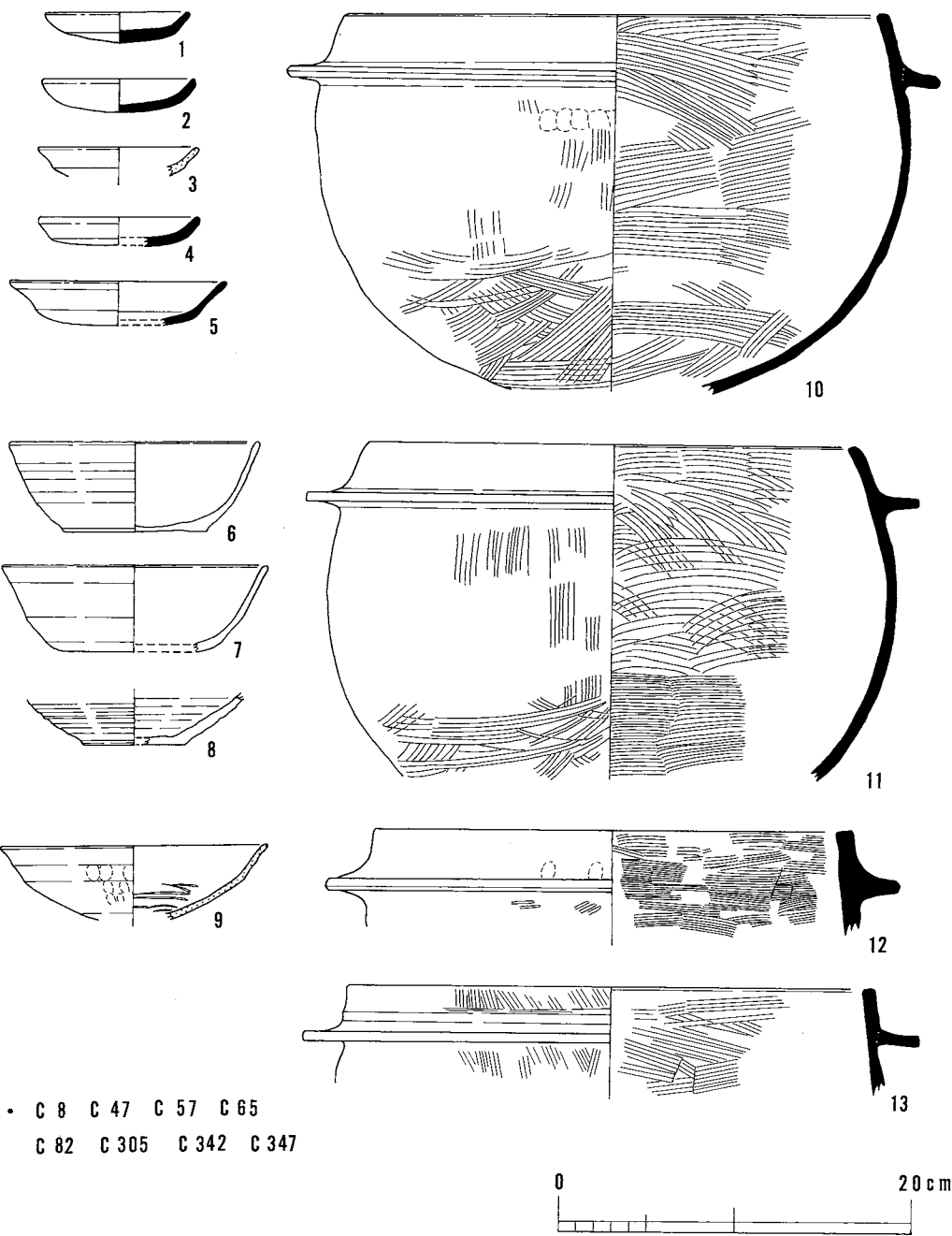
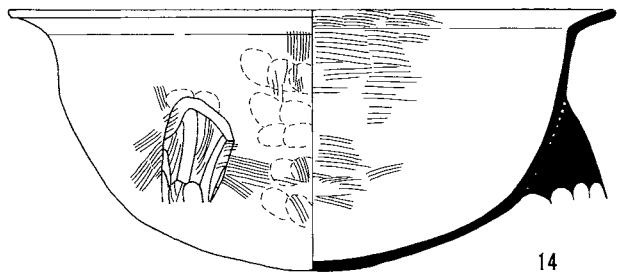
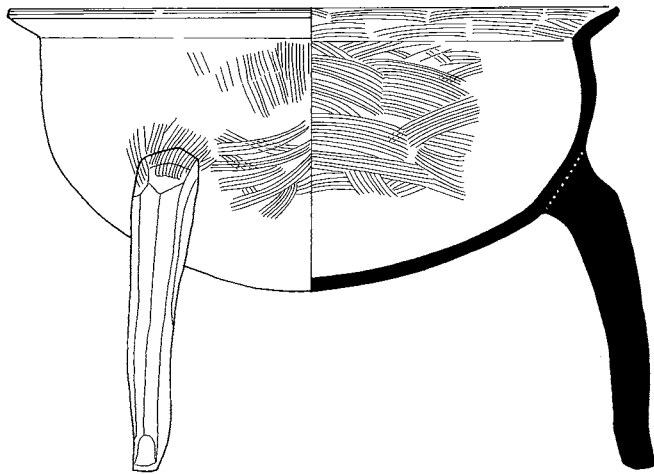


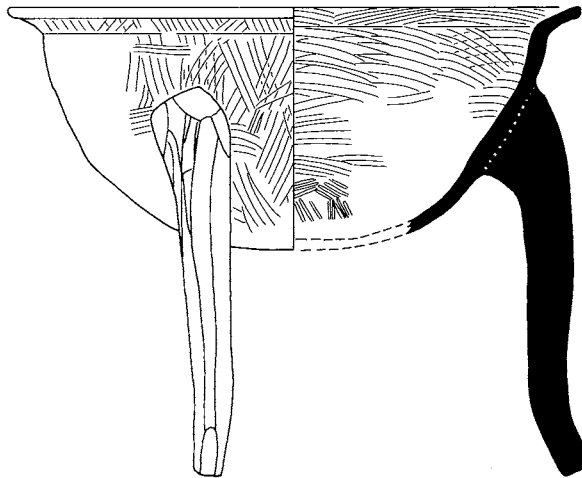
插图189 N:SD3044土器 (1)



14



15



16

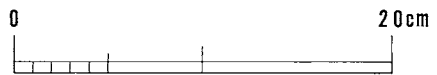
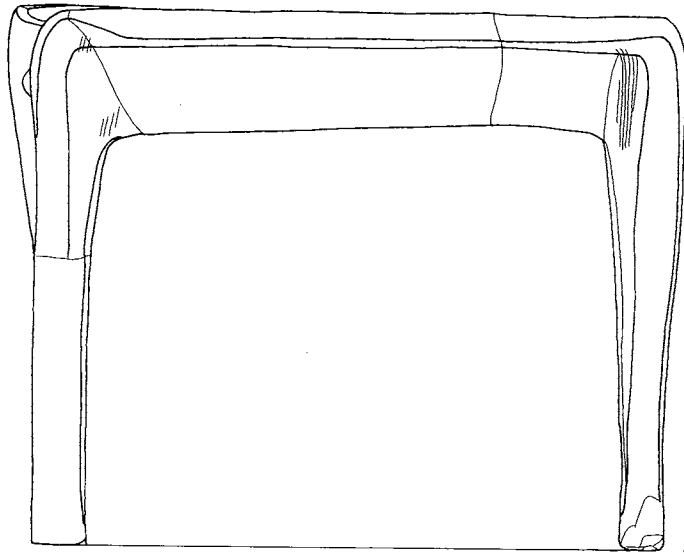
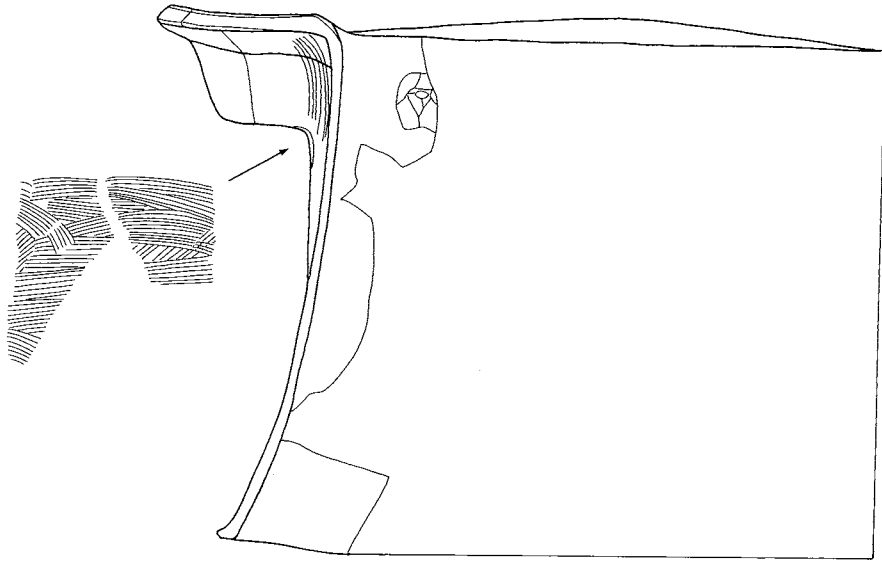


插图190 N:SD3044土器 (2)



17

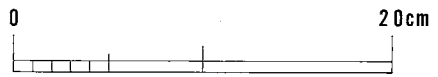


插图191 N1SD3044土器 (3)

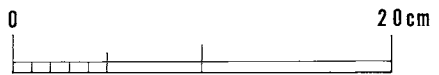
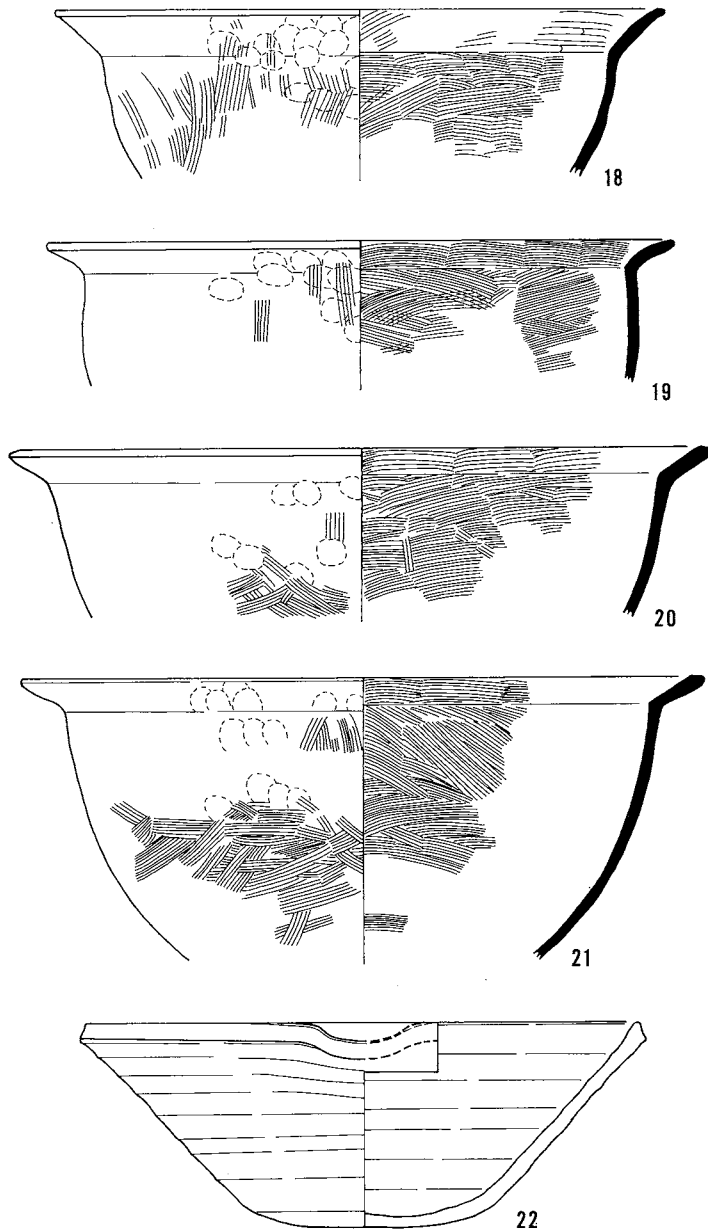


插图192 N<sub>1</sub>SD3044土器 (4)

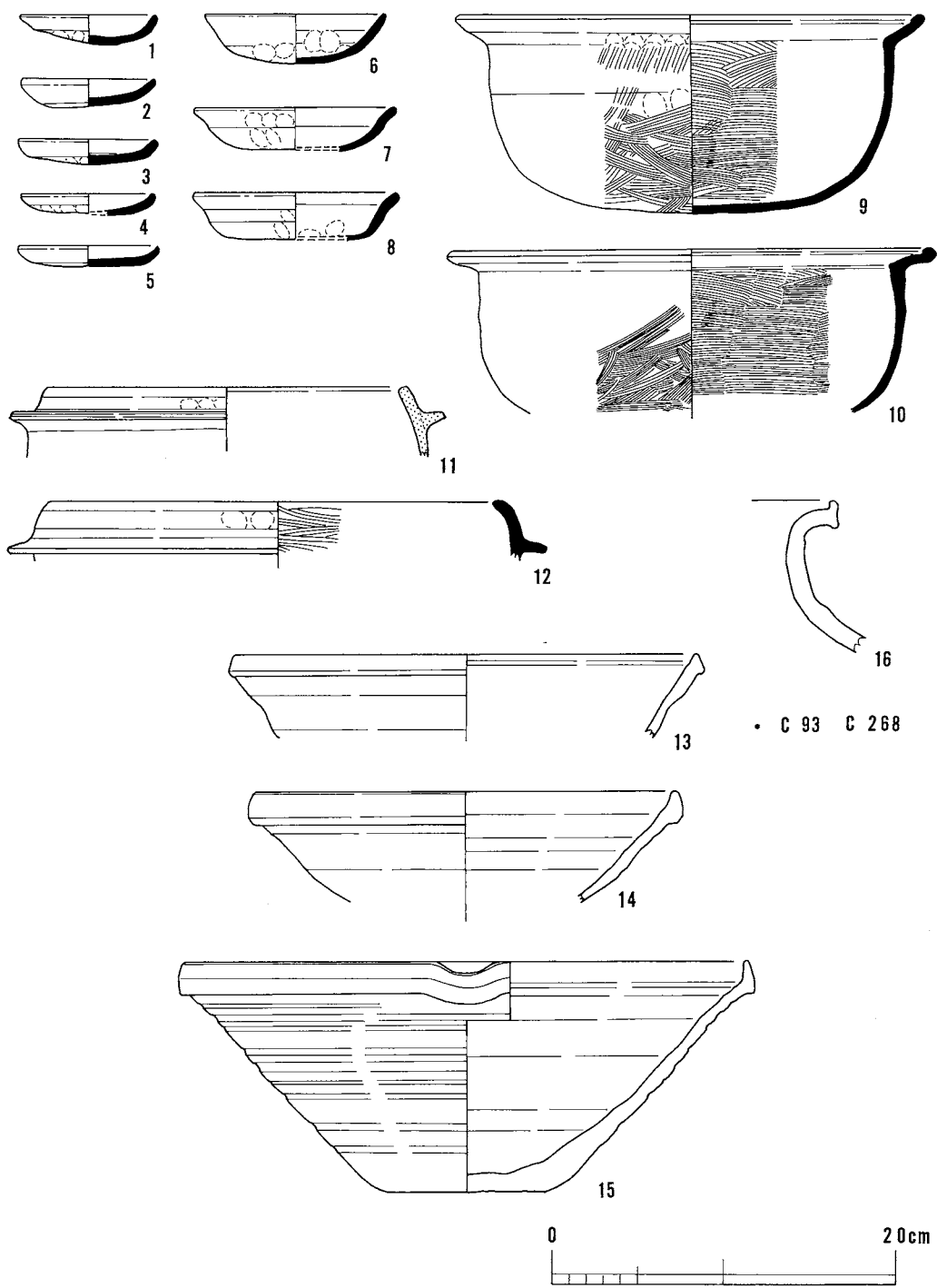
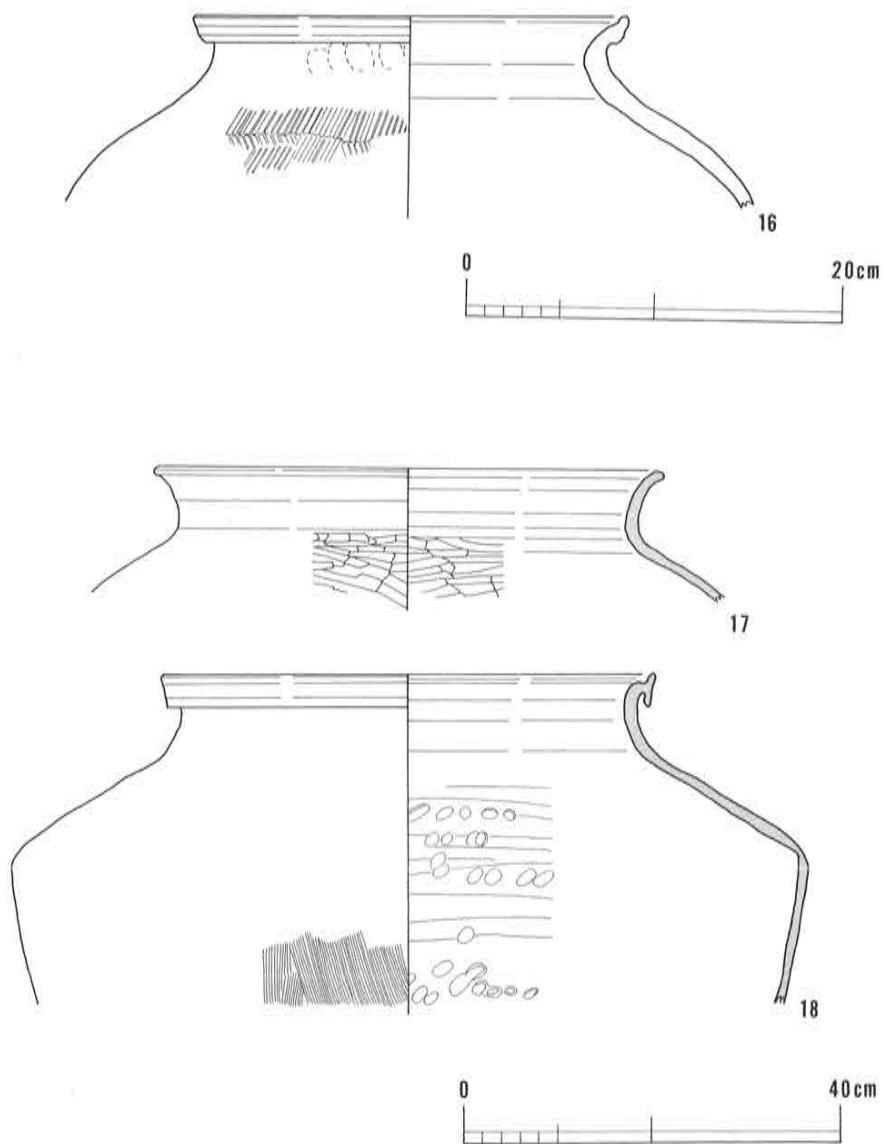


插图193 N<sub>3</sub>SK25土器 (1)



挿図194 N<sub>3</sub>SK25土器 (2)

(2) 土師器

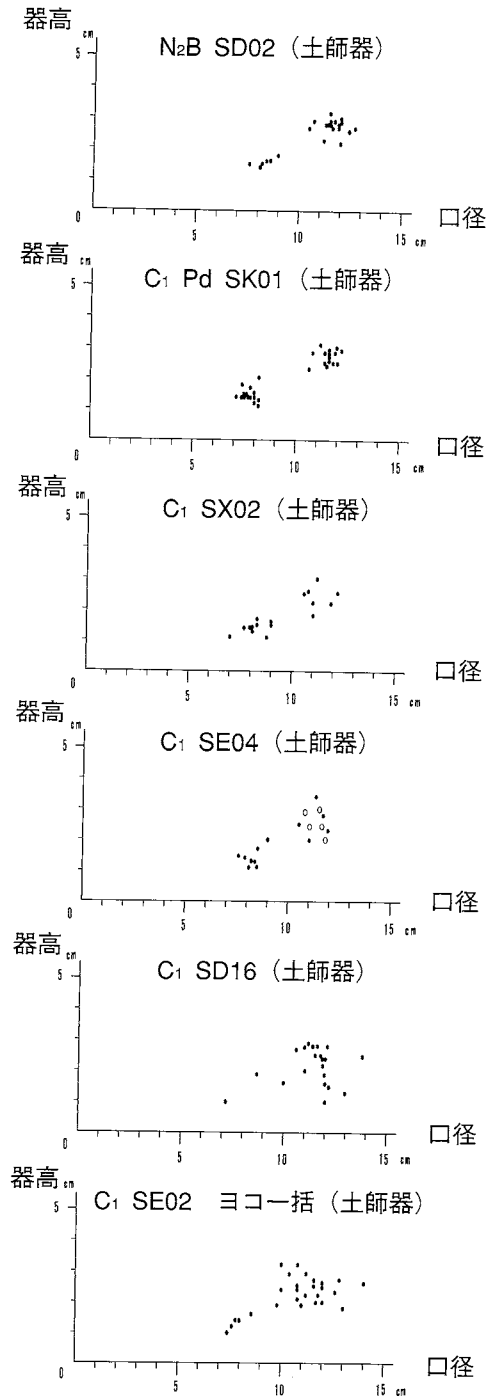
土師器の器種は小皿・皿・鉢・鍋・羽釜がある。

はじめに供膳具の小皿・皿の法量の変化を見る(挿図178・184・195)。

N<sub>1</sub>SK3066からは土師器小皿・皿・鍋、須恵器椀と備前焼壺が出土している。小皿は口径7.2~8.6cm、器高1.6~1.8cmと纏まり、皿は口径11.3~13.0cm、器高2.4~3.1cmを測る。いずれも非轆轤系で底に整形時の指痕を残し、口縁は一段のナデ調整痕が見える(挿図185)。強いナデ調整から外反気味の口縁となる12~14がある。S<sub>3</sub>SK98からは白磁などの輸入陶磁器とともに、土師器小皿・皿・羽釜・鍋、瓦器椀・羽釜・鉢、魚住焼捏ね鉢、常滑焼壺などが出土している。小皿は口径7.5~9cm、器高1.1~1.8cmを測り、皿は口径11.8~13.3、器高2.0~2.5cmを測る。いずれも非轆轤系で、皿10は体部底近くに指整形痕を少し残すが口縁部のナデ仕上げは二段になっており、口径も大きくやや古い(挿図186)。

N<sub>1</sub>SK2129からは土師器小皿・皿・羽釜等が出土している。小皿は口径7.5~8.1cm、器高1.5~1.6cmと纏まり、皿は口径10.7~12.4cm、器高2.5~2.8cmと纏まる。いずれも非轆轤系で、皿では口縁を強くナデ外反するものもある(挿図187)。

N<sub>1</sub>SD3044からは土師器小皿・皿・三足鍋・羽釜・竈、須恵器椀・捏ね鉢、瓦器小皿・椀と輸入陶磁器が出土しており、中世前期の典型的な組成を示してい



挿図195 土師器(皿)の法量Ⅲ



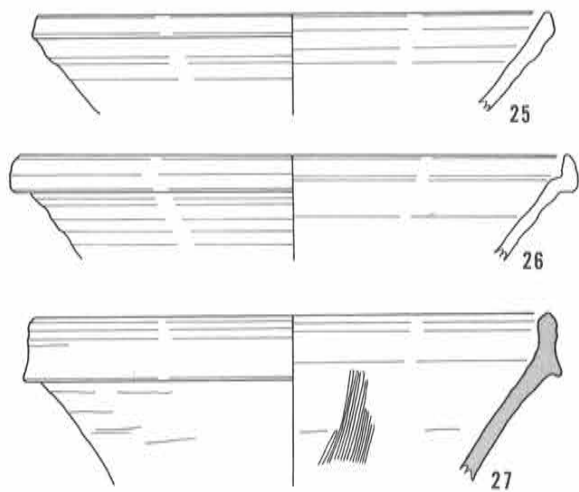
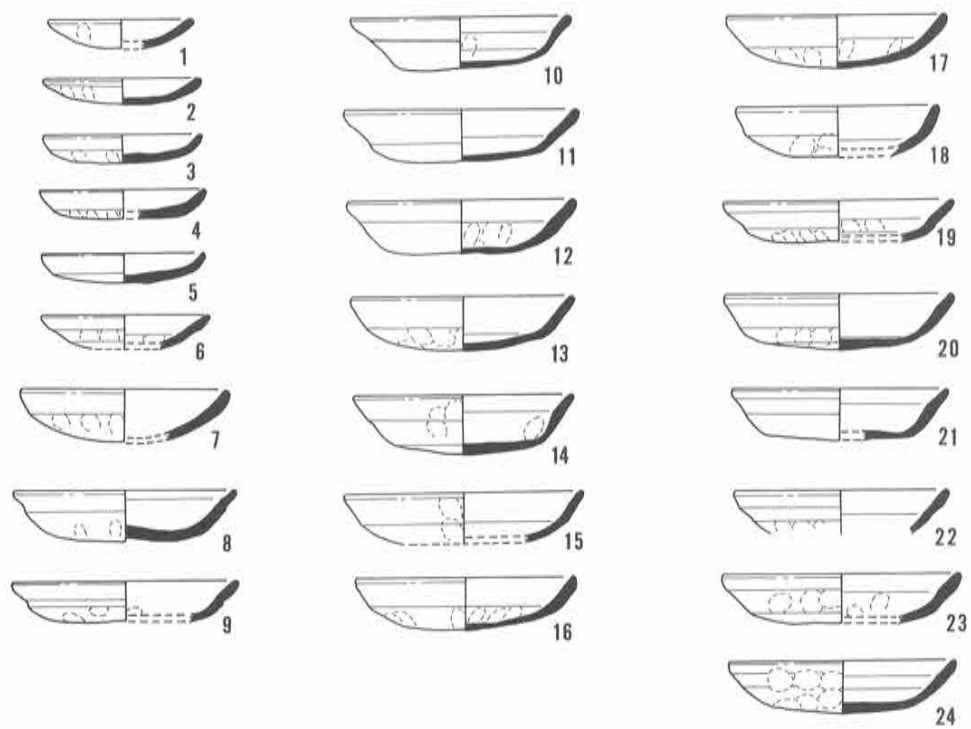


插图196 N<sub>2</sub>BSD02土器 (1)

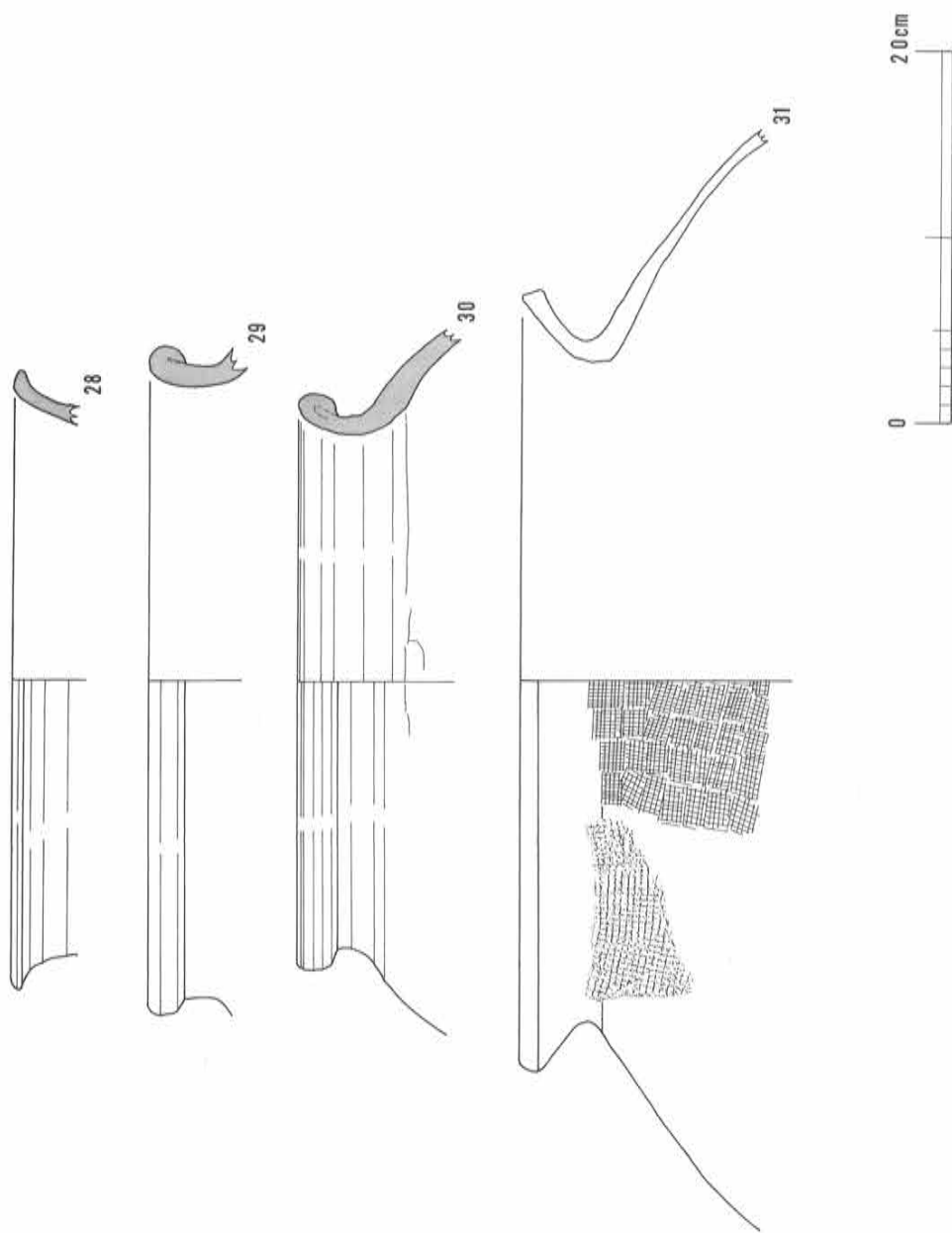


插图197 N<sub>2</sub>BSD02土器 (1)

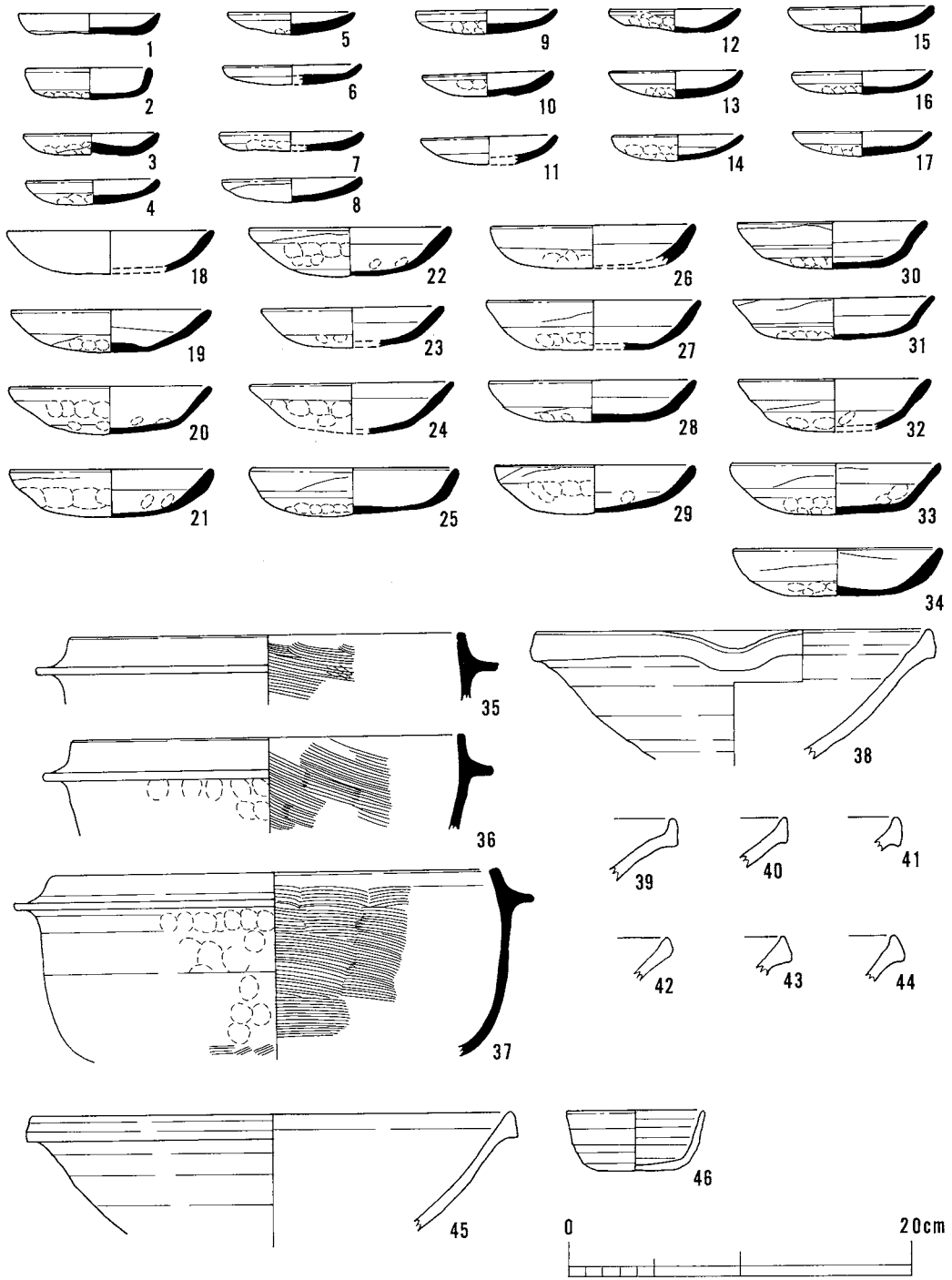


插图198 C:PbSK01土器

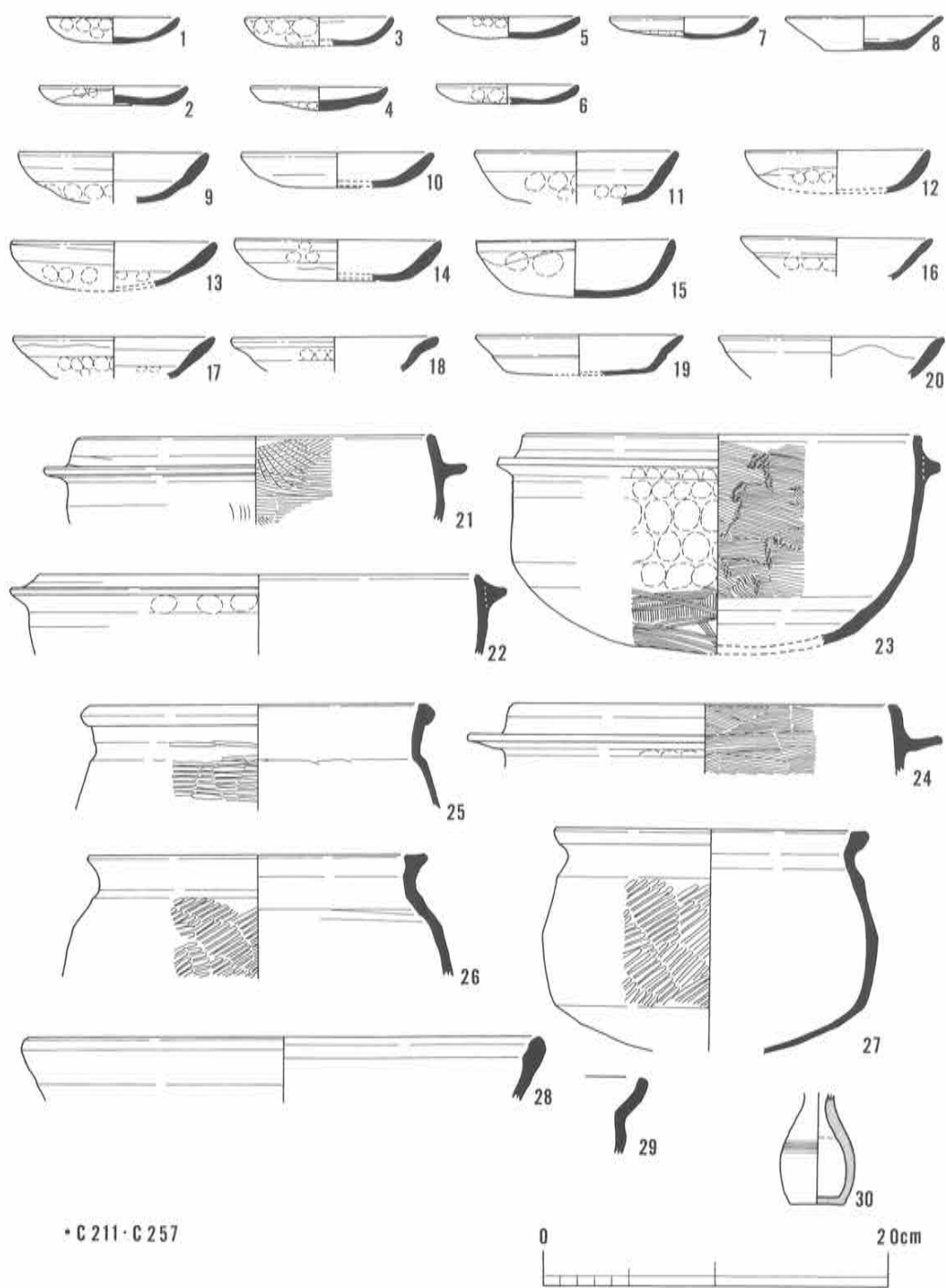


插图199 SE04土器 (1)

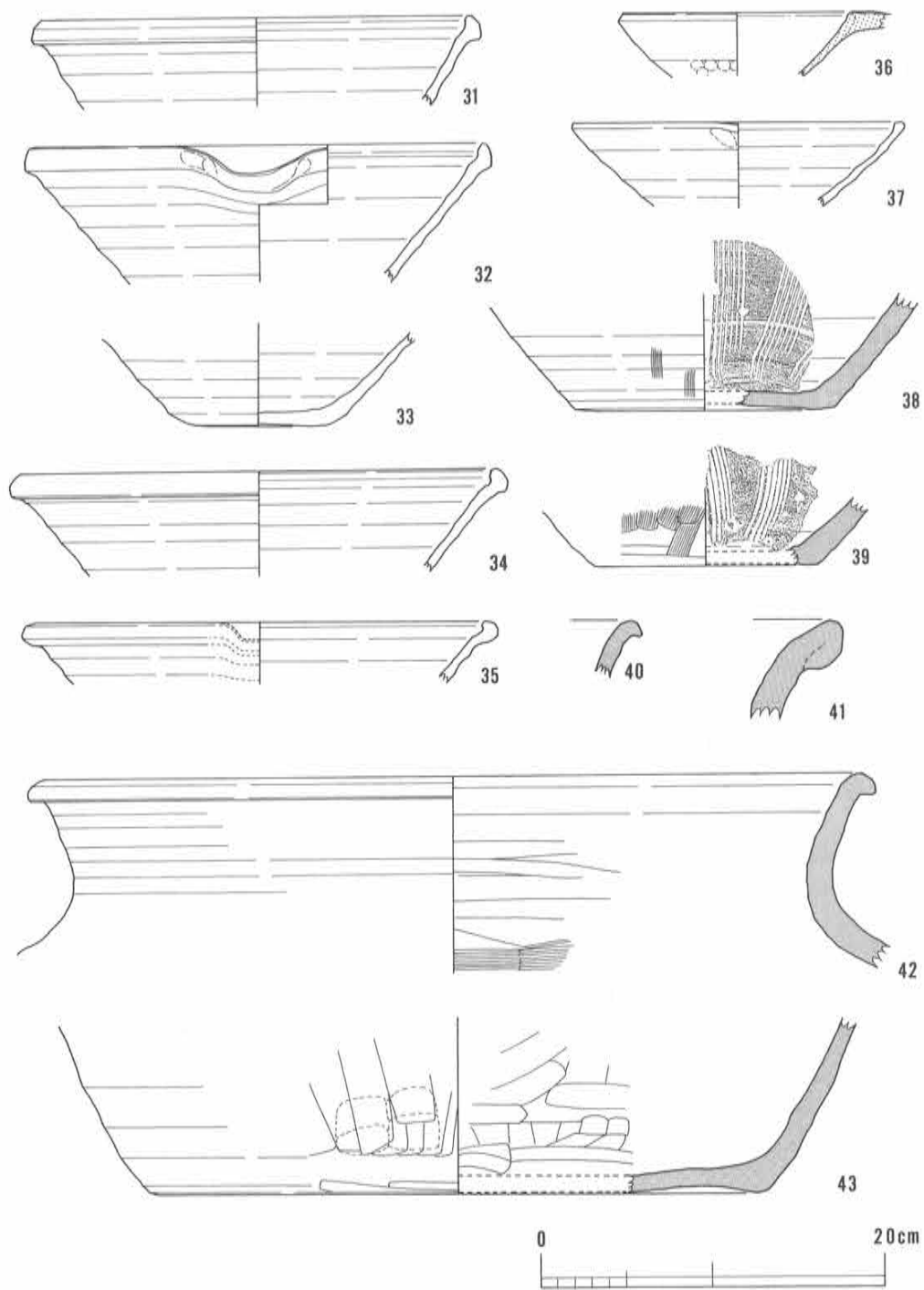
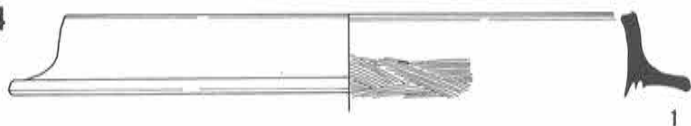


插图200 SE04土器 (2)

C<sub>1</sub>SD14

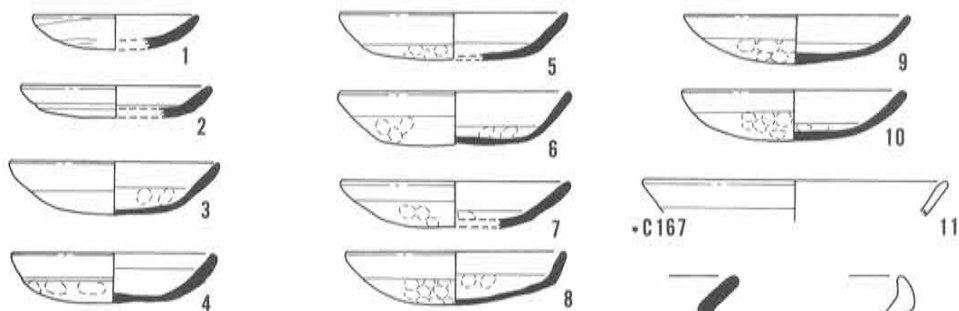


C<sub>1</sub>SD15

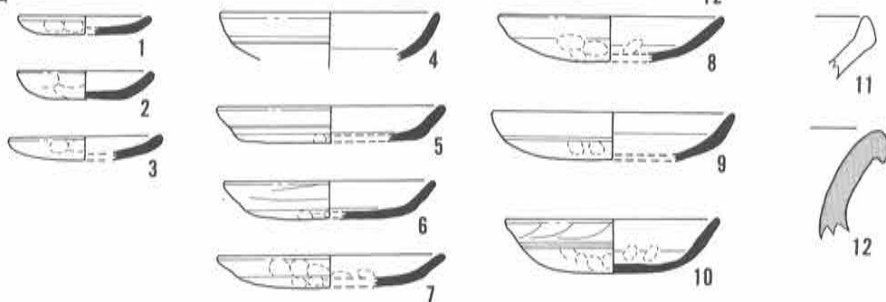


C<sub>1</sub>SD16

C<sub>i</sub>



溝一括



飯溝 2

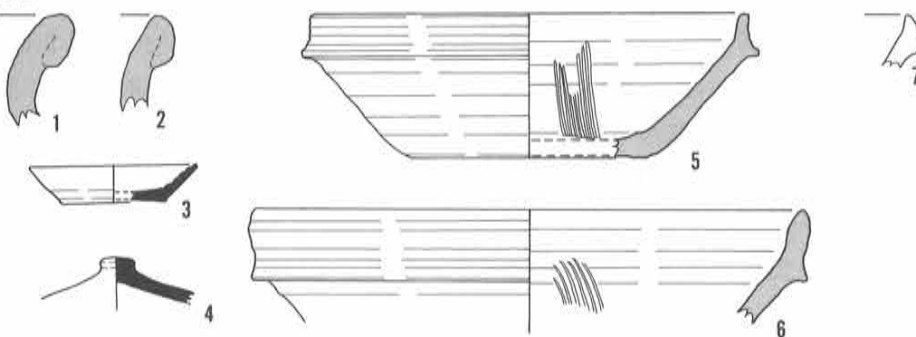
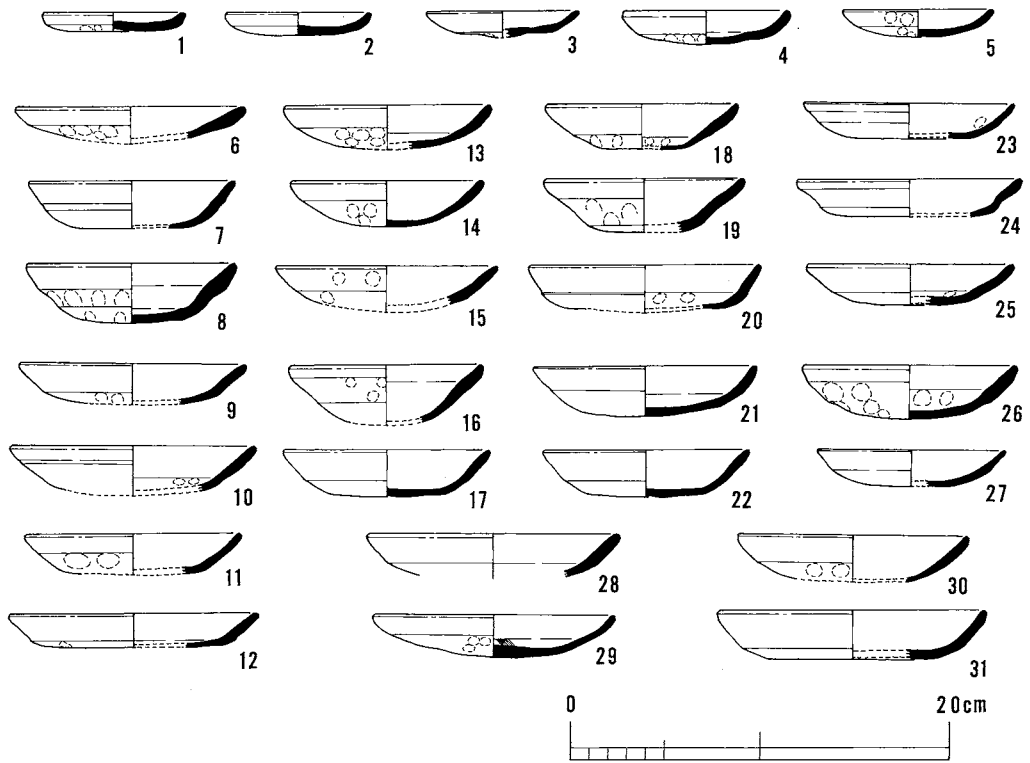


插图201 C<sub>1</sub>SD16他土器



挿図202 C<sub>1</sub>SE02ヨコ土師器一括

る。土師器小皿は口径8.0～9 cm、器高1.6～1.9cmを測り、皿は口径12.5cm、器高2.5cmを測り、いずれも非轆轤系である。

N<sub>2</sub>BSK11からは土師器小皿・皿・鍋、備前焼壺・播鉢が出土している。土師器小皿は口径7.1～8.1cm、器高1.2～1.7cmを測り、皿は口径10.9～11.6cmを測る。いずれも非轆轤系であり、整形時のユビ痕を残し、皿では口縁部一段のナデ調整してもユビ痕を残す物がある(挿図192)。N<sub>3</sub>SK25からは土師器小皿・皿・鍋・羽釜、瓦器羽釜、須恵器捏ね鉢・甕、常滑焼甕と輸入陶磁器が出土している。土師器小皿は口径7.6～7.8cm、器高1.3～1.8cmを測り、皿は口径10.6cm～11.6cm、器高2.5～2.9cmを測る。いずれも非轆轤系である。口縁部のナデが強く、外反するものがある(挿図193・194)。

N<sub>2</sub>BSD02からは土師器小皿・皿、須恵器鉢、備前焼播鉢・甕、亀山焼甕が出土している。土師器小皿は口径7.6～9.0cm、器高1.4～1.8cmを測り、皿は口径10.7～12.4cmを測る。いずれも非轆轤系で口縁部のナデはあまり強くない。(挿図196・197)

C<sub>1</sub>PdSK01からは土師器小皿・皿・羽釜、須恵器捏ね鉢、灰釉陶器杯などが出土している(挿図198)。土師器小皿は口径7.1～8.2cm、器高1.1～2.0cmを測り、皿は口径10.6～12.2cm、器高

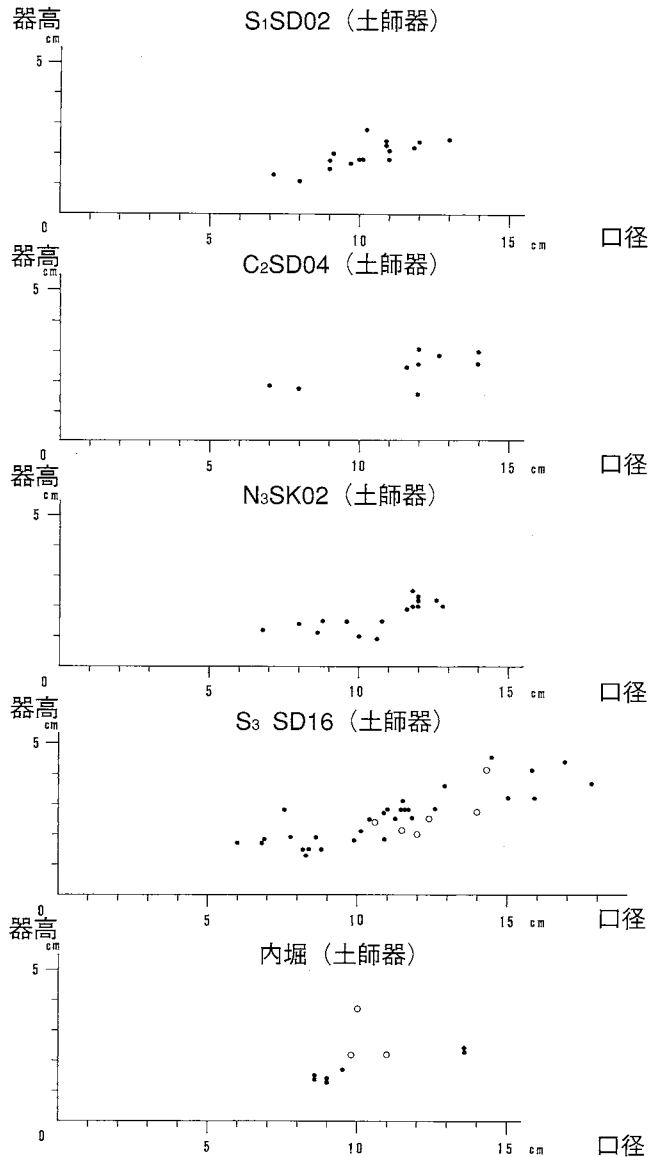
2.5~3.0cmを測る。いずれも非轆轤系である。

C<sub>1</sub>Hb S X02 (土師器溜まり)からは土師器小皿・皿などが出土しており、小皿の口径は7.0~9.0cm、器高1.1~1.7cmを測り、皿は口径10.8~11.9cm、器高1.8~3.0cmを測る。いずれも非轆轤系である。

C<sub>1</sub> S E 04からは土師器小皿・皿・羽釜・鍋、須恵器捏ね鉢・鉢、瓦器焙烙、備前焼播鉢・甕、瀬戸焼花瓶、輸入陶磁器片がある(挿図199・200)。土師器小皿の口径は1~7の非轆轤系で口径7.6~9.0cm、器高1.1~1.7cmを測る。8のみ轆轤系の糸切り底で、口径9cm、器高2cmを測る。皿は口径10.8~12.9cm、器高2.0~3.0cmを測り、口縁部の一段ナデが強く外反をしめす19もある。土師器羽釜・鍋や須恵器捏ね鉢、備前焼甕などから13世紀~14世紀代の幅をもつ井戸の埋没状況を示す資料である。

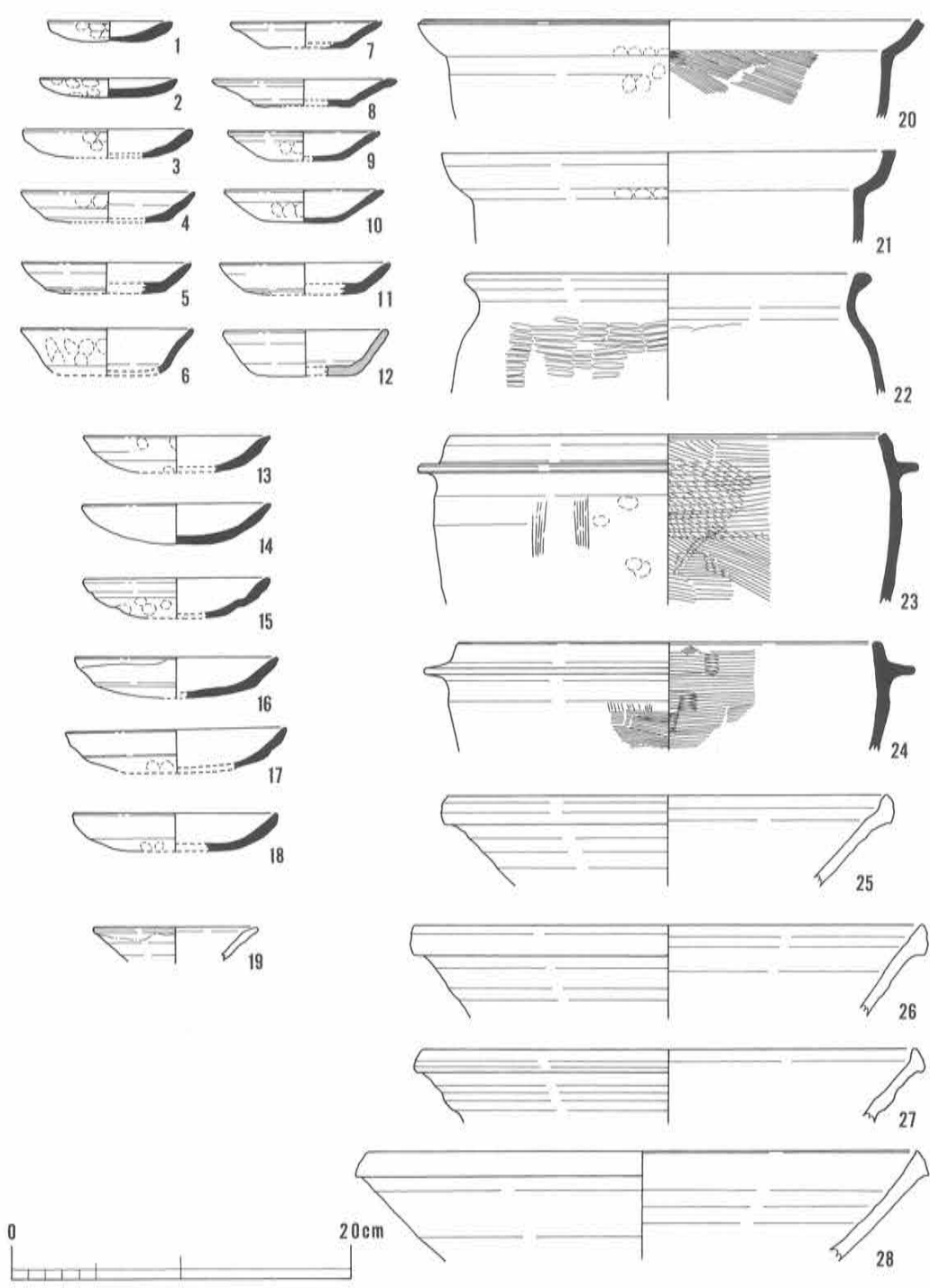
C<sub>1</sub>SD16からは土師器小皿・皿・鍋、須恵器椀・捏ね鉢、備前焼甕・播鉢が出土している

(挿図201)。土師器小皿は口径7.2~8.7cm、器高1.0~1.9cmを測り、皿は口径10.0~13.8cm、器高1.6~2.8cmを測る非轆轤系である。1点轆轤系小皿があり、口径9cm、器高1.9cmを測る。C<sub>1</sub>SE04ヨコ土師器一括からは土師器小皿から皿が出土している(挿図212)。小皿は口径7.4~8.6cm、器高1.0~1.6cmを測り、皿は口径9.8~13.0・14.0cm、器高1.8~3.2cmを測る非轆轤系である。S<sub>1</sub>SD02からは土師器小皿・皿・鍋・羽釜、須恵器捏ね鉢・甕、備前焼杯・皿・壺・播



挿図203 土師器(皿)の法量Ⅳ





挿図204 S<sub>1</sub>SD02土器 (1)

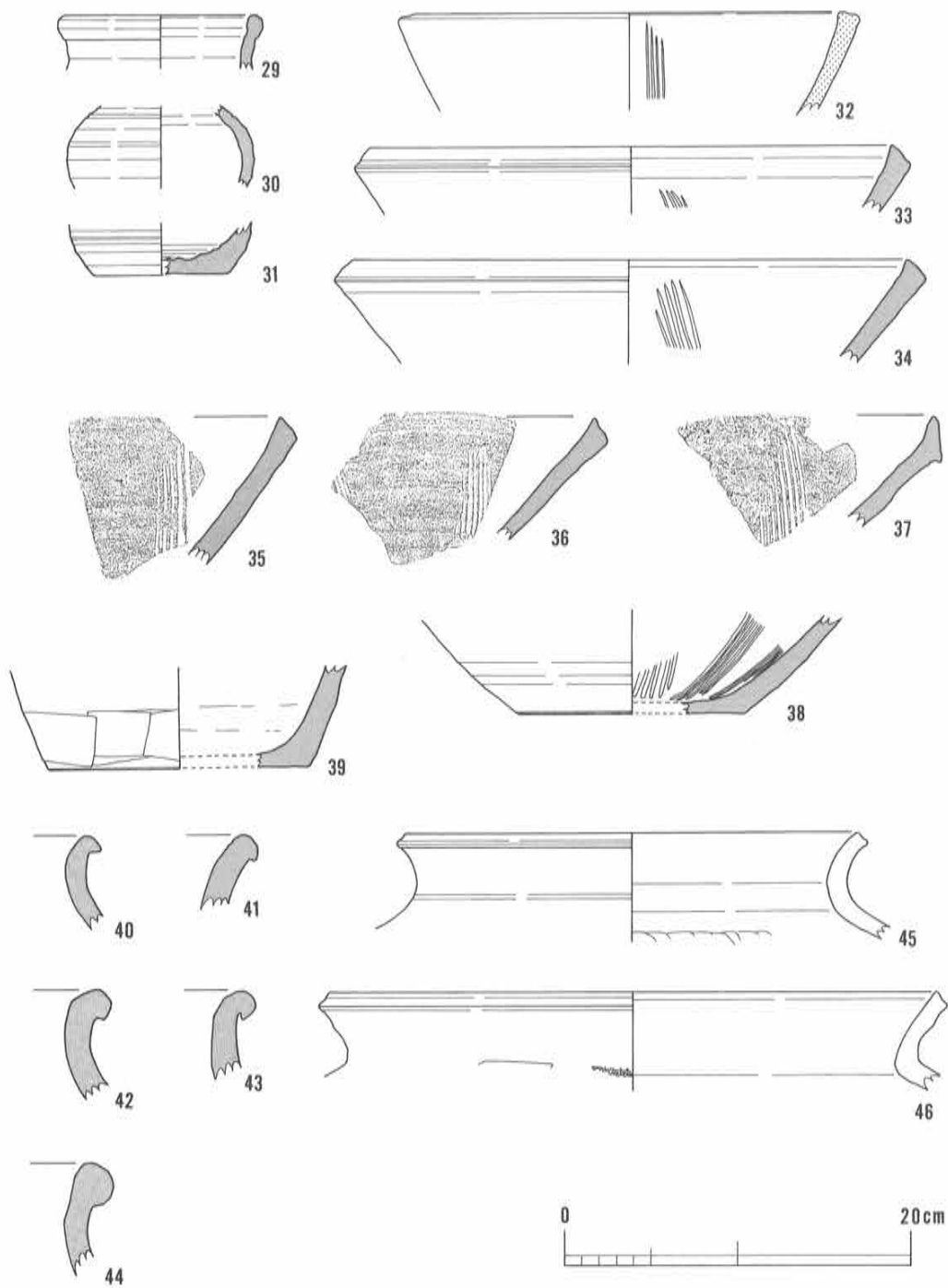
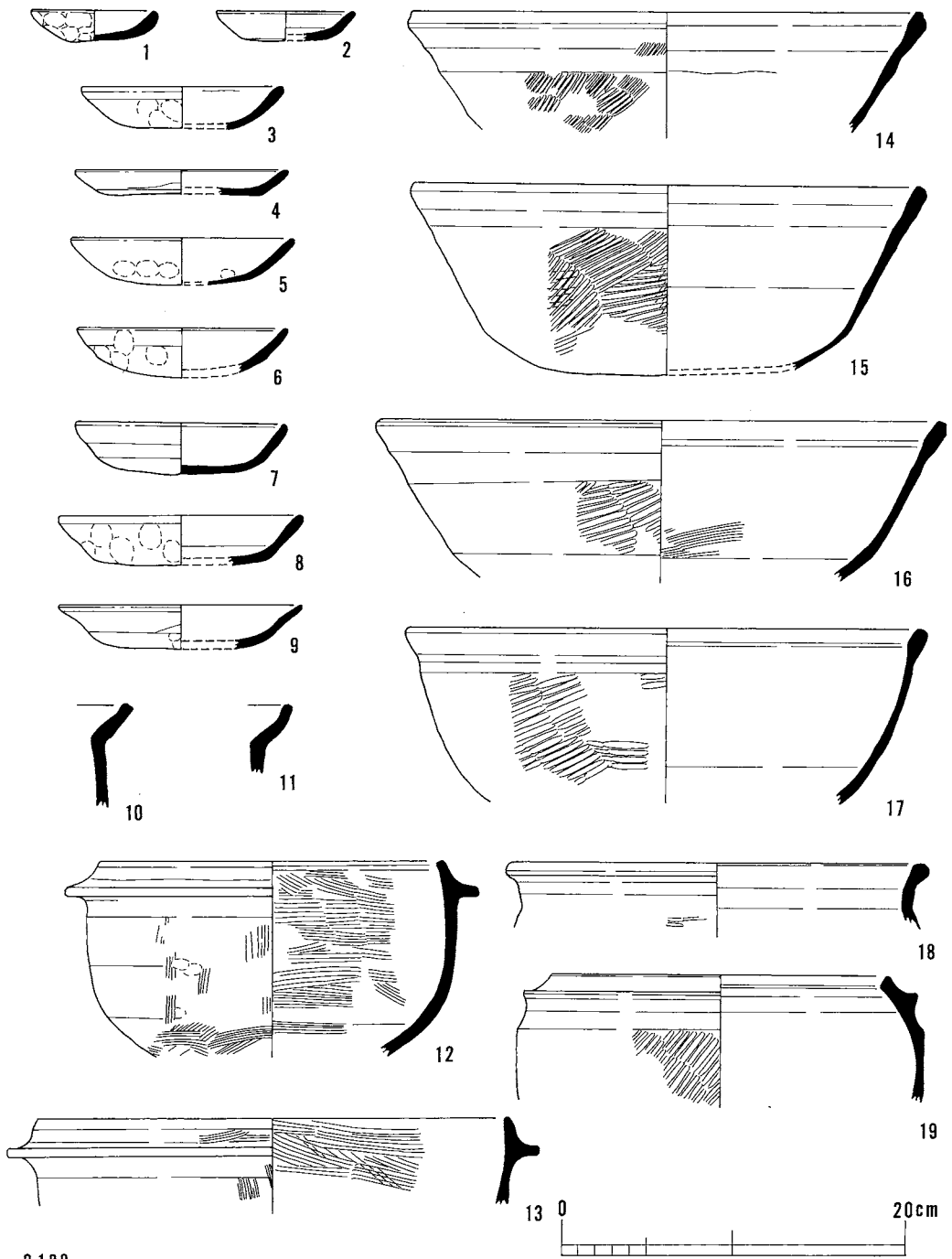


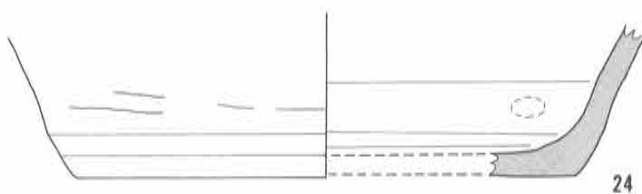
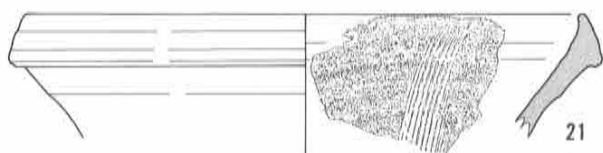
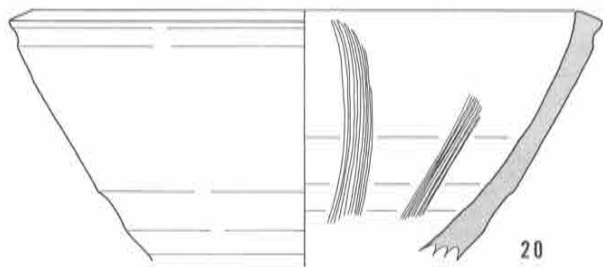
插图205 S<sub>1</sub>SD02土器 (2)



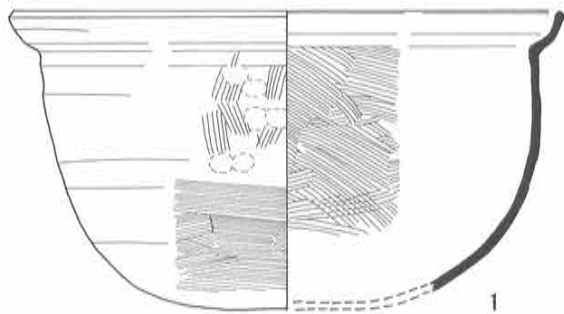
•C 188

插图206 C<sub>2</sub>SD04土器 (1)

C<sub>2</sub>SD04



C<sub>2</sub>P7



C<sub>2</sub>P53



C<sub>2</sub>P60



C<sub>2</sub>P64



C<sub>2</sub>P111

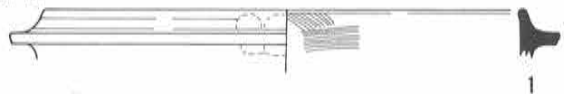


C<sub>2</sub>P112

C<sub>2</sub>P113



C<sub>2</sub>P12



C<sub>2</sub>下層溝

C<sub>2</sub>

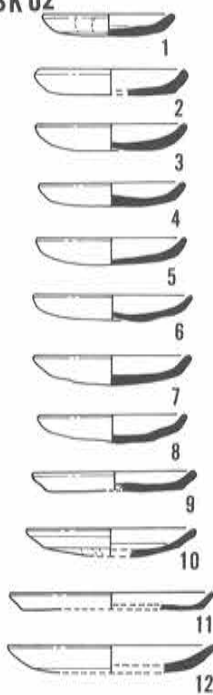


插图207 C<sub>2</sub>SD04土器 (2) · P7 · P12 · P53 · P60 · P111 · P113 · 下層溝土器

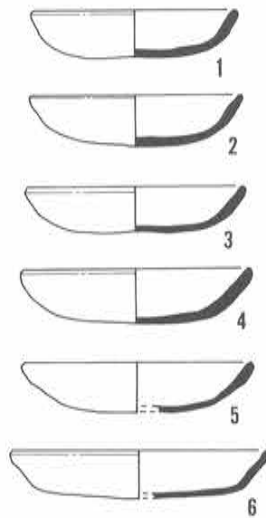
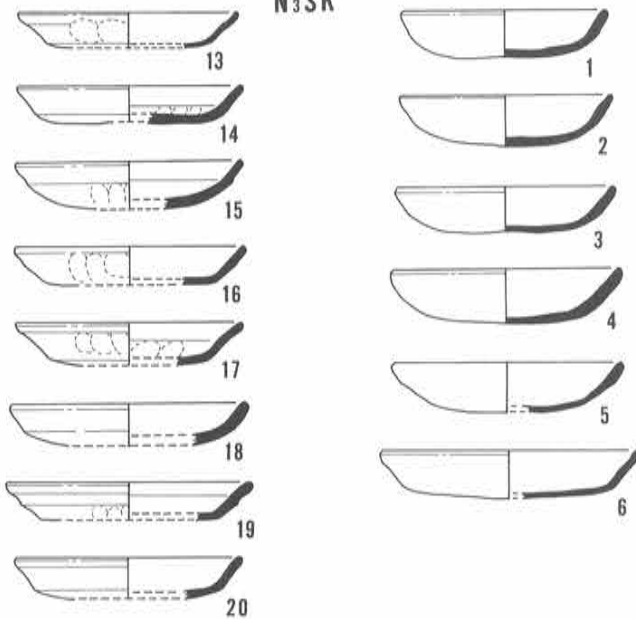
N<sub>3</sub>SK01



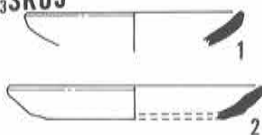
N<sub>3</sub>SK02



N<sub>3</sub>SK



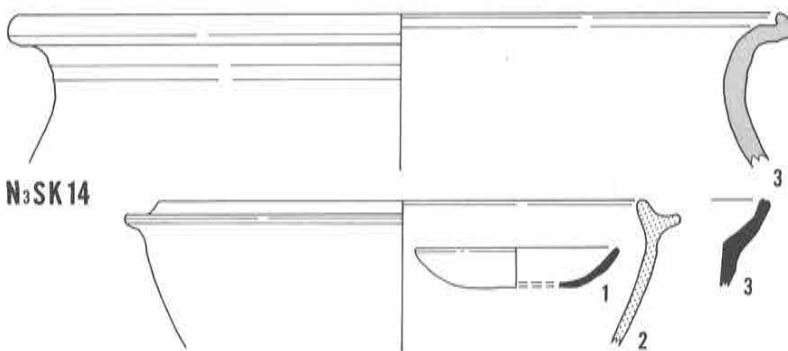
N<sub>3</sub>SK09



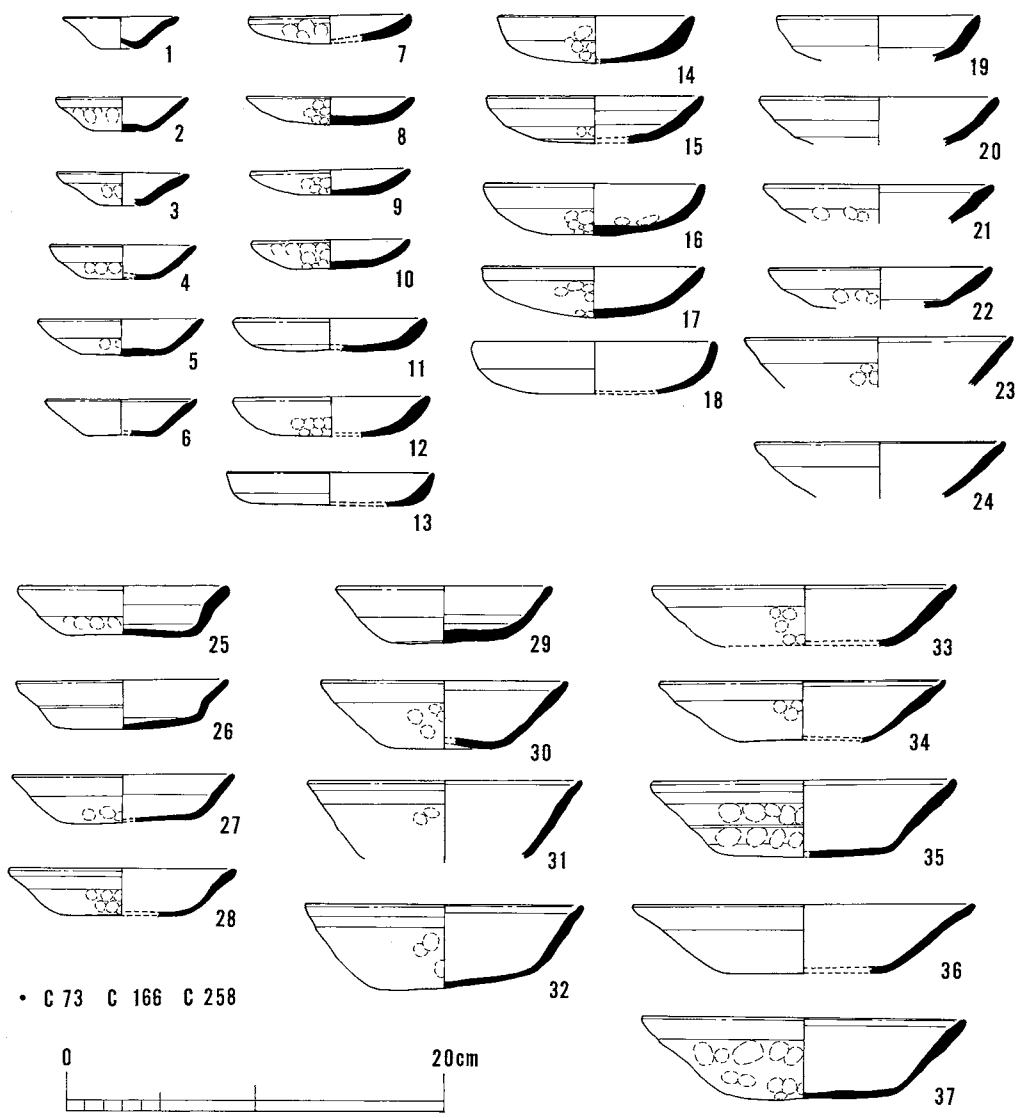
N<sub>3</sub>SK11



N<sub>3</sub>SK14



挿図208 N<sub>3</sub>SK01・SK02・SK09・SK11・SK14土器



挿図209 S<sub>3</sub>SD16土器 (1)

鉢・甕 (I・II~III期)、瓦器播鉢と天目碗や輸入陶磁器が出土している (挿図204・205)。土師器小皿は口径7.2~10.2cm、器高1.1~2.0cmを測る。皿は口径10.9~13.0cm、器高2.1~2.8cmを測り、8は轆轤系であるが他は非轆轤系である。

C<sub>2</sub>SD04からは土師器小皿・皿・鍋・羽釜、須恵器捏ね鉢、瀬戸焼皿、備前焼播鉢・甕 (III・IV期) が出土している (挿図206・207)。土師器小皿は口径7.0・8.0cm、器高1.7・1.8cmを測る。皿は口径11.6~14.0cm、器高1.5~3.0cmを測る。いずれも非轆轤系である。

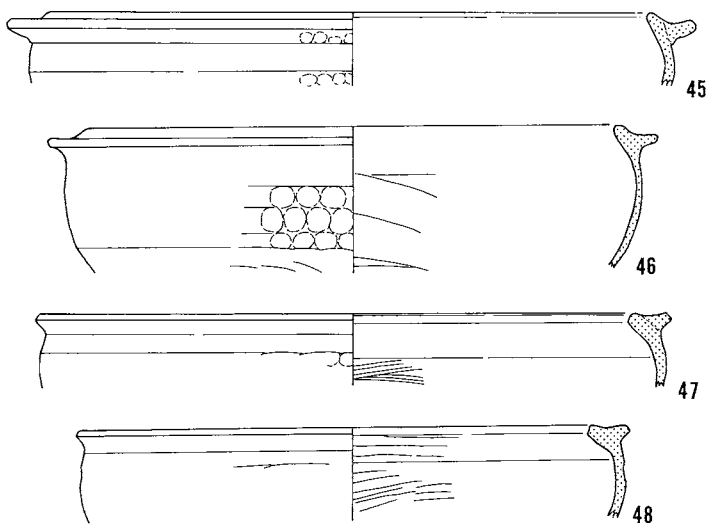
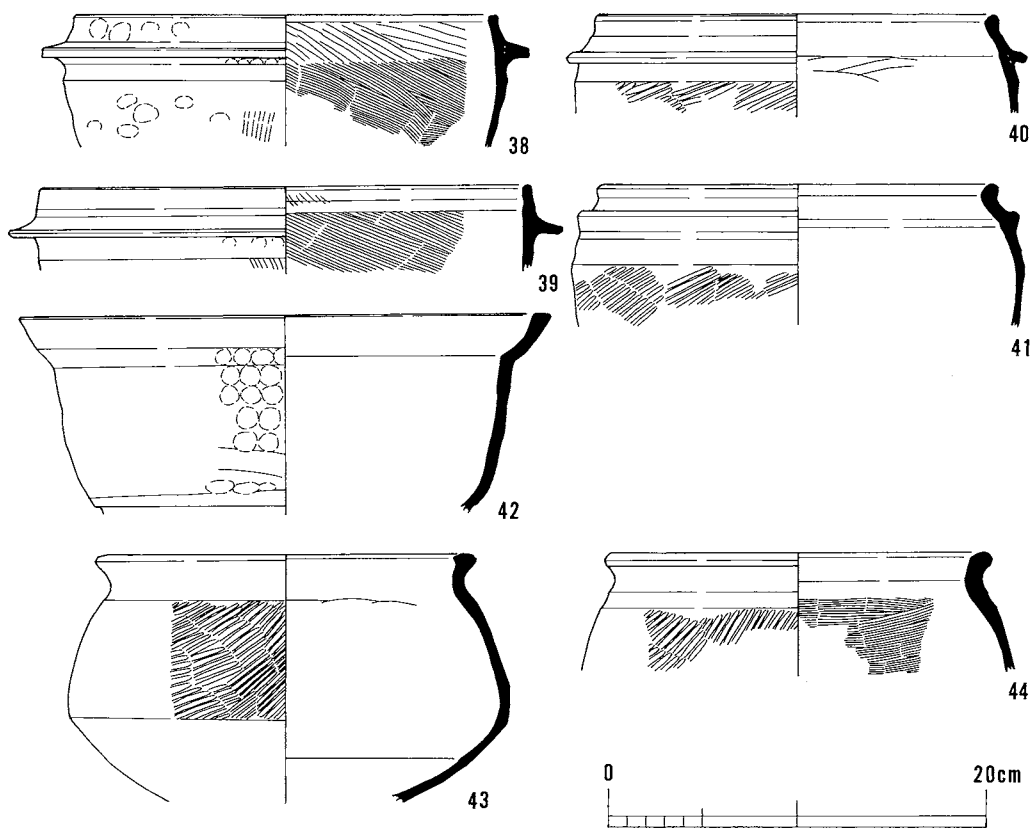
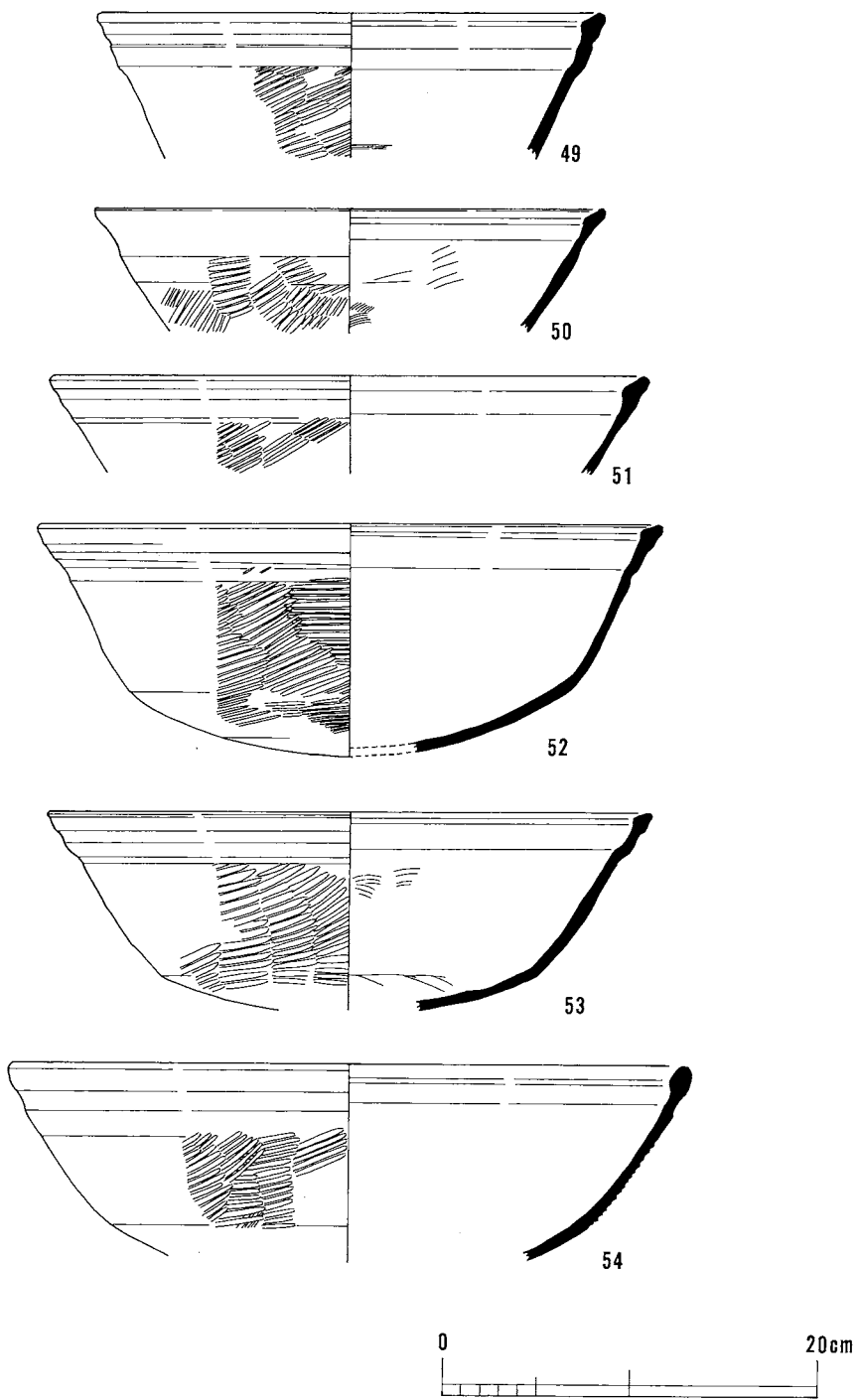
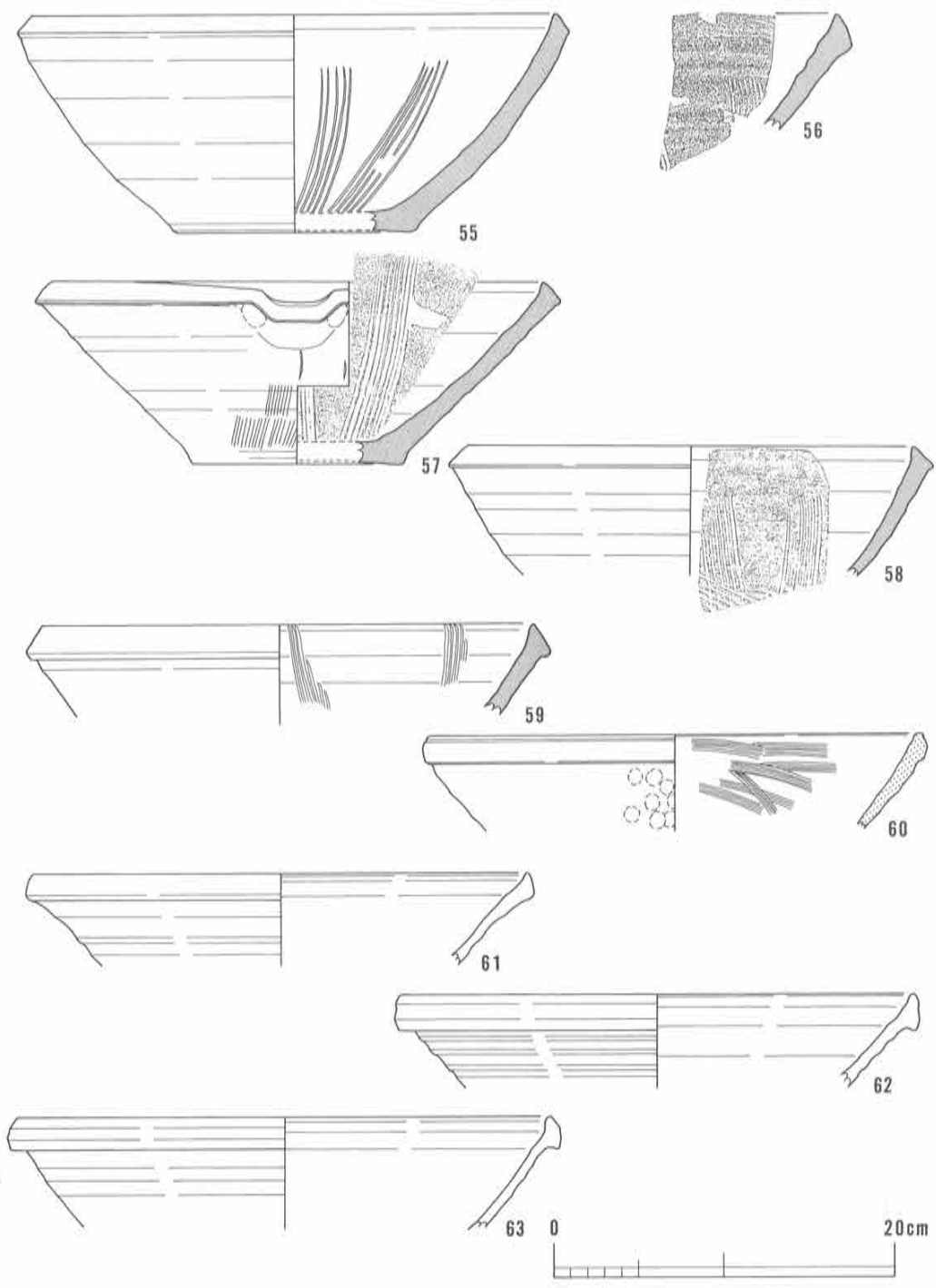


插图210 S<sub>3</sub>SD16土器 (2)



挿図211 S<sub>3</sub>SD16土器 (3)





挿図212 S<sub>3</sub>SD16土器 (4)

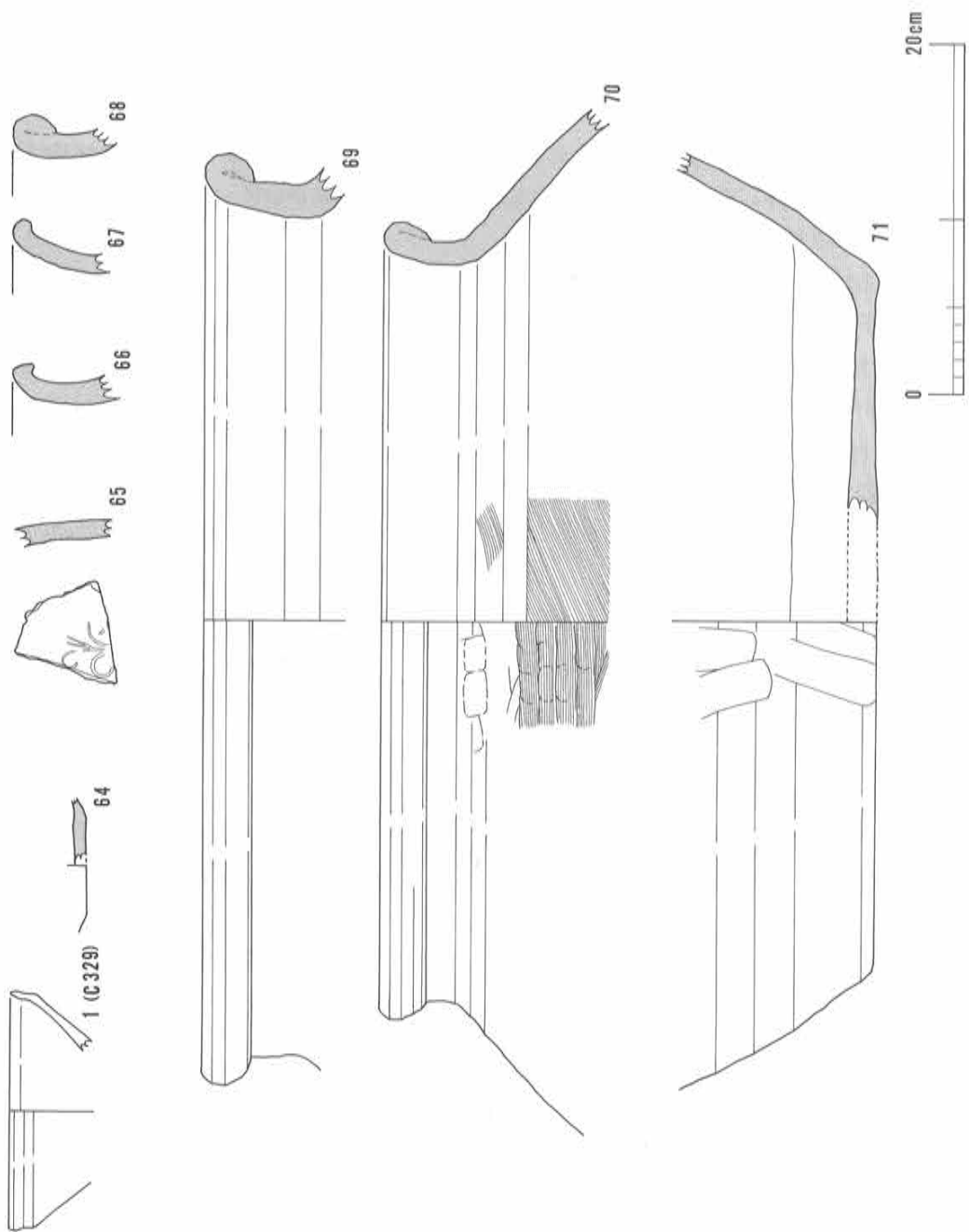


插图213 S<sub>3</sub>SD16土器 (5)

N<sub>3</sub>SK02（土壙2）からは土師器小皿・皿が出土しており、小皿は口径6.8～8.8cm、器高1.1～1.6cmを測り、皿は口径10.6～13.4cm、器高1.5～3.0cmを測り、いずれも非轆轤系である（挿図208）。S<sub>3</sub>SD16からは土師器小皿・皿・羽釜・鍋、瓦器羽釜・鉢、備前焼播鉢・壺・甕、須恵器捏ね鉢、天目碗、瀬戸焼皿などが出土している（挿図214～217）。土師器小皿は口径6.0～7.8・8.2～8.6cm、器高1.3～1.9・2.8cmを測る。1・3は京都系白色へそ皿である。皿は口径9.9～13.1・14.0～16.9cm、器高1.8～3.1・3.2～4.5cmを測るように法量が中皿・大皿に分かれる。いずれも非轆轤系である。（挿図209～213）

内堀からは土師器小皿・皿・羽釜・鍋（23格子目タタキ整形鍋を含む）、備前焼碗・播鉢・壺・甕（I～V期）、須恵器捏ね鉢・甕、瀬戸焼天目碗・鉢・播鉢、瓦器羽釜が出土している。土師器小皿は口径8.6～9.8cm、器高1.5～2.2cmを測り、非轆轤系の2タイプがあり、4～6は京都系の後出の小皿である。皿は10.0～11.0・13.6cm、器高2.2～3.7・2.3～2.4cmを測る。9・10は京都系の小皿と同じで内面のナデ仕上げがある。

以上の通り、土師器小皿と皿の法量の変遷を見ると、

N<sub>1</sub>SK3066>S<sub>3</sub>SK98>N<sub>1</sub>SK2129>N<sub>2</sub>BSK11>N<sub>3</sub>SK25  
N<sub>2</sub>BSD02>C<sub>1</sub>PdSK01>C<sub>1</sub>HbSX02>C<sub>1</sub>SE04>C<sub>1</sub>SD16  
C<sub>1</sub>SE04横土師器一括>S<sub>1</sub>SD02>C<sub>2</sub>SD04>N<sub>3</sub>SK02（土壙2）  
S<sub>3</sub>SD16>内堀となる。

つづいて煮炊具の土師器羽釜、鍋と竈について述べる。

羽釜は鏝釜とも呼ばれ竈に乗せ煮炊具として使用される。

N<sub>1</sub>SD3044出土の羽釜10・11は竈17と組み合わされ使用された（挿図188・190）。羽釜10は口径29.8cm、器高（21.3cm）、鏝径36.7cm、鏝長2.0cm、胴径34.0cmを測り、11は口径27.2cm、器高（19.0cm）、鏝径34.8cm、鏝長2.0cm、胴径32.4cmを測る。いずれもタタキ整形後、胴下半は粗いハケ調整を残し、上半は一部タテ方向にハケ目残すが丁寧にナデ消している。内面はハケ目調整を丁寧に施す。体部は丸く底を作り出す。竈17は復元推定高30.0cm、口径34.0cm、焚き口上半は庇状に10.0cmほど出ている。また、把手が耳状突起とも呼ぶべき矮小化して左右に付く移動式の竈である。外面は粗いハケ目が残る。

羽釜は法量の小型化と鏝の消長に変遷を認める。

古相のものにN<sub>1</sub>SK3072の3（挿図187）があり、口径33.2cm、器高24.5cm、鏝径40.0cm、鏝長2cm、胴径36.8cmを測り、口縁は外反し、体部は丸く作るが底はやや平らである。また胴部下半は整形時のタタキを残し、上半はタテ方向のハケ目調整が残る。内面は口縁と体部のハケ目調整を変えている。また、S<sub>2</sub>SK07の7（挿図223）は口径32.0cm、器高23.0cm、鏝径40.0cm、鏝長2.4cm、胴径40.0cmを測る。口縁はやや内傾し、体部は丸く作るが底はやや平らである。底の

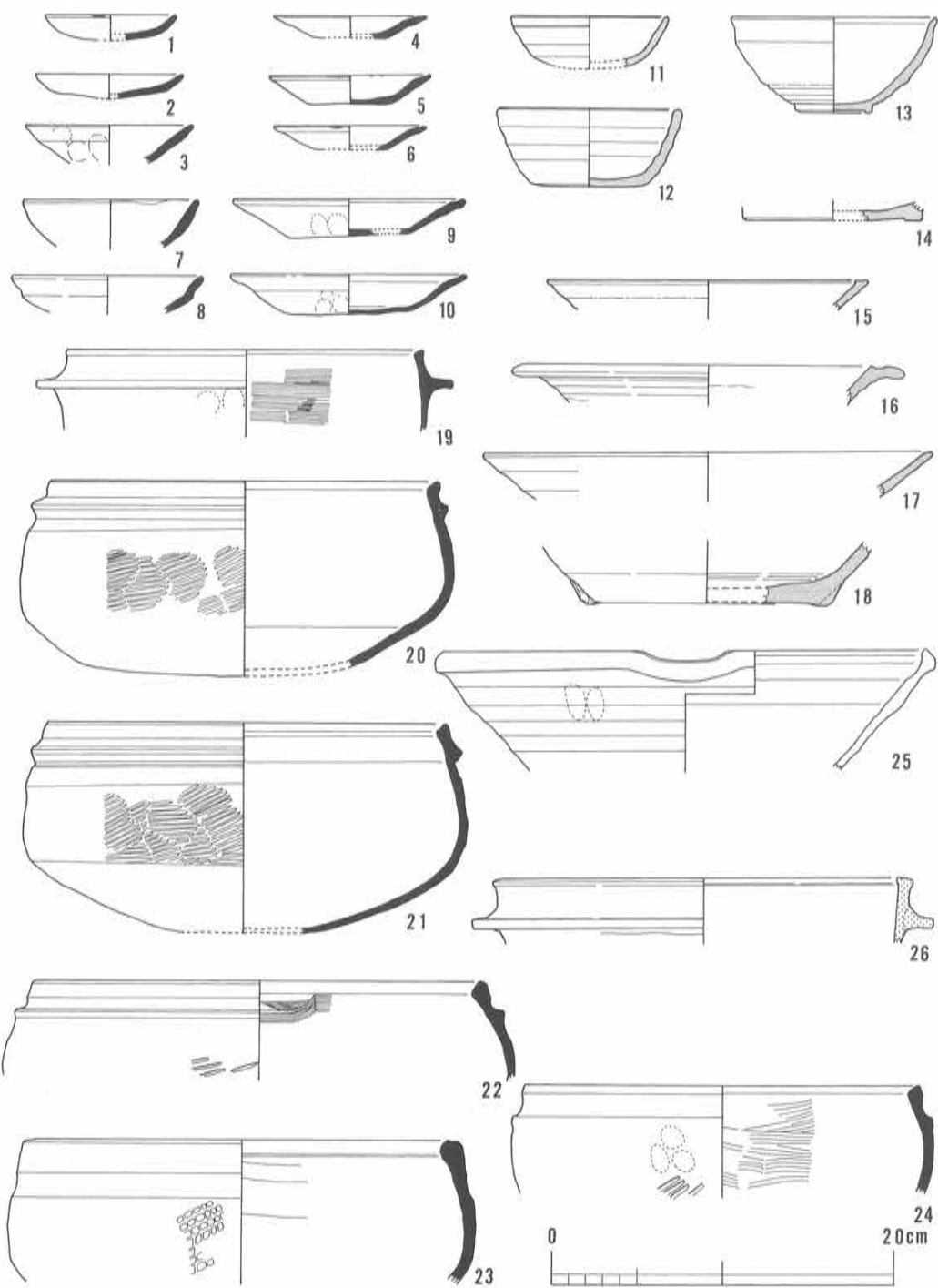


插图214 C:内掘土器(1)

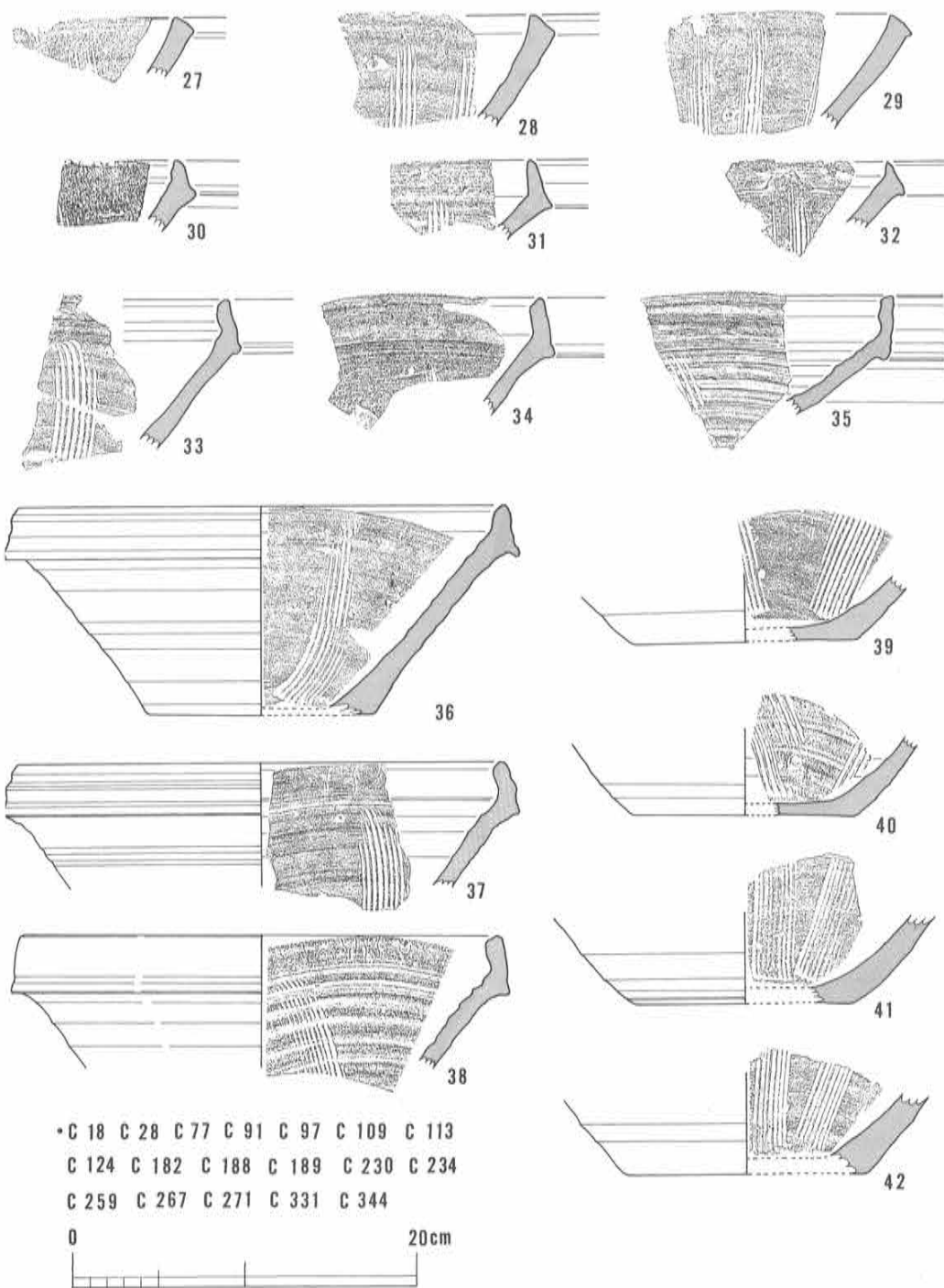


插图215 C<sub>1</sub>内堀土器 (2)

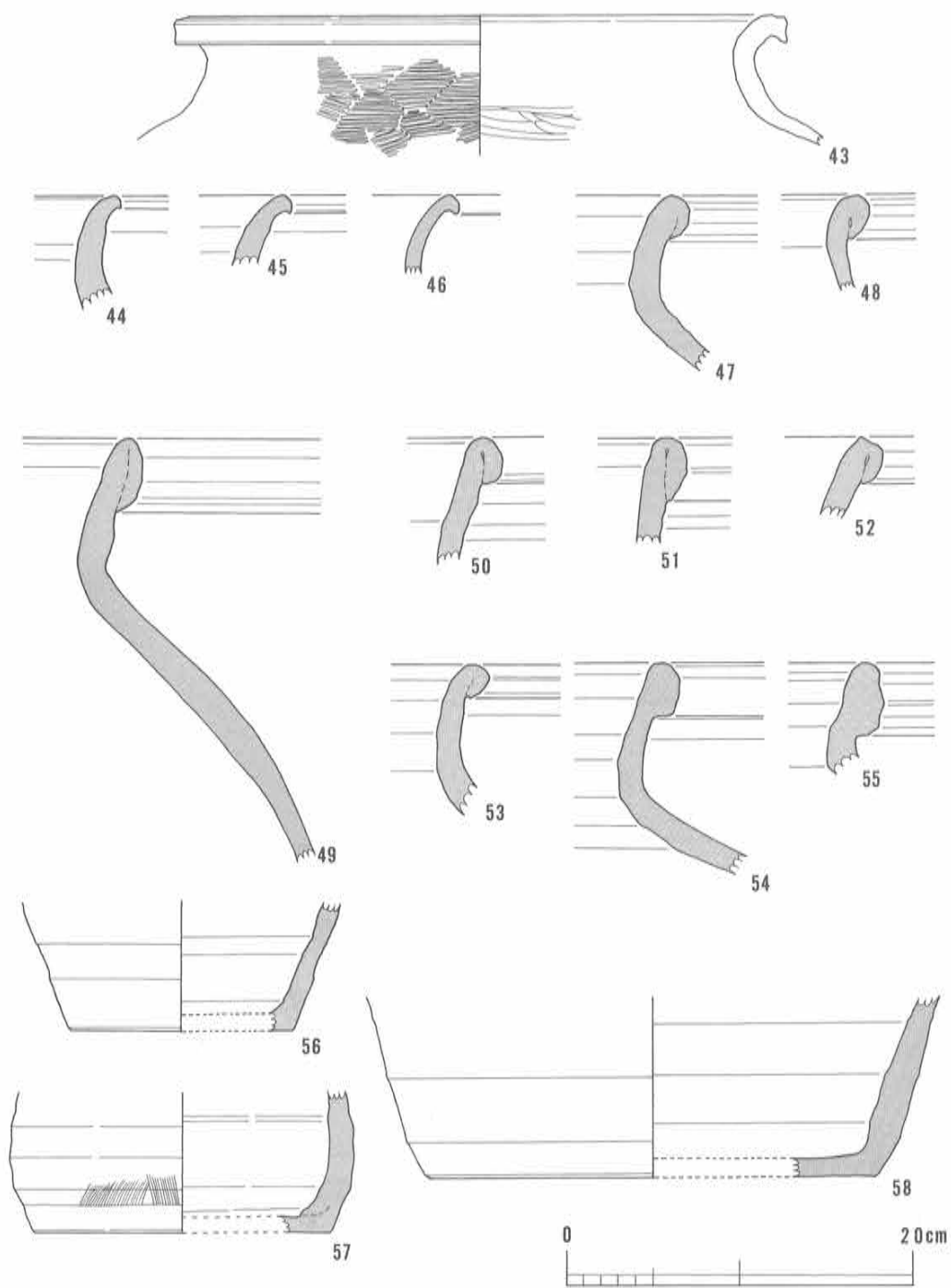
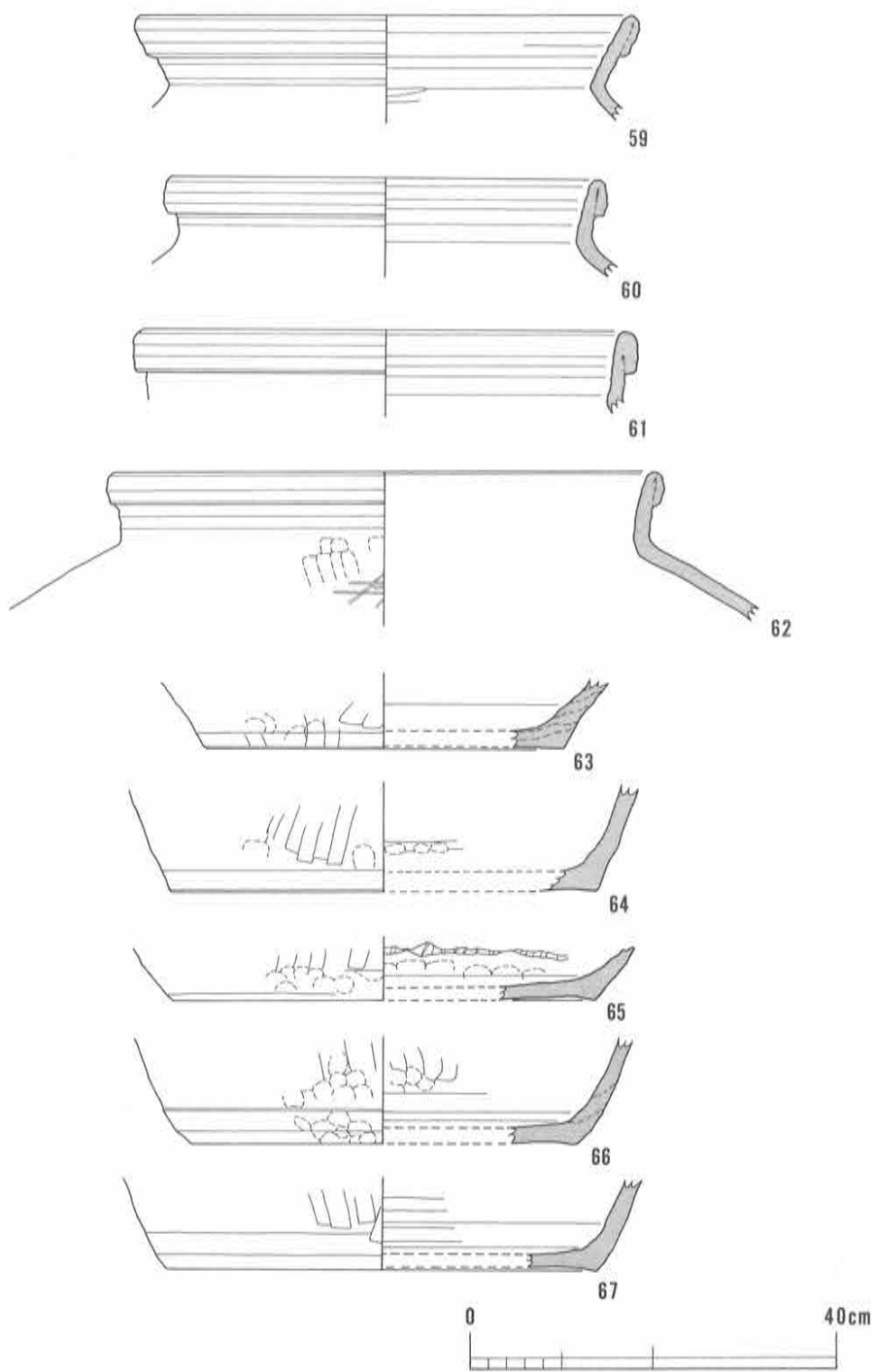


插图216 C<sub>1</sub>内堀土器 (3)



挿図217 C<sub>1</sub>内堀土器 (4)

タタキ整形は粗いハケ目調整を施し、上半は丁寧にハケ調整を施している。

より新相の羽釜としてC<sub>3</sub>SD07の8（挿図222）とSE04の23（挿図199）がある。8は口径23.7cm、器高13.7cm、罎径28.0cm、罎長1.2cmと法量は減じ、口縁はやや内傾し、S<sub>2</sub>SK07の7の矮小化したものである。底はやや丸くし、粗いハケ目を施し、体部はタテ方向のハケ目調整を施している。また23は口径22.9cm、器高12.8cm、罎径26.0cm、罎長1.0cmとさらに法量を減じる。底は丸く作り出し粗いハケ目を施すが、体部はハケ目調整をナデ消している。

羽釜の消長は13世紀から14世紀にかけて、N<sub>1</sub>SK3072>S<sub>2</sub>SK07>N<sub>1</sub>SD3044>C<sub>3</sub>SD07>SE04となり、西播磨での羽釜の推移とみる。

この後、東播磨の羽釜製作技法の導入で変化を生みだしている。それはS<sub>3</sub>SD16の組成に見られる（挿図210）。38・39とともに40・41が共伴する。40は口径20.7cm、罎径24.4cm、罎長0.8cmを測り、口縁は内膨らみ気味に少し外反する。体部はタタキ整形のままである。また、41はやや後出のもので口径はほぼ同じであるが、罎径は23.6cm、罎長は0.7cmと小さくなりやや上方に付く。S<sub>3</sub>SD09でも同じである（挿図24）。

さらに羽釜は方形館の時期に変化する。内堀の挿図214の20・21やS<sub>1</sub>SD01の挿図247の7～10、東西堀の挿図251の9・11の羽釜から内堀の挿図214の22・24、東西堀の挿図251の12～14、片岡庄堀の挿図255の6・7のように罎が貼り付けるものからつまみ出すように形骸化した罎へと推移し、器形も矮小化する。また、内堀の挿図214の23にみる格子目タタキ整形した羽釜が出現する。

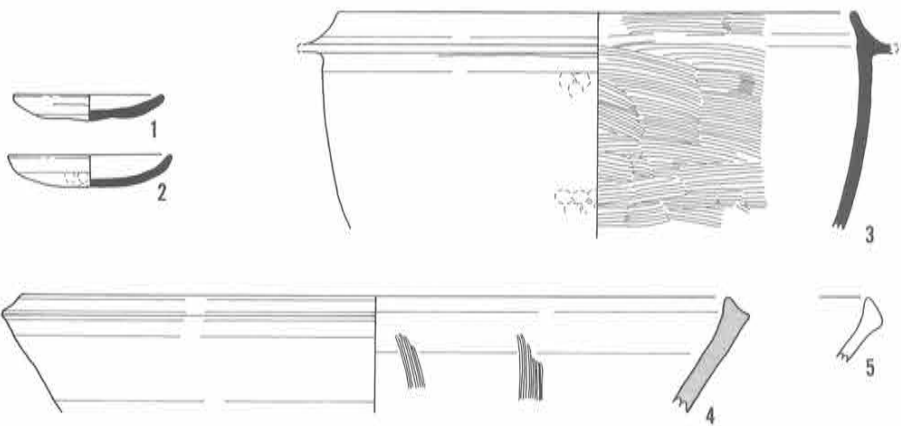
鍋はN<sub>1</sub>SD3044の羽釜・竈との組み合わせにみる挿図189の三足鍋と挿図191の鍋がある。三足鍋15は口径32.4cm、器高24.7cm、鍋高15.2cmを測り、16は口径30.8cm、器高24.8cmを測る。底を丸く作り出し、口縁は外反し、体部は粗いハケ目調整し、内面も口縁部と分けて丁寧なハケ目調整を行っている。足は丁寧に面を取りながら磨いている。鍋21は口径36.0cm、器高14.9cmを測り、体部外面の調整は三足鍋15と同じで下半はハケ目で調整し、上半をハケ目をナデ消す。

三足鍋はこの後姿を消すが鍋は推移する。N<sub>1</sub>SD3045（挿図241）の5は口径32.6cm、器高16.0cmを測り同じ法量であるが、C<sub>2</sub>P7の1（挿図207）は口径28.7cm、器高14.8cmを測り、口縁はやや内傾し受け口となる。体部の外面の調整は底と上半を調整仕分ける。続いて、N<sub>3</sub>SK25挿図193の9は口径27.2cm、器高11.7cmを測り法量を減じる。また10の口縁端部は丸く纏まり、鉄鍋をより丁寧に模倣している。

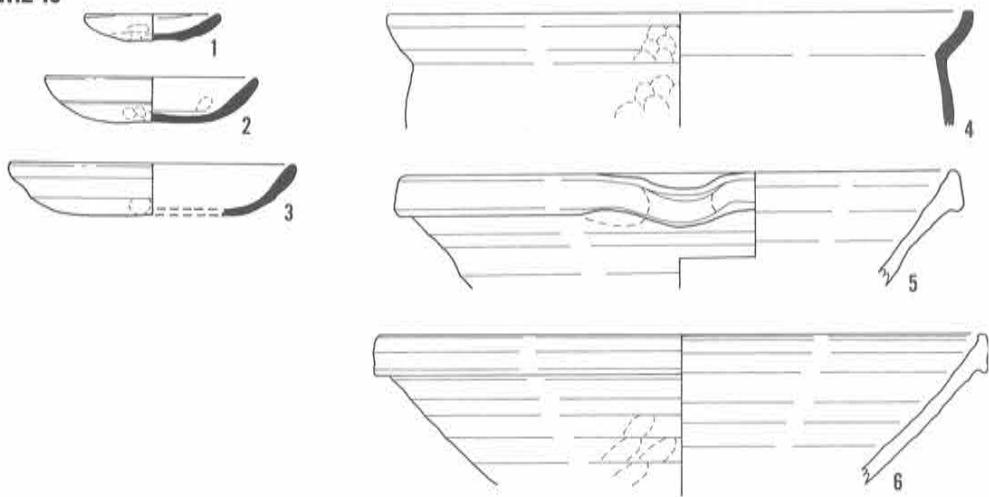
一方東播磨・丹波地域にみられるタタキ成形痕を残した鍋は本遺跡にも、量は少ないがある。S<sub>3</sub> II SK03の3は口径21.5cm、胴径23.6cmを測り、口縁端は外反しやや丸く肥厚し、体部は丸い（挿図180）。土師器小皿・皿、須恵器小皿・椀、瓦器椀と共伴する13世紀前半代に属する。N<sub>2</sub>BSK11の46は口径20.7cm、胴径22.8cmを測り、口縁端が強く外反し肥厚する（挿図192）。土師器小皿・皿と備前焼甕から共伴し14世紀前半に属する。



C:SK11



C:SK12-13



C:SK14



挿図218 C:SK11~SK14土器

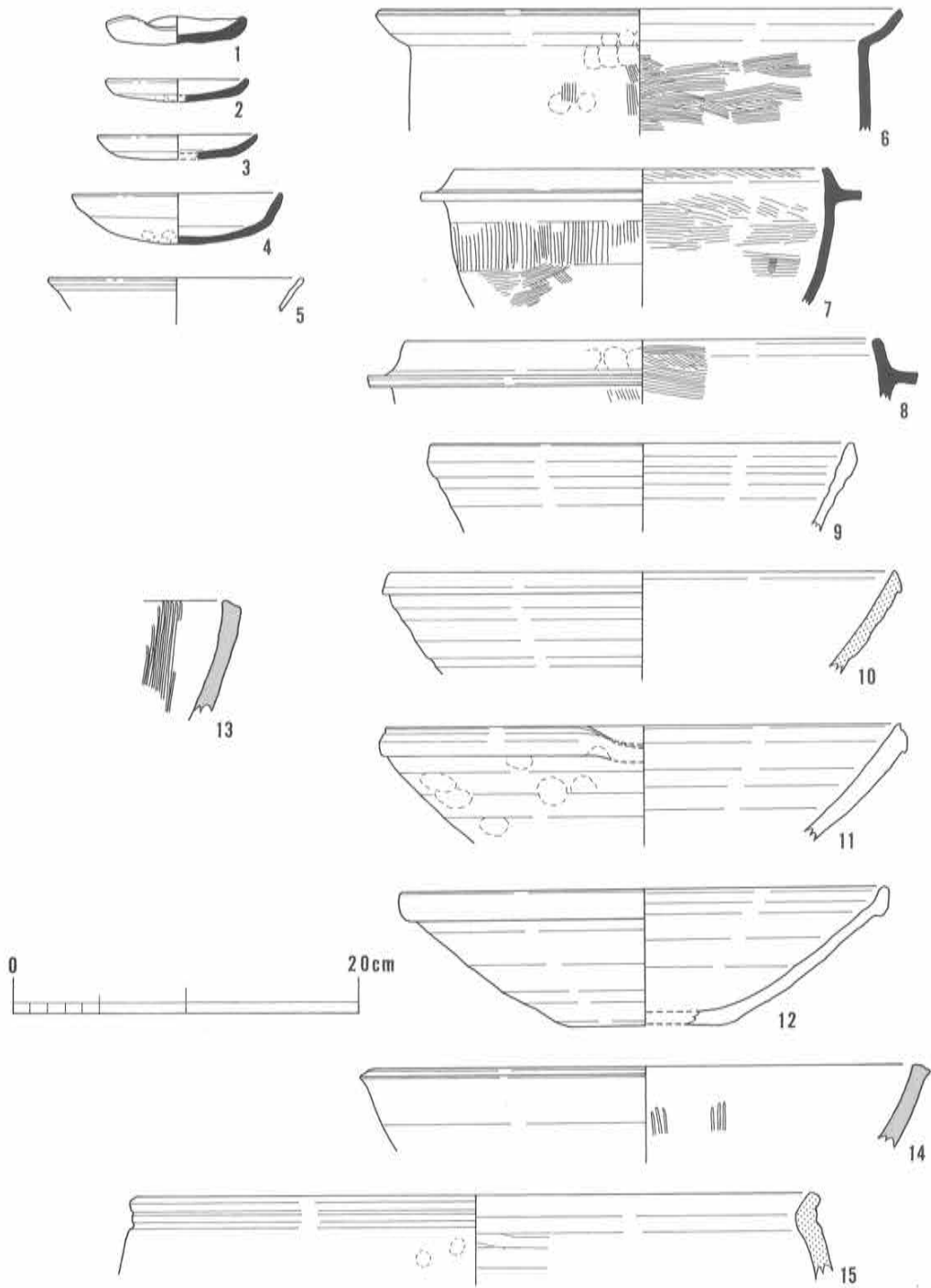


插图219 C<sub>1</sub>SK15土器

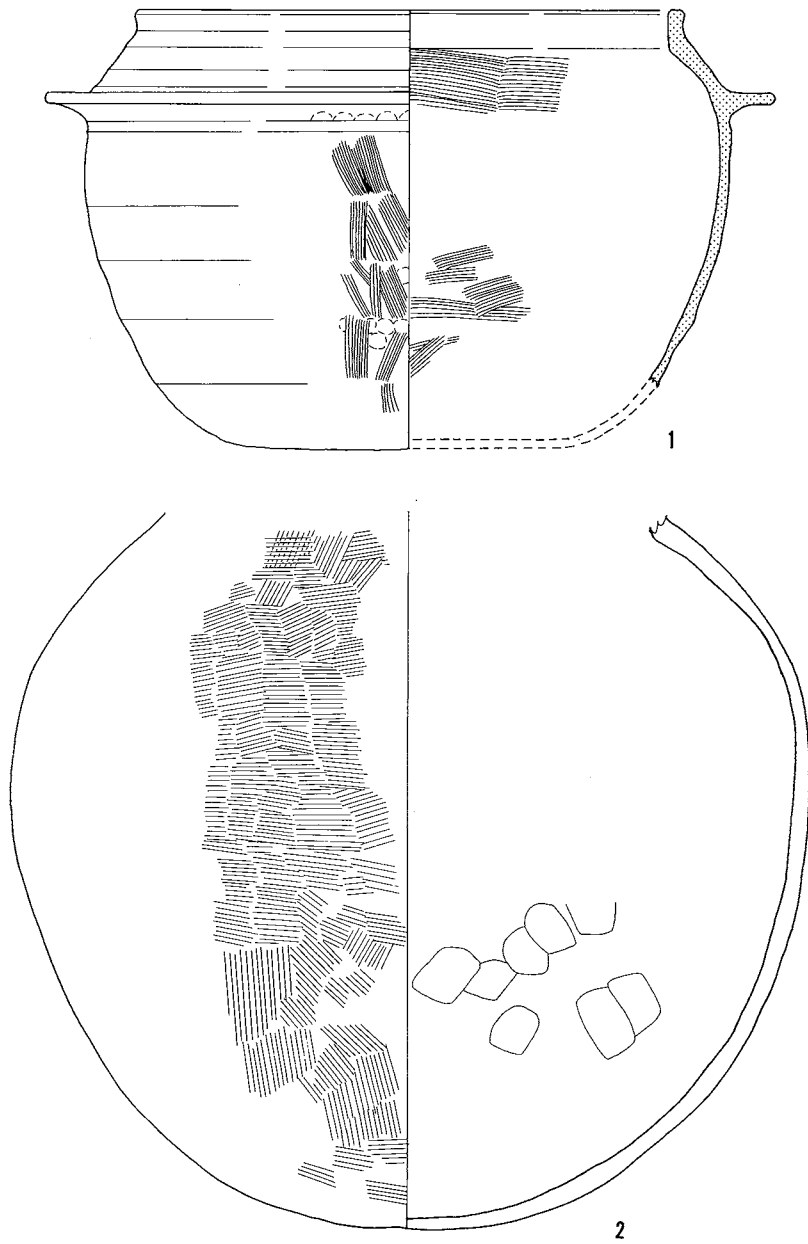
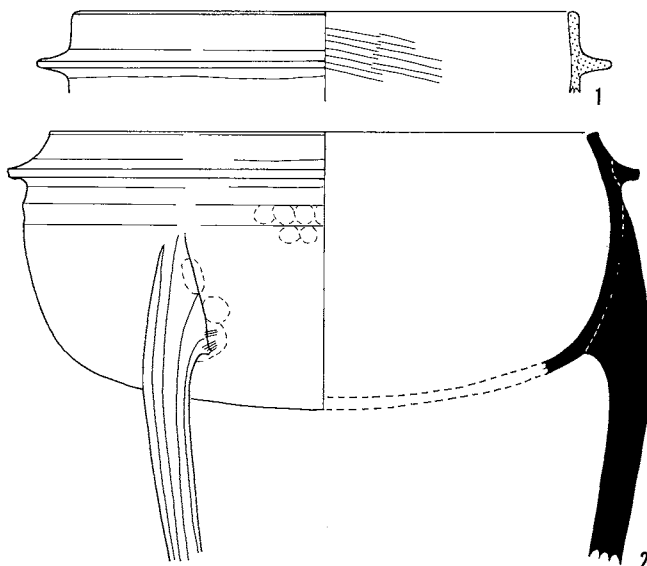


插图220 N<sub>2</sub>ASK10土器

N<sub>1</sub>SK3076



N<sub>1</sub>SK3192

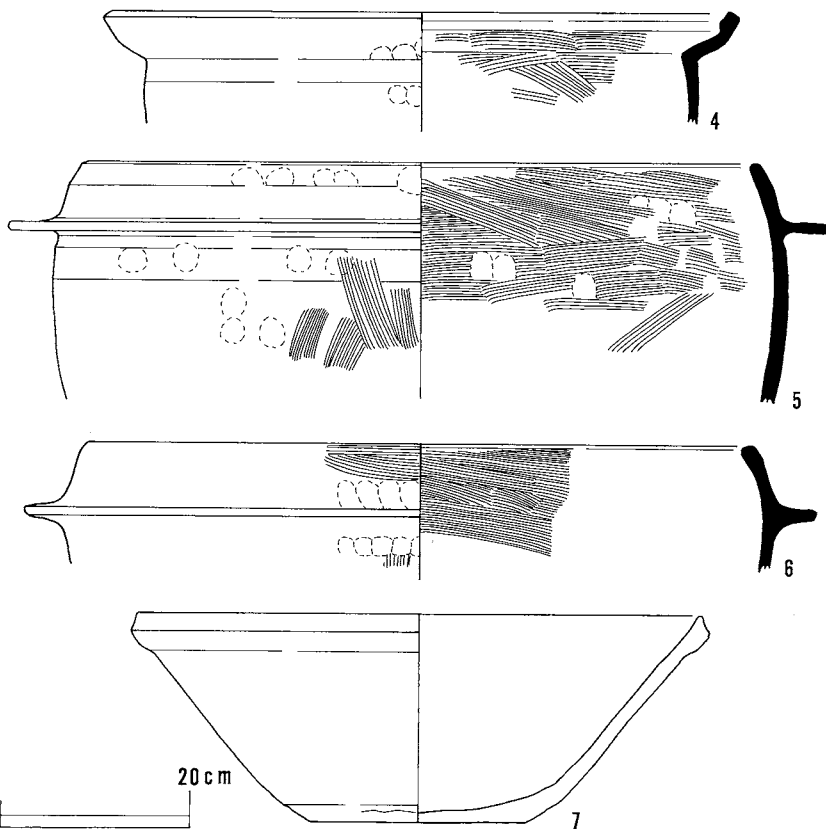
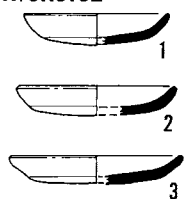
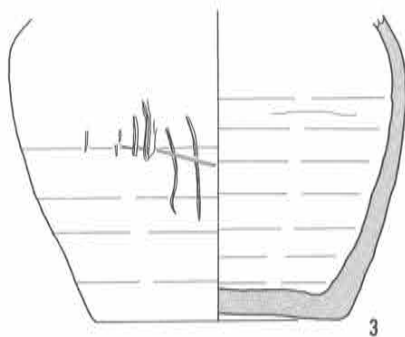
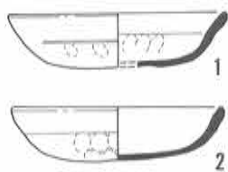
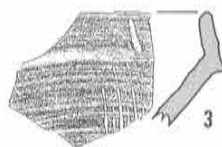
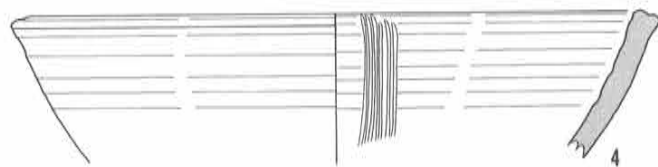


插图221 N<sub>1</sub>SK3076·SK3192土器

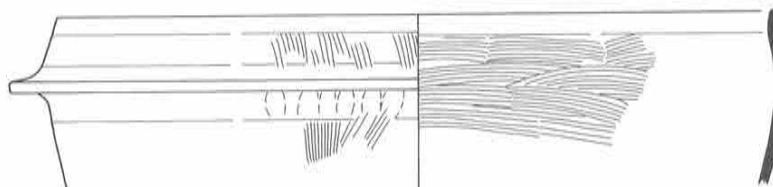
C<sub>3</sub>SD01



C<sub>3</sub>SD02



C<sub>3</sub>SD03



C<sub>3</sub>SD05



C<sub>3</sub>SD07

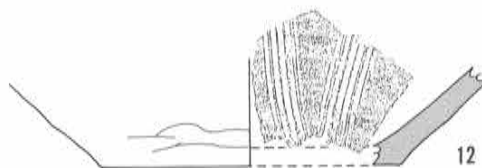
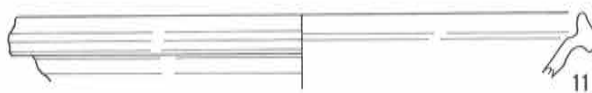
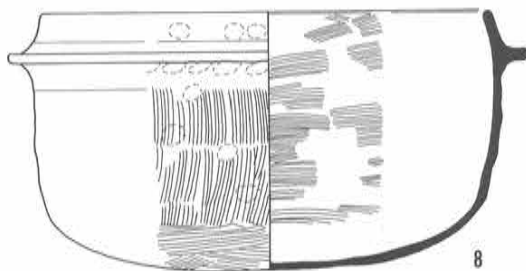
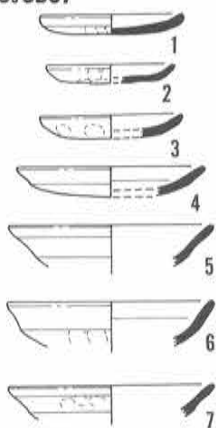
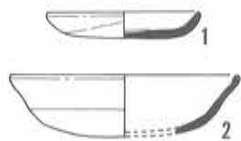
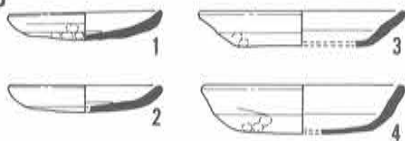


插图222 C<sub>3</sub>SD01 · SD07土器

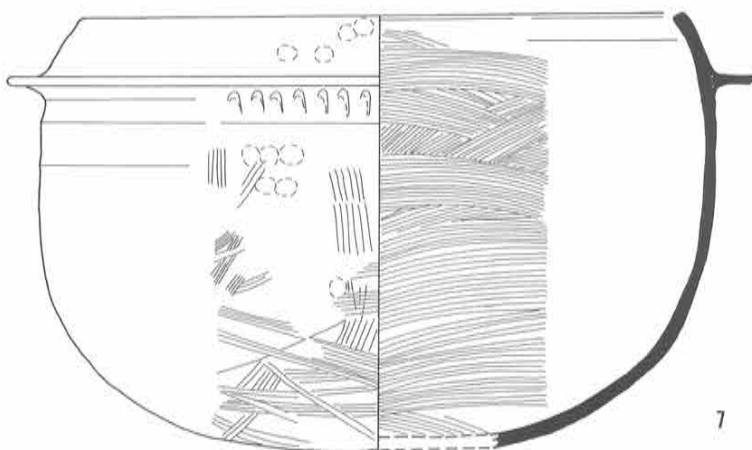
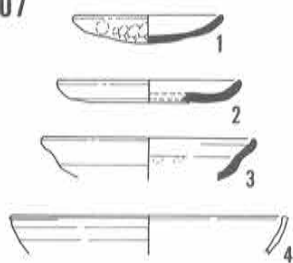
S<sub>2</sub>SK04



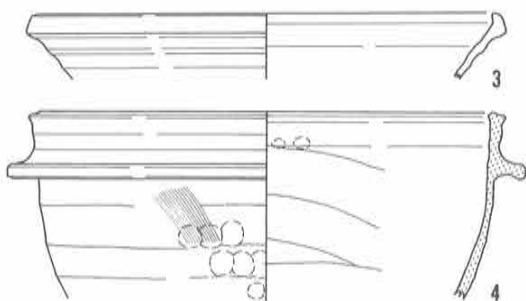
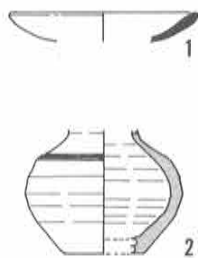
S<sub>2</sub>SK05



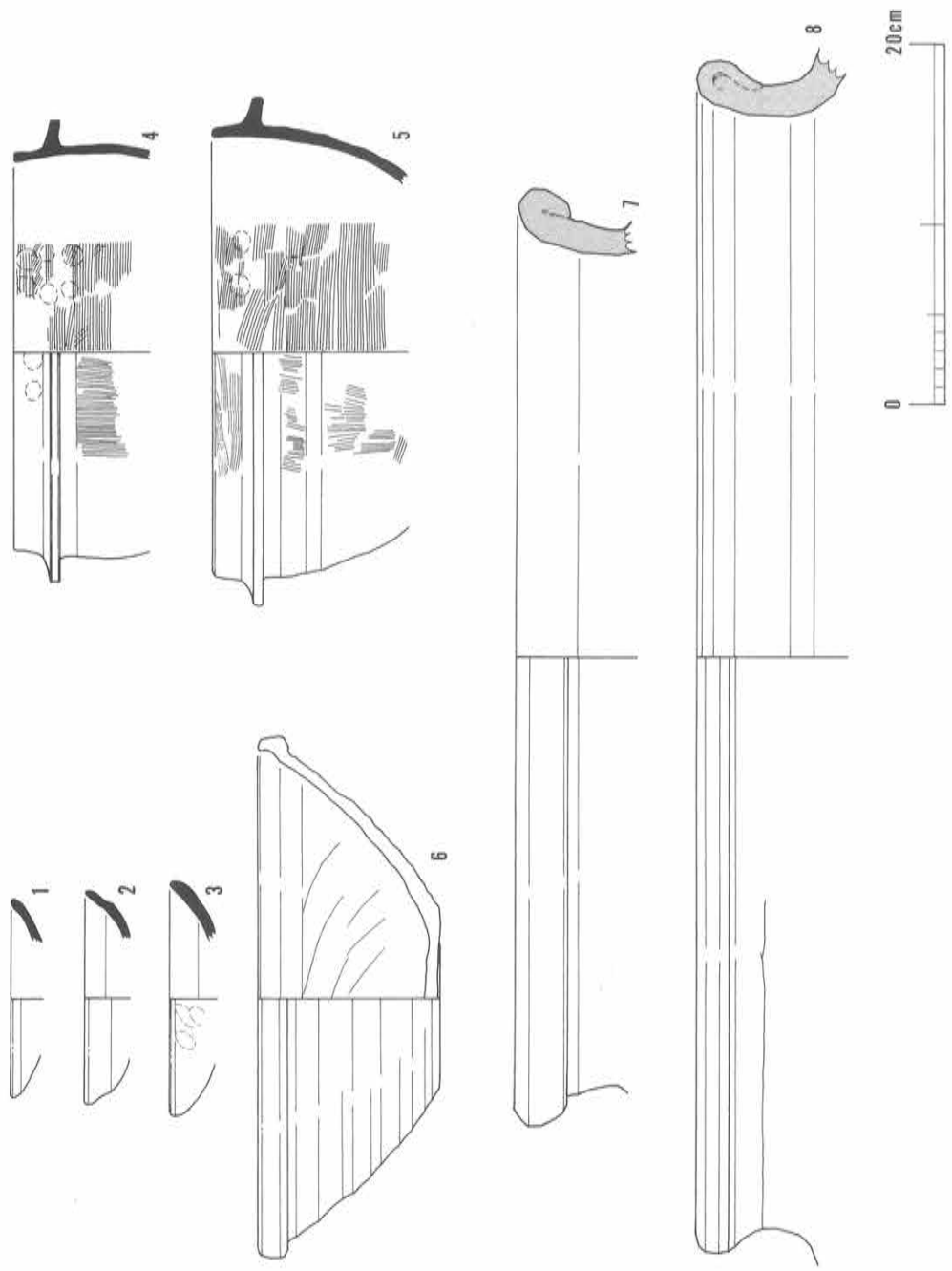
S<sub>2</sub>SK07



S<sub>2</sub> 集石土壙

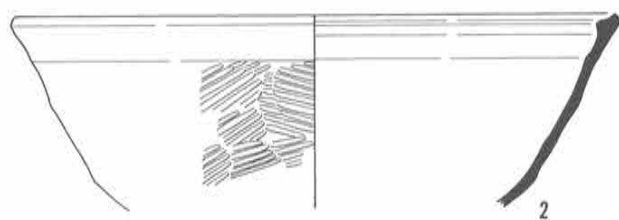
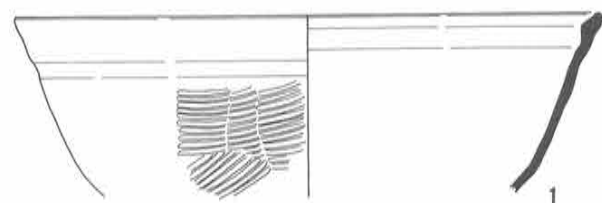


挿圖223 S<sub>2</sub>SK04・SK05・SK07集石土壙土器

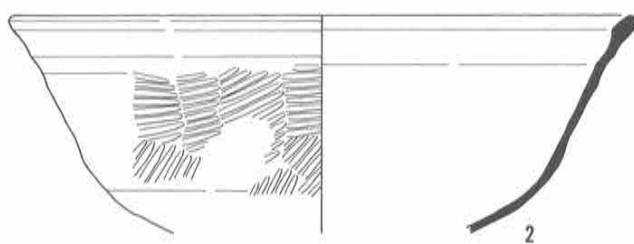
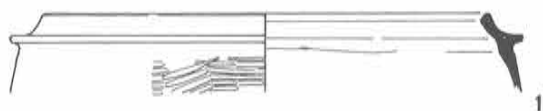


挿図224 S<sub>1</sub> II SK42土器

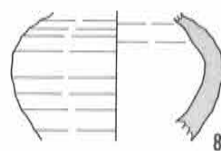
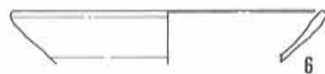
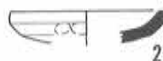
S<sub>3</sub>SK48



S<sub>3</sub>SK49



S<sub>3</sub>SK58



• C 12



挿図225 S<sub>3</sub>SK48・SK49・SK58土器



S<sub>3</sub>SD16の時期にまた鍋の組成として組み込まれるものが二種類ある。一つは袋状の鍋43（挿図230）と鉢状の鍋49～54（挿図231）である。いずれも口縁部を除くと底から体部に成形時の平行タタキ痕を残している特徴的な鍋である。43は14世紀前半のN<sub>2</sub>BSK11の46の系統であるが口径18.6cm、胴径23.2cmを測り、口縁部が短く、口縁内面の端が丸く肥厚する鍋である。一方52は口径33.1cm、器高12.5cmを測り、口縁部が最大径で鉢形に開く鍋で14世紀末から15世紀初頭にかけて出現する鍋で、以後法量を減じ、口縁部形態の変化を生みながら変化する鍋である。口縁部は52・53・54に見られるような変化に富む。S<sub>3</sub>SK48・S<sub>3</sub>SK49では口径30.8～32.4cmを測る（挿図225）。S<sub>1</sub>SD01の11・12のよう口径27cm、器高10cmと法量が小さくなり、口縁部も外へ肥厚するものが出現する（挿図247）。また東西堀の5・6も口径27cm前後、器高10cmを測る（挿図251）。

### 3. 瓦器

瓦器は供膳具の皿（小皿）・椀、煮炊具の鍋・羽釜と調理具の鉢などと香炉・風炉・火鉢があり、ここでは供膳具の皿（小皿）・椀、煮炊具の鍋・羽釜について述べる。

皿（小皿）・椀は既に述べているように13世紀代の大坂南部和泉産の製品がある。須恵器椀・皿を補完するように僅かにS<sub>3</sub>I面一括やS<sub>3</sub>II SK03、N<sub>3</sub>SD06などで出土する（挿図180・183・259）。

#### 鍋・羽釜・鉢

羽釜については、S<sub>3</sub>SK98の17は口径23.4cm、鏝径26.8cm、鏝高1.6cmを測り、土師器羽釜の模倣である。また、須恵器鉢模倣の口径33.8cmと大きい鉢19を伴う（挿図186）。

S<sub>2</sub>SK07では鉢は口径24.1cmを測り、13世紀代の土師器羽釜に伴う（挿図223）。

C<sub>1</sub>SK15からは鉢11と鍋15がある（挿図219）。11は口径29.0cm、15は口径38.9（やや復原径が大きい）を測る。14世紀代に属する。

N<sub>3</sub>SK14の2は口径25.3cm、口縁直下の鏝径29.6cm、鏝高1.2cmを測る（挿図208）。

S<sub>3</sub>SD16からも45～48の羽釜が出土しており、口径は28.2～33.5cmを測り、鏝も口縁直下につける。14世紀末から15世紀初頭にかけての羽釜である。

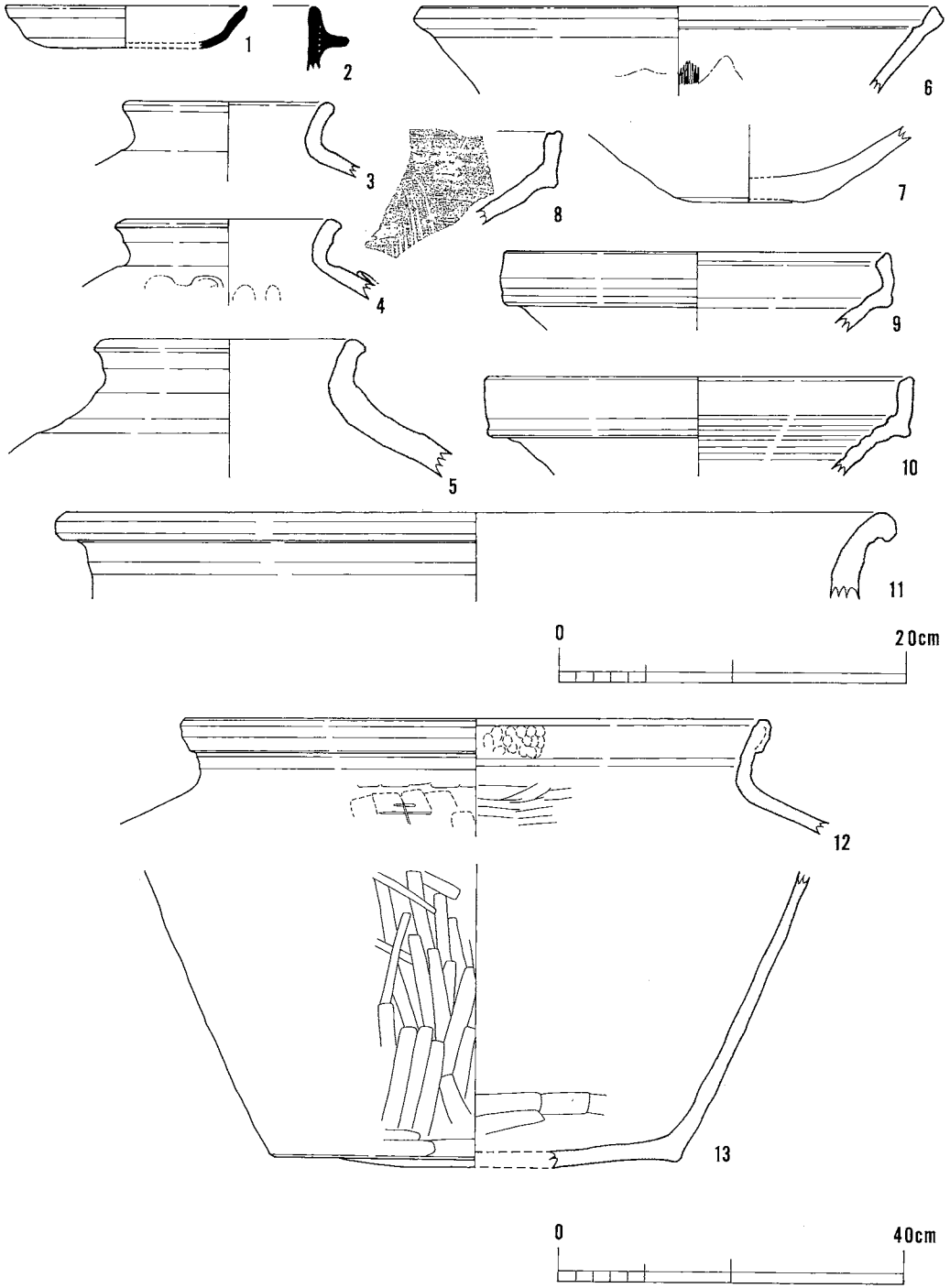
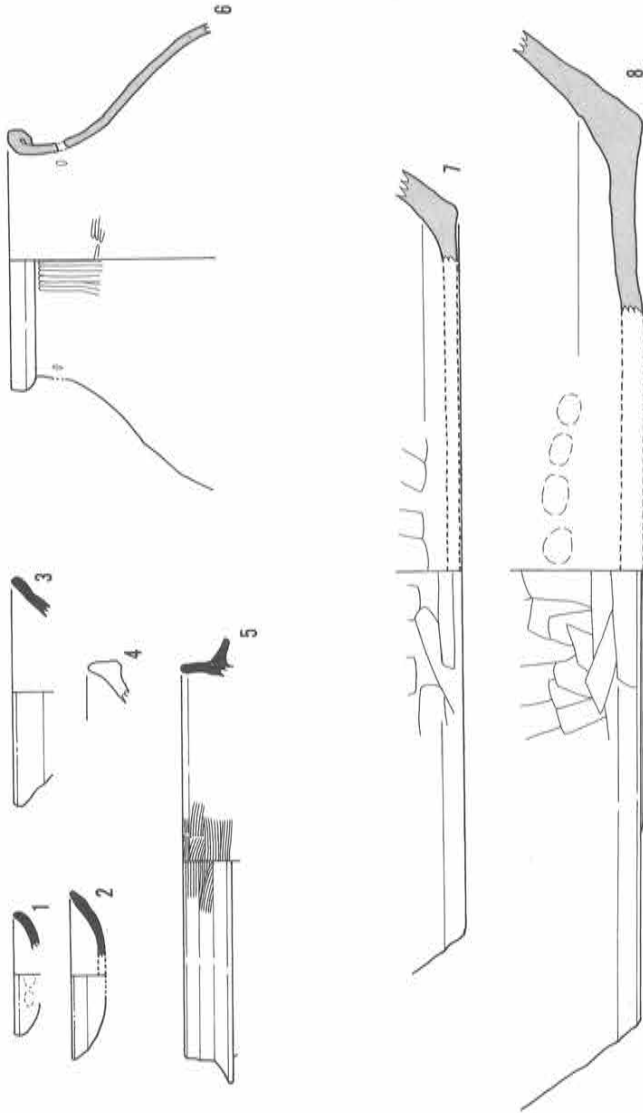


插图226 SE01土器



• C 191

插图227 SE02土器

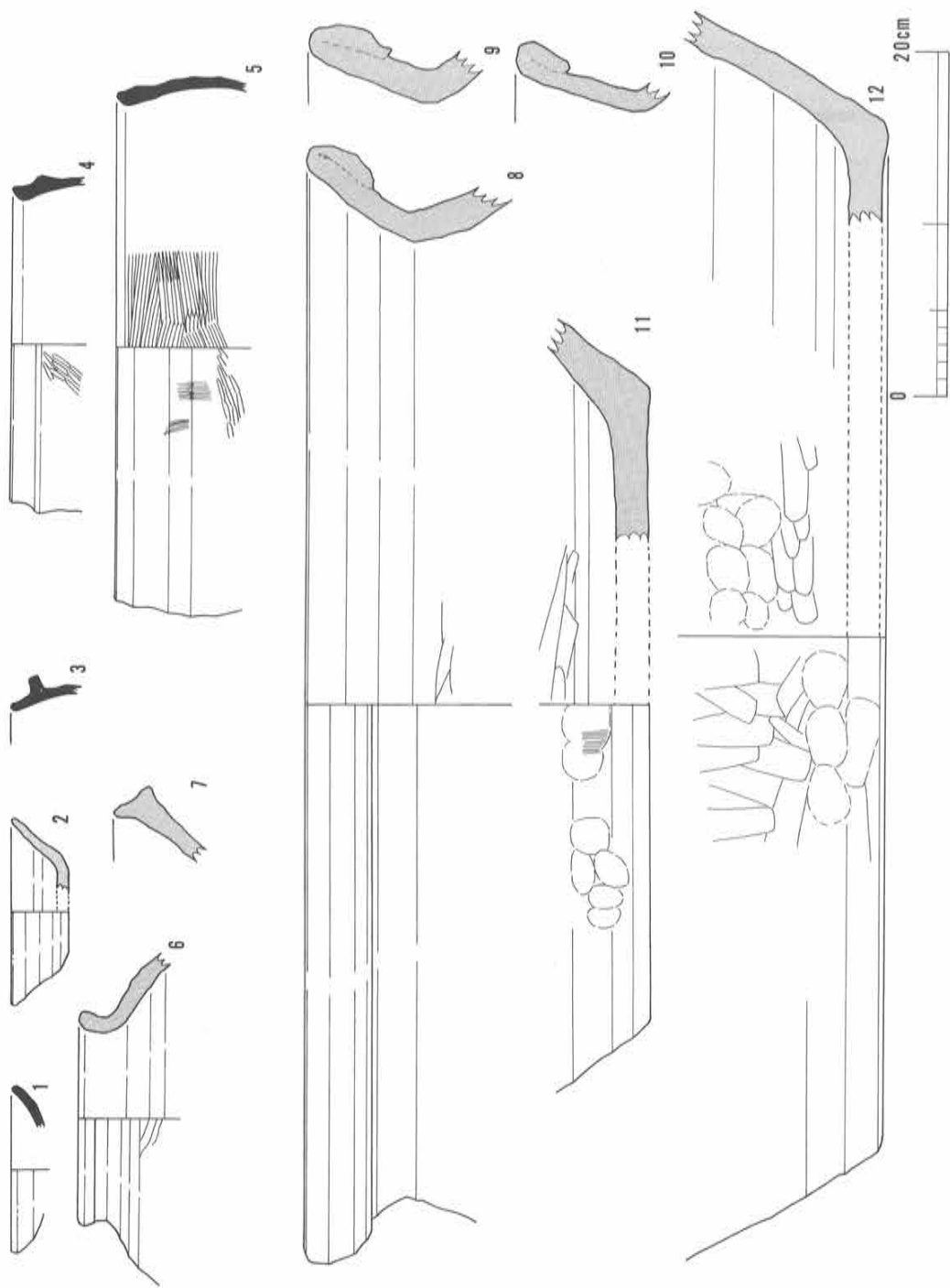
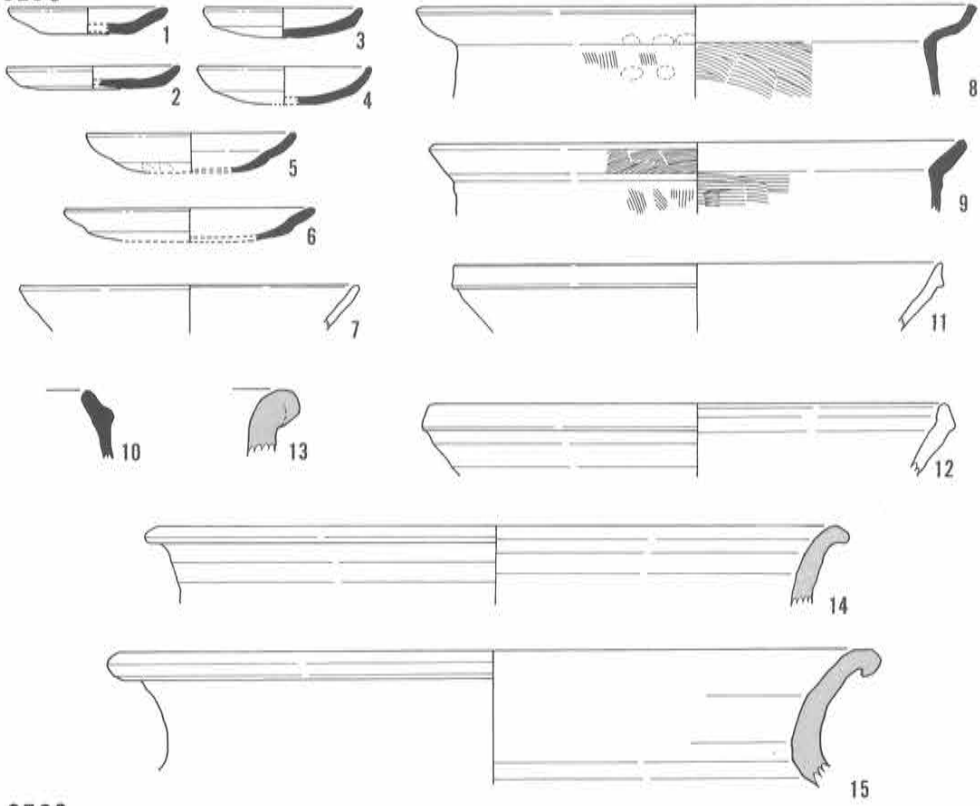


插图228 SE03土器

SE05



SE06

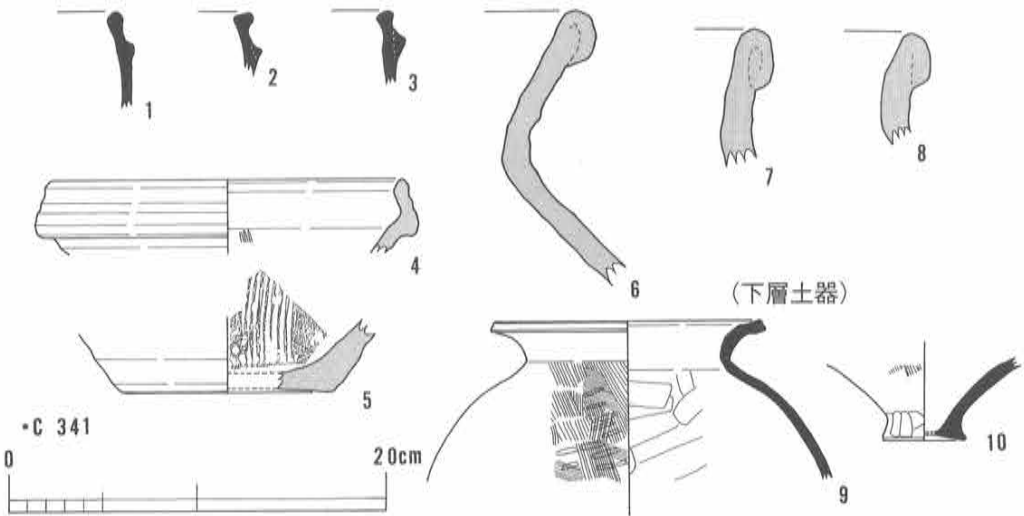
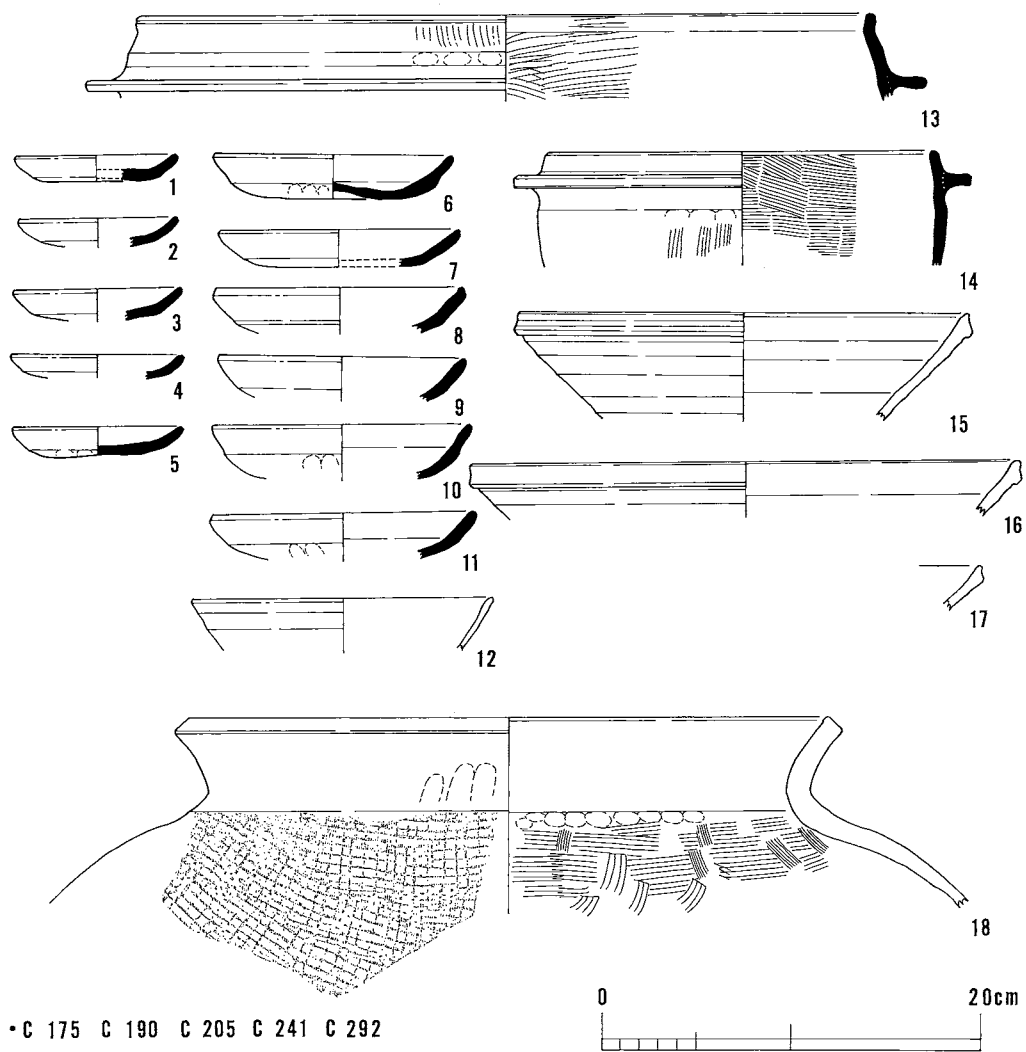


插图229 SE05・SE06土器



挿図230 SE08土器

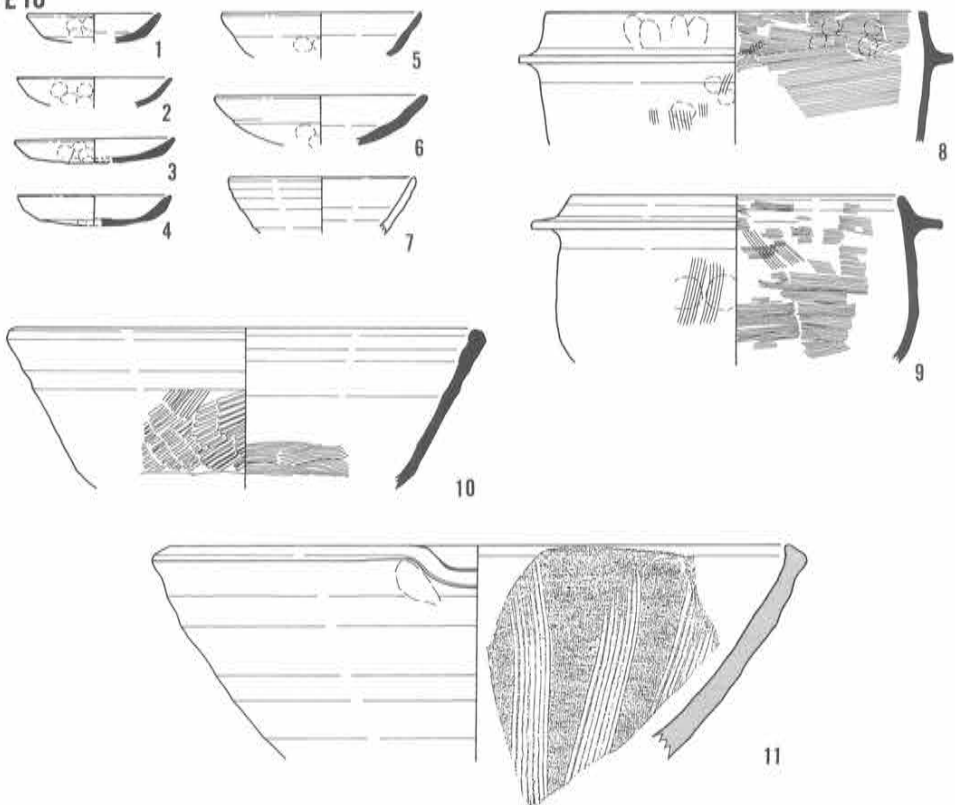
(4) 国産陶器

備前焼

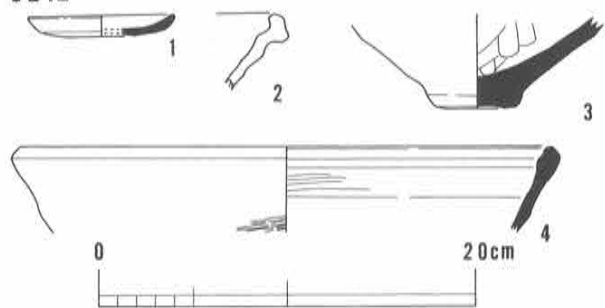
備前焼は西播磨地域では備前焼編年研究のⅢ期（14世紀代）からは多くの出土が知られるが、本遺跡ではすでにⅠ・Ⅱ期の碗・鉢・壺・甕の器種が出土おり、Ⅲ期以降には多量の出土をみる。

碗はNiSD3044の6・7で口径13.9～15.0cm、器高4.9～5.1cmを測り、平底を呈する白色の胎土が精選されており、他の播磨産の須恵器碗とは異なり、備前焼系とする（挿図188）。

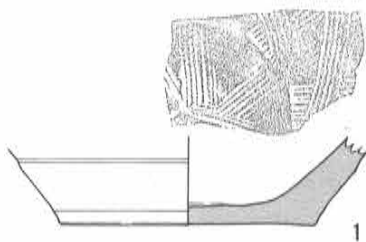
SE10



SE12



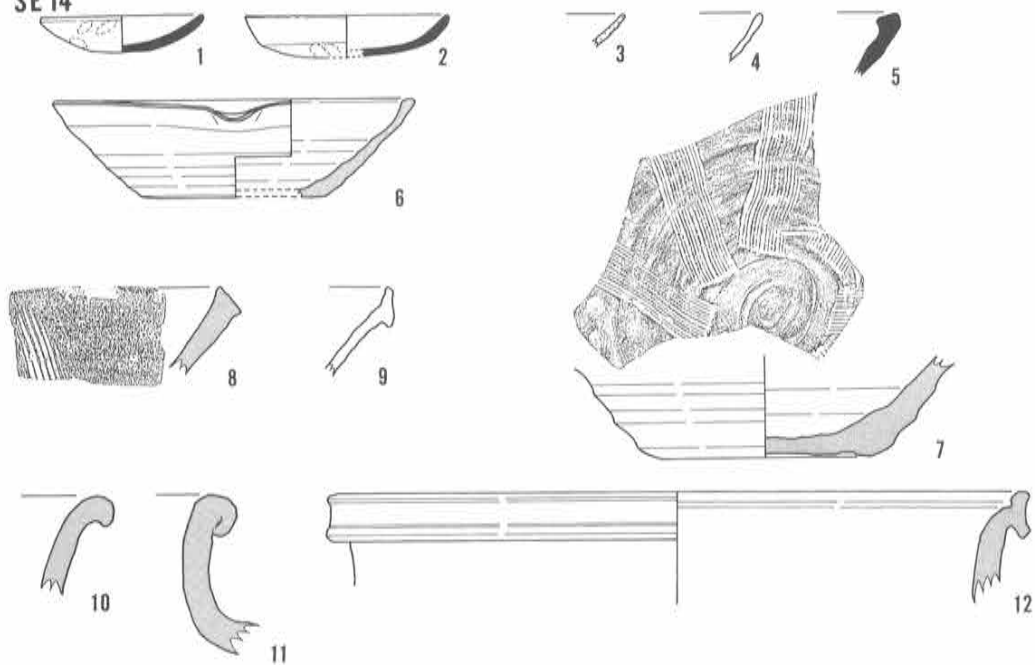
SE13



•C146

插图231 SE10・SE12・SE13土器

SE 14



SE 16

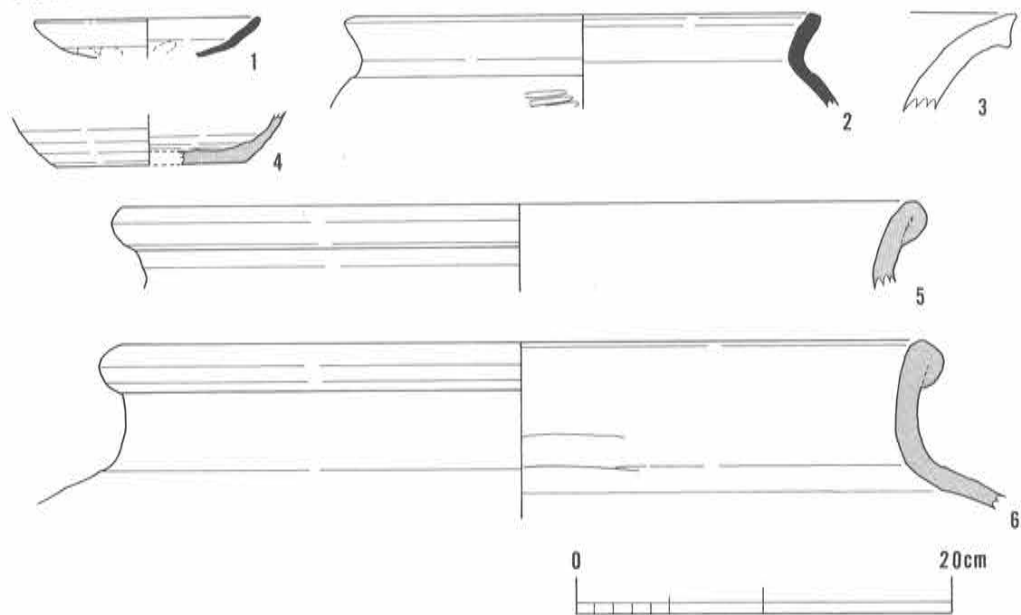
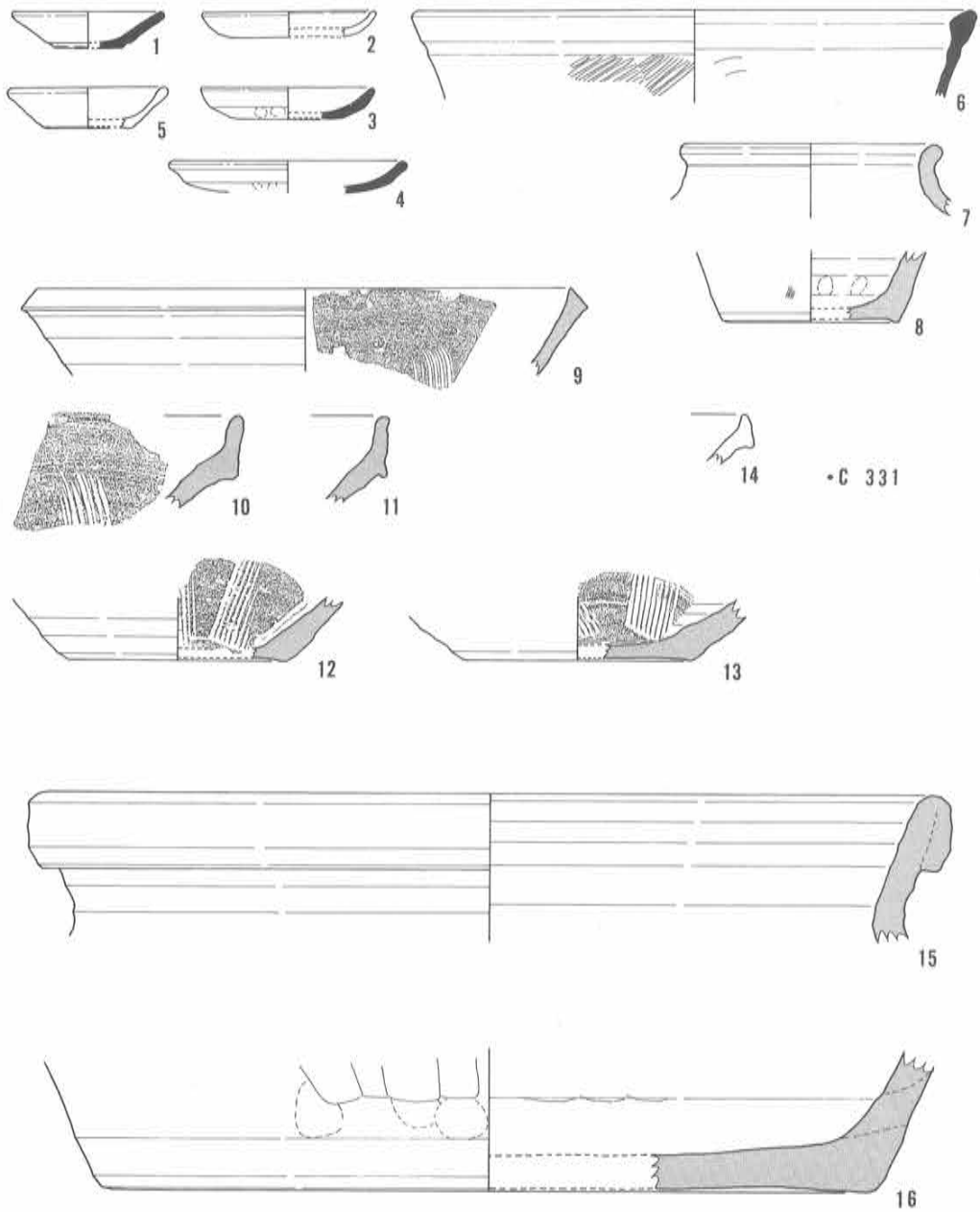


插图232 SE14·SE16土器





挿図233 SE18土器

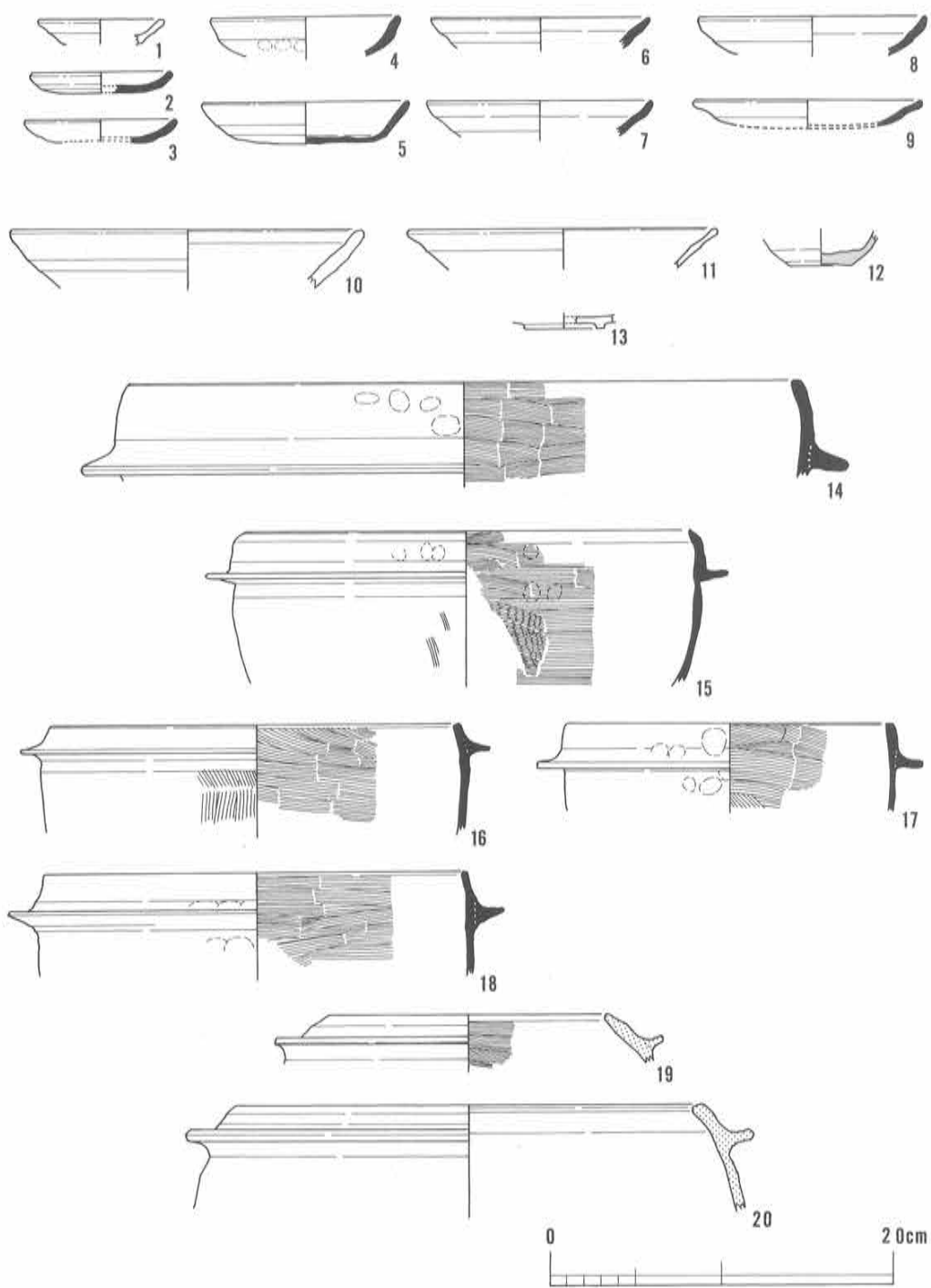


插图234 SE19土器 (1)

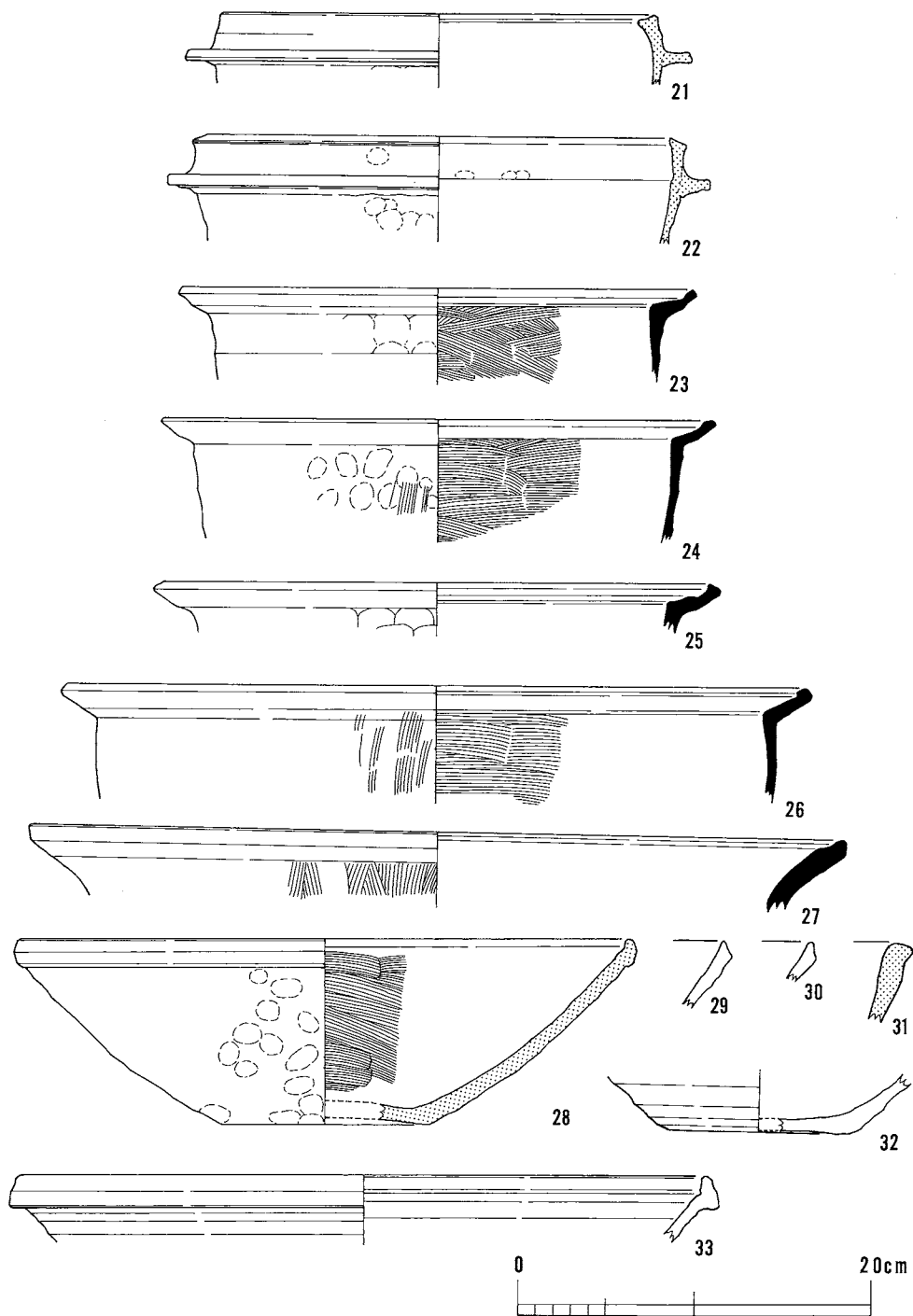


插图235 SE19土器 (2)

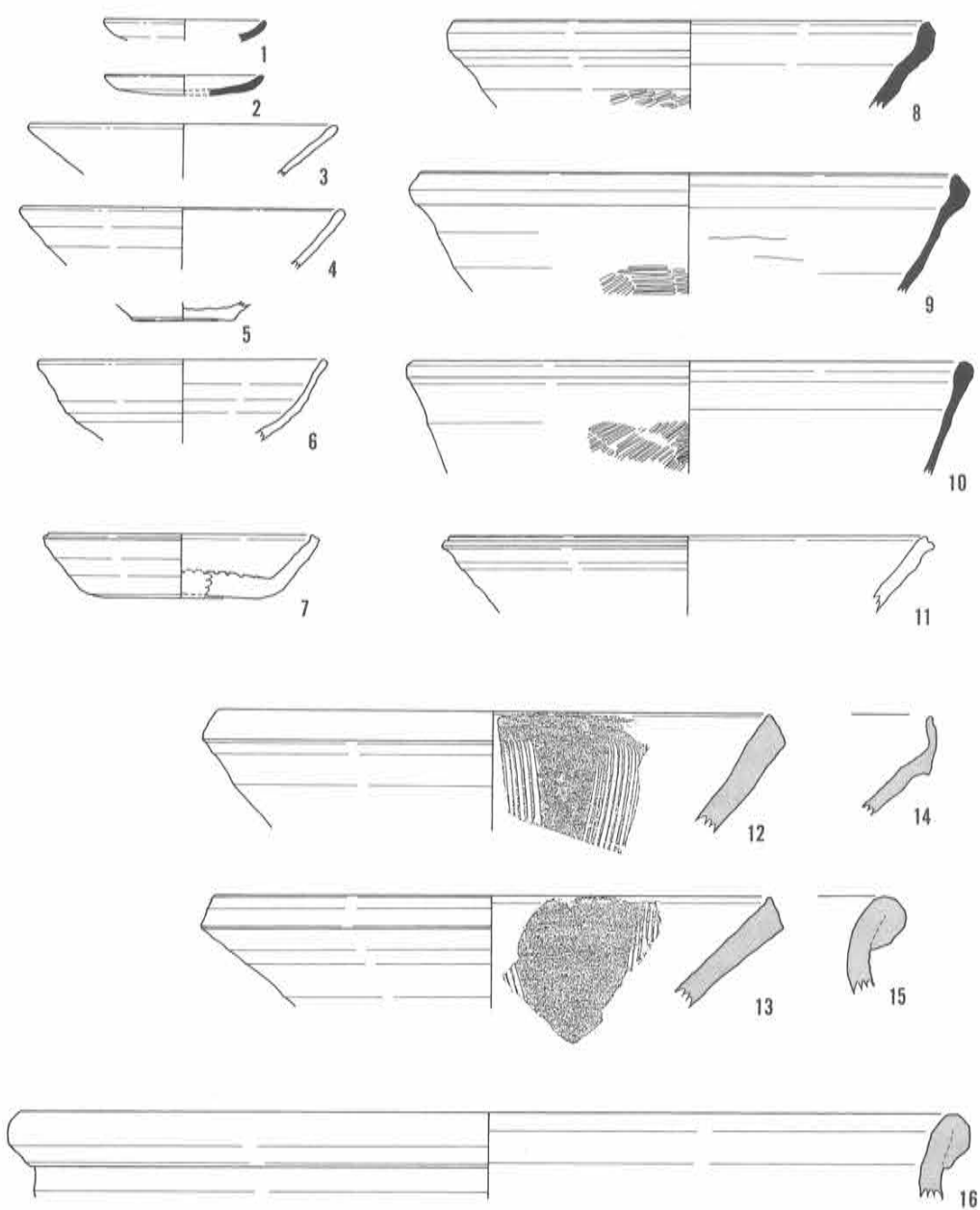


插图236 SE20土器

鉢はS<sub>3</sub>地区南の下層切り合い溝から出土した古相の7・8・13・14がある(挿図237)。いずれも破片ではあるが、特に7・8は櫛描きではなくヘラで斜格子気味におろし目を描き、口縁は水平に作る。器壁も薄く、7は体部が丸い。備前焼研究の中では位置づけられていないが櫛描き以前の初期備前焼播鉢としたい。つづいて櫛描きの播鉢13・14がある。

SE10の11は口径32.5cm(挿図231)を測るⅡ～Ⅲ期の播鉢である。

Ⅲ期以降の播鉢については、N<sub>2</sub>BSK11の47(挿図192)は口径27.0cmの片口部で口縁を水平気味に端部を鋭く仕上げる。C<sub>2</sub>SD04の20は口径29.0cmを測り、口縁部がやや水平から斜めに仕上げられる(挿図274)。

Ⅲ期からⅣ期にかけての播鉢はS<sub>3</sub>SD16の1～5があり、1は口径30.6cm、器高12.7cmを測り、3は口径28.6cm、器高10.6cmを測る(挿図212)。1は口縁を斜めに作り、体部は丸い。3は口縁は同じく斜めに作り出し、内面にやや肥厚し、体部は直線的に広がる。1はⅢ期、3はⅣ期Aに属する。

Ⅳ期の播鉢はⅣ期A・Ⅳ期Bに分かれる。

Ⅳ期Aについて、C<sub>1</sub>SD17の12は口径32.0cm、器高(7.0cm)を測り、七条の櫛で摺り目を施している。口縁は斜めに切り、端部が少し膨らむ。S<sub>3</sub>SD16の58は口径26.0cm、器高(7.5cm)を測り、口縁は断面三角形となり上方へのびる。櫛は七条で交差しながら施文する。

Ⅳ期Bの播鉢はC<sub>1</sub>SD16の5・6で口縁は断面三角形から上方拡張し丸く収まり、5は口径23.2cm、器高7.6cm、底部12.8cmを測り、櫛描きで刷り目を描く。

東西堀の18は口径17.6cm、器高6.8cm、底径10.4cmを測る小型の播鉢で七条の櫛で摺り目を施している。

#### Ⅳ期・Ⅴ期播鉢

C<sub>1</sub>内堀の播鉢にはⅢ期・Ⅳ期A・Ⅳ期B・Ⅴ期の各時期の摺り鉢を伴うが、36は口径28.2cm、器高12.1cm、底径13.1cmを測り、口縁が端部が垂れ、上方に拡張するⅣ期Bに属する。また37・38は口縁が内へ折れ、上方へ内湾気味に拡張される。口径は28.0・27.7cmを測る。

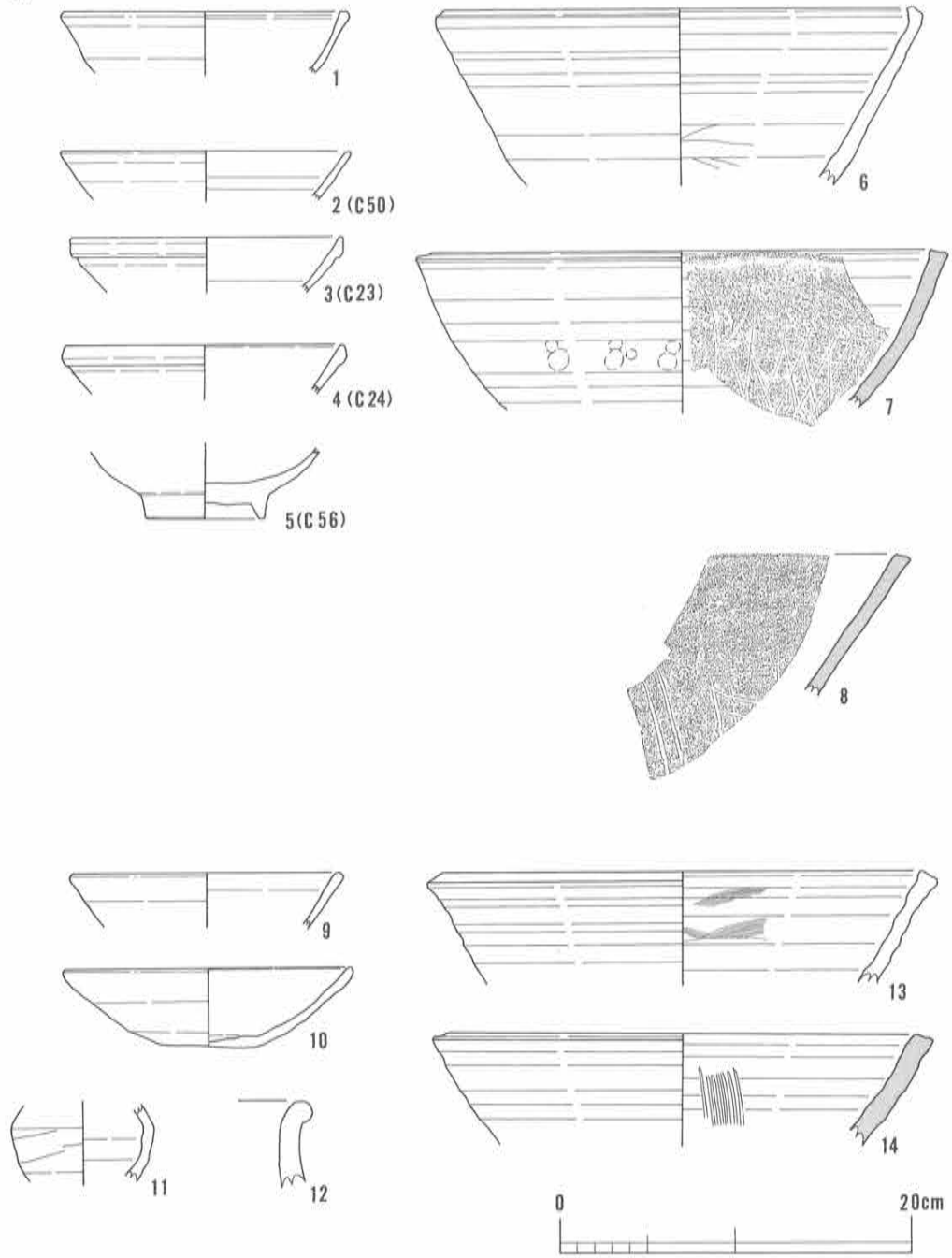
S<sub>1</sub>SD01の17～19、21～26は播鉢で、17は口径21.0cm、器高9.3cm、底径10.8cmを測り、口縁は内斜め方向は延び、一条の凹線上に凹む小型の播鉢である。18は口径27.0cm、器高11.3cm、底径12.0cmを測り、口縁は内湾気味に上へ拡張し、外面は二条の稜線状に引き上げている。19は口径27.8cm、器高13.6cm、底径14.5cmを測り、口縁は内斜め上方へ拡張し、外面は三条の凹線状に仕上げている。十条の櫛で11単位で摺り目を底体部区画から左周りに口縁へ描いている。

片岡庄堀の14は口径19.8cm、器高9.2cm、底径9.6cmを測り、口縁はやや内傾気味の上方向へ拡張し、外面は三条凹線で仕上げる。九条の櫛で摺り目を描く。

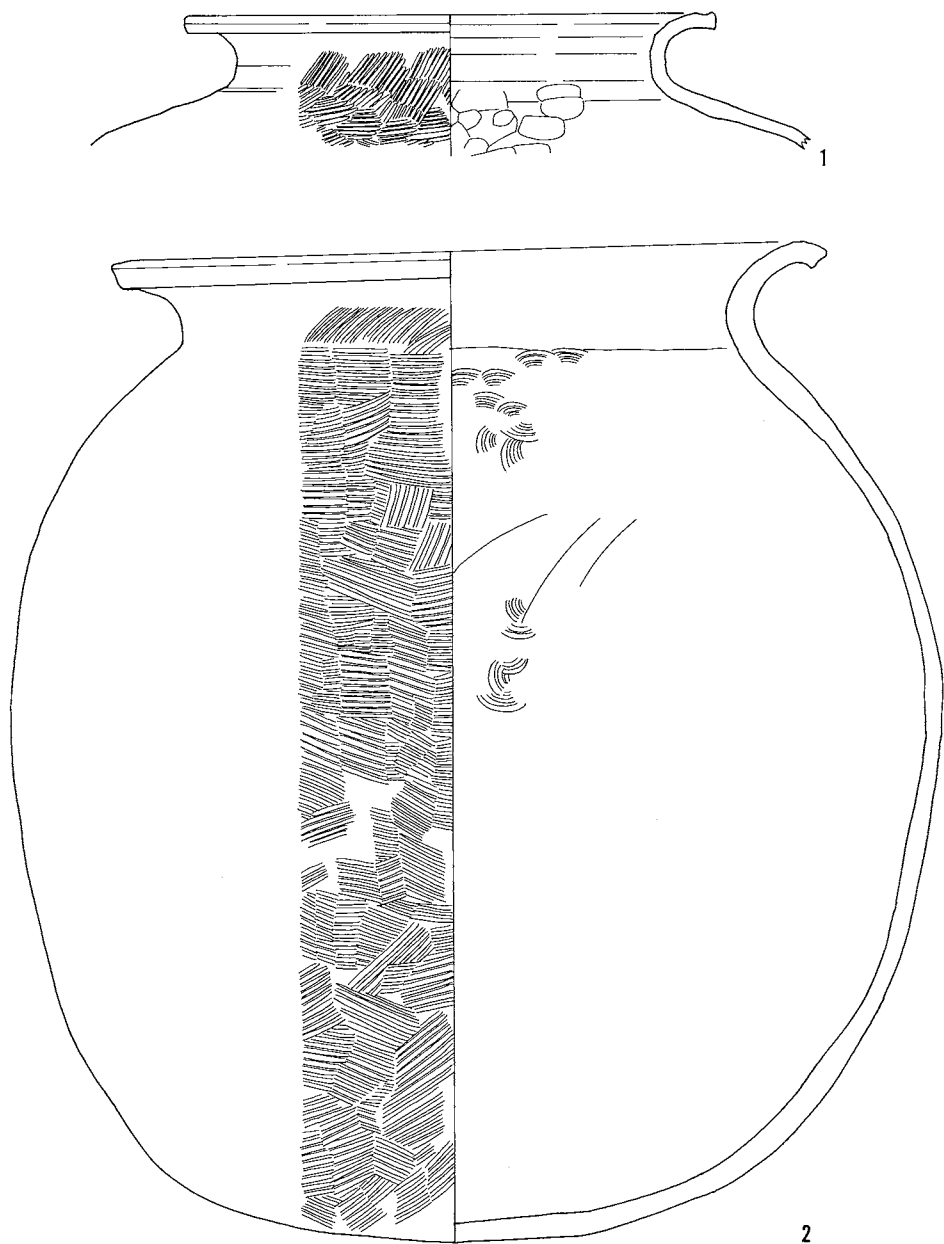
#### 片口鉢

SE14の6は口径18.9cm、器高5.2cm、底径10.0cmを測る片口鉢である。

S<sub>3</sub>



挿図237 S<sub>3</sub>切合溝5・SD02他土器



挿図238 N1SK3065土器 (1)

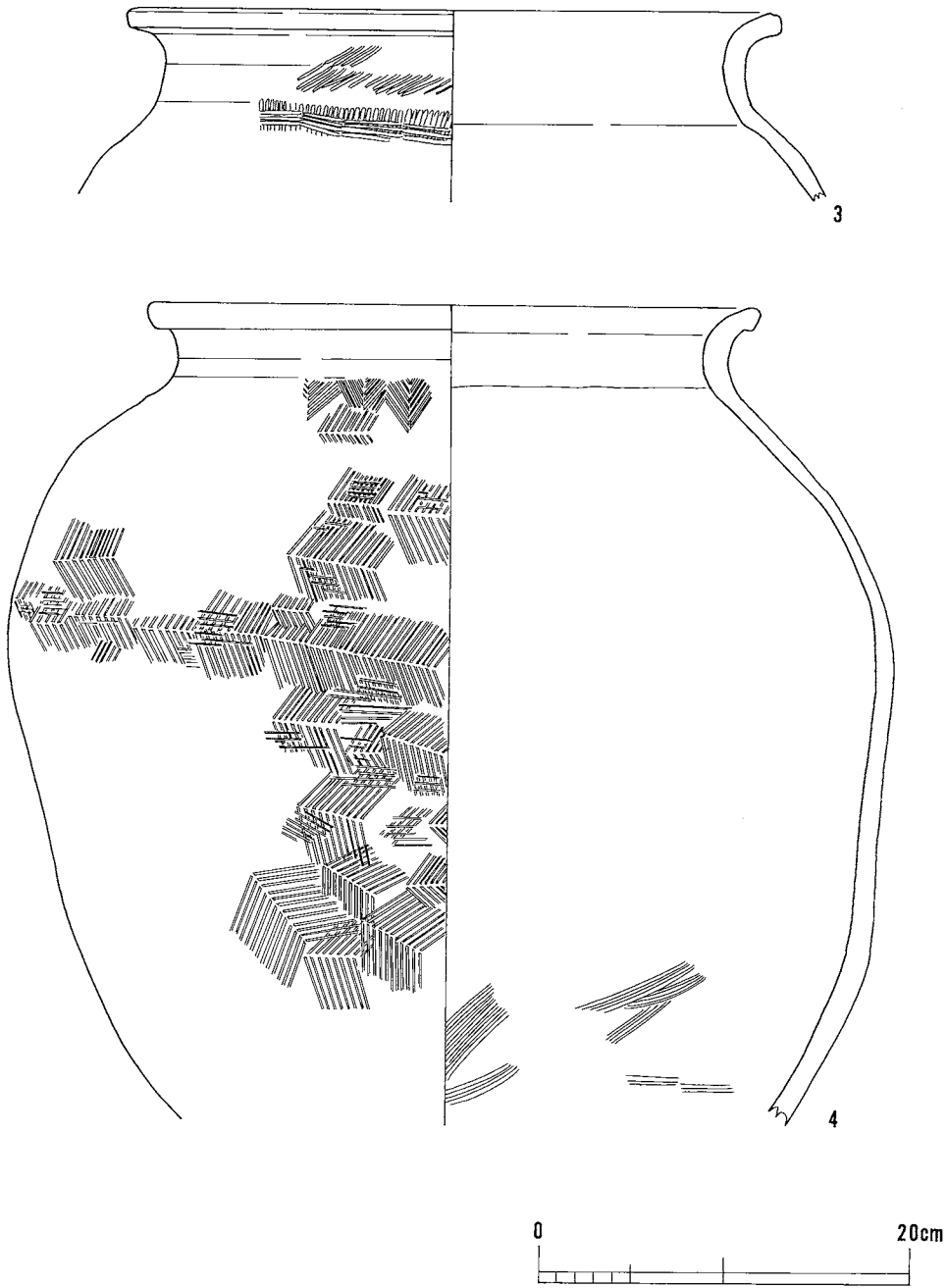


插图239 N<sub>1</sub>SK3065土器 (2)



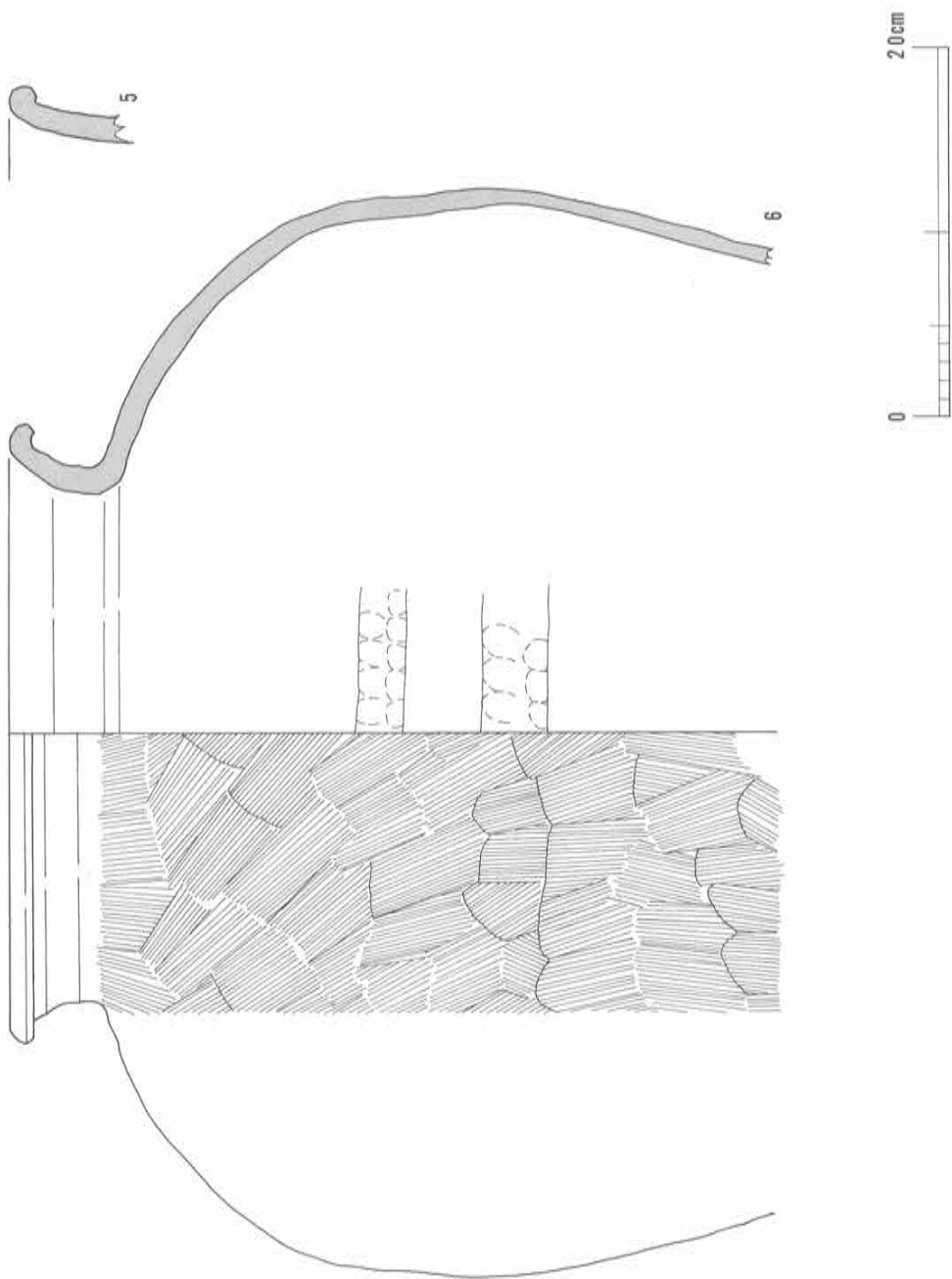
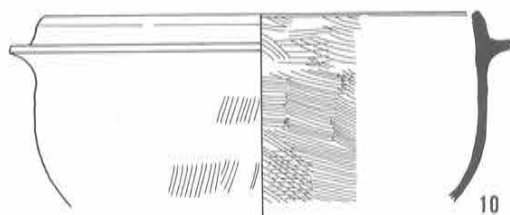
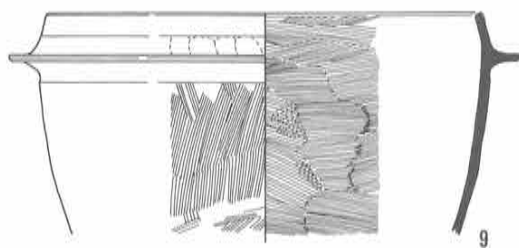
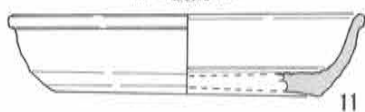
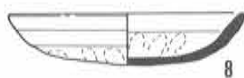


插图240 N1SK3065土器 (3)

N<sub>1</sub>SK3065



N<sub>1</sub>SD3045

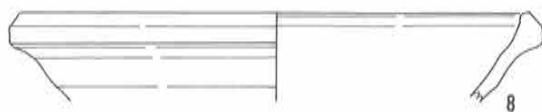
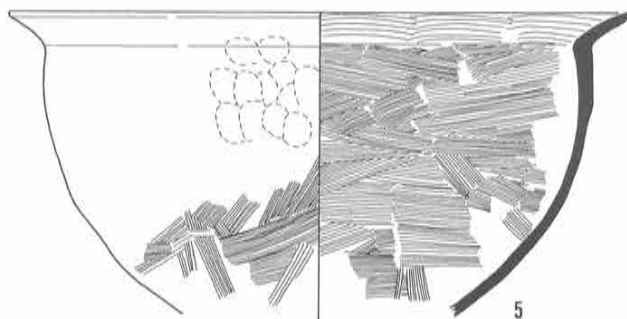
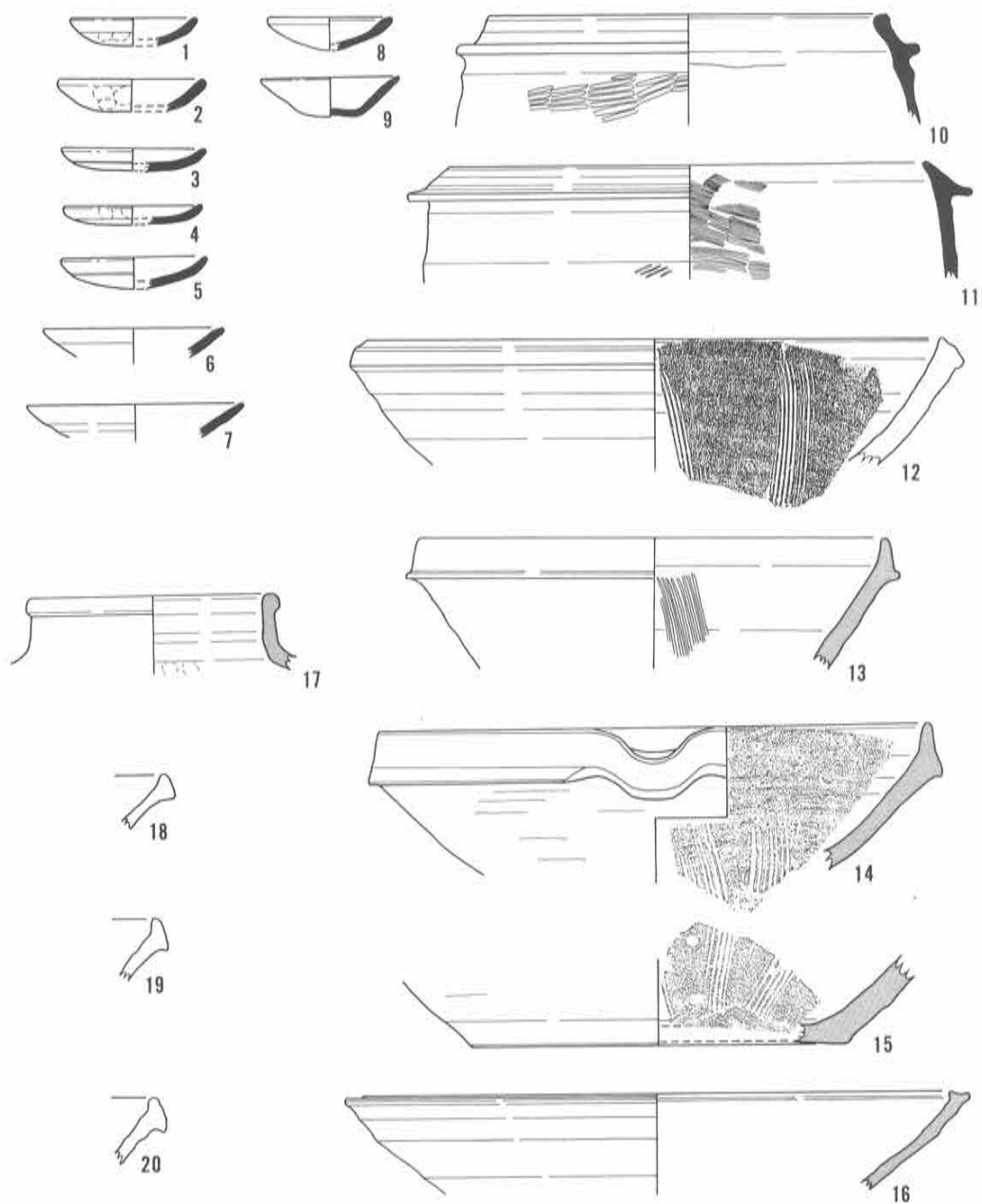


插图241 N<sub>1</sub>SK3065土器 (4) 他



•C127•C186•C266



插图242 C<sub>1</sub>SD17土器 (1)

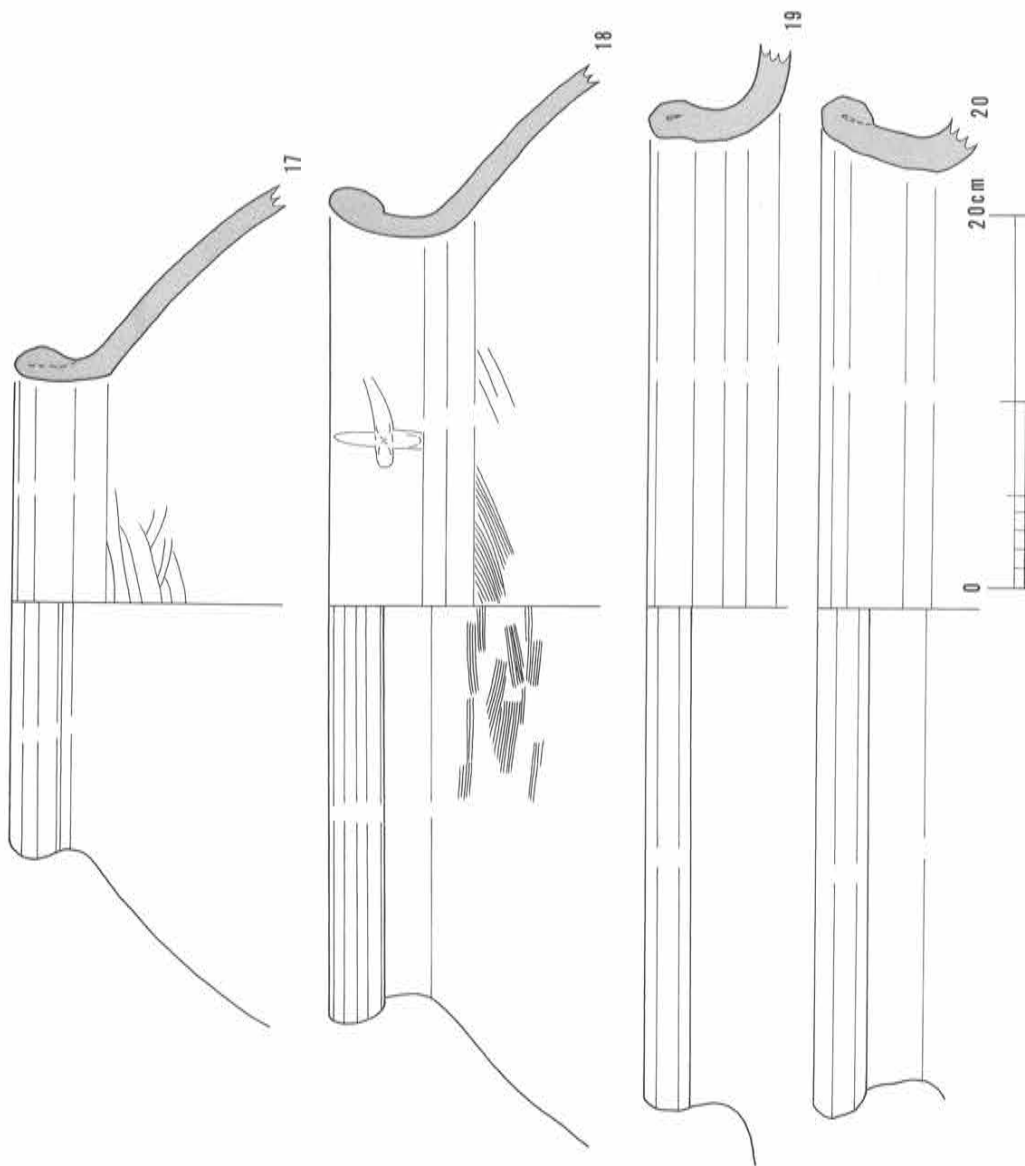


插图243 C<sub>1</sub>SD17土器 (2)

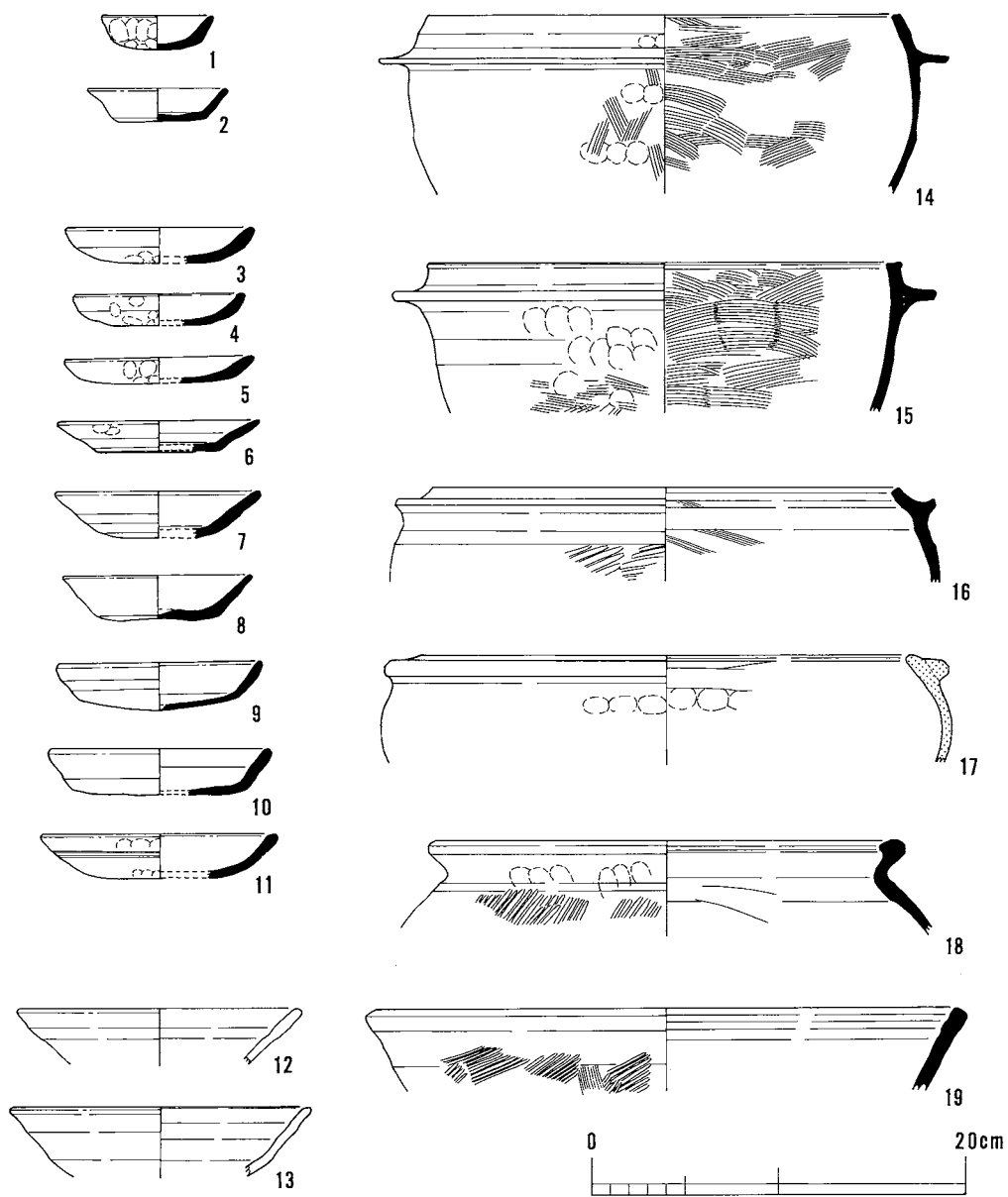


插图244 S<sub>3</sub>SD09土器 (1)

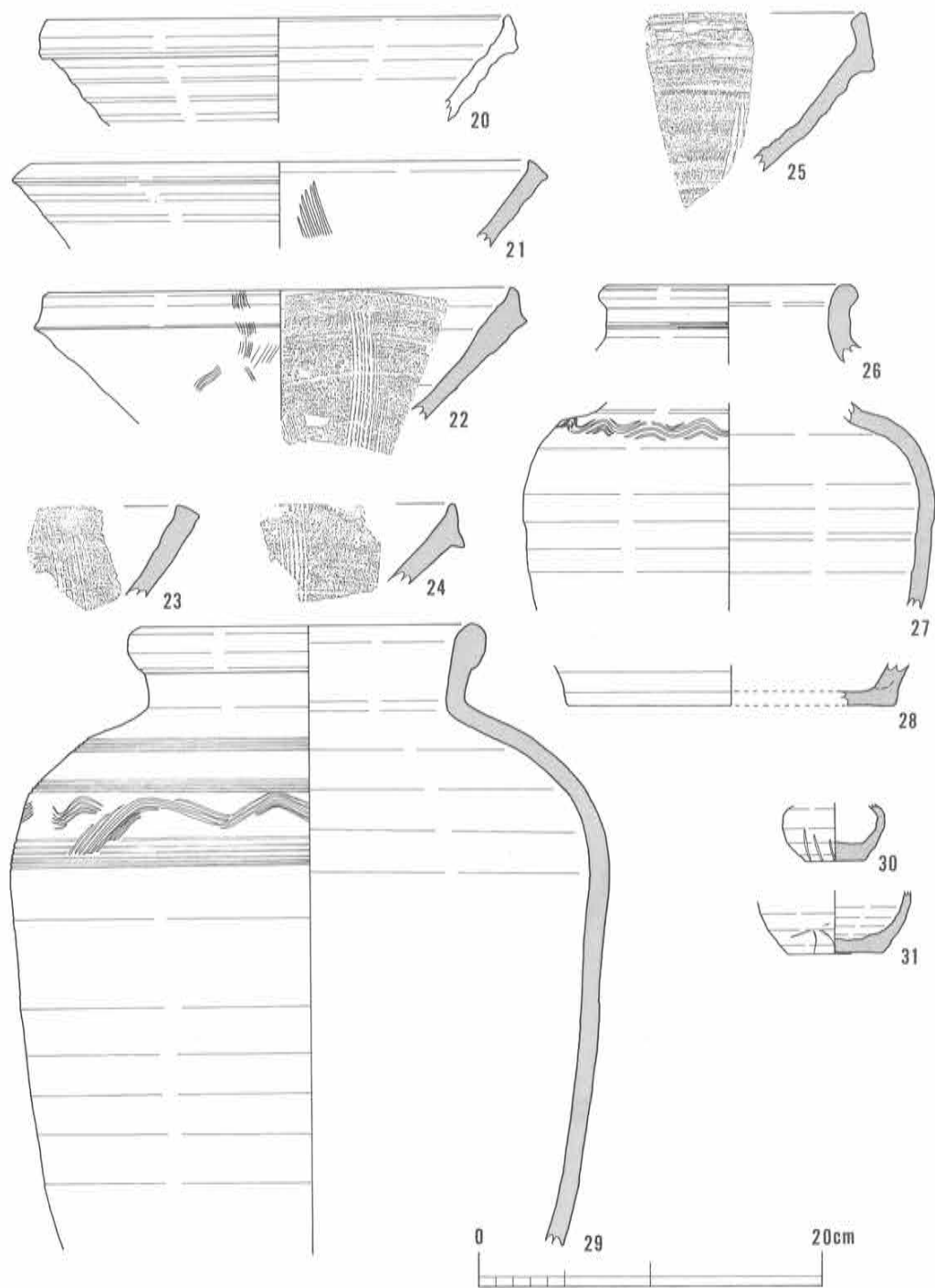


插图245 S<sub>3</sub>SD09土器 (2)

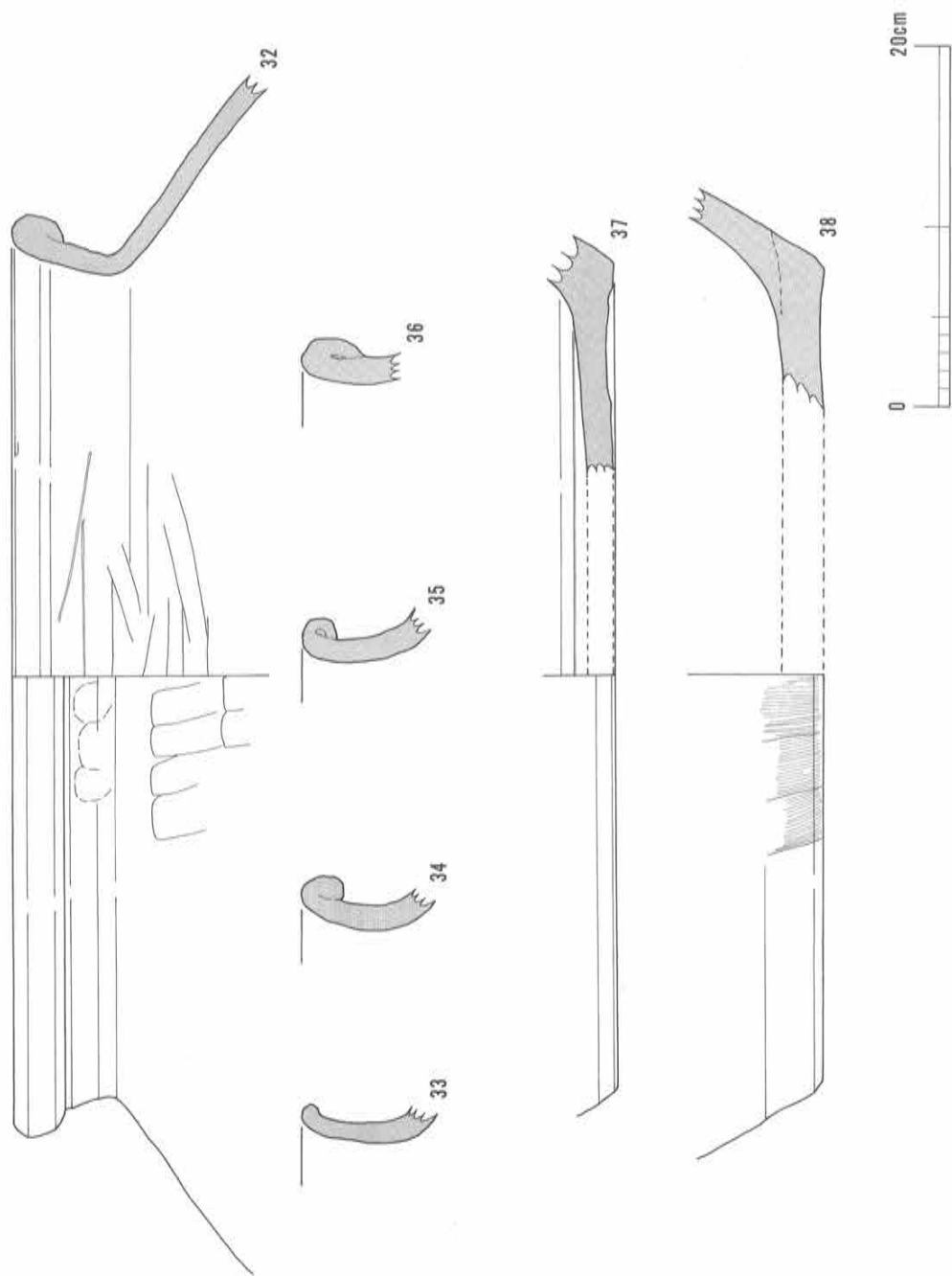
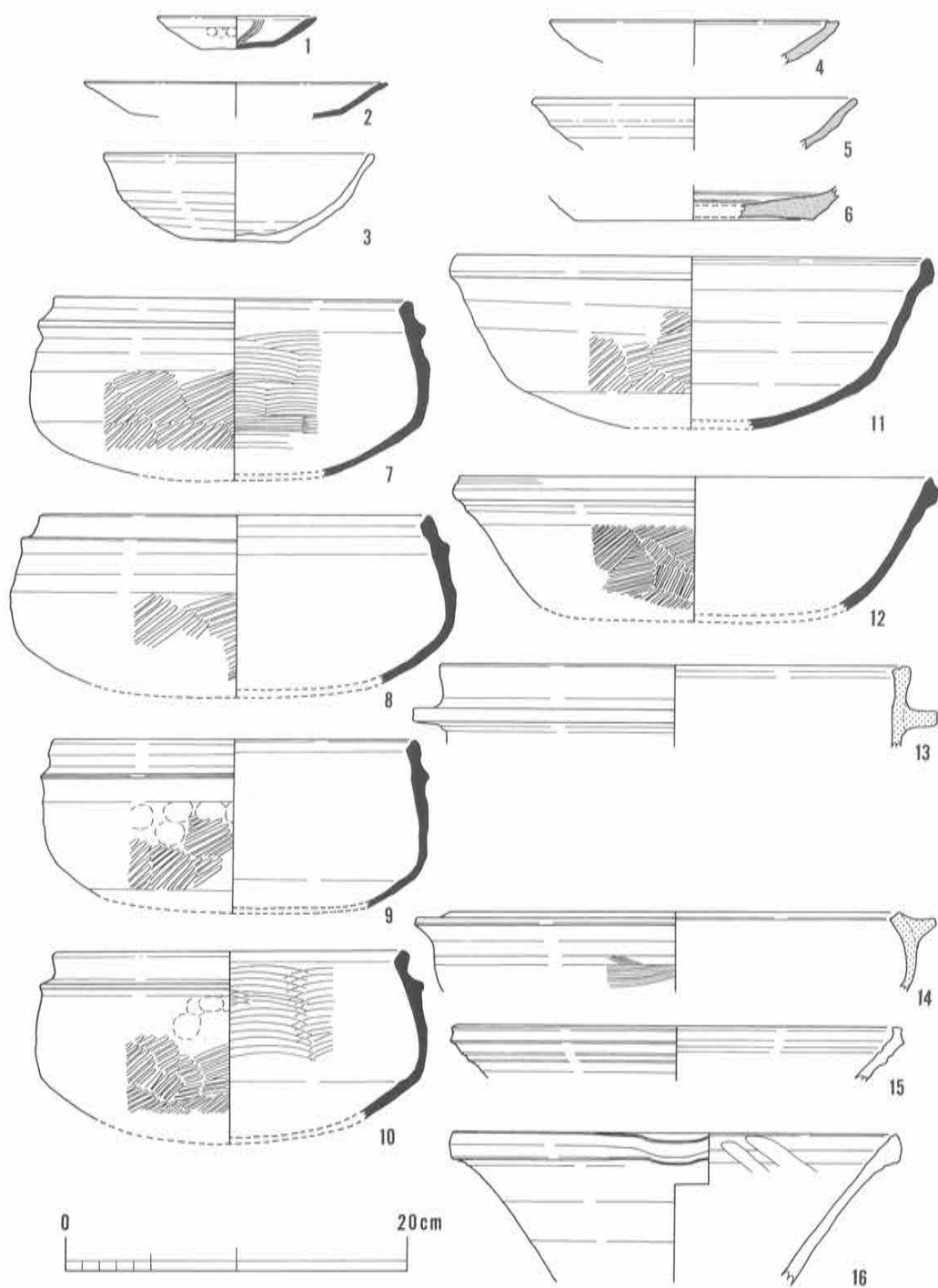
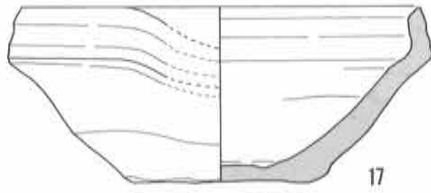


插图246 S<sub>3</sub>SD09土器 (3)

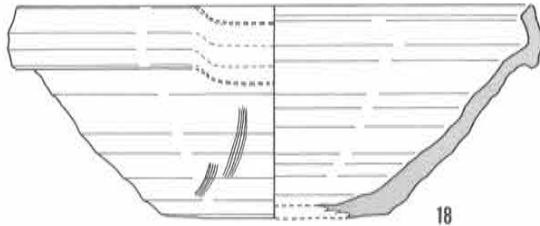


挿図247 S:SD01土器 (1)

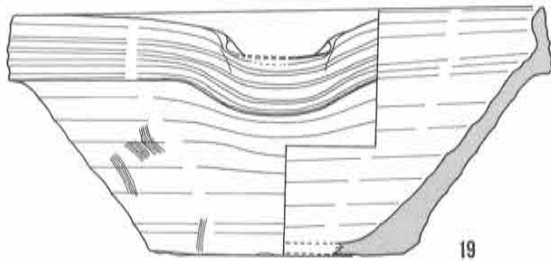
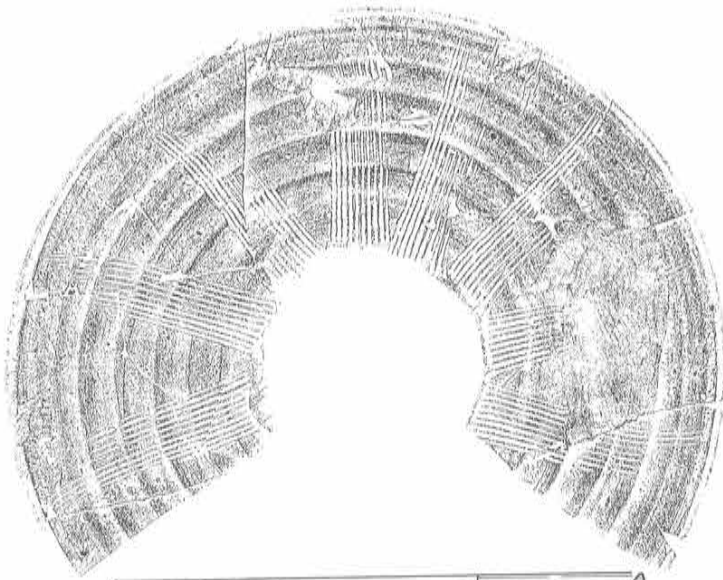




17



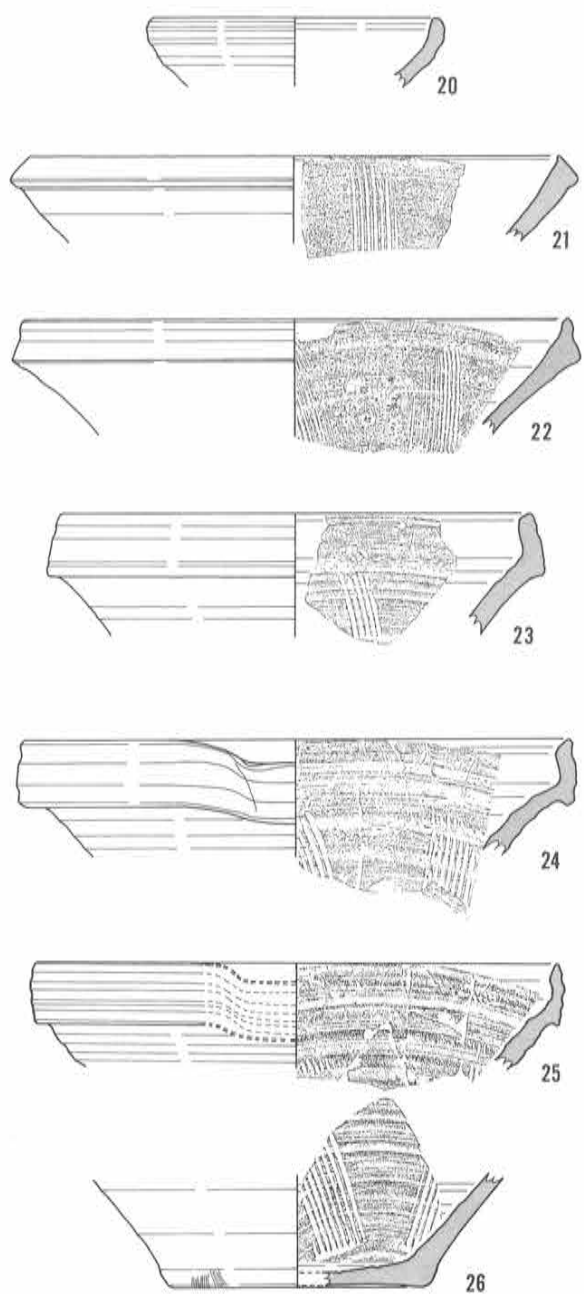
18



19



插图248 S<sub>1</sub>SD01土器 (2)



挿図249 S<sub>1</sub>SD01土器 (3)

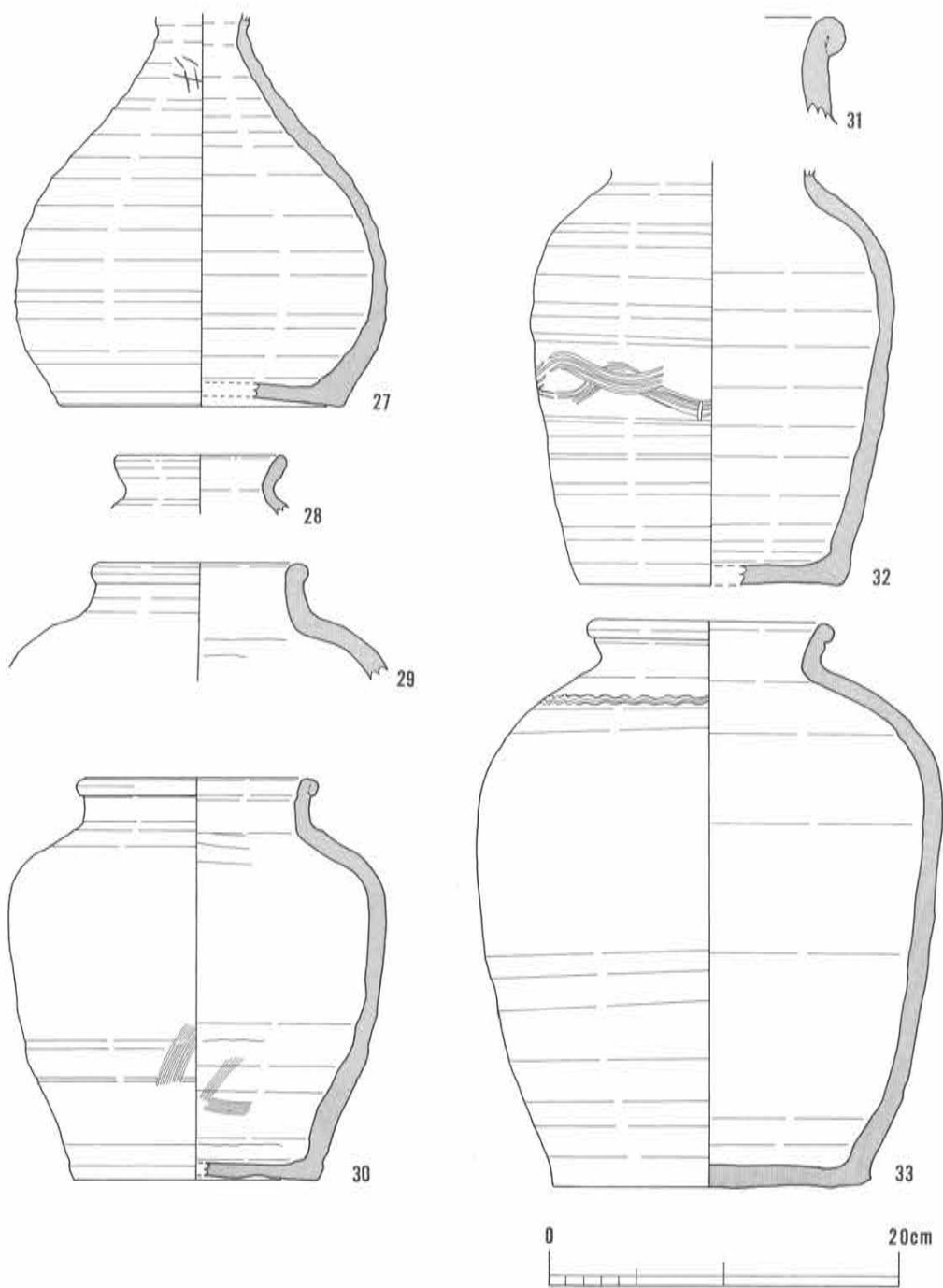


插图250 S<sub>1</sub>SD01土器 (4)

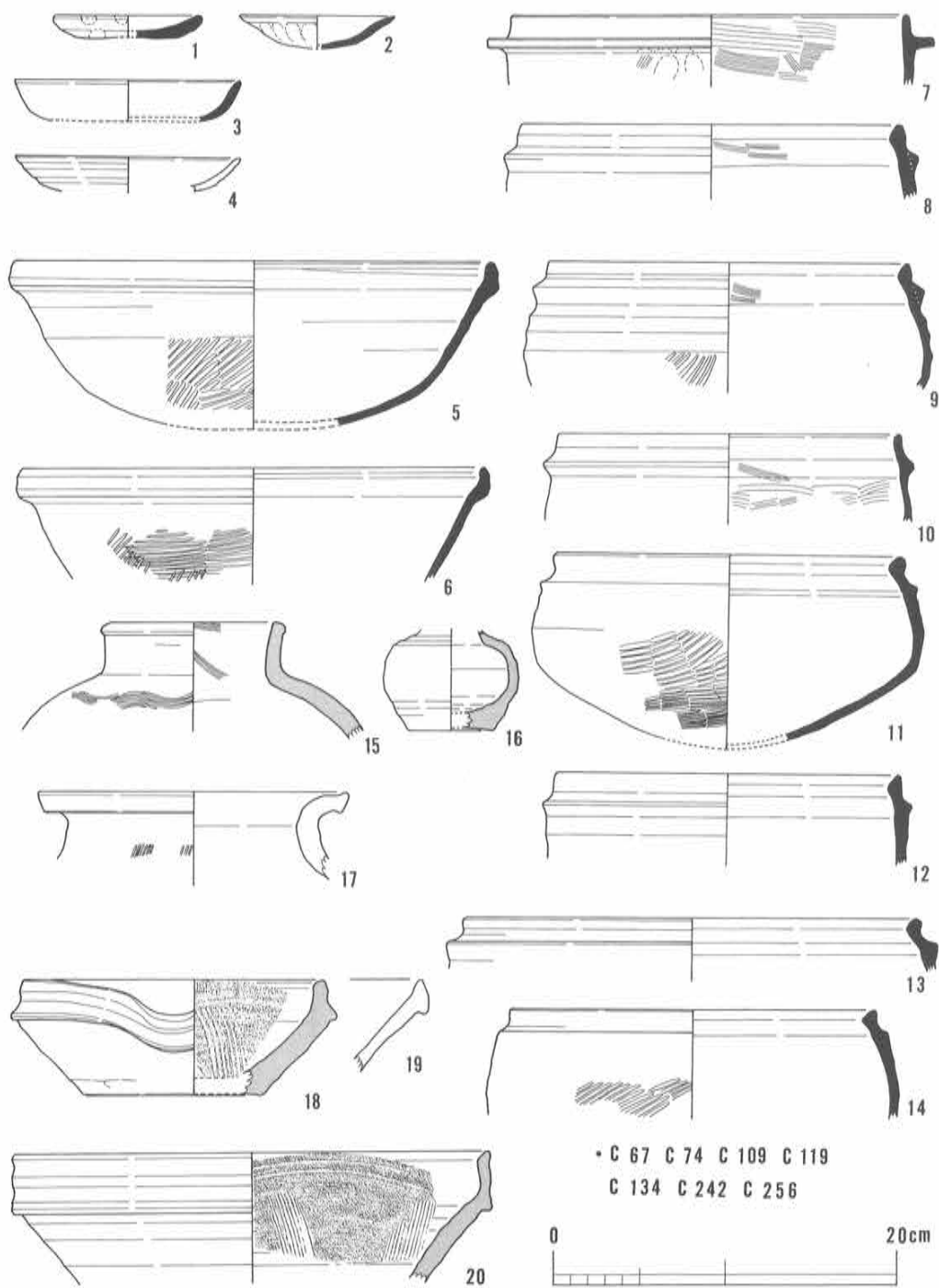
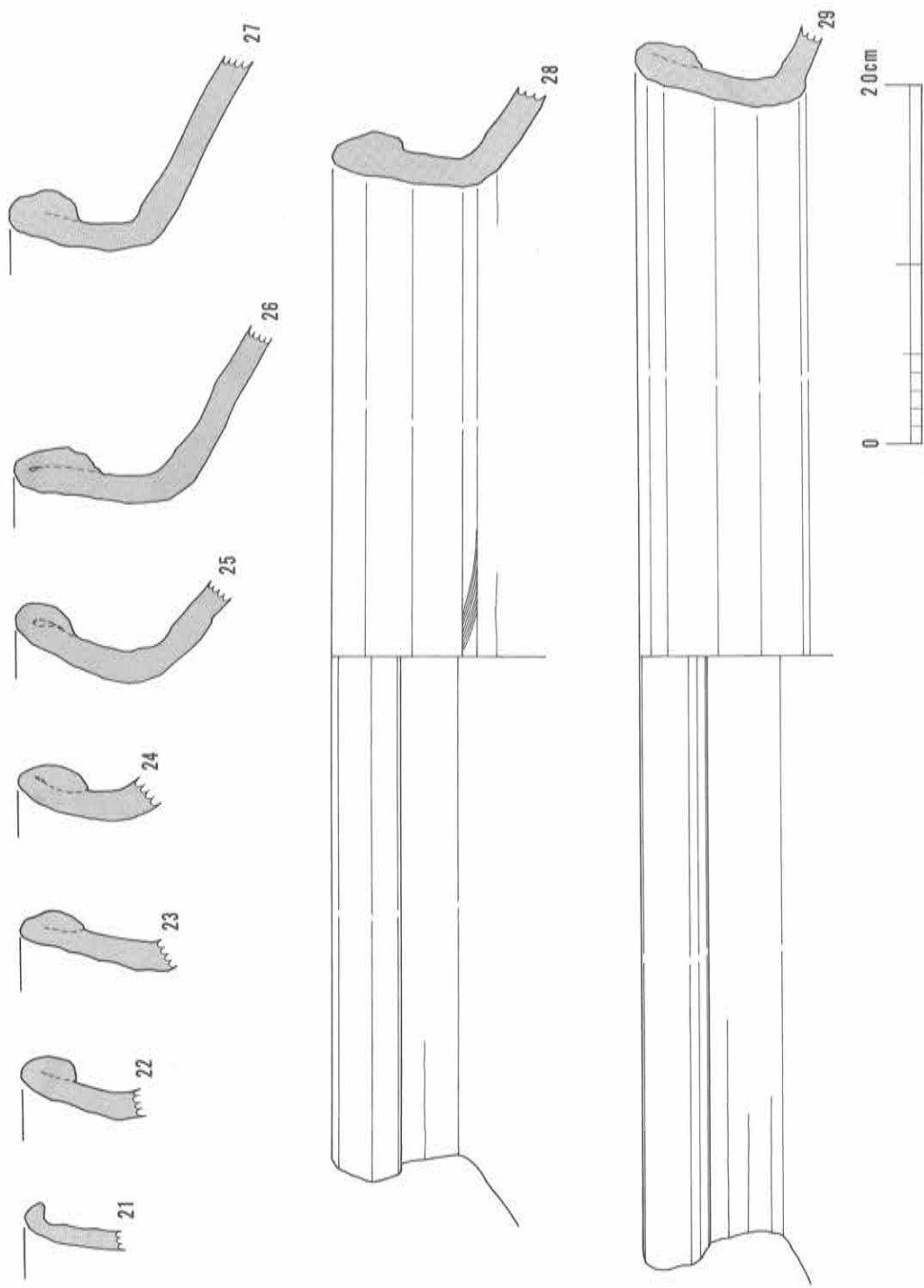


插图251 C<sub>1</sub>·C<sub>3</sub>東西堀土器 (1)



挿図252 C<sub>1</sub>・C<sub>3</sub>東西堀土器 (2)

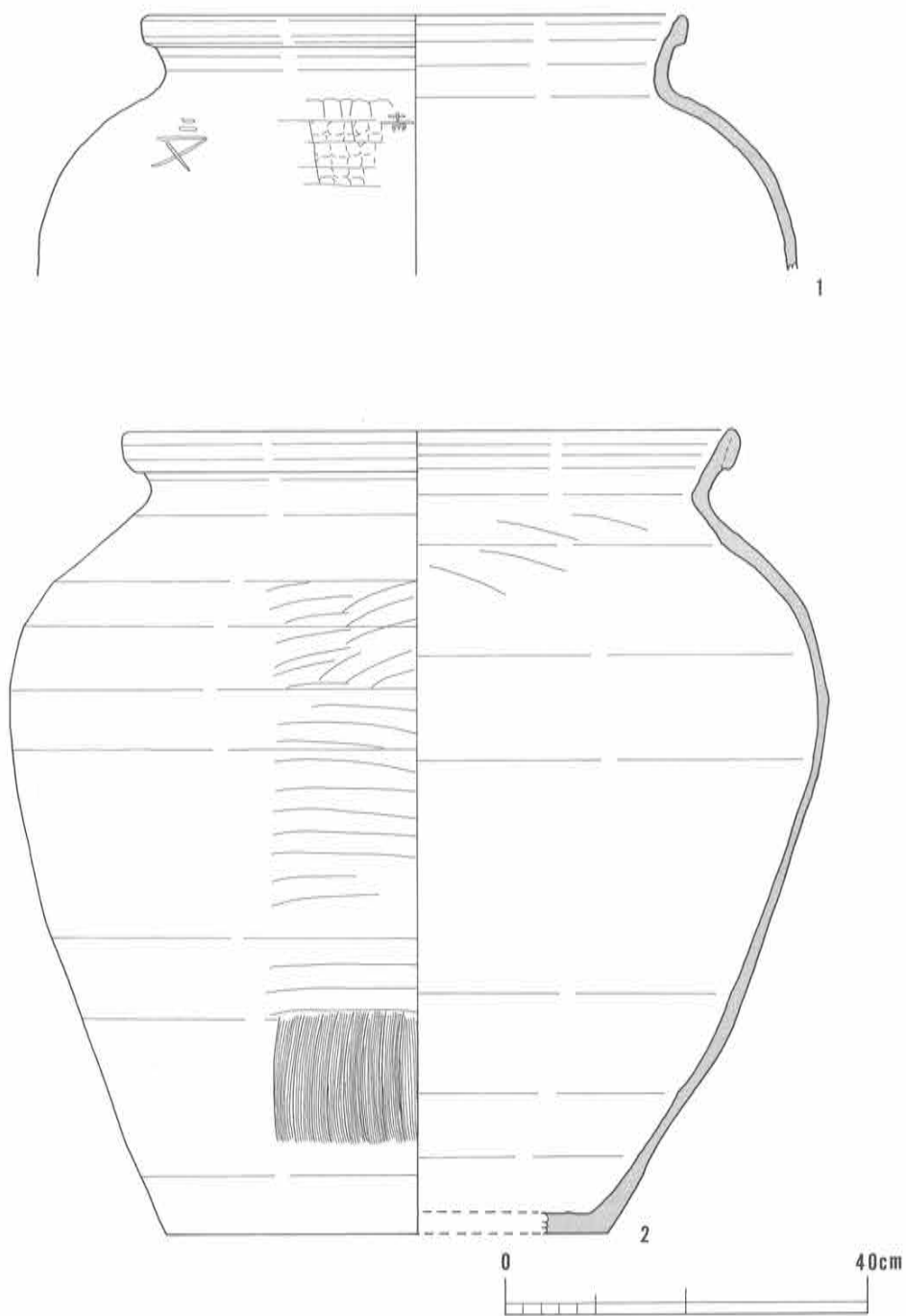
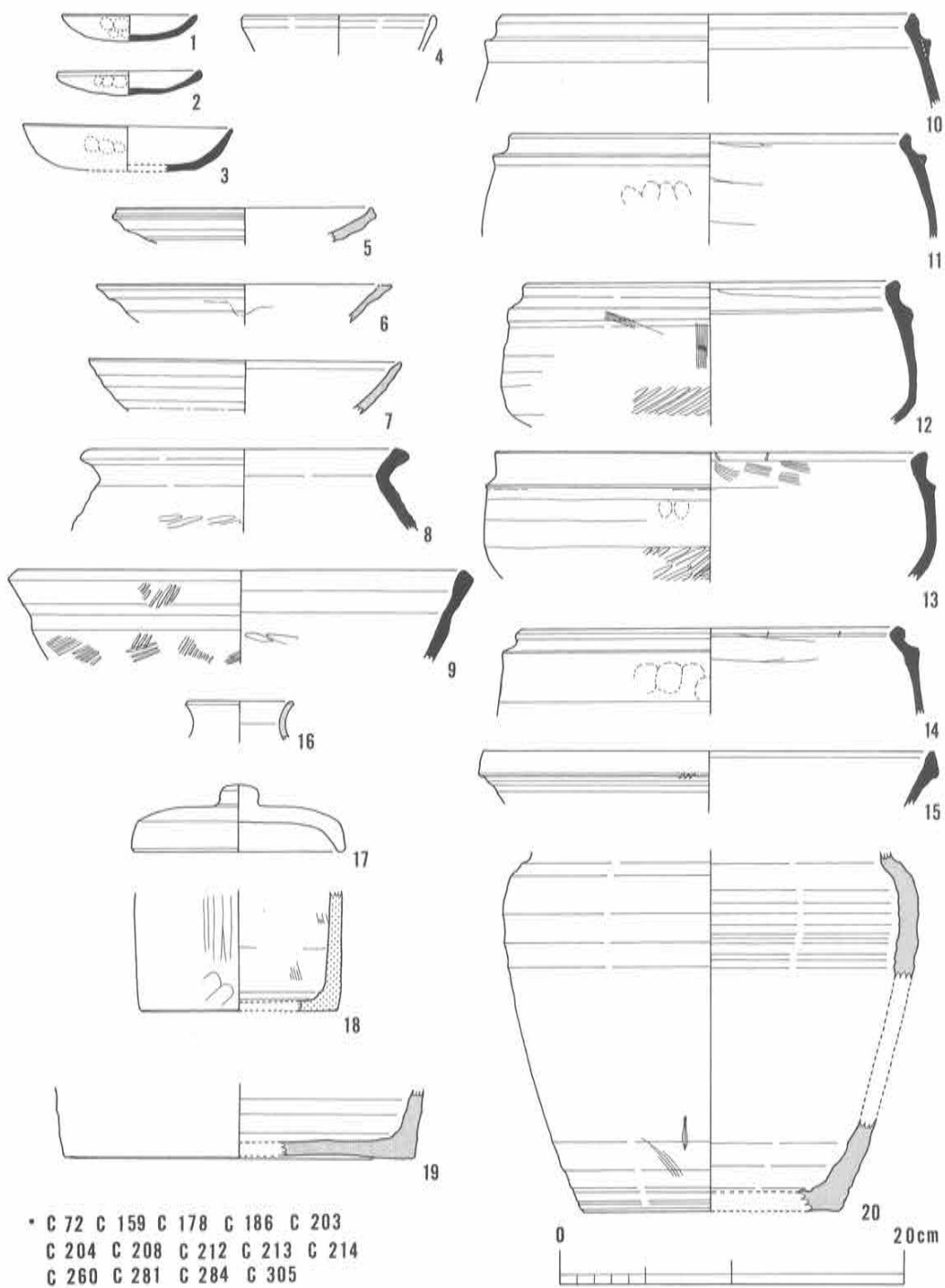


插图253 C<sub>1</sub>·C<sub>3</sub>SK04土器



• C 72 C 159 C 178 C 186 C 203  
 C 204 C 208 C 212 C 213 C 214  
 C 260 C 281 C 284 C 305

挿図254 C<sub>1</sub>外堀土器

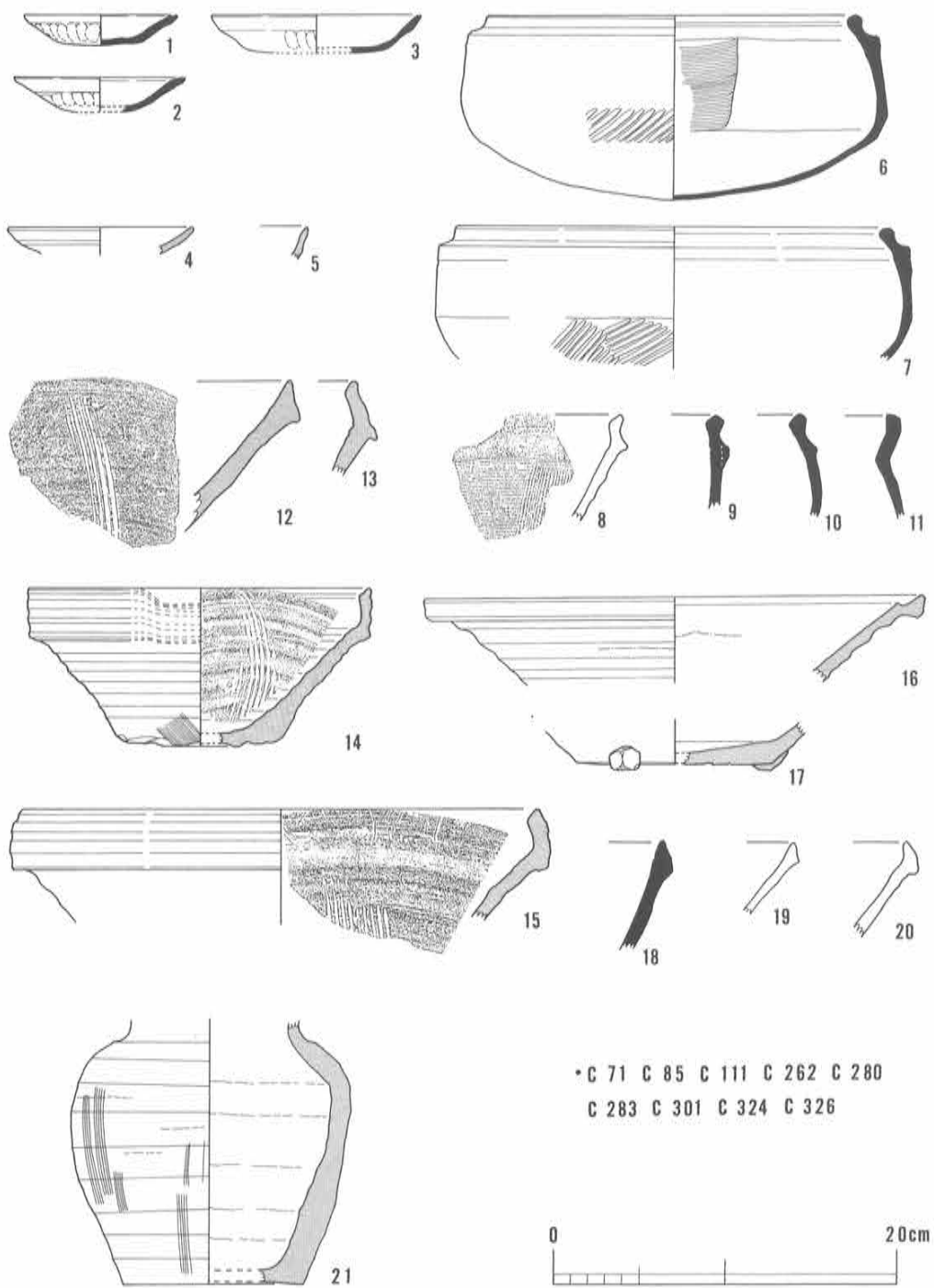


插图255 S<sub>1</sub>片岡庄堀土器 (1)



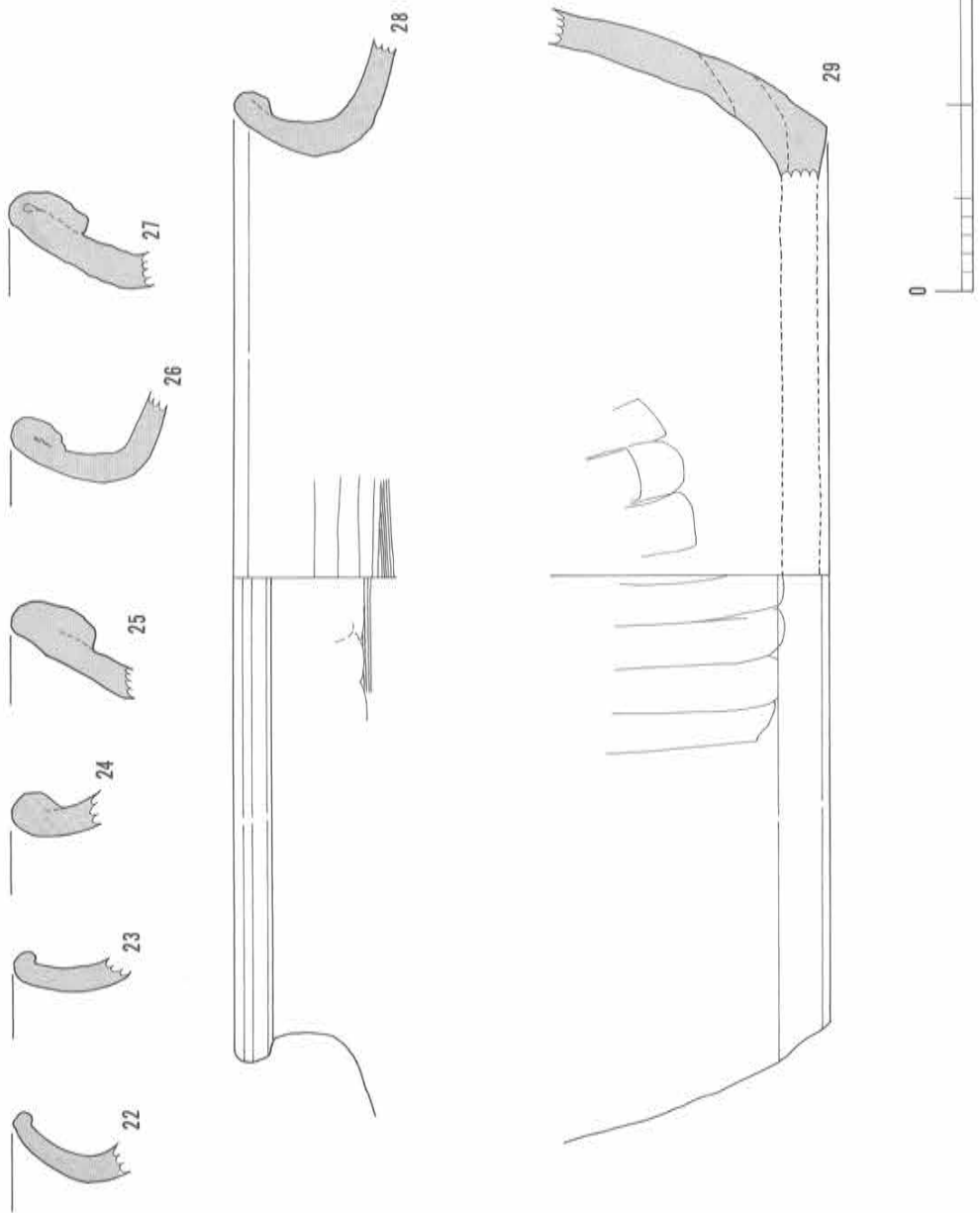
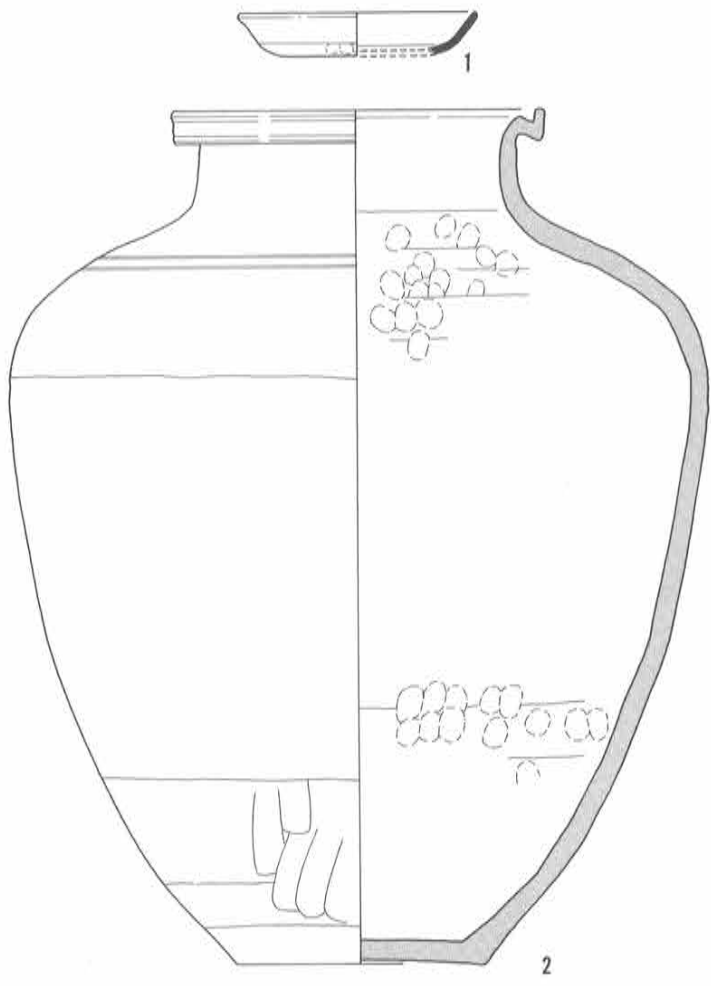


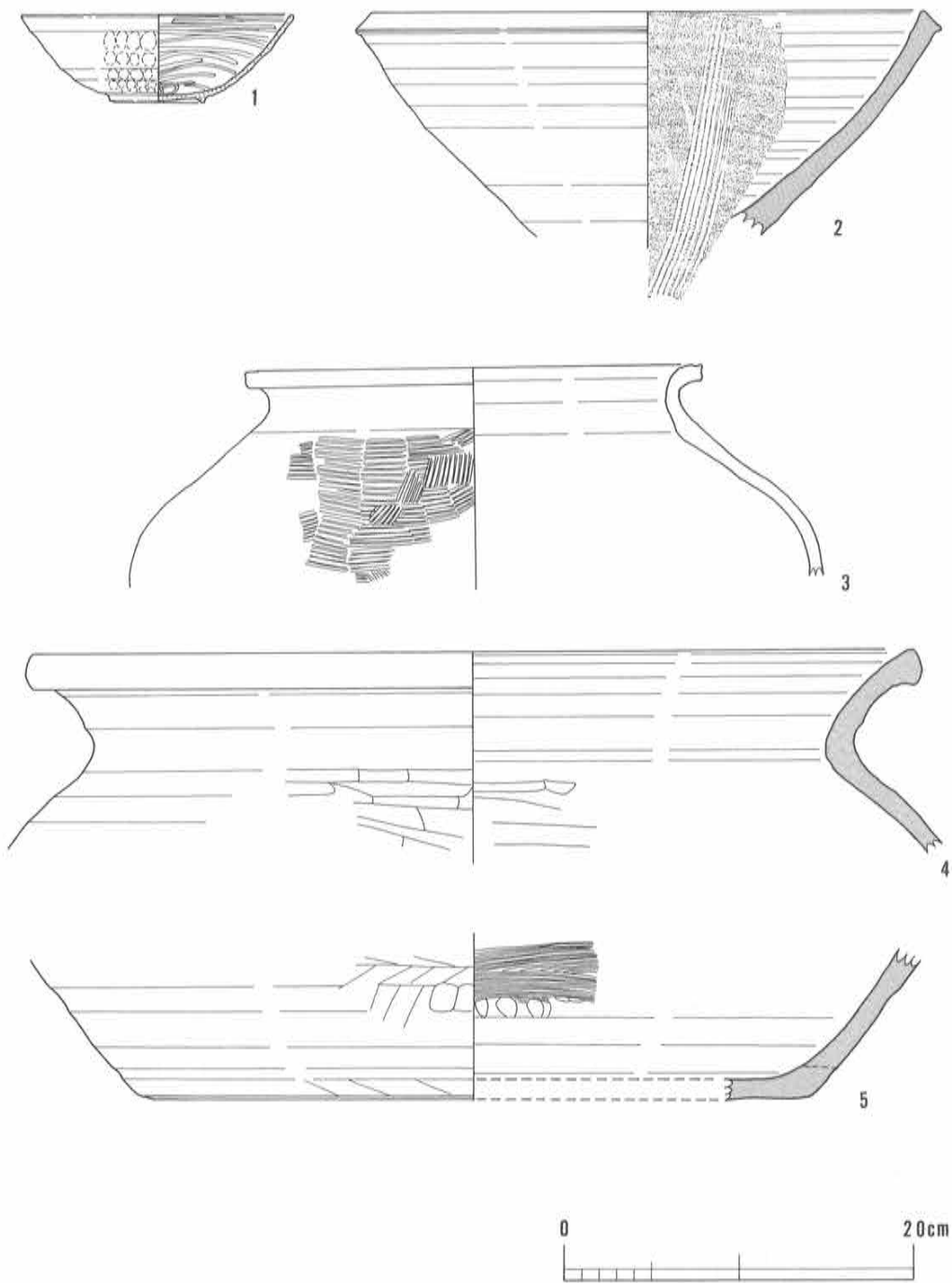
插图256 S<sub>1</sub>片岡庄堀土器 (2)



• C 337



挿図257 N<sub>2</sub>ASK08土器



挿図258 N<sub>3</sub>SD06土器 (1)

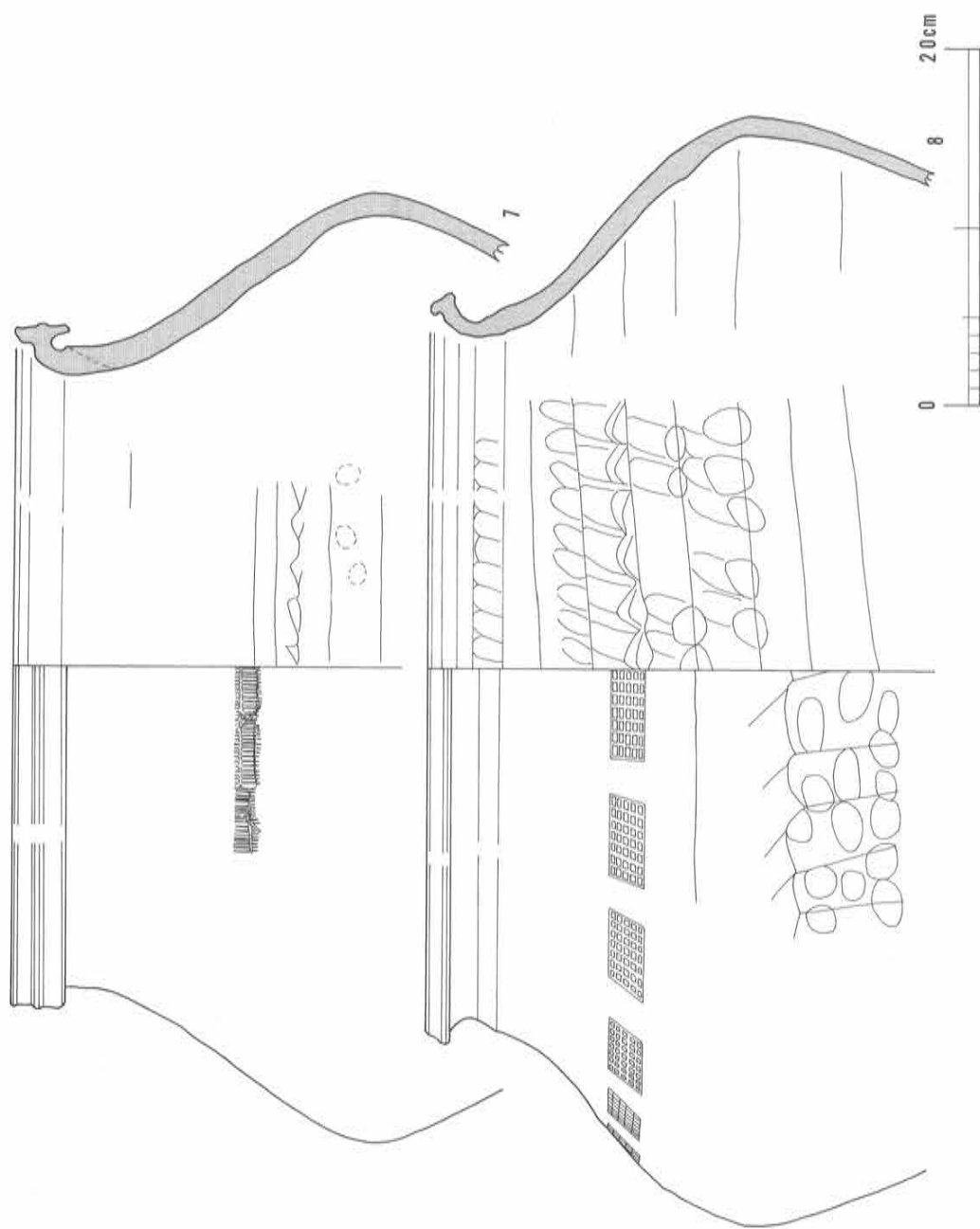
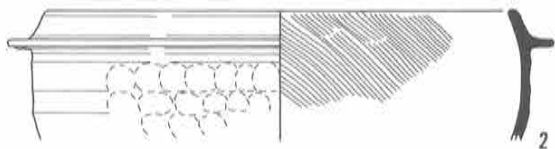
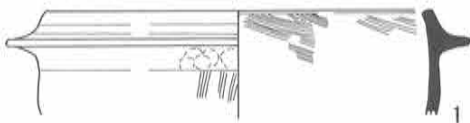
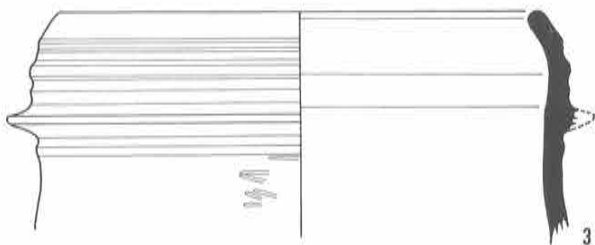


插图259 N<sub>3</sub>SD06土器 (2)

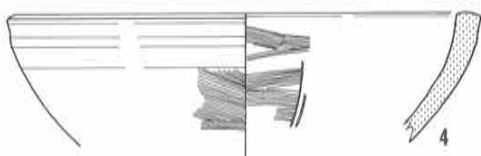
C<sub>4</sub>SD05



•C 121



C<sub>4</sub>SD06



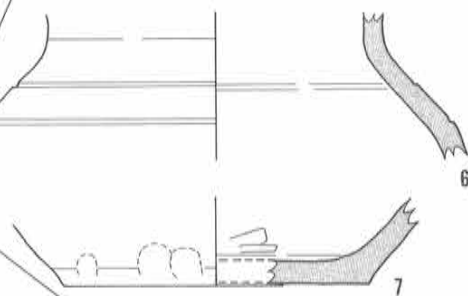
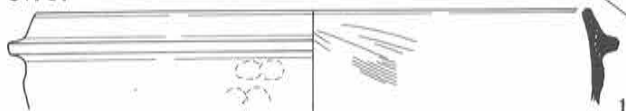
C<sub>4</sub>P20



C<sub>4</sub>P25



C<sub>4</sub>P51



挿図260 C<sub>4</sub>地区の土器

## 鉢

SiSD01の20は口径15.3cmの口縁が内湾する小型の鉢である。

## 壺

壺は①沈線で区画線を描く、②櫛描きで大きな波状文を描く、③櫛描きで小さな波状文を描くものに分かれる。

C4SD06の6は区画文としての横位の沈線を二条施しており、還元炎焼成である。

CsSD01の3は壺の下半部で器高(14.4cm)、胴径20.7cm、底径13.1cmを測り、ヘラで線描きが見られる。

SE03の6は壺口縁部で口径11.4cm、器高5.3cmを測る。

SsSD09の29、26・27・28がある。29は口径19.2cm、器高36.0cm、胴径34.6cmを測り、肩部に三段に横位の四条の櫛描きで区画帯を描き、下段に大きな波状文を描いている。26～28は口径14.0cm、胴径24.0cmを測り、肩に三条の櫛描きで小波状文を描いている。

SiSD01の28～33は壺で32は器高(23.5cm)、胴径20.5cm、底径15.0cmを測り、胴部に四条の櫛で大きな波状文を描き、一周して重なっている。33は口縁14.1cm、器高32.2cm、胴径26.4cm、底径18.1cmを測り、口縁はやや外反し、端部は小さな玉縁気味に丸く造り、肩部に三条の櫛で小波状文を描く。30は口径12.6cm、器高23.0cm、胴径21.6cm、底径14.0cmを測り、口縁は直口で端部は小さく玉縁を成し、肩が張る。

## 小壺

SiSD02の29～31は小壺の口縁・胴部・底であり、口径11.6cm、胴径10.8cm、底径7.6cmをそれぞれ測る。

SsSD09の30・31は小型壺の底部でヘラで記号または印を描いている。30は底径3.5cm、31は底径5.6cmを測る。

## 徳利

SiSD01の27は頸径4.8cm、器高(22.2cm)、胴径21.0cm、底径16.2cmの下膨れの徳利である。頸部にヘラ状工具で浅く沈線で記号を描いている。

## 杯・皿

SE03の2は口径10.8cm、器高3.3cm、底径4.7cmを測り、糸切り底の皿でV期に属する。

## 甕

甕は口縁形態から分類する。①外反気味に開き端部が鉤状に小さく折れる、②外反気味に開き端部が折れる、③外反気味に開き端部が小さく折り返し膨らむ、④外反気味に開き端部が玉縁状となる、⑤外反気味に開き端部は二重に折り返し、⑥外反気味に開き厚く折り返し凹線気味に外面を仕上げる、⑦外反気味に開き厚く折り返し凸線気味に外面を仕上げる、

備前焼の時期区分では焼成技術から①還元炎焼成、②酸化炎焼成がある。I・II期は①、III

期は過渡的で、②の始まり、③IV期以降は②となる。胎土も精選された粘土から田土へと変わる。

N<sub>3</sub>SK25 (SD06) の17の甕は口径52.5cm、器高(13.8cm)を測り、還元炎焼成で口縁は外反して、口縁端部は丸く纏まる。体部は削り仕上げる。

N<sub>2</sub>BSD02の28は口径31.4cmを測り、還元炎焼成である。

N<sub>1</sub>SK3065の6は口径31.7cm、器高41.0cm、胴径59.6cmを測り、体部外面はケズリで調整をしており、内面はタタキ当て具を丁寧に消している。口縁は外反し、端部は小さく外へ曲げるSE04の42・43は甕の口縁と底部である(挿図200)。42は口径49.6cmで口縁端部は外反して短く折れる。還元炎焼成である。43は底径36.0cmを測り、外面は下から削る。

N<sub>2</sub>BSD02の29・30は口縁が端部を玉縁状に短く折り返し纏まる。焼成は酸化炎焼成となる。口径は31.6cmと34.6cmを測る。S<sub>3</sub>SD16の69~71の甕は口径51.4cm・43.8cm、底径は38.7cmを測る。

C<sub>1</sub>・C<sub>3</sub>SK04の1・2は三石入りの大甕で1は口径58.6cmを測り、肩部に「三入」のヘラ描きがあり、口縁は二重に折り返して玉縁状に造り面をもつものでIV期の甕である。2は口径68.7cm、器高88.5cm、胴径90.4cm、底径48.0cmを測り、口縁は外反し口縁端部は二重に少し長く折り曲げ口縁を造り出す。

#### 常滑焼

常滑焼は壺・甕が出土している。

壺はN<sub>2</sub>ASK08の2は口径20.0cm、器高45.0cm、胴径37.0cm、底径13.0cmを測り、口縁は受け口状の直口となり、肩部は二条の沈線が描かれている。

甕はN<sub>3</sub>SD06の7・8がある。7は口径37.4cm、器高(27.6cm)、胴径53.2cmを測り、口縁はN字状口縁に近く上下に拡張している。胴部上半にスタンプ文が施されている。8は口径40.4cm、器高(21.8cm)、胴径62.4cmを測り、胴部上半に格子目スタンプが間をおいて押される。口縁は外反し端部で内傾気味に低く立ち上がる。いずれも内面は紐造りのユビ押さえが残り、外面には自然釉が美しい。

N<sub>3</sub>SK25 (SD06) の18は口径52.0cm、器高(34.9cm)、胴径83.3cmを測り、口縁はN字状口縁を呈する。体部内面には紐造りのユビ押さえ痕を残す。体部外面には自然釉がかかる。

#### 瀬戸・美濃焼

瀬戸焼はおろし皿・鉢・播鉢・盤・天目碗等がある。

おろし皿はN<sub>1</sub>SK3065の11は18.5cm、器高4.5cm、底径14.0cmを測り、口縁は少し丸く作り出している。底は4条の線引きで界線を描き、内に3条単位に線引きし、格子目状におろし目を施している。灰釉がかかる秀品である(図版235)。SE20の7は口径15.2、器高3.2cm、底径9.2cmを測り、口縁端部は内に少し曲げ、底見込みはヘラで格子状に描き、粗い造りである。淡い灰釉が内面に掛けられている。

鉢はC<sub>1</sub>SD17の16は灰釉鉢で口径34.8cmを測り、口縁端部は内へ少し肥厚する。片岡庄堀の16・17は鉢で口径29.2cm、底径11.2cmで底に粘土を貼り付けて三足を呈する。内外面の上部のみ灰釉を掛けている。

鉢のうちSE01の6は口径29.6cmを測り、斜め外へ開く口縁部で内は一段の界線により分けているが、内外面とも上部に鉄釉が掛かり、櫛による摺り目があり、播鉢と判る。

また、天目碗がある。

#### 亀山焼

亀山焼は甕があり、体部は細かい格子目タタキを残し、口縁は斜め上方へ広がる。N<sub>2</sub>BSD02の31は口径41.0cm、器高（12.2cm）を測る。

SE08の18は口径34.0cm、器高10.2cmを測り、口縁はやや斜め上方へ延び、端部は斜めに仕上げる。肩粉以下は格子目タタキ痕を残す。



### 3. 輸入陶磁器

福田片岡遺跡の出土遺物の特色を表すものに輸入陶磁器の豊富さがある。破片点数は2,000を超す。図化掲載したものは僅かに348点である。

輸入陶磁器348点は白磁150点、青磁154点、青白磁15点、青花7点と施釉陶器22点である。白磁・青磁・青白磁・青花は中国（宋・元・明代）産で、施釉陶器は中国・朝鮮（李朝）産である。

共通する出土遺構は堀であるが、墓・土壙・井戸・溝からの出土である。

白磁、青磁、青白磁、青花、施釉陶器の出土位置はそれぞれに偏りがある。遺構の時期的な変遷が輸入陶磁器の分布によっても復元できる。蓄積された輸入陶磁器の編年的研究の成果の援用で判る。

ここで、輸入陶磁器の種類と器種について考えてみると、

- ①白磁の器種は碗・小碗・皿・四耳壺がある。
- ②青磁は同安窯系・龍泉窯系に分かれ、器種は碗・皿・杯・小碗・盤がある。
- ③青白磁は注口蓋・合子（蓋・身）・小壺（蓋・身）・皿・梅瓶・香炉他がある。
- ④青花は皿・碗がある。
- ⑤施釉陶器は天目碗・壺・甕・四耳壺がある。

ここでは、表7に従って、各種類別の型式分類を試みたい。

#### (1) 白磁

白磁には、碗、小碗、小皿、壺がある。

##### ①碗

碗の型式分類に際しては、口縁部の釉の有無については、アルファベットの太文字で、高台の形態についてはローマ数字で、口縁部の形態については、アルファベットの太文字で、高台部の施釉の有無については、片仮名で、文様及び沈線・圈線の有無その他については、アラビア数字で、それぞれ表した。

以下、上記の分類基準を元に碗について分類すると以下の様になる。

- A類：口縁部の釉をかきとらないもの。
- B類：口縁部の釉をかきとるもの。
- I類：高台の外表面を直に内面を斜めに削り出し比較的細く低いもの。
- II類：高台は幅広で削り出しの浅いもの。
- III類：高台は細く高く直立するもの。
- IV類：高台は比較的細く低いもの。

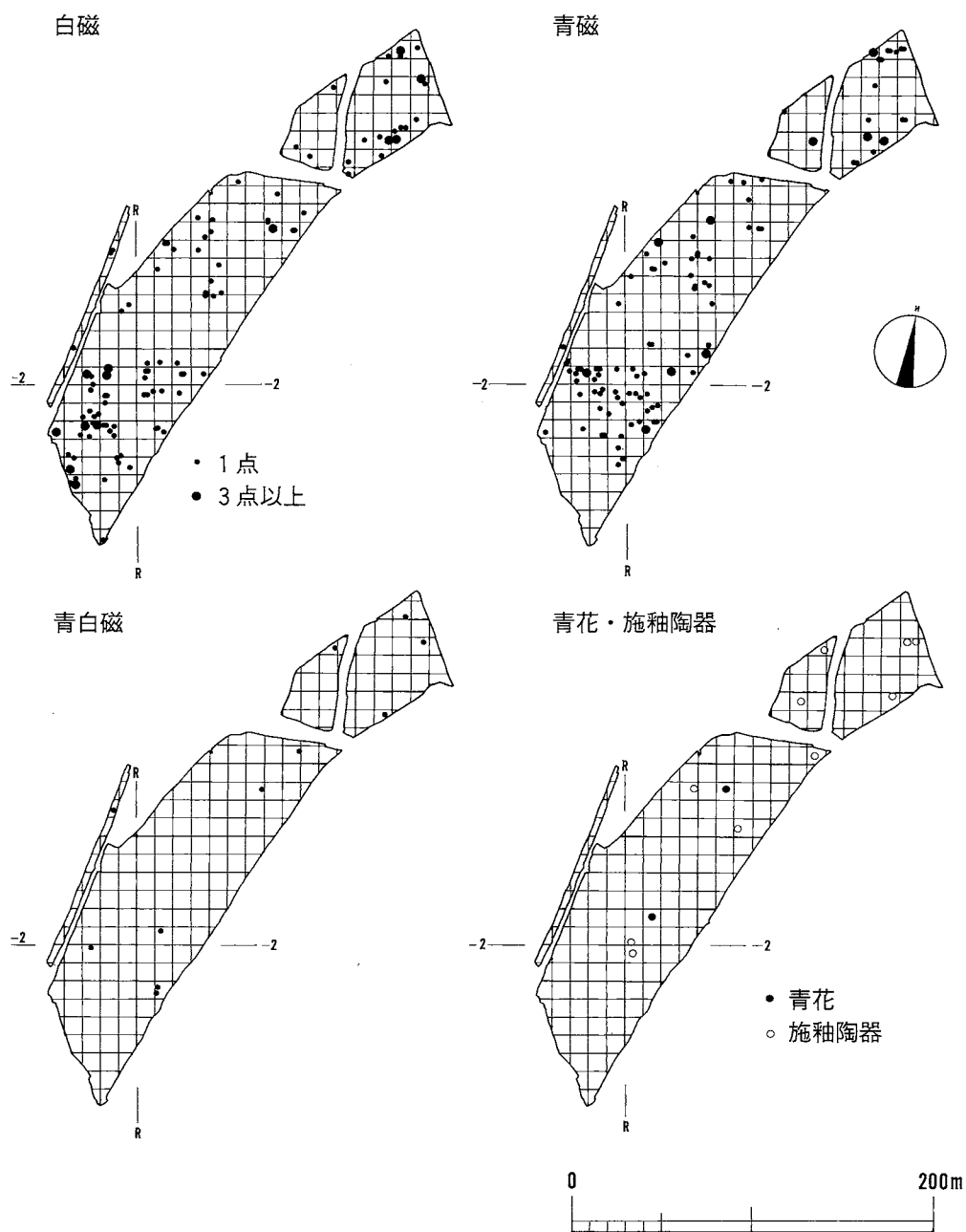


插图261 輸入陶磁器出土狀況

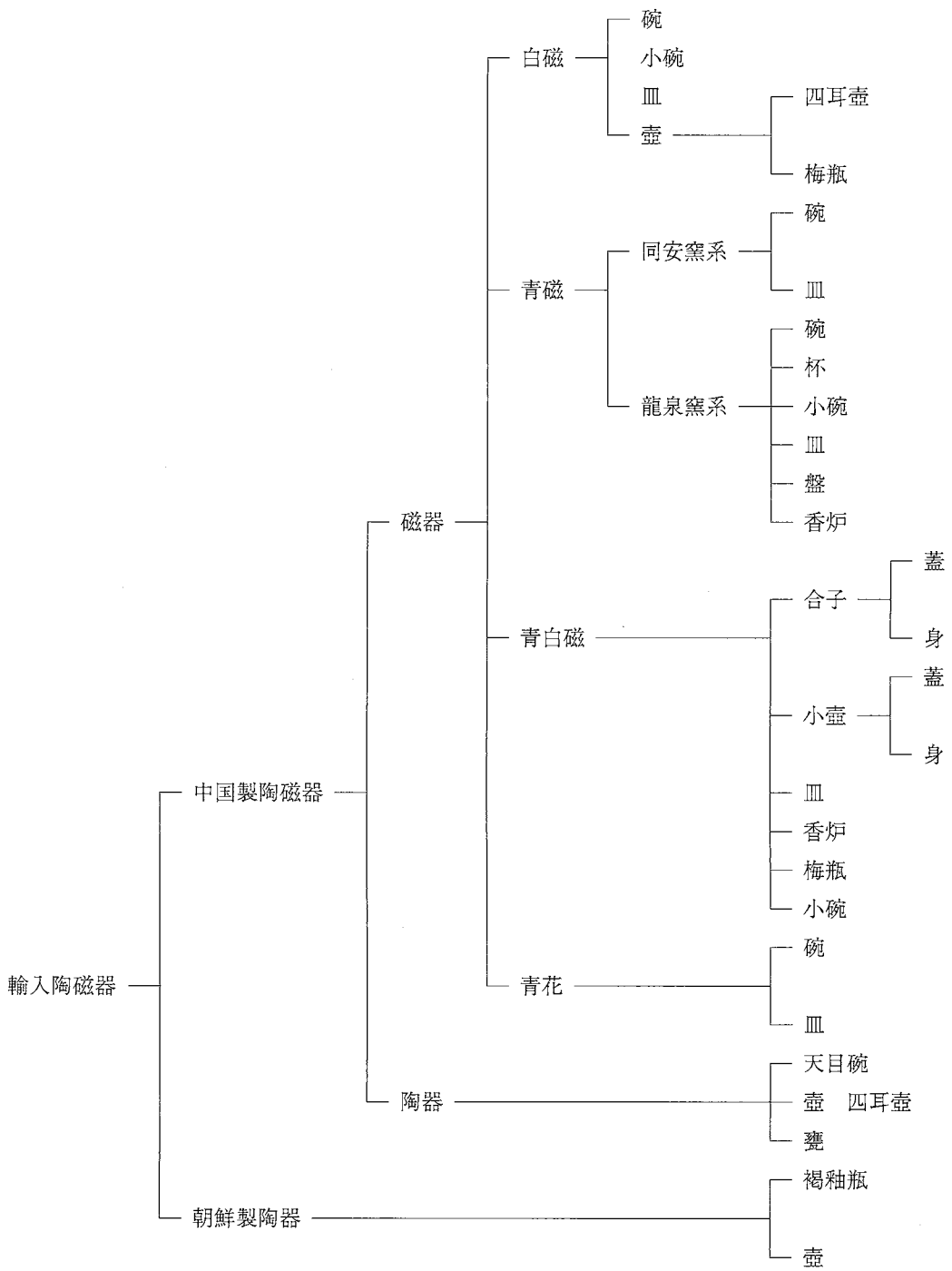


表 6 輸入陶磁器

- a類：口縁部は玉縁状に成形し玉縁の比較的小さいもの。  
 b類：口縁部は玉縁状に成形し玉縁の比較的大きいもの。  
 c類：口縁部は外反させるもの。  
 d類：口縁部は外反させ、端部を水平にするもの。  
 e類：口縁部は「く」の字状に外反させるもの。  
 f類：口縁部は外反せず、そのまま斜め上方に引き出すもの。  
 1類：底部内面に沈線状の段をもつもの。  
 2類：底部内面に沈線状の段をもたないもの。  
 3類：底部内面に釉を輪状にかきとるもの。  
 イ類：体部の下半以下露胎のもの。  
 ロ類：高台まで施釉するもの。  
 あ類：高台裏は露胎のもの。  
 い類：高台裏まで施釉するもの。  
 甲類：内面無文のもの。  
 乙類：内面に櫛描状の施文のあるもの。

上記の分類基準に従って、分類したものが、挿図262である。なお、(記号)は、当該箇所が欠落しており、不明であるが、他遺跡の例から復原可能なもの、( )のみのものは、復原不可能で不明のものを表している。なお、本報告書では、記述の煩雑となるのを避けるため表及び本文中では、以下の省略記号を用いている。

〔分類記号〕					〔省略記号〕	
A	I	イ	a	1	甲	A I
A	II	イ	a	1	甲	A II
A	II	イ	a	2	甲	A III
A	(III)	(イ)	c	( )	甲	A IV
A	III	イ	d	1	甲	A V
A	IV	ロ	(f)	1	乙	A VI
A	(III)	(イ)	f	( ) ( )	乙	A VII
A	I	イ	f	1	甲	A VIII
A	IV	ロ	( )	1 ( )	甲	A IX
A	( )	イ	e	2	甲	A X
B	I	イ	c	2	甲	B I

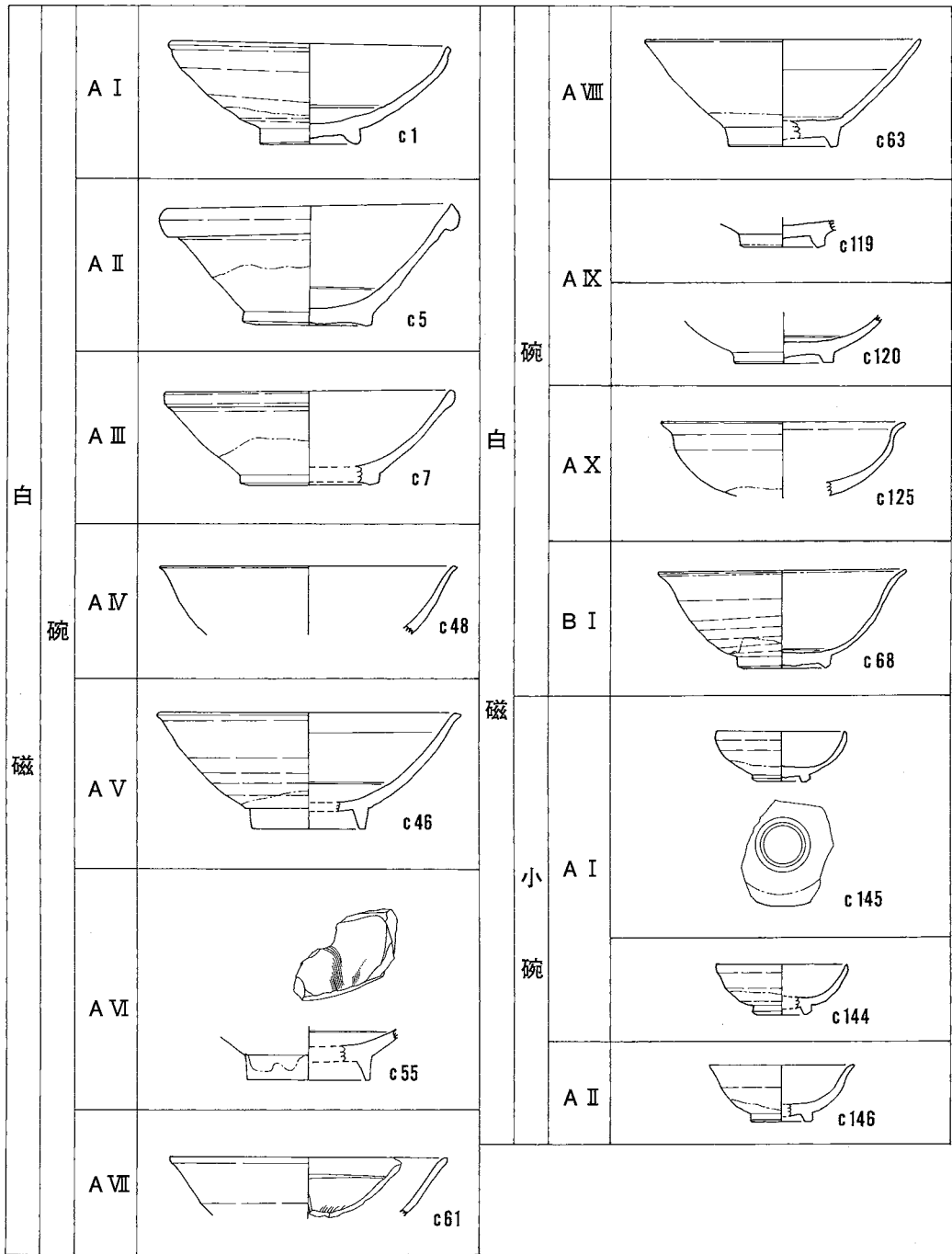


插图262 輸入陶磁器分類 (1)

## ②小碗

小碗も碗と同じ分類基準で分類するが、出土量が少なく、種類は少ない。

A類：口縁部の釉をかきとらないもの。

I類：高台は、外面を直に斜め方向に削り出し比較的細く低いもの。

イ類：体部外面の下半以下は露胎のもの。

c類：口縁部は外反させるもの。

e類：口縁部は外反せずそのまま上方に引き上げるもの。

2類：底部内面に沈線状の段をもたないもの。

甲類：内面無文のもの。

〔分類記号〕

〔省略記号〕

A 1 イ e 2 甲

A I

A 1 イ c 2 甲

A II

## ③皿

皿は碗の分類基準にさらに高台の有無が加わるため、高台の有無をギリシャ文字  $\alpha \cdot \beta$  で表す。

A類：口縁部の釉をかきとらないもの。

B類：口縁部の釉をかきとるもの。

$\alpha$ 類：高台のあるもの。

$\beta$ 類：高台のないもの。

I類：高台は幅が広く、浅く削り出すもの。

II類：高台内面斜めに、外面直に削りだし比較的細く低いもの。

III類：高台量付けを抉るもの。

IV類：高台は内外とも直に削りだし、非常に細く低いもの。

イ類：外面の体部下半以下露胎のもの。

ロ類：高台まで施釉するもの。

ハ類：高台裏まで施釉するもの。

ニ類：（無高台）全面施釉するもの。

ホ類：（無高台）底部に釉をかけないもの。

へ類：（無高台）全面施釉の後、底部の釉をかけないもの。

あ類：体部は緩やかに斜め上方へ延びるもの。

い類：体部は下位で屈曲するもの。

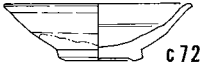











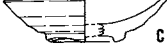
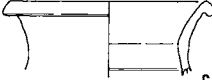
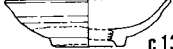


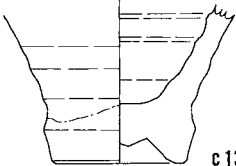

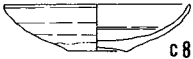
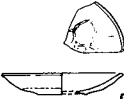
白	A I		c72	白	B I		c94	
	A II		c73		B II		c95	
	A III		c79		B III		c96	
			c80		B IV		c98	
	A IV		c112		B V		c99	
	A V		c141		B VI		c97	
	A VI		c132		磁		c133	
	A VII		c130				c138	
	A VIII		c123			四 耳 壺		c139
	A IX		c89					
	A X		c88					
A XI		c147						

插图263 輸入陶磁器分類 (2)

- う類：（無高台）底部と体部界のないもの。  
 え類：（無高台）底部と体部界のあるもの。  
 お類：（口縁部釉かきとり）体部の浅いもの。  
 か類：（口縁部釉かきとり）体部の深いもの。  
 1類：底部内面に沈線状の段をもつもの。  
 2類：底部内面に沈線状の段をもたないもの。  
 3類：底部内面の釉を輪状にかきとるもの。  
 4類：底部内面の釉を輪状にかきとらないもの。  
 5類：底部内面の釉を円状にかきとるもの。  
 甲類：内面無文のもの。  
 乙類：内面に施文するもの。

〔分類記号〕					〔省略記号〕			
A	a	I	イ	a	あ	3	甲	A I
A	a	II	イ	b	あ	3	甲	A II
A	a	II	イ	a	あ	3	甲	A III
A	a	II	イ	a	い	4	甲	A IV
A	a	II	ロ	b	い	5	甲	A V
A	a	III	イ	b	あ	2	甲	A VI
A	a	III	ハ	b	あ	2	甲	A VII
A	a	IV	ハ	( )	( )	2	甲	A VIII
A	β		ニ	( )	え	2	甲	A IX
A	β		ホ	b	う	1	甲	A X
A	β		ホ	b	う	2	乙	A X I
B	β		ニ	b	え	2	甲	B I
B	β		ニ	b	え	2	甲?	B II
B	β		ニ	a	え	2	甲	B III
B	β		ホ	a	え	2	甲	B IV
B	β		ホ	a	え	2	甲?	B V
B	β		へ	a	え	2	甲	B VI

④四耳壺

四耳壺は数点出土しているが、量的に非常に少ないため、ここでは分類を行わない。



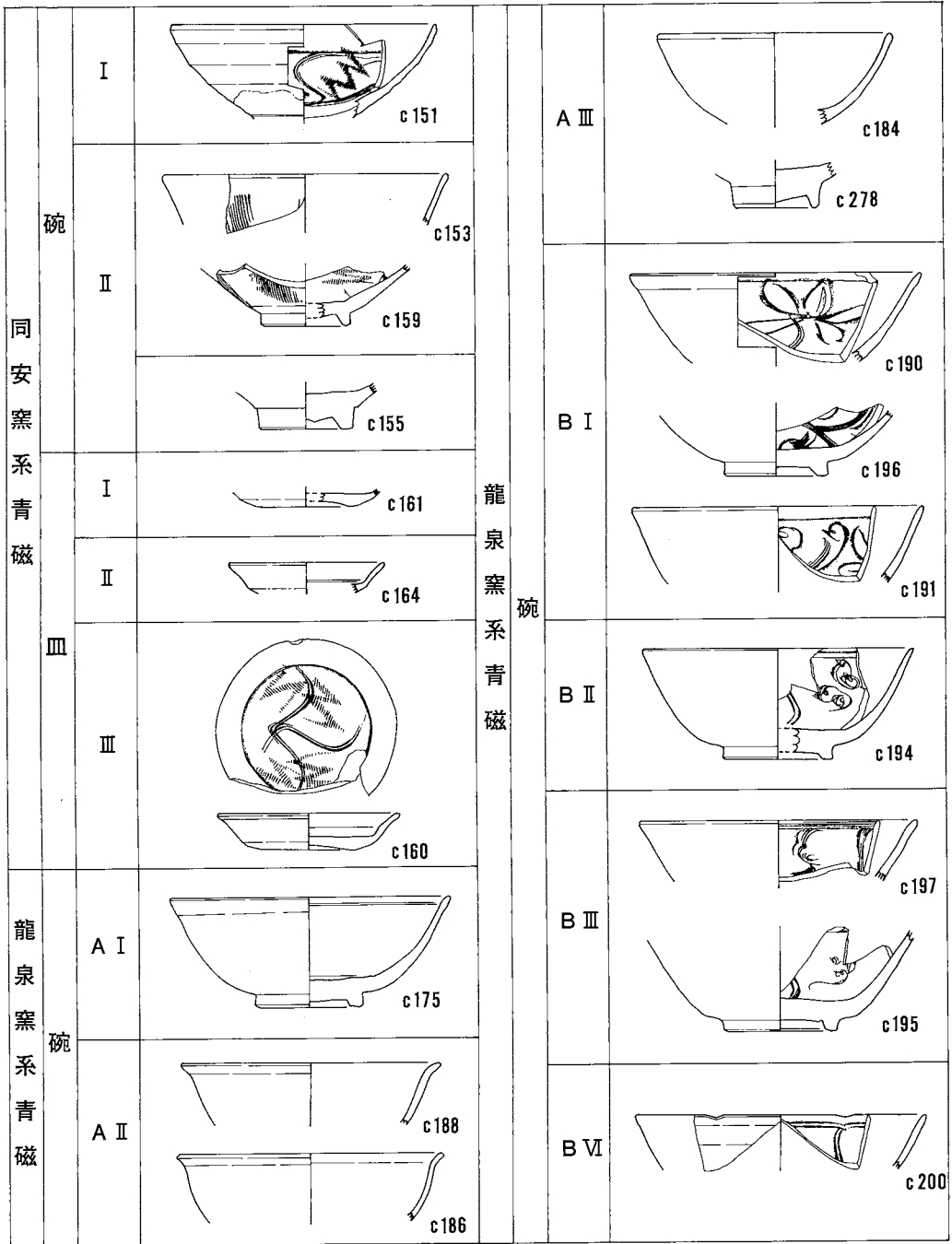


插图264 輸入陶磁器分類 (3)

## (2) 青磁

青磁には同安窯系のものと龍泉窯系のものがある。

### 同安窯系青磁

#### ①碗

碗は以下の分類基準により分類した。

- A類：内面あるいは外面に施文するもの。
- B類：内・外面とも無文のもの。
- I類：内面のみ櫛描雷光文を施文するもの。
- II類：外面のみ櫛描文を施文するもの。
- a類：体部の下半以下露胎のもの。
- b類：高台部まで施釉するもの。

[分類記号]                      [省略記号]

A I a                              A I

A I b                              A II

#### ②皿

- A類：高台をもたないもの。
- B類：高台をもつもの。
- I類：底部外面に施釉しないもの。
- II類：底部外面まで施釉するもの。
- a類：内外面とも施文しないもの。
- b類：内面のみ施文するもの。
- c類：内外面とも施文するもの。

[分類記号]                      [省略記号]

A I a                              A I

A I b                              A II

A II b                              A III

### 龍泉窯系青磁

龍泉窯系青磁には碗・杯・小碗・皿・盤・香炉がある。

## ①碗

青磁碗は口縁部あるいは底部の形態差よりもむしろ文様の違いに大きな違いがあると考えられる。従って、ここでは文様の違いを主な分類基準として分類した。

A類（無文碗）：内外面とも文様を施文しないもの。

B類（劃花文碗）：内面もしくは外面に片切彫の劃花文を施文するもの。

C類（蓮弁文碗）：内面もしくは外面に雷文帯を施文するもの。

### A類（無文碗）

A類の無文碗は口縁部の形態から以下の3種に細分する。

AⅠ類：口縁部をそのまま斜め上方に引き上げるもの。

AⅡ類：口縁部がやや内傾気味に直立するもの。

### B類（劃花文碗）

B類の劃花文碗は口縁部の形態はⅠ類のもののみであるが、輪花の有無によって以下の2種類に区分できる。

BⅠaⅠ類：内面のみ草花文を施文するもの。

BⅠaⅡ類：途中に蓮葉を横から見た文様を入れるもの。

BⅠaⅢ類：櫛状工具で内面を分割するもの。

### C類：（蓮弁文碗）

C類は蓮弁文の形態及び施文の方法から以下の5種に細分できる。

CⅠaⅠ類：片切彫の細い蓮弁で鑄をもつ。

CⅠaⅡ類：片切彫の細い蓮弁で鑄をもたないもの。

CⅠaⅢ類：片切彫の太い蓮弁で鑄をもたないもの。

CⅠaⅣ類：線描きの大型蓮弁。

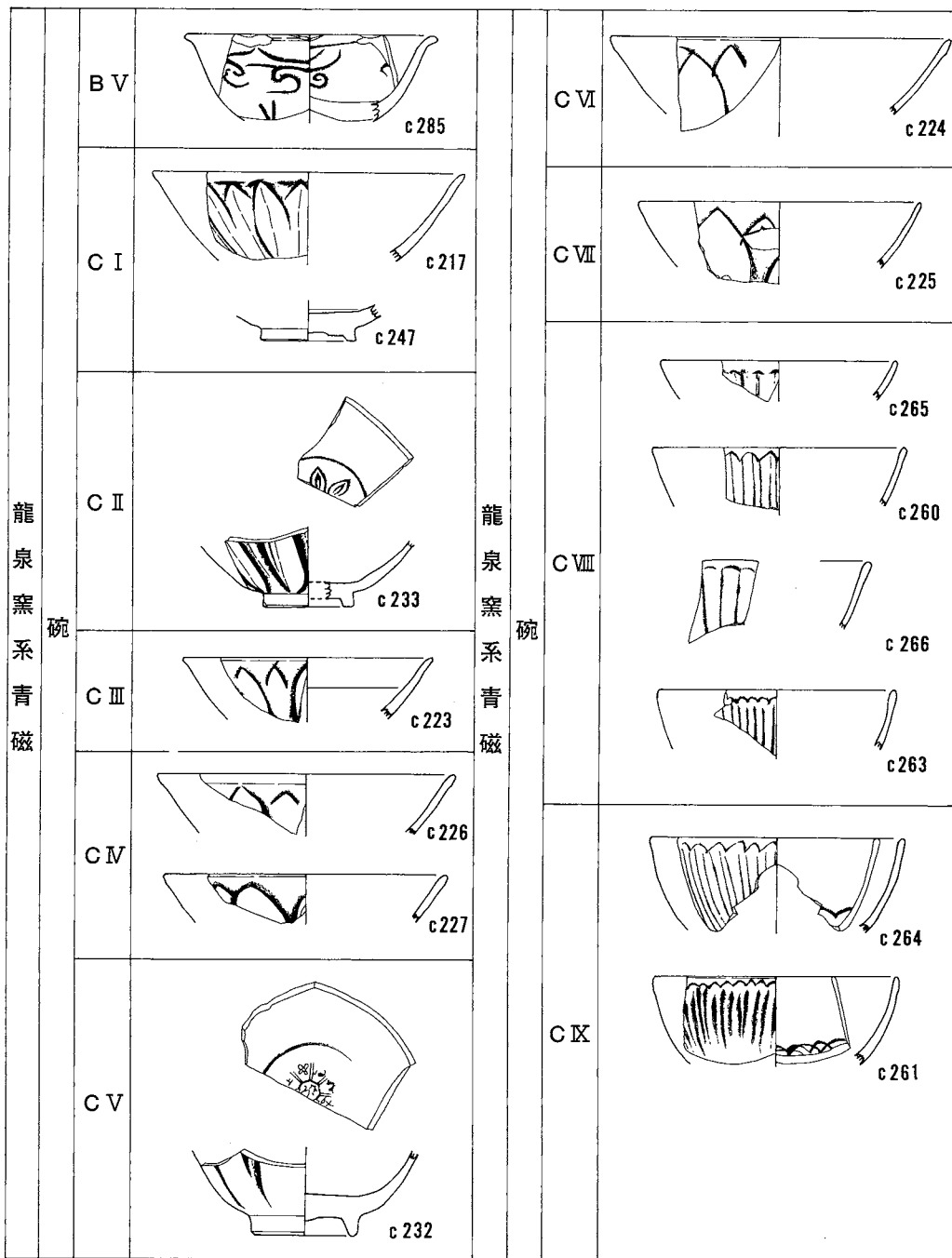
CⅠaⅤ類：線描きの細い蓮弁。

CⅠaⅤイ類：線描きの細い蓮弁で剣頭と蓮弁の単位が一致する。

CⅠaⅤロ類：線描きの細い蓮弁で剣頭と蓮弁の単位が一致しない。

### D類（雷文帯碗）

D類の雷文帯碗は本遺跡では外面に雷文帯碗を施すものが一種類あるのみである。



挿図265 輸入陶磁器分類 (4)

〔分類記号〕	〔省略記号〕
A I	A I
A II	A II
A III	A III
B I a 1	B I
B I a 2	B II
B I a 3	B III
B I b 1	B IV
C I a 1	C I
C I a 2	C II
C I a 3	C III
C I a 4	C IV
C I a 5イ	C V
C I a 5ロ	C VI
D I a	D I

### ②杯

杯は体部が浅く、口縁部が外反するものである。

I類：口縁部を外反させるもの。

1類：体部が内湾気味に立ち上がるもの。

2類：体部が直線的に立ち上がるもの。

a類：体部内面に蓮弁文を片切彫するもの。

b類：体部外面に蓮弁文を線彫するもの。

c類：底部内面に双魚文を貼付するもの。

〔分類記号〕	〔省略記号〕
I 1 a	I
I 2 b	II
(I) 2 b	III

### ③小碗

A類：内外面とも無文のもの。

I類：口縁部をそのまま斜め上方に引き出すもの。

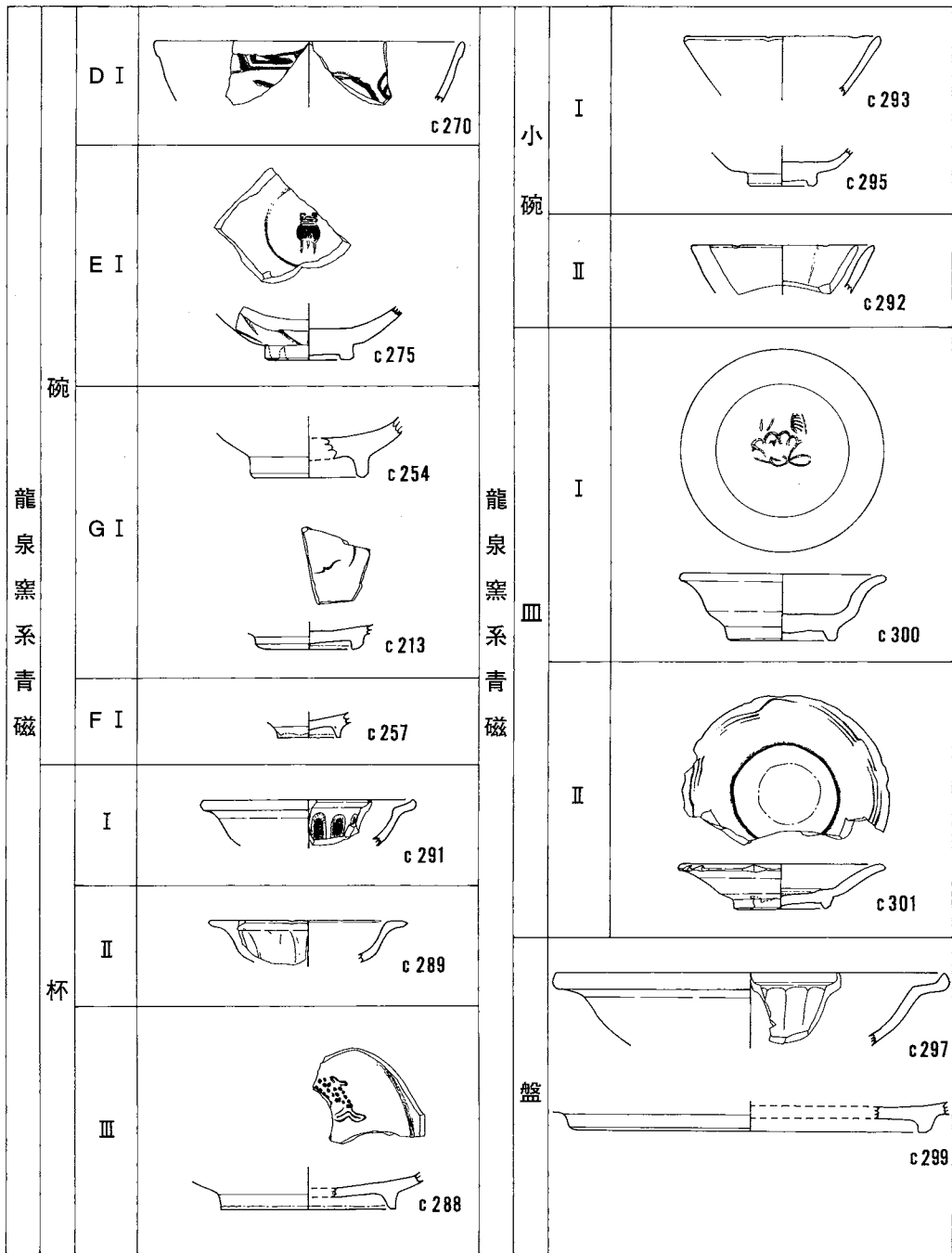


插图266 輸入陶磁器分類 (5)

a類：口縁部を輪花状に成形するもの。

1類：内面に隆線による区分けを行うもの。

〔分類記号〕	〔省略記号〕
A I a	I
(A)(I)	(I)
A I a 1	II

#### ④皿

皿は非常に少なく図化しえたものは2点のみである。

口縁部は外反し、内面に草花文を印花するもの（I類）と、口縁部はそのまま斜め上方に引き出し、口縁部を輪花状に成形するもの（II類）とがある。

#### ⑤盤

盤も皿同様、出土量は非常に少なく、型式分類は行っていない。

### (3) 青白磁

青白磁は、量的には少ないが様々の器種が出土している。

#### ①注口蓋

水瓶もしくは水注の注口部の蓋と考えられるもので、ロクロ成形の後、型押しによって、外面に花文を施文するものである。内面は施釉せず、露胎となっている。

#### ②合子蓋

小形のものと同大形のものがある。小形のもの、外面に菊座状施文を行うものと、花文を施すものがある。

#### ③合子身

細片のため、成形・調整の細部は不明であるが、口縁部は施釉の後、釉をかきとっている。

#### ④小壺蓋

外面にへら描きの菊花状を施文するものと算木状を施文を行うものがある。


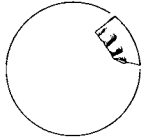
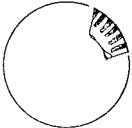
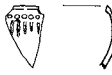

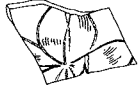
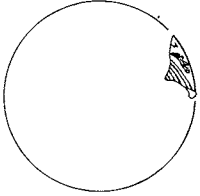

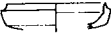

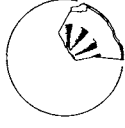


#### ⑤小壺身

外面に列点文を貼付し、内外面共施釉する。口縁部の釉はかきとっている。

#### ⑥皿

平底のもの、細く低い高台をもつものがある。いずれも、底部内面に、線描きの草花文を施文する。

#### ⑦梅瓶

青 白 磁	注口蓋	 c 315	青 白 磁	小蓋	 c 307
	合蓋	 c 311		身	 c 317
		 c 310		皿	 c 306
		 c 312			 c 305
	身	 c 313		梅瓶	 c 319
小蓋	 c 309	香炉	 c 314		
			不明	 c 316	

挿図267 輸入陶磁器分類 (6)



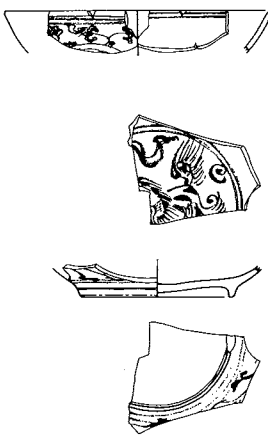


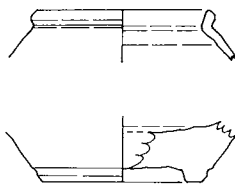
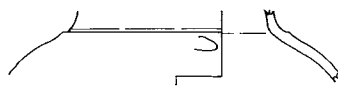
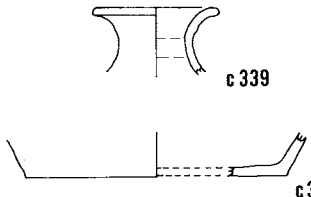
青 花 碗	皿	 <p>c 320</p> <p>c 324</p> <p>c 325</p>	施 釉 陶 器	天 目 碗	 <p>c 327</p>
	碗	 <p>c 325</p>		中 国	壺
甕			 <p>c 335</p> <p>c 342</p>		
四 耳 壺			 <p>c 338</p>		
				朝 鮮	 <p>c 339</p> <p>c 341</p>
				製	壺 or 甕

插图268 輸入陶磁器分類 (7)

胴部の破片である。外面に渦巻文を施文する。

⑧香炉

体部はほぼ直立し、口縁部は内側に折り曲げ、上面を水平にする。口縁部外面に施文を行っている。

⑨不明青白磁

皿もしくは小碗の底部と考えられるものである。削りだしの浅い低い高台をもち、底部内面に、印花で花文を施文する。

(4) 青花

青花は皿と碗が出土している。

①皿

皿には、口縁部外面に唐草文を施文するものと、底部内面に雲龍文を施文するものがある。

②碗

碗は、内面に呉須で草花文を底部外面に□文を施文するものがある。

(5) 施釉陶器

施釉陶器には天目碗・壺・甕・四耳壺がある。

①天目碗

高台は輪状に浅く削り出し、口縁部は屈曲して内傾するもので、底部内面の茶溜りには、釉が厚くかけられている。禾目天目と考えられる。

②壺

器壁は全体に薄く、体部は内湾し、頸部はやや内傾する。内外面共褐釉を施釉する。

③甕

口縁部を「く」の字状に屈曲させる甕の口縁部と、断面四角形の厚くかつ低い底部とが出土している。

④四耳壺

体部は内湾し、頸部は若干内傾するもので、肩部に耳を貼付した痕跡が認められる。

朝鮮製陶器

朝鮮製陶器には、徳利の口縁部と底部とがある。いずれも、暗緑色の灰釉を施釉している。

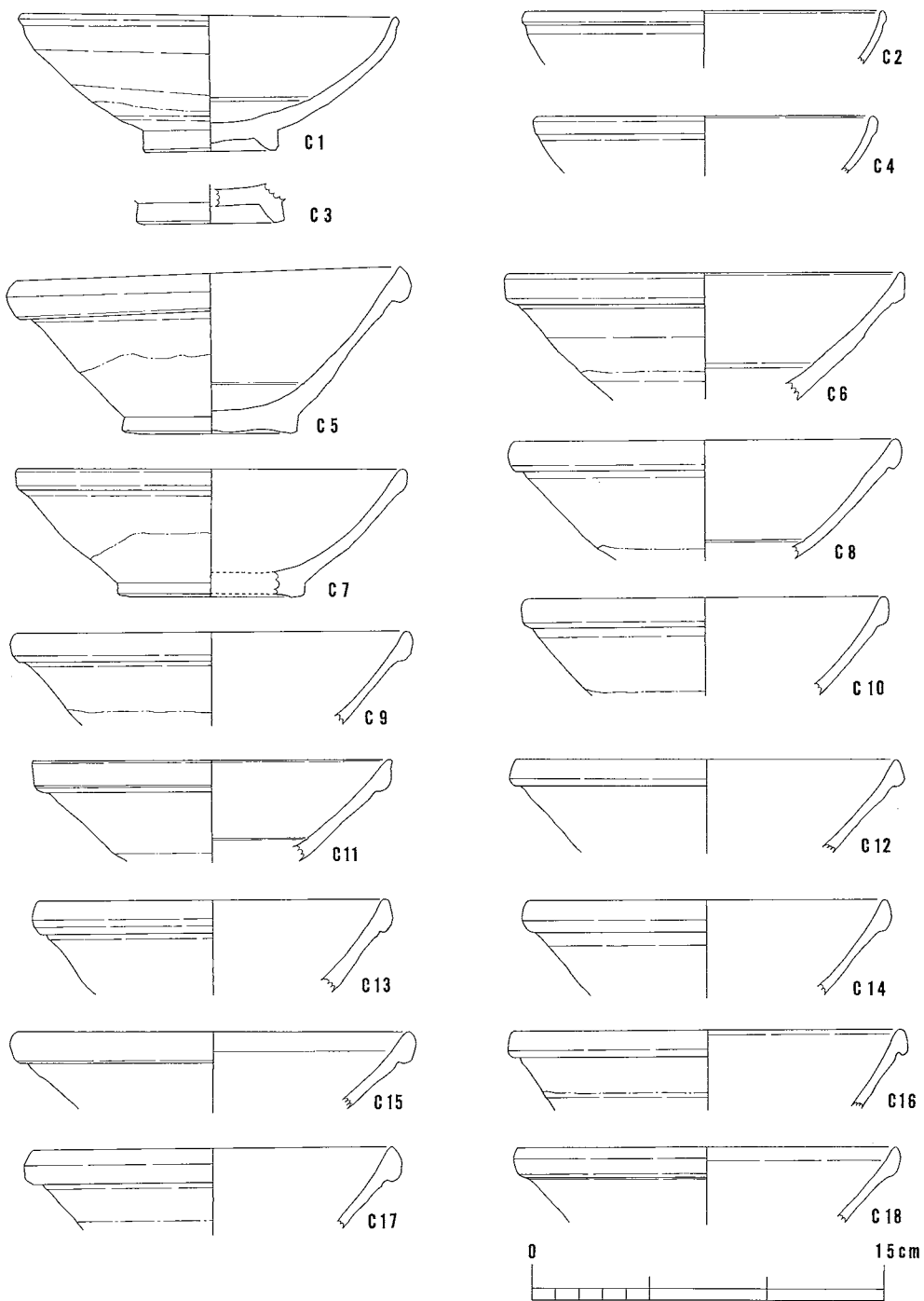


插图269 输入陶磁器 (1) 白磁碗A I · A II · A III類

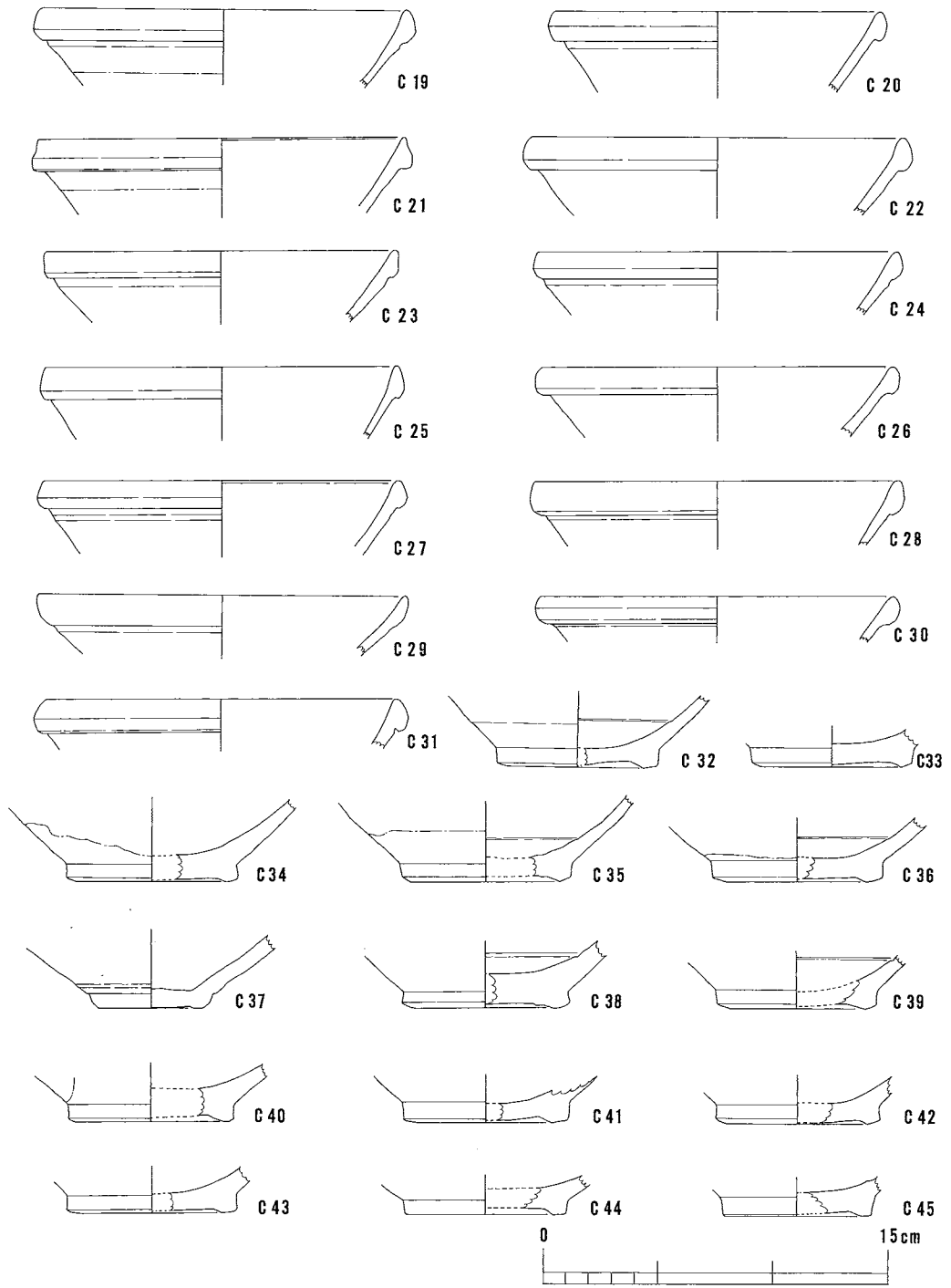


插图270 輸入陶磁器 (2) 白磁碗A II・A III類

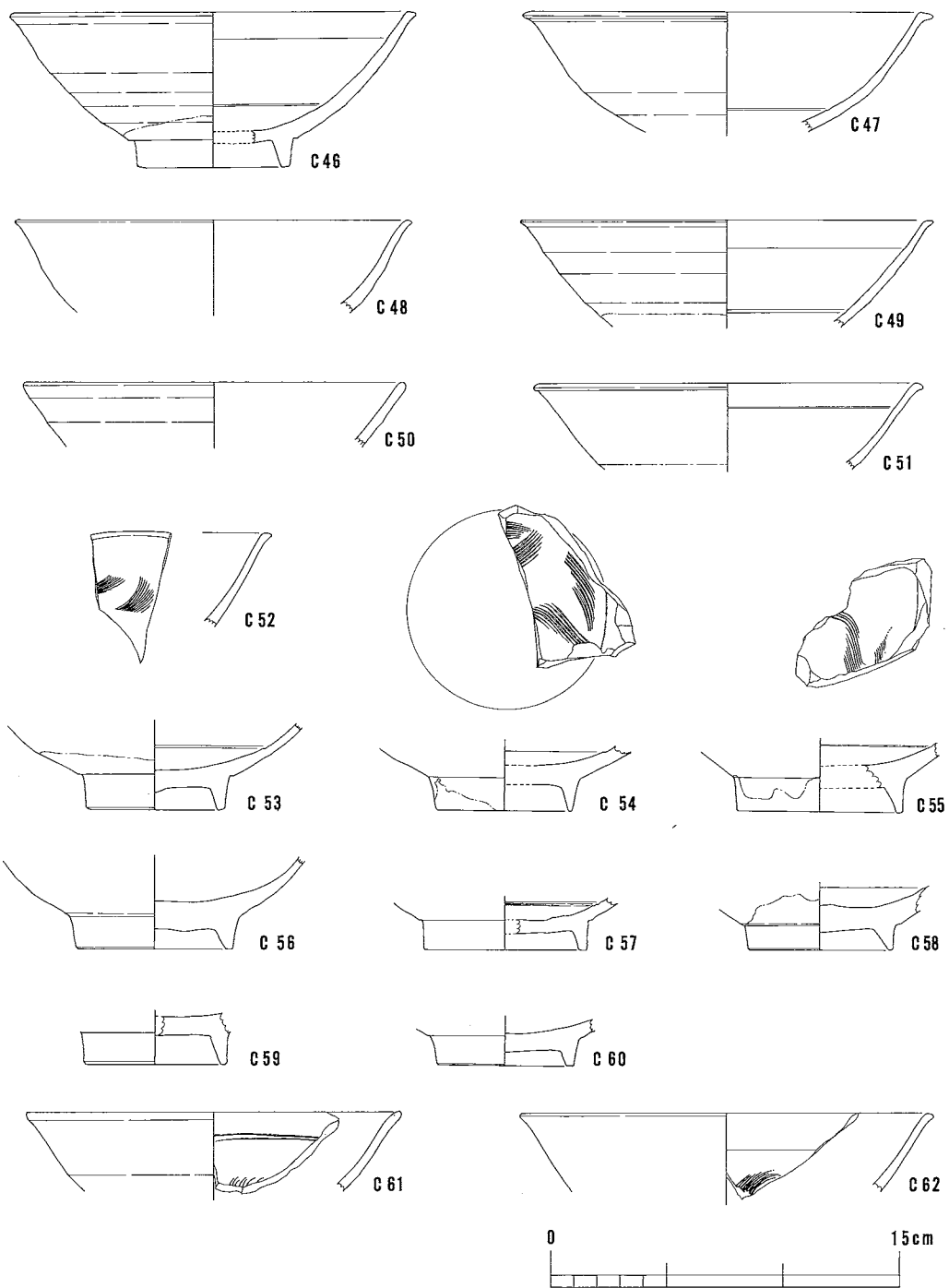


插图271 輸入陶磁器 (3) 白磁碗AⅣ・AⅤ・AⅥ・AⅦ類

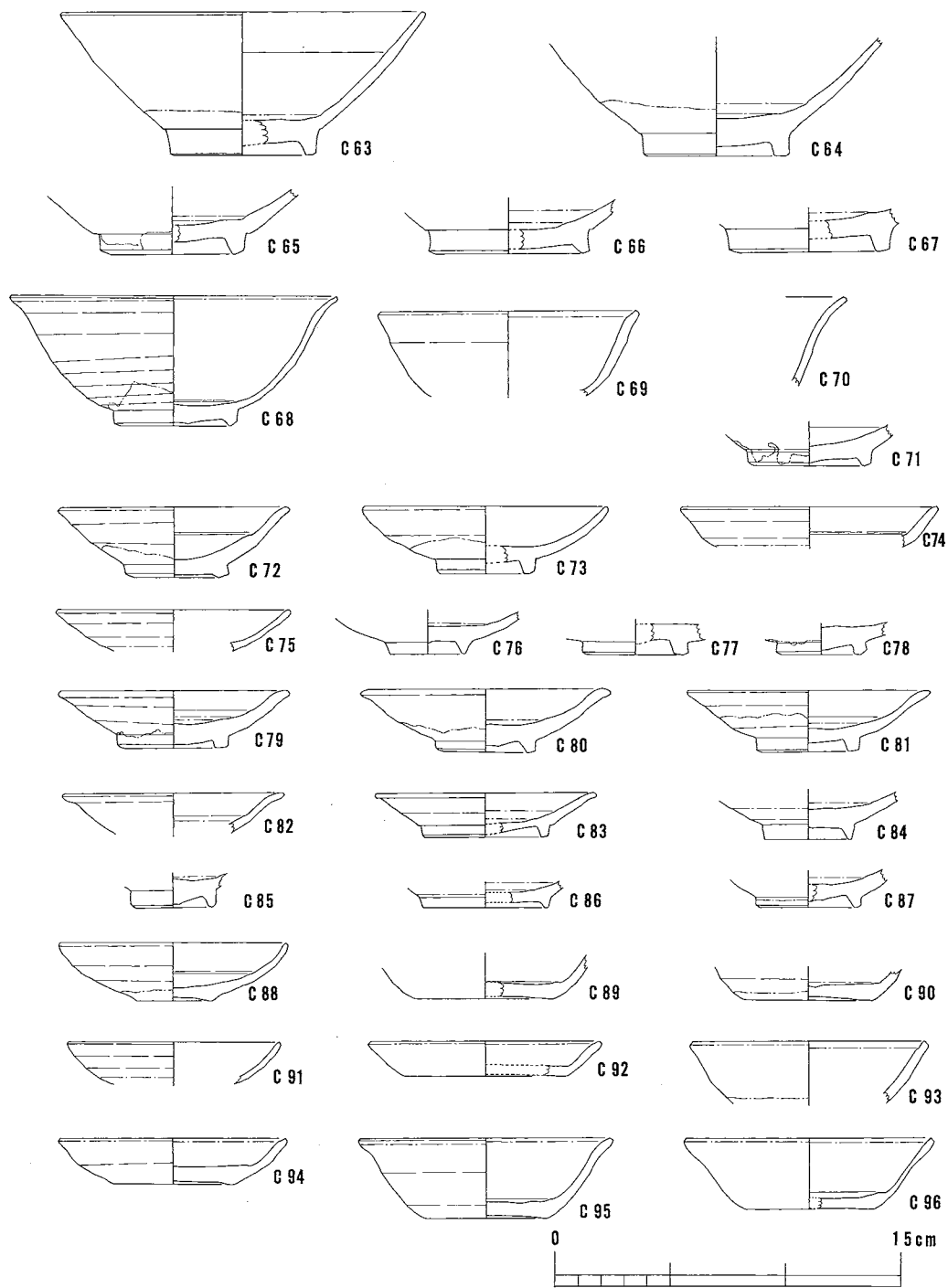


插图272 輸入陶磁器 (4) 白磁碗AⅧ・BⅠ類、  
白磁皿AⅠ・AⅡ・AⅢ・AⅨ・AⅩ・BⅠ・BⅡ・BⅢ類

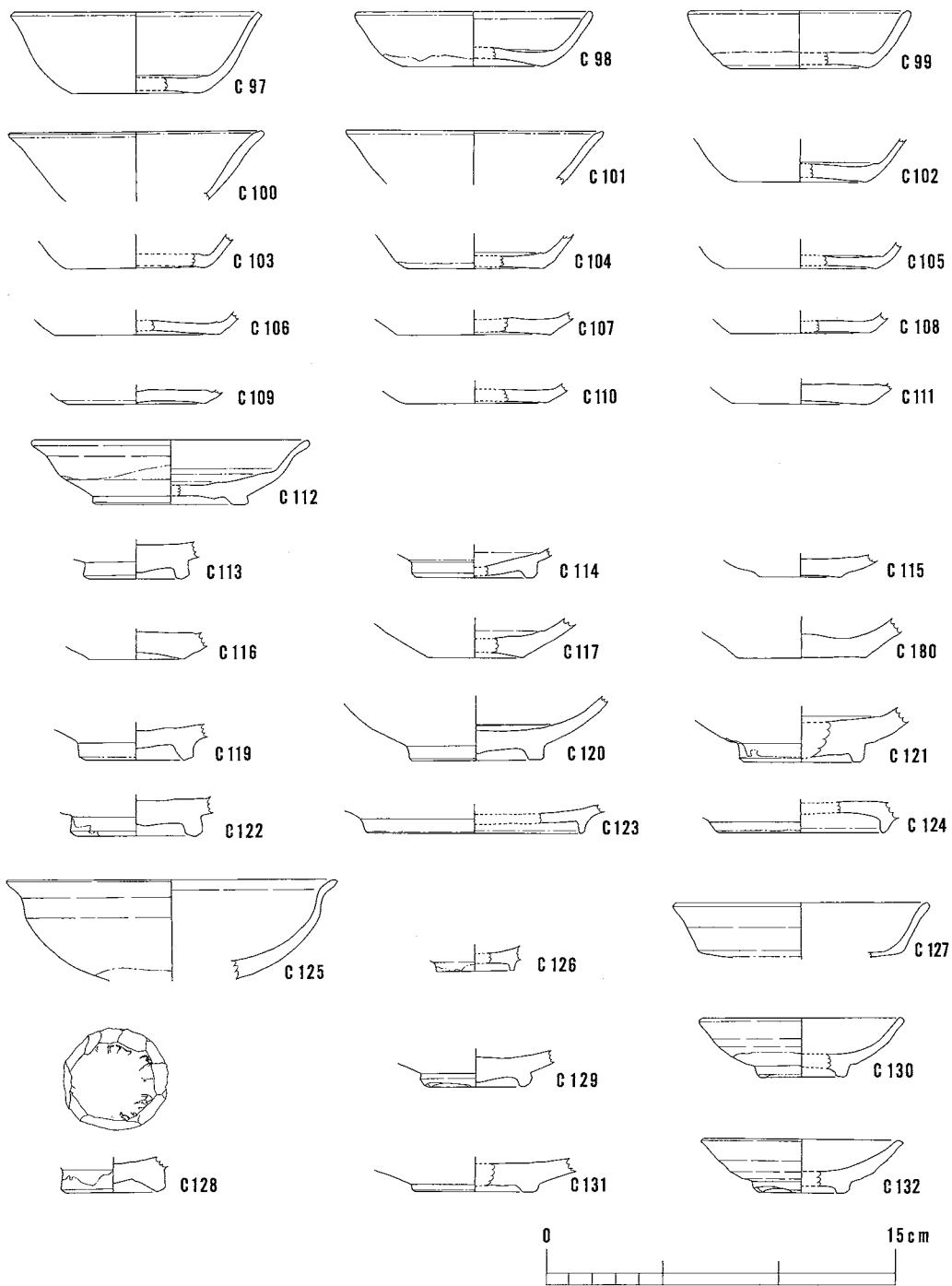


插图273 輸入陶磁器 (5) 白磁皿B III・B IV・B V・A IV・A VI・A VII・A VIII類、  
白磁碗A IX・A X類

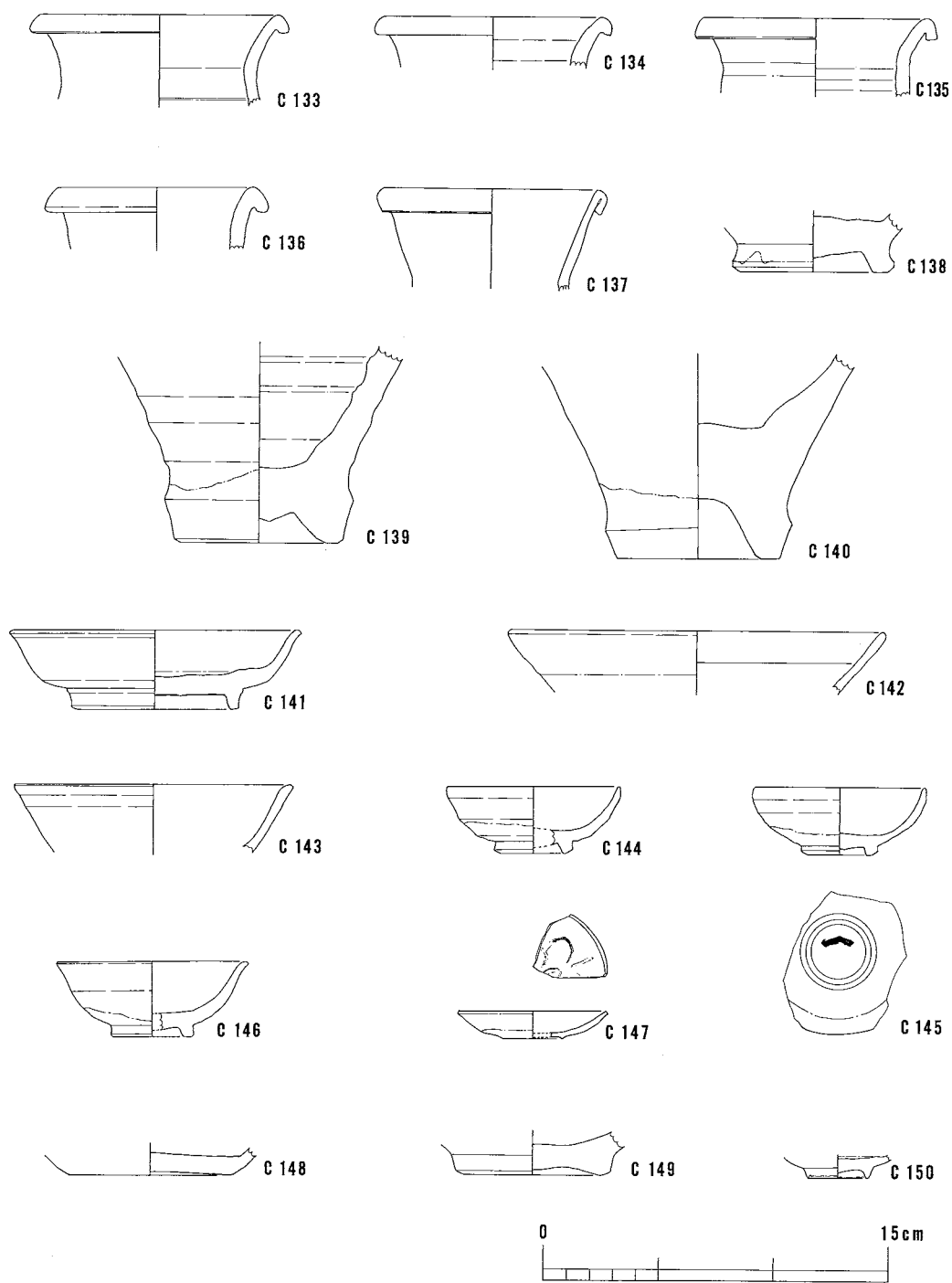


插图274 輸入陶磁器 (6) 白磁四耳壺・白磁皿A V類、白磁小碗A I・A II類



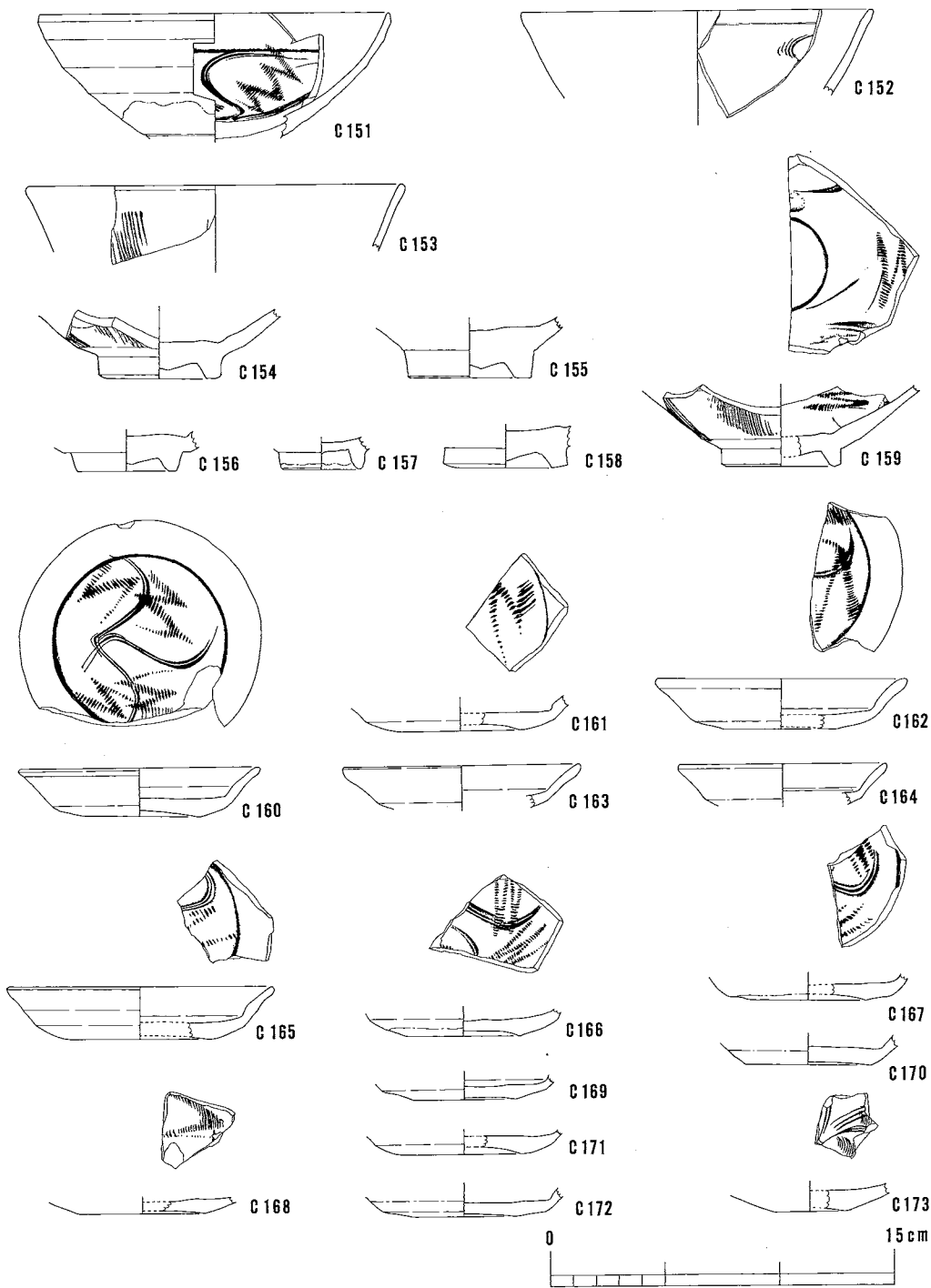
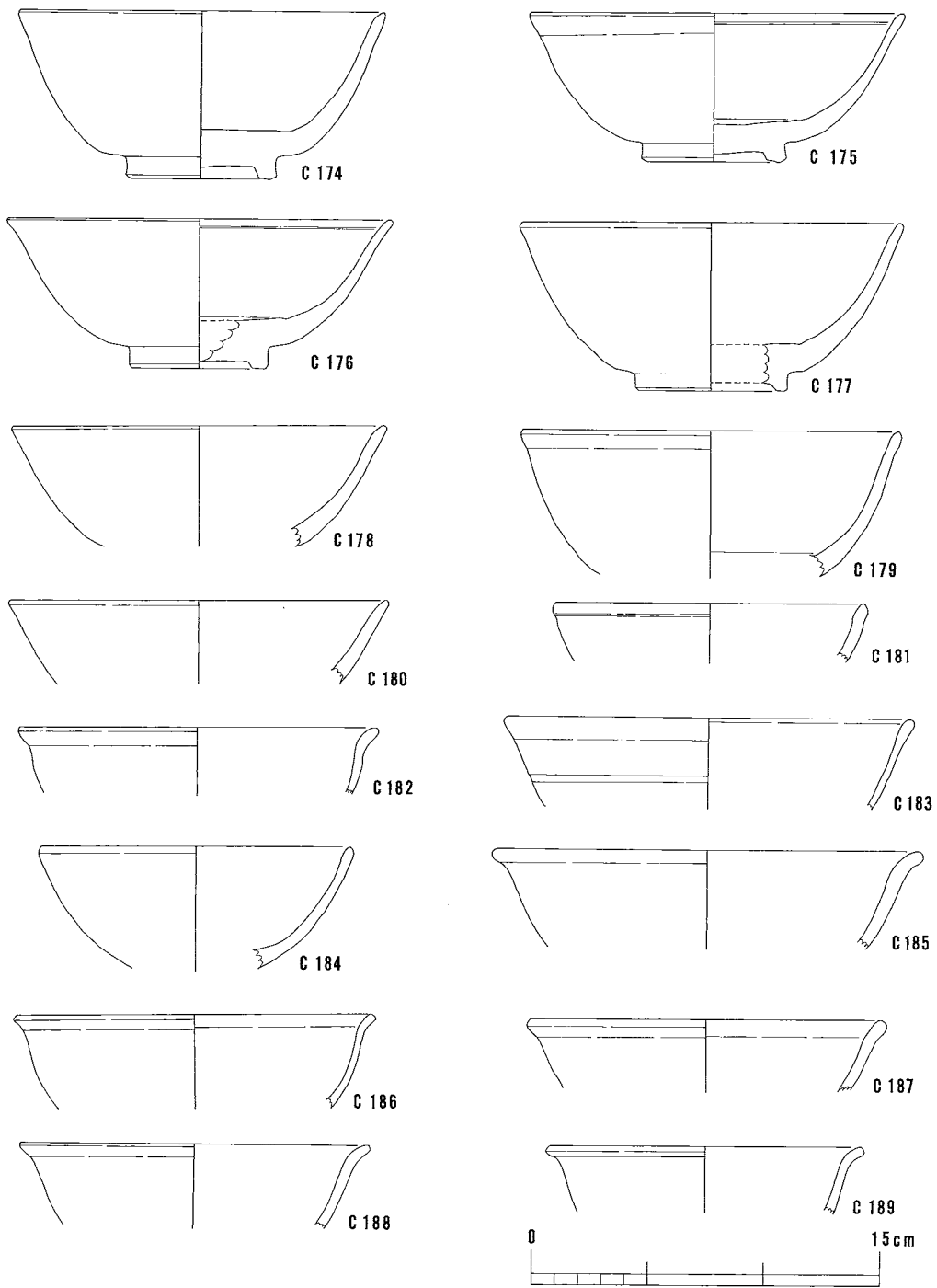
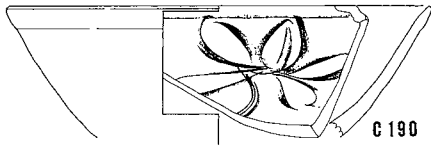


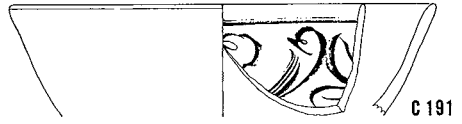
插图275 输入陶磁器 (7) 同安窰系青磁碗 I · II 類、III I · II · III 類



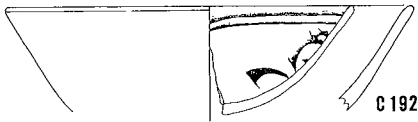
挿図276 輸入陶磁器 (8) 龍泉窯系青磁碗A I・A II・A III類



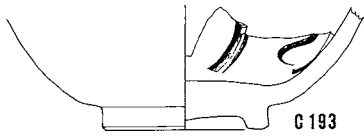
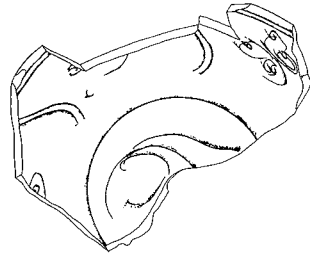
C 190



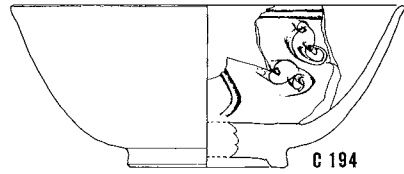
C 191



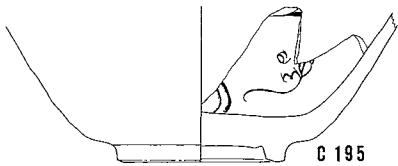
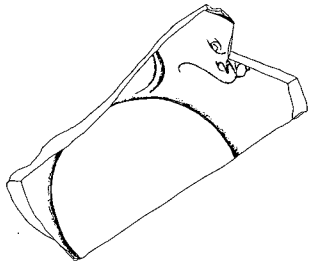
C 192



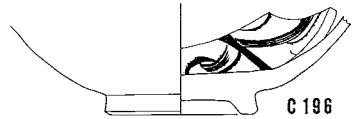
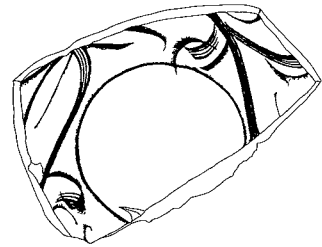
C 193



C 194



C 195



C 196

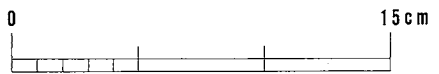
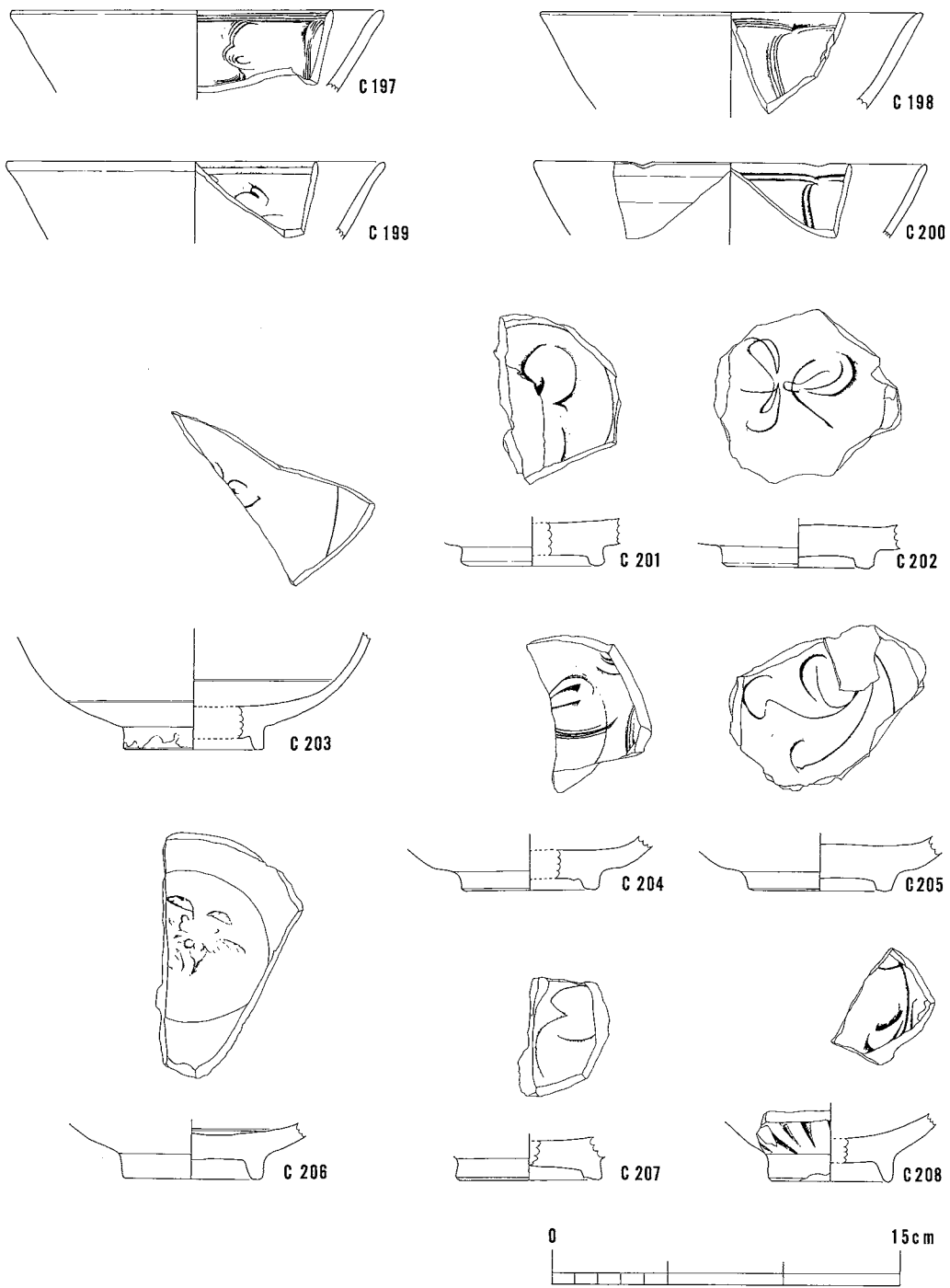


插图277 輸入陶磁器 (9) 龍泉窯系青磁碗B I・B II類



挿図278 輸入陶磁器 (10) 龍泉窯系青磁碗BⅢ・BⅣ類

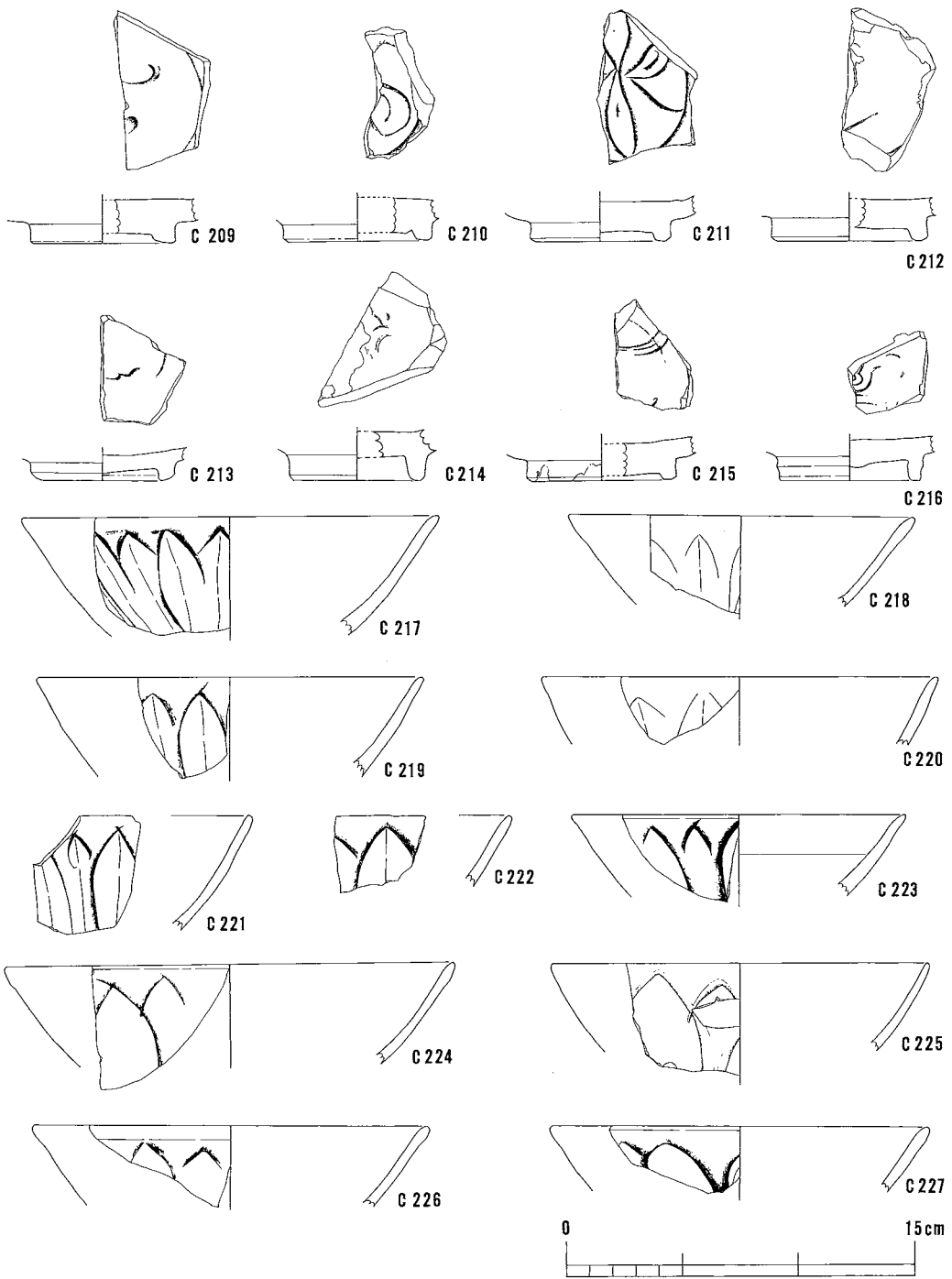


插图279 輸入陶磁器 (11) 龍泉窯系青磁碗B I・B II・B III類、C I・C II・C VI・C VII類

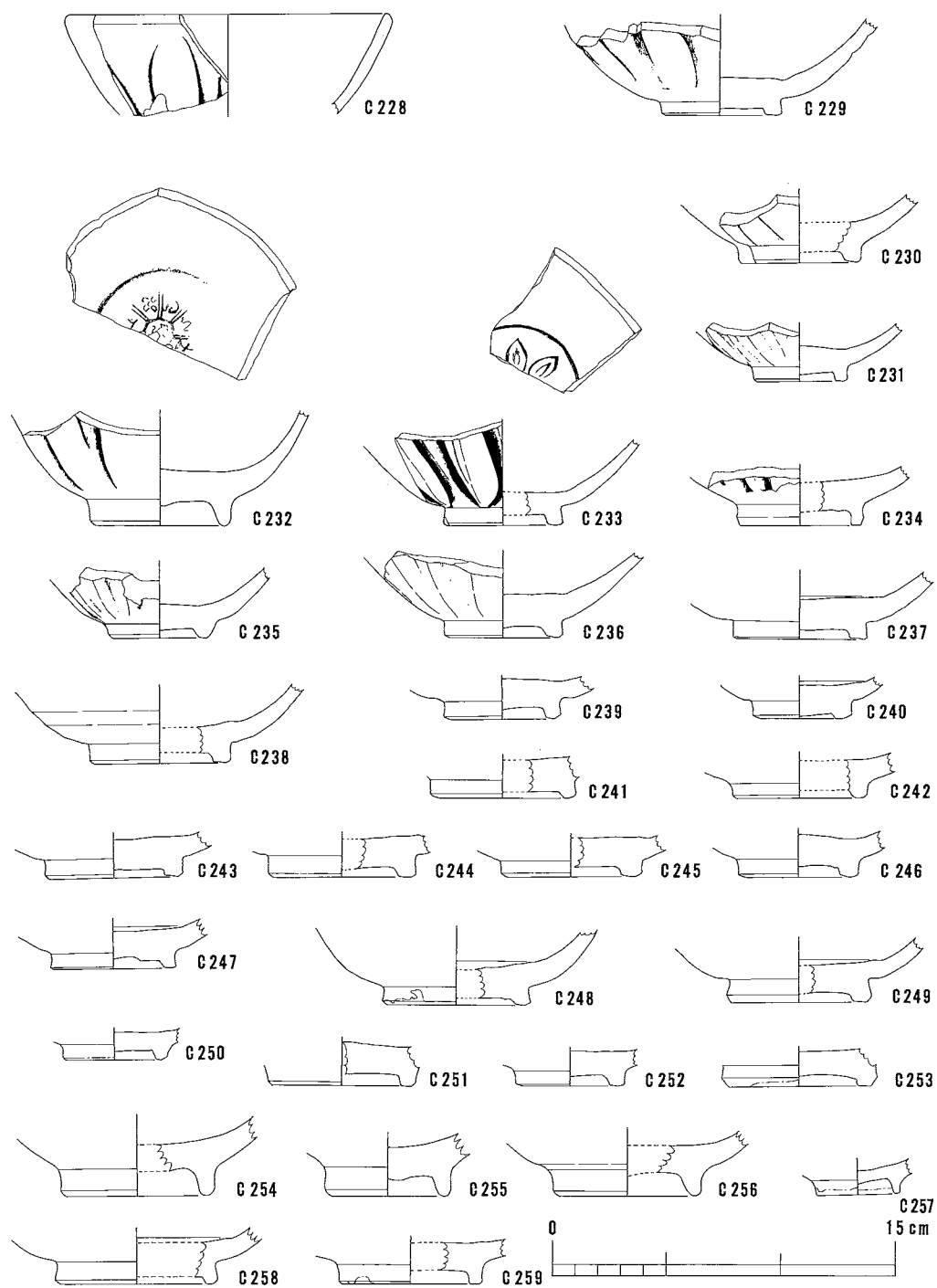


插图280 輸入陶磁器 (12) 龍泉窯系青磁碗C II・C III・CV・F I類

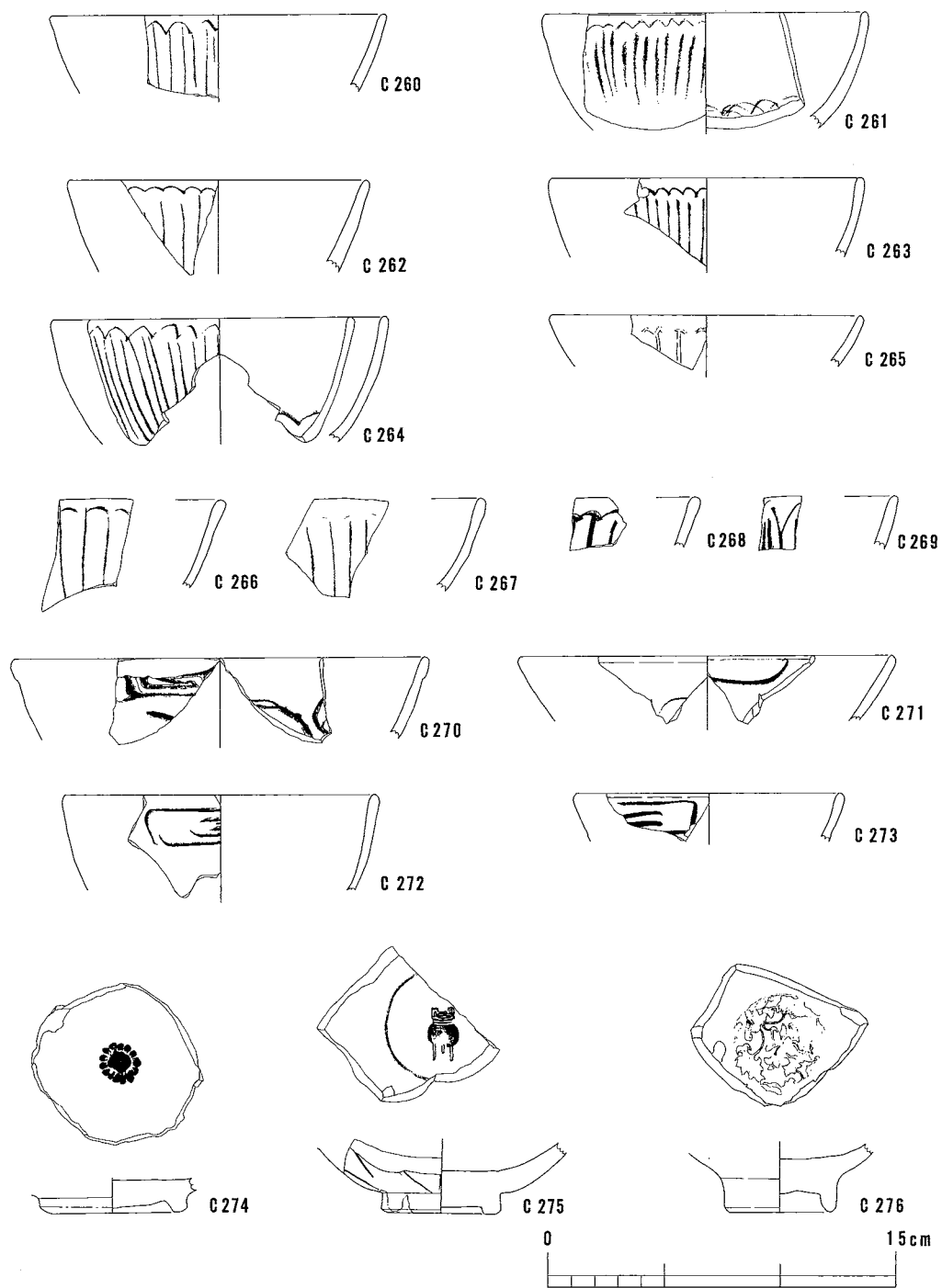


插图281 輸入陶磁器 (13) 龍泉窯系青磁碗CⅧ・CⅨ・DⅠ・EⅠ類

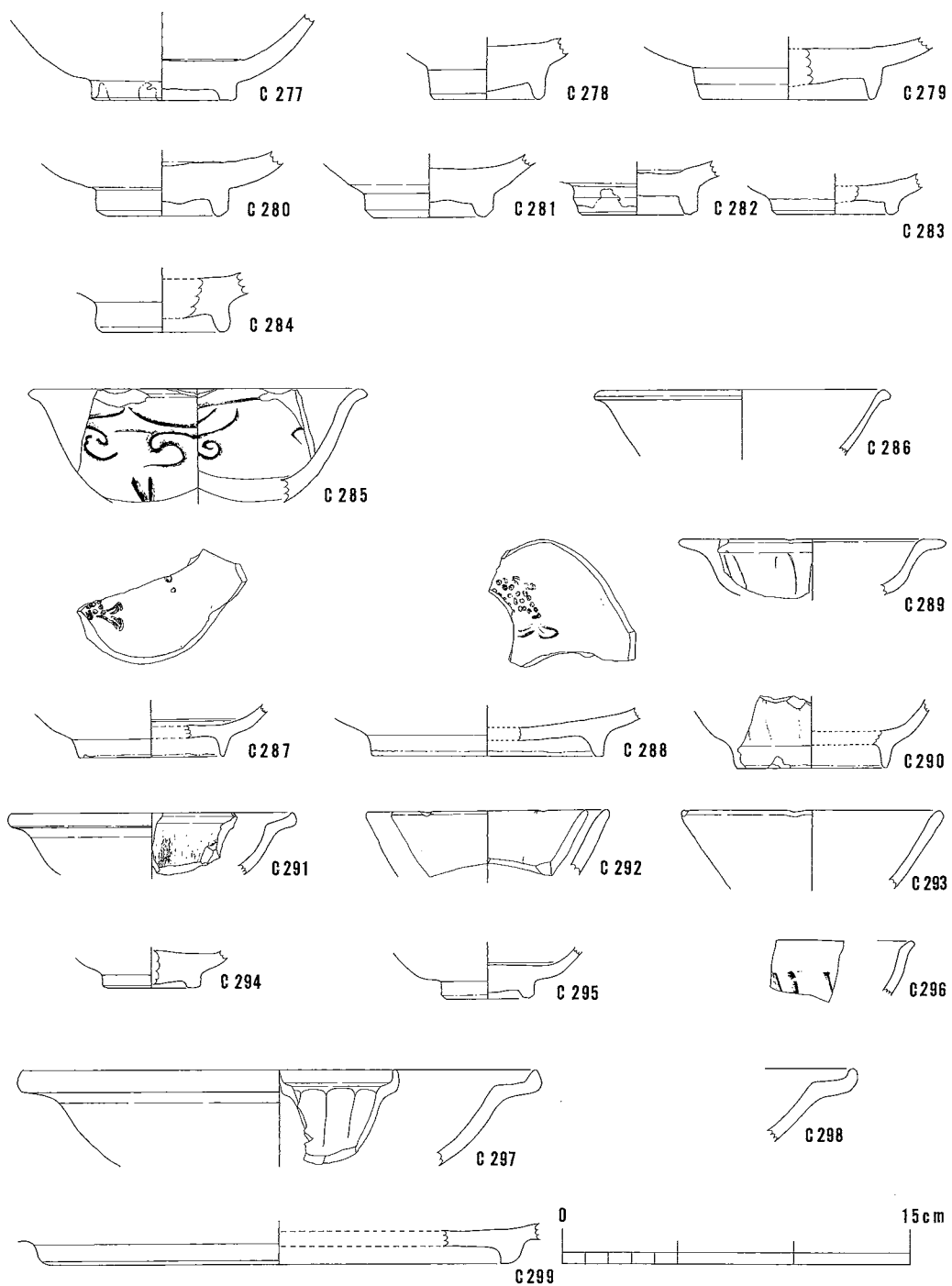
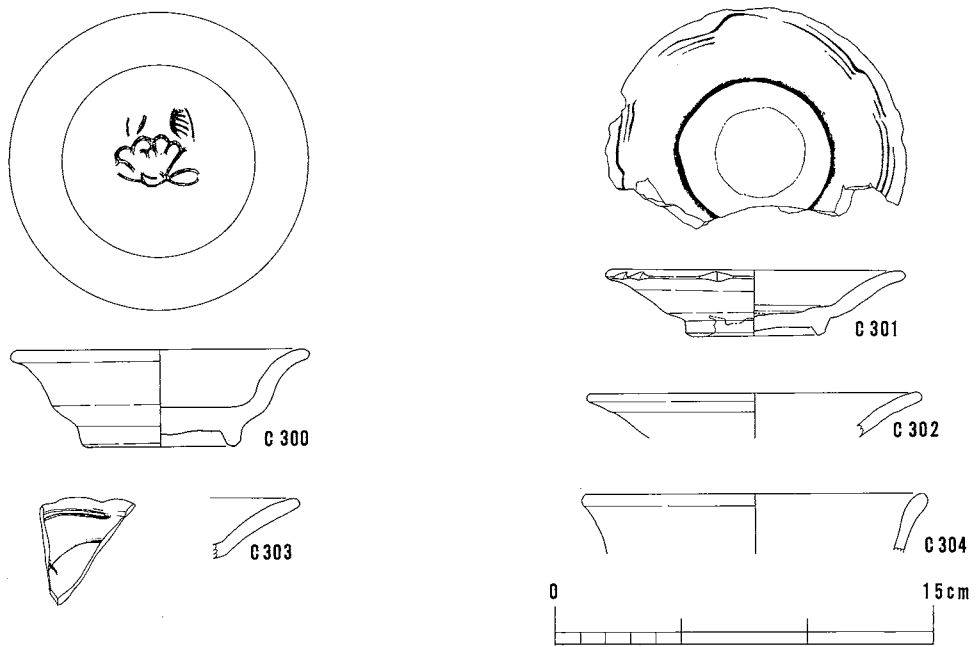


插图282 輸入陶磁器 (14) 龍泉窯系青磁碗B V類、杯I・II・III類、小碗I・II類、盤





挿図283 輸入陶磁器 (15) 龍泉窯系青磁皿 I・II類

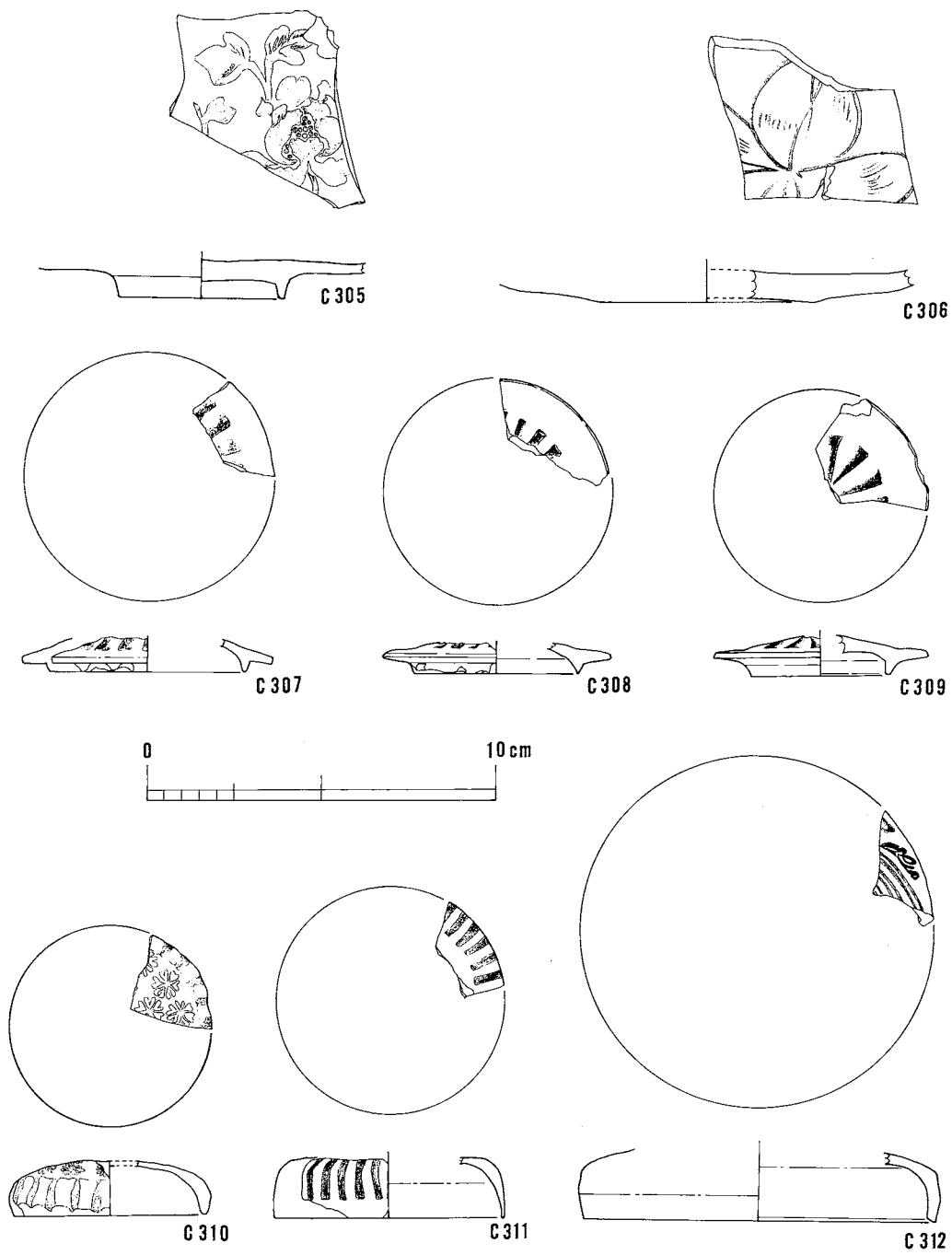
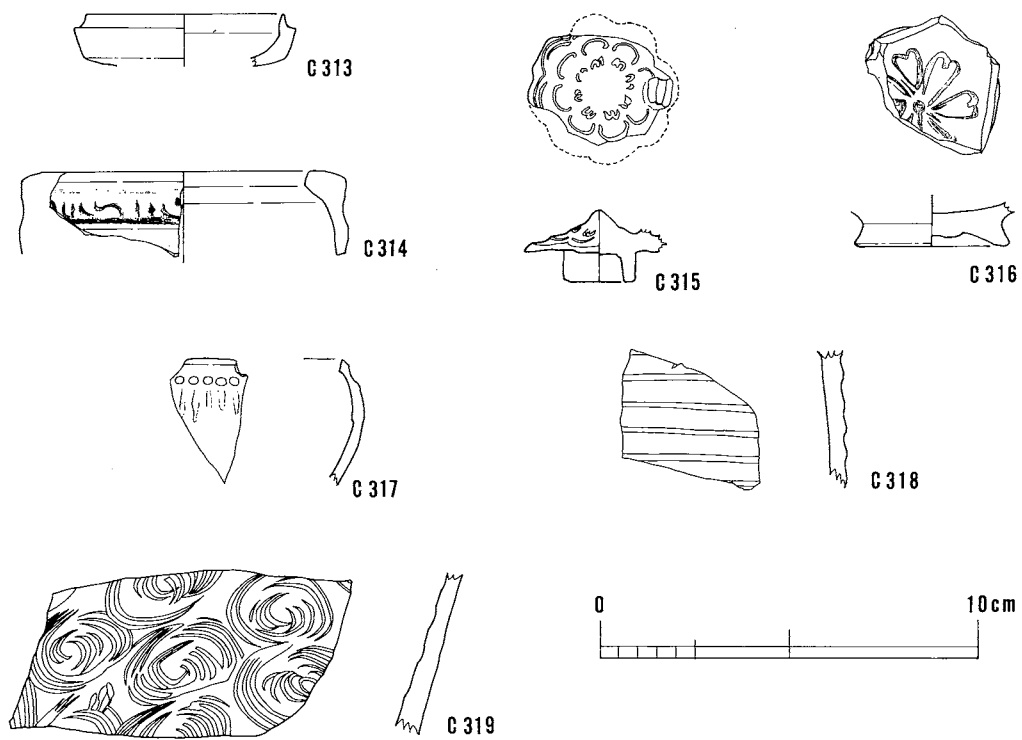


插图284 輸入陶磁器 (16) 青白磁皿・小壺蓋・合子蓋



挿図285 輸入陶磁器 (17) 青白磁合子身、注口蓋、香炉、小壺身、梅瓶その他

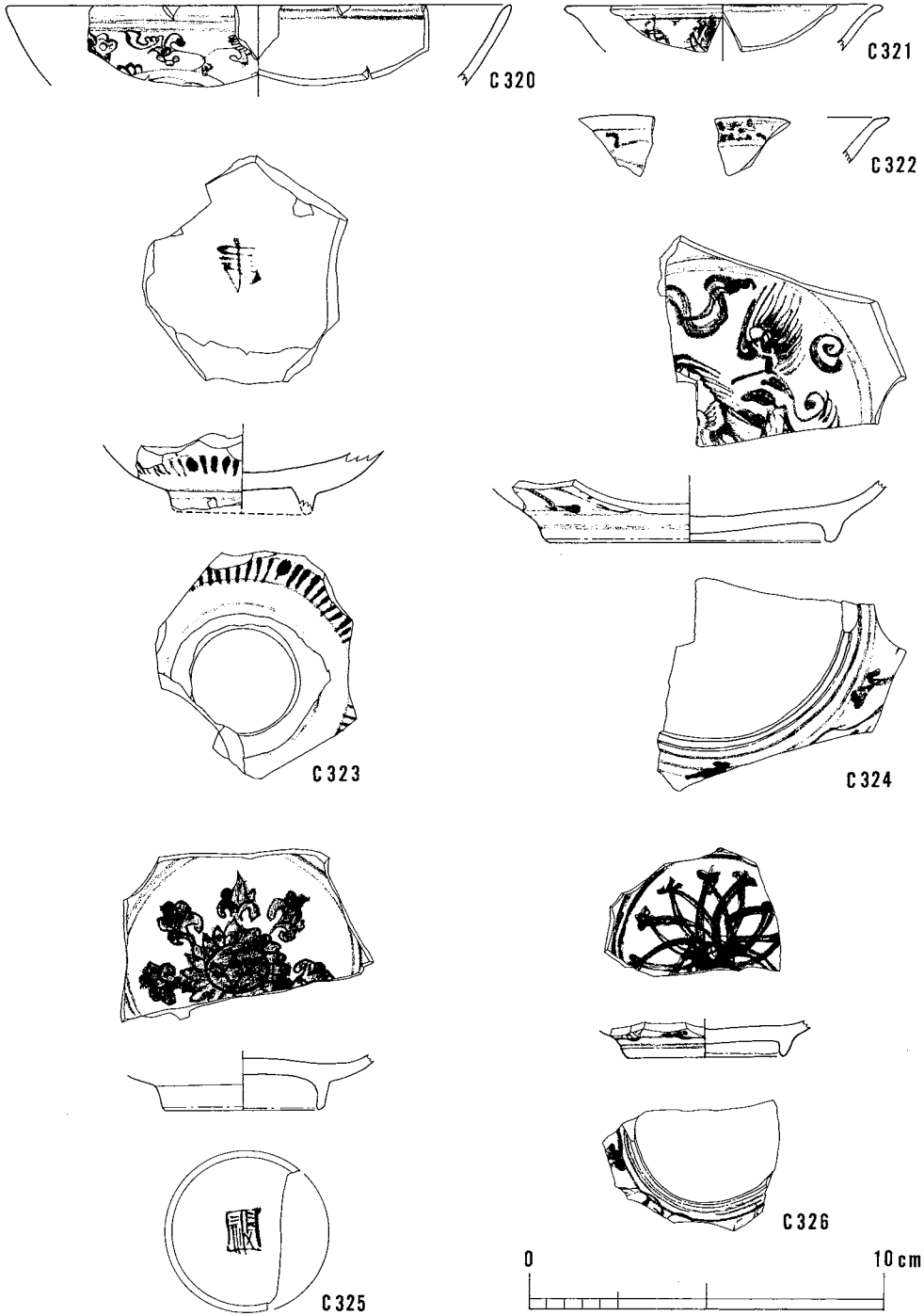


插图286 輸入陶磁器 (18) 青花皿、碗

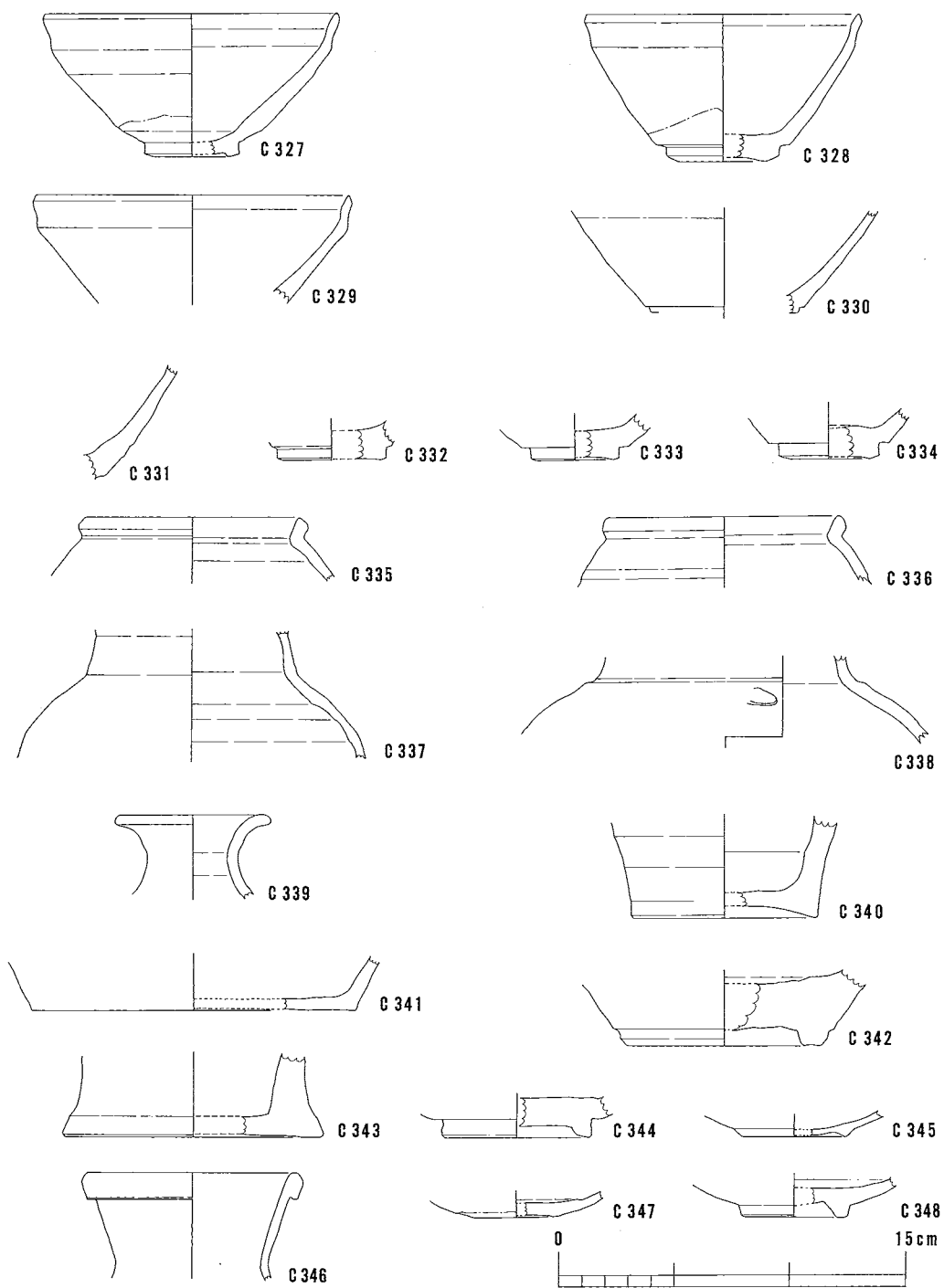


插图287 輸入陶磁器 (19) 施釉陶器 中国天目碗·壺·甕·四耳壺、朝鮮製壺·甕

#### 4. 金属製品

金属製品は武器・武具、容器、農具、工具、金具の61点（1～61）と金具のうち多量の釘235点（62～296）及び火打金などがある。金属製品は鉄製品・銅製品と古銭があり各地区から出土している（挿図288・306）。

##### (1) 鉄製品・銅製品

##### 武器・武具

武器として刀3点（1～3）・刀装具1点（4）・刀子7点（5～11）・小柄5点（12～16）・鏃3点（17～19）と武具の鎧小札2点がある。

刀は鍛造品で刃渡り七、八寸の中振りの刀（1・2）と五寸の小振りの刀（3）がある。3は墓から出土しており副葬品である。

刀子は刃渡り四、五寸の刀子がある。15は墓から出土しており、これも副葬品である。

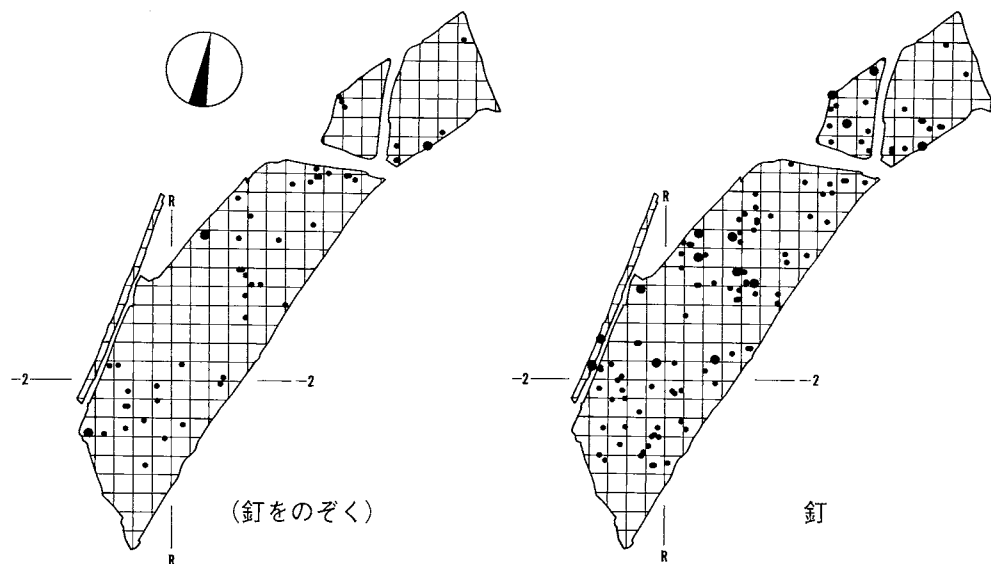
小柄は刃渡り一寸五分から二寸の刀刃は鉄、柄は銅製造りで、特に柄は板造りで滑りの刻みを入れた18もある。

刀装具は銅製品である。

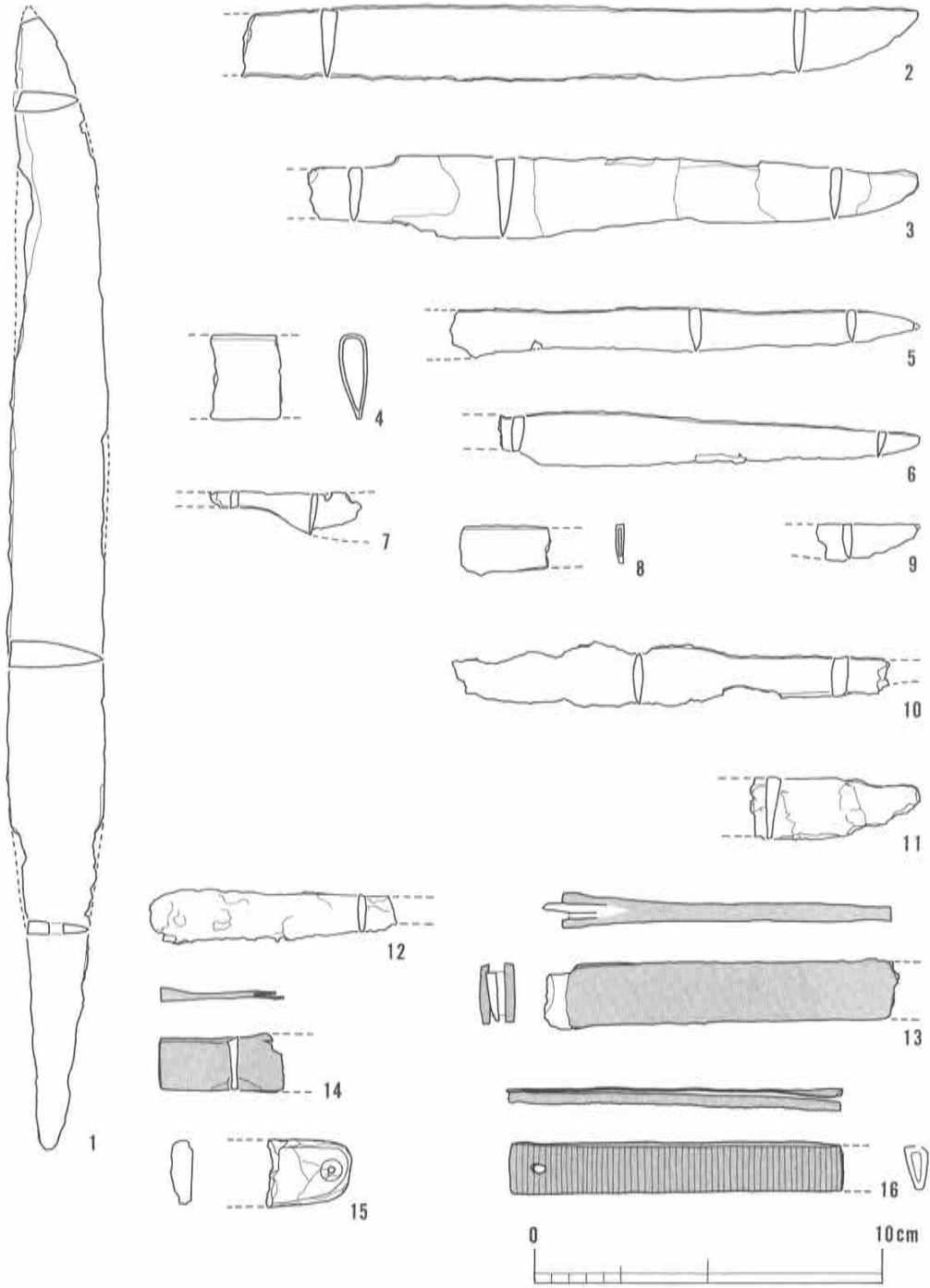
鏃が雁又鏃17、柳葉形18と鑿形の19がある。

鎧小札はいづれも欠損しているが、皮紐通しの小孔があいている。

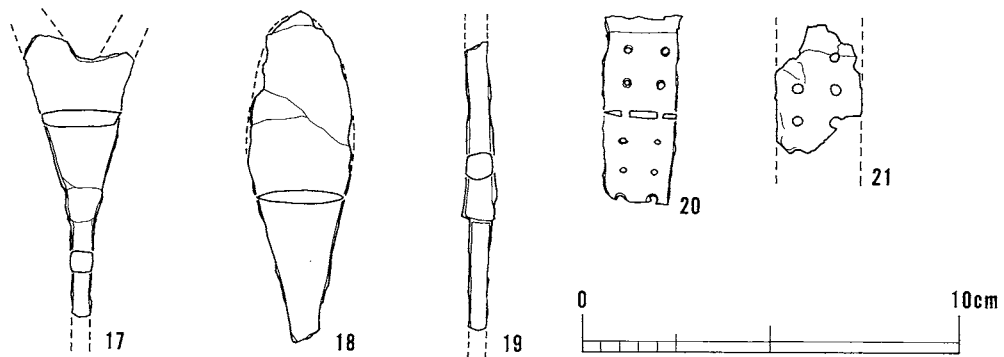
以上、武器・武具類の多くが方形館跡堀から出土している。



挿図288 金属製品出土状況



挿図289 鉄製品 (1) 刀・刀子・小柄



挿図290 鉄製品 (2) 鎌・小札

### 容器

容器として小壺（蓋・身）、茶釜（蓋）、鍋（身・把手）がある。

蓋は22・23があり、小壺24などの蓋となる。

茶釜の蓋25は直径10cmを復原し、摘みの環は銅製品である。

鍋は多く存在すると思われるが、残っているものが少なく土師器鍋の原形をなすもので身と把手がある。28・30とも口径九寸の鉄鍋を復原する。口縁形態が別れ土師器の模倣品は、28は14世紀前半代、30は14世紀末から15世紀前半に出現している。把手は口径九寸の鉄鍋に付くものである。27は返りは不明であり、把手かどうかは不明。

### 農具

農具として鎌と鋤先・鍬先がある。

鎌32は近世の井戸状遺構SE07からの出土の参考品で、柄に井桁の手印を刻んでいる。31は柄に付け、目釘で留める返りの部分である。

鋤先33は内堀から出土しており、堀開削・修復時の工具の可能性はある。

### 工具

工具として鑿・鑿がある。鑿は刃先がなく、刃厚みがあるもので、鑿は鋭い刃先を残すものである。ただし、付載にある鉄器の硬度分析から、鍔とした方が良いものがある。

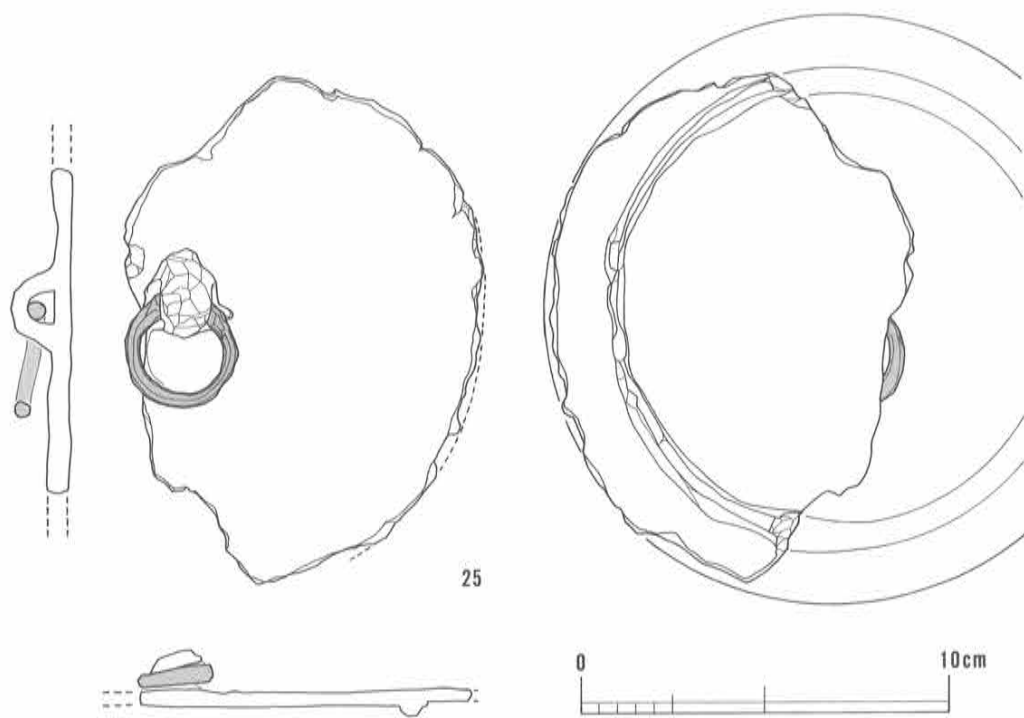
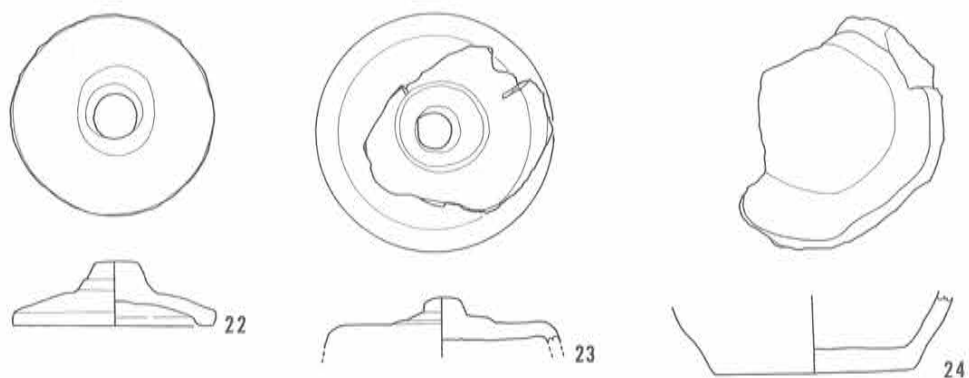
### 金具

金具としては錠、煽り止め、環などと釘が多量に出土している。

錠は48は墓跡から出土しており、木棺に使われたものである。本来は建物も材木を繋ぐものである。

煽り止め50・51は堀などから出土しており、建物の扉を復原する金具でその他にピン状の金具や環状金具がある。



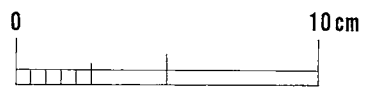
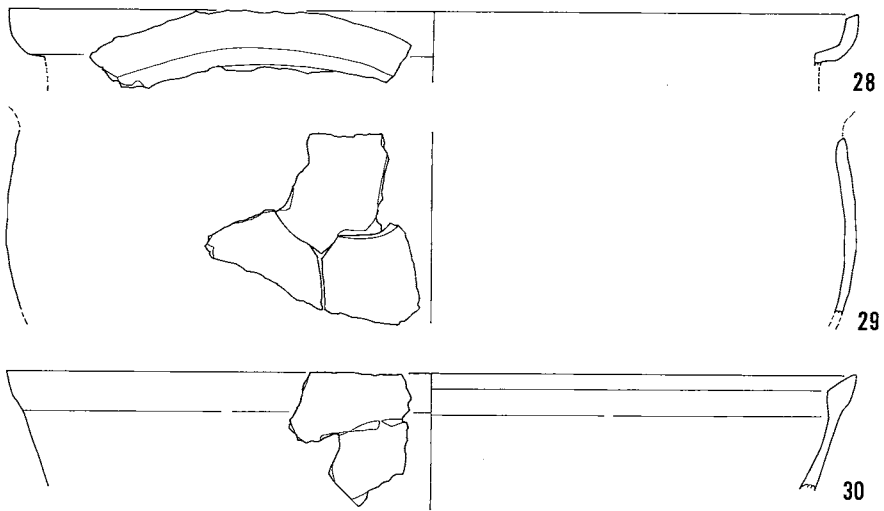
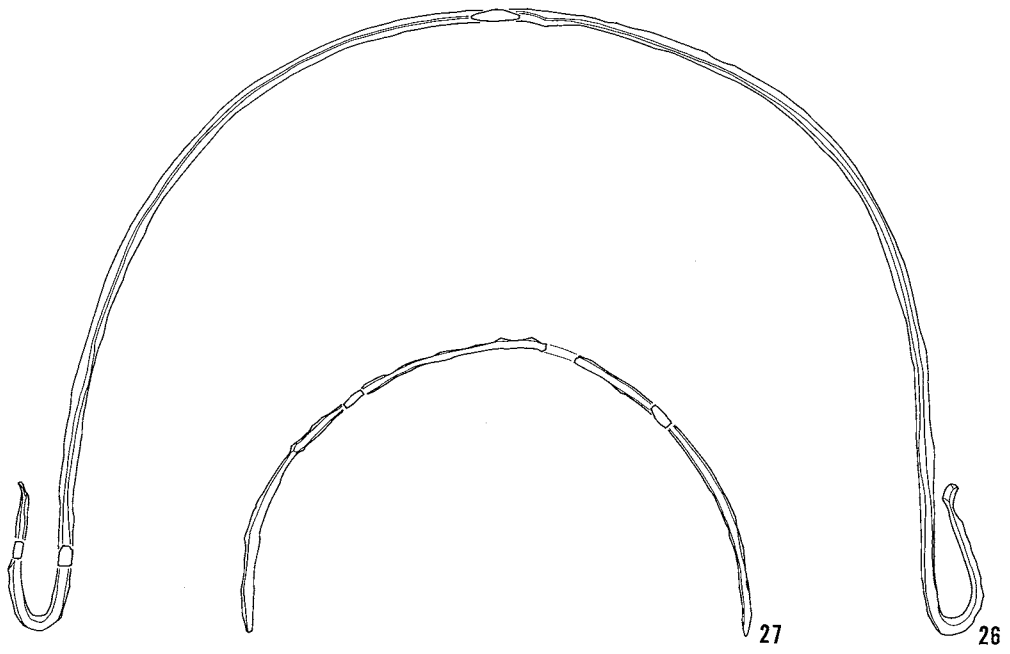


挿図291 鉄製品 (3) 容器 蓋・身

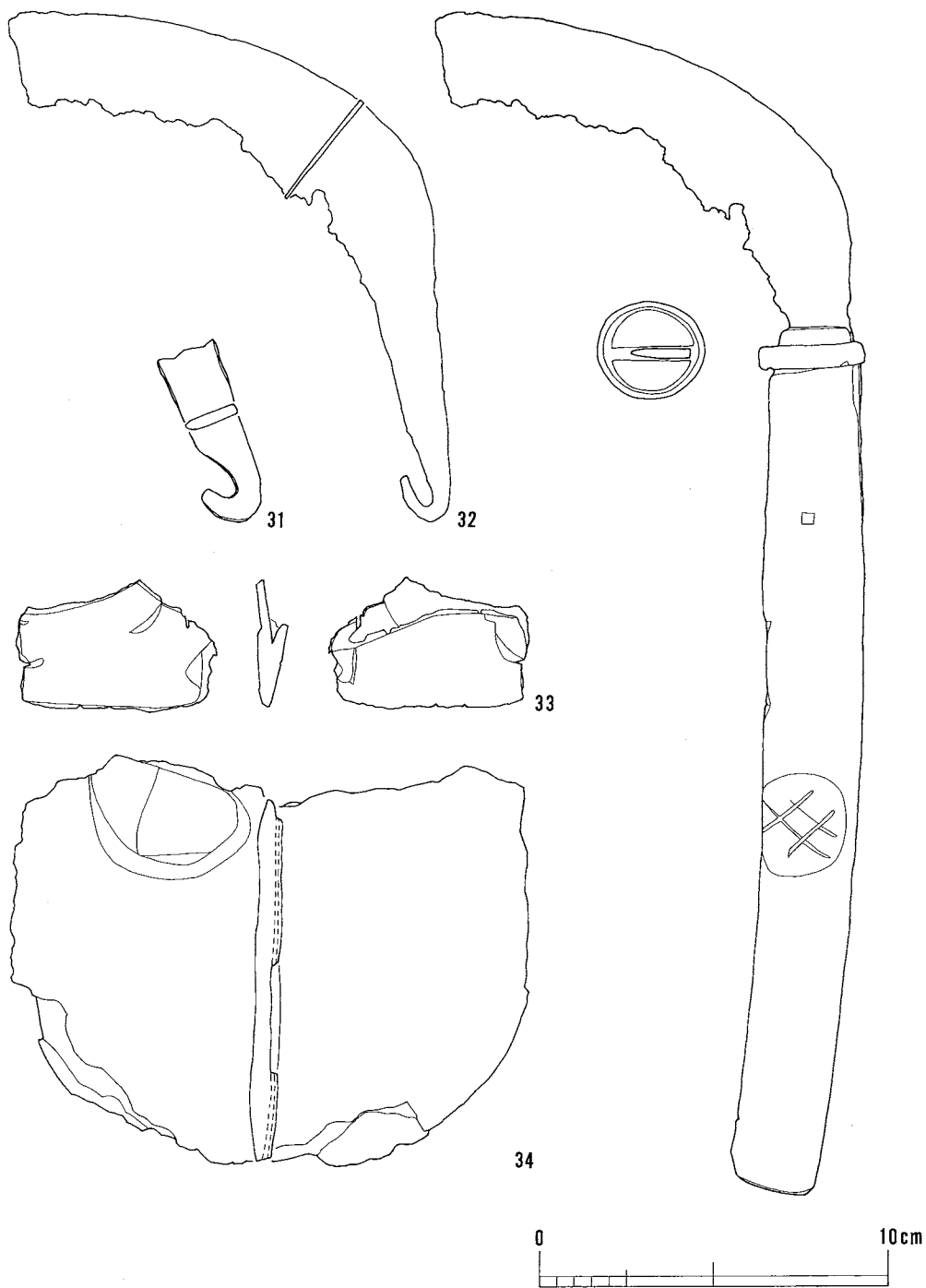
### 釘

釘は、建築用の和釘で、断面方形の角釘である。頭をつくり出しのない「切釘類」と、頭が基部から曲がって作られる「折釘類」、頭をつくり出した「頭つくり出し類」とがある。

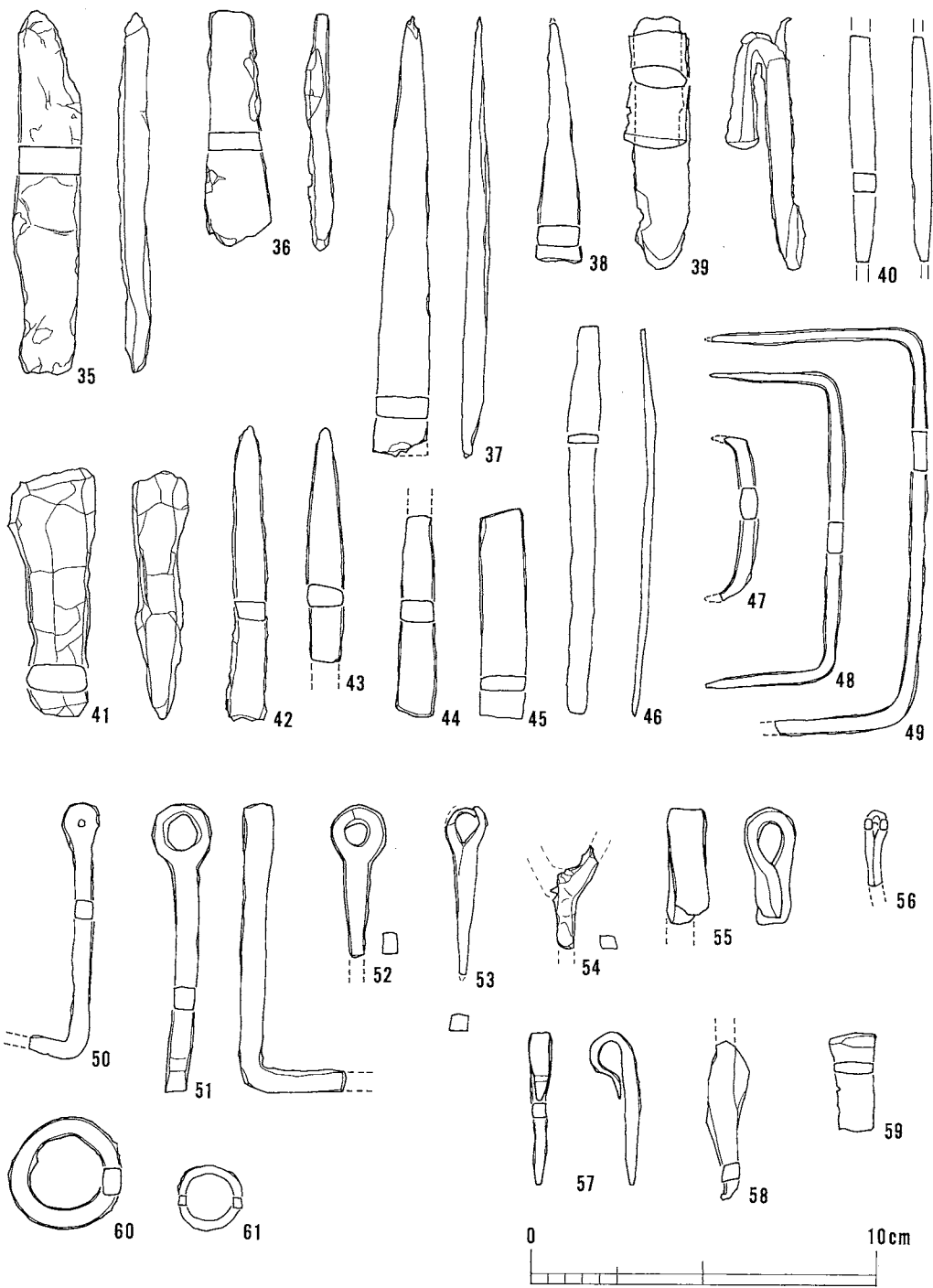
切釘類は合釘状のもので107・210・229など、折釘類は81・89・90・157・267・272などで、その他多くは頭つくり出し類の釘で頭巻き状を呈するものもある。



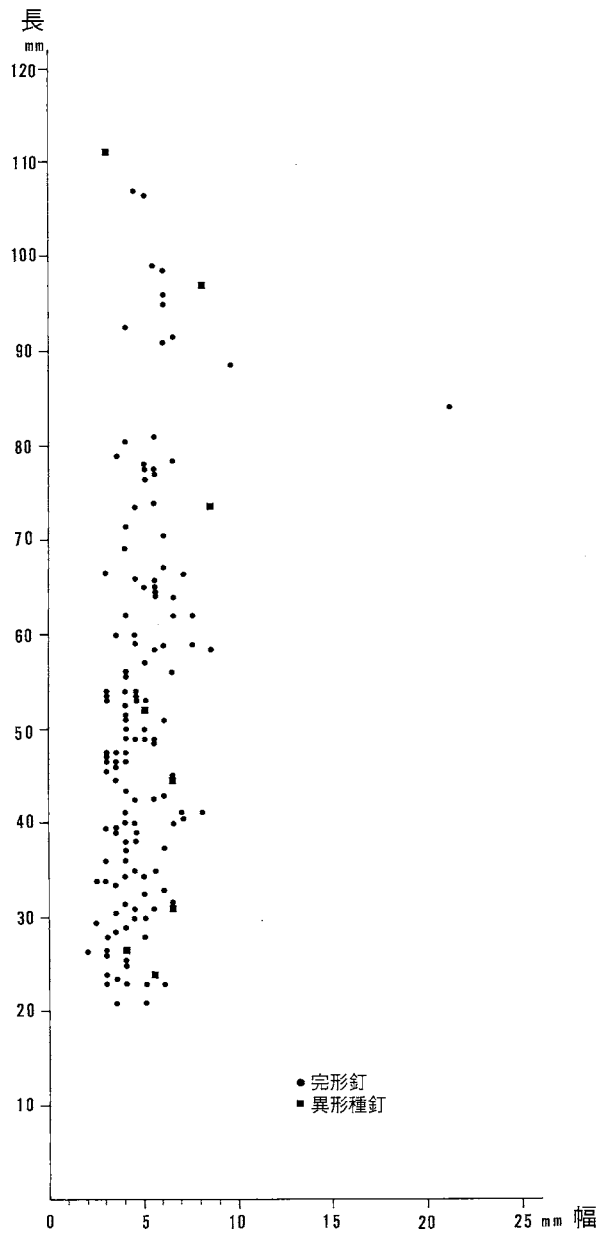
挿図292 鉄製品 (4) 鍋・把手



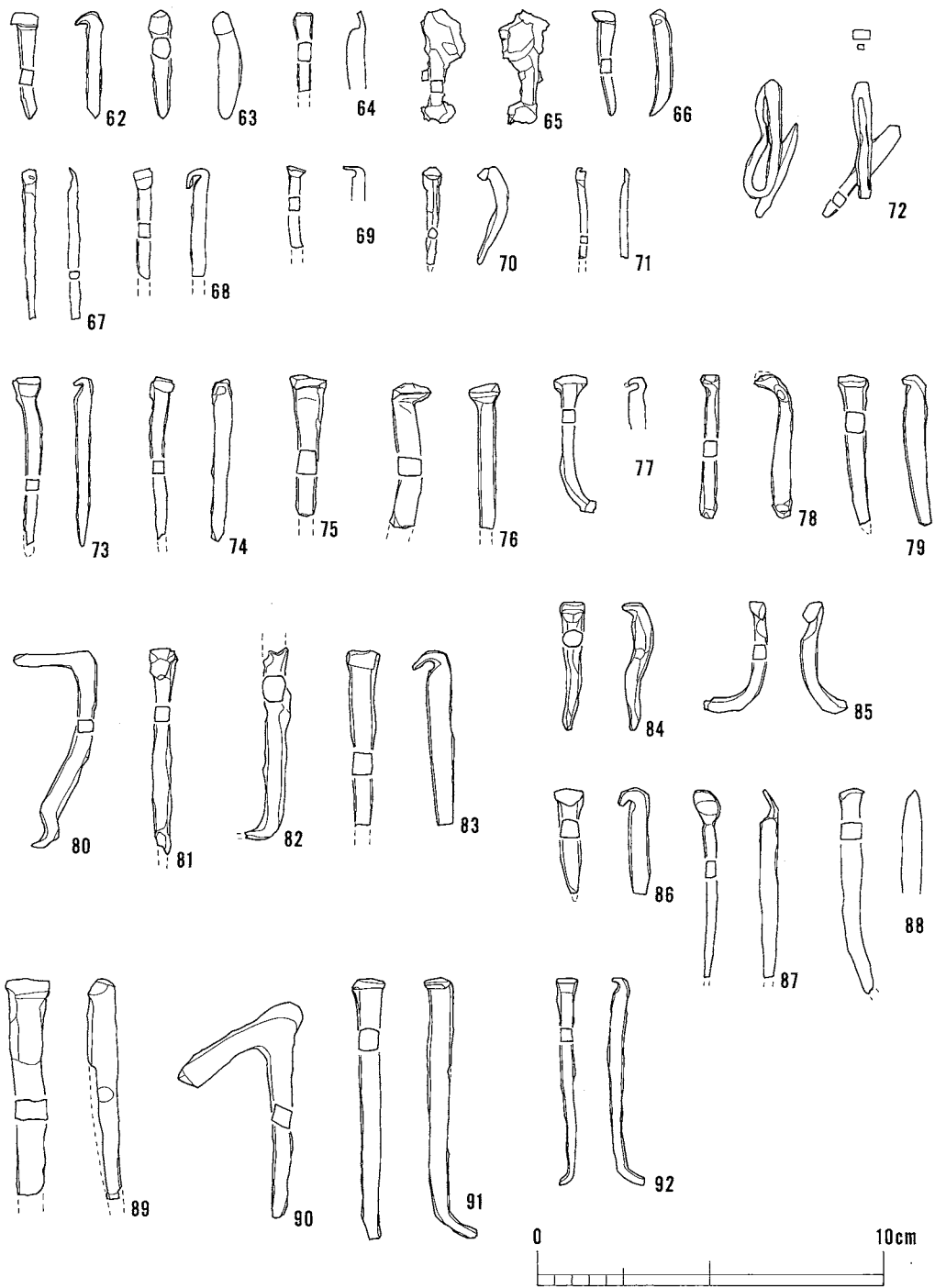
挿図293 鉄製品 (5) 鎌・鋤・鋏



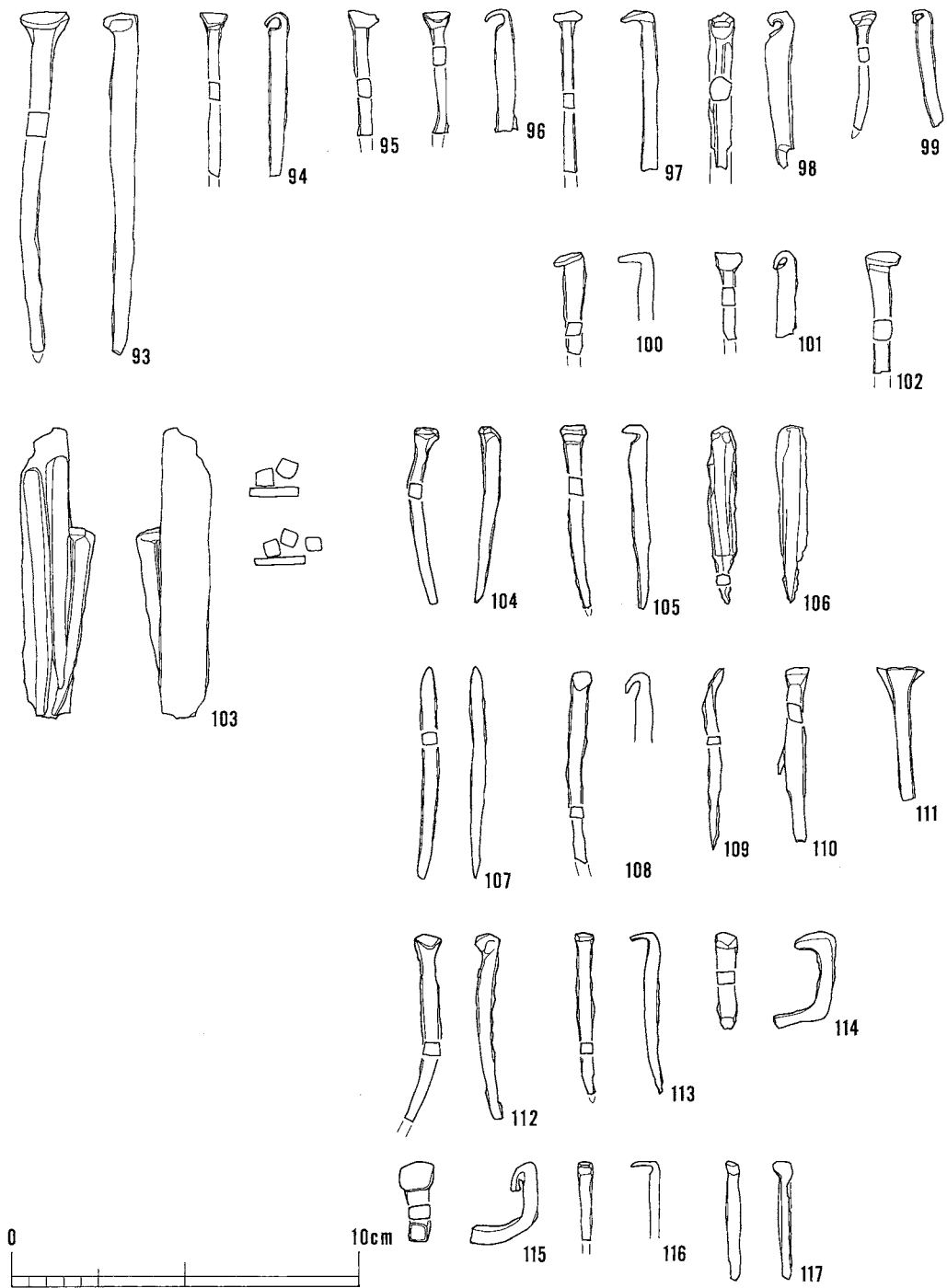
挿図294 鉄製品(6) 工具・道具



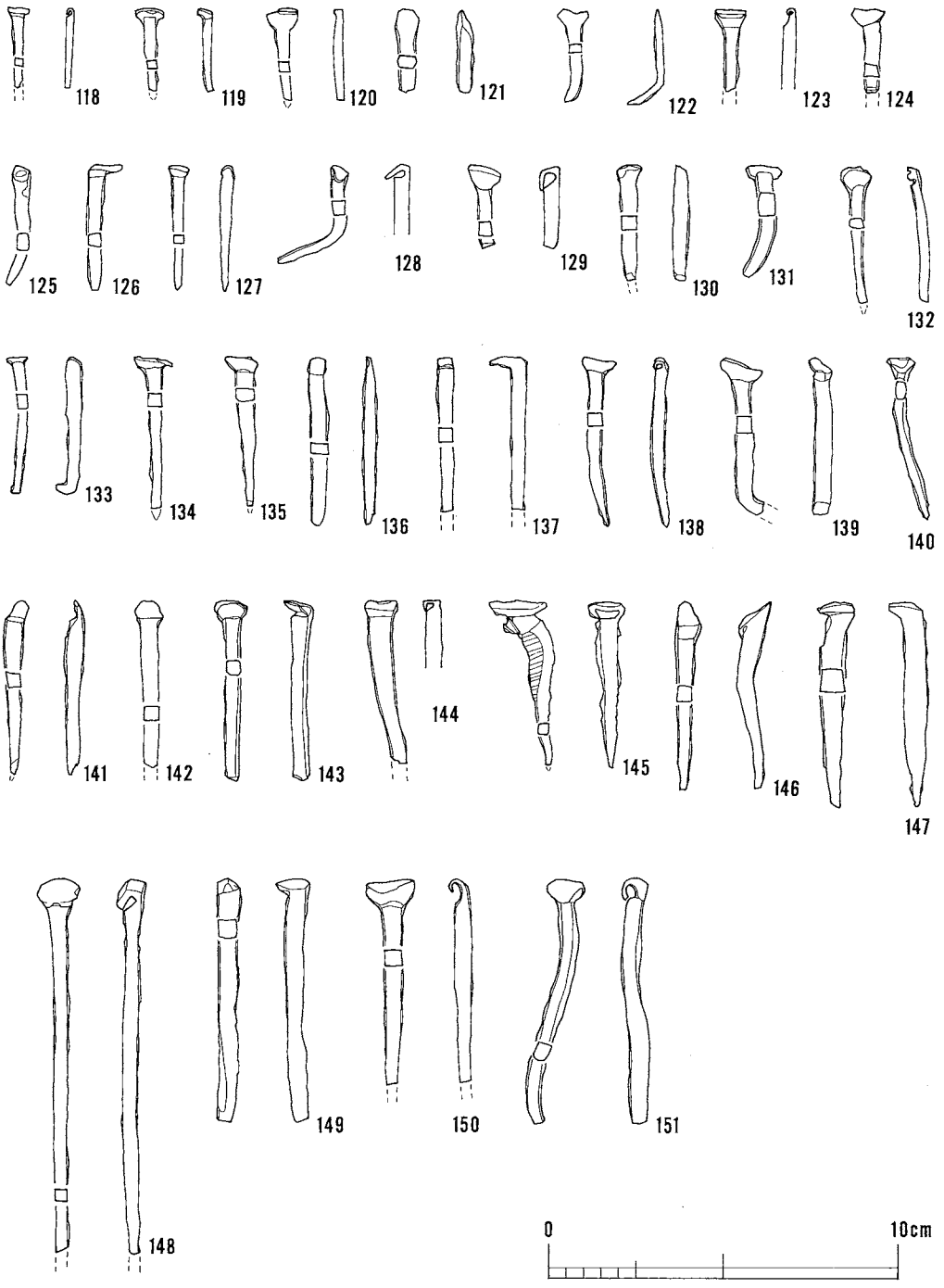
挿図295 釘の法量と個数



挿図296 鉄製品 (7) 釘 (1)

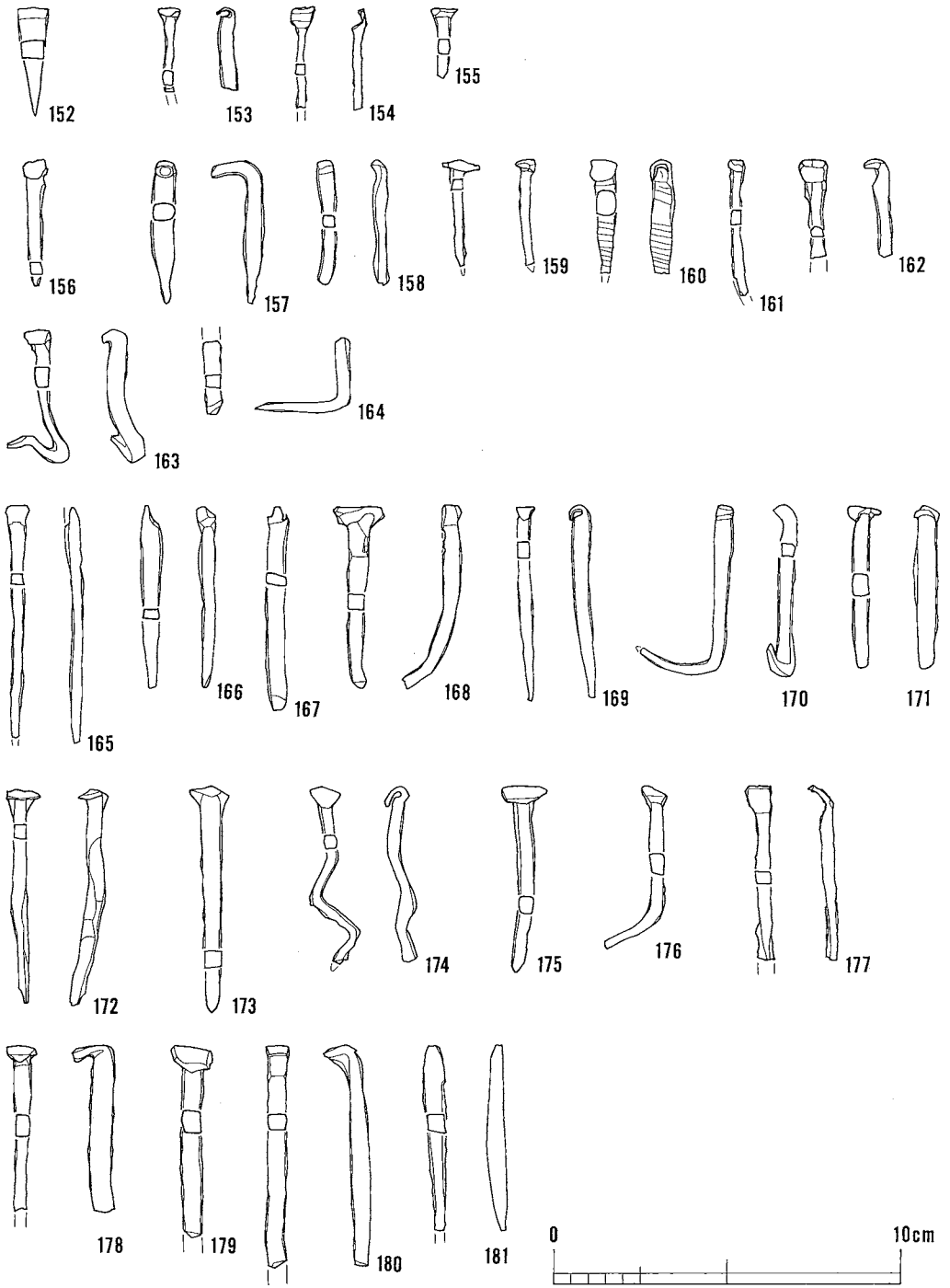


挿図297 鉄製品 (8) 釘 (2)

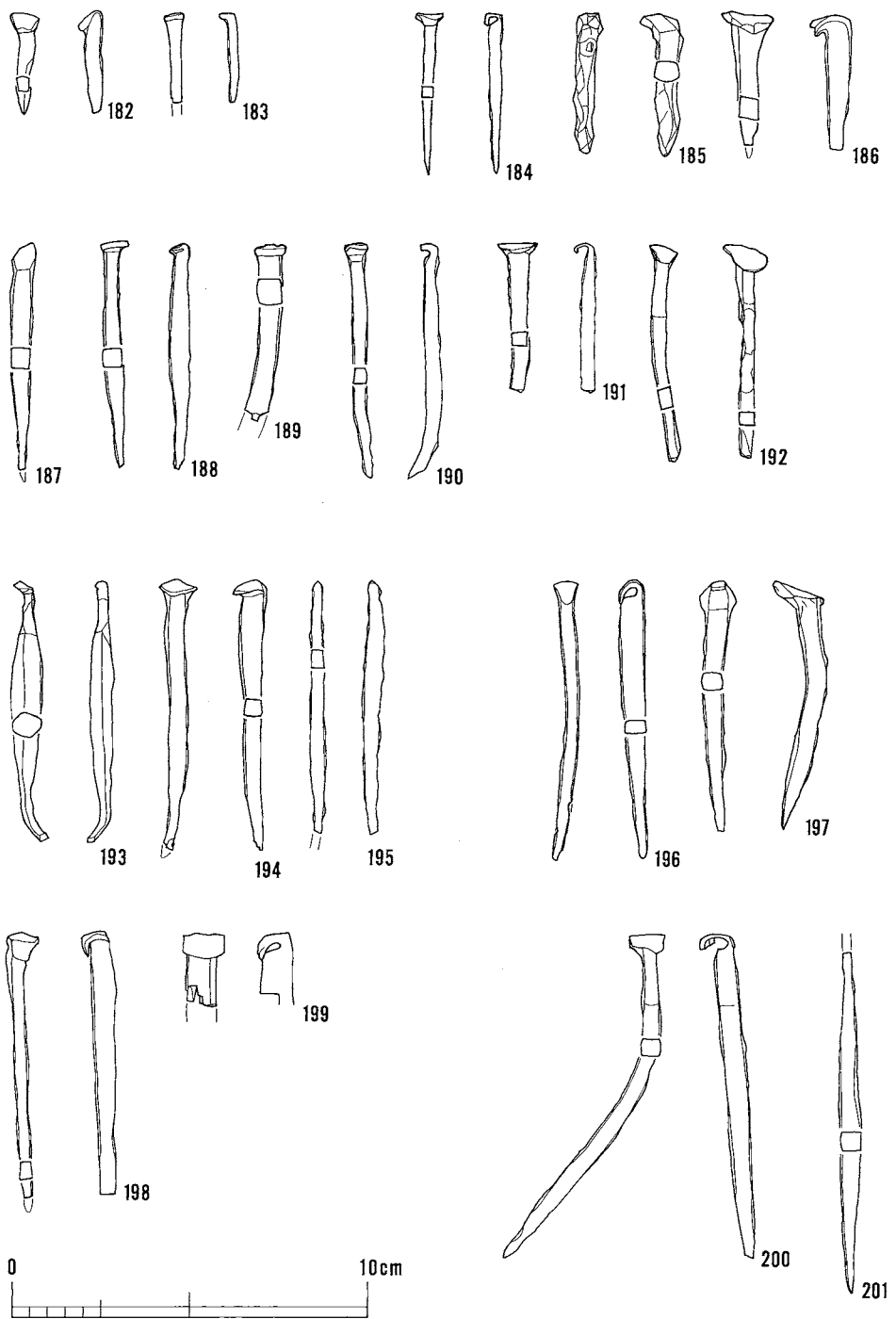


挿図298 鉄製品 (9) 釘 (3)





挿図299 鉄製品 (10) 釘 (4)



挿図300 鉄製品 (11) 釘 (5)

釘の法量は挿図295にみるとおり、長さは一寸から四寸がある。

他に平釘状を呈する釘もある。

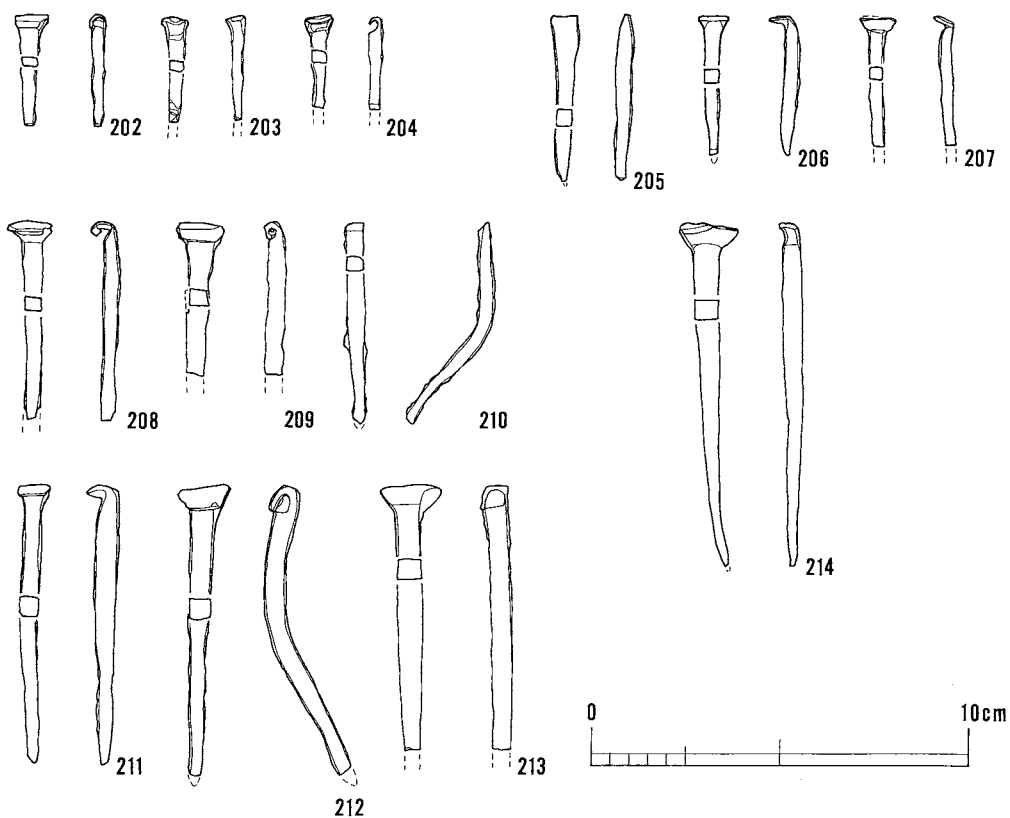
### 火打金・紡錘車他

照明具の発火具の火打金が3点あるが、山形の火打金で加飾の施された279のように日光男体山例のような非実用品のもと、紐通し孔と若干の山形加工時の造りがある携帯用の277・278がある。279花卉状の透かし孔が見事である。

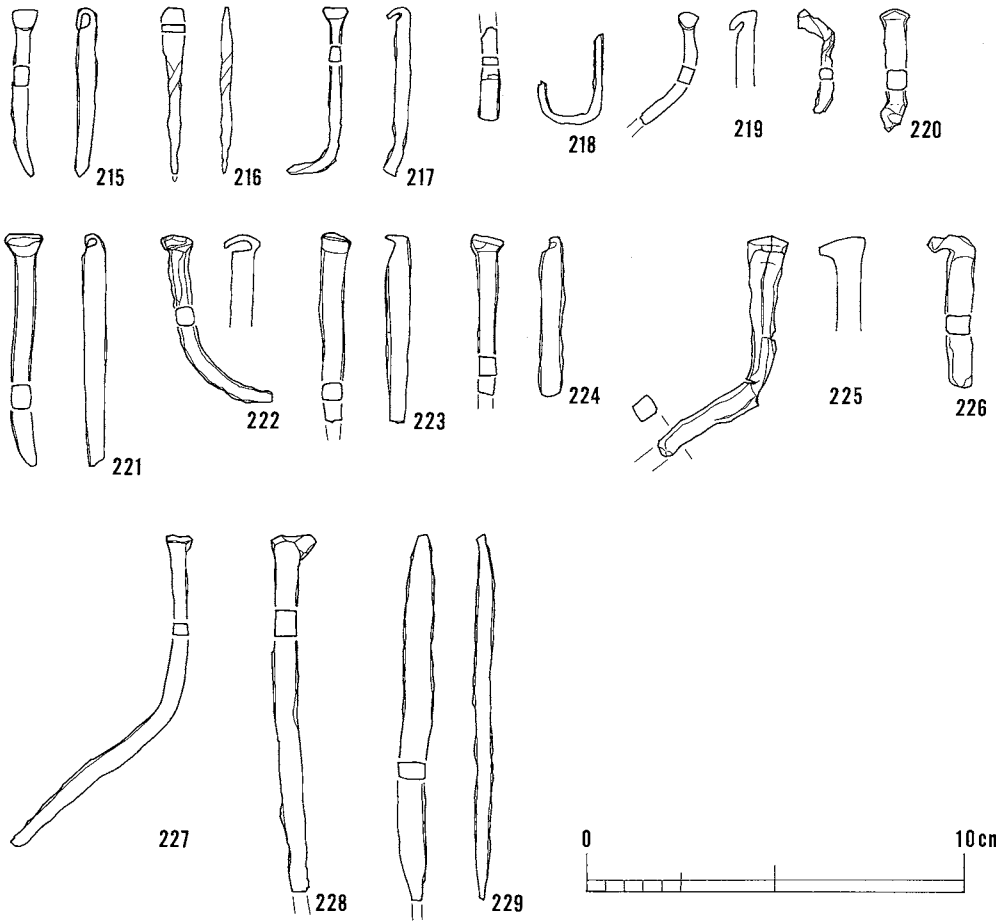
281は紡錘車の円盤状の車とした。他に飾りとした283や不明のものがある。

284から288は板状のもので、鍋の胴部破片や火打金の一部とも考えるが不明のものがある。

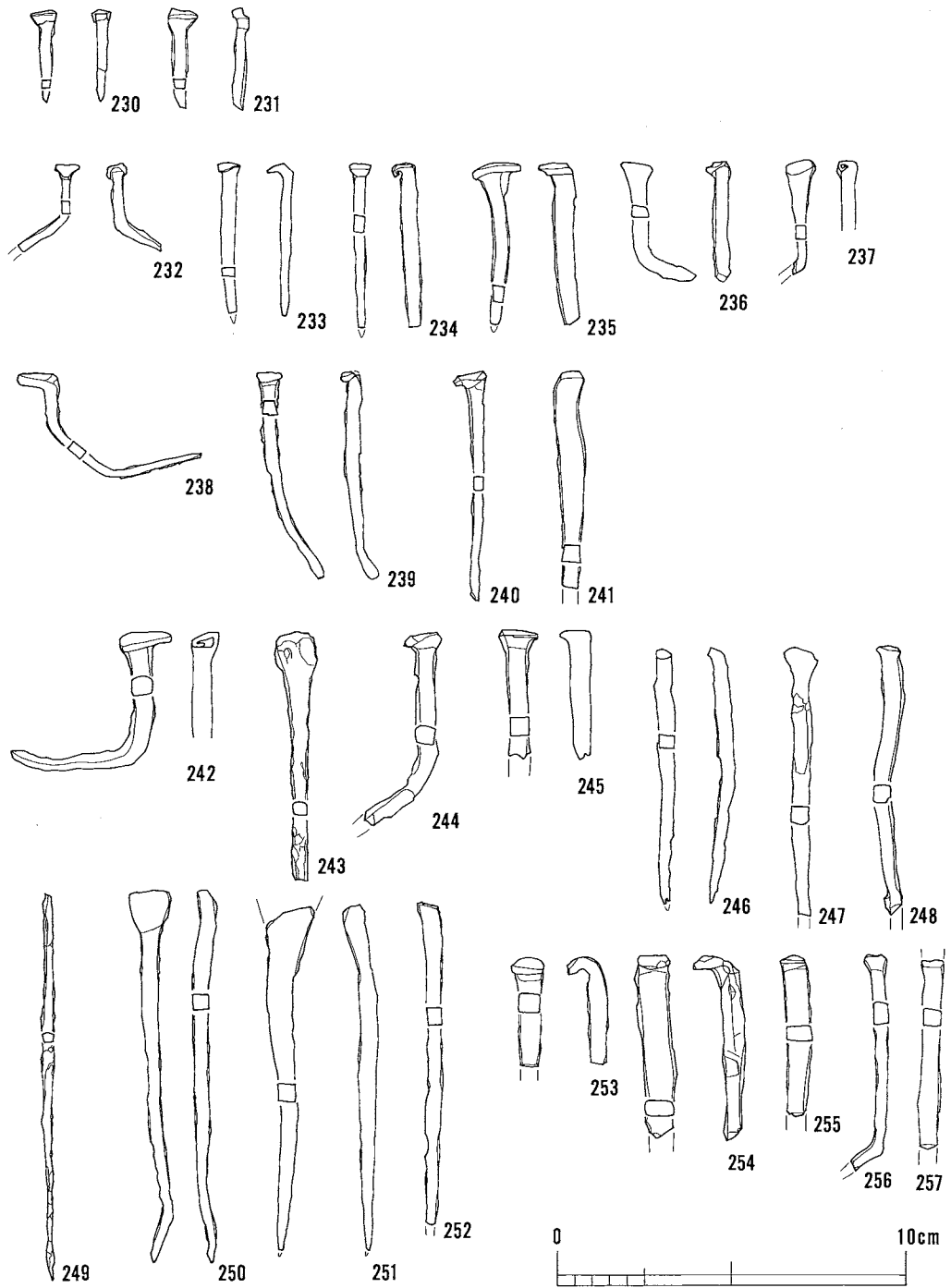
296の煙管は上層遺構から出土した近世・18世紀代以降の煙管で参考として掲載する。



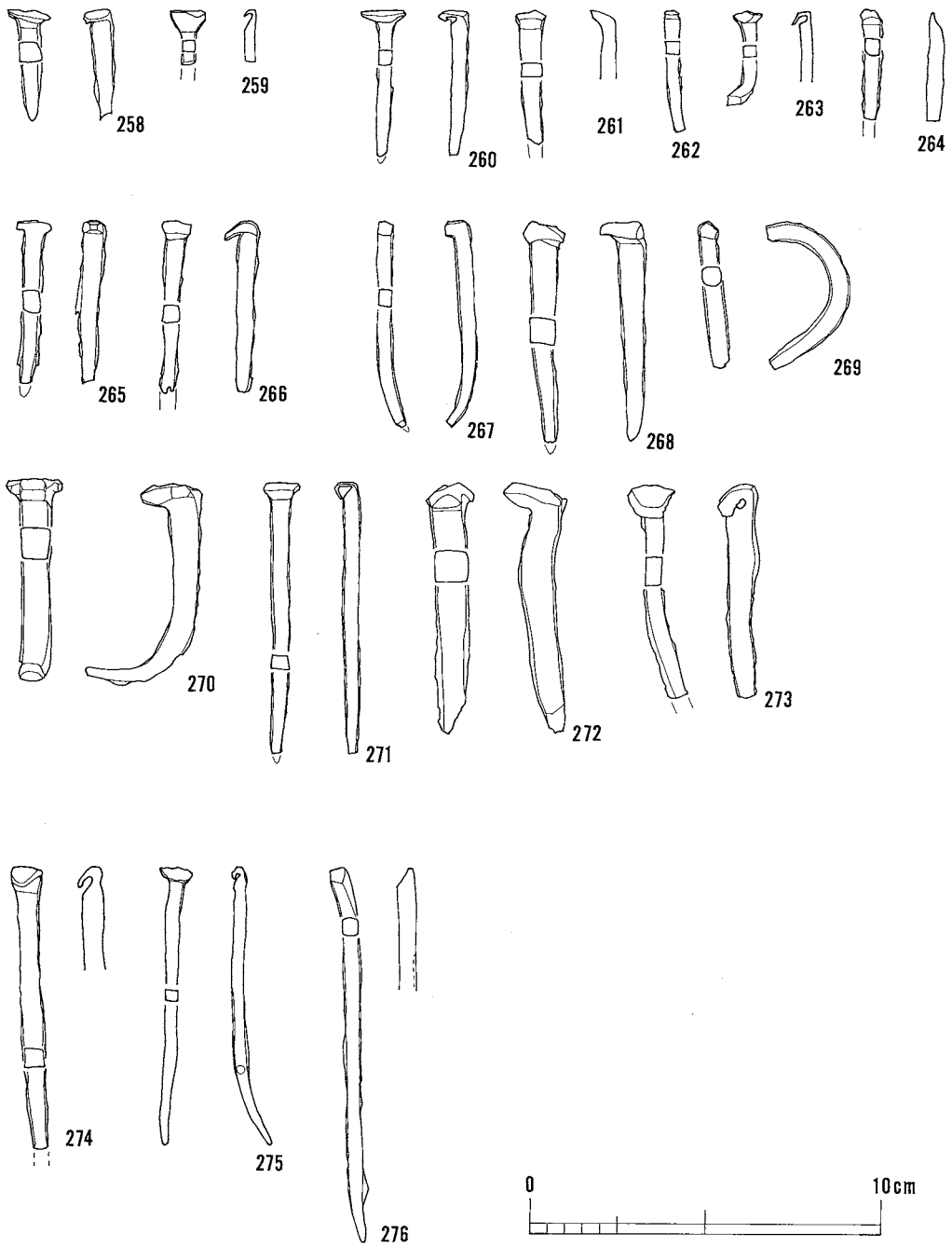
挿図301 鉄製品 (12) 釘 (6)



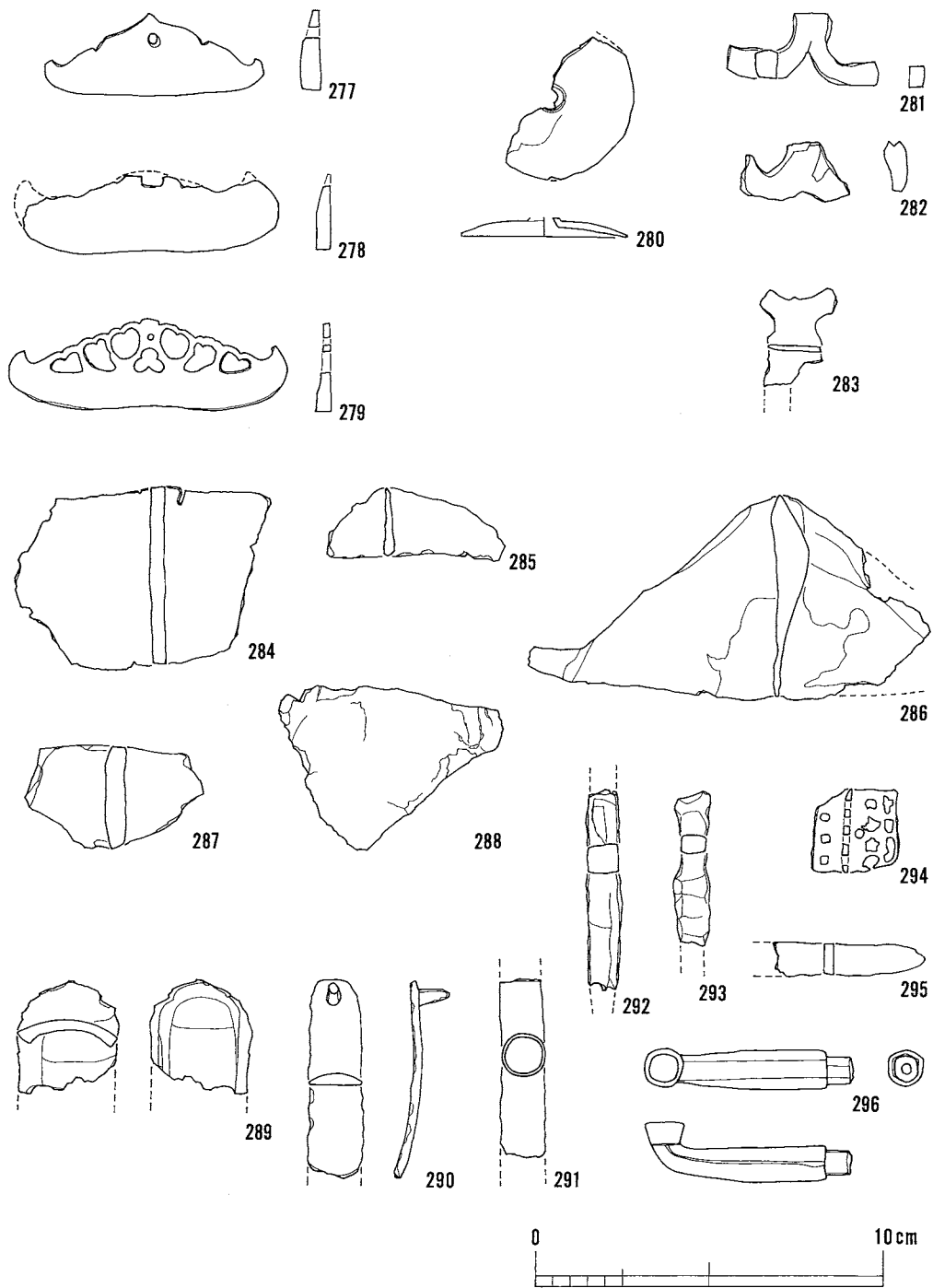
挿図302 鉄製品 (13) 釘 (7)



挿図303 鉄製品 (14) 釘 (8)



挿図304 鉄製品 (15) 釘 (9)



挿図305 鉄製品 (16) 火打金・紡錘車その他、銅製品煙管その他

表7 金属製品一覧 (1)

番号	出土地区	遺構名称	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1	S <sub>1</sub>	SD01	刀	32.6	2.7	0.8	
2	N <sub>2</sub> B		刀	19.4	2.1	0.4	
3	N <sub>3</sub>	SK25	刀	17.5	2.2	0.5	
4	C <sub>1</sub>	東西堀	刀装具	2.4	2.1	0.6	
5	N <sub>1</sub> B	SK3069	刀子	13.4	1.2	0.4	
6			刀子	12.0	1.6	0.6	
7	S <sub>1</sub>	P37	刀子	4.3	1.2	0.4	
8	1981年度		刀子	2.6	0.9	0.4	
9	C <sub>1</sub>	SK15	刀子	2.9	0.9	0.2	
10	1981年度		刀子	12.5	1.5	0.3	
11	C <sub>2</sub>	旧河道	刀子	4.9	1.2	0.4	
12	S <sub>3</sub>	P332	小柄	7.1	1.5	0.3	
13	S <sub>3</sub>	SD10	小柄	9.4	1.8	0.5	銅製品
14	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	小柄	3.6	1.7	0.4	銅製品
15	S <sub>2</sub>	第2トレ南溝	小柄	2.5	1.9	0.6	
16	C <sub>1</sub>	内堀	小柄	9.6	1.5	0.5	銅製品
17	S <sub>1</sub>	SK11	鍬	7.4	2.1	0.4	
18	1981年度	内堀	鍬	8.7	2.3	0.3	
19	1981年度	内堀	鍬	7.6	0.6	0.4	
20	1981年度		小札	5.0	2.0	0.4	
21	C <sub>1</sub>	外堀	小札	3.4	2.3		
22	C <sub>1</sub>	SK15	小壺蓋	5.6	5.6	1.8	
23	1981年度	内堀	小壺蓋	5.1	4.5	1.3	
24	C <sub>1</sub>	内堀	小壺身	6.4	2.2	0.5	
25	S <sub>2</sub>	第1トレ北溝	茶釜蓋	13.8	10.0	0.5	
26	C <sub>1</sub>	SK100	鍋把手	32.2	1.6	0.4	
27	C <sub>1</sub>	SK	鍋把手	16.7	0.8	0.2	
28			鍋	28.0	1.8	0.4	
29	C <sub>1</sub>	外堀	鍋	6.3	7.0	0.4	
30	S <sub>3</sub>		鍋	4.4	28.0	0.3	
31	1981年度		鎌	5.2	1.8	0.3	
32	C <sub>1</sub>	SE07	鎌	34.2	0.2	3.6	木柄とも完形品
33	1981年度	内堀	鋤先	4.8	5.7	0.7	
34			鋤先	15.2	12.0	1.4	
35	N <sub>2</sub> B	SD06	鍬	10.5	1.8	0.8	
36	C <sub>1</sub>	SK08	鍬	6.8	1.0	0.5	
37	C <sub>2</sub>		鍬	13.8	1.6	0.7	
38	C <sub>2</sub>	P79	鍬	7.0	1.3	0.6	
39	1981年度		鍬	7.3	1.2	0.8	
40	S <sub>3</sub>	SD01	鍬	6.5	0.5	0.6	
41	C <sub>1</sub>	内堀	鍬	7.2	2.6	0.8	
42	N <sub>2</sub> B	SK11	鍬	6.8	1.0	0.6	
43	S <sub>1</sub>	第1トレP22	鍬	5.8	1.0	0.6	
44	C <sub>2</sub>	SD06	鍬	5.9	1.3	0.4	
46	S <sub>3</sub>	SD11	不明	11.2	0.9	0.3	
47	C <sub>1</sub>	SK11	鍬	4.8	0.9	0.5	
48	C <sub>1</sub>	SK01	鍬	9.2	0.5	0.3	
49	S <sub>2</sub>	第1トレSD01	鍬	12.1	1.1	0.5	



50	C <sub>1</sub>	内堀	煽り止め	6.9	0.5	0.5	
51	N <sub>3</sub>	SK11	煽り止め	8.3	0.6	0.7	
52	C <sub>1</sub>	内堀	煽り止め	4.4	0.8	0.5	
53	N <sub>3</sub>	SD03	金具	4.9	0.5	0.5	
54	N <sub>3</sub>	SK10	金具	3.0	0.5	0.4	
55	S <sub>3</sub>		金具	3.9	1.2	0.4	
56	C <sub>2</sub>	SD06	金具	2.2	0.4	0.2	
57	S <sub>2</sub>	第2トレ南溝	金具	4.4	0.5	0.4	
58	C <sub>2</sub>	SD10	切釘	4.6	1.2	0.6	
59	C <sub>1</sub>	SK15	平釘	2.9	1.1	0.3	
60	N <sub>3</sub>	SK25	環	3.3	0.5	0.8	
61	1981年度	内堀	環	1.9	0.5	0.3	

### 金属製品 (2)

62	N <sub>1</sub>	SK2001	釘	3.1	0.4	0.4	
63	N <sub>1</sub>	SD3001	釘	3.1	0.5	0.6	
64	N <sub>1</sub>	SD2230	釘	2.3	0.6	0.5	折れ
65	N <sub>2</sub> A	SK08	釘	3.3	0.3	0.4	
66	N <sub>2</sub> A	SK04	釘	3.0	0.3	0.4	
67	N <sub>2</sub> A	P352	折れ釘	4.4	0.3	0.2	
68	N <sub>2</sub> A	SK08	釘	3.1	0.3	0.4	折れ
69	N <sub>2</sub> A	SK08	釘	2.4	0.3	0.4	折れ
70	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	2.8	0.3	0.3	
71	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	2.6	0.2	0.2	折れ
72	N <sub>1</sub>	SK2166	釘	3.0	0.3	0.3	二本の釘
				3.5	0.5	0.3	
73	N <sub>2</sub> A	SK20	釘	4.9	0.4	0.3	
74	N <sub>2</sub> A	SD02	釘	4.7	0.3	0.4	
75	N <sub>2</sub> A		釘	4.1	0.6	0.7	先端部欠損
76	N <sub>2</sub> A	SD04	釘	4.2	0.7	0.5	先端部欠損
77	N <sub>2</sub> A	SK18	釘	4.0	0.4	0.4	
78	N <sub>2</sub> B	SD02	釘	4.1	0.4	0.4	
79	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	4.4	0.6	0.6	
80	N <sub>1</sub>	SK1015	釘	5.7	0.5	0.4	頭折れ
81	N <sub>2</sub> A	SK08	釘	6.0	0.4	0.4	先端部欠損・曲がる
82	N <sub>2</sub> A	SD02	釘	5.6	0.6	0.7	
83	N <sub>2</sub> A	SK08	釘	5.1	0.6	0.7	
84	N <sub>2</sub> B	SD02	釘	3.7	0.6	0.5	
85	N <sub>2</sub> B	SK02	釘	3.2	0.4	0.4	曲がる
86	N <sub>2</sub> B		釘	3.0	0.6	0.4	
87	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	5.0	0.3	0.5	
88	N <sub>2</sub> B	SK10	釘	5.9	0.6	0.5	
89	N <sub>1</sub>	SD3045	釘	6.3	0.9	0.6	
90	N <sub>2</sub> B	SD02	釘	6.4	0.5	0.7	曲がる
91	N <sub>2</sub> B	SD02	釘	7.5	0.6	0.6	
92	N <sub>2</sub> B	P75	釘	6.0	0.3	0.4	
93	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	10.0	0.6	0.7	
94	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	4.7	0.3	0.5	
95	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	3.1	0.4	0.6	

96	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	4.0	0.3	0.5	
97	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	4.6	0.4	0.4	
98	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	4.5	0.6	0.7	
99	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	3.4	0.3	0.4	
100	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	3.0	0.5	0.4	
101	N <sub>2</sub> B	SK11	釘	2.5	0.4	0.5	
102	N <sub>2</sub> B	P16	釘	3.5	0.5	0.6	
103	N <sub>3</sub>	P57	釘	8.2	0.5	0.5	小刀+釘3本
			釘	6.7	0.5	0.5	
			釘	5.5	0.5	0.4	
			小刀	8.4	1.4	0.2	
104	N <sub>3</sub>	SK25	釘	5.1	0.4	0.4	
105	N <sub>3</sub>	SK25	釘	5.3	0.4	0.6	
106	N <sub>3</sub>	SK25	釘	5.1	0.4	0.3	木部残存
107	N <sub>3</sub>	SK25	釘	6.2	0.4	0.4	頭ナシ
108	N <sub>3</sub>	SD04	釘	5.5	0.4	0.3	
109	N <sub>3</sub>	SK25	釘	5.2	0.4	0.2	
110	N <sub>3</sub>	SD02	釘	5.0	0.5	0.6	
111	N <sub>3</sub>	SK25	釘	3.9	0.4	0.4	
112	N <sub>3</sub>	SK25	釘	5.3	0.5	0.4	
113	N <sub>3</sub>	P80	釘	4.6	0.3	0.3	
114	N <sub>3</sub>	SD04	釘	2.8	0.5	0.3	曲がる
115	N <sub>3</sub>	SD02	釘	2.3	0.6	0.4	曲がる
116	N <sub>3</sub>	SK06	釘	2.2	0.3	0.3	SK22
117	N <sub>3</sub>	SK25	釘	2.7	0.2	0.4	
118	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.3	0.2	0.3	
119	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.4	0.3	0.2	
120	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.6	0.3	0.3	
121	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.4	0.5	0.3	
122	C <sub>1</sub>	外堀	釘	2.6	0.4	0.2	
123	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.3	0.4	0.4	
124	C <sub>1</sub>	内堀	釘	2.4	0.4	0.4	
125	C <sub>1</sub>	内堀	釘	3.5	0.4	0.6	
126	C <sub>1</sub>	内堀	釘	3.7	0.4	0.4	
127	C <sub>1</sub>	内堀	釘	3.6	0.3	0.2	
128	C <sub>4</sub>	内堀	釘	2.8	0.4	0.4	曲がる
129	C <sub>1</sub>	外堀	釘	2.4	0.4	0.4	折れ
130	C <sub>4</sub>	外堀	釘	3.2	0.5	0.7	
131	S <sub>4</sub>	外堀	釘	3.2	0.4	0.3	
132	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.0	0.4	0.4	
133	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.0	0.5	0.4	
134	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.8	0.5	0.3	
135	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.4	0.4	0.4	
136	C <sub>1</sub>	外堀	釘	4.9	0.4	0.4	
137	C <sub>1</sub>	外堀	釘	4.4	0.4	0.5	
138	C <sub>1</sub>	東西堀	釘	4.6	0.3	0.5	
139	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.5	0.4	0.4	
140	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.7	0.6	0.5	
141	C <sub>4</sub>	内堀	釘	4.7	0.3	0.3	木部残存

142	C <sub>1</sub>	内堀	釘	4.8	0.4	0.4	
143	C <sub>1</sub>	外堀	釘	5.4	0.4	0.3	
144	C <sub>4</sub>	外堀	釘	2.8	0.4	0.4	
145	C <sub>4</sub>	内堀	釘	4.8	0.4	0.4	
146	C <sub>4</sub>	外堀	釘	5.0	0.4	0.4	
147	C <sub>1</sub>	外堀	釘	5.9	0.7	0.6	
146	C <sub>4</sub>	内堀	釘	4.0	0.3	0.3	
148	C <sub>1</sub>	内堀	釘	10.7	0.3	0.3	
149	C <sub>1</sub>	東西堀	釘	7.0	0.6	0.6	
150	C <sub>1</sub>	外堀	釘	5.8	0.5	0.5	
151	S <sub>4</sub>	外堀	釘	7.0	0.3	0.2	
152	C <sub>1</sub>	SE02	釘	3.1	0.6	0.5	
153	C <sub>1</sub>	SD02	釘	2.4	0.3	0.4	
154	C <sub>1</sub>	SD15	釘	2.9	0.2	0.3	
155	C <sub>1</sub>	SK11	釘	2.1	0.3	0.4	
156	C <sub>1</sub>	SK15	釘	3.8	0.4	0.3	
157	C <sub>1</sub>	SK15	釘	4.1	0.7	0.5	
158	C <sub>1</sub>	SD01	釘	3.6	0.4	0.4	
159	C <sub>1</sub>	SK26	釘	3.1	0.4	0.3	
160	C <sub>1</sub>	SK12	釘	3.3	0.6	0.7	
161	C <sub>1</sub>	SD16	釘	3.9	0.3	0.4	
162	C <sub>1</sub>	SD02	釘	2.8	0.4	0.3	
163	C <sub>1</sub>	P44	釘	3.8	0.4	0.6	
164	C <sub>1</sub>	SK11	釘	2.1	0.5	0.4	
165	C <sub>1</sub>	SK16	釘	6.9	0.3	0.3	
166	C <sub>1</sub>	SK18	釘	5.3	0.5	0.3	
167	C <sub>1</sub>	SE04	釘	5.9	0.6	0.4	
168	C <sub>1</sub>	P26	釘	5.2	0.5	0.4	
169	C <sub>1</sub>	SD16	釘	5.6	0.4	0.4	
170	C <sub>1</sub>	P9	釘	4.9	0.4	0.4	
171	C <sub>1</sub>		釘	4.8	0.4	0.6	
172	C <sub>1</sub>	南北溝	釘	6.2	0.4	0.5	
173	C <sub>1</sub>		釘	6.5	0.5	0.5	
174	C <sub>1</sub>		釘	5.1	0.4	0.4	
175	C <sub>1</sub>		釘	5.4	0.4	0.5	
176	C <sub>1</sub>	SE04	釘	4.7	0.4	0.6	
177	C <sub>1</sub>		釘	5.1	0.4	0.4	
178	C <sub>1</sub>	SK11	釘	4.8	0.4	0.6	
179	C <sub>1</sub>	P27	釘	5.5	0.6	0.6	
180	C <sub>1</sub>	SK15	釘	6.4	0.5	0.5	
181	C <sub>1</sub>	SK11	釘	5.4	0.6	0.5	
182	C <sub>3</sub>	SD10	釘	2.8	0.3	0.4	
183	C <sub>3</sub>	東西堀	釘	2.3	0.3	0.2	先端部欠損
184	C <sub>2</sub>	SD08	釘	4.5	0.3	0.3	
185	C <sub>2</sub>		釘	4.0	0.7	0.6	
186	C <sub>3</sub>	SD01	釘	3.7	0.6	0.7	先端部欠損
187	C <sub>2</sub>	SD02	釘	6.4	0.6	0.7	頭巻、先端部欠損
188	C <sub>2</sub>	SD02	釘	6.5	0.6	0.6	
189	C <sub>2</sub>		釘	5.0	0.7	0.7	先端部欠損

190	C <sub>2</sub>	P89	釘	6.6	0.4	0.4	
191	C <sub>2</sub>	下層土器群	釘	4.2	0.5	0.4	先端部欠損
192	C <sub>3</sub>	SK07	釘	6.1	0.4	0.6	
193	C <sub>1</sub>	SK15	釘	7.3	0.8	0.7	
194	C <sub>1</sub>	SK15	釘	7.6	0.5	0.5	
195	C <sub>1</sub>	SK15	釘	7.1	0.4	0.5	先端部欠損
196	C <sub>1</sub>	P25	釘	7.8	0.6	0.4	
197	C <sub>1</sub>		釘	7.0	0.6	0.5	
198	C <sub>1</sub>		釘	7.4	0.4	0.5	先端部欠損
199	C <sub>1</sub>	PdSK01	釘	2.1	0.7	0.9	
200	C <sub>1</sub>	南北溝	釘	9.1	0.6	0.5	
201	C <sub>1</sub>	SD02	釘	9.6	0.6	0.5	頭ナシ
202	S <sub>1</sub>	SD01	釘	3.0	0.4	0.2	
203	S <sub>1</sub>	SD01	釘	2.3	0.4	0.3	
204	S <sub>1</sub>	SD01	釘	2.4	0.4	0.3	
205	S <sub>1</sub>	SD01	釘	4.4	0.4	0.4	
206	S <sub>1</sub>	SD01	釘	3.8	0.4	0.4	
207	S <sub>1</sub>	SD01	釘	3.5	0.3	0.3	
208	S <sub>1</sub>	SD01	釘	5.4	0.5	0.6	222
209	S <sub>1</sub>	SD01	釘	4.1	0.5	0.5	
210	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	釘	5.3	0.4	0.4	橋脚材に使用
211	S <sub>1</sub>	SD01	角釘	7.4	0.5	0.5	
212	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	釘	7.7	0.5	0.6	
213	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	釘	7.0	0.7	0.6	
214	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	釘	9.1	0.6	0.5	
215	S <sub>1</sub>		釘	4.5	0.3	0.4	
216	S <sub>1</sub>	P37	平釘	4.4	0.6	0.2	
217	S <sub>1</sub>		釘	4.4	0.4	0.3	
218	S <sub>1</sub>	P37	平釘	2.5	0.4	0.2	
219	S <sub>1</sub>	II SK42	釘	3.0	0.3	0.4	
220	S <sub>1</sub>		釘	3.2	0.6	0.6	
221	S <sub>1</sub>		釘	6.2	0.5	0.6	
222	S <sub>1</sub>	II SK32	釘	4.5	0.5	0.6	
223	S <sub>1</sub>	P46	釘	5.0	0.5	0.5	
224	S <sub>1</sub>	II SK18	平釘	4.3	0.4	0.5	
225	S <sub>1</sub>	SE 08	釘	5.8	0.5	0.5	
226	S <sub>3</sub>	SK96	釘	4.1	0.6	0.5	
227	S <sub>1</sub>		釘	8.4	0.3	0.4	
228	S <sub>1</sub>	II SK43	釘	9.5	0.6	0.7	
229	S <sub>1</sub>	II SK03	切釘	9.7	0.8	0.5	
230	S <sub>3</sub>	SD14	切釘	2.6	0.3	0.2	
231	S <sub>3</sub>	SK63	釘	2.9	0.4	0.3	
232	S <sub>3</sub>	P502	釘	2.5	0.2	0.4	
233	S <sub>3</sub>	SK58	平釘	4.3	0.4	0.2	
234	S <sub>3</sub>		釘	4.7	0.3	0.5	
235	S <sub>3</sub>		釘	4.8	0.3	0.4	
236	S <sub>3</sub>	SD16	釘	3.4	0.5	0.4	
237	S <sub>3</sub>	II P92	釘	3.3	0.4	0.3	
238	S <sub>2</sub>	II P43	切釘	5.3	5.3	0.5	

239	S <sub>3</sub>	II SK15	平釘	6.0	0.4	0.4	
240	S <sub>3</sub>	下層溝	釘	6.6	0.3	0.4	
241	S <sub>3</sub>	SD01	切釘	6.2	0.5	0.5	
242	S <sub>2</sub>	第1トレ	釘	4.0	0.6	0.6	
243	S <sub>2</sub>	第1トレ	平釘	7.1	0.5	0.4	
244	S <sub>1</sub>	第1トレ	切釘	5.6	0.6	0.5	
245	S <sub>2</sub>	第1トレSK01	釘	3.7	0.5	0.5	
246	S <sub>3</sub>	SD01	釘	7.3	0.4	0.4	
247	S <sub>3</sub>	II SK03	平釘	7.8	0.5	0.5	
248	S <sub>3</sub>	SK98	切釘	7.7	0.5	0.5	
249	S <sub>1</sub>	第3トレII SK0	釘	11.1	0.3	0.3	
250	S <sub>3</sub>	P02	釘	10.7	0.4	0.4	
251	S <sub>3</sub>	SD16	平釘	9.9	0.5	0.5	
252	S <sub>3</sub>	II SK15	釘	9.2	0.4	0.5	
253	S <sub>3</sub>		釘	3.1	0.6	0.5	
254	S <sub>3</sub>	SK58	釘	5.3	0.8	0.5	
255	S <sub>3</sub>	SK69	釘	4.6	0.7	0.4	
256	S <sub>3</sub>	P628	平釘	6.2	0.4	0.6	
257	S <sub>3</sub>	II SK08	角釘	5.4	0.5	0.5	
258	1981年度		釘	3.1	0.6	0.6	
259	1981年度		釘	1.5	0.3	0.3	
260	1981年度		釘	4.1	0.4	0.4	
261	1981年度		釘	4.8	0.6	0.4	
262	1981年度		釘	3.4	0.4	0.3	
263	1981年度		釘	2.7	0.4	0.3	
264	1981年度		釘	3.1	0.4	0.6	
265	1981年度		釘	4.6	0.5	0.6	
266	1981年度		釘	4.9	0.5	0.5	
267	1981年度		釘	5.9	0.4	0.5	
268	1981年度		釘	6.3	0.7	0.8	
269	1981年度		釘	4.2	0.5	0.5	頭ナシ
270	1981年度		釘	5.8	0.8	0.9	
271	1981年度		釘	7.7	0.5	0.5	
272	1981年度		釘	7.1	10.0	0.9	
273	1981年度		釘	6.1	0.5	0.8	
274		P366	釘	8.1	0.6	0.5	
275			釘	7.9	0.3	0.3	
276			釘	10.6	0.5	0.5	
277	S <sub>3</sub>	P430	火打金	2.4	6.2	0.6	
278	S <sub>3</sub>	SD16	火打金	2.2	7.3	0.5	
279	S <sub>1</sub>	II SK12	火打金	2.7	8.0	0.5	
280	S <sub>3</sub>	II P274	紡錘車	4.8	0.5	0.3	
281	C <sub>1</sub>	SK15	不明	2.0	4.4	0.5	
282	C <sub>3</sub>	SK07	不明	1.7	3.2	0.7	
283	S <sub>1</sub>		飾り	2.9	2.0	0.7	銅製品
284	1981年度		不明	5.3	7.4	0.4	
285	N <sub>3</sub>	SK25	不明	2.0	5.0	0.3	
286	C <sub>2</sub>	SD04	不明	11.5	5.8	1.2	
287	S <sub>3</sub>	II P274	不明	3.0	5.0	0.6	

288	N <sub>3</sub>	SK25	不明	4.7	6.4	0.5	
289	N <sub>2</sub> B	SD09	不明	3.3	2.9	0.7	銅製品
290	N <sub>2</sub> A		不明	5.8	1.5	0.3	銅製品
291	C <sub>1</sub>		筒状	5.1	1.3	0.1	銅製品
292	S <sub>3</sub>		釘	5.8	0.9	0.9	
293	C <sub>2</sub>	P79	平釘	4.5	0.7	0.5	
294	S <sub>3</sub>	SD16	不明	2.5	2.5	0.2	
295	S <sub>1</sub>	P37	刀子	1.0	4.3	0.3	
296	S <sub>2</sub>	第2トレ南溝	煙管	5.9	1.0		近世

## (2) 古 銭

福田片岡遺跡からは合計105枚の古銭が出土している。これらの中には一銭銅貨1枚、銭種不明13枚が含まれ、また重量や大きさの差などから模鑄銭（鋳銭）も含まれている可能性があるが、残存状況が悪いため抽出することはできなかった。

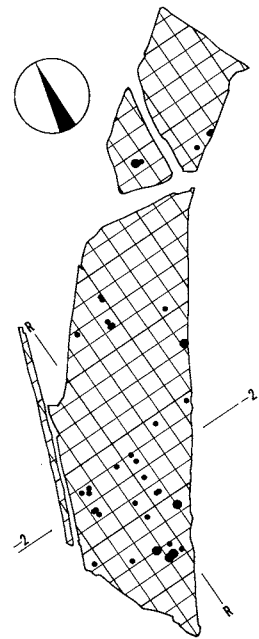
近代のものを除くと初鑄年621年の開元通宝から1408年の永樂通宝までの27種が出土しており、その内唐銭6枚、南宋銭3枚、明銭1枚以外は北宋銭であり、全体の9割近くを占める。北宋銭では、皇宋通宝11枚、熙寧通宝11枚、元豊通宝19枚、元祐通宝9枚が出土量としては多く、他は5枚以下の出土である。これらの状況は、遺構検出面より上層から出土した永樂通宝を考慮外におくと、例えば三田市南台遺跡の備蓄銭などもよく似た傾向を示している。

出土状況では、C<sub>3</sub>地区で27枚が緡銭の状態出土した以外は、同一遺構内においても2～3枚が連なっている程度で分散して出土する傾向が強い。所謂、備蓄銭としての出土は見られなかった。この緡銭の中で最も新しい年代を示す古銭は成淳元宝の1265年である。また、遺構出土のものではN<sub>2</sub>A地区のSK08から景定元宝（1260）が最も新しい年代を示すもので古銭が出土した遺構には、土壙・井戸・柱穴・溝が見られ、共伴遺物から12世紀後半から14世紀前半の時期を示しており、古銭の年代とは矛盾しない。古銭の出土した土壙の中には、石積みの供養塔と考えられるS<sub>3</sub>地区のSK98や、骨蔵器としての鉢や羽釜が出土したC<sub>1</sub>地区のSK11・SK12・SK13・SK15、N<sub>2</sub>A地区のSK08、N<sub>3</sub>地区SK25、S<sub>2</sub>地区SK47が墓跡である可能性が高く、古銭の出土も葬送儀礼としての6道銭であろう。ただし、6枚まとまって出土したものはない。これらの墓跡は全て火葬墓であり、木棺墓からは出土していない。柱穴からの出土は16枚と少ないが、SB69のP395やSB74のP182が掘立柱建物跡から出土しており、地鎮具として利用された可能性があるが、共に1枚ずつの出土である。

福田片岡遺跡の南端、S<sub>3</sub>地区のWcd区付近からは、土壙（SK58・SK60・SK61・SK103）や柱穴（P215・P323・P324・P513・P619）から合計37枚もの出土があり、分布密度が濃い。集石をもつものや1～4個の石を配した土壙など墓跡の可能性をもつものもあるが、これらの遺構の性格は不明である。

### 参考文献

「南台遺跡 A地区」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(2)』  
兵庫県教育委員会 昭和63年3月



挿図306 古銭出土状況

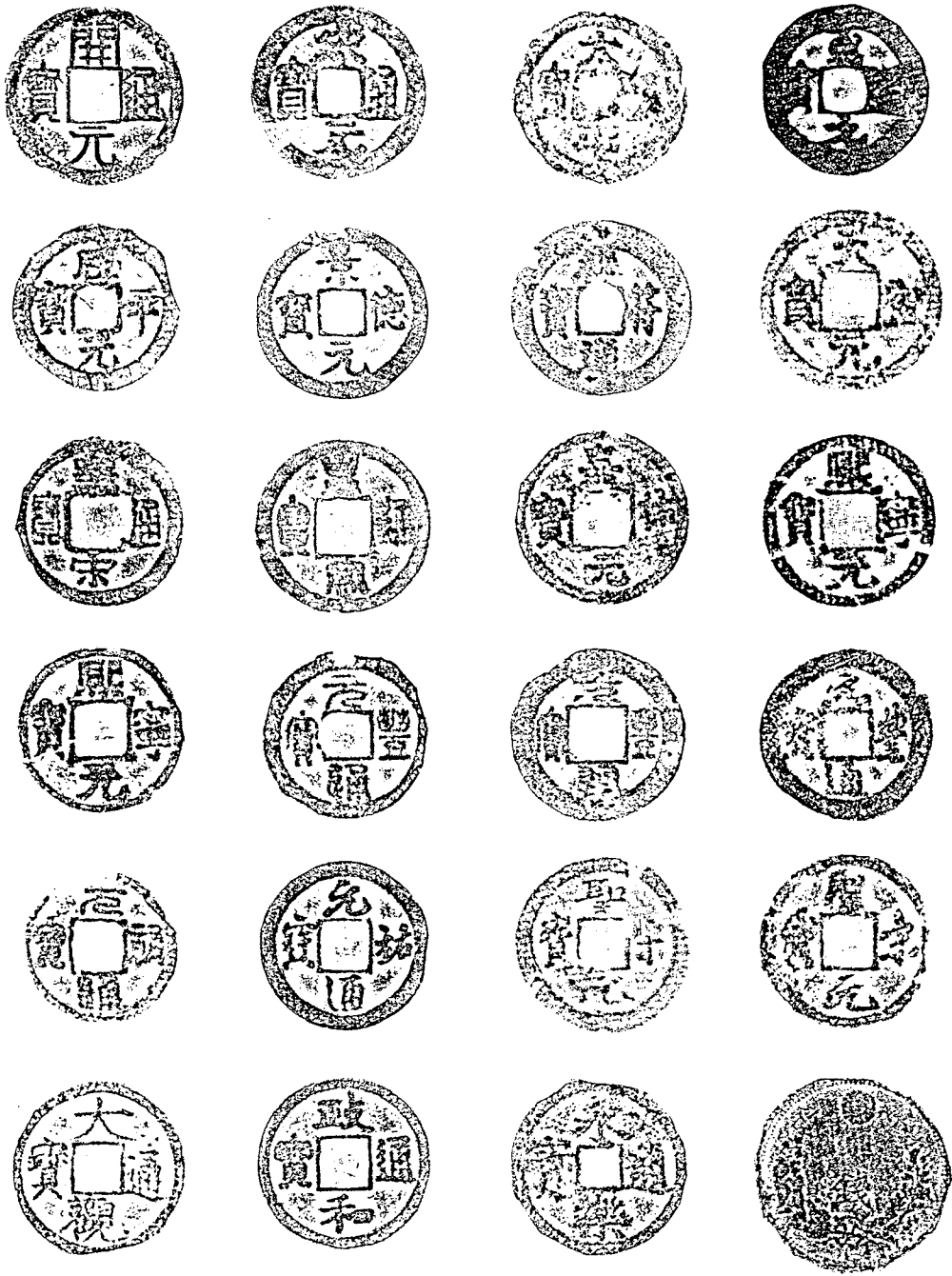
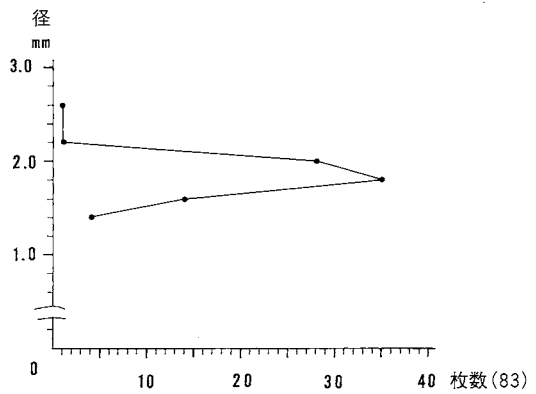
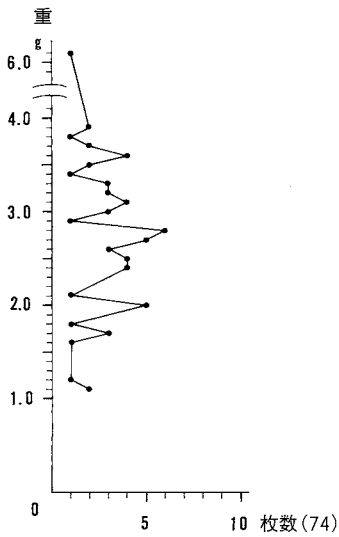
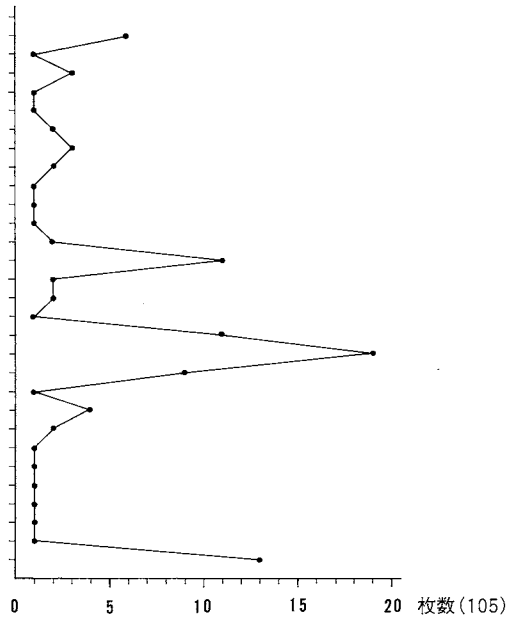


插图307 古錢



古銭名 (国名・初鑄年)

- 1.開元通宝 (唐621)
- 2.宋元通宝 (北宋960)
- 3.太平通宝 (北宋976)
- 4.至道元宝 (北宋995)
- 5.咸平元宝 (北宋998)
- 6.景德元宝 (北宋1004)
- 7.祥符通宝 (北宋1008)
- 8.祥符元宝 (北宋1008)
- 9.天禧通宝 (北宋1017)
- 10.天聖元宝 (北宋1023)
- 11.明道元宝 (北宋1032)
- 12.景祐元宝 (北宋1034)
- 13.皇宋通宝 (北宋1039)
- 14.至和元宝 (北宋1054)
- 15.嘉祐元宝 (北宋1056)
- 16.嘉祐通宝 (北宋1056)
- 17.熙寧元宝 (北宋1068)
- 18.元豐通宝 (北宋1078)
- 19.元祐通宝 (北宋1086)
- 20.紹聖元宝 (北宋1094)
- 21.聖宋元宝 (北宋1101)
- 22.大觀通宝 (北宋1107)
- 23.政和通宝 (北宋1111)
- 24.紹熙元宝 (南宋1190)
- 25.景定元宝 (南宋1260)
- 26.成淳元宝 (南宋1265)
- 27.永樂通宝 (明1408)
- 28.一錢 (明治)
- 29.不明



挿図308 古銭の度量と年代

表8 古錢一覽

番号	地区	小地区	遺構名称	枚数	古 錢	初鑄年号
1	C <sub>1</sub>	Lc	SK13	1	景德元宝	1004
2~4	S <sub>3</sub>	Wca	SK58	3	元豊通宝 2・景德元宝	1078
5	C <sub>1</sub>	Lc	SK12	1	皇宋通宝	1039
6	N <sub>2</sub> A	Iad	SK08	1	元豊通宝	1039
7			外堀	1	祥符通宝	1008
8・9	S <sub>3</sub>	Wcd	SK61	2	明道元宝・□寧□□	1032
10・11	S <sub>1</sub>	Sbd	II pit120	2	元祐通宝・大觀通宝	1086・1107
12	S <sub>3</sub>	Tbb	pit395	1	皇宋通宝	1039
13	S <sub>3</sub>		pit323	1	皇宋通宝?	1039
14	C <sub>1</sub>		SE10	1	元豊通宝	1078
15	S <sub>1</sub>	Sac	II pit182	1	祥符元宝	1008
16	N <sub>3</sub>	Jab	SK05	1	開元通宝	621
17	S <sub>1</sub>	Tba	III面	1	熙寧元宝	1068
18	S <sub>2</sub>		現代溝	1	一文錢	
19	C <sub>1</sub>	Ld-Ma				
20・21	S			2	永樂通宝・□□□宝	1408
22	S <sub>3</sub>		SE14	1	政祐通宝	1111
23	N <sub>2</sub> A		SK07	1	元□□□	
24	S <sub>3</sub>		pit324	1	元祐通宝?	1086?
25・26	N <sub>2</sub> A	Iad	SK08	2	□□元宝・景定元宝?	1260
27・28	S <sub>3</sub>	Wcd	SK61	2	天聖元宝・熙寧元宝	1023・1068
29	S <sub>2</sub>	Itr	SK07	1	元祐通宝	1086
30	C <sub>1</sub>			1	宋元通宝	960
31・32	N <sub>3</sub>	Jac	SK25	2	元□通宝・□□通□	
33	S <sub>1</sub>		SD01	1	皇宋通宝	1039
34	C <sub>1</sub>	Lc	SK11	1	聖宋元宝	1101
35	C <sub>1</sub>	Lb	SK15	1	元豊通宝	1078
36	S <sub>3</sub>		SE14	1	開元通宝	621
37	S <sub>1</sub>	Tab		1	元豊通宝	1078
38	S <sub>1</sub>	Tad	SD03	1	元祐通宝	1086
39~49	S <sub>3</sub>	Wcd	SK61	11	開元通宝・嘉祐元宝?・皇宋通宝3 熙寧元宝2・元豊通宝2・聖宋元宝 紹聖元宝	621・1039・ 1056・1068・ 1078・1094
50	S <sub>3</sub>	Wcd	SK60	1	咸平元宝	998
51・52	S <sub>3</sub>	Wcd	SK103	2	至道元宝・熙寧元宝	995・1068
53・54	S <sub>3</sub>	Wcd	SK58	2	元祐通宝・□□元宝	1086
56~58	S <sub>3</sub>	Wcd	pit215	4	景祐元宝 2・元豊通宝・不明	1034・1078
59・60				2	太平通宝・大觀通宝	076・1107
61	S <sub>1</sub>	Sac	第II面	1	元祐通宝	1086
62	C <sub>1</sub>		SE10	1	開元通宝	621
63	S <sub>3</sub>		SE14	1	元祐通宝	1086
64	S <sub>3</sub>	Wdd	II pit99	1	熙寧元宝?	1068?
65~91	S <sub>3</sub>	G6杭		27	開元通宝・太平通宝2・皇宋通宝3 熙寧元宝 2・聖宋元宝・元豊通宝 咸淳元宝・天□通宝・嘉祐通宝 祥符元宝・至和元宝・嘉祐元宝 元祐通宝 2・紹熙元宝	621・976・ 1008・1017・ 1039・1056・ 1068・1078・ 1086・1101・ 1190・1265

92	S <sub>3</sub>		SK98	1	祥符元宝	1008
93	S <sub>1</sub>		II SK43		皇宋通宝	1039
94	S <sub>3</sub>	Wcd				
95	S <sub>3</sub>	Scc	SK97	1	熙寧元宝	1068
96	S <sub>3</sub>	Wcd	pit513			
97	S <sub>3</sub>	Wad				
98	S <sub>3</sub>	Xad	SK98	1	皇宋通宝	1039
99	N <sub>2</sub> A		SK08			
100	C <sub>3</sub>				開元通宝	621
101	S <sub>3</sub>		SK98	1	至和元宝	1054
102	S <sub>3</sub>		SE14	1	聖宋元宝	1101
103	S <sub>3</sub>	Wcd	pit619	1	熙寧元宝	1068
104	S <sub>3</sub>		SK61	1	熙寧元宝	1068
105	S <sub>1</sub>	Tba	II 面		元豐通宝	1078
106				1	祥符通宝	1008

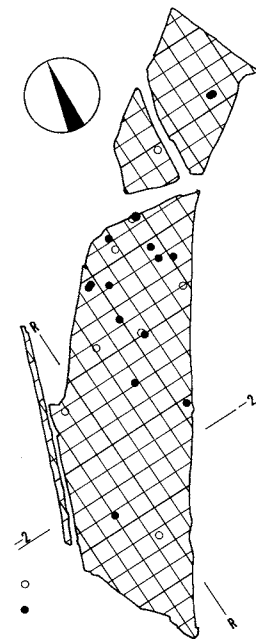
## 5. 鉄 滓

鉄滓は20点以上がN<sub>1</sub>BSD3045、C<sub>2</sub>SD04、C<sub>1</sub>SK08や方形館跡の堀から出土している。時期は13世紀代・14世紀代・16世紀代の各時期で出土する。

大鍛椀型滓13を除けば、全て小鍛冶椀型滓である。その分類は法量とともに断面から見る事ができる。また、高塚秀治先生の「付載7. 福田片岡遺跡出土の鉄滓及び鉄器について」掲載の鉄滓の分析がある。

その結果①鉄滓はすべて椀形状のもので、いずれも典型的な鍛冶滓と認められる。②2%以上のチタン成分 (TiO<sub>2</sub>) を含む鉄滓は皆砂鉄起源の鉄加工の際に生成したものの、③チタン成分値が低い試料は鉄滓は岩鉄由来の可能性もあり、今後検討されるべき課題である。④2重層の鉄滓は由来する鉱石の質の差による可能を考えてよい。

その他に輔羽口の出土から屋敷、館内で鍛冶作業があり、多量出土している釘など金属製品の生産を認める。



挿図309 鍛冶関係遺物  
出土状況

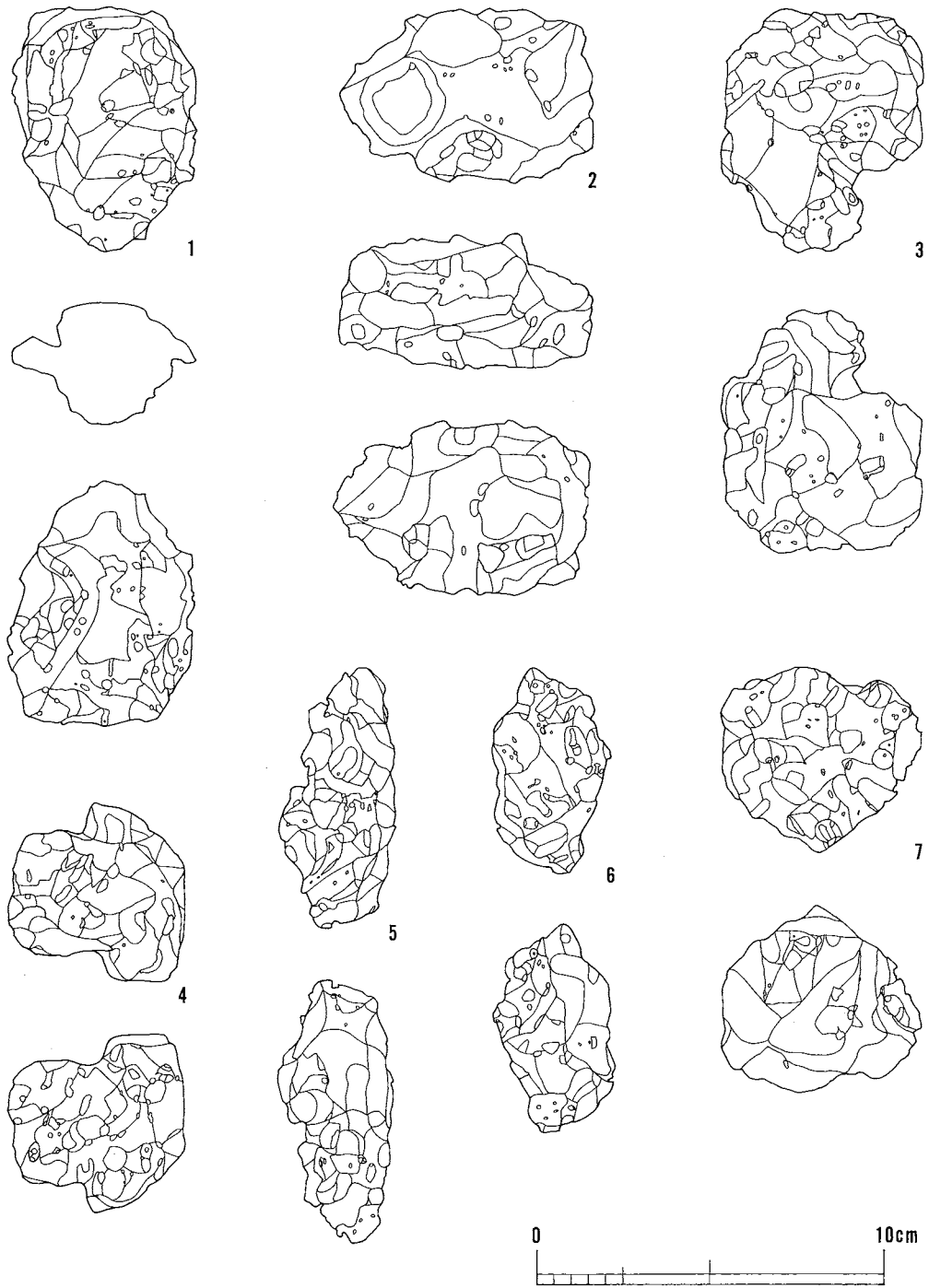
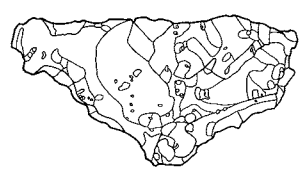
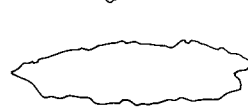
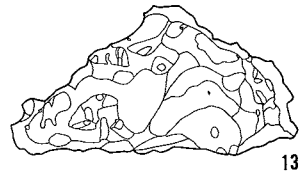
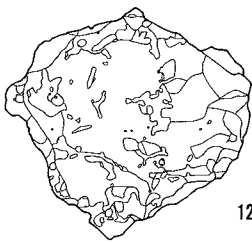
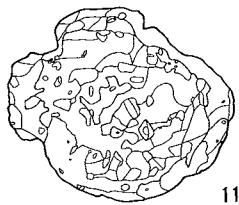
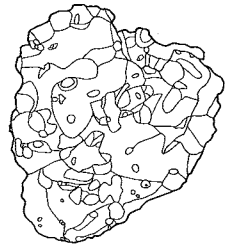
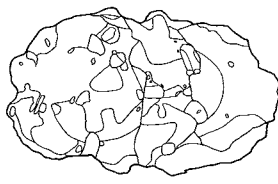
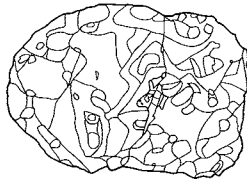
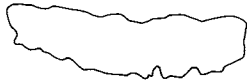
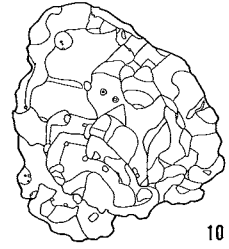
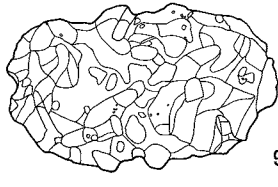
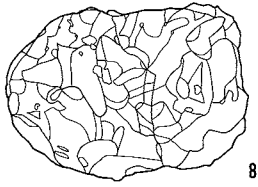
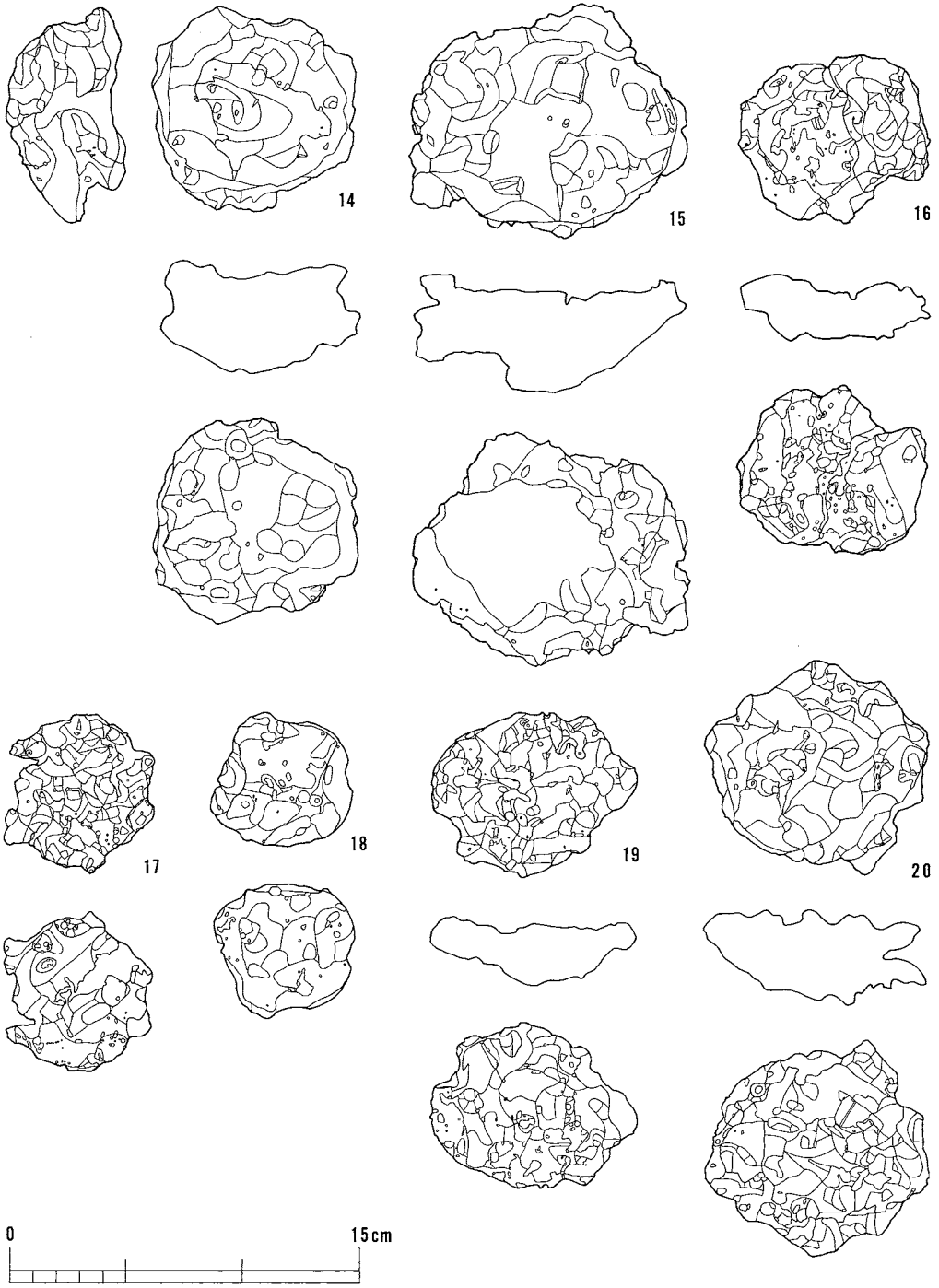


插图310 鉄滓 (1)



挿図311 鉄滓 (2)



挿図312 鉄滓 (3)

表9 鉄滓一覧

番号	地区名	遺構名称	種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
1	NiB	SD3045	小鍛冶椀型滓	7.1	4.9	3.5	157.6	
2	NiB	SD3045		7.2	4.9	3.8		
3	C2	SD04	小鍛冶椀型滓	7.0	3.0	2.3	106.4	
4	C2	SD04	小鍛冶椀型滓	5.0	3.4	2.1	59.3	
5	C2	SD04	小鍛冶椀型滓	7.3	2.4	3.7	37.0	
6	C2	SD04	小鍛冶椀型滓	5.8	2.5	2.2	43.0	
7	C2	SD04	小鍛冶椀型滓	5.3	3.8	2.1	86.0	
8	C1	外堀	小鍛冶椀型滓	9.5	6.2	2.6	257.3	
9	C2	外堀	小鍛冶椀型滓	10.6	5.5	3.0	212.3	
10	S4	外堀	小鍛冶椀型滓	9.5	5.1	2.6	233.8	
11	C1	東西堀	小鍛冶椀型滓	9.0	3.5	2.3	168.3	
12	C3	東西堀	小鍛冶椀型滓	9.6	6.5	2.5	243.5	
13	C1	東西堀	大鍛冶椀型滓	11.2	5.8	3.7	260.0	
14	1981年度	内堀	小鍛冶椀型滓	8.8	7.2	4.3	507.6	
15	C1		小鍛冶椀型滓	10.7	9.7	4.2	610.4	
16	C1	内堀	小鍛冶椀型滓	8.1	6.2	2.8	227.1	
17	C1	SK08	小鍛冶椀型滓	6.9	5.0	2.2	121.5	
18	C1		小鍛冶椀型滓	6.0	5.9		105.2	
19	S3		小鍛冶椀型滓	8.8	5.7	2.7	167.6	
20	S3	SD08		9.6	6.9	3.9	419.6	



## 6. 木製品

木製品は井戸、堀などから約200点出土しており、その内木器95点と木筒3点に分けて記述する。

### (1) 木器

木器の多くは挿図313に示すとおり、片岡庄堀・内堀・および井戸内より出土したものが多  
い。井戸内からは、笏物椀・箸状・櫛等小型のものが多数出土している。井戸以外では、片岡  
庄堀・内堀・外堀等でも多種類の木器が出土しているが、特に内堀・外堀ではそのコーナー部  
分に集中して出土する傾向がみられる。これらの木器を用途別に器種分類すると、容器・農  
具・履物・工具・遊戯具・装身具・雑器・建築材・井戸材等に分けることができる。さらにそ  
れらを、形態的な特徴をもとに細分を行なった。

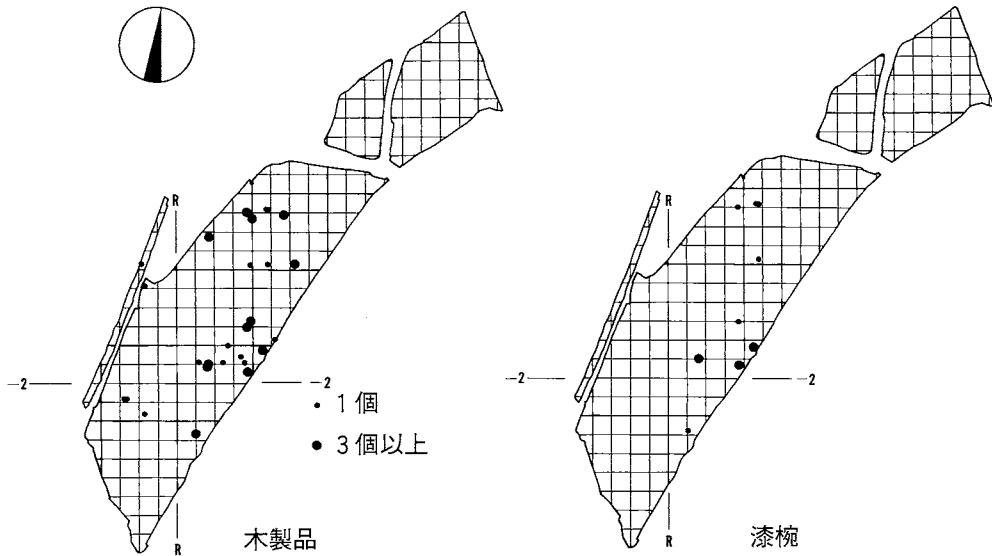
### A. 容器

容器は出土点数がもっとも多く、それらには曲物類と漆器類が見られる。

#### 曲物

平面形が円形だけであり、楕円形等は見られない。蓋と身に分かれるものと思われる。

円形曲物蓋（2・4～8）：口径の違いによって3形態が見られる。2は高さ約16.8cmの側  
板のみであり、底板外側に幅約3.2cmの帯板を巡らす。底板は欠損するが、口径は約25.2cmであ  
る。4・5は復元口径約20cm強をはかるが、半分以下の残存であり、依存状況も悪い。6～8



挿図313 木製品出土状況

は口径20cm以下の形態であり、6には側辺に4箇所の木釘孔が見られる。7・8は半分以下の残存であるが、割れ口に接合用木釘孔が3箇所穿たれている。8は唯一板目に木取りする。

円形曲物身（9～11）：口径は約20cmである。9には側辺に一孔一組の穿孔が見られる。10は二孔一組の穿孔が一箇所のみのため、固定用穿孔ではない可能性もある。11は側板の当たり痕を明確に残すが、固定孔がまったくない。9・11は片面に切痕が見られる。

12～15は側板固定の痕跡がまったく見られないため、天井板・底板の判断ができない。12は半分以下の残存であり、割れ口に接合用の木釘痕が2箇所見られる。樺皮の穿孔はないが、残存部の中央には把手様の大きな孔が2個穿たれている。13の片側には若干の切痕が見られる。12～14は口径約20cm前後、15は復元径約7cmとなる。13のみ板目に木取りする。1は高さ約4cm、口径約5.6cmと著しく小さく、3は復元高約14.4cm、口径約20cmをはかるが、これらには当初から天井および底板が無く、側板を固定したと思われる穿孔も見当たらないため、側板のみの曲物であったと思われる。よって、蓋部・身部の判断ができない。

#### 漆器

漆器碗はいずれも黒漆を塗布する。一部には、体部内外面および見込みに漆絵を施したものが見られる。高台の形態の違いによって、4形態に分類できる。

I形態（16）：器高が低く、皿もしくは坏を思わせる。体部は内湾しながら開き、高台は極端に低い。漆は二度以上の重ね塗りを施し、内面には、朱漆を重ね塗りする。体部外面には朱漆によって、柳等の樹木を三方に配している。

II形態（17～21）：I形態より高台が高くなるが、内面の割り込みはまだ浅い。17は体部が大きく開くため器高は低い。外面には円形の型押し紋かと思われる模様が描かれているが、残存状況が悪いため絵柄は不明である。18は口縁部を欠損するが、口径は小さく、体部が大きく内湾するため深みを待った形態である。19～21は底部のみであるが、19は体部外面の下方に飛行する鳥の文様が描かれ、21は内面に絵柄不明の漆絵が見られる。18・20は内面に朱漆が塗布されている。

III形態（22～24）：22～24は体部が内湾しながら立ち上がり、器高がかなり高い碗である。22の体部外面には樹木と思われる漆絵が、23の体部外面には武田菱様の文様の漆絵が描かれており、さらに23は内面にも朱漆が施されている。22にもそれと思わしき痕跡はみられるが、残存状態が悪く断定はできない。

IV形態（25・27～30）：高台が著しく高く、わずかに開き気味に踏張り、高台内面の割り込みも深くなる。25は口縁端部を欠損するが体部は大きく内湾しながら立ち上がり、器高をかなり高くなる。内面にはわずかに漆絵の痕跡が見られるが絵柄は特定できない。外面には飛び上がる鳥かと思われるような漆絵が付けられている。27～30は底部のみであり、30には見込みに花紋様の絵付けが見られる。

31～37は底部を欠損するため属する形態は不明であるが、いずれも椀になると思われる。31・32は体部がかなり内湾しながら伸び、器高が深い。33・34は体部の内湾が小さく、33は器高も浅い。31・36は塗りの丁寧なものであり、さらに36は内面を朱漆で塗り上げている。31には外面に、35・37には内面に漆絵の痕跡がみられるが、遺存状況が良好でないため絵柄は断定できない。

38は木胎がすべて腐食しており、内面の朱漆を施した漆皮膜のみとなっているが、漆皮膜は重ね塗りがされており、丁寧な作りのものであったと思われる。

以上のように高台の形態差によって4形態に分類を行なったが、その他の特徴、例えば絵柄・漆の塗布法等によって区分することは困難なようである。絵付けは全形態に見られるが、その絵柄に関する変化は資料が少ないため明確にはしがたい。一方、漆の塗布法に関する分析結果を見ると、2度以上の重ね塗りを行なっている4点の内3点(31・35・36)は高台がないため、その属する形態は不明であるが、残る1点16は最も古いと思われるその一の形態に属するものである。堅牢な作りのものとそうでない作りのものの出土の割合が3:10であり、その傾向がどう時代の他地域の結果に類似している旨の指摘から考えると、漆の塗布の手法の面からしても、資料を時代別の形態に分類することは不可能なようである。

以上のようにほとんどは椀類に属するものであるが、26のみ椀子の形態に近いものである。26の体部は極わずかに内湾しながら大きく開く。口径は前者に比較するとかなり小さく器高も低いいため、一見すると台付きの皿の様にも思われる。内面には朱漆が塗られている。

## B. 農具

農具の出土点数は絶対的に少なく、鎌・木錘等が見られるだけである。

### 鎌

39は、先端および刃部を欠損する鉄製基部を持つ。柄部は断面約3cm前後の円形であり、全長は約25.2cmをはかる。基部を含んでの現長は約36cmである。柄中央部の両側面は狭く平坦に削り込まれ、それぞれに「×」と「#」形の切り込みが施されている。先端には基部装着様の長さ約7.6cmの切り込みがある。その先端には鉄製の口輪がはめられ、刃部の中子は一箇所の木釘によって柄部に固定されている。

### 木錘

40・41は、中央部に向かって両側から「へ」の字形に削り込むことを基本形態としている。40は削り込みが深いため中央部径が細くなり、両端は面取りする。42はその角度が広く、径もかなり太いが、基本形態は同じである。41は片側だけの破片であるが、本来は40に近い形態であったと思われる。いずれも、芯持ち材を用いている。

### C. 履物

唯一履物として、下駄が出土している。

#### 下駄

4点出土しているが、いずれも一木作り・二本歯形態である。前緒孔は前歯部に接しながらも歯部より前に穿たれたものばかりであり、48以外は前緒孔が中央部に穿たれている。明らかに対になると思われるものはない。46の平面形は隅丸長方形対を呈し、全長約19.6cmをはかる。半載状態の遺存であり、現幅約6.4cmを残す。表面には使用による窪みが明確に残る。47はほぼ完形に近く、全長約21.2cm、幅約10cmであるが、遺存状態はよくない。両小口側が緩やかな弧を描く平面形態をなす。48は3分の1あまりしか残存しないため、平面形態は確定できないが、前2者に類似する形態になるものと思われる。現長約21.6cm、現幅約5.2cmを見る。歯部は前後とも欠損しているが、折れた歯部を接合するのに用いたと思われる鉄釘の痕跡が一箇所ずつみられる。49は半載強の残存状況であり、全長約19.2cm、現幅約6.6cmと若干短い形態となる。平面形は隅丸長方形と思われる。4点とも板目の縦木取り材を用いているが、いずれも木内側の面が表面側となっている。

### D. 遊戯具

羽子板が1点出土している。

#### 羽子板

50は把手部分は欠損する。基部も半載状態で残存している。基部側辺は先端に向かって直線的にわずかに開き、先端部は直断する。把手部から基部への移行は、極緩やかな弧を2つ連続させている。現長約17cm、現幅約6.2cmをはかる。板目材を用いる。

### E. 装身具

仕上げ用かと思われる、横櫛が出土している。井筒内からさらに数点の出土はあったが、図化できたのは2点のみである。

#### 横櫛

平面形態の違いにより、2形態に分けられる。その一形態は51であり、基部の頂辺はわずかに湾曲する。両角は斜めに切り落とされ、直線的に垂下する両側辺へとなだらかに連続する。完形品であり、全長約9.8cm、幅約4.4cmを見る。断面は細長い楔形を呈する。52・53は破片であるが、基部が大きく湾曲すると思われるものであり、他の一形態になるものである。52は現長約5.6cm、幅約3cmであり、53は現長約8.4cm、幅約1.2cmをはかる。断面はいずれも楔形になるものと思われるが、歯部はほとんど残存していない。52は厚く、53はかなり薄い。3点とも歯間は狭く、仕上げ用の透き櫛になるものと思われる。

## F. 工具

篋状木器と栓状木器がみられる。

### 篋状木器

67は薄い板材の片端を斜めに切り落とし、刃部様に薄く仕上げる。著しい使用の痕跡は見られない。全長約8.8cm、幅約1.8cmである。板目材を使用する。

### 栓状木器

43は直径約2.0cm・全長約4.3cm、44は2.6cmと5.6cm、45は3.6cmと8.4cmであり、3点とも大きさが異なる。いずれも一先端を周囲から削り込んで細める形態を示す。43・44は芯持ち材を用い一部に自然面を残すが、44は半載材であり全面を加工する。

## G. 串状木器

54～59は長く太いため串状木器などと考えられるが、60～65はかなり細いため、箸になる可能性もある。

### 串状木器

54は現長約27.8cmの棒状を呈し、一端を両側から削り込んで尖らせている。他のものは周辺から削って尖らせるが、56・57は太く、54に近い状態である。55・58・59は細く、むしろ刺突具に近い形態である。

### 箸状木器

60～65は上記の55・58・59よりさらに細くなり、先端が尖っている事から、箸ではないかと考える。60・61・64は、断面が方形となる。

## H. 紡垂器

紡垂車かと思われる遺物が見られる。

### 紡垂車

81は直径約3.4cmの薄板材であり、中央部に小さな穿孔を施す。82は復元直径約6.6cmであり、円形平面になると思われる。口径的には1の曲物に近い大きさのため曲物の底板かとも思われるが、それを積極的に証明する痕跡がないため、一応紡垂車として取り扱った。

## I. 用途不明品

部材をはじめ、用途の明確でないものが13点出土している。

68は断面が楕円形であり、全長が約11.6cmの棒状に加工されている。

69は先端部を欠損するが、現長約5.4cm、厚さ約1.2cmをはかる。平面形は魚型を呈し、かなり丁寧に仕上げられている。

70・71は薄い長方形の板材であり、一長辺側を斜めに落とし、70はほぼ中央に、71は中央右寄りに小さな穿孔を有する。70は完形であり、長辺約8.2cmをはかる。両端を落とした側の長辺中央部には小さな「V」字状の切り込みが入る。71は一長辺を欠損するが、全長約11.2cm、現幅約6cmを見る。

73は一端をホゾ状に切り出しており、現長約18.2cm、現幅約7.4cmである。幅は約3.4cmと厚く、建築部材・組木の部材等かと思われる。

74～76は、片端に小さな穿孔が施されている。74は全長約26cm、幅約3.4cm、75は全長約20.6cm、幅約4.1cmであり、いずれとも平面形は長方形であるが、厚さは74が1.4cmと厚く、75は0.5cmの薄い板状となる。76は一端をホゾ状に作り出し、そこに小さな穿孔を持つ。現長約29.8cm、幅約6.6cmであり、断面は最大約2.2cmの蒲鉾型を呈する。

77～80は側面に木釘を打ち込んだ板材である。78は全長17.2cm、厚さ約1.8cmをはかる。木釘は扁平で斜めに打ち込まれている。木釘と反対側の側辺には、溝状の切り込みがある。79は現長約12cm、幅約3.6cm、厚さ約0.5cmである。木釘はやはり斜めに入っており、その側辺には孔が穿たれている。80は全長約16cm、幅約3.2cm、厚さ約1cmであり、片側の側辺中央部にほぼ垂直に木釘が打ち込まれている。

## J. 井戸枳材

### 横木組井戸枳材

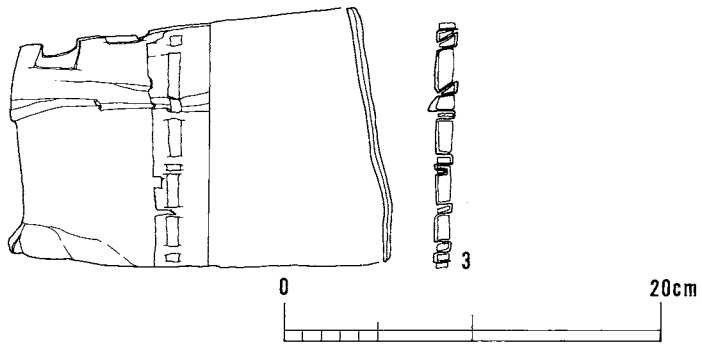
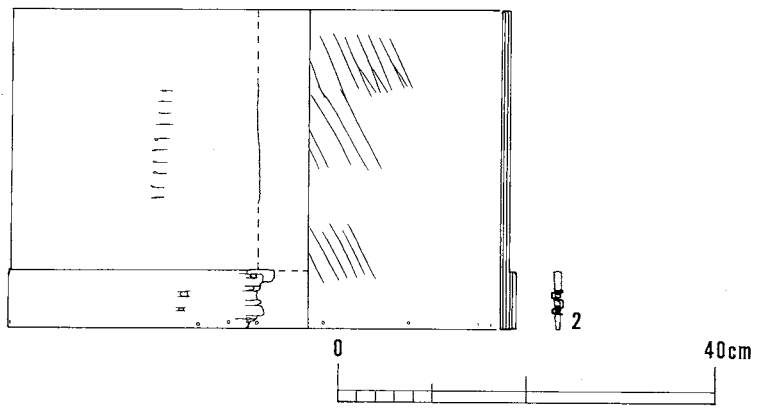
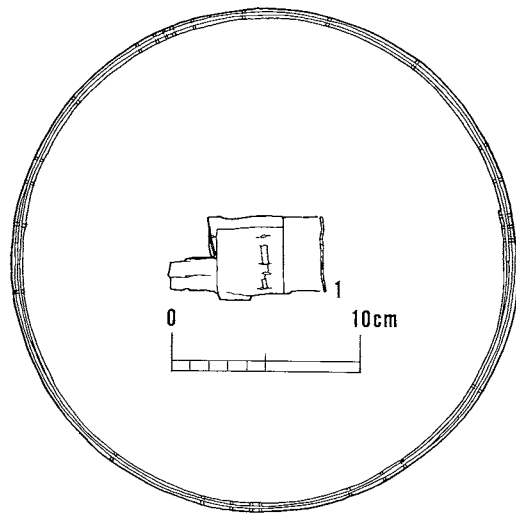
83～88：直径4.5～3.4cm、全長34.2～35.2cmの芯持ちの丸太材を用いる。両端から約2.5～5.3cmの長さで「ハ」の字になるように切り込みを入れ、半載して組部を作り出す。ほとんどに外面の加工は見られず、一部には樹皮が残存する。

### 縦木組井戸枳材

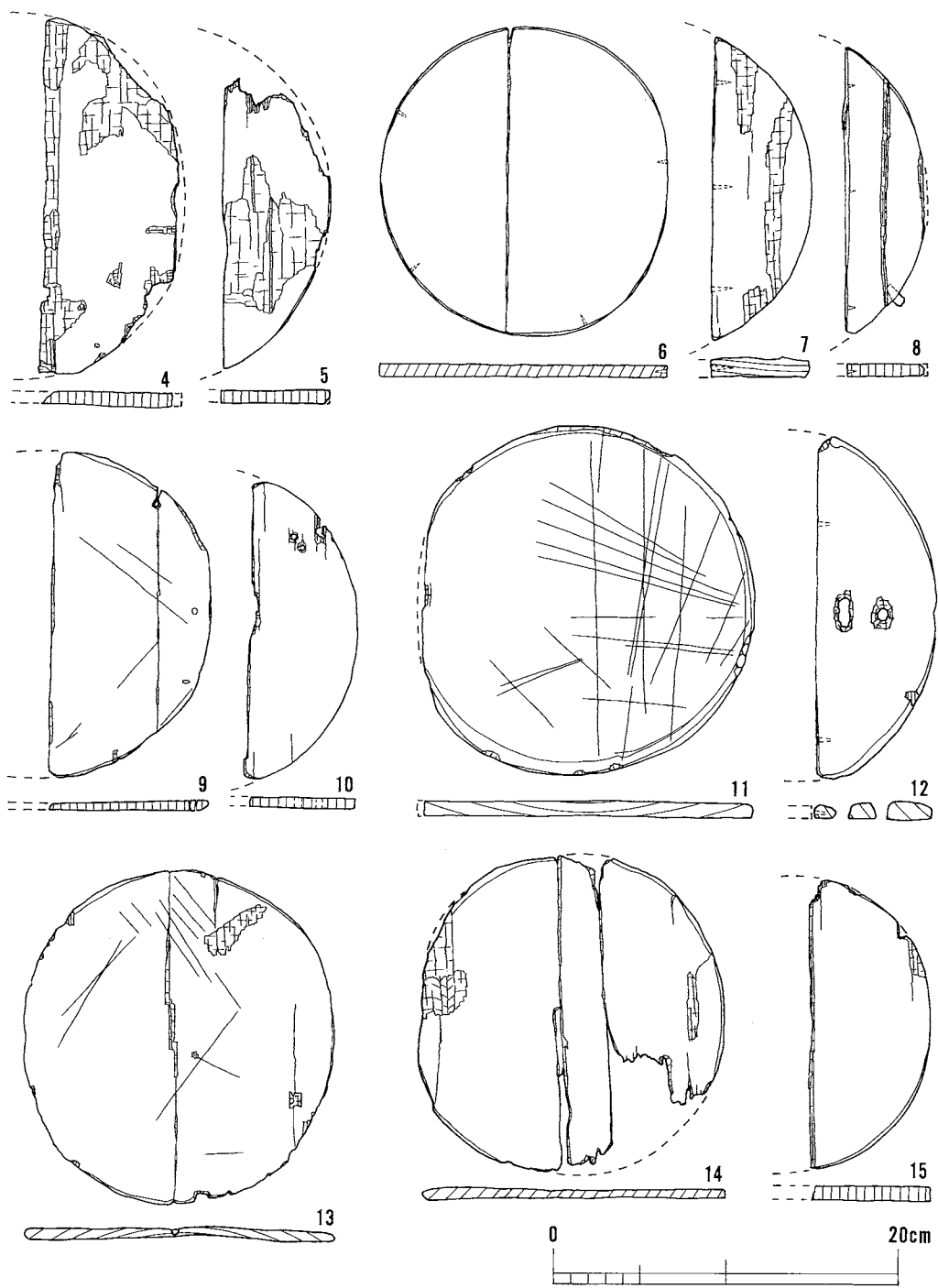
89～91：89は現長約48.6cm、幅約15.2cm、厚さ約1.5cmをはかる。下端近くとその上方に大きな穿孔が見られるが、腐食によるものか人工的なものか判断できない。90は現長約32.8cm、幅約21.3cm、厚さ約1.2cmをみる。下方の一側辺には長さ3.3cm、深さ1.5cmの長方形の削り込みが施されている。91は断面が厚さ約5.2cmの蒲鉾状であり、全長約95.4cmをはかる。一方の小口は幅約18.2cmであり、他の一方が約12.6cmと狭くなる。幅の狭い小口側には、比較的口径の大きい孔が上下に2箇所穿たれており、89ともあわせて、転用材の可能性はある。

### 井戸枳用材

92～94は直径2.7～4.2cm、全長80.4～92.4cmの芯持ちの丸杭である。先端は周囲から削り込んで尖らせている。表面はほとんど自然面のままであり、その一部には樹皮が残存する。SK07内で発見されているため、浅い素堀の井戸枳様の杭であったと思われる。



挿図314 木製品 (1) 曲物



挿図315 木製品 (2) 曲物



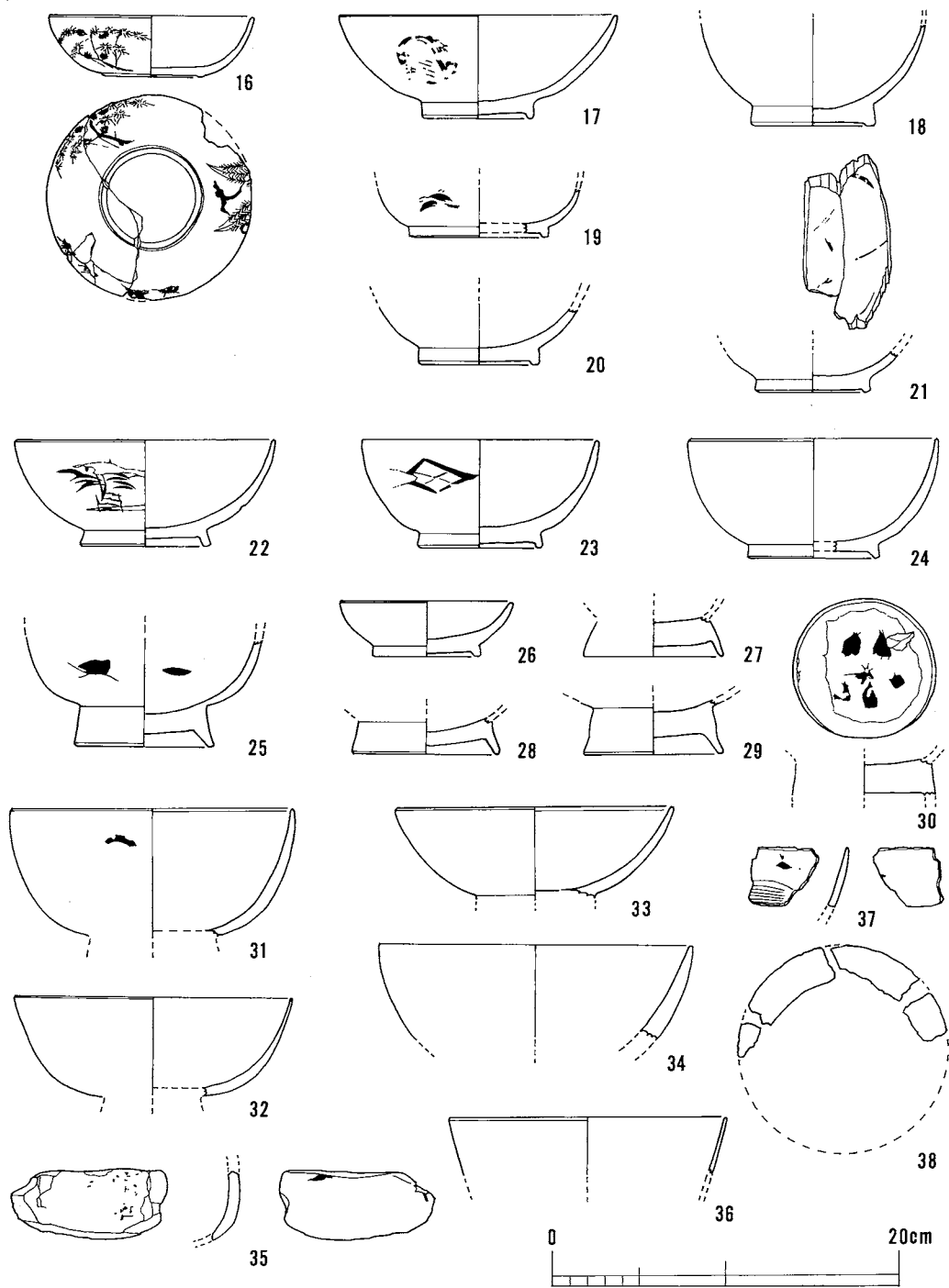
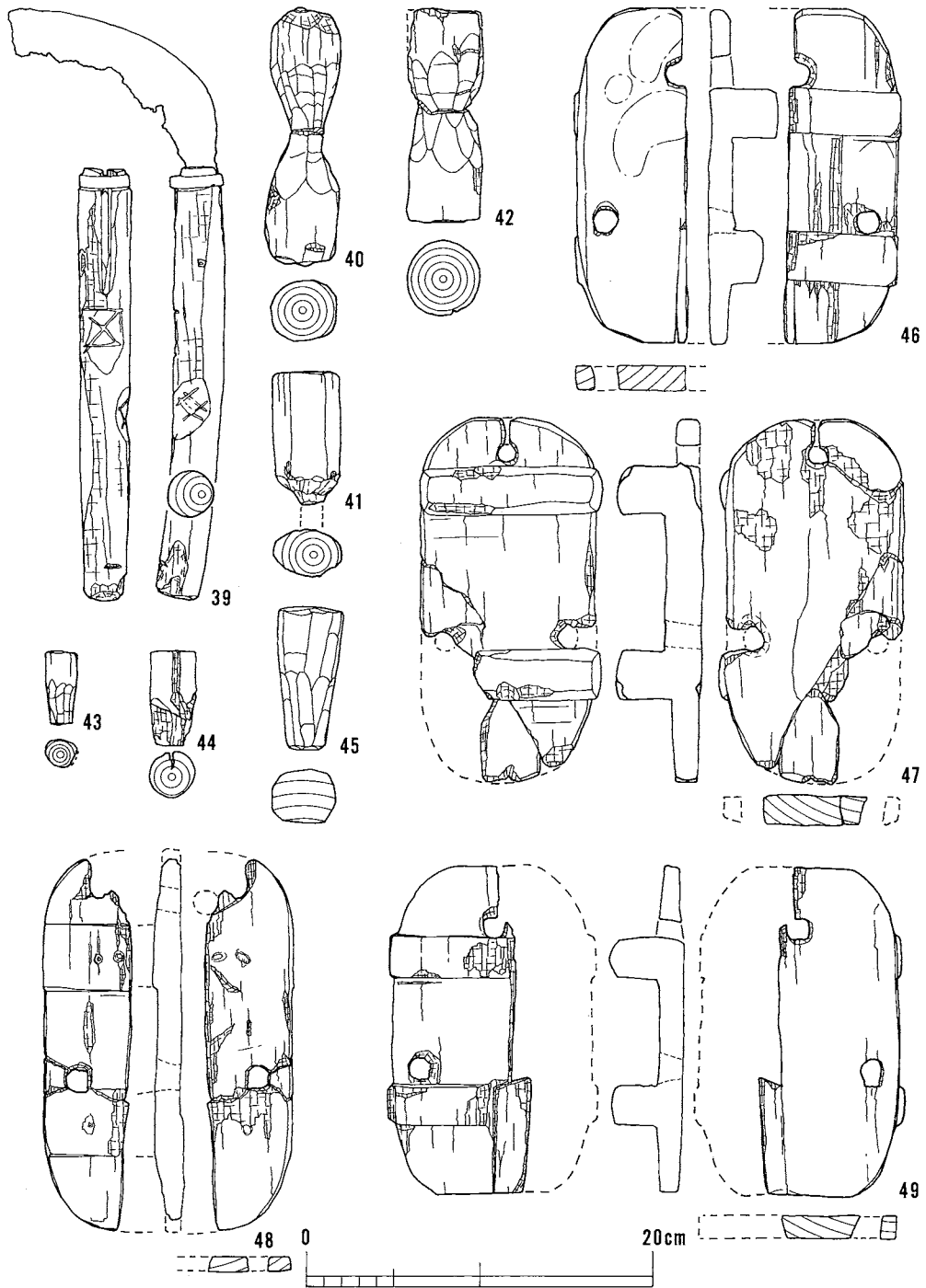
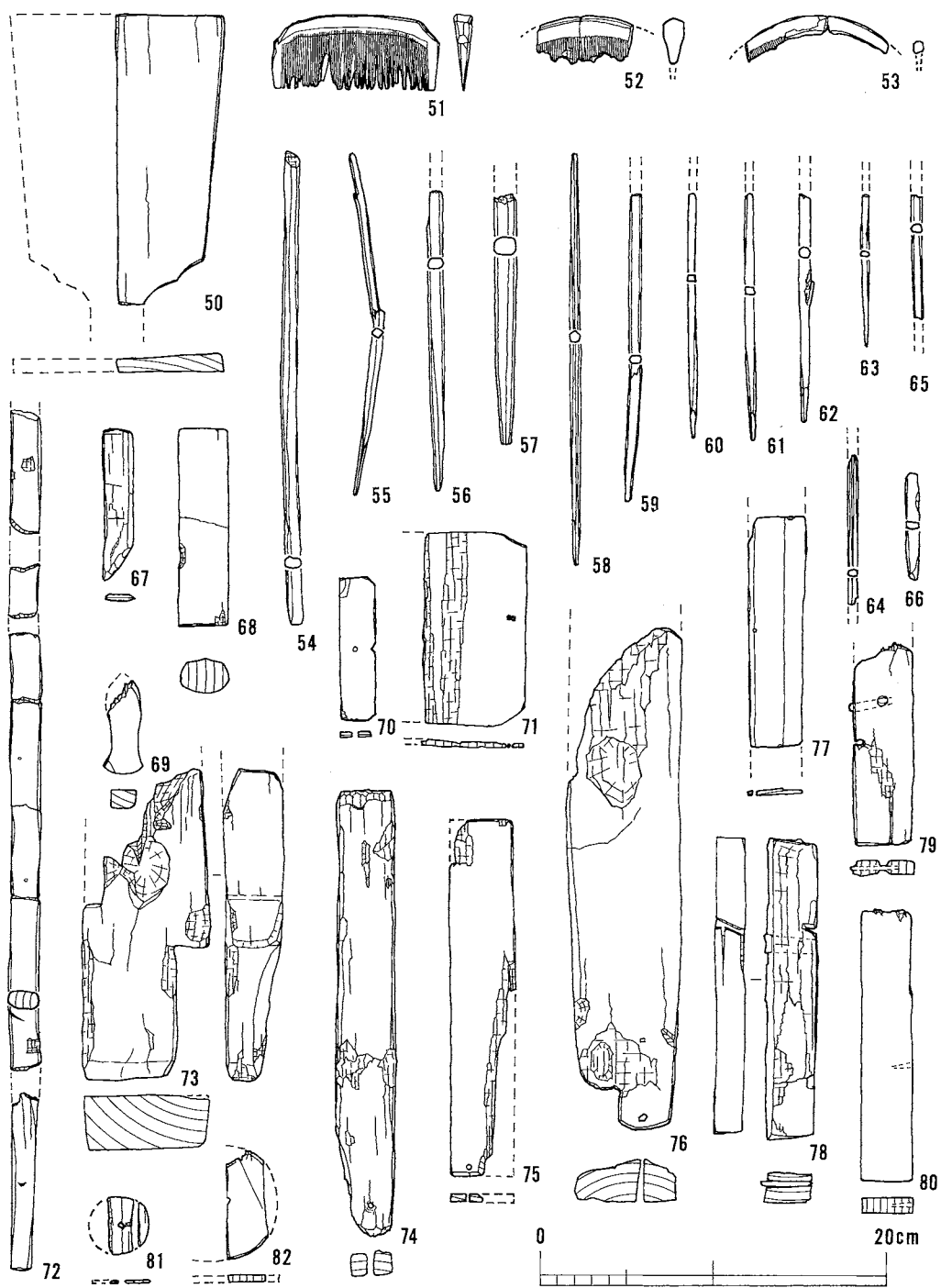


插图316 木製品 (3) 漆碗



挿図317 木製品 (4) 鎌・木錘・栓・下駄



挿図318 木製品 (5) 羽子板・櫛・箸・その他

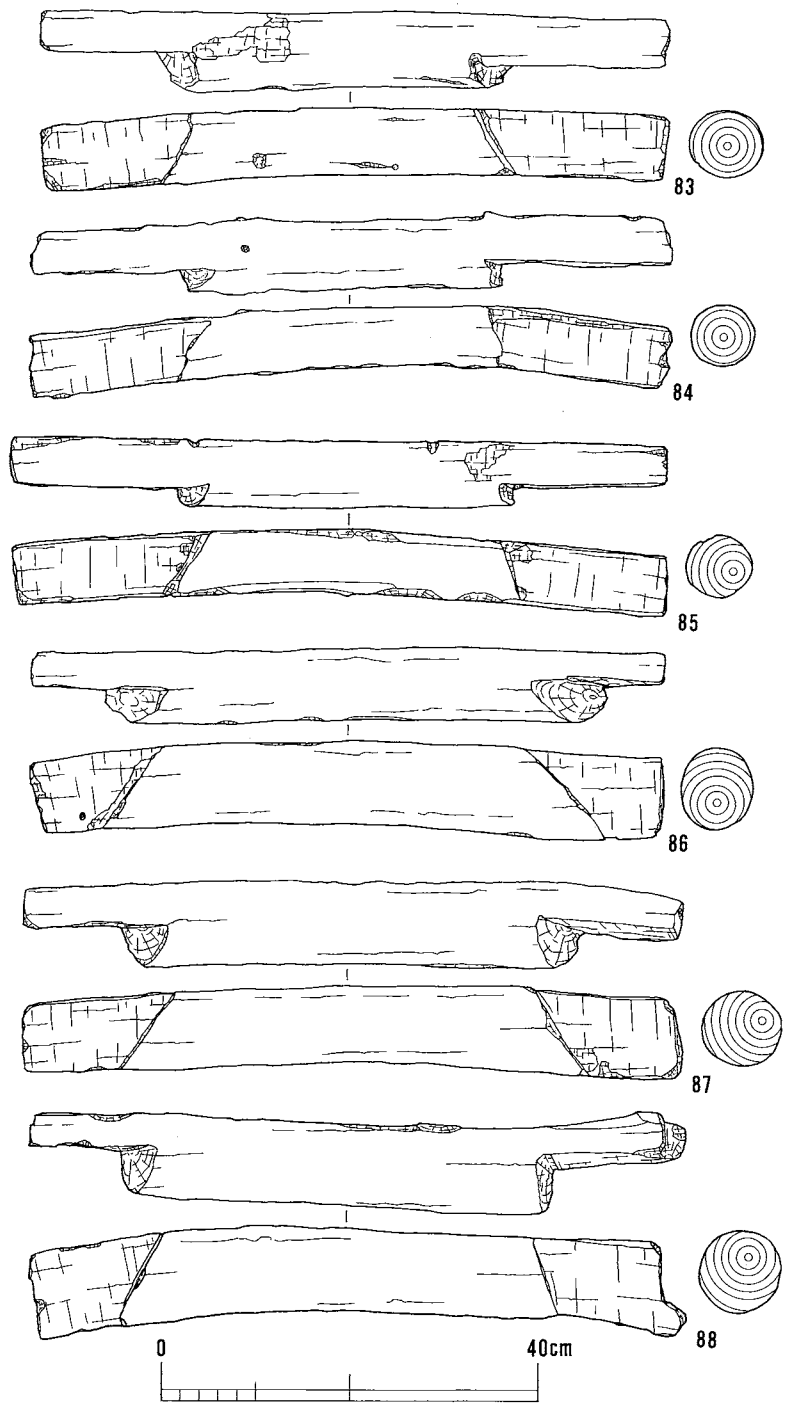
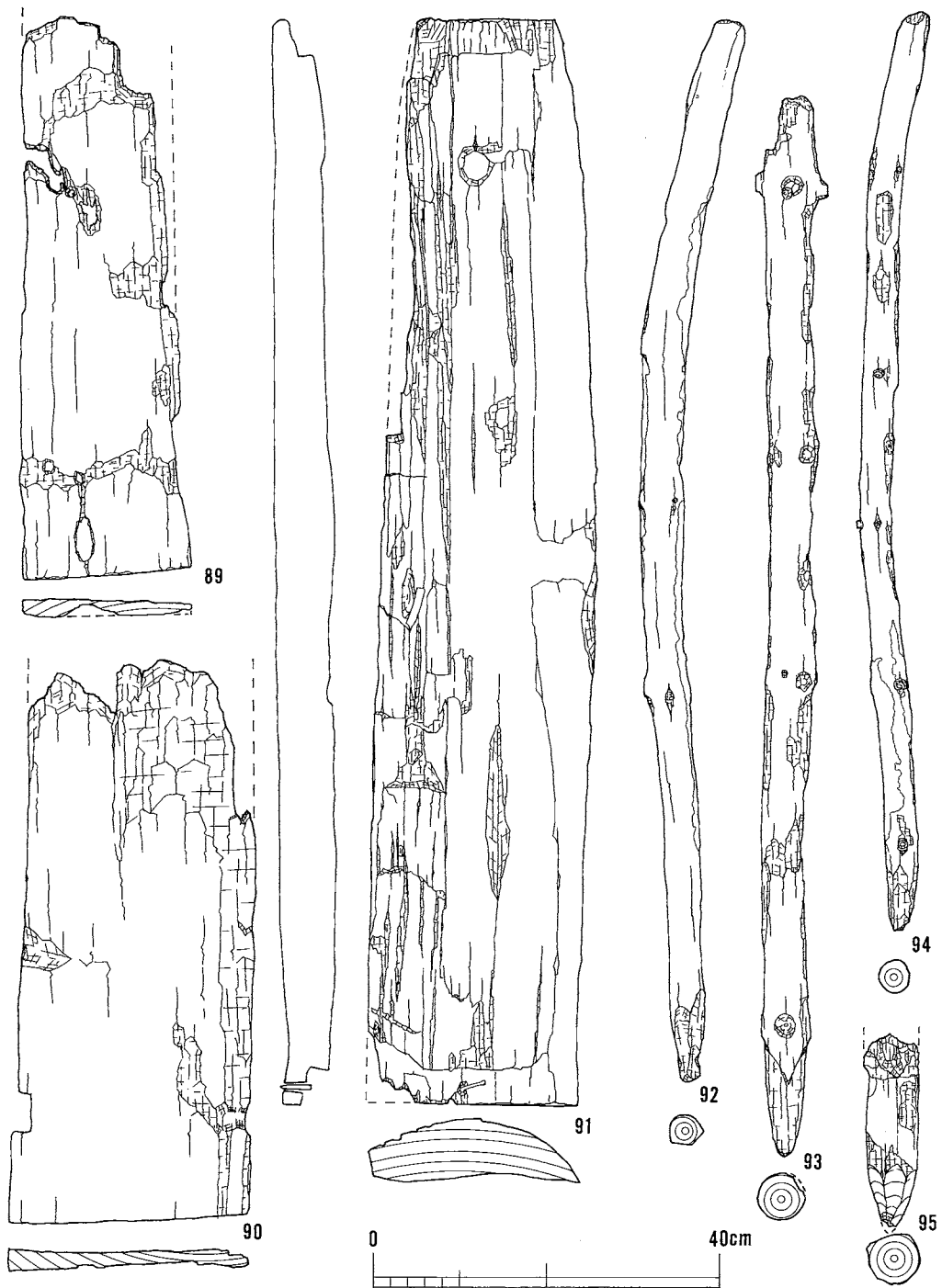
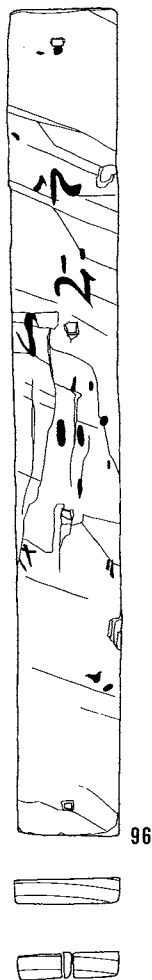


插图319 木製品 (6) 井戸梓材



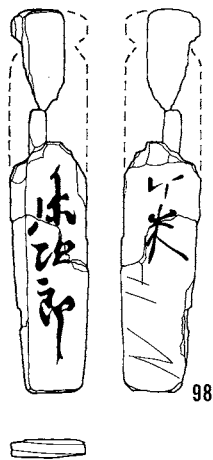
挿図320 木製品 (7) 井戸材・その他



96



97



98

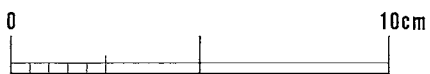


插图321 木製品 (8) 木簡

(2) 木 簡

2点の文書木簡と1点の付札が出土している。

文書木簡96は付札98とともに南地区片岡庄堀がSD01と取り付く箇所には橋材（木器91）と土師器小皿と出土している。文書木簡96は組み合わせ箱物の一部で繋ぎに木釘が使われている。墨書きは長辺に直交して、3字6行が読み取れるが、いずれも釈読ができない。

付札98は表に□□米の3字分が予想され、2字目を斗と読ませると□斗米となる。裏は弥次郎とあり、□斗米の荷の差出人が弥次郎となる。16世紀初頭の時期を与える。

文書木簡97は井戸SE19下層で出土しており、□□□□の4字分が読み取れるが、いずれも釈読ができない。呪符木簡とも考えられるが、内容は不明である。13世紀代の遺物と共伴していた。

96	97	98
□□□	□	弥 □
□□□	□	次 斗
□□□	□	朗 米
□□□	□	
□□□		(裏) (表)
□□□		
28×220×8	40×284×4	20×100×6

表10 木製品一覧 (1)

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	樹種	備考
1	C <sub>1</sub>	SE06	曲物	3.6	6.1	0.1		
2	C <sub>1</sub>	SE06	曲物	13.8	15.7	0.2	二葉マツ	
3	C <sub>1</sub>	SE10	曲物	33.7	53.4	0.4	スギ	
4	C <sub>1</sub>	SE05	曲物底板	20.4	7.9	1.0	スギ	
5	S <sub>3</sub>	SE17	曲物底板	16.3	6.3	0.7	スギ	
6	C <sub>1</sub>	SE06	曲物底板	17.8	16.6	0.7	スギ	
7	C <sub>1</sub>	SE06	曲物底板	17.6	5.7	1.0		
8	S <sub>1</sub>	SE08	曲物底板	16.5	5.1	0.7	スギ	
9	S <sub>3</sub>	SE14	曲物底板	18.7	9.2	0.5	ヒノキ	
10	S <sub>3</sub>	SE19	曲物底板	17.2	6.4	0.6	スギ	
11	C <sub>1</sub>	SE10	曲物底板	20.2	19.1	0.8	ヒノキ	
12	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	曲物底板	19.8	6.8	1.1	ヒノキ	
13	C <sub>1</sub>	SE10	曲物底板	17.7	19.1	0.7		
14	C <sub>3</sub>	SE16	曲物底板	17.9	17.6	0.7		
15	C <sub>1</sub>	SE05	曲物底板	14.7	7.0	0.8	ヒノキ	

木製品 (2)

番号	地区	遺構	種類	口径cm	底径cm	高さcm	厚みcm	樹種	備考
16	S <sub>3</sub>	SE14	漆椀	11.8	5.8	3.5	0.3	ケヤキ	外黒内朱漆：鳥・木
17	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	漆椀	16.0	6.4	6.0	0.5		内外黒漆
18	C <sub>1</sub>	外堀	漆椀		7.2	5.9	0.4	クリ	外黒内黒朱漆
19	C <sub>1</sub>	外堀	漆椀		8.0	2.8	0.3		内外黒漆
20	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀		7.0	3.3	0.5		外黒内黒朱漆
21	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀		6.6	2.1	4.5		内外黒漆
22	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	漆椀	15.0	7.5	6.1	0.4	カツラ	外黒内黒朱漆
23	C <sub>1</sub>	内堀	漆椀	13.6	7.2	6.2	0.4	クリ	内外黒漆
24	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	漆椀	14.4	7.6	6.9	0.5		内外黒漆
25	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	漆椀		8.0	6.2	0.4		内外黒漆
26	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	漆椀	10.0	6.2	3.2	0.5	トチノキ	外黒朱内朱漆
27	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀		8.0	2.3			高台
28	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	漆椀		8.5	2.1			高台
29	C <sub>1</sub>	外堀	漆椀		8.0	3.0		クリ	内朱漆
30	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀		8.2	2.1		トチノキ	内外黒漆
31	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	漆椀	16.4		7.3	0.6		内外黒漆
32	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀	16.0		5.7	0.4	クリ	内外黒朱漆
33	S <sub>4</sub>	東西堀	漆椀	16.0		5.2	0.4	クリ	内外黒漆
34	S <sub>4</sub>	外堀	漆椀	18.0		5.4	0.9	コウヤマキ	外黒朱内黒漆
35	C <sub>1</sub>	SE05	漆椀				0.4		内外黒漆
36	C <sub>1</sub>		漆椀				6.5		内外黒朱漆
37	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	漆椀	16.0		3.3	0.2		外黒内朱漆
38	C <sub>3</sub>		漆椀	12.0					朱漆

木製品 (3)

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	樹種	備考
39	C <sub>1</sub>	SE07	鎌	26.3	3.0	2.8		近世
40	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	木錘	14.8	3.7	3.5	クスノキ	
41	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	木錘	12.3	4.1	4.3	ヒサカキ	
42	C <sub>1</sub>	内堀	木錘	7.7	3.8	2.8	クリ	
43	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	栓	4.3	1.8	1.6		



44	C <sub>1</sub>	内堀	栓	5.5	2.6	2.7		
45	C <sub>1</sub>	内堀	栓	8.2	3.7	3.1	ヒノキ	
46	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	下駄	19.3	6.5	1.4	ツガ	
47	S <sub>4</sub>	外堀	下駄	21.1	10.5	1.7	ケヤキ	
48	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	下駄	21.5	4.9	0.9	二葉マツ	
49	S <sub>4</sub>	外堀	下駄	18.8	8.2	1.3	二葉マツ	
50	C <sub>1</sub>	外堀	羽子板	16.8	6.2	1.0	ヒノキ	
51	C <sub>1</sub>	SE01	櫛	4.4	9.5	1.0	ヒサカキ	
52	S <sub>4</sub>	外堀	櫛	2.8	5.5	1.2	ヒサカキ	
53	S <sub>3</sub>	SE18	櫛	1.2	8.3	0.6	ヒサカキ	
54	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	串状木器	8.4	1.9	0.4	二葉マツ	
55	S <sub>3</sub>	SE14	串状木器	47.6	0.9	0.7	スギ	
56	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	串状木器	19.7	0.7	0.6	スギ	
57	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	串状木器	17.6	0.8	0.7	スギ	
58	S <sub>4</sub>	外堀	串状木器	14.5	1.2	1.1	ヒノキ	
59	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	串状木器	24.9	0.6	0.6	スギ	
60	C <sub>1</sub>	SE10	箸状木器	17.8	0.6	0.4	スギ	
61	C <sub>1</sub>	SE06	箸状木器	14.2	0.5	0.4		
62	C <sub>1</sub>	SE10	箸状木器	14.3	0.5	0.4	スギ	
63	C <sub>1</sub>	内堀	箸状木器	13.2	0.6	0.6	ヒノキ	
64	C <sub>1</sub>	SE10	箸状木器	9.9	0.5	0.3		
65	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	箸状木器	7.3	0.5	0.6	スギ	
66	S <sub>3</sub>	SE14	箸	8.6	0.5	0.4	ヒノキ	
67	C <sub>1</sub>	SE10	籠状木器	6.2	0.7	0.4	二葉マツ	
68	C <sub>1</sub>	外堀	籠状木器	11.4	2.9	2.0	カシ類	
69	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	籠状木器	4.4	2.3	1.1	スギ	
70	C <sub>1</sub>	内堀	籠状木器	8.3	2.0	0.4	スギ	
71	S <sub>4</sub>	外堀	籠状木器	11.2	5.9	0.2	スギ	
72	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	籠状木器	11.7	1.7	0.9	クリ	
73	C <sub>1</sub>	内堀	籠状木器	18.0	7.2	3.2	クリ	
74	C <sub>1</sub>	SE06	籠状木器	25.8	3.5	1.5	スギ	
75	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	籠状木器	26.0	3.3	0.5	ヒノキ	
76	C <sub>1</sub>	SE10	籠状木器	28.9	6.7	2.5		
77	C <sub>1</sub>	内堀	籠状木器	13.3	3.3	0.4	モミ	
78	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	籠状木器	11.8	3.7	0.8	ヒノキ	
79	S <sub>4</sub>	外堀	籠状木器	17.4	3.0	1.7		
80	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	籠状木器	15.7	3.0	1.0	ヒノキ	
81	C <sub>1</sub>	SE10		2.3	3.4	0.2	スギ	
82	S <sub>1</sub>	片岡庄堀		6.3	2.1	0.4	二葉マツ	
83	S <sub>3</sub>		井戸杵材	64.7	6.4	7.7		
84	S <sub>3</sub>		井戸杵材	67.1	5.9	5.6		
85	S <sub>3</sub>		井戸杵材	69.0	9.9	7.4		
86	S <sub>3</sub>		井戸杵材	65.4	7.5	7.4	二葉マツ	
87	S <sub>3</sub>		井戸杵材	69.3	9.8	9.2		
88	S <sub>3</sub>		井戸杵材	69.0	12.2	11.0		
89	C <sub>1</sub>	SE10	井戸杵材	65.4	19.6	1.8		
90	C <sub>1</sub>	SE10	井戸杵材	65.4	27.5	2.7		
91	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	井戸杵材	124.7	23.0	6.8	二葉マツ	
92	C <sub>1</sub>	SE07	杭	121.9	4.7	4.0		

93	C <sub>1</sub>	SE07	杭	127.9	5.4	5.3		近世
94	C <sub>1</sub>	SE07	杭	105.5	3.4	3.8		近世
95	C <sub>4</sub>	SD05	杭	22.0	6.1	5.8	二葉マツ	近世
96	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	木簡	21.9	2.7	7.0		
97	S <sub>3</sub>	SE19	木簡	28.4	4.1	4.0		
98	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	木簡	10.1	2.0	5.0		付札

## 7. 石製品

石製品は (1) 石造品・一石五輪塔 7 点、(2) 石臼・茶臼 8 点、(3) 砥石 53 点、(4) 硯 12 点、(5) 石鍋 13 点、(6) 磨石 12 点の計 105 点がある。そのなかでも砥石が圧倒的な数量を占める。

### (1) 石造品・一石五輪塔

一石五輪塔と五輪塔と他の石造品がある。出土状況からは方形館跡の堀や片岡庄堀につながる SD01 の土橋に積まれたものである。墓石や供養塔としての原位置では出土していないが、鶴荘絵図の「満願寺」の周辺に位置し、室町時代に属する石造品である。

一石五輪塔は大型の 1 と小型の 2～3 がある。

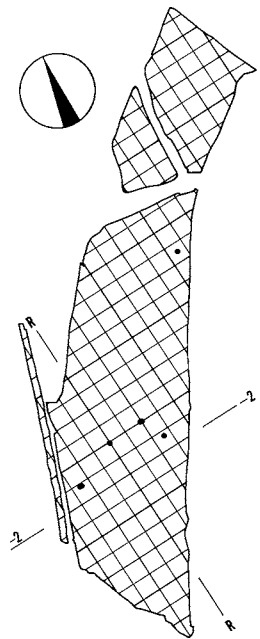
### 石造品・一石五輪塔一覧

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	石材	備考
1	S <sub>1</sub>	SD01	一石五輪塔	42.3	19.1	19.3	凝灰岩	風火水地
2	C <sub>1</sub>	内堀	一石五輪塔	21.4	12.2	13.1	凝灰岩	空風火
3	C <sub>1</sub>	内堀	一石五輪塔	28.5	12.9	13.2	凝灰岩	空風火水
4	1981年度	内堀	一石五輪塔	24.2	14.3	11.3	凝灰岩	火水地
5	S <sub>1</sub>	SD01	五輪塔	19.5	13.4	17.0	凝灰岩	地
6	S <sub>1</sub>	SD01	五輪塔?	26.7	15.1	12.2	凝灰岩	
7	C <sub>3</sub>	東西堀	五輪塔	17.0	16.6	8.9	凝灰岩	地

1 は空輪と地輪の一部を欠いているが、残長 42.3cm、地輪の辺が約 19cm を測る本遺跡では大型品である。

2 は、水地輪を欠き、3 は水輪の一部と地輪を欠き、4 は空風輪を欠いており、ともに火輪の反りが強いもので、推定長 40cm を超え、地輪の辺が約 14cm を測る一石五輪塔である。

他には、5・7 の五輪塔地輪と考えるものと不明の石造品 6 がある。特に 5 は永輪との組合せの凸基を造り出している。



挿図322 一石五輪塔他  
出土状況

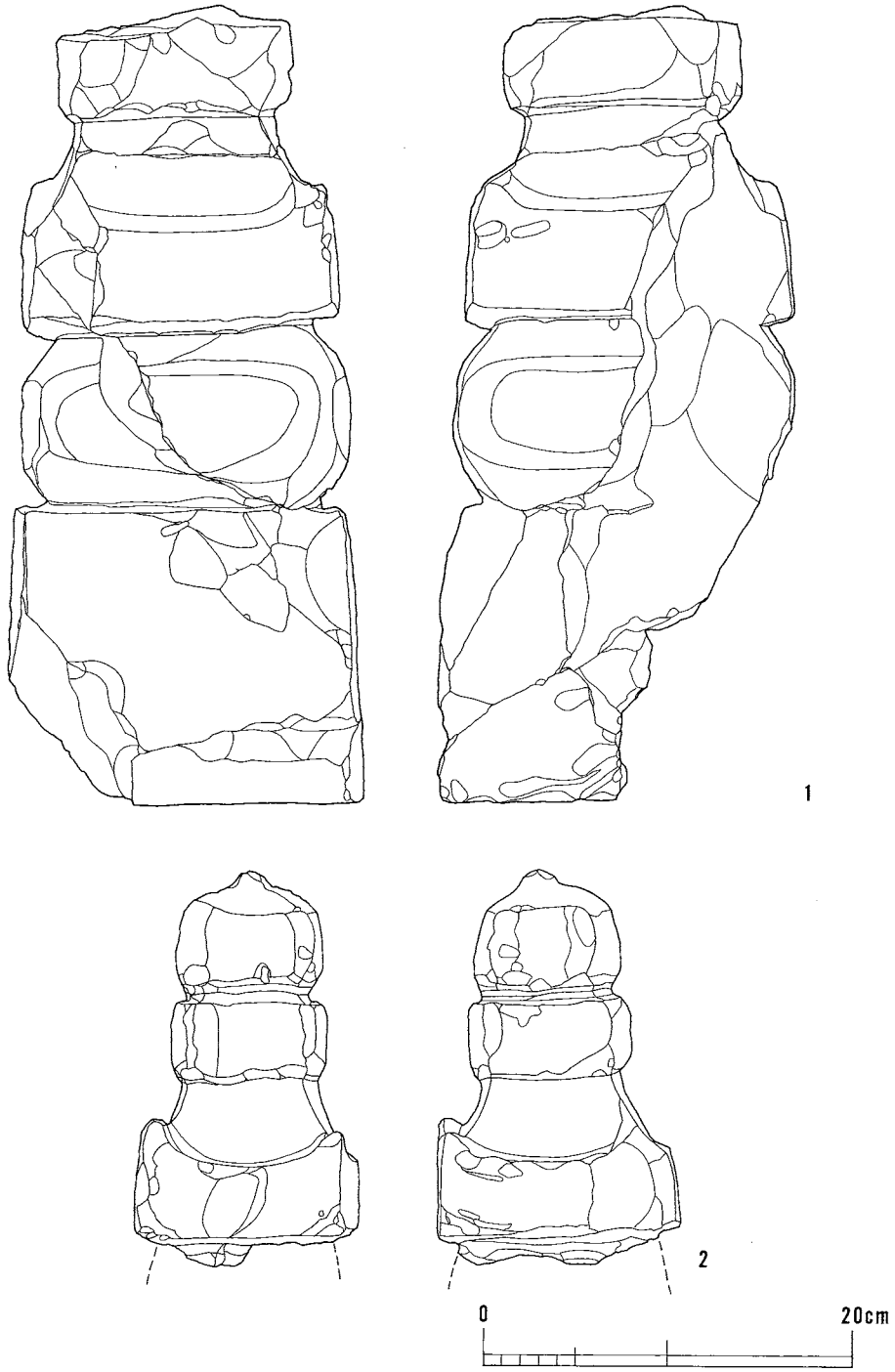
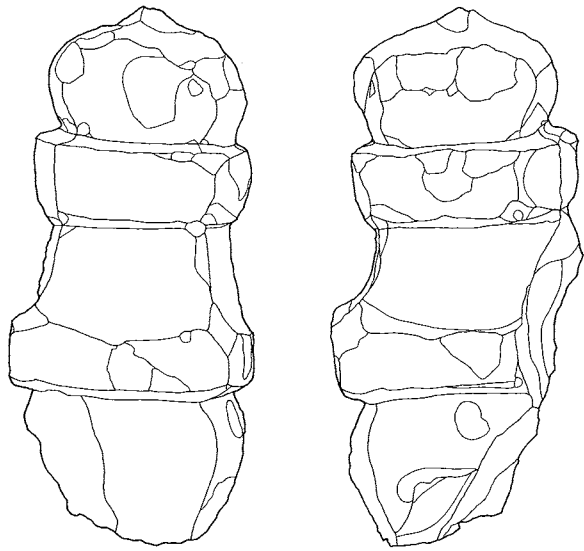
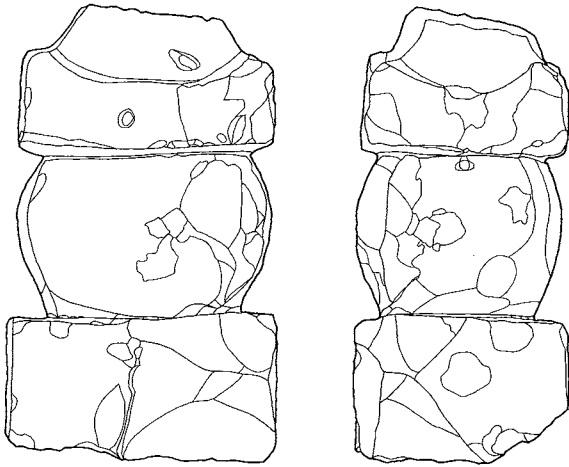


插图323 石製品 (1) 一石五輪塔 (1)



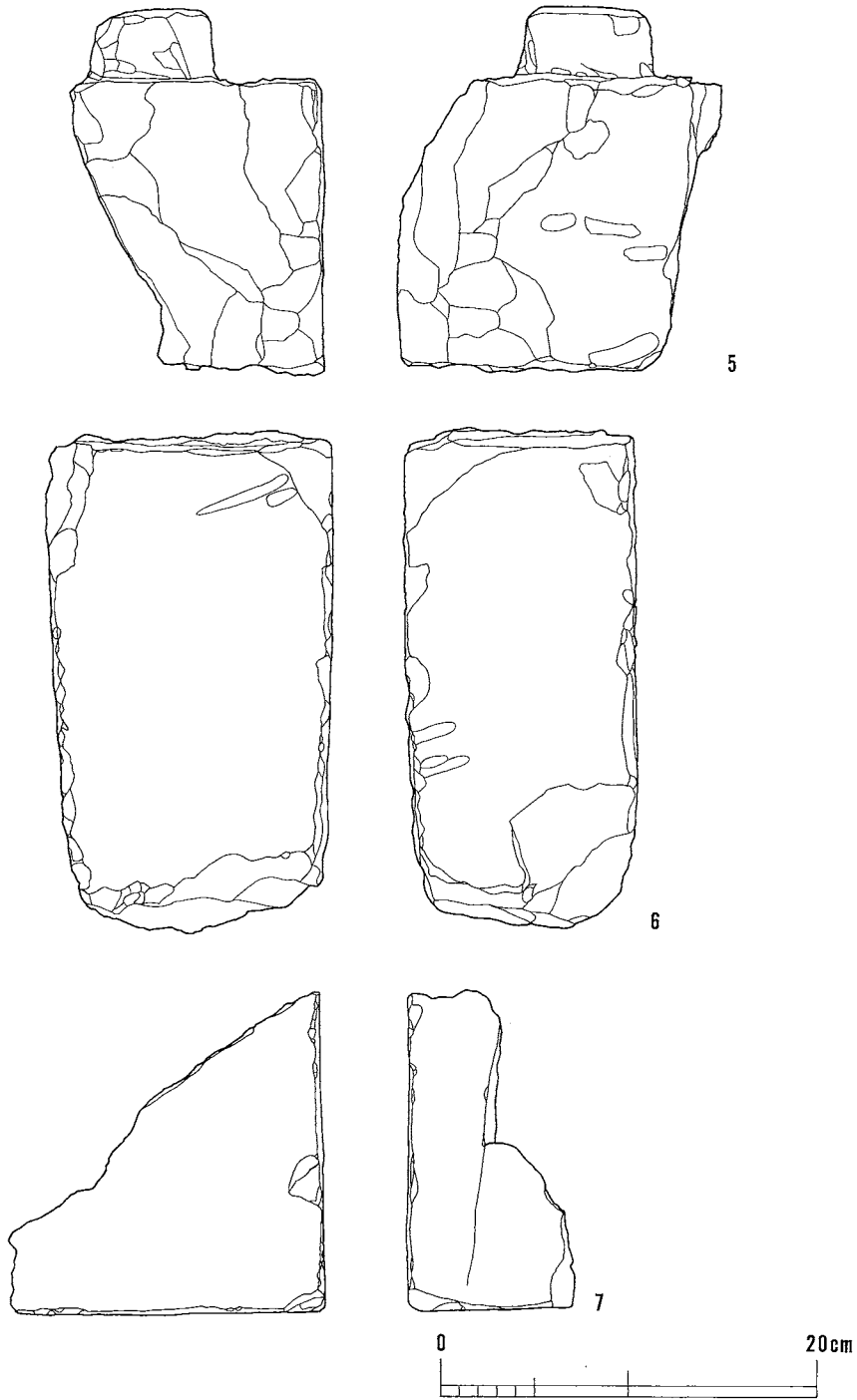
3



4



插图324 石製品 (2) —石五輪塔 (2)



挿図325 石製品 (3) 五輪塔その他

(2) 石臼・茶臼

石臼・茶臼としたものは粉挽き臼（石臼）と茶臼があり、井戸SE03や方形区画溝SD17、方形館堀から廃棄され出土している。

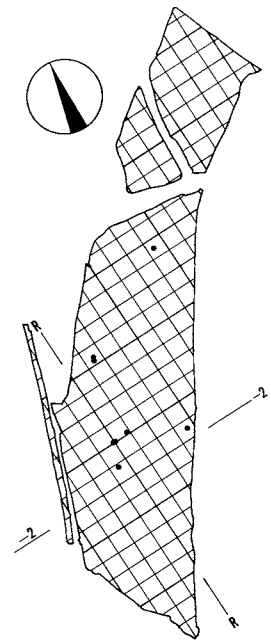
基本的に粉挽き臼は花崗岩製、茶臼は凝灰岩製がある。

表12 石臼・茶臼一覧

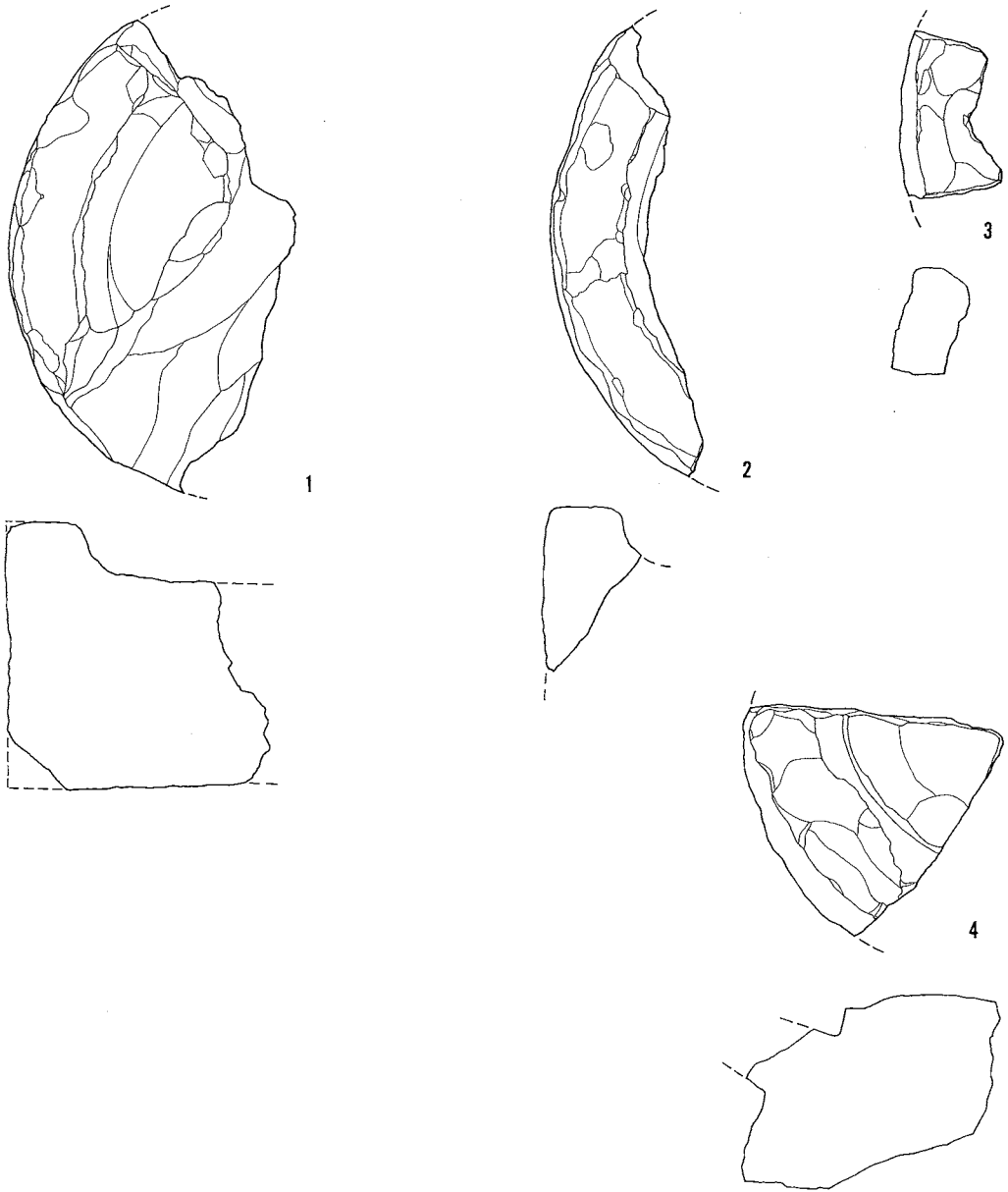
番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	石材	備考
1	C <sub>1</sub>	SE03	石臼	25.1	15.3	14.4	花崗岩	
2	C <sub>1</sub>	東西堀	石臼	24.0	8.0	8.9	花崗岩	
3	C <sub>1</sub>	内堀	石臼	9.0	6.6	5.7	花崗岩	
4	C <sub>1</sub>	SD17	石臼	12.3	14.0	10.5	花崗岩	
5	S <sub>1</sub>	SD01	茶臼	17.2	18.0	13.7	凝灰岩	
6	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	茶臼	26.1	16.7	8.7	凝灰岩	
7	1981年度	内堀	茶臼	13.7	6.6	7.8	凝灰岩	
8	1981年度	内堀	茶臼	9.9	9.4	2.5	凝灰岩	

石臼は花崗岩製上臼片で、穀物を入れる臼で外縁が良く残る。石臼で挽く穀物としては、コム・ムギ・マメ・ソバが堀や井戸、土壙から出土している。

茶臼は下臼片で、磨面の刻みが6分割（5・7・8）と8分割（6）がある。茶臼は、喫茶道具としては天目茶碗などが出土していることから、喫茶が好まれていたことが判る。



挿図326 石臼・茶臼出土状況



挿図327 石製品 (4) 石臼 (1)



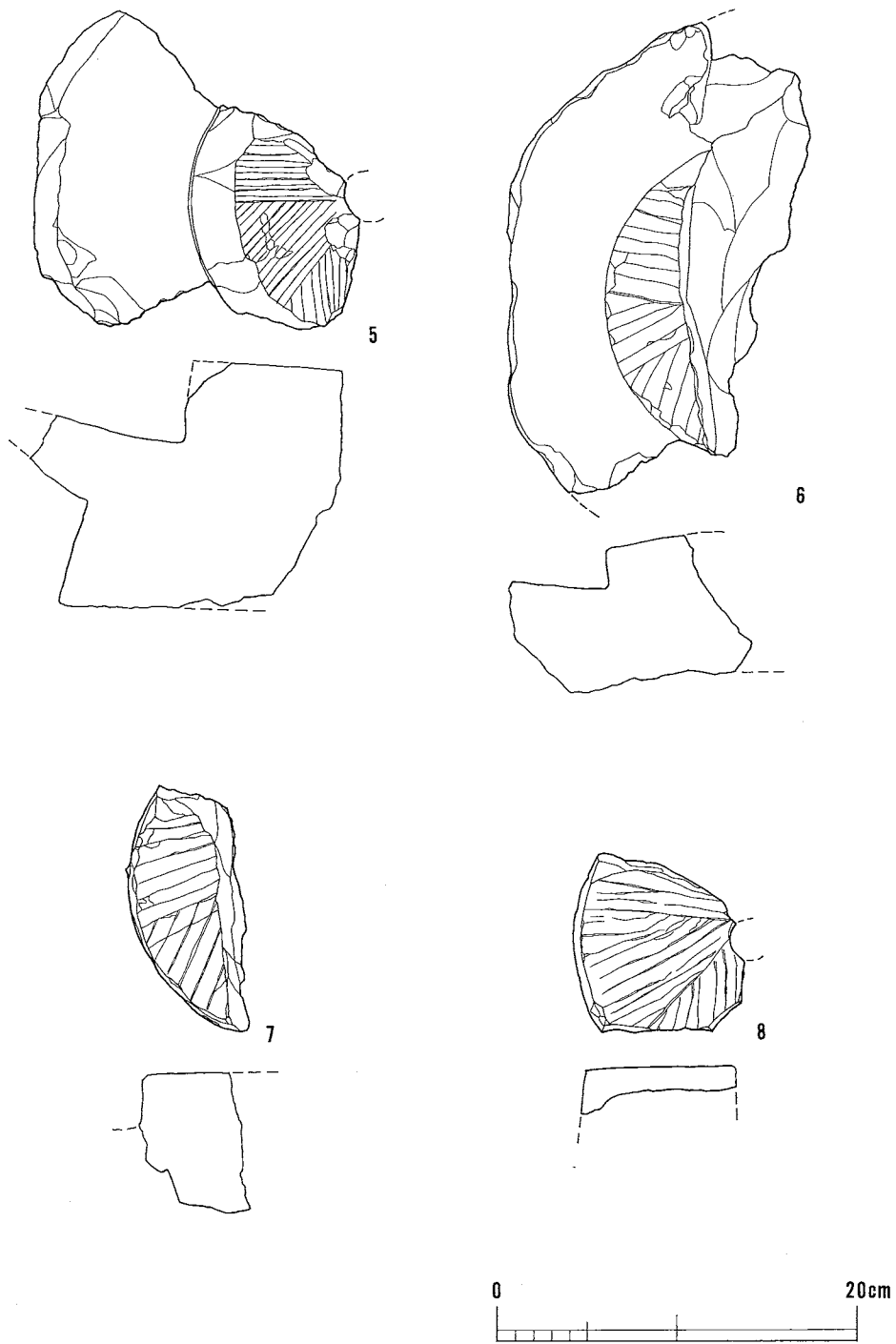


插图328 石製品 (5) 石臼 (2) ・茶臼

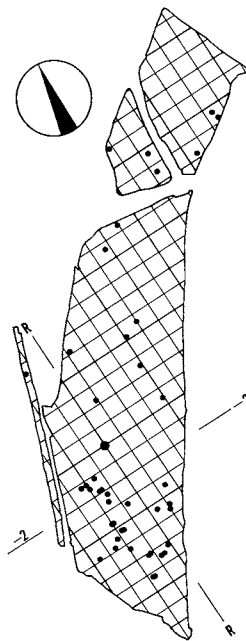
### (3) 砥石

石製品のうち出土量が多い物に砥石がある。砂岩・泥岩製がある。

砥石は、法量から、大型で定置して使用する砥石（1～7）と、携帯用としても使用できる小型の砥石（8～53）がある。

砥石の多くが、刃物研き痕を残し、金属製品用の砥石である。研ぎ痕が多面に残るものが多く、使用の頻度が多かったことを物語る。また出土の金属製品は、武器の刀、小柄、工具の刀子など、農具の鎌、鋤などが多くあることから、窺い知ることができる。

小型の砥石では楕形と長方形に使用の結果、形態をなすものに分かれ、用途の違いがある。



挿図329 砥石出土状況

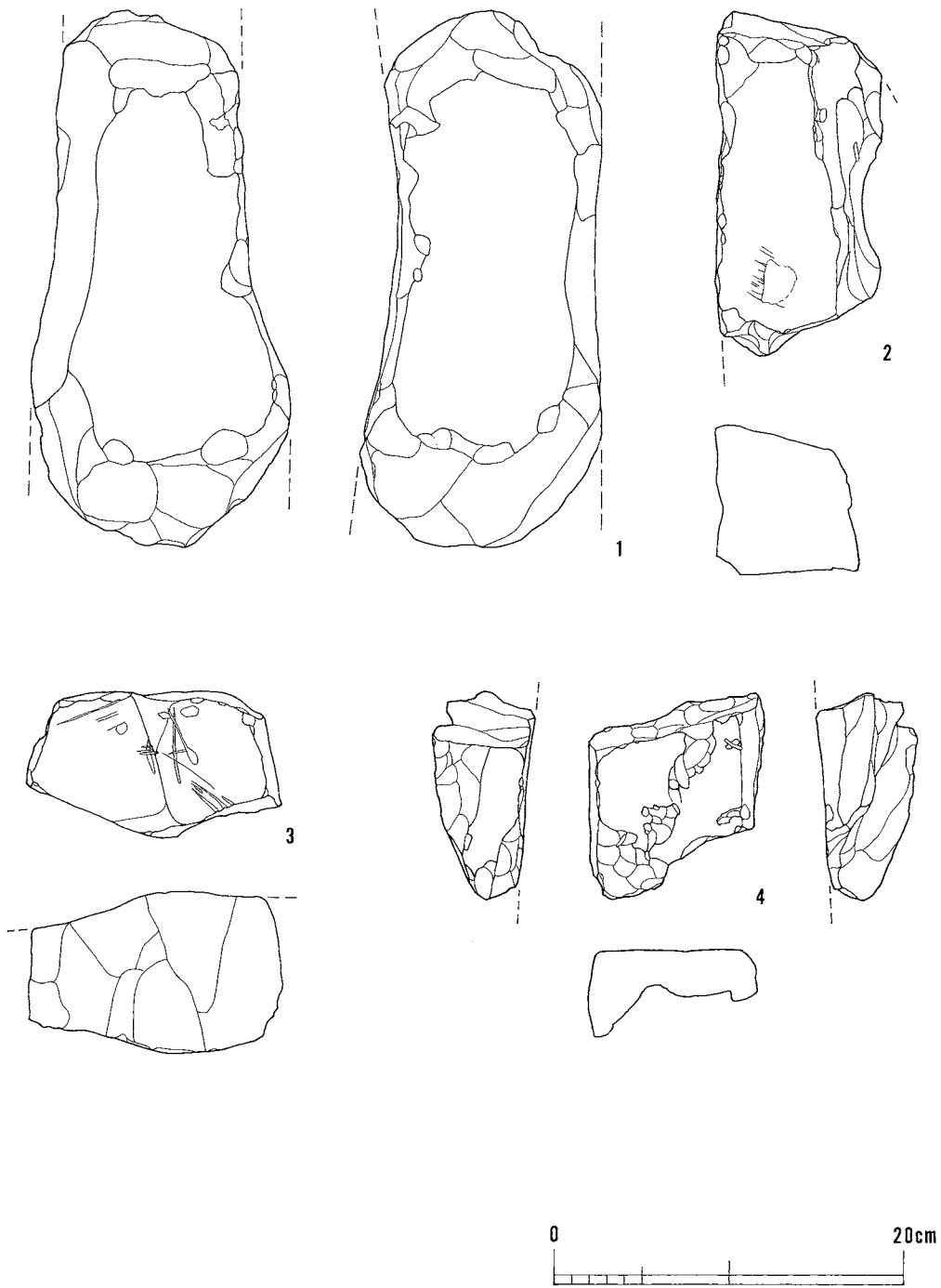


插图330 石製品 (6) 砥石 (1)

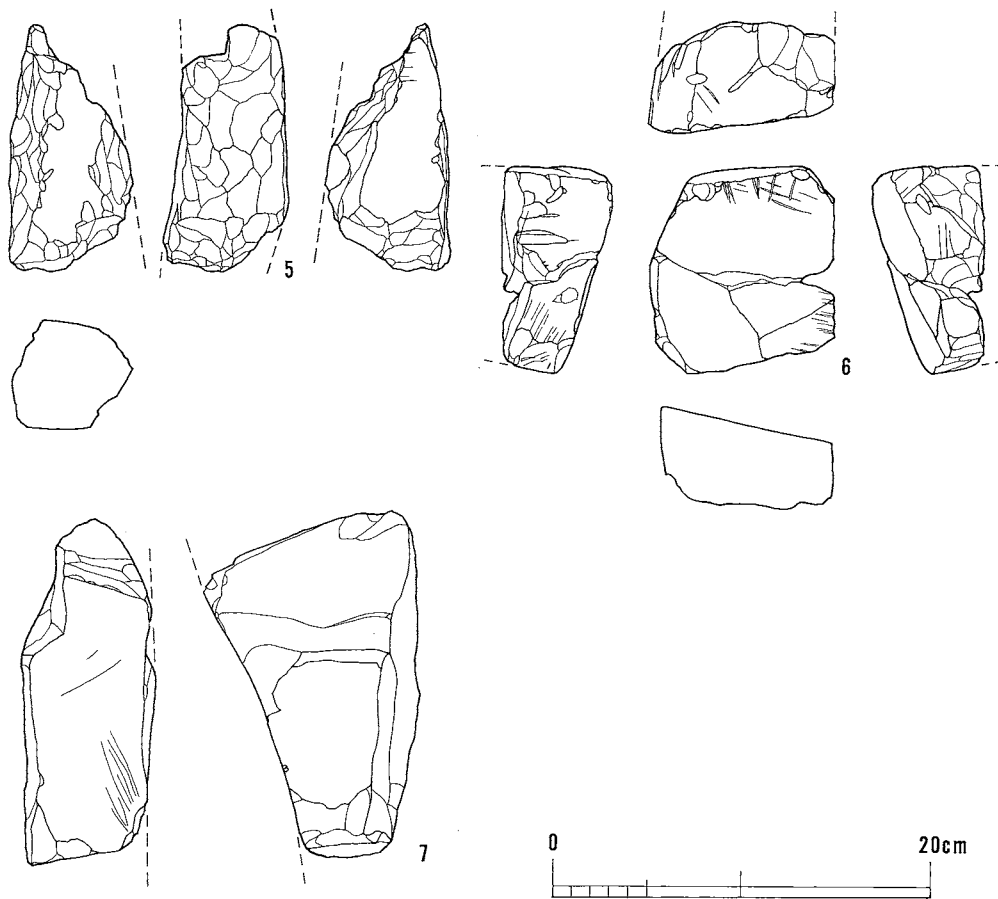


插图331 石製品 (7) 砥石 (2)



插图332 石製品 (8) 砥石 (3)



挿図333 石製品 (9) 砥石 (4)

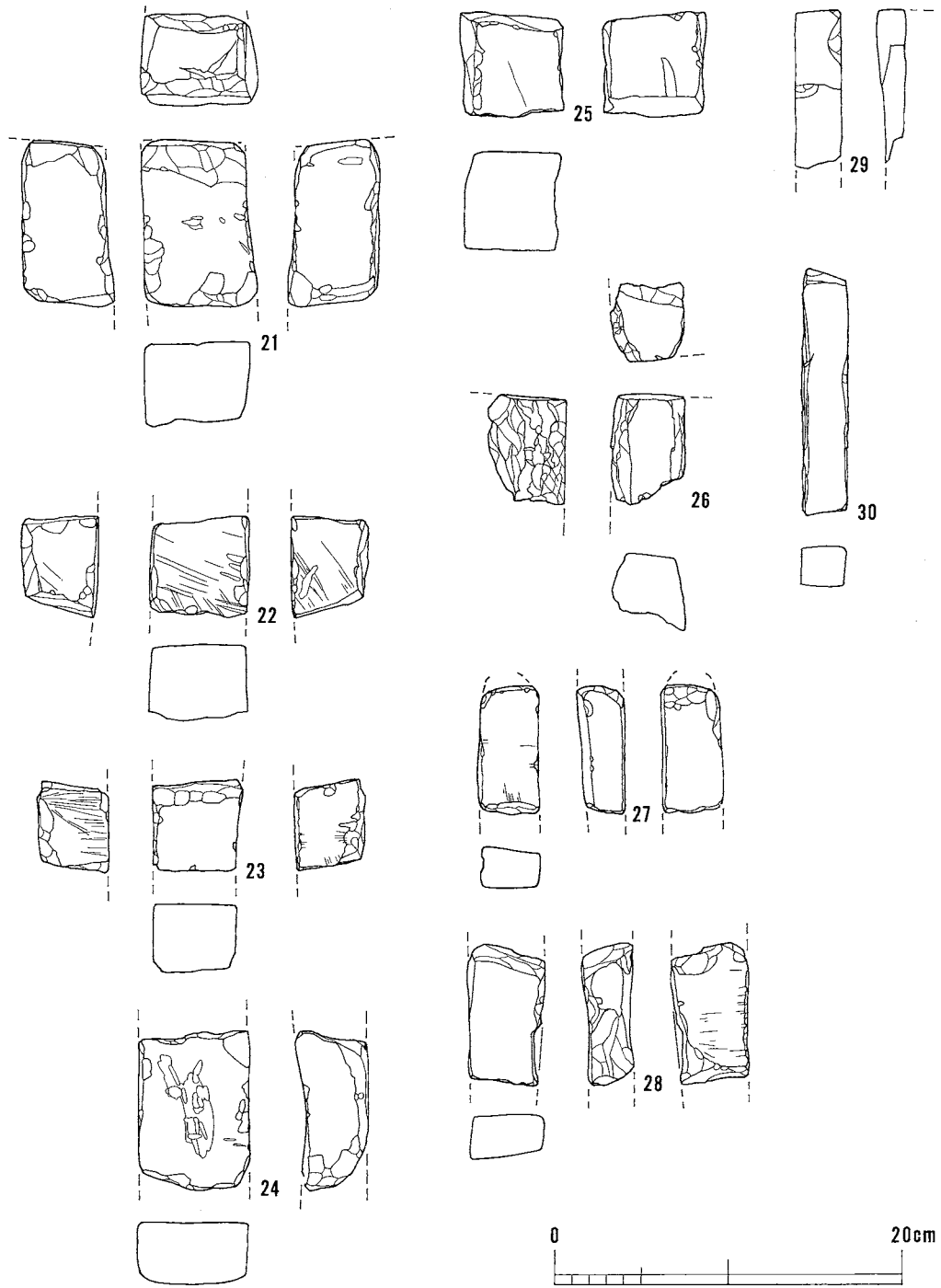
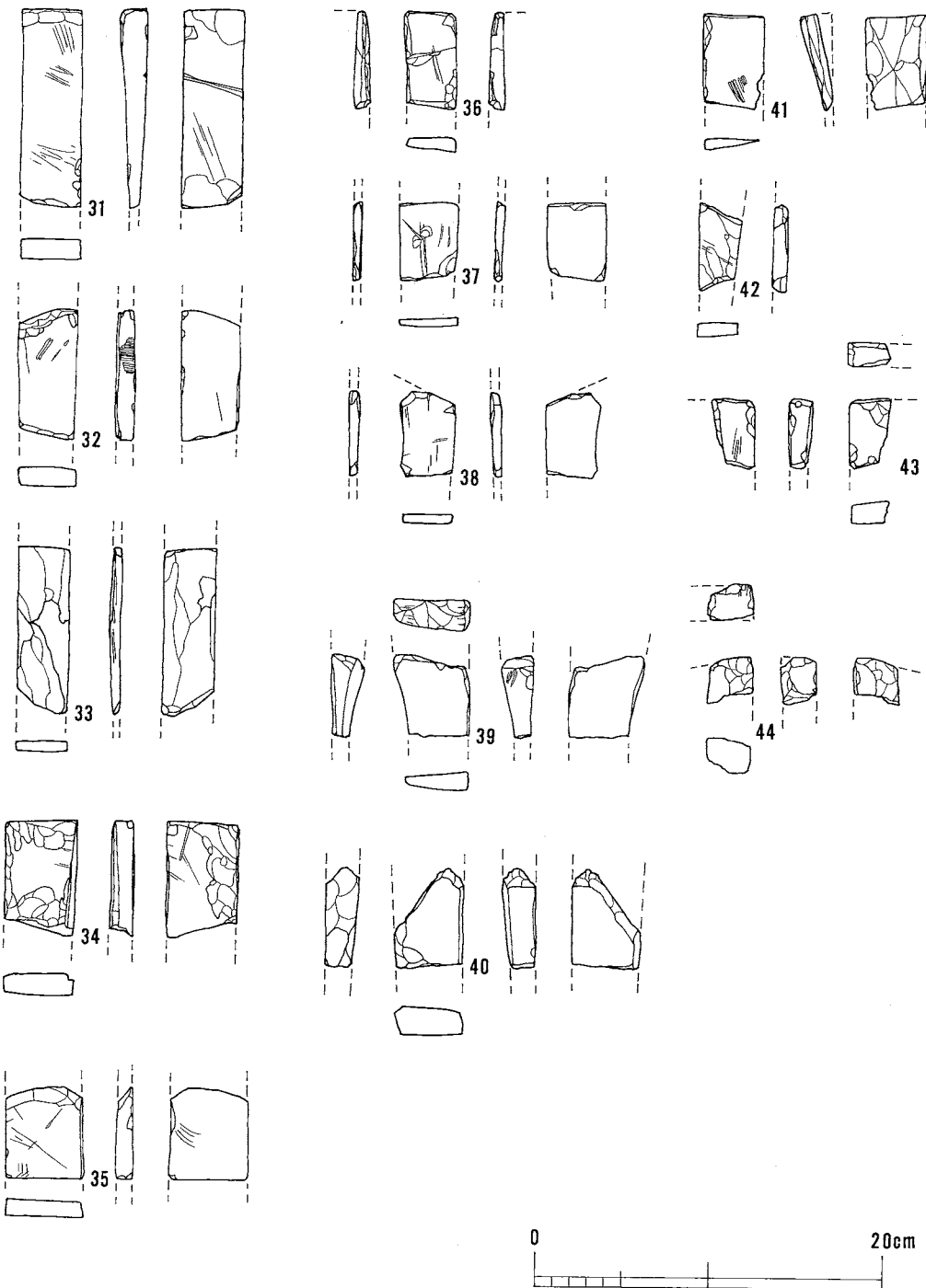


插图334 石製品 (10) 砥石 (5)



挿図335 石製品 (11) 砥石 (6)





挿図336 石製品 (12) 砥石 (7)

表13 砥石一覧

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	石材	備考
1			砥石	30.6	14.7	11.3	砂岩	
2	S <sub>3</sub>	SK58	砥石	19.6	9.5	8.8	砂岩	刃物研ぎ痕
3	C <sub>2</sub>		砥石	14.5	8.5	9.2	砂岩	刃物研ぎ痕
4	S <sub>1</sub>	II SD02	砥石	11.8	10.0	5.1	砂岩	
5	1981年度		砥石	13.1	6.5	5.8	砂岩	
6	S <sub>3</sub>		砥石	11.0	9.7	5.4	砂岩	刃物研ぎ痕
7	C <sub>1</sub>	SE04	砥石	18.2	7.1	8.0	砂岩	刃物研ぎ痕
8	1981年度		砥石	15.7	7.8	6.8	砂岩	ノミ痕
9	C <sub>1</sub>		砥石	14.2	5.7	3.4	砂岩	
10	S <sub>3</sub>	SK49	砥石	15.7	7.1	4.0	砂岩	刃物研ぎ痕
11	N <sub>2</sub> A	SK18	砥石	11.4	5.3	3.0	砂岩	
12	N <sub>3</sub>		砥石	13.8	5.2	3.7	砂岩	刃物研ぎ痕
13	C <sub>1</sub>		砥石	12.5	5.5	2.6	砂岩	刃物研ぎ痕
14	S <sub>3</sub>	SD01	砥石	8.5	4.8	3.8	砂岩	刃物研ぎ痕
15	S <sub>1</sub>		砥石	7.7	7.2	2.0	砂岩	刃物研ぎ痕
16	S <sub>3</sub>	SK58	砥石	8.5	3.9	2.0	砂岩	刃物研ぎ痕
17	1981年度		砥石	11.8	4.6	3.3	砂岩	刃物研ぎ痕
18	S <sub>3</sub>	SD09	砥石	8.9	4.5	2.6	砂岩	刃物研ぎ痕
19	S <sub>1</sub>	SD01	砥石	10.2	3.8	2.3	砂岩	
20	C <sub>2</sub>		砥石	9.9	7.4	2.1	砂岩	
21	S <sub>1</sub>	SD02	砥石	9.6	6.6	4.9	砂岩	
22	N <sub>2</sub> B	SK11	砥石	5.3	5.5	4.4	砂岩	刃物研ぎ痕
23	S <sub>3</sub>		砥石	5.3	5.2	3.9	砂岩	刃物研ぎ痕
24	C <sub>1</sub>		砥石	9.2	5.4	3.6	砂岩	
25	C <sub>2</sub>	SD04	砥石	6.1	5.0	5.7	砂岩	
26	C <sub>1</sub>	内堀	砥石	6.4	4.2	4.4	砂岩	
27	S <sub>3</sub>	SK98	砥石	7.4	3.6	2.4	砂岩	
28	S <sub>3</sub>		砥石	8.2	4.4	2.6	砂岩	刃物研ぎ痕
29	S <sub>3</sub>	SK103	砥石	9.1	2.7	1.5	砂岩	
30	S <sub>3</sub>	P323	砥石	14.2	2.6	2.3	砂岩	
31	S <sub>1</sub>	II SK41	砥石	11.4	3.4	1.2	砂岩	刃物研ぎ痕
32	C <sub>4</sub>	SD05	砥石	7.5	3.5	1.1	砂岩	刃物研ぎ痕
33	C <sub>1</sub>	内堀	砥石	9.7	2.4	0.6	砂岩	刃物研ぎ痕
34	S <sub>3</sub>	SK49	砥石	6.6	4.1	1.3	砂岩	刃物研ぎ痕
35	S <sub>3</sub>		砥石	5.3	4.5	1.0	砂岩	刃物研ぎ痕
36	C <sub>1</sub>	内堀	砥石	5.6	2.9	0.9	砂岩	刃物研ぎ痕
37	S <sub>3</sub>	SD08	砥石	4.6	3.4	0.5	砂岩	刃物研ぎ痕
38	S <sub>3</sub>	SD08	砥石	4.9	3.2	0.5	砂岩	刃物研ぎ痕
39	1981年度		砥石	4.7	4.4	1.1	砂岩	刃物研ぎ痕
40	S <sub>3</sub>	SK103	砥石	5.8	3.9	1.6	砂岩	
41	S <sub>3</sub>	SD09	砥石	5.5	3.5	0.7	砂岩	
42	S <sub>3</sub>	SE14	砥石	5.0	2.4	0.8	砂岩	刃物研ぎ痕
43	N <sub>3</sub>	SD05	砥石	4.1	2.4	1.3	砂岩	刃物研ぎ痕
44	S <sub>1</sub>	II SK46	砥石	2.7	2.1	2.0	砂岩	
45			砥石	10.2	3.3	3.3	砂岩	
46	S <sub>3</sub>	II P120	砥石	7.6	4.7	2.2	砂岩	刃物研ぎ痕
47	S <sub>3</sub>		砥石	6.9	4.5	2.6	砂岩	
48	S <sub>3</sub>		砥石	5.2	2.6	2.3	砂岩	刃物研ぎ痕

49	S <sub>3</sub>	SK97	砥石	9.3	3.7	2.3	砂岩	
50	N <sub>3</sub>		砥石	6.7	5.2	2.4	砂岩	
51	N <sub>3</sub>		砥石	7.0	4.8	2.3	砂岩	刃物研ぎ痕
52	S <sub>3</sub>	SD01	砥石	5.6	3.4	2.4	砂岩	刃物研ぎ痕
53	S <sub>1</sub>	SK17	砥石	6.9	5.0	2.4	砂岩	

(4) 硯

硯は形態から長方硯と宝珠硯に近い硯と石鍋転用の硯がある。

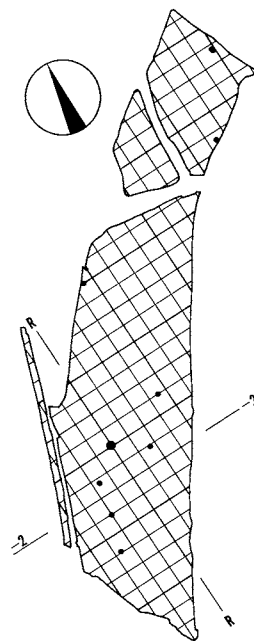
長方硯には頁岩製とほかに11の備前焼製がある。

石鍋転用硯は6の鏝部分の再利用硯と10の胴部再利用の長方硯がある。

表14 硯一覧

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	石材	備考
1	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	長方硯	10.0	6.9	1.8		
2	1981年度	集石遺構	長方硯	7.9	5.2	1.2		
3	C <sub>1</sub>	SE11	宝珠硯	3.8	5.2	2.2		
4	S <sub>1</sub>	II SK43	長方硯	6.5	7.6	1.1		裏面に刻線
5	N <sub>1</sub> B	SD3044	長方硯	6.1	4.9	2.2		両面使用
6	S <sub>1</sub>	II SD02	転用硯	7.0	4.7	1.3		
7	N <sub>1</sub> B		長方硯	7.8	4.3	2.2		
8	1981年度		長方硯	10.6	4.1	1.6		側面に墨痕
9	N <sub>3</sub>	SK25	長方硯	4.6	1.5	2.3		
10	1981年度		長方硯	4.5	5.3	0.9		転用硯
11	C <sub>1</sub>	SE05	長方硯	5.6	6.4	1.3		
12	S <sub>3</sub>	SD01	長方硯	7.0	7.6	1.5	滑石	石鍋の転用

長方硯はやや大型のもの1・2・5・7・10・12と小型のもの4・8・9・11がある。ほぼ完形品8のみで、9・10は小型で朱墨用の硯かもしれない。また5は両面に縁がつき、4は裏面に放射状の細刻線で図を描いている。



挿図337 硯出土状況

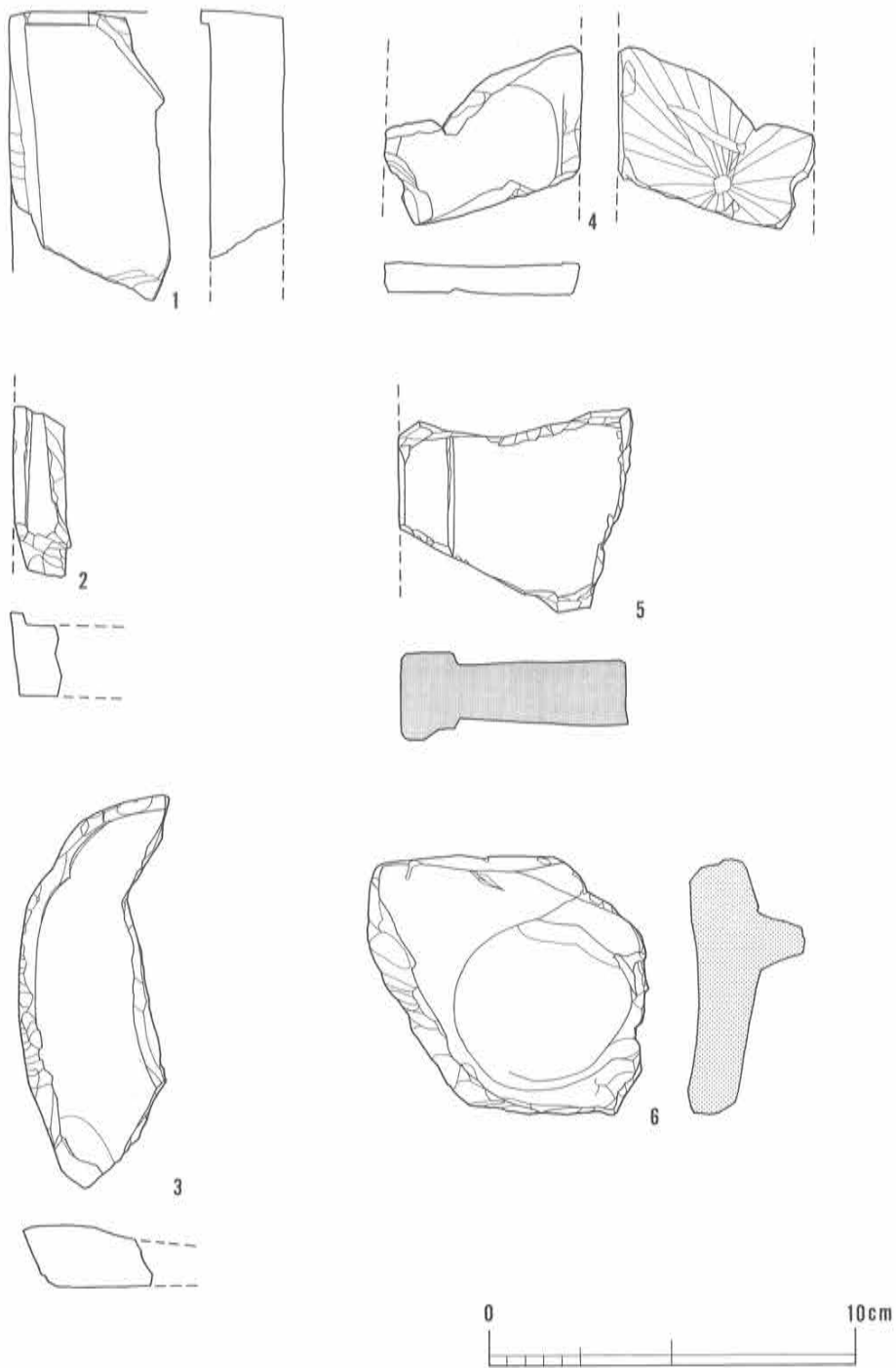


插图338 石製品 (13) 硯 (1) (5は備前焼)

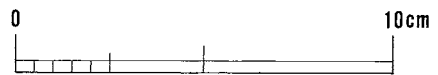
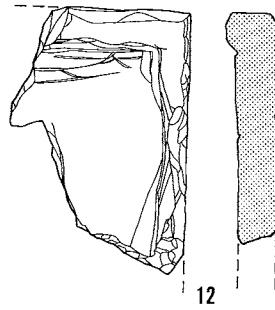
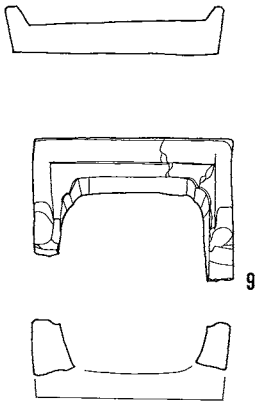
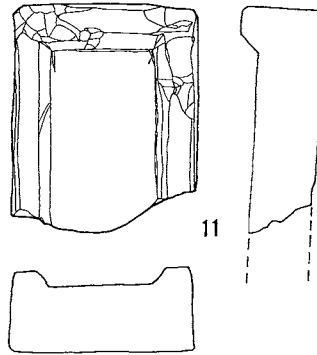
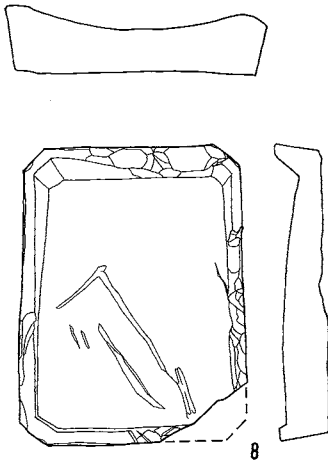
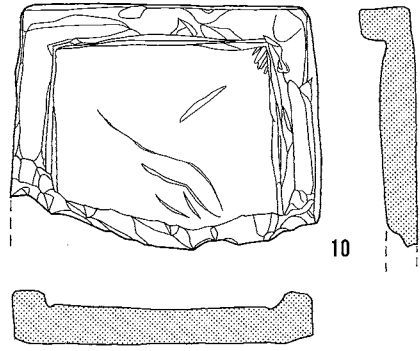
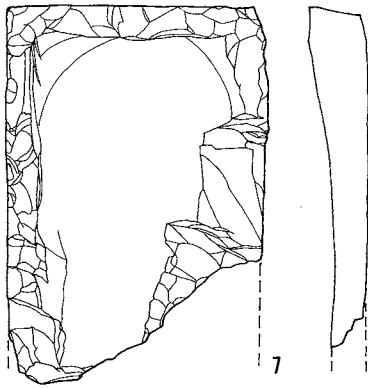


插图339 石製品 (14) 硯 (2)

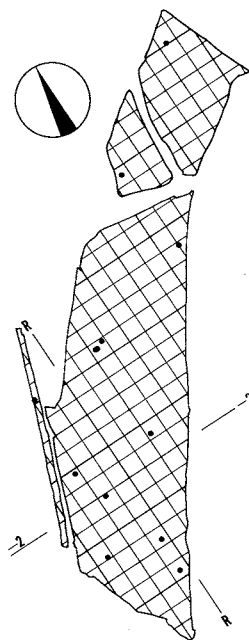
(5) 石 鍋

石鍋は13点出土しているが、14世紀代の溝や15世紀～16世紀代の溝に捨てられていたもので、鍋の口縁や底部の部分である。なお、石鍋は再利用し、硯と転用した物があり、多く消費された様子がある。

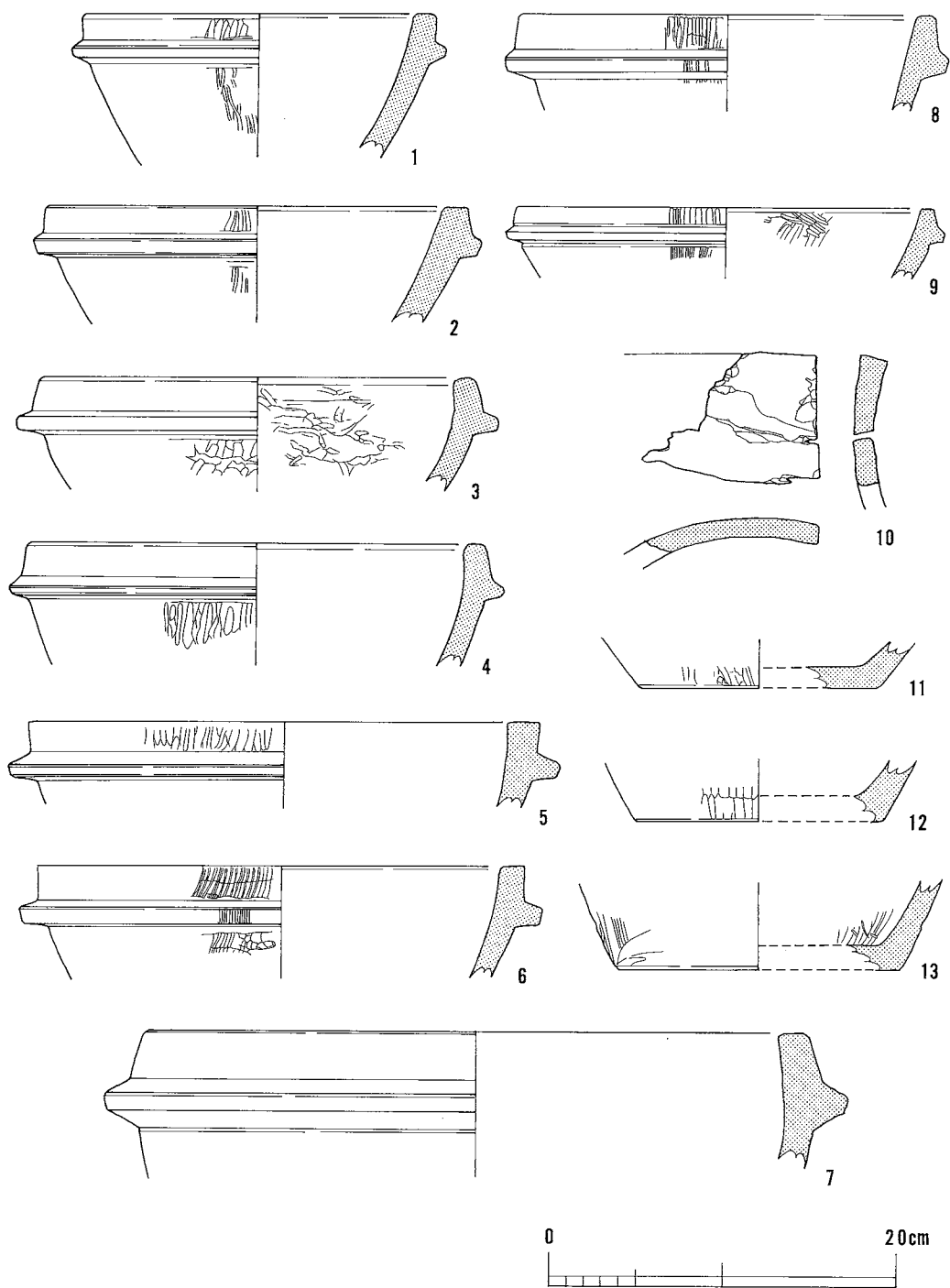
表15 石鍋一覧

番号	地区	遺 構	種類	口径・底径cm	高さcm	厚みcm	石 材	備考
1	S <sub>3</sub>	SD01	石鍋	20.4	7.5	1.4		口縁部
2	S <sub>1</sub>	II SD02	石鍋	24.2	5.7	1.8	金雲母・滑石	口縁部
3	C <sub>3</sub>	SD05	石鍋	25.0	6.5	1.2	長崎県産出滑石	口縁部
4	S <sub>3</sub>	SK72	石鍋	26.0	6.2	1.2		口縁部
5	C <sub>4</sub>	SK08	石鍋	29.3	3.8	1.5	長崎県産出滑石	口縁部
6	S <sub>1</sub>	SD02	石鍋	28.0	5.5	1.2	長崎県産出滑石	口縁部
7	N <sub>2</sub> B	SD02	石鍋	38.0	6.7	1.5	長崎県産出滑石	口縁部
8	N <sub>1</sub>	bトレンチ	石鍋	24.0	4.0	1.2		口縁部
9	C <sub>1</sub>	Lc	石鍋	24.0	3.1	1.2	長崎県産出滑石	口縁部
10	C <sub>1</sub>	Lc	石鍋	7.6(長さ)	10.2(幅)	1.1		
11	S <sub>1</sub>	SD01	石鍋	13.4	1.8	1.3	長崎県産出滑石	底部
12	C <sub>1</sub>	Lc	石鍋	14.2	2.9	1.5	長崎県産出滑石	底部
13	S <sub>3</sub>	SD17	石鍋	16.2	3.7	1.3		底部

石鍋の多くが、長崎県西彼杵郡大瀬戸町ホゲット石鍋製作遺跡周辺の滑石に近いもので、少し金雲母が混入する滑石があり、和歌山県や山口県産の滑石などとの検討が必要である。



挿図340 石鍋出土状況



挿図341 石製品 (15) 石鍋

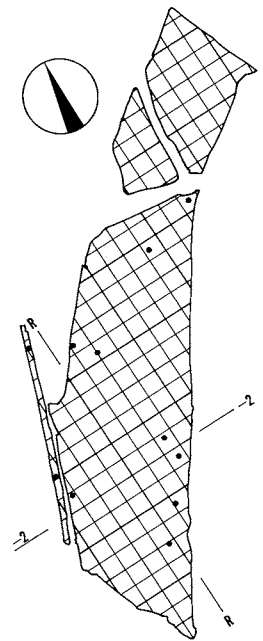


(6) 磨石

磨石は中世面の下層遺構確認のトレンチからも出土し、弥生時代から古墳時代にかけての石製品でもあるが、方形館跡の堀からも出土しており、調理具のみならず他の用途も考えられるのであえて、磨石として中世に位置づけて取り扱っている。一覧表通り、重さも形状もばらつきがあり、纏まらない。

表16 磨石

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	重さg	石材	備考
1	CLc-Lb		磨石	12.1	10.7	6.6	1151		
2	C <sub>2</sub>		磨石	8.8	6.3	3.9	313	花崗岩	
3	C <sub>4</sub>	内堀	磨石	9.3	8.3	4.4	492		
4			磨石	9.1	7.2	4.6	441	砂岩	
5	S <sub>3</sub>	ⅡSK15	磨石	5.2	4.9	4.5	156		
6	S <sub>3</sub>	SK98	磨石	4.3	3.9	3.4	80		
7	S <sub>2</sub>	第1トレSD01	磨石	10.5	7.5	2.1	280		
8	C <sub>1</sub>	下層Aトレンチ	磨石	16.0	9.1	2.7	719	花崗岩	
9	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	磨石	9.2	6.3	3.7	322	花崗岩	
10	C <sub>4</sub>	内堀	磨石	11.2	9.3	8.7	1257		
11	S <sub>1</sub> Tca		磨石	6.2	5.9	3.8	236		
12	C <sub>1</sub>	東西堀	磨石	5.5	11.3	3.4	108		



挿図342 磨石出土状況

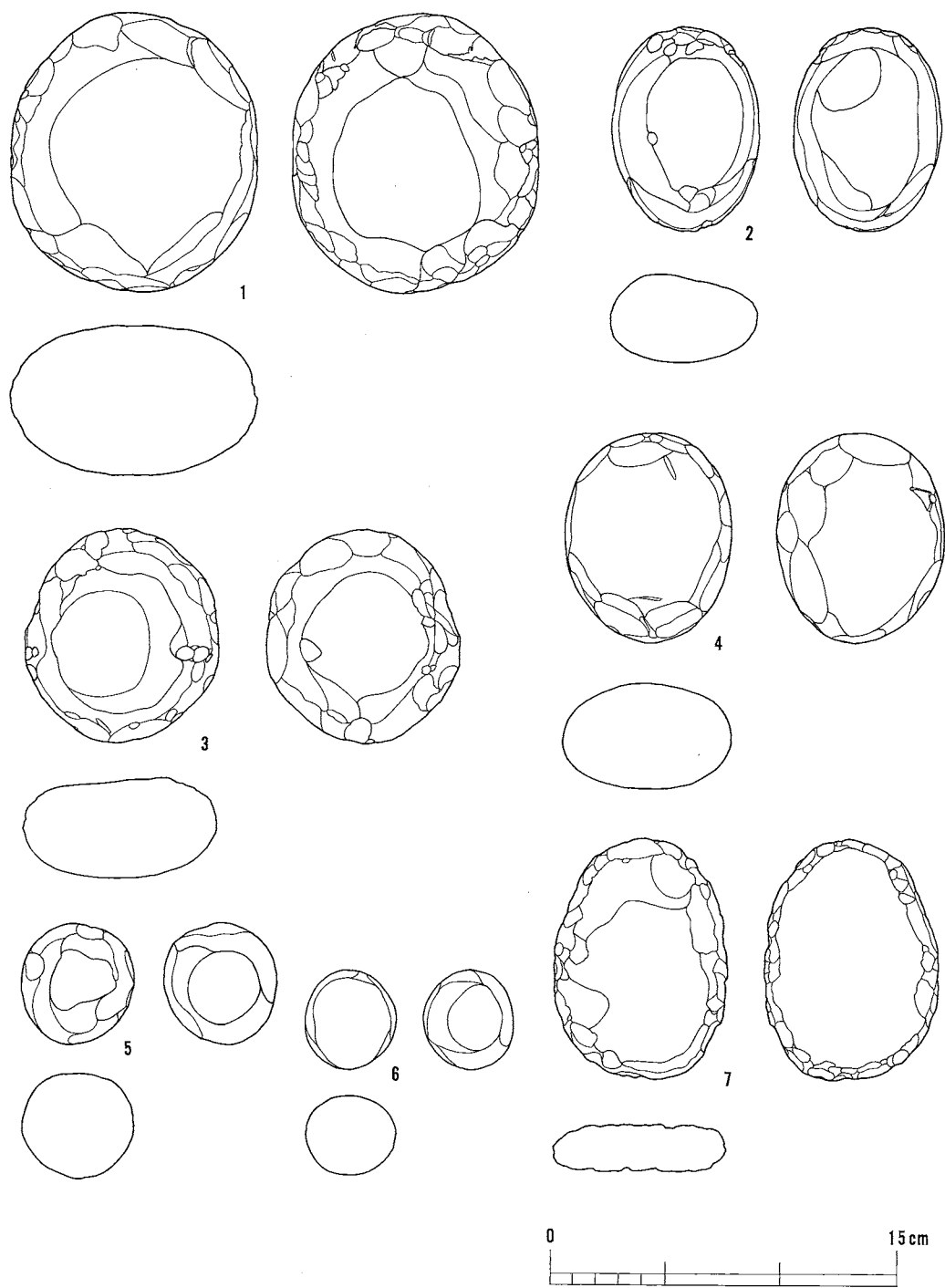


插图343 石製品 (16) 磨石 (1)

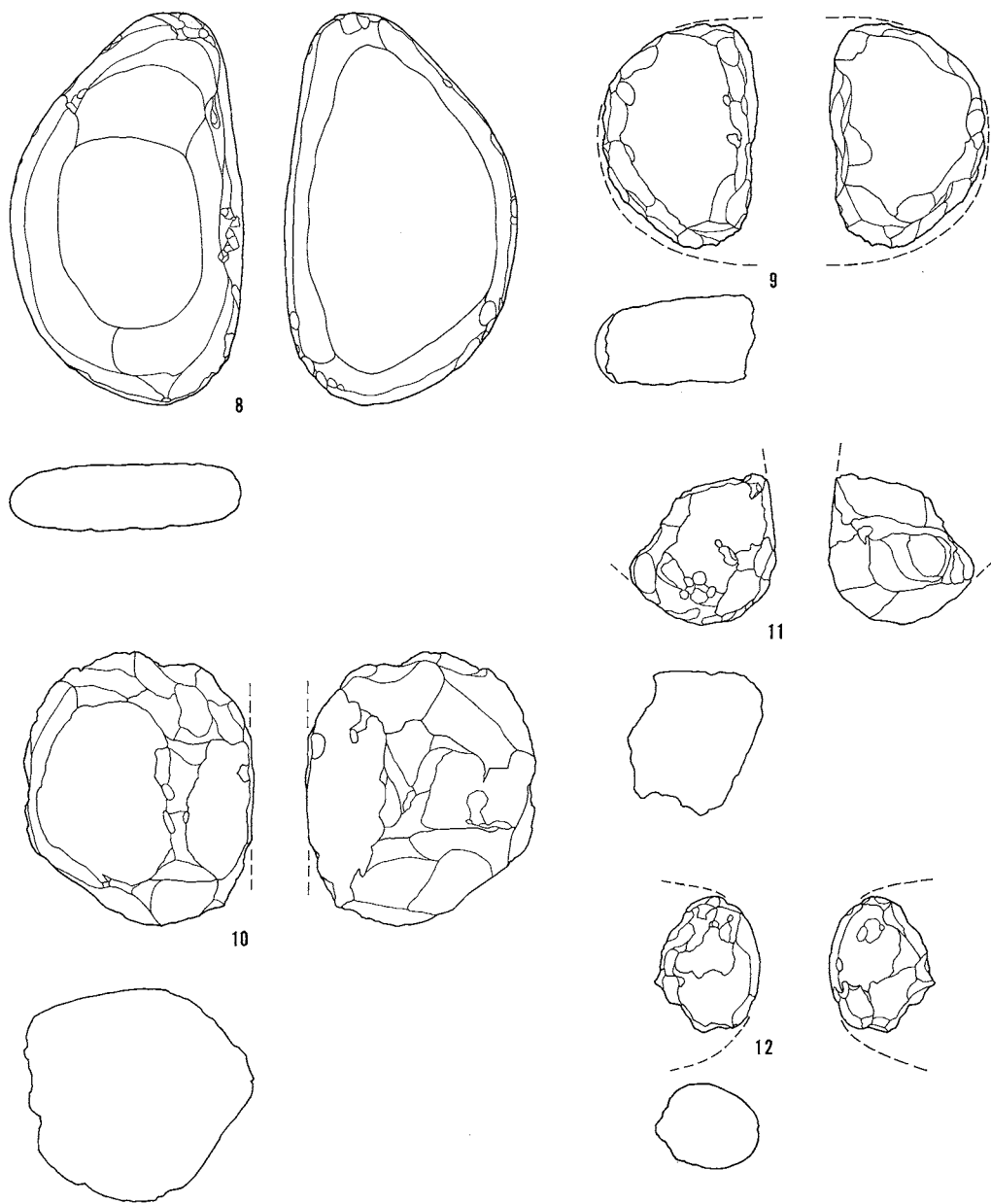


插图344 石製品 (17) 磨石 (2)

## 8. 土製品

土製品として分類するものに (1) 瓦・塼・塑像、(2) 風炉・火鉢、(3) 土錘、(4) 面子、(5) 轡羽口がある。

### (1) 瓦

#### A. 古代瓦

瓦は量は少ないが古代の様相を示す丸瓦と平瓦がある (挿図344・345)。

丸瓦は1～4で、1は長さ23.2cm、幅15.5cm、高さ8.0cm、厚み1.4cmを測り、凸面は丁寧にタタキ整形痕を消しており、凹面に歪んだ布目痕を残し、端面はヘラで面を切っている。4も同じ。2・3は凹面に正方向の布目痕を残し、端面をヘラで面を取っている小破片である。

平瓦は凸面のタタキ痕の種類の違いで、格子目タタキ (5・6)・縄目タタキ (7)・タタキ痕を消す (8) がある。厚みは3.6cmと1.7～2.2cmの幅がある。

#### B. 中世瓦

中世瓦は軒丸瓦、丸瓦、道具瓦・雁振瓦などがある。

軒丸瓦は僅か1点があり、1は残存面径は10cmを測り、尾の長い三巴文と珠文 (復原7個/周) で飾る。裏面には整形時の指痕が残る。

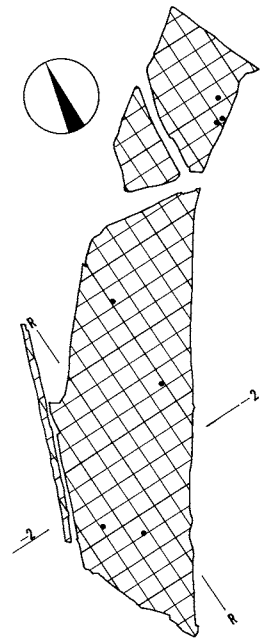
丸瓦は2～5があり、玉縁瓦で玉縁長約4cm、幅10cm、厚み2.1cmを測り、いずれも破片である。3は玉縁幅が広く雁振瓦の可能性はある。

6は面戸瓦か道具瓦であり、厚み0.9cmと薄い。

7から16は棟瓦・雁振瓦である。幅約46cm、高さ8cmを復原し、玉縁幅が広く、玉縁長約5cmを測り、厚みは1.7～2.5cmを測る。

#### C. 塼

塼は36点出土しており、完形を復原できる1・2・3・4・17と破片14・18・19・36の復原から、長さ・幅は (1) 20.4cm、(2) 22.5cm、(3) 24.5cm、(4) 27.1～27.4～27.8cm、(5) 28.5～28.7cm、(6) 29.1cm、(7) 31.3～31.6cmを測り、六寸、七寸、八寸、九寸、一尺の製作単位がある。厚みは (1) 2.1cm～2.4、(2) 2.5・2.6、2.7cm (3) 2.8・2.9cm、(4) 3.0・3.1cm、(5) 3.3・3.4・3.5・3.6cm、(6) 3.7・3.8cm、(7) 4.0cm、(8) 4.7cmを測り、八分・九分・一寸・一寸一分・一寸二分・一寸三分・一寸六と分かれるが、製作時及び焼成時の歪みが考えられ、八分・一寸・一寸六分位には分かれる (挿図352)。薄いものは雁振瓦と変わらない厚みで敷瓦と呼ぶべきものかもしれないが、比較的



挿図345 古代瓦出土状況

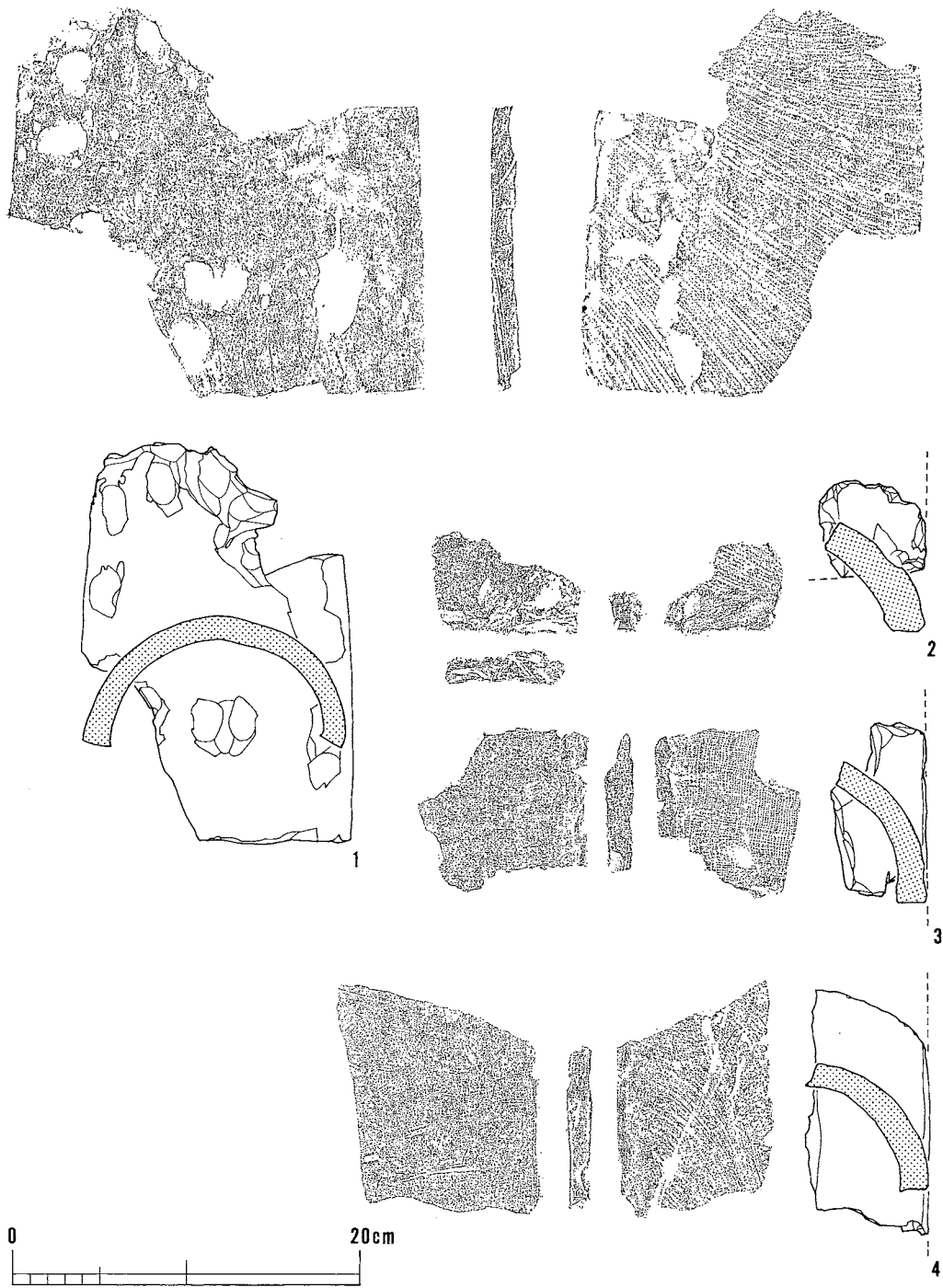


插图346 瓦 (1) 丸瓦

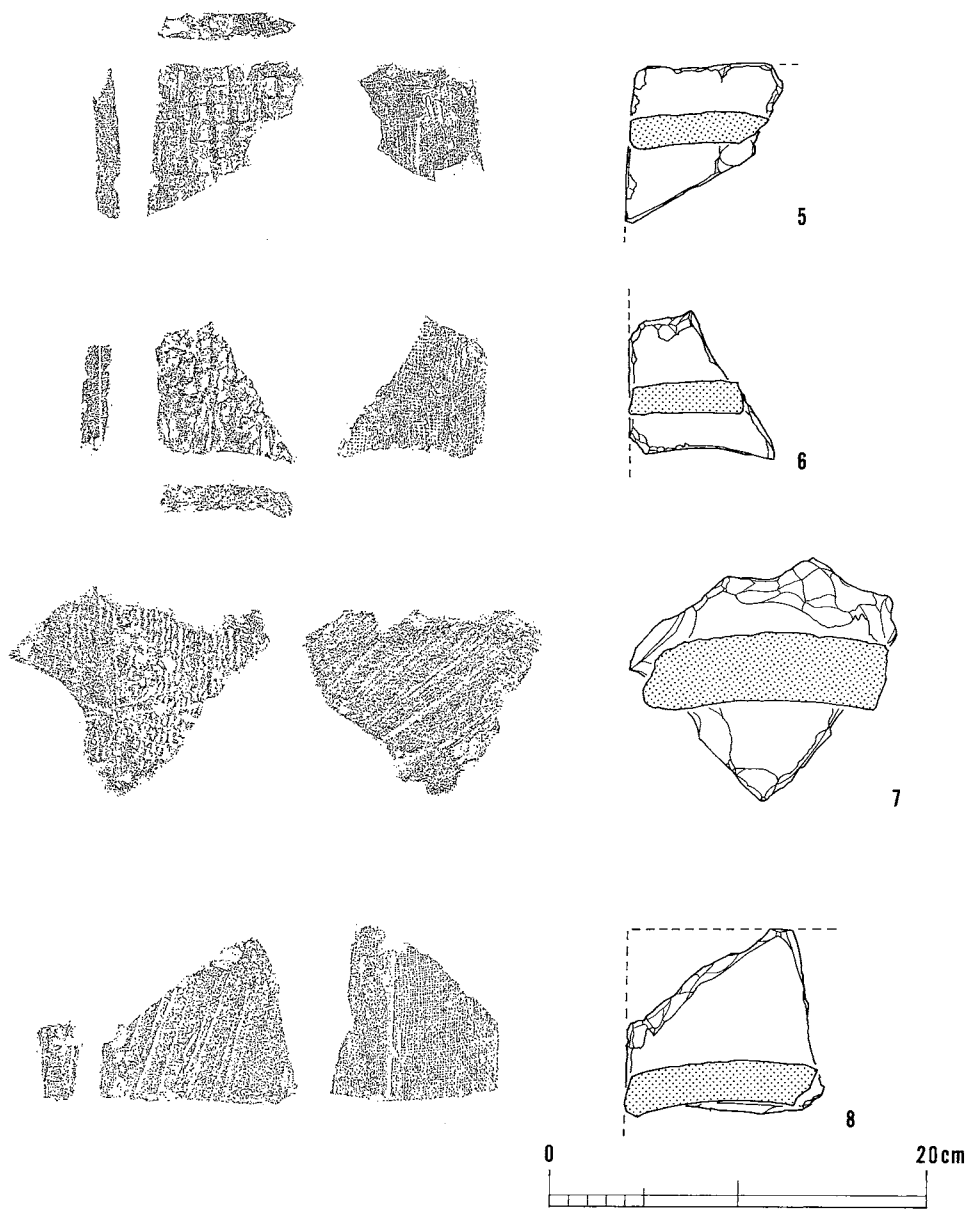


插图347 瓦 (2) 平瓦

表17 瓦一覧 (1)

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1	S <sub>3</sub>	P58	丸瓦	23.2	15.5	1.4	縄タタキ・布目・ヘラで面取り
2	C <sub>1</sub>	内堀	丸瓦	5.6	6.1	1.9	布目・ヘラで面取り
3	N <sub>3</sub>	SD02	丸瓦	10.0	5.6	1.5	布目・ヘラで面取り
4	S <sub>3</sub>		丸瓦	14.1	7.1	1.6	布目
5	C <sub>1</sub>	内堀	平瓦	8.3	8.4	1.7	格子目タタキ・布目・ヘラで面取り
6	N <sub>3</sub>	SD03	平瓦	8.4	7.7	1.7	縄タタキ・布目・ヘラで面取り
7	S <sub>3</sub>	SD16	平瓦	12.9	14.0	3.6	縄タタキ
8	N <sub>1</sub> B	SD3045	平瓦	9.8	10.5	2.2	縄タタキ・布目・ヘラで面取り

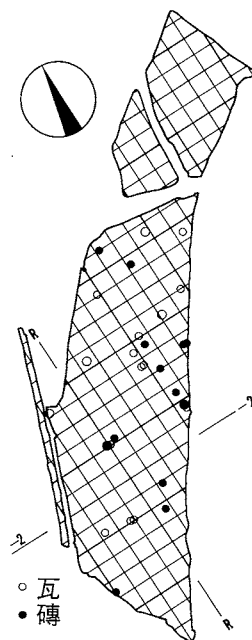
瓦一覧 (2)

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1	C <sub>1</sub>	内堀	軒丸瓦	10.0		1.3	
2	S <sub>3</sub>	P332	丸瓦	14.0	13.0	2.1	ヘラで面取り
3	S <sub>4</sub>	外堀	丸瓦	14.7	13.8	2.1	タテ削り・布目・ヘラで面取り
4	1981年度	内堀	丸瓦	15.9	12.7	2.0	縄タタキ・ヘラで面取り
5	1981年度	内堀	丸瓦	9.8	11.8	2.1	縄タタキ・ヘラで面取り
6	C <sub>3</sub>	SK04	面戸瓦	13.5	10.9	0.9	タテ削り・布目・ヘラで面取り
7	C <sub>1</sub>	東西堀	雁振瓦	12.8	12.0	2.4	
8			雁振瓦	20.8	10.2	1.5	縄タタキ
9	1981年度	内堀	雁振瓦	18.0	11.1	2.0	縄タタキ
10			雁振瓦	14.8	13.4	2.5	布目
11	S <sub>4</sub>	外堀	雁振瓦	15.1	12.7	2.1	布目
12	S <sub>4</sub>	外堀	雁振瓦	13.3	12.8	2.2	縄タタキ・布目・ヘラで面取り
13	C <sub>3</sub>	SK04	雁振瓦	18.9	13.0	2.1	縄タタキ
14	C <sub>1</sub>	外堀	雁振瓦	18.5	14.9	2.1	縄タタキ・布目・ヘラで面取り
15	C <sub>3</sub>	外堀	雁振瓦	18.8	15.2	1.7	
16	C <sub>2</sub>	外堀	雁振瓦	17.5	14.8	2.5	

厚みのあるものと同じに埴とし、瓦と区別しておく。

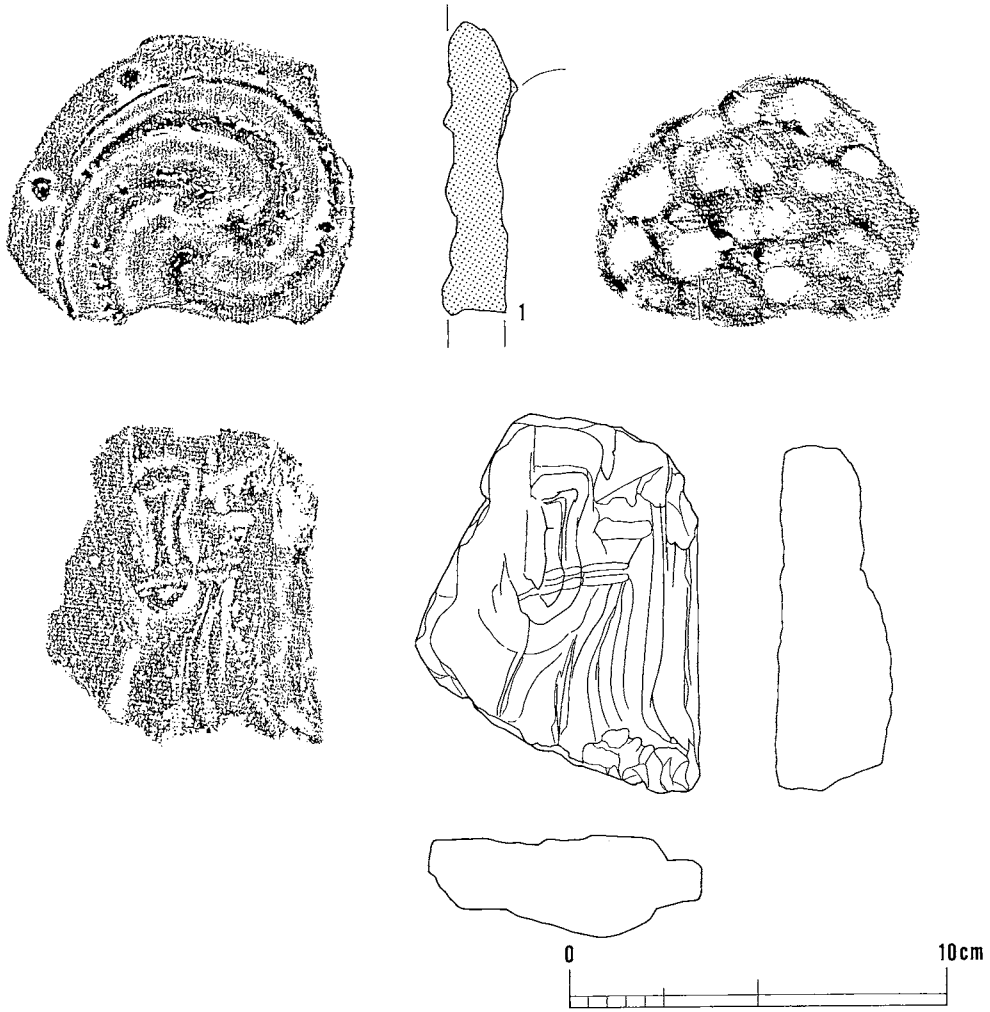
#### D. 塑像

材質成分分析を行っていないが、仏像の左顔と耳を作り出した塑像（挿図347下）が1点ある。長さ約9 cm、幅約7 cm、厚み約3 cmを測る「満願寺」を推定する遺物である。

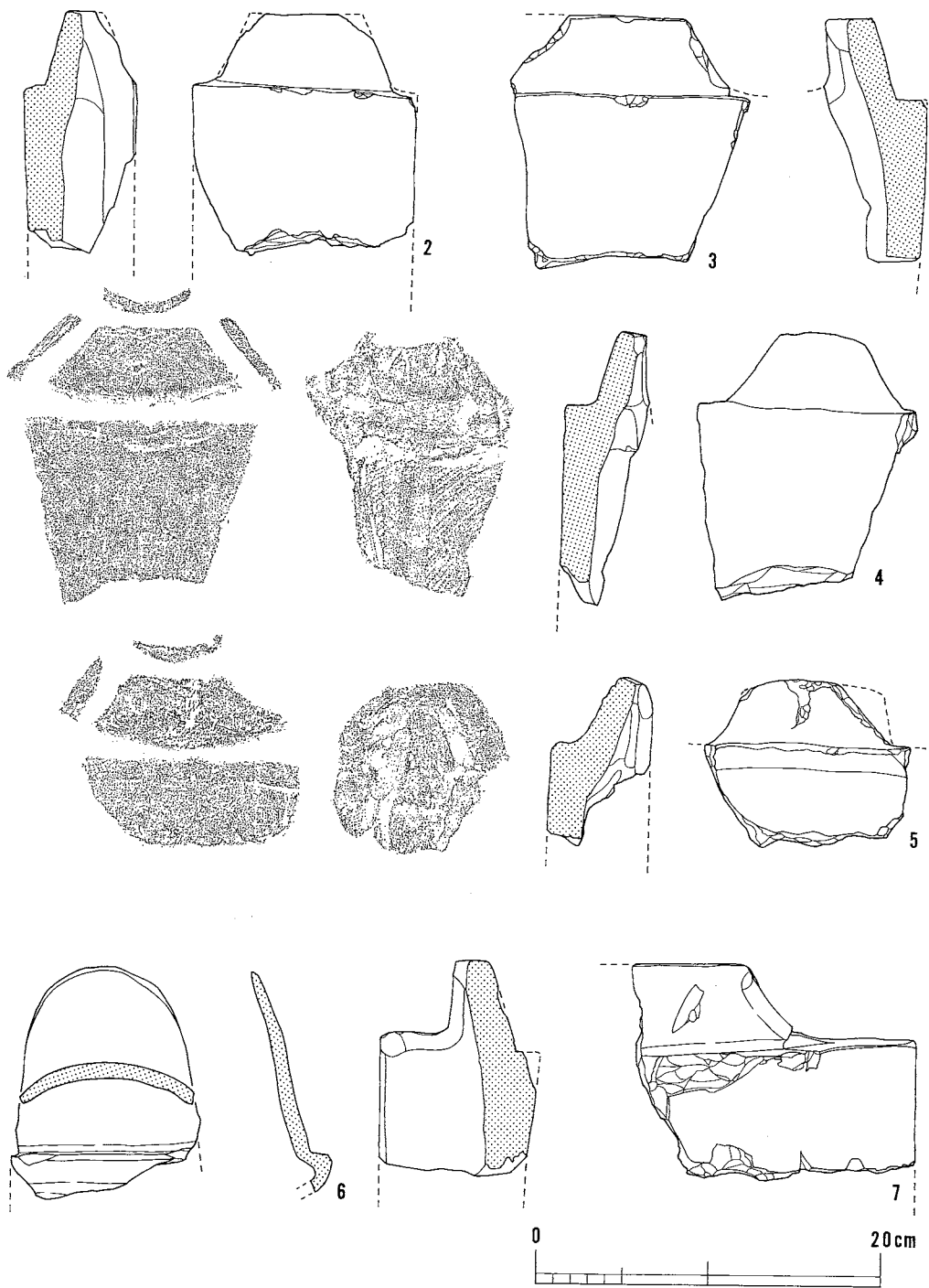


挿図348 中世瓦・磚  
出土状況





挿図349 瓦(3) 軒丸瓦・塑像



挿図350 瓦 (4) 丸瓦・雁振瓦 (1) ・その他

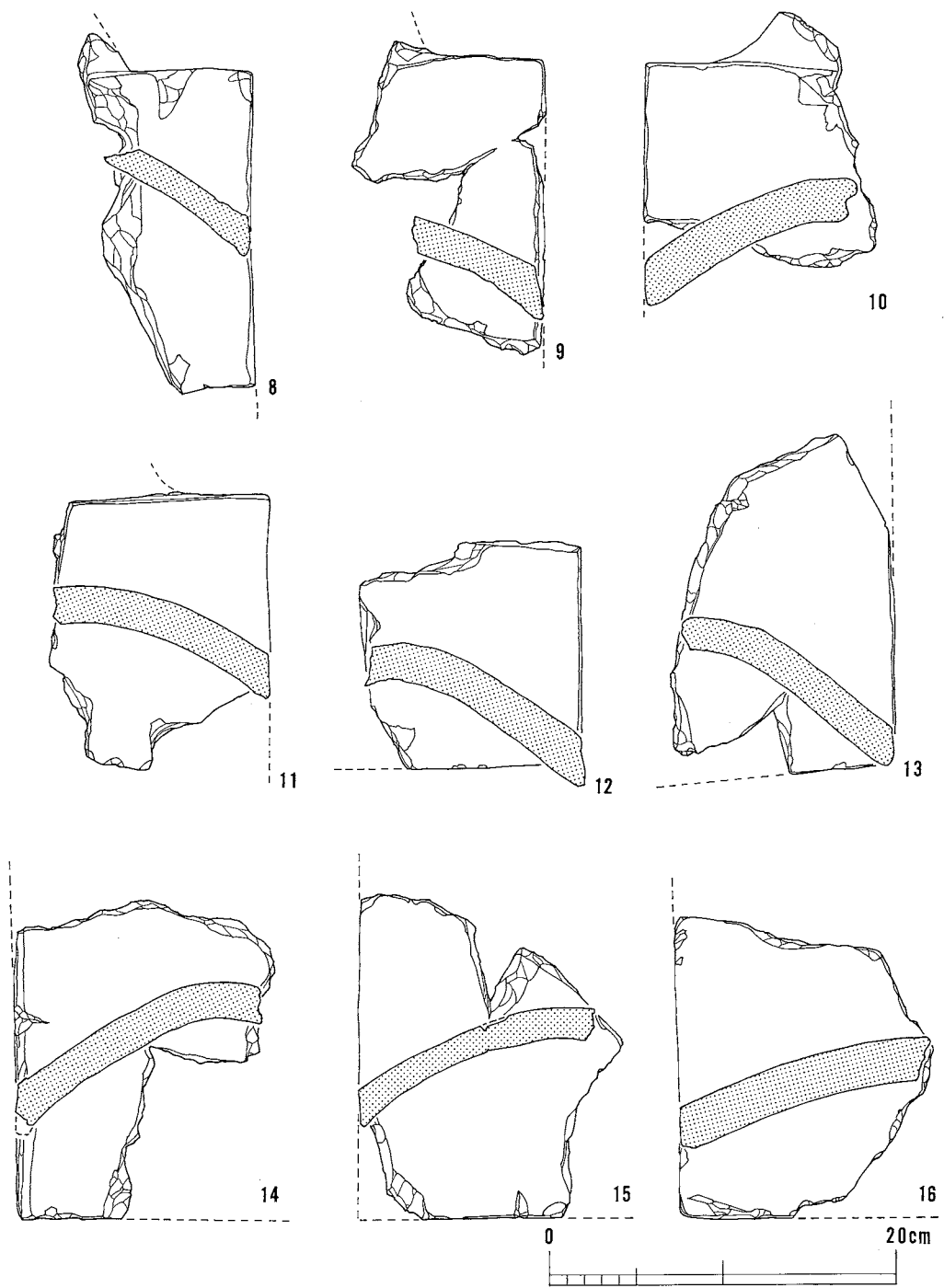
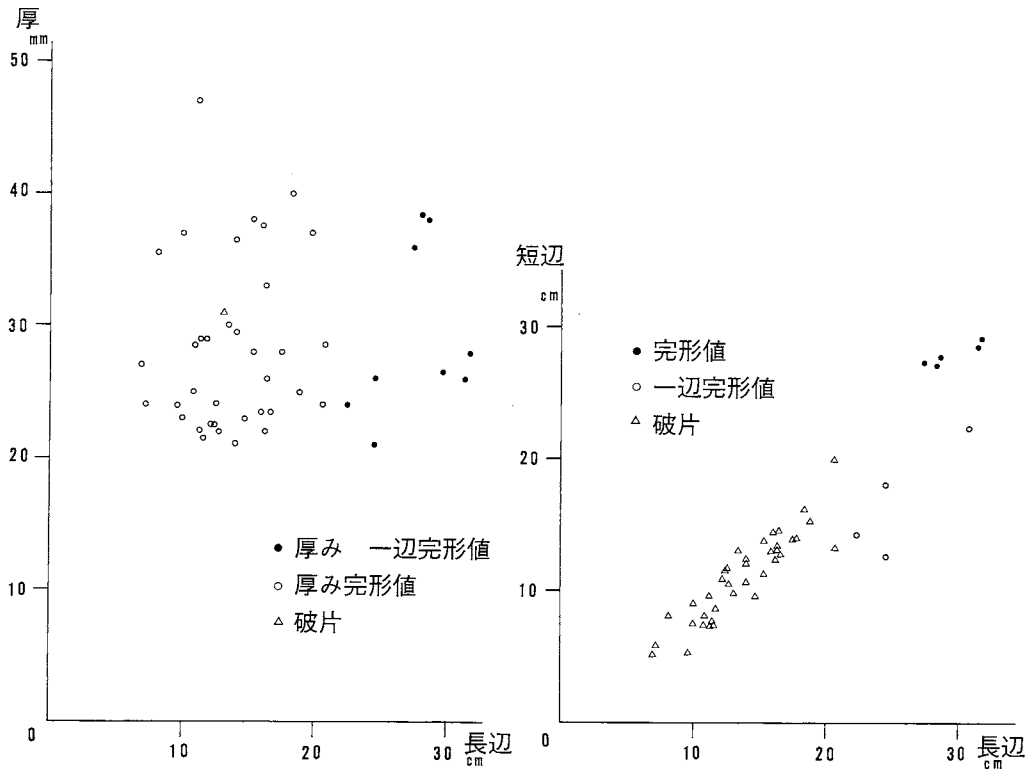


插图351 瓦 (5) 雁振瓦 (2)



挿図352 磚の法量

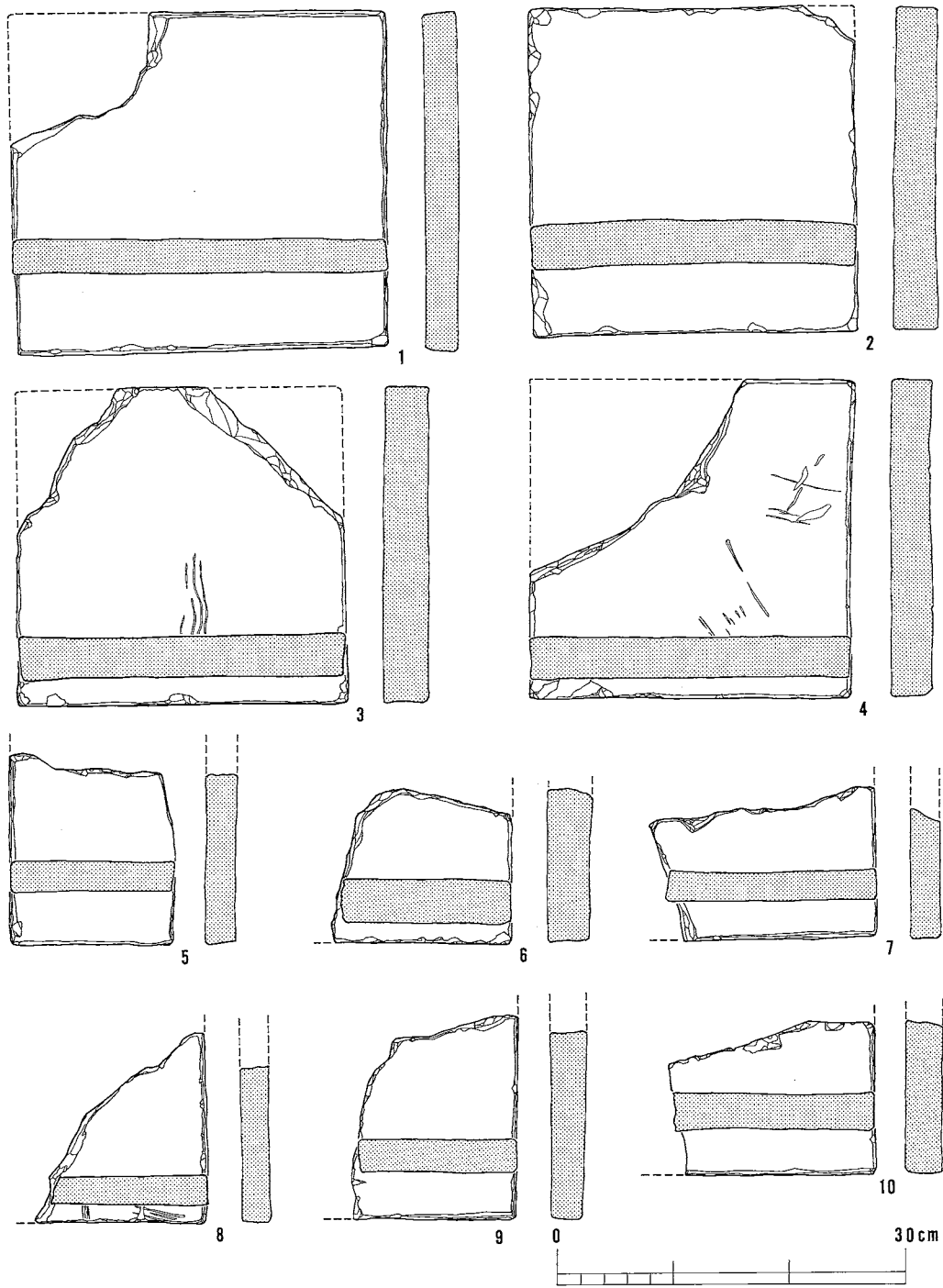


插图353 磚 (1)

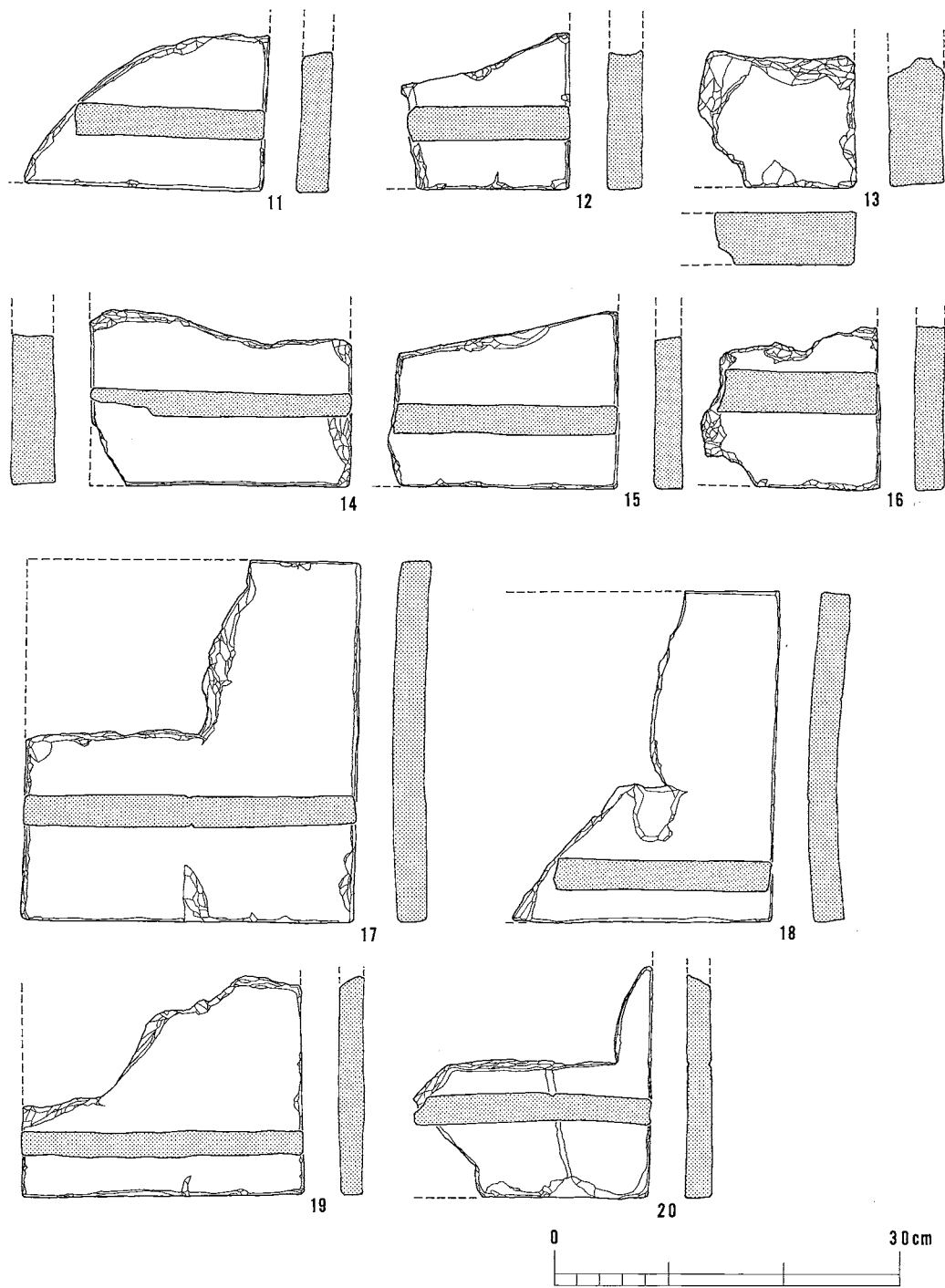
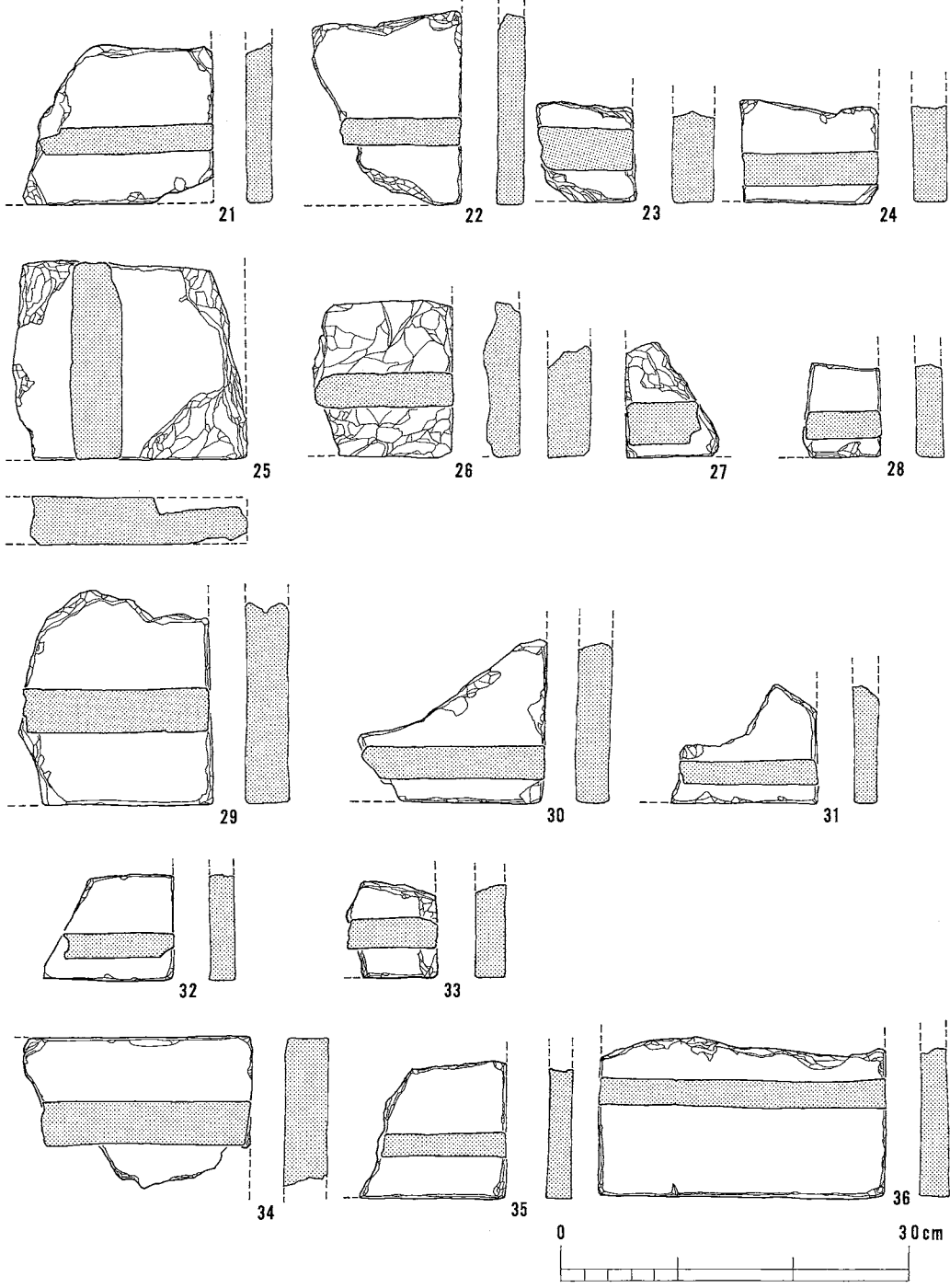


插图354 磚 (2)



挿図355 磚 (3)

表18 塼一覧

番号	地区	遺構	種類	長さcm	幅cm	厚みcm	備考
1	C <sub>2</sub>	SK03	塼	29.1	31.6	2.8	
2	C <sub>2</sub>	SK03	塼	28.5	27.8	3.8	
3	C <sub>2</sub>	SK03	塼	27.1	28.2	3.8	
4	C <sub>2</sub>	SK03	塼	27.4	27.4	3.8	
5	C <sub>2</sub>	SK03	塼	15.3	13.8	2.8	
6	C <sub>2</sub>	SK03	塼	15.3	11.3	3.8	
7	C <sub>2</sub>	SK03	塼	12.7	16.3	2.6	
8	C <sub>2</sub>	SK03	塼	16.4	14.4	2.6	
9	C <sub>2</sub>	SK03	塼	17.5	13.9	2.8	
10	C <sub>2</sub>	SK03	塼	13.1	16.3	3.3	
11	C <sub>1</sub>	内堀	塼	13.3	20.7	2.8	
12	C <sub>1</sub>	内堀	塼	13.4	13.1	3.0	
13	C <sub>1</sub>	内堀	塼	11.2	9.6	4.7	
14	S <sub>4</sub>	外堀	塼	14.2	22.5	2.4	
15	C <sub>1</sub>	外堀	塼	15.3	18.8	2.5	
16	C <sub>1</sub>	内堀	塼	14.0	10.7	3.6	
17	S <sub>3</sub>	SD08	塼	31.3	28.5	2.6	
18	S <sub>3</sub>	SD08	塼	28.7	22.2	2.6	
19	C <sub>2</sub>		塼	18.1	20.4	2.1	
20	C <sub>2</sub>	P17	塼	20.0	21.6	2.4	
21	C <sub>1</sub>	SE01	塼	13.0	15.9	2.3	
22	C <sub>1</sub>	SE01	塼	16.6	12.7	2.3	裏面焼けている
23	C <sub>1</sub>	SE01	塼	8.2	8.0	3.5	
24	C <sub>1</sub>	SE01	塼	7.7	11.4	2.9	
25	C <sub>1</sub>	SE03	塼	16.2	18.3	4.0	
26	C <sub>1</sub>	SE03	塼	13.1	9.2	3.1	
27	C <sub>1</sub>	SE03	塼	10.0	7.5	3.7	
28	C <sub>1</sub>	SE03	塼	7.2	5.9	2.4	
29	C <sub>1</sub>	SE06	塼	14.4	16.0	3.7	
30	C <sub>1</sub>	SE06	塼	12.1	14.0	2.9	
31	C <sub>1</sub>	SE06	塼	12.4	16.2	2.2	
32	C <sub>1</sub>	SE06	塼	9.0	10.0	2.3	
33	C <sub>1</sub>	SE06	塼	6.9	5.2	2.7	
34	1981年度		塼	8.7	11.7	2.9	
35	C <sub>1</sub>	SK27	塼	11.5	12.4	2.2	
36	S <sub>3</sub>	P86	塼	12.6	24.5	2.6	裏面焼けている



## (2) 風炉・火鉢

暖房具の火鉢と茶道具の風炉・茶釜・香炉は瓦器で、火鉢のみ土師器もある。

### A. 風炉

風炉1・2は体部に丸窓が開いており、1は口径25cmを測り、体部は丸い。2の口縁には小さい菊花文か印花文がある。

### B. 火鉢

火鉢は3～13・18～20が瓦器、15～17は土師器である。

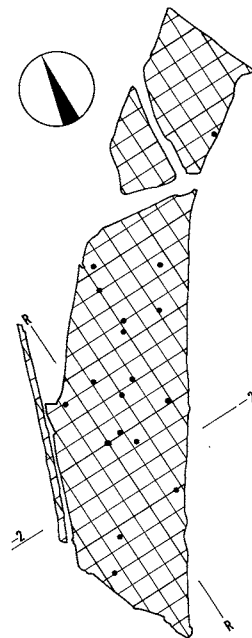
①火鉢は体部が丸く底へ窄まり、口縁が強く内湾する3～5で外に突帯が一条付く5と付かない3・4があり、口縁に小さい菊花文の印花文（八弁）を施した4がある。3は口径37cm、5は口径33.8cmを測る。②体部が丸く底へ窄まり、口縁に大きな菊花文の印花文（一六弁）を施した6～10がある。10は口径47cmを測る。③体部があまり丸くなく斜めに外開きする火鉢11～13がある。11・12は部分的に襞状に口縁が作られ、口縁部には大きい菊花文の印花文が施されている。11は口径33cmを測る。④火桶とも呼べる直口の火鉢があり、瓦器14と土師器15・16がある。14は二条突帯の間に雲形のスタンプ文が施される。15は三条の突帯で桶を表現しており底径23.6cm、高さ18.7cmを測り、16はそこのみであるが底径26.2cmを測る。⑤箱形の火鉢で手あぶりは丸く開いており、口縁は二条突帯の間に重郭文のスタンプを押す土師器の火鉢である。18は瓦器火鉢で雷文のスタンプが押されている。⑥箱形の火鉢の脚が獣脚となる火鉢に19・20がある。19は口縁の一部に雷文スタンプで飾られ、底外面に一条突帯が付き底の四隅に立体的な獣脚が取り付く。20は三脚になるかもしれない。⑦土師器火鉢28は外面が丁寧に磨かれた火鉢で口径28.6cmを測る。

### C. 茶釜

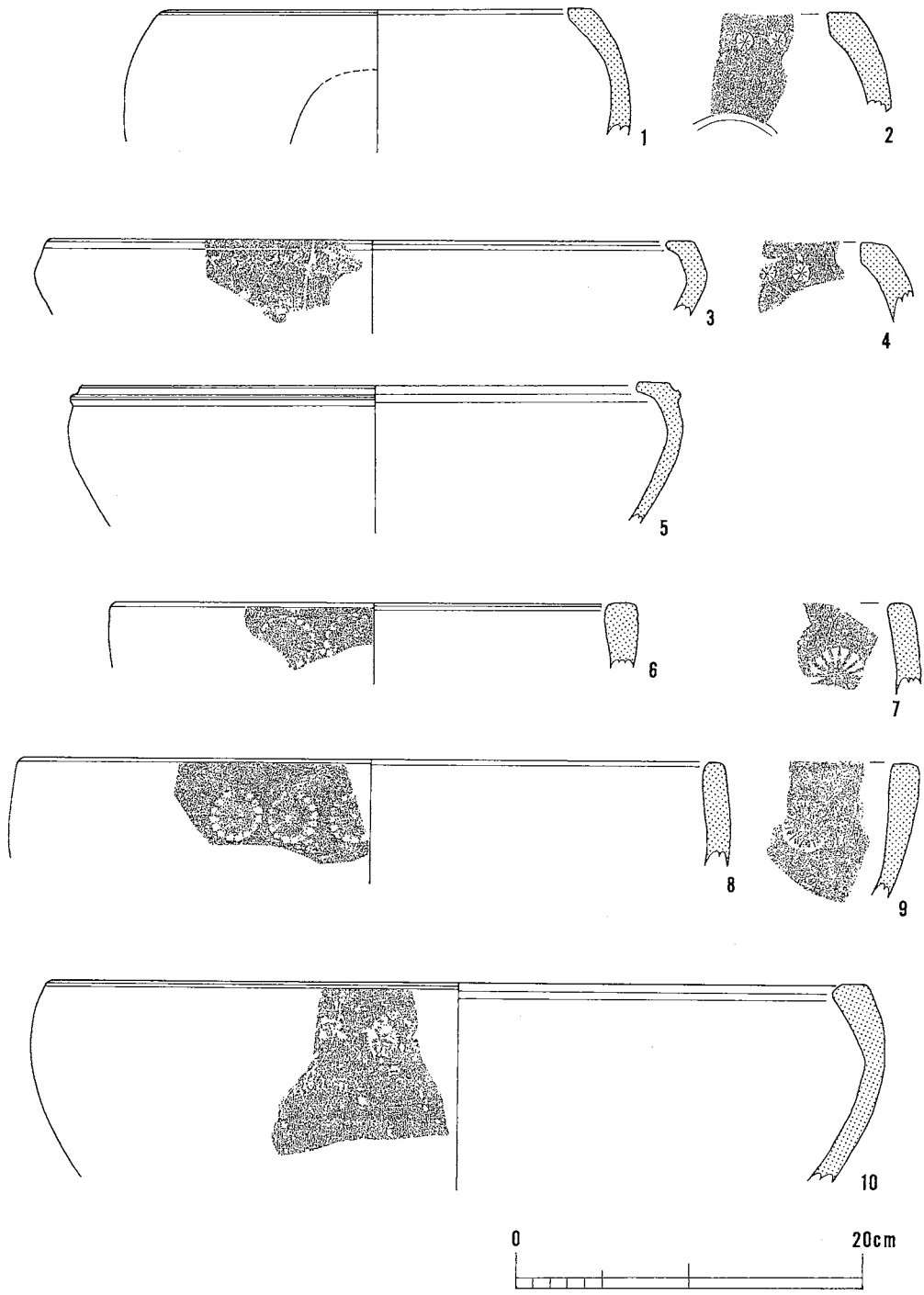
21は口縁のみであるが、口径28.2cmの口縁部のみを残す茶釜である。

### D. 香炉

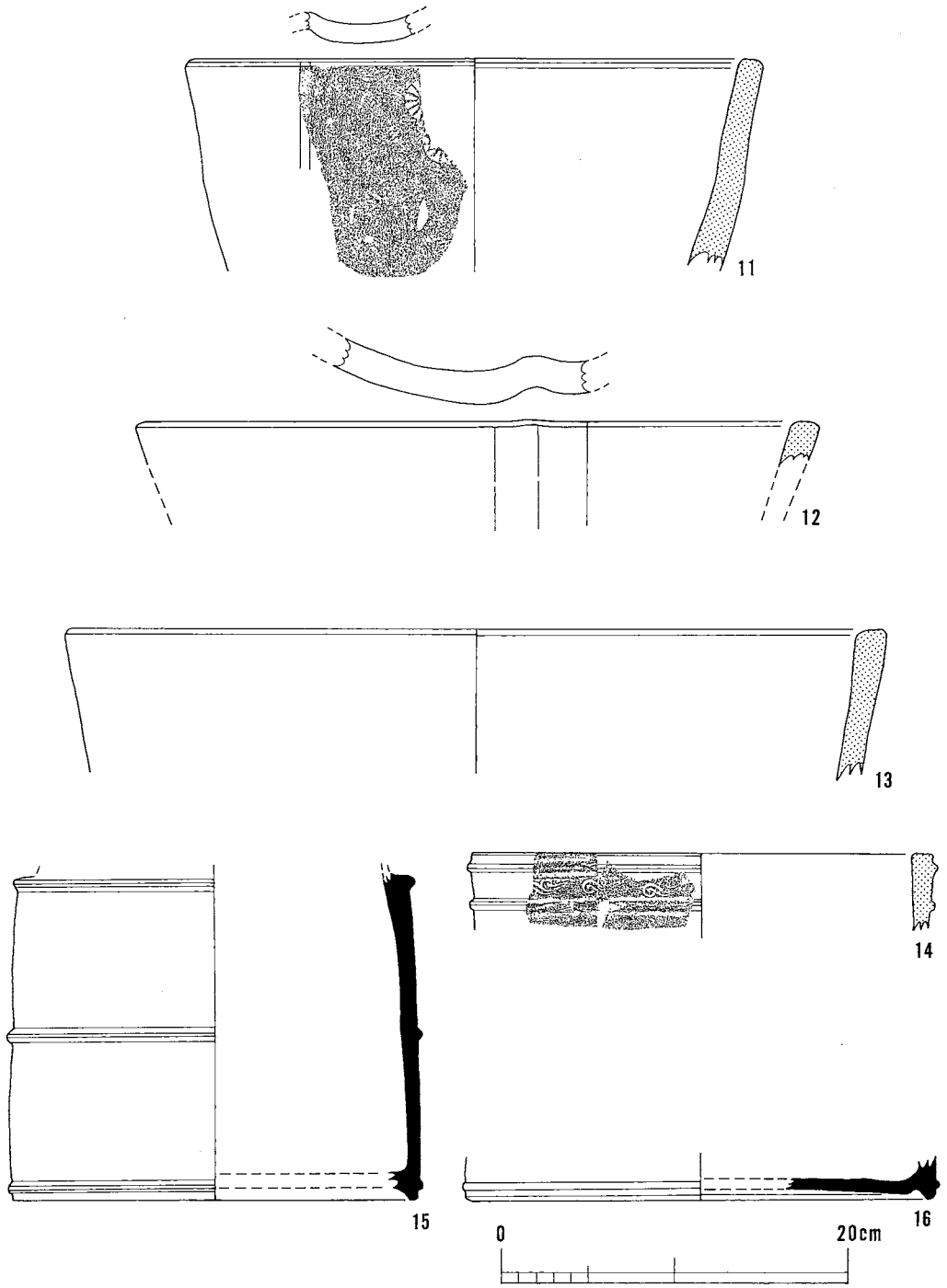
香炉には①少し高い脚が付く良く外面が磨かれた22～24と、③低い三足が付き、口縁下には25のように雲形文のスタンプが付く25と半截花文のスタンプが付く26がある。いずれも瓦器である。



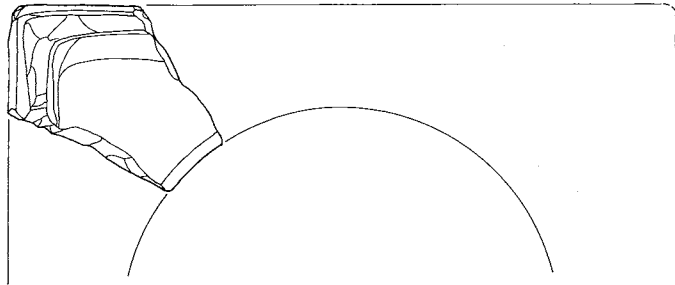
挿図356 風炉・火鉢  
出土状況



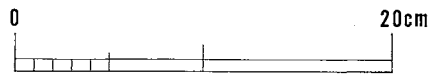
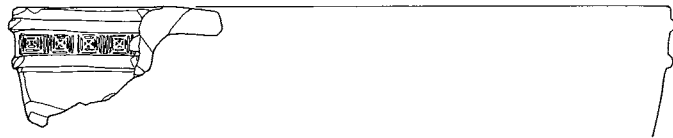
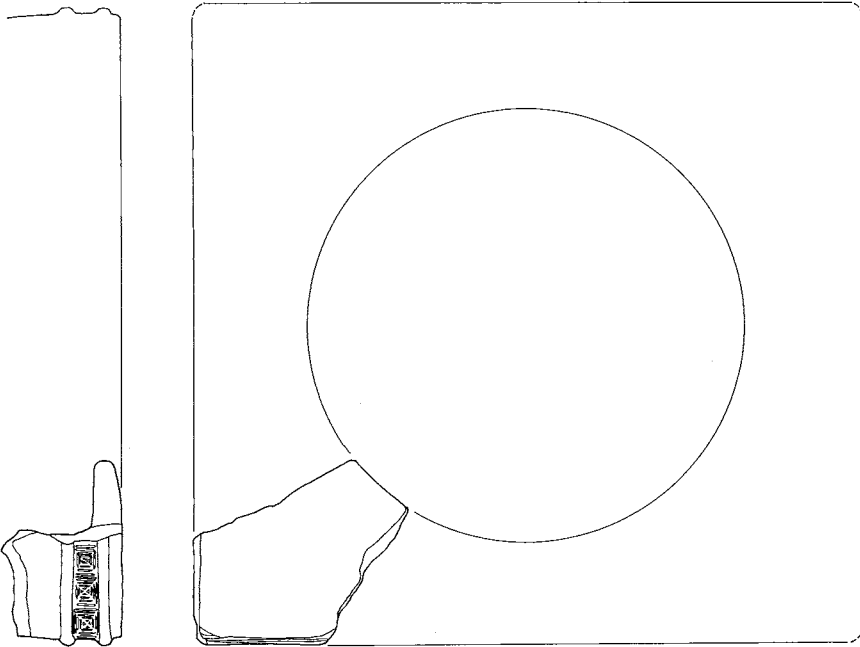
挿図357 土製品 (1) 風炉・火鉢 (1)



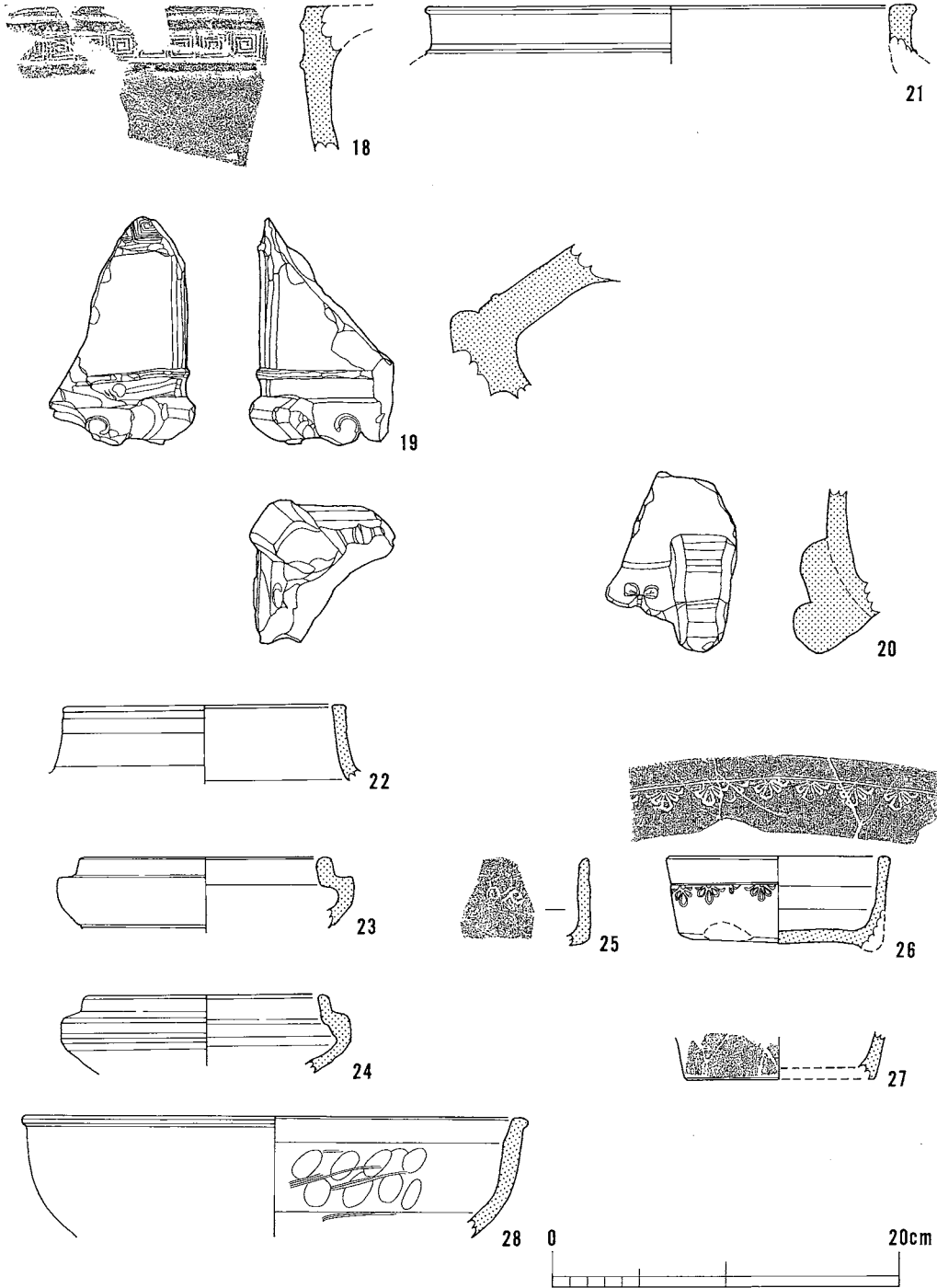
挿図358 土製品 (2) 火鉢 (2)



17



挿図359 土製品 (3) 火鉢 (3) ・香炉 (1)



挿図360 土製品 (4) 火鉢 (4) ・香炉 (2)

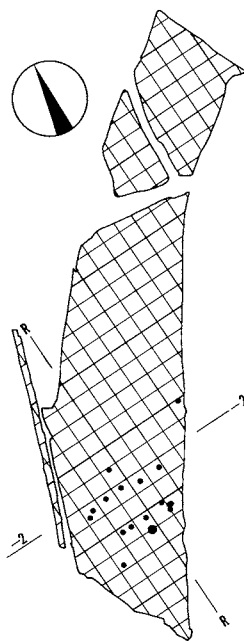
表19 風炉・火鉢一覧

番号	地区	遺構	種類	口径cm	底径cm	高さcm	厚みcm	備考
1	C <sub>1</sub>	SE06	風炉・瓦器	25.0		7.5	1.1	
2	1981年度		風炉・瓦器			5.7	1.4	菊花文スタンプ
3	S <sub>3</sub>	SD18	火鉢・瓦器	37.0		4.4	1.1	
4	S <sub>3</sub>	II SK03	火鉢・瓦器			4.8	1.6	菊花文スタンプ
5	1981年度		火鉢・瓦器	33.8		8.2	0.7	
6	S <sub>1</sub>	SD02	火鉢・瓦器			3.8	1.4	菊花文スタンプ
7	C <sub>1</sub>		火鉢・瓦器			5.3	1.4	菊花文スタンプ
8	C <sub>1</sub>		火鉢	48.4		6.0	1.3	菊花文スタンプ
9	1981年度		火鉢・瓦器			7.8	1.0	菊花文スタンプ
10	C <sub>1</sub>	P34	火鉢	47.0		11.5	1.2	菊花文スタンプ
11	C <sub>1</sub>	内堀	火鉢	33.0		12.0	1.6	菊花文スタンプ
12	N <sub>3</sub>	SK25	火鉢・瓦器	39.2		26.0	1.6	
13	C <sub>1</sub>		火鉢・瓦器	47.0		8.8	1.3	
14	C <sub>1</sub>	東西堀	火鉢	26.5		4.5	0.9	雲形文スタンプ
15	C <sub>1</sub>	内堀	火鉢		23.0	18.7	0.9	
16	C <sub>1</sub>	P10	火鉢		26.2	2.5	0.6	
17			火鉢	タテ33.7	ヨコ35.7	6.3	1.3	重郭文スタンプ
18	S <sub>3</sub>	SK47	火鉢			8.5	1.4	雷文スタンプ
19			火鉢			13.1	2.4	獣足脚
20	1981年度		火鉢			10.4	1.0	脚
21	C <sub>1</sub>	内堀	火鉢	28.2		3.4	1.3	
22	C <sub>1</sub>	外堀	茶釜・瓦器	16.0		4.4	0.7	
23			香炉	13.6		4.0	0.9	
24	1981年度		香炉・瓦器	14.0		4.5	0.6	
25			香炉・瓦器			5.0	0.7	雲形文スタンプ
26	C <sub>1</sub>	内堀	香炉・瓦器	12.8		5.0	0.7	三足・半戴花文スタンプ
27	S <sub>3</sub>	SD14	香炉	28.6		2.7	0.6	スタンプ文
28			火鉢		10.8	6.9	0.9	

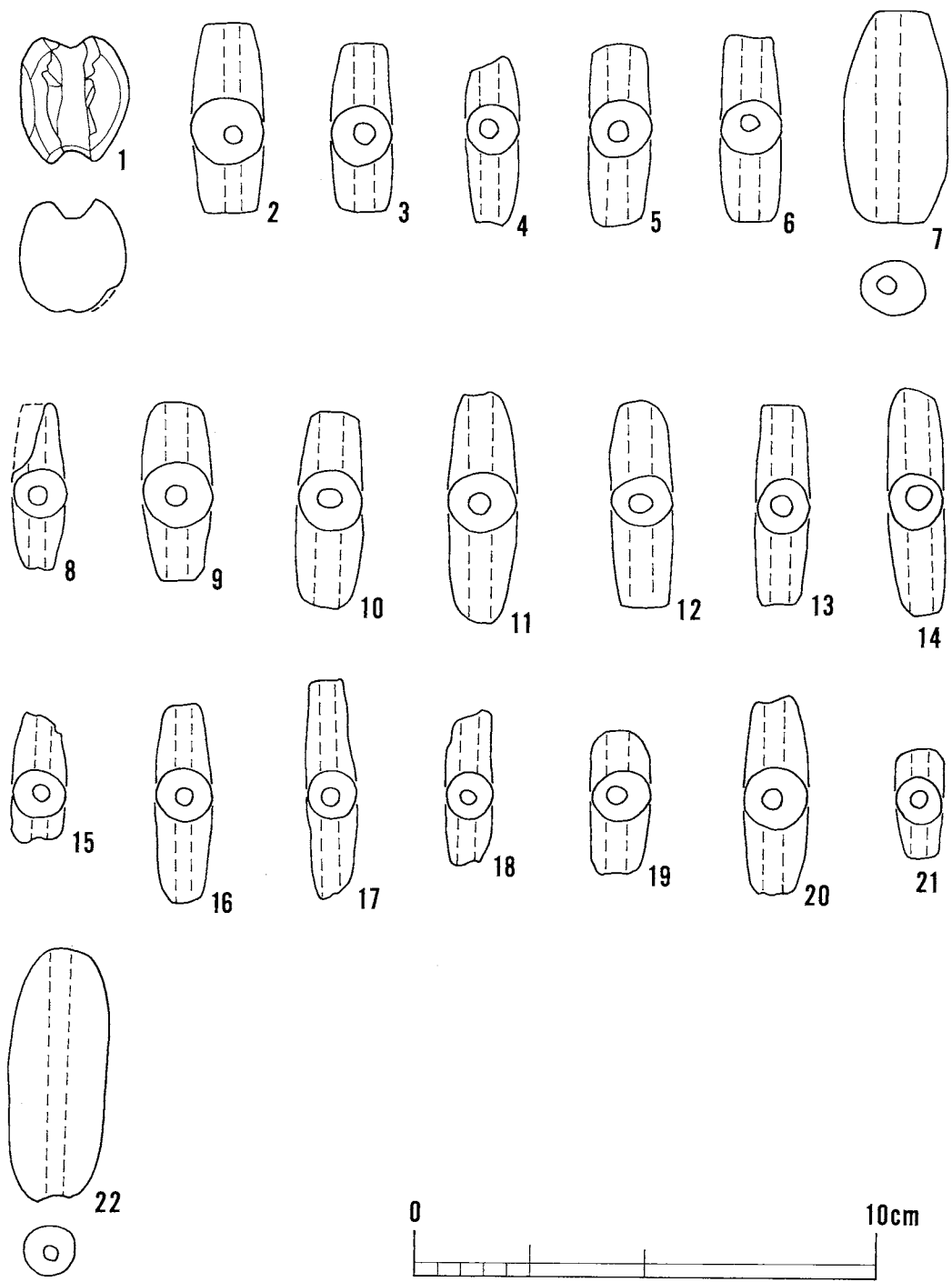
### (3) 土 錘

土錘は49点出土しているが、2点以上纏まって出土した土錘はS<sub>3</sub>SK98、S<sub>3</sub>SD16、C<sub>1</sub>SK15、C<sub>2</sub>SD04、C<sub>1</sub>SE05などからで、墓・溝・井戸などである。

土錘は軸芯に粘土を巻き付け整形するもので、芯の大きさ、形態、長さで区分できるが、重さが重要となる。芯の大きさは0.2・0.3・0.4・0.5・0.6・1.6cm、形態は丸形(1)・紡錘形(2~6・8~21・23~28・30~49)・楕円形(7・22)・円筒形(29)があり、長さは1.5~5.5cmと幅があり、重さは0.9~10.2g、13.6g、21.9g、22.6g、66.2gがある。用途の違いによる。10gまでは投網の錘か。

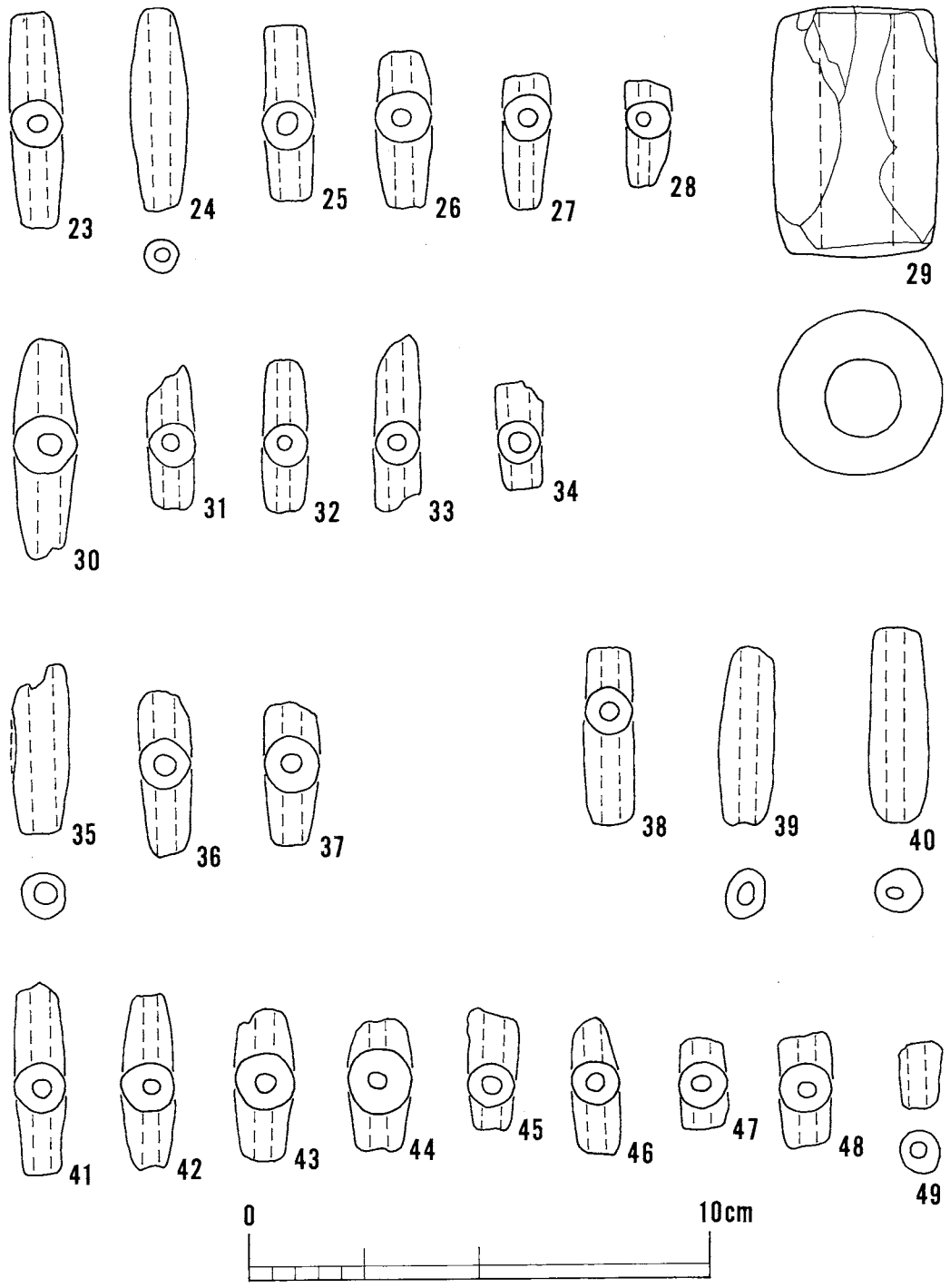


挿図361 土錘出土状況

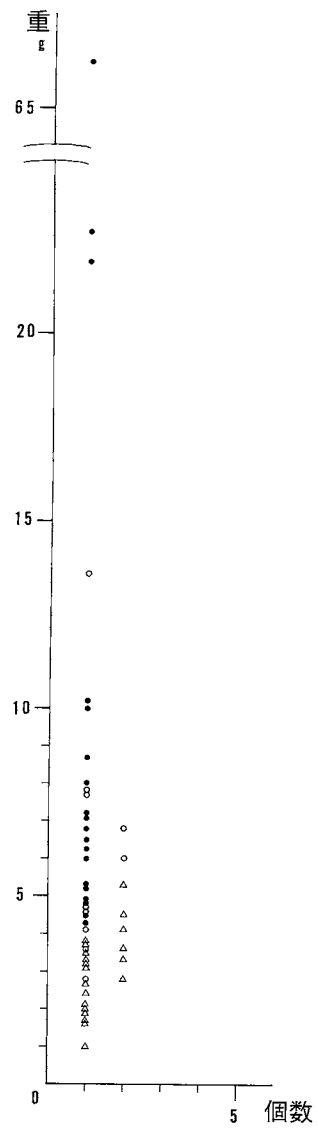
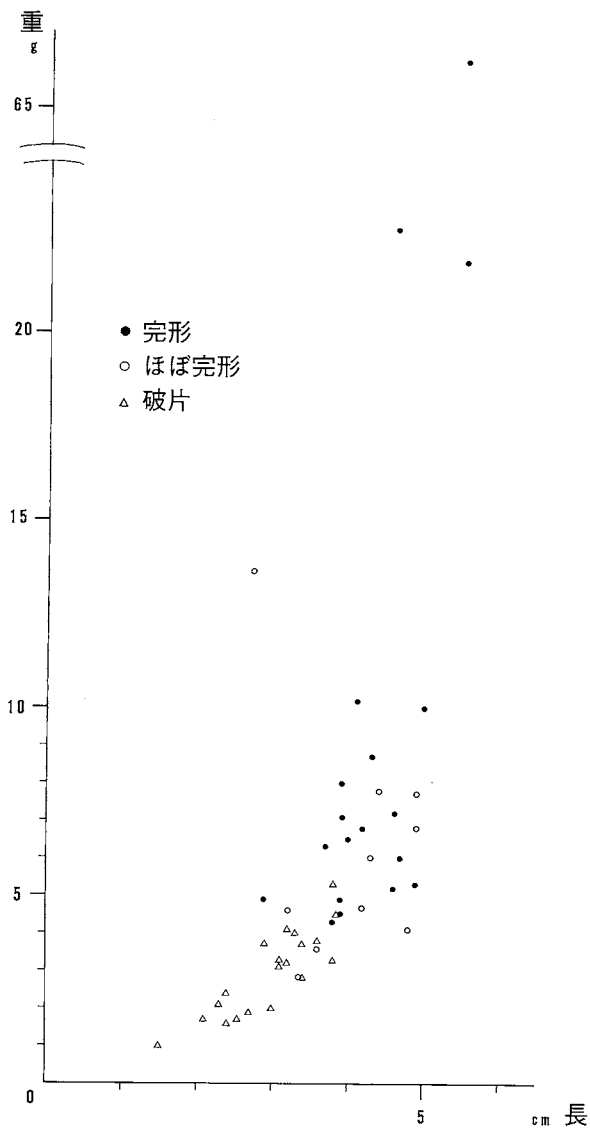


挿図362 土製品 (5) 土錘 (1)





挿図363 土製品 (6) 土錘 (2)



挿図364 土錘の法量

表20 土錘一覽

番号	地区	遺構	種類	長さcm	径cm	芯径cm	重さg	備考
1	S <sub>3</sub>	SK98	丸形	2.7	2.3	0.6	13.6	
2	S <sub>3</sub>	SK98	紡錘形	4.1	1.5	0.3	10.2	
3	S <sub>1</sub>		紡錘形	3.6	1.3	0.4	6.2	
4	S <sub>1</sub>	SD01	紡錘形	3.6	1.1	0.4	3.5	
5	S <sub>1</sub>		紡錘形	3.9	1.3	0.5	7.0	
6	S <sub>1</sub>		紡錘形	4.0	1.3	0.4	6.4	
7	S <sub>1</sub>	SD06	橢円形	4.6	2.2	0.6	22.6	
8	S <sub>3</sub>	SD09	紡錘形	3.1	1.1	0.3	3.1	
9	S <sub>3</sub>	SD10	紡錘形	3.8	1.5	0.4	8.0	
10	S <sub>3</sub>	SD16	紡錘形	4.2	1.4	0.5	8.6	
11	S <sub>3</sub>	SD16	紡錘形	5.0	1.5	0.4	10.0	
12	S <sub>3</sub>	SD16	紡錘形	4.6	1.3	0.5	7.2	
13	S <sub>3</sub>	SE14	紡錘形	4.9	1.1	0.4	5.2	
14	S <sub>3</sub>	SE19	紡錘形	4.9	1.2	0.5	6.7	
15	S <sub>3</sub>	SK84	紡錘形	2.8	1.2	0.3	3.6	
16	S <sub>3</sub>	SK96	紡錘形	4.3	1.2	0.3	6.5	
17	S <sub>3</sub>	II P108	紡錘形	4.8	1.0	0.3	4.1	
18	S <sub>3</sub>	P	紡錘形	3.4	1.0	0.4	2.7	
19	S <sub>4</sub>	外堀	紡錘形	3.1	1.3	0.5	4.5	
20			紡錘形	4.3	1.4	0.4	7.7	
21			紡錘形	2.3	1.1	0.3	2.3	
22	S <sub>1</sub>		橢円形	5.5	2.1	0.4	21.9	
23	N <sub>3</sub>		紡錘形	4.7	1.1	0.3	5.9	
24	N <sub>1</sub>		紡錘形	4.6	1.3	0.6	5.2	
25	N <sub>3</sub>		紡錘形	3.8	1.2	0.5	4.2	
26	N <sub>1</sub>		紡錘形	3.4	1.2	0.4	3.7	
27	N <sub>1</sub>		紡錘形	3.0	1.0	0.3	3.2	
28	N <sub>2</sub> B	SK11	紡錘形	2.3	1.0	0.2	2.0	
29	C <sub>4</sub>	SD06	円筒形	5.4	3.6	1.6	66.2	
30	C <sub>1</sub>		紡錘形	4.8	1.4	0.5	7.6	
31	C <sub>1</sub>	SK11	紡錘形	3.1	1.0	0.3	3.0	
32	C <sub>1</sub>	SK15	紡錘形	3.3	1.0	0.2	2.8	
33	C <sub>1</sub>	SK15	紡錘形	3.8	1.0	0.4	3.2	
34	C <sub>1</sub>	内堀	紡錘形	2.3	1.0	0.5	1.6	
35	C <sub>2</sub>	SD04	紡錘形	3.7	1.2	0.4	5.3	
36	C <sub>2</sub>	SD04	紡錘形	3.6	1.1	0.4	3.8	
37	C <sub>2</sub>	SD04	紡錘形	3.1	1.2	0.4	4.1	
38	C <sub>1</sub>	SE05	紡錘形	3.9	1.1	0.3	4.4	
39	C <sub>1</sub>	SE05	紡錘形	3.9	1.2	0.3	4.4	
40	C <sub>1</sub>	SE05	紡錘形	4.2	1.2	0.3	6.8	
41	1981年度		紡錘形	4.1	1.1	0.3	4.6	
42	1981年度		紡錘形	3.8	1.1	0.4	4.8	
43	1981年度		紡錘形	3.3	1.3	0.4	4.4	
44	1981年度		紡錘形	2.9	1.4	0.4	4.9	
45	1981年度		紡錘形	2.6	1.1	0.4	1.9	
46	1981年度		紡錘形	3.0	1.0	0.4	2.0	
47	1981年度		紡錘形	2.0	1.0	0.4	1.6	
48	1981年度		紡錘形	2.5	1.1	0.3	2.6	
49	1981年度		紡錘形	1.5	0.9	0.4	0.9	

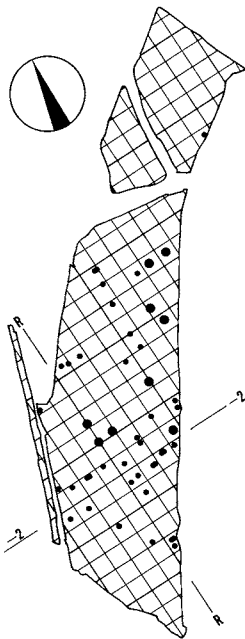
#### (4) 面子

面子は意識して識別すると数多くあり、93点を図化したが、破片などで識別し得なかったものも多い。堀や井戸から出土が多い。

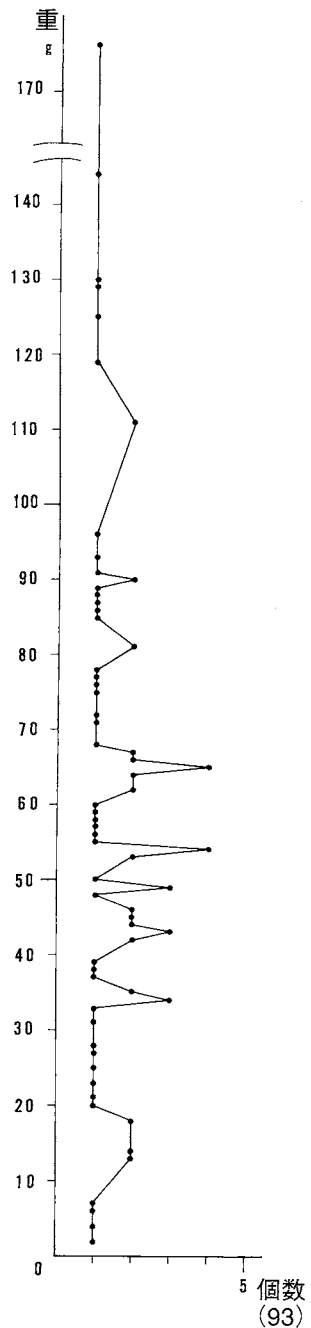
面子は礫合戦や印字打ちの遊び道具と考えられており、陶磁器や瓦・土師器の破損した物から造られている。一番多い物が備前焼甕胴部片81点、青磁碗高台片3点、須恵器碗片1点、瓦器碗片1点、瀬戸焼皿1点、亀山焼甕胴部片1点、瓦片2点、土師器皿1点と近世の参考品として、丹波焼甕胴部片1点と瀬戸・美濃焼天目碗片1点がある。

備前焼甕胴部片からの加工は用意で、縁を石で打撃を加えながら、回すと丸く容易に仕上がる。粗く仕上げた12や細かく丁寧に仕上げた16などがある。希に側縁を磨いた物もある。

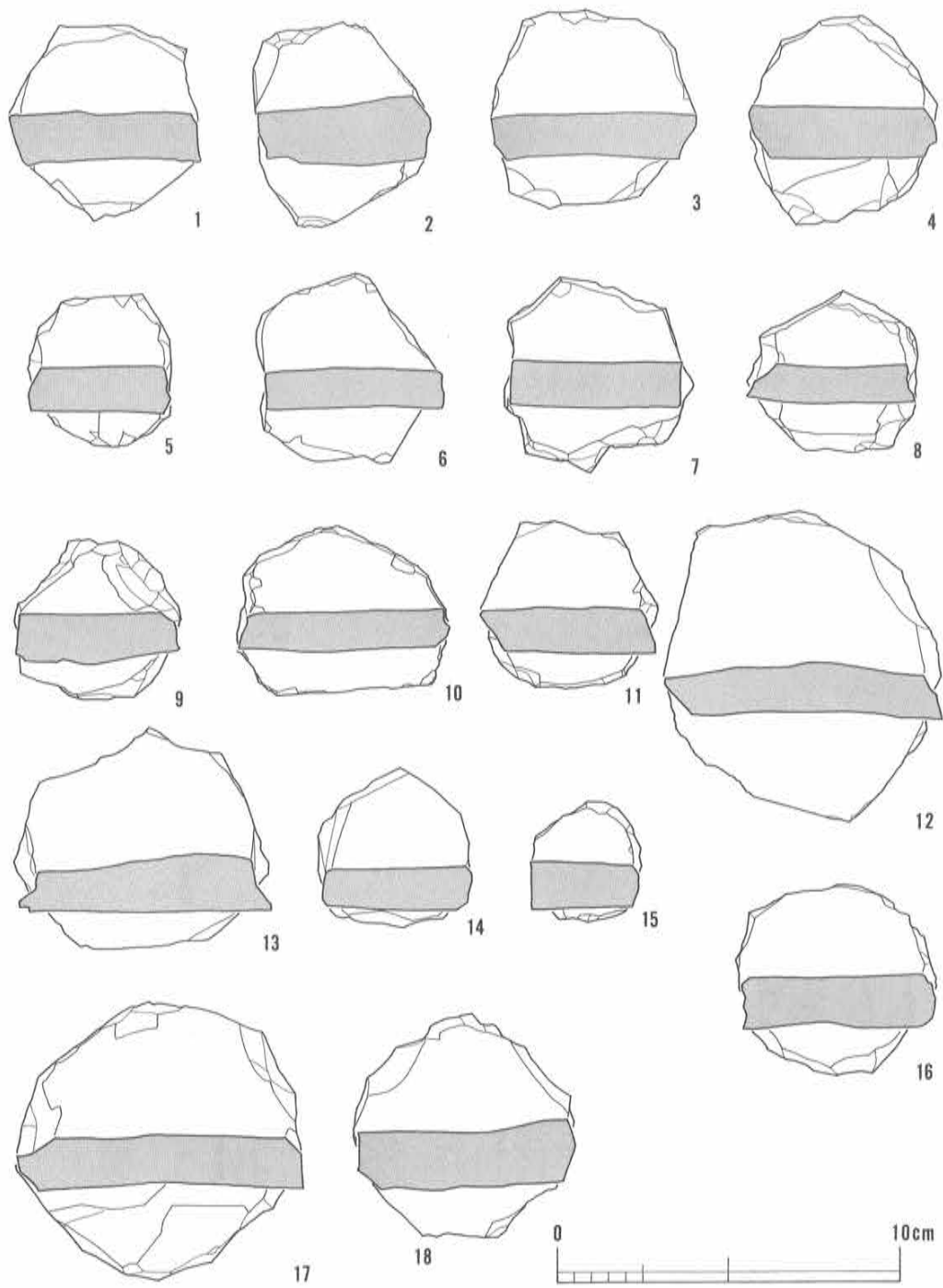
面子は大きさとも重さでも異なる。備前焼甕胴部片でも15の3.4×3.1cmから12の9.0×8.0cmと別れ、重さは89の2.8gから63の176gまで分かれる(挿図366)。



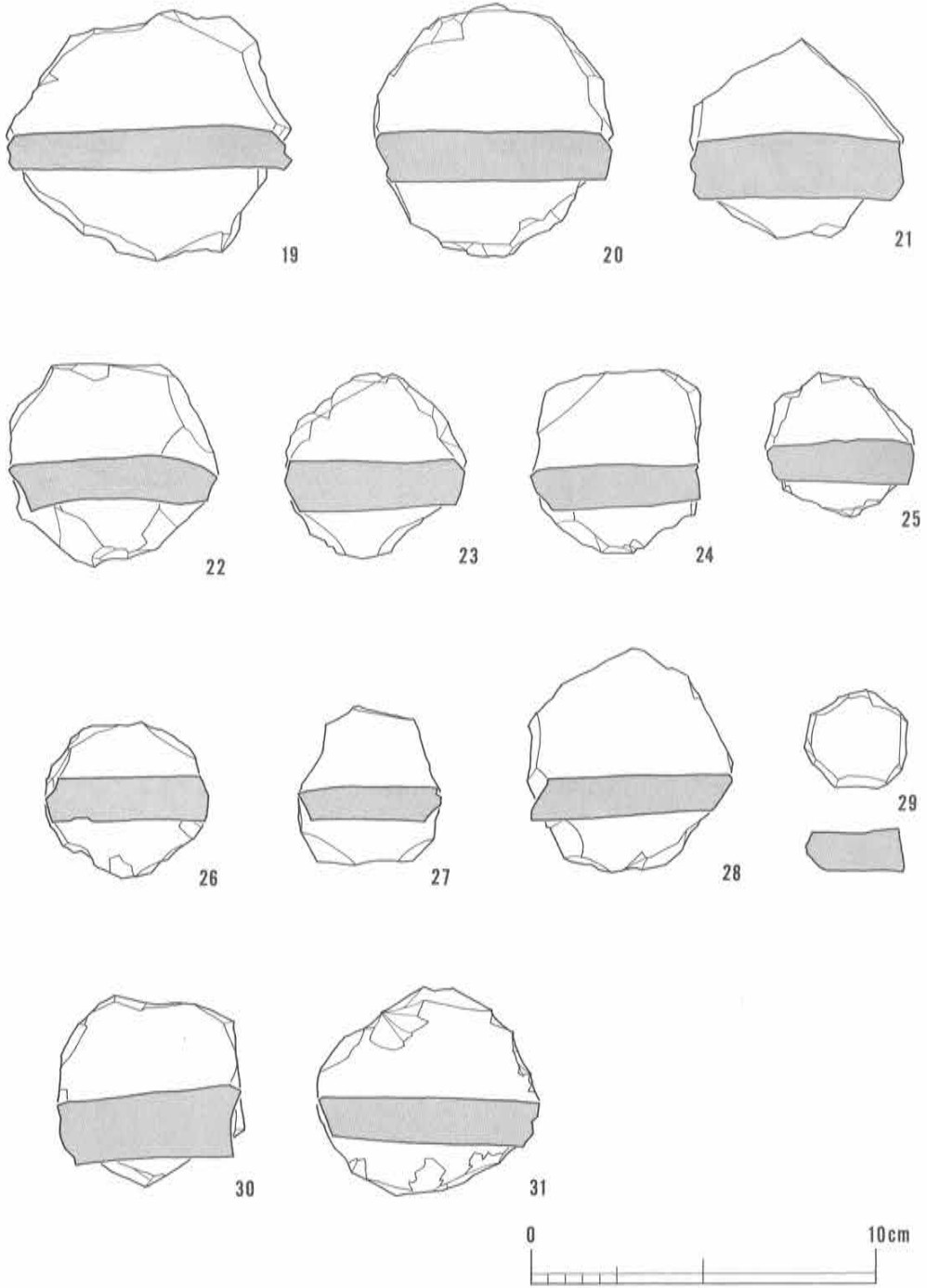
挿図365 面子出土状況



挿図366 面子の重さ



挿図367 土製品 (7) 面子 (1)



挿図368 土製品 (8) 面子 (2)

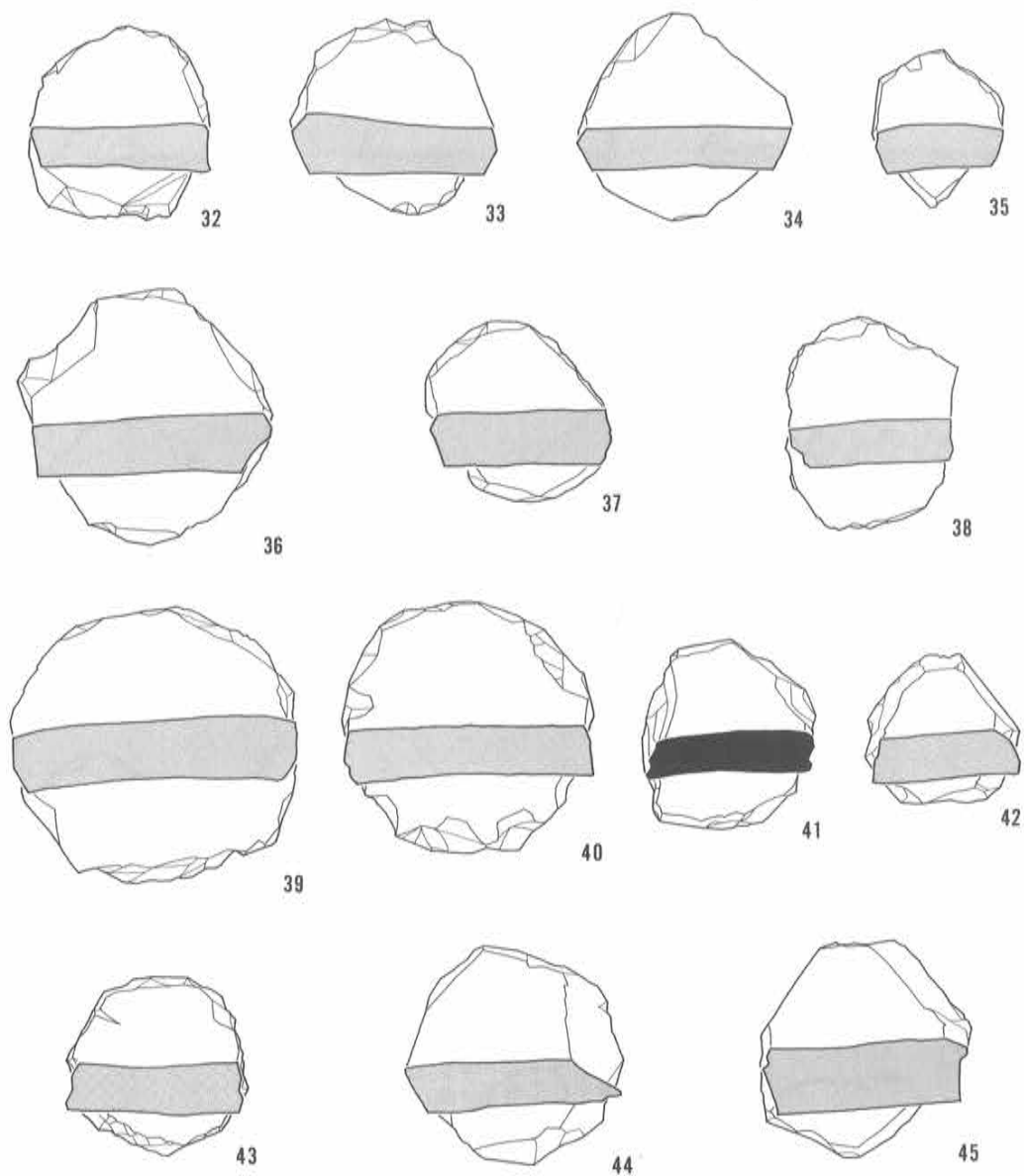
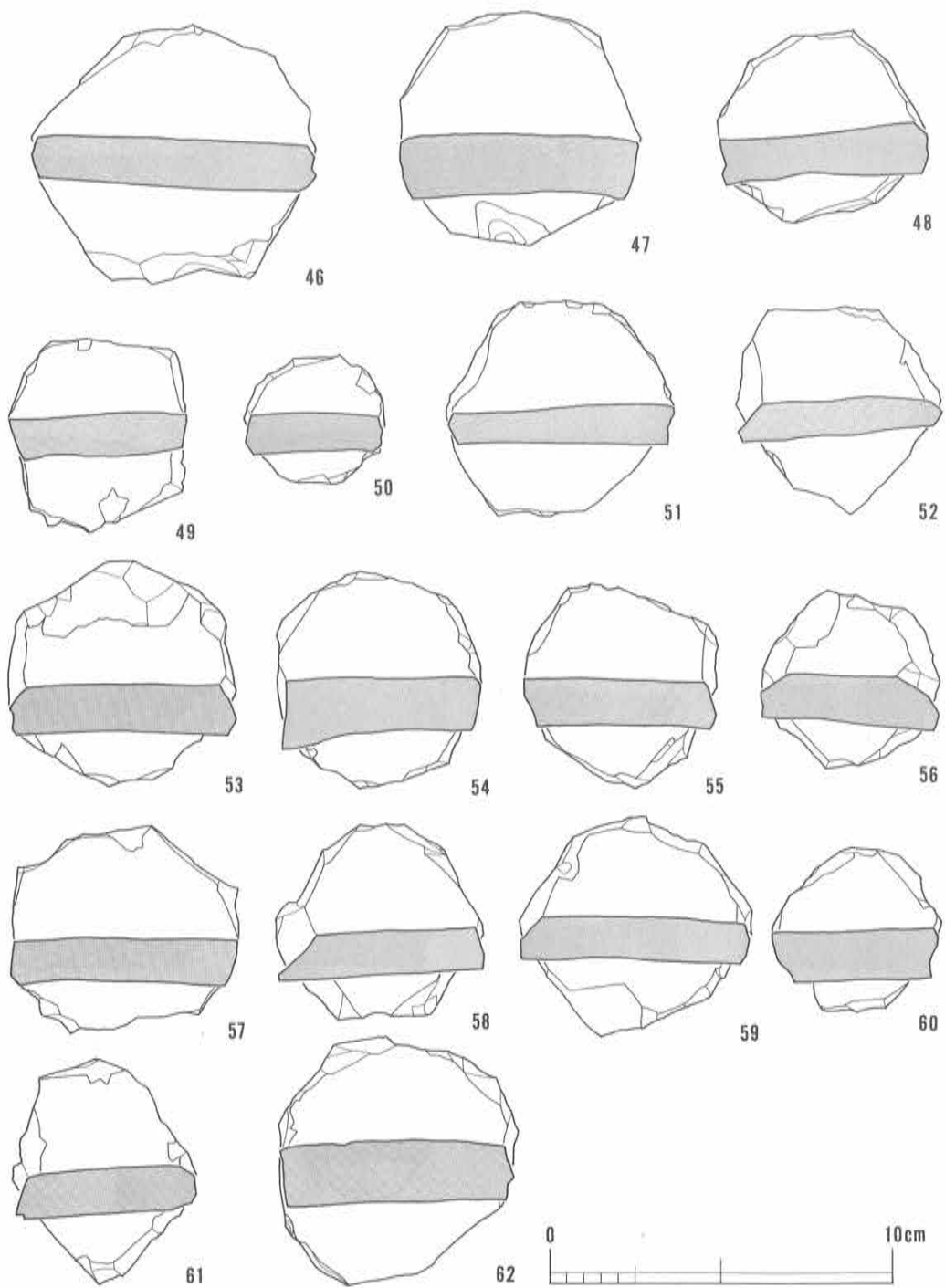


插图369 土製品 (9) 面子 (3)



挿図370 土製品 (10) 面子 (4)



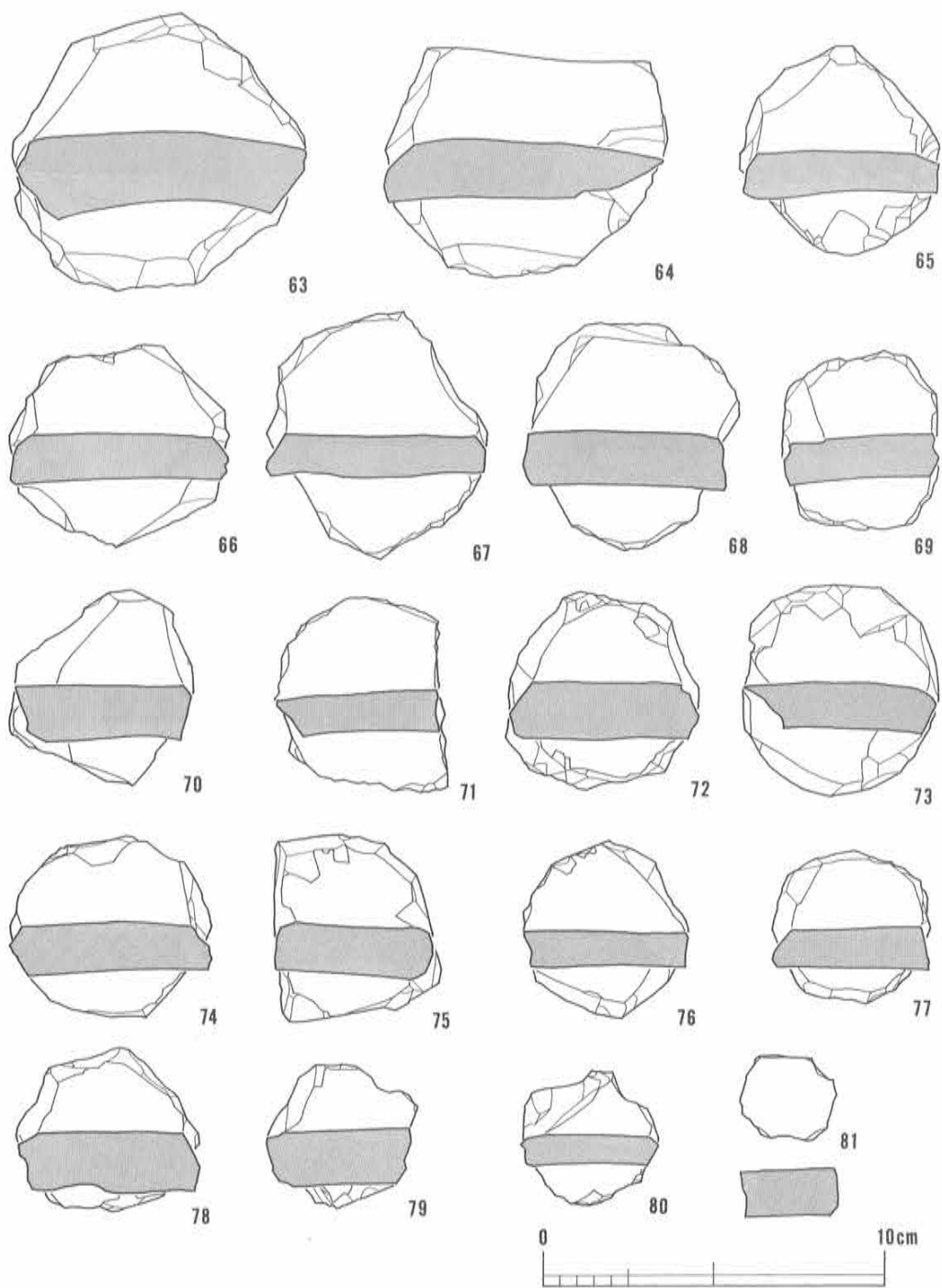


插图371 土製品 (11) 面子 (5)

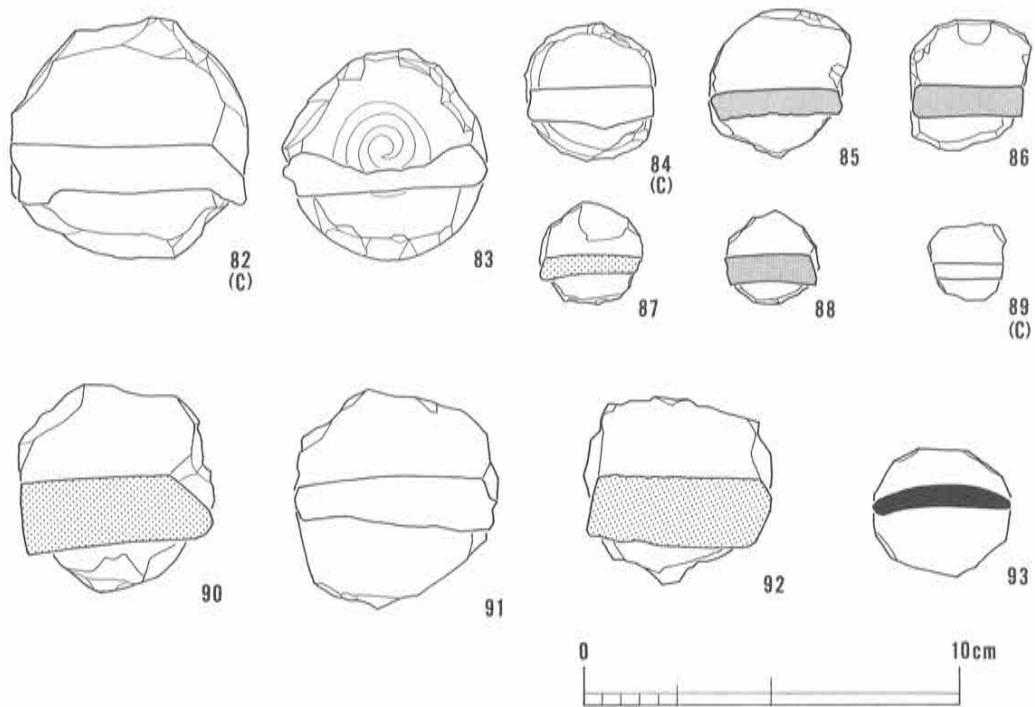


插图372 土製品 (12) 面子 (6)

表21 面子一覧

番号	地区	遺構	種類・材質	長さcm	幅cm	厚みcm	重さg	備考
1	C <sub>1</sub>	SE01	面子・備前	5.7	5.5	1.5	65.5	
2	C <sub>1</sub>	SE03	面子・備前	5.9	5.2	1.8	72.4	
3	C <sub>1</sub>	SE06	面子・備前	5.7	5.9	1.3	62.2	
4	C <sub>1</sub>	SE06	面子・備前	6.1	5.3	1.5	64.3	
5	C <sub>1</sub>	SE06	面子・備前	4.4	4.1	1.3	34.2	
6	C <sub>1</sub>	SE06	面子・備前	5.5	5.4	1.1	45.0	
7	C <sub>1</sub>	SK04	面子・備前	5.6	5.5	1.3	56.1	
8	C <sub>1</sub>	SK04	面子・備前	4.9	4.7	1.1	34.2	
9	C <sub>1</sub>	SK04	面子・備前	4.8	4.6	1.0	35.6	
10	C <sub>1</sub>	SD17	面子・備前	6.2	4.9	1.0	46.5	
11	C <sub>1</sub>	Qa	面子・備前	5.1	4.8	1.2	45.1	
12	C <sub>1</sub>	Pd	面子・備前	9.0	8.0	1.3	130.8	
13	N <sub>3</sub>	SK02	面子・備前	7.3	6.3	1.5	91.6	
14	S <sub>1</sub>	Saa	面子・備前	4.6	4.4	1.3	34.8	
15	S <sub>1</sub>	Tda	面子・備前	3.4	3.1	1.2	20.6	
16	S <sub>4</sub>	Eサブレッチ	面子・備前	5.8	5.5	1.5	65.3	
17	S <sub>1</sub>	II P175	面子・備前	8.1	8.1	1.5	129.6	
18	S <sub>3</sub>	P391	面子・備前	6.5	6.3	1.8	89.8	
19	C <sub>1</sub>	外堀	面子・備前	5.6	5.3	1.1	87.2	
20	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	7.2	6.8	1.3	96.8	
21	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	6.1	5.9	1.7	81.7	
22	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	5.9	5.8	0.9	67.8	
23	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	5.3	5.2	1.2	53.1	
24	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	5.3	4.9	1.0	49.4	
25	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	4.2	4.2	1.1	28.9	
26	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	4.7	4.5	1.3	39.9	
27	C <sub>1</sub>	内堀	面子・備前	4.6	4.1	1.0	27.7	
28	S <sub>4</sub>	外堀	面子・備前	6.4	5.8	0.9	59.1	
29	C <sub>1</sub>	外堀	面子・備前	3.8	3.0	1.2	14.8	
30	C <sub>1</sub>	外堀	面子・備前	5.6	5.3	2.1	81.5	
31	C <sub>1</sub>	外堀	面子・備前	6.4	6.0	1.3	65.6	
32	S <sub>1</sub>	SD01	面子・備前	5.1	4.8	1.2	42.0	
33	S <sub>1</sub>	SD01	面子・備前	5.5	5.2	1.2	50.5	
34	S <sub>1</sub>	SD01	面子・備前	5.7	5.4	1.1	43.8	
35	S <sub>1</sub>	SD01	面子・備前	4.2	3.4	1.0	21.4	
36	S <sub>1</sub>	SD02	面子・備前	6.8	6.7	1.6	90.9	
37	S <sub>1</sub>	SD05	面子・備前	5.0	4.9	1.6	43.3	
38	S <sub>1</sub>	SD05	面子・備前	5.1	4.7	1.1	44.0	
39	S <sub>1</sub>	SD06	面子・備前	7.6	7.4	1.6	144.2	
40	S <sub>1</sub>	SD06	面子・備前	6.9	6.8	1.4	88.0	
41	S <sub>3</sub>	SD05	面子・羽釜	4.9	4.7	1.0	31.2	
42	S <sub>3</sub>	SD10	面子・備前	4.1	3.9	1.2	23.3	
43	S <sub>3</sub>	SD18	面子・備前	4.8	4.7	1.3	42.1	
44	S <sub>3</sub>	SD19	面子・備前	5.9	5.7	1.0	54.4	
45	S <sub>3</sub>	SD19	面子・備前	5.7	5.6	1.2	71.3	
46	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	面子・備前	8.2	7.5	1.3	111.6	
47	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	面子・備前	7.1	6.9	1.7	111.6	
48	S <sub>1</sub>	片岡庄堀	面子・備前	6.0	5.0	1.0	66.4	

49	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	面子・備前	5.6	5.5	1.3	54.5	
50	S <sub>4</sub>	片岡庄堀	面子・備前	4.0	3.7	1.0	25.6	
51	C <sub>1</sub>	東西堀	面子・備前	6.5	6.2	1.1	64.3	
52	C <sub>1</sub>	東西堀	面子・備前	5.9	5.0	0.7	49.6	
53	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	6.5	6.4	1.5	85.0	
54	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	5.9	5.2	1.5	93.4	
55	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	5.8	5.6	1.4	68.0	
56	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	5.2	5.1	1.5	48.3	
57	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	6.7	5.9	1.3	78.9	
58	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	6.0	5.7	1.2	60.5	
59	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	6.6	6.3	1.3	66.0	
60	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	4.8	4.7	1.4	43.3	
61	C <sub>1</sub>	東西堀	面子・備前	6.5	5.3	1.2	55.3	
62	C <sub>3</sub>	東西堀	面子・備前	7.1	6.0	1.5	119.6	
63	1981年度		面子・備前	8.5	8.0	2.3	176.0	
64	1981年度		面子・備前	8.1	6.6	1.5	125.2	
65	1981年度		面子・備前	6.0	5.8	1.1	57.3	
66	1981年度		面子・備前	6.3	5.8	1.2	71.8	
67	1981年度		面子・備前	7.2	6.4	1.0	77.0	
68	1981年度		面子・備前	6.6	6.1	1.5	90.0	
69	1981年度		面子・備前	5.1	4.5	1.2	44.0	
70	1981年度		面子・備前	5.7	5.3	1.6	65.0	
71	1981年度		面子・備前	5.8	4.9	1.2	49.9	
72	1981年度		面子・備前	5.7	5.5	1.6	75.8	
73	1981年度		面子・備前	6.1	5.6	1.3	67.1	
74	1981年度		面子・備前	5.8	5.2	1.3	62.2	
75	1981年度		面子・備前	5.6	4.9	1.5	53.8	
76	1981年度		面子・備前	5.1	4.8	0.9	35.0	
77	1981年度		面子・備前	4.6	4.4	1.2	37.4	
78	1981年度		面子・備前	5.8	5.2	1.7	58.8	
79	1981年度		面子・備前	4.5	4.2	1.5	33.6	
80	1981年度		面子・備前	4.0	3.9	0.8	18.4	
81	1981年度		面子・備前	2.8	2.5	1.3	13.8	
82	S <sub>2</sub>	第3トレ	面子・青磁碗	6.3	6.2	1.6	86.1	
83	N <sub>1</sub>		面子・須恵碗	5.5	5.4	1.1	38.1	
84	S <sub>1</sub>		面子・青磁碗	3.6	3.4	0.7	18.8	
85	1981年度	II SK07	面子・瀬戸皿	4.0	3.8	0.6	13.8	
86	S <sub>3</sub>		面子・丹波甕	3.5	3.2	0.8	14.0	近世
87	1981年度	Sbd	面子・瓦器碗	2.8	2.7	0.7	4.2	
88	S <sub>1</sub>		面子・天目碗	2.5	2.5	0.8	6.3	近世
89	C <sub>1</sub>		面子・青磁	2.1	2.0	0.4	2.8	
90	S <sub>3</sub>	Tba	面子・瓦	5.9	5.2	1.7	54.6	
91	C <sub>1</sub>	外堀	面子・亀山甕	5.8	5.4	1.3	46.2	
92		SK15	面子・瓦	5.0	4.9	1.8	54.6	
93		SD17	面子・土師皿	3.6	3.4	0.3	7.1	

(5) 鞆羽口

鞆羽口は小鍛冶椀型鉄滓とともに鍛冶遺構の証明になるもので、C<sub>2</sub>SD04とC<sub>1</sub>SE02に捨てられていたもので近くに鍛冶工房鞆が送風し、武具（刀）や工具・金具を生産していたことが、本遺跡で金属製品の多さからも言える。

鞆羽口は炉に入れ溶解した口部のみが残り、高温度で筒部の粘土が変成し、残りが悪い。

表22 鞆羽口一覧

番号	地区	遺構	種類	残長さcm	口径cm	残径cm	芯径cm	備考
1	C <sub>2</sub>	SD04	鞆羽口	5.3	5.4	7.6	1.8	
2	C <sub>1</sub>	SE02周辺	鞆羽口	5.3	7.1	8.2	3.2	
3	C <sub>3</sub>	Mcd	鞆羽口	5.4	6.4	6.4	1.6	
4	C <sub>1</sub>	Od	鞆羽口	4.5	4.8	7.0	3.0	
5	S <sub>3</sub>	Wdc	鞆羽口	7.1	5.3	8.0	3.0	
6	C <sub>2</sub>	Hbc	鞆羽口	4.3	3.4		3.0	
7	C <sub>1</sub>	MbDトレンチ	鞆羽口	2.9	2.7	8.0	2.0	
8	N <sub>2</sub> A	Ida	鞆羽口	4.9	2.6	6.0	3.0	

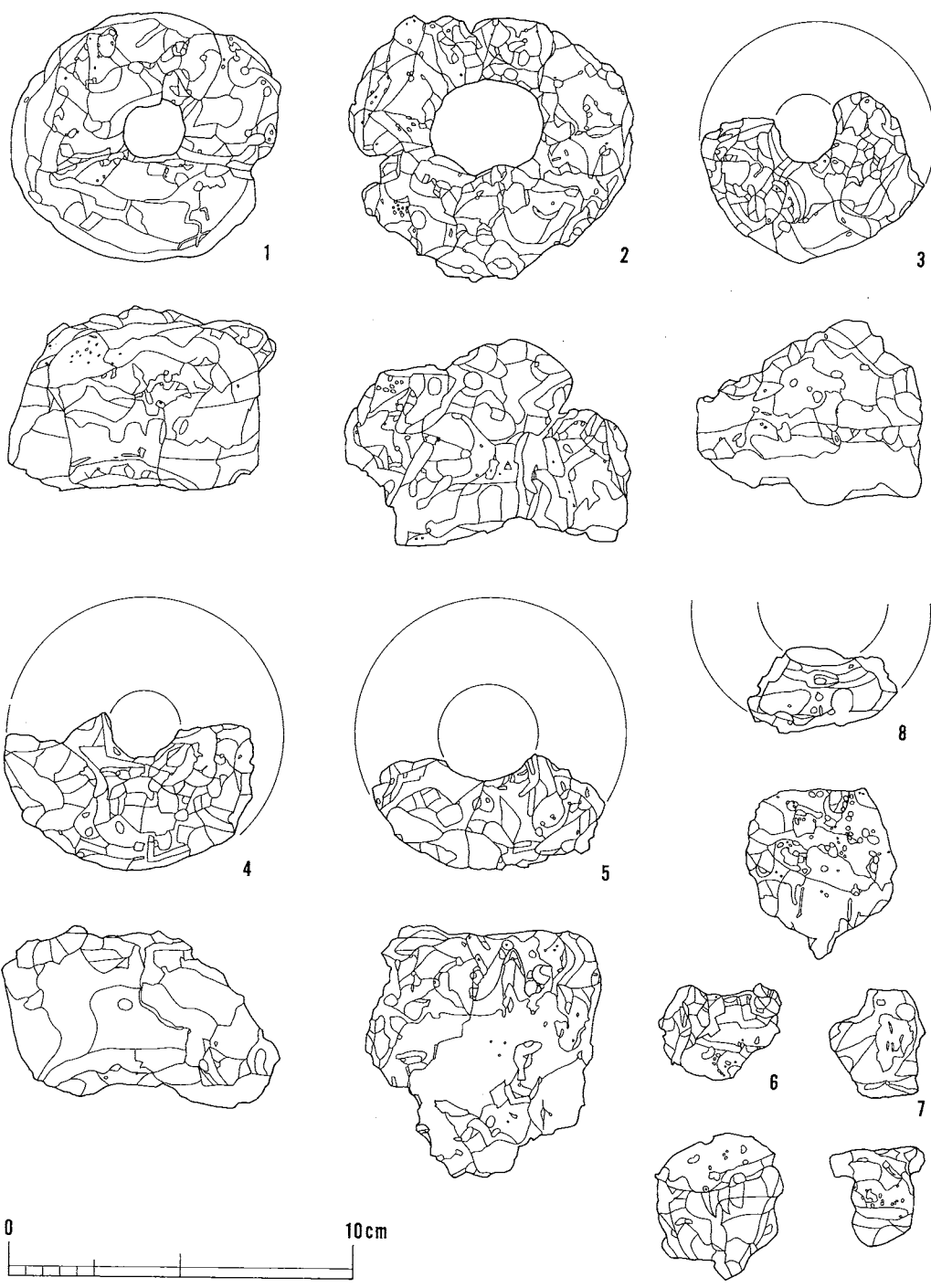


插图373 土製品 (13) 轡羽口

## 9. ガラス玉

S<sub>3</sub>地区の木棺墓ⅡSK01から出土した5点の玉を、奈良国立文化財研究所に依頼して材質鑑定を行った結果、当時は緑色のガラス製玉で数珠玉と判った。

発掘調査当時は、風化が激しく白色化した保存状況の悪いもので、象牙または珊瑚製の玉と考えており、ガラス玉と考えていなかった。数珠玉としては、出土数が少ない。

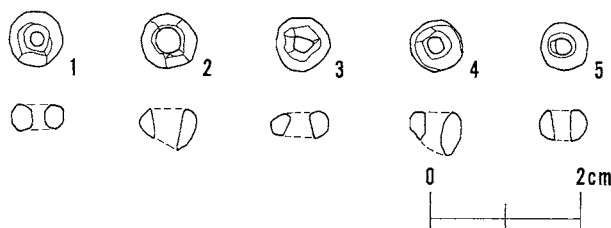
なお、5点のガラス玉の法量は、外径6.5～7.5cm (7.5cm)、内径1.5～3.0cm (2.5cm)、厚み3.5～4.6cm (3.5cm・4.5cm) を測る。

奈良国立文化財研究所保存科学研究室の村上 隆氏の分析結果の略報を再載する。

「数珠玉は劣化が激しく、表面はかなり荒れており、少し黄色味を帯びた白色を呈する。比較的新しい破面の光学顕微鏡観察によると、数珠玉は緑色ガラスでできており、象牙質のように見える表層部はガラス層の劣化層と思われる。ただし、この時期のガラス製品としては、表面の劣化が激しく劣化層もかなり厚い点など検討の余地を残している。今後、埋納環境との関係も考慮した総合的な解析が必要となろう。」

表23 ガラス玉一覧

番号	地区	遺構	外径cm	内径cm	厚みcm	備考
1	S <sub>3</sub>	ⅡSK01	7.5	1.5	3.5	
2	S <sub>3</sub>	ⅡSK01	7.5	3.0	4.5	
3	S <sub>3</sub>	ⅡSK01	7.5	2.5	3.5	
4	S <sub>3</sub>	ⅡSK01	7.0	2.5	4.6	
5	S <sub>3</sub>	ⅡSK01	6.5	2.0	4.0	



挿図374 ガラス玉

## 第6節 江戸時代以降の遺物

井戸状遺構SE07・SE08や上層溝（砂礫溝）があり、江戸時代以降現代にかけての遺物が出土している。遺物は1. 陶磁器と2. 金属製品がある。

### 1. 陶磁器（挿図374・375）

陶磁器は丹波焼・肥前系磁器・美濃焼などがある。

丹波焼は1の甕、2の徳利がある。

肥前系磁器には8・9の皿、10～13の碗がある。8は底見込みに寿文のスタンプがある。碗は雪の輪に梅樹文が描かれており、18世紀前半代に生産されている。

美濃焼の21の皿、25の碗は肥前系皿・碗を模したもので葡萄唐草文が描かれており、後出の19世紀以降のものである。

また皿・碗の染め付け文様技術の革新、銅版印刷の導入による変化を生み出し、22の蓋があり、現代に繋がる碗15がある。

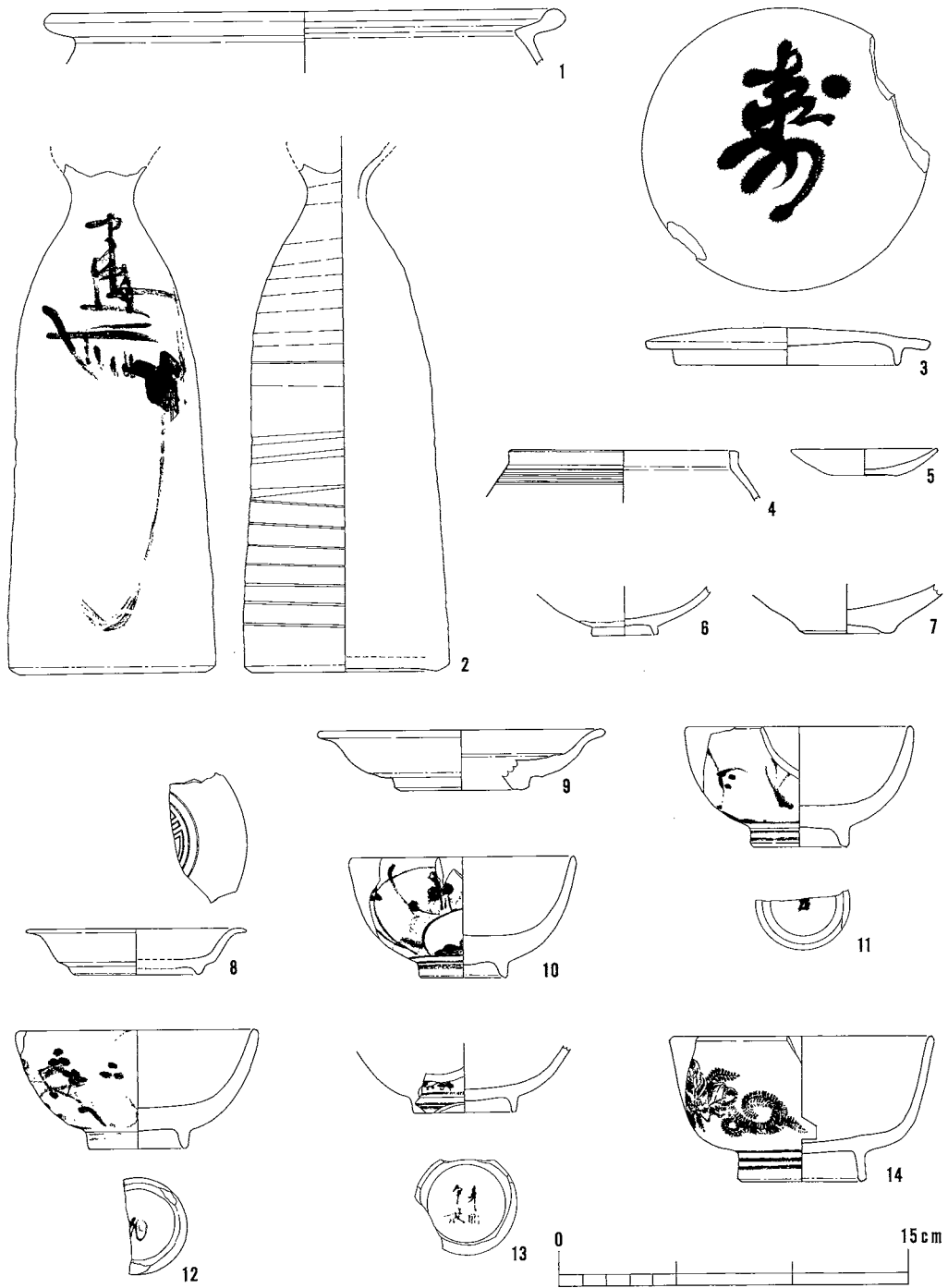
### 2. 金属製品

金属製品は鉄鎌と煙管があり、既に参考品として前節中世の遺物の項で述べている。

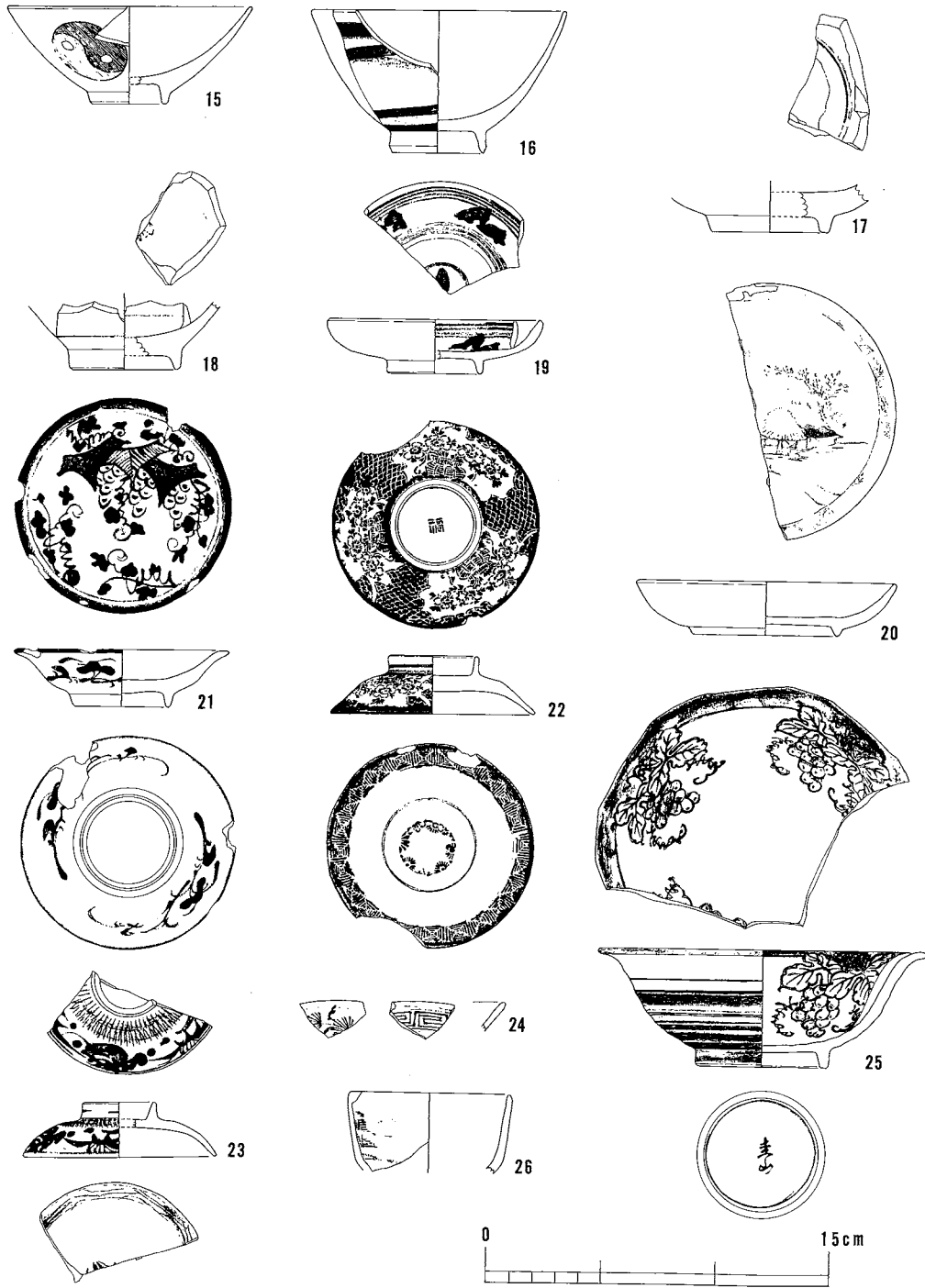
鉄鎌（挿図293）は木製の柄とともに完形品で出土しており、柄には手ズレをおこす程使用されており、×と#の記号が刻まれている。

煙管（挿図305）は18世紀以降の特徴をもつ雁首で、火口の高さが低く、筒部へ低くL字状に繋がるものである。





挿図375 江戸時代以降の陶磁器 (1)



挿図376 江戸時代以降の陶磁器 (2)



# 第6章 ま と め

## 第1節 片岡荘の荘域と開発

### 1. 鶯荘絵図の片岡荘域

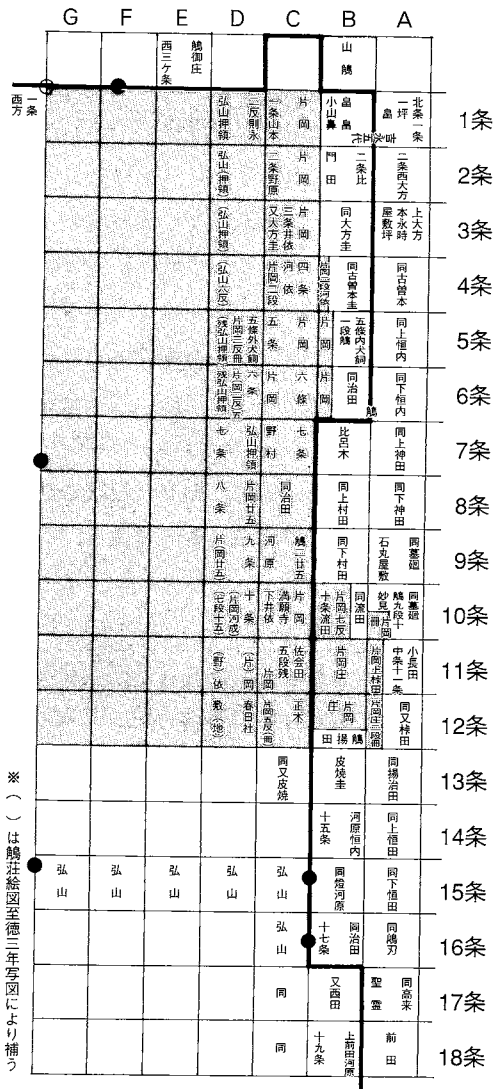
播磨国片岡荘は、12世紀中頃の関連文書(後述)が一通残るのみであり、それによって独立した荘園としての存在が認められるものの、当時の荘園領主すらあきらかではない。しかし、さいわい法隆寺に伝わる「播磨国鶯荘絵図」に片岡荘が描かれ、それによって荘域を復原することができる。挿図377は、鶯荘絵図のなかで本来の片岡荘域と判断される部分を示したものである。まず、このように考える理由について概略を記すことにする<sup>(1)</sup>。

嘉暦4年(1329)の年紀をもつ鶯荘絵図によれば、同荘は東方、西方各180町5段、計361町からなっていた。そのうち、西方の状況については次のように記されている。

西三ヶ條佰捌拾町五段内 參拾壹町陸段廿五代片岡庄内弘山押領分在之 佰肆拾捌町段廿五代 建治元年御実檢目録定

すなわち、建治元年(1275)の実検段階までに、片岡荘は荘園としての独立を失って鶯荘西方に含まれ、鶯荘域内の地域呼称としてその名をとどめていたのである。しかも、そのうち31町6段25代が隣接する弘山荘に押領されるという状態であった。では、鶯荘絵図のなかで弘山荘に押領された部分はどうに表現されているだろうか。

挿図377は、鶯荘絵図の西北部分(西方に含まれる)である。ひとつの正方形は、条里



挿図377 鶯荘絵図の片岡荘域  
—弘山荘実検絵図の弘山荘界

型地割の一坪（一町四方）にあたり、右辺の「1条」から「18条」は、絵図のE列に記載された「一条」以下の条名を示している。ここには片岡荘に属する土地の所在を表わす「片岡庄」、あるいは「片岡」の記載がみられるが、5条C坪にあきらかなように、この絵図が弘山荘に押領された部分と押領をうけていない部分とを明確に区別して記載していることに注意したい。つまり、「弘山押領」と明記された箇所が弘山荘に押領された片岡荘の土地なのであり、たんに「片岡庄」あるいは「片岡」と記入された部分は、片岡荘内ではあっても押領をうけていないのである。しかし、「弘山押領」と記された箇所の面積を合計しても31町6段25代にはかなり不足する。したがって、押領分の耕地はほかにも存在したと考えなければならない。

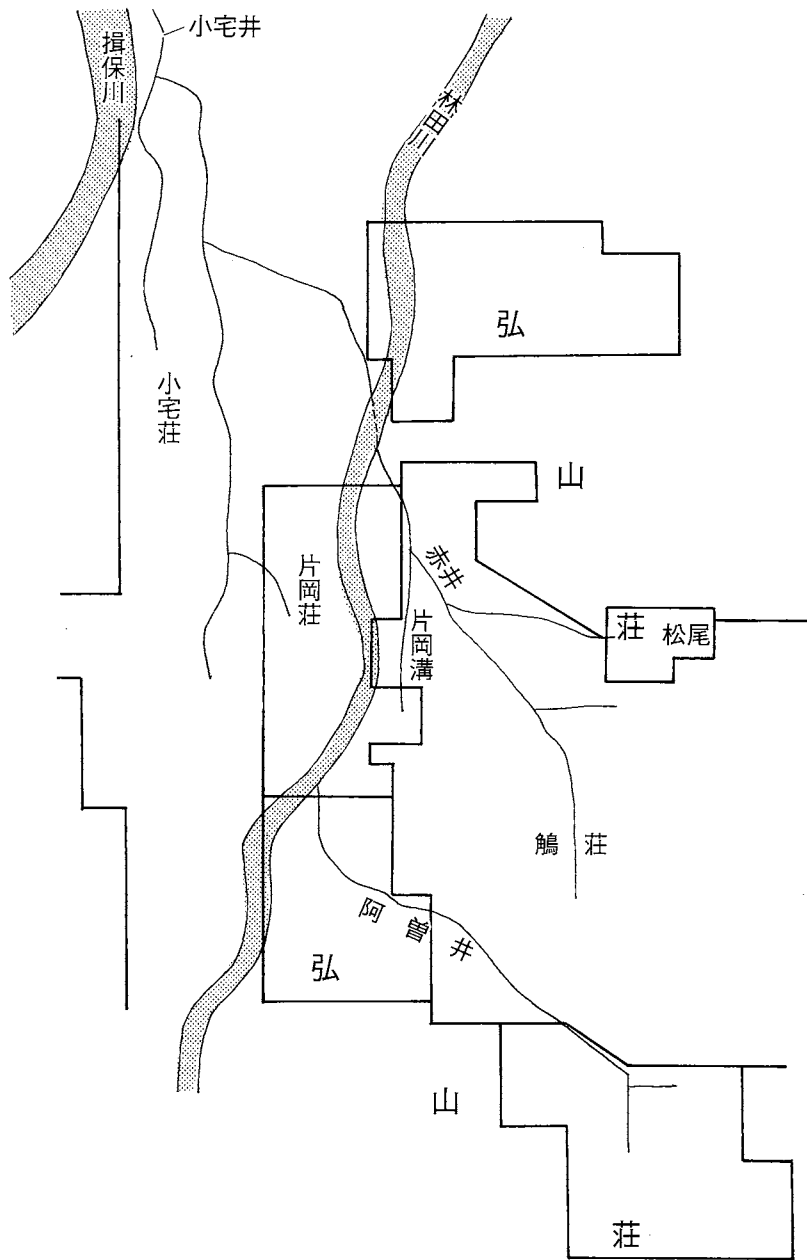
ところで、絵図に記載された黒丸は鶺鴒荘の境界に設置された勝示を表現しており、それらをつないだラインは鶺鴒荘の境界線を示すと考えられる。このことは、15条Cの坪から南と西に記入された「弘山」の文字によっても表現されている。つまり、このラインによって囲まれる範囲が絵図が主張する鶺鴒荘本来の領域なのである。「弘山押領」と明記された箇所以外の「片岡庄内弘山押領分」は、この領域内に含まれる文字記載のない坪々に求めざるをえない。すなわち、これら空白の坪も片岡荘なのである。鶺鴒荘絵図が領域内でありながらここを空白としたのは、すでに支配の及ばない地域であると認識していたからにほかならない。

以上により、本来の片岡荘は、押領をうけていない「片岡（庄）」、押領を明記した「弘山押領」、そしてこの空白の坪を合わせた部分を荘域としていたと判断される。挿図378に片岡荘として示したのがその範囲であり、絵図に描かれた鶺鴒荘から片岡荘域を除いたのが同荘を包摂する以前の鶺鴒荘域と考えられるのである。

## 2. 片岡荘の立地

鶺鴒荘絵図から導かれた片岡荘の荘域を現在の地形図上におとしたのが本書4ページの挿図3である。この図に示されるように、片岡荘は林田川の両岸にまたがる荘園であった。むろん、中世と現在との河道の変化を想定しなければならないが、すくなくとも片岡荘域を林田川が通過していたことは確かであろう。そのことは、挿図377にみえる「河依」、「河成」、「河原」などの文字からもうかがうことができる。また『鶺鴒引付』によれば、永正6年（1509）5月、鶺鴒荘は「当庄片岡後」の「川防沙汰」をおこなった。これは、林田川の河防工事であろう。「河成」や「流田」といった絵図の記載も示すように、片岡荘東部とそれに接する鶺鴒荘西部のあたりが、中世を通じて直接に林田川の影響をうける地域であったことはあきらかである。本来ここは、野原（2条C坪）や河原が広がり、洪水の危険にさらされた安定度の低い土地が大半をしめていたと考えられる。それはおそらく、林田川右岸に立地していたと思われる片岡荘西部でも同様であろう。

挿図378<sup>②</sup>に示したように、片岡荘の周囲は、東に赤井を基幹用水とする鶺鴒荘があり、西に



挿図378 片岡荘周辺の荘園と水利

は小宅井に依拠する小宅荘が接する。また、鵜荘絵図で片岡荘の南に位置する弘山荘は現在の太子町阿曾に相当するが、ここは主として阿曾井の灌水域である。これらの荘園は片岡荘に比べ安定した立地環境にあり、それぞれいわば専用の用水を備え、その灌水域を荘域の中核とし

ているのである。それに対し片岡荘域は、小宅井、赤井など他荘の水利網の縁辺部を占めるにすぎない。片岡荘域は、おそらくその不安定性ゆえに周囲の荘域形成から取り残された、開発の遅れた地域であったと考えられるのである。

### 3. 片岡荘の開発

片岡荘に関する唯一の文書は、平治元年（1159）の「播磨国片岡荘夏畠内検帳」<sup>(3)</sup>である。これによれば、1町3段20代の夏畠に段別7升5合の麦などが賦課されている。文書に記された面積はけっして大きくはないが、片岡荘のような立地環境では、畠作がしめる比重はけっして小さくなかったと思われる。

従来、片岡荘についてはこの畠作以外に生産の具体相を知ることはできなかった。その意味で、福田片岡遺跡から12世紀の水田遺構が検出されたことは重要である。それは、この段階に片岡荘東部を含む河岸部まで水田開発が進展したことを意味している。鵜荘西辺部の開発が中央部より相対的にあたらしいことは、絵図のこの部分に散見する「治田」（挿図377）からもうかがうことができる。

現在、鵜荘域の大部分は赤井と呼ばれる用水によって灌漑されている。鵜荘絵図にその主流路が描かれているように、赤井は中世から鵜荘の基幹用水であった。水田遺構が検出された「片岡庄」（11条B坪）とその周辺は、主流路から分岐した片岡溝の灌漑域であるが、この溝は赤井の用水網のなかでもっとも西を流れる水路である。したがって、鵜荘西辺部から片岡荘にかけての開発は、用水体系としては赤井灌漑域の西への拡大としてとらえられるのである。

そこで注目されるのが、さきの内検帳にみえる「（片岡）庄司散位桑原」の存在である。桑原氏は播磨国衙の官人であり、12世紀段階には鵜荘下司職を有し、松尾などにも拠点をもつ開発領主であった<sup>(4)</sup>。桑原氏が関与する松尾、鵜荘、片岡荘をあわせると、赤井の灌漑域がすべておおわれることになる。開発領主としての桑原氏は赤井と密接にむすびついているのであり、灌漑域の拡大としての片岡荘の開発に同氏が関わっていることはまちがいあるまい。したがって、片岡荘の開発は、たんに同荘だけでなく、松尾（弘山荘）における赤井水利網の北への拡大、さらには今回の発掘調査であきらかにされた荒河井の付け替えを含めた、林田川左岸の開発と水利システムの問題として検討される必要があるように思われる<sup>(5)</sup>。

さて、片岡荘域における水田開発は、川沿いの不安定な地域も開発の対象に組み込まれてきたことを意味している。それがやがて三十数町以上の耕地を有するにいたるわけだが、それには林田川右岸における開発の進展も当然想定しなければならない。洪水の危険などが十分には克服されなかったにしても、この過程で片岡荘域がもつ意義は大きく変化したにちがいない。

鵜荘絵図に従うかぎり、片岡荘は平治元年（1159）以後建治元年（1275）以前の間には鵜荘に併合され、さらに大半を弘山荘に押領されるという経過を歩んでいる。弘山荘による鵜荘西部

(片岡荘域)の押領の要因として林田川の河道変化をあげる意見があるが、両荘の争いは、むしろ開発の進展による片岡荘域の重要度の変化に原因が求められるのではないだろうか。

鶯荘絵図には、片岡荘の南に接して弘山荘が描かれている。鶯荘に西接する弘山荘は、はじめに阿曾井の灌漑域を中核として荘域を形成し、さらに北の片岡荘域に勢力を伸長したことになる。すでに建治元年当時、弘山荘による片岡荘域支配は既成事実化していた。それから1世紀をへた「播磨国弘山荘実検絵図」(永徳2-1382年)は、片岡荘域のほぼすべてを弘山荘域そのものとして表現し(挿図377)、片岡荘は図中に何の痕跡もとどめていないのである。

(小林基伸)

#### 註

- (1) この点については、拙稿「播磨国の開発領主に関する一考察」(兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』創刊号 1989年)に詳述したので参照されたい。
- (2) 鶯荘、弘山荘、小宅荘の各絵図から荘域を復原すると相互に重複する部分があり整合しない。挿図378は、荘園の位置関係と水利を示すための模式図である。
- (3) 平安遺文3016号。
- (4) (5) 前掲拙稿および「松尾の開発と荘域」(『播磨国鶯荘現況調査報告』Ⅳ 1991年太子町教育委員会)参照。



## 第2節 県下の輸入陶磁器

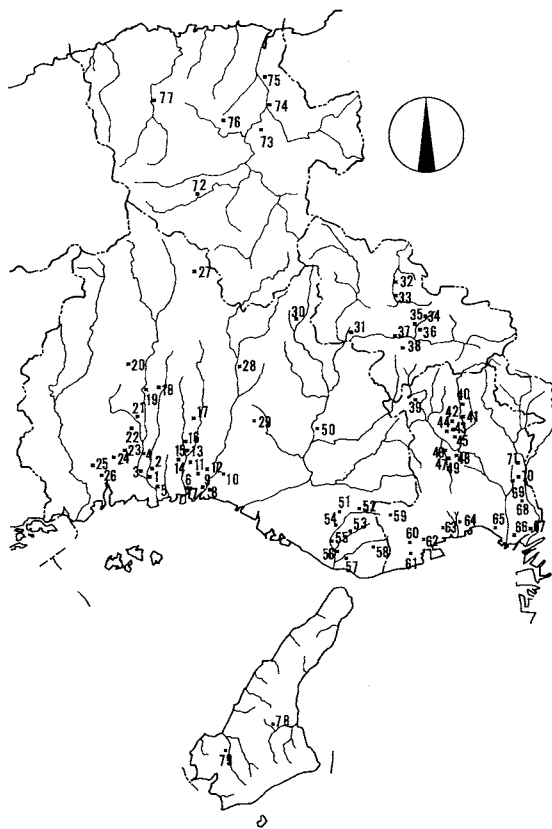
兵庫県下の輸入陶磁器を出土した遺跡の状況

県下で現在まで知られている輸入陶磁器を出土した遺跡は80数遺跡を数える。遺跡の種類としては、集落跡、居館跡、山城、平城、城下町、荘園遺跡、寺院跡、経塚などが含まれている。また、時期的には10世紀の前半から17世紀の前半に至る700年間に及んでいる。

ここでは、時代を追って、時期をⅠ期～Ⅷの8時期に区分し、それぞれの時期の通称のありかた及び出土遺物のありかたについて若干触れてみたい。

### Ⅰ期（9～10世紀）

全国的にもそうであるが、この時期に属する輸入陶磁器を出土した遺跡は、県下でも非常に少ない。現在までに知られている遺跡としては、日高町襦布ヶ森西遺跡、三田市対中遺跡、川西市栄根遺跡、龍野市小犬丸遺跡、相生市下土井遺跡の計5遺跡があげられるに過ぎない。この内、日高町襦布ヶ森西遺跡からは邢州窯産と考えられる白磁の輪花碗及び越州窯系の青磁碗が、須恵器、土師器と相伴している。報告者は、この遺跡の性格を官衙もしくは官衙的性格をもった建物郡と考えており、この時期の出土例としては、注目に値する遺跡である。また、龍野市小犬丸遺跡も、古代山陽道布施駅の有力な推定地であるが、ここから出土しているのは僅かに越州窯系の青磁碗の破片が数点であるに過ぎない。相生市下土井遺跡からは高台を蛇ノ目状に成形する越州窯系青磁碗がほぼ完形で出土している。しかし、ここでも越州窯系と考えられるものはこの一点のみで、遺鉢の性格も、集落跡と考えられるだけで特殊な性格は認められない。三田市対中遺跡は奈良時代から中世に至る大規模な集落跡で、あるいは官衙的性格をもつものとも考えられる。しかし、出土した輸入



挿図379 兵庫県輸入陶磁器出土遺跡分布図

陶磁器は白磁碗のAⅠ類からAⅣ類、白磁皿のAⅠ類からAⅦ類が大部分を占め、越州窯系青磁と考えられるのは僅かに碗の破片が一点あるに過ぎない。あるいは越州窯系の青磁としても、時期の下がるものかも知れない。川西市栄根遺跡からも、10世紀前半に遡ると考えられる越州窯系青磁碗片が出土している。しかし、この遺跡の主要な遺構は弥生時代に属しており、また、この青磁碗に共伴する時期の遺物は認められない。

上記のように、県下では、邢州窯産の白磁及び越州窯系の青磁碗が5遺跡で確認されているがこの内、最も注目されているのは禰布ヶ森西遺跡の出土例である。この時期の輸入磁器は官衙あるいは寺院跡等に限られている。先にも述べたように、禰布ヶ森西遺跡は官衙的性格を強くもった遺跡であり、このことは全国的なこの時期の輸入磁器の受容のされかたと同様である。

## Ⅱ期（11～12世紀中葉）

森田 勉氏によると太宰府あるいは博多遺跡群では11世紀前半からAⅠ～AⅦ類の白磁碗・皿が出土し、12世紀前半には、大量に受容されるとされている。

しかし、県下では、現在の所、11世紀代あるいは12世紀前半に遡る輸入磁器の出土例は知られていない。その一つの要因として、在地の土器の編年の研究の遅れが指摘される。

県下で時期決定を行う際のメルクマールになるものとして、東播系須恵器がある。東播系須恵器の内、特に神戸市神産のものについては、12世紀前半にまで遡る可能性が考えられているが、現在の所、確実に12世紀前半の東播系須恵器に伴う輸入磁器は確認されていない。

最近、近畿自動車道舞鶴線建設に伴う発掘調査で10世紀から12世紀に至る丹波地域の須恵器生産のあり方が解明されつつある。今後、これら在地の土器の編年研究に伴って11世紀から12世紀前半に至る輸入磁器を抽出できる可能性が考えられる。

## Ⅱ期（12世紀後半～13世紀前半）

県下における輸入磁器の受容は、このⅢ期に至って急激に増大し一つのピークを迎える。

輸入磁器を出土する遺跡の種類も、又輸入磁器の種類も非常に多彩となる。ここでは、集落跡、墓、経塚の順に概要を述べる。

### ①集落跡

集落跡には、多紀郡西紀町西木之部遺跡、宍粟郡安富町安富中学校前東遺跡、龍野市宝林寺北遺跡・福田天神遺跡、姫路市本町遺跡、三田市南台遺跡・下深田遺跡・対中遺跡、神戸市宅原遺跡・山田小学校内遺跡、尼崎市金楽寺貝塚、洲本市寺中遺跡、加東郡家原堂ノ前遺跡、豊岡市福成寺遺跡などがあって但馬から淡路までの全県下に広く分布している。しかし、分布の密度を見ると、播磨地区（特に西播磨）、摂津地区、丹波地区、但馬地区、淡路地区の順で、特に丹波、但馬、淡路の3地区では、その分布が疎らである。

出土通物には白磁碗AⅠ～AⅢ類、白磁皿AⅠ～AⅣ類、同安窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同安窯系青磁皿Ⅰ～Ⅲ類、龍泉窯系青磁碗AⅠ・AⅡ類、BⅠ～BⅢ類、CⅠ・CⅡ類、それに極少

量であるが褐釉陶器などが含まれている。このような輸入磁器を出土する遺跡は、県下では概ね12世紀後半から13世紀前半の遺跡として報告される事が多い。

ただし、出土遺物を詳しく検討してみると、これらの遺跡は、3ないし4つのグループに区分する事ができる。すなわち、白磁の比率が高く、青磁の比率の低い遺跡（対中遺跡・寺中遺跡）、白磁と青磁の比率がほぼ等しい遺跡（福田天神遺跡・金楽寺遺跡）、青磁が出土遺物の主体となっている遺跡（家原堂ノ前遺跡・南台遺跡）などである。但し、これは、報告書に掲載されているものを算出したものであって、全出土量を計算したものではない。ただ、Ⅲ期に属すると考えられている遺跡には、出土遺物に相違のあることを指摘しておきたい。

## ②墓

この時期には、輸入磁器を土壙墓あるいは木棺墓に副葬する例が非常に多い。

輸入磁器を墓に副葬する遺跡としては、養父郡大屋町蔵垣遺跡、氷上郡春日町多利・前田遺跡、宍粟郡山崎町河東遺跡、龍野市福田天神遺跡・宝林北遺跡、揖保郡太子町川島遺跡、神戸市神出東遺跡、宅原遺跡、三由市下所遺跡・庵ノ谷中世墓などがある。

これらの墳墓では、輸入磁器を単一、もしくは複数、あるいは須恵器・土師器など在地の土器を伴って埋葬しているが、白磁と青磁あるいは、同安窠系青磁と龍泉窠系青磁、あるいは龍泉窠系青磁のA類もしくはB類、C類といった違った種類の組合せで副葬することはない。

例えば、福田片岡遺跡では白磁碗AⅡ類と白磁皿AⅠ類を、多利・前田遺跡では白磁の合子、小壺、皿を、宅原遺跡では龍泉窠系青磁碗CⅢ類を、神出東遺跡で龍泉窠系青磁碗BⅡ類を、副葬している。

このことから考えて、墳墓のように一括埋葬される輸入磁器には一定のセットが存在したものと考えられる。

## ③経塚

この時期に属する経塚も現在まで、県下で知られているもの60数遺跡ある。この内、輸入磁器を伴うものには、西紀町上板井経塚、加西市江ノ上1号経塚、神戸市滝ノ奥経塚、姫路市書写経塚、氷上郡山南町立石経塚、姫路市宮山第1経塚・甲山経塚、宍粟郡一宮町瀧の内経塚などがある。いずれも、平安時代後期から鎌倉時代前期つまり、ここでいうⅢ期に時期が求められている。出土した輸入磁器には、青白磁合子・壺、白磁合子・皿・碗などがあり、青白磁の合子・壺が大部分を占め、白磁の合子・壺がこれに次ぎ、青磁は僅かに1点のみである。

上記のように、県下ではⅢ期つまり12世紀後半から13世紀前半の時期に至ると、輸入磁器の受容が急激に増大し、又それらは、官衙的施設のみならず一般の集落にも及び、又墓あるいは経塚などへの副葬も増大する事が分かる。しかし、Ⅱ期には殆ど見られなかった輸入磁器が、Ⅲ期に至って何故に急激に増大するのか、全国的な傾向と軌を一つにするとは言え、この減少には奇異な点が少なからずある。

先にも触れたように、集落遺跡から出土する輸入磁器には白磁を主体とするもの、白磁と青磁がほぼ同一量のもの、青磁が主体となるものが指摘される。又、墓出土のものでは、白磁の合子・小壺など経塚の副葬品と同一の傾向を示すもの、白磁AⅡ類あるいはAⅣ類を副葬するもの、同安窯系青磁を副葬するもの、龍泉窯系青磁のA類を副葬するもの、B類を副葬するもの、C類を副葬するものなどがあり、青磁と白磁と一緒に副葬するものは認められない。このことから、Ⅲ期に比定されているものの中には、Ⅱ期の範囲即ち11世紀から12世紀前半の時期に入るものもあるのではないかと考えられる。このことは、今後、在地の土器の編年研究が進んだ上で、もう一度、検討してみたい。

#### Ⅳ期（13世紀中頃～14世紀中頃）

この時期の輸入磁器を出土する遺跡はⅡ期に比べると若干減少する。というよりは、むしろ、同一の遺跡内であっても、この時期の遺物は減少する傾向がある。

この時期になると白磁ではA類に代わってB類が出現し、龍泉窯系青磁ではA類、B類が姿を消し、CⅠ類～CⅤ類の蓮弁文碗が主流を占めるようになり、又、褐釉壺・青磁盤・天目碗・青白磁梅瓶なども少量ながら含まれるようになる。

出土する遺構としては、墓出土のものが激減し、代わって集落内の溝あるいは、館跡の堀等からの出土が顕著になる。又、経塚も殆ど造られなくなる。

この時期の輸入磁器を出土した遺跡には、大屋町蔵垣遺跡、龍野市福田天神遺跡・宝林寺北遺跡、姫路市加茂遺跡、川西市満願寺跡などがある。

#### Ⅴ期（14世紀後半～15世紀）

この時期の輸入磁器は白磁では、碗AⅩ類、皿AⅥ・Ⅶ類、青磁では龍泉窯系碗のAⅡ・AⅢ類、BⅤ類、CⅥ・CⅦ・CⅧ類、皿Ⅰ・Ⅱ類が主流を占めるようになる。しかも、これらの遺物を出土する遺跡の種類は山城あるいは館跡に限定され、その出土量もそう多くはない。これらの輸入磁器を出土した遺跡には、龍野市城山城跡、姫路市書写坂本城跡・御着城跡・英賀城跡・加茂遺跡、芦屋市三条岡山遺跡、神戸市如意寺塔頭跡、水上郡春日町河津館跡、多紀郡丹南町初田館跡などがある。この時期の遺跡の特徴としては、遺跡数は多いものの、個々の遺跡での輸入磁器の出土量が非常に少ないという事である。この内、嘉吉3年（1443）年、嘉吉の乱で、廃絶した事が文献上で確認される城山城跡では、大規模な発掘調査は行われていないが、近年、城山城調査団による分布調査が実施され、白磁AⅤ・AⅦ類、龍泉窯系青磁碗CⅥ・CⅦ・CⅧ類、香炉、天目碗などが採集され、この時期の良好な資料として注目される。

#### Ⅵ期（15世紀後半～16世紀後半）

この時期になると、それまで輸入磁器の主流を占めていた白磁・青磁に加えて、青花磁器が大量に搬入される様になり、出土量も飛躍的に増大する。この時期は、Ⅲ期と並んで、県下における輸入磁器の受容が2番目のピークを迎える時期と言える。但し、輸入磁器を出土する遺

跡の種類はⅢ期程豊富でなく、ほぼ館跡、山城・平城跡に限られる。

出土遺物には、森田分類白磁皿E群、白磁AⅦ類、青磁碗CⅨ類・D類、青磁皿Ⅱ類、青花碗・皿などがある。これらの遺物を出土した遺跡には、美方郡村岡町福西遺跡、飾磨郡夢前町置塩城跡、姫路市御着城跡・加茂遺跡・姫路城内遺跡、伊丹市有岡城跡、多紀郡西紀町内場山城跡、丹南町初田館跡、氷上郡春日町河津館跡、三田市釜屋城跡・中尾城跡、相生市感状山城跡、龍野市龍野城跡、豊岡市尼城跡などあって、淡路を除く県下全域に分布している。ただ、分布の中心は現在の所、姫路市域を中心とした西播地区に集中しており、特に御着城跡では、白磁皿E群、白磁皿AⅦ類、青磁碗CⅨ類・DⅠ類などと共に大量の青花磁器が出土している。又、特別史跡姫路城跡内でも史跡整備等に伴う調査が、現在まで、数10次にわたって行われており、池田輝政築城以前の羽柴秀吉による初期城下町の状況が漸く明らかになりつつある。これらに伴って、瀬戸・美濃系の陶器と共に、呉須絵、赤絵等の16世紀後半代の輸入磁器が大量に出土している。

#### Ⅶ期（17世紀前半以降）

17世紀前半以降になると、肥前系の陶磁器が出現し、それらが中国製の陶磁器にとって代わることになるが、この時期については、最近まで、その実態は解明されていなかった。

近年、大坂城二ノ丸、あるいは堺環壕集落の調査を通じて、初期の肥前陶磁器に伴う輸入時期が漸く抽出されるようになり、その実態が解明されつつある。

県下では、先程述べたように、姫路城内遺跡、あるいは伊丹市有岡城跡、明石市明石城跡などの調査を通じて、この時期の輸入磁器が抽出されるようになってきた。ただ、まだ調査が継続中のものが多く、正式の調査報告書が刊行されたものは殆どないが、報告がなされているものとしては、県立博物館建設に伴う調査で出土した天啓青花芙蓉手昆虫図皿がある。

また、17世紀前半以降、肥前系陶磁器が主流を占めるようになった以降も輸入磁器の受容は少量ながら続いたようで、姫路城内遺跡では18世紀以降も新渡物と呼ばれる清代の青花磁器が搬入されていた事が確認されている。

以上、県下の輸入磁器の出土状況について、その概要を述べて来たが、以下これをまとめると次の項目にまとめられる。

1) 県下の輸入磁器の受容は少なくとも10世紀前半には始まっている。ただこの時期の搬入量は非常に少なく、出土遺跡も官衙もしくは官衙的性格をもった遺跡に限られる。

2) Ⅱ期すなわち11世紀前半から12世紀中葉の時期は、輸入磁器の受容の空白期である。現在の所、確実にこの時期のものと考えられる輸入磁器は確認されていない。ただ、この時期は輸入磁器のみならず、在地の土器の編年作業の進展に伴ってこの時期の輸入磁器の抽出が可能となる可能性は充分考えられる。

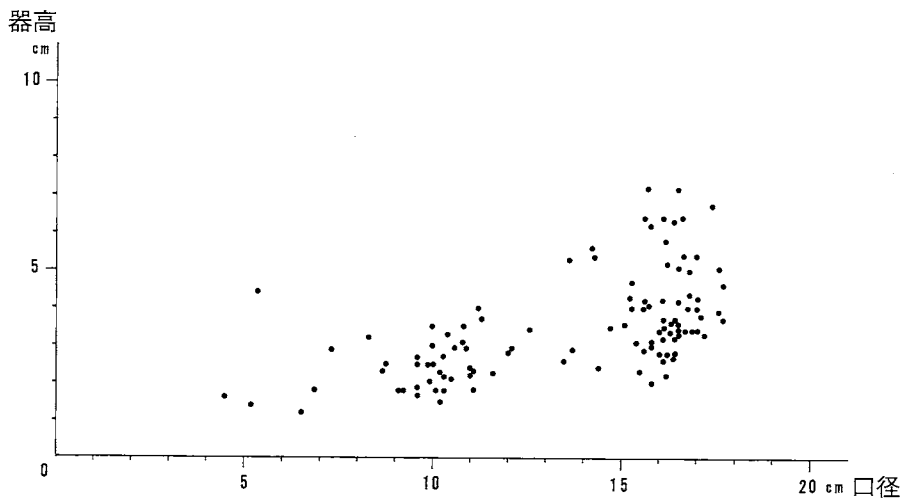
3) Ⅲ期すなわち12世紀後半から13世紀前半にかけての時期は、輸入磁器の受容は1回目の

ピークを終える。また出土地も集落のみならず、墓、経塚等にも多量の輸入磁器が副葬されている。ただ、Ⅲ期と報告されている輸入には、その出土のあり方に相違が認められ、今後この時期のものがさらに細分されるか、あるいは一部が先行するⅡ期に組み入れられる可能性がある。

4) Ⅳ期すなわち、13世紀中頃から14世紀中頃の時期は輸入磁器の受容がⅡ期に比べると減少する。このことは、この時期になると墳墓あるいは経塚への副葬が激減し、集落内での出土が、その大部分となることとも関連する。又、白磁の比率も少なくなり、ほぼB類に限られるようになる。青磁では、A類、B類に代わってC類の比率が増し、さらに盤などの大型製品がこれに加わるようになる。又、少量ではあるが、青白磁梅瓶、褐釉壺、天目碗なども含まれる。

5) Ⅴ期すなわち14世紀後半から15世紀の時期は輸入磁器の出土地は、山城、城館に限られる様になり、Ⅳ期に僅かに残っていた墳墓への副葬は殆ど見られなくなる。又、各遺跡での出土量もⅣ期と比べてもさらに少なくなる。白磁も少量ながら碗AX類、皿AⅥ・AⅦ類が出土しているが、主流は完全に青磁に移り、碗AⅡ・AⅢ・BⅤ・CⅥ・CⅦ・CⅧ類、皿I・Ⅱ類が多く含まれている。また、この他にⅣ期に引き続き青磁香炉、天目碗などの出土が認められる。

6) Ⅴ期すなわち15世紀後半から16世紀後半の磁器は、輸入磁器の受容が再び急増し、Ⅲ期に次いで輸入磁器受容の2度目のピークである。



挿図380 福田片岡遺跡出土輸入陶磁器の法量

### 第3節 小結にかえて

これまで福田片岡遺跡について、発掘調査から出土品整理を経て、①地理的環境の復原、②文献や水利の分析から中世荘園の復原検証など、③掘立柱建物・区画溝・方形館・墓・井戸・山陽道などの遺構と④土師器・須恵器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器、瓦・埴、土錘・鞆羽口など土器・土製品と金属製品、木製品、石製品など遺物を少し分析し述べてきた。

最後に1. 井戸の変遷について、2. 中世の土器について、3. 福田片岡遺跡の遺構の変遷について若干の考察を行い、結びにかえる。

#### 1. 井戸の変遷について

これまでの井戸の研究を踏まえて、石積み井戸について検討を加える。井戸を分析するに①井側、②水溜施設、③掘り方、④水位などの要素がある。部分的な調査に終わったSE11・SE16や特殊な埋納状況を示すSE08なども含め、本遺跡の中世井戸は井側は石積みである。

ここで江戸時代以降の井戸も含め、表23井戸集成を試みた。

まず、井側については、遺構の記載で分類したように、A型にはSE04があり、Aa型となり、掘り方は小さく、Ⅲ期に属する。

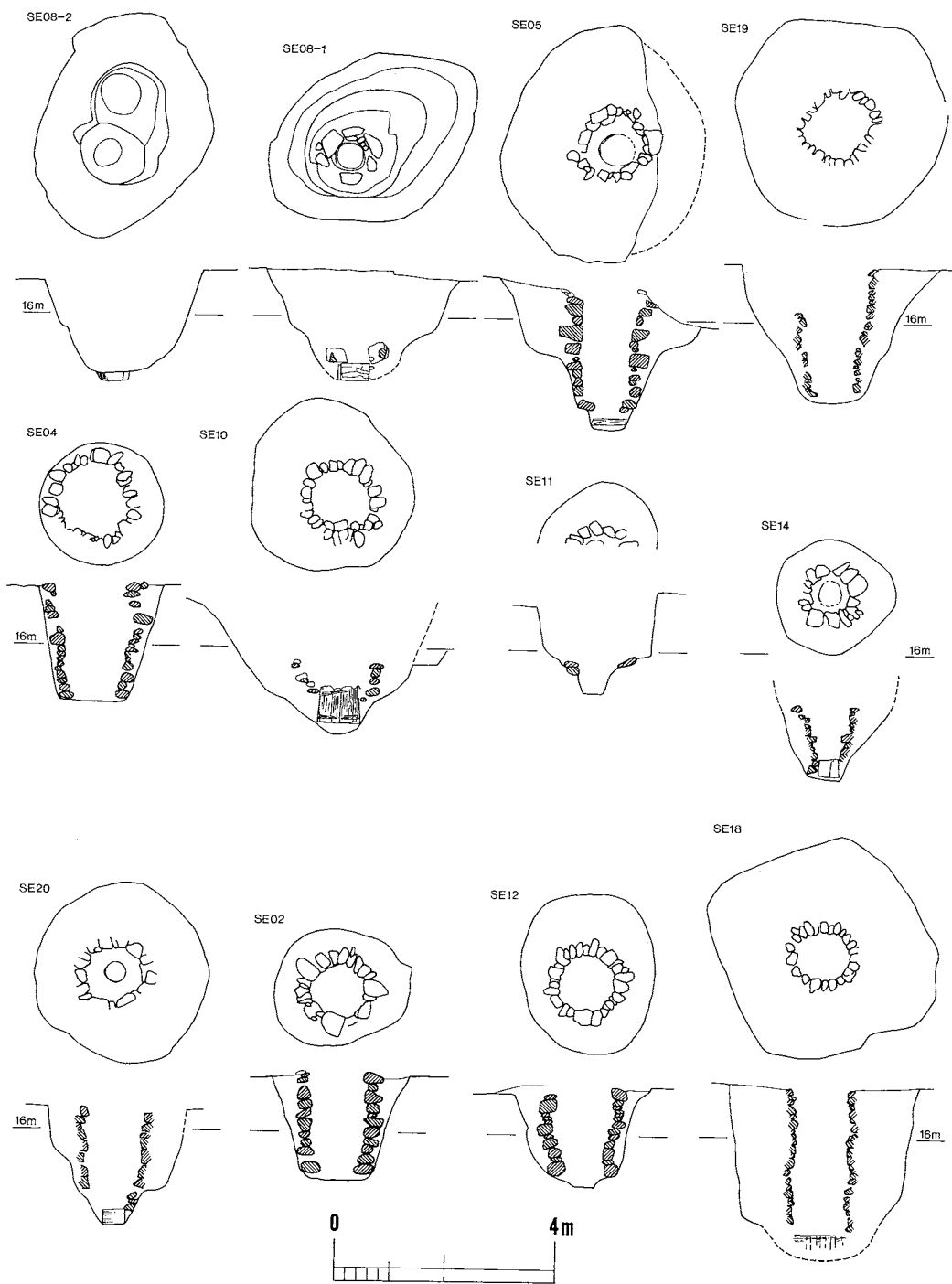
B型にはBb型のSE12、SE14とSE19がある。SE14はBbイ型でⅣ期、SE19はⅡ期、SE12はⅣ期に属する。また、Bc型にはBcイ型のSE05とSE16がある。SE05はⅡ期、SE16はⅢ期に属する。

C型にはCaイ型のSE13、Cb型にはSE03とSE06があり、SE06はCbウ型となる。また、Cc型にはSE02、SE20があり、SE20はCcイ型である。SE02・SE20はⅣ期、SE13はⅤ期、SE03はⅥ期、SE06はⅥ期に属する。

D型はSE01とSE18があり、Ⅵ期に属する。

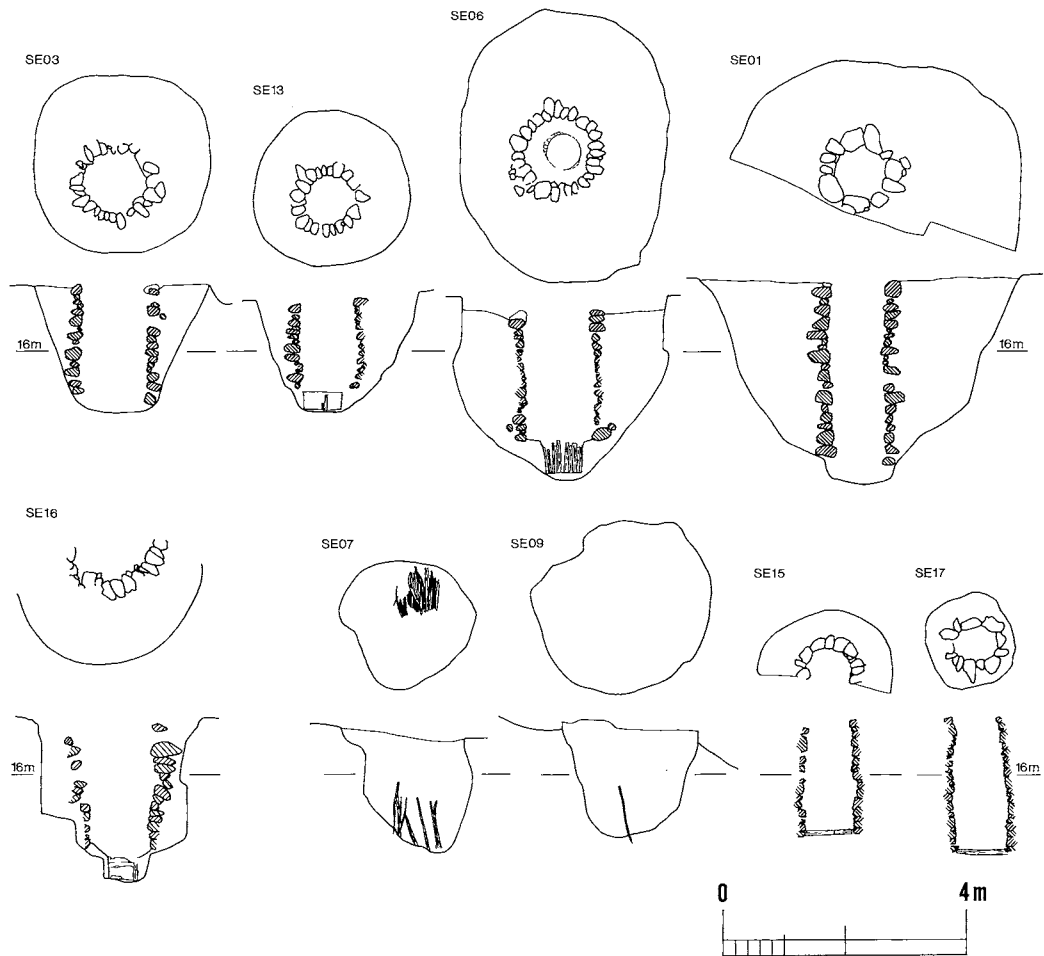
井側と水溜施設の分類からの試みた形態分類ではあるが、B型・A型は古相でC型、D型へ移り変わるようである。ただ最も古いと考えるSE08の井側の形状が不明ではある。水溜施設が曲物桶から結桶へと変わるの桶の変遷史からも言える。

また、挿図381・382に見るとおり、水位高が16.0mと浅い井戸はSE11、15.5mの井戸はSE02・SE03・SE08・SE10・SE13があり、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期に属し、15.0mの井戸はSE04・SE19・SE20があり、Ⅱ・Ⅳ期に属し、14.5mと深い井戸は、SE01・SE05・SE06・SE12・SE18があり、Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ期に属しており、地形環境により、水位は変わるが、概ね時期が新しくなると水脈が変わり深くなる傾向にある。水位の関係で掘り方が深くなる新しい井戸は、平面形も深さに比例して、掘り方径も大きくなる。ただし、江戸時代以降の井戸では、SE15・SE17に見るように井戸掘り技術の進歩から極端に掘り方径は狭くなる。



挿図381 井戸集成 (1)





挿図382 井戸集成 (2)

## 2. 中世の土器について

中世の遺物の項で十分に述べる事ができなかったので、福田片岡遺跡の中世土器消費地としての傾向を若干述べる。

福田片岡遺跡の中世土器からみた特徴は、①輸入陶磁器の多様性、②備前焼など国産陶器の古相からの消費、③土師器鍋・羽釜の鉄製品模倣変遷などがある。

### ①輸入陶磁器の多様性

中世の遺物の項と兵庫県下の輸入陶磁器についても詳述されているが、福田片岡遺跡では、その消費は墓・屋敷・方形館で異なるが、傾向としては (1) 白磁主体、(2) 青磁主体 (少量の青白磁)、(3) 白磁・青磁主体、(4) 青磁主体 (少量の白磁)、(5) 青磁主体 (少量の白磁・

表24 井戸集成

(単位: cm)

井戸 番号	地区	時期	井側形態	根太 有無	石積高	上径	下径	掘り 方径	掘り方 深さ	溜水 施設	径	高さ	裏込	水位 (m)	遺物	備考
SE01	C1	VI	Dc型	無	310	145	140	525	340	有・曲物				14.5	○	
SE02	C1	IV	Cc型	無	190	155	130	250	190	無				15.5	○	
SE03	C1	VI	Cb型	無	195	145	145	285	210					15.5	○	
SE04	C1	III	Aa型	無	215	175	125	225	215	無				15.0	◎	
SE05	C1	II	Bcイ型		225	165	105	285	280	有・曲物	65	35	無	14.5	○	
SE06	C1	VI	Cbウ型	有	215	160	160	340	305	有・結桶	65	50	有	14.5	○	
SE07	S1	VII			無			225	215					15.5		
SE08-01	S1	I								有・曲物				15.5	○	切り合い
SE08-02	S1	II	イ型		45+	115	110	345	200	有・曲物	55	35		15.5	○	除去埋め戻し
SE09	S1	VII			無			290	205					16.0		
SE10	C1	III	ア型		65	165	130	290	245	有・曲物	75	60		15.5	○	
SE11	C1				50	130	80	215	180	有・曲物	55	40		16.0		
SE12	S2	IV	Bb型	無	170	145	125	235	185					14.5	○	
SE13	S2	V	Caイ型	有	160	135	135	260	200	有・曲物			有	15.5	○	
SE14	S3	IV	Bbイ型		150	125	55	215		有・曲物	35	40		14.5	○	確認トレンチ
SE15	S3	VII		有	190	70	80	220		無				15.5		
SE16	C3	III	Bcイ型		200	120	100	260	280	有・曲物	50	50		14.5	○	部分調査
SE17	S3	VII		有	225	70	80	145		無				15.0		
SE18	S3	VI	Dc型	無	265	105	105	400	315	有・曲物				14.5	○	
SE19	S3	II	Bb型	無	245	125	75	370	245	無				15.0	◎	
SE20	S3	IV	Ccイ型	無	190	145	90	315	280	有・曲物	40	20		15.0	○	

井戸の時期区分について

I : 12~13世紀、II : 13世紀代、III : 14世紀代、IV : 14~15世紀代、V : 15世紀中~後半代、  
VI : 16世紀代、VII : 17~20世紀代

青花) が考えられ、(1) は12世紀代まで、(2) は12世紀～13世紀代、(3) は13世紀後半～14世紀前半、(4) は15世紀前半から15世紀後半、(5) は15世紀後半～16世紀代へと変わる。他に少しの施釉陶器や朝鮮製のものがある。

### ②国産陶器の古相からの消費

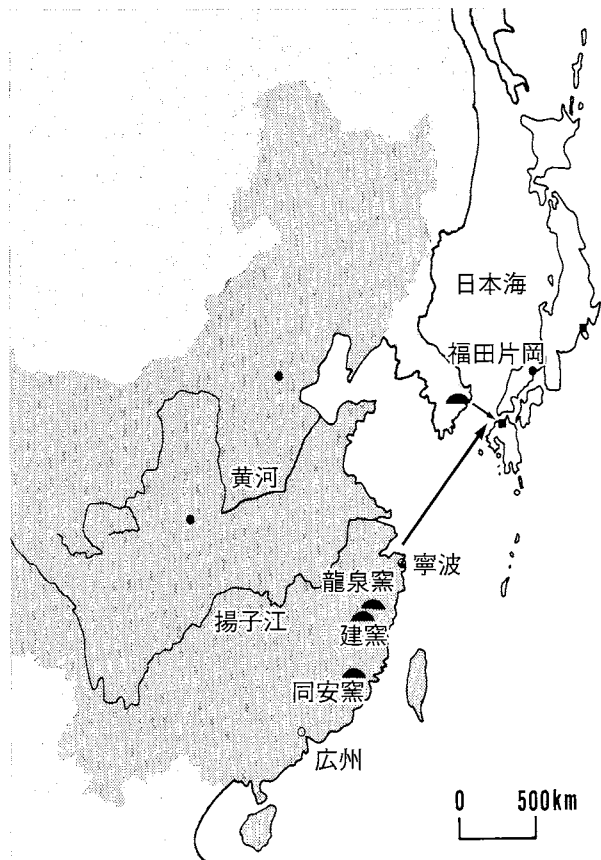
古くは法隆寺領播磨国鵜荘園に位置し、揖保川・林田川の水運と筑紫大道（中世山陽道のバイパス）建設による交通・交易の中枢部となっていることから、備前焼（椀・播鉢・壺・甕）、常滑焼（壺・甕）、瀬戸焼（おろし皿）などが早くから消費されている。墓に副葬するものや骨蔵器と使用するなど特殊な物だけではない。

特に備前焼播鉢の消費は南北朝期までの東播磨魚住焼捏ね鉢の消費優先の様相から、以後、備前焼が質の向上と商圈の拡大に成功し、魚住焼捏ね鉢を凌駕することで魚住焼窯生産の終焉を迎える様子が、ここ福田片岡の方形館への質の転換と逆行することでも読み取れる。備前の播磨への支配を暗示するものでもある。

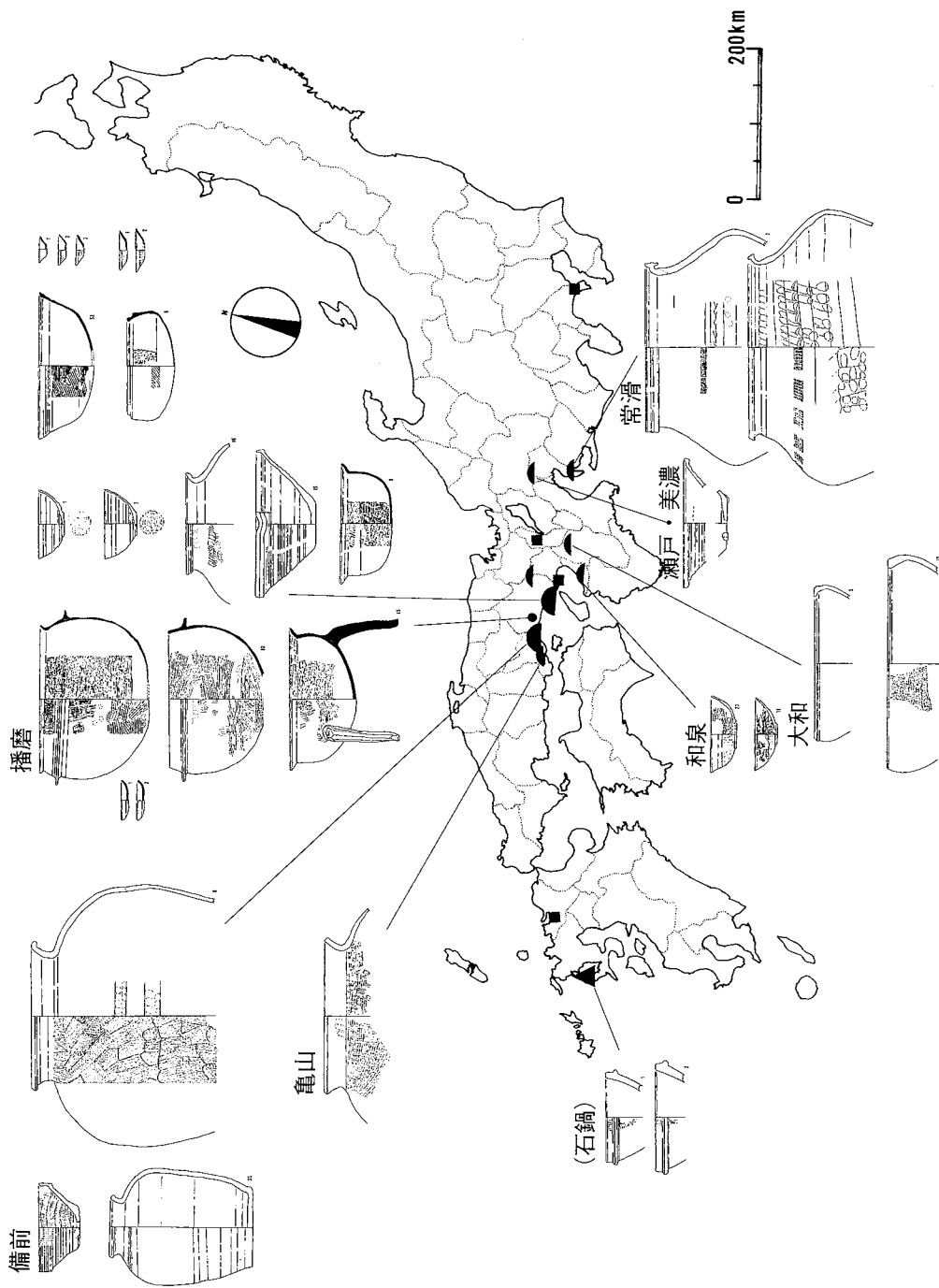
茶道具（天目茶碗）・仏具（花瓶・盤）における瀬戸焼、瀬戸・美濃焼製品の消費は他の中世遺跡と同じ傾向にある。香炉や火鉢も同様に大和産製品の消費がある。

### ③土師器鍋・羽釜の鉄製品模倣変遷

地元生産性の強い土師器が、(1) 皿にみる京都系生産技術の導入、(2) 鉄製品模倣の羽釜や鍋生産における丁寧な仕事が、東播磨・丹波系のタタキ手法の導入を盛んに行う画期が14世紀末～15世紀前半にあり、変質をとげ、新しい器形も生み出していく。さらに以後、羽釜は法量の矮小化が進み、やがて鑊釜の本来の特性を失い、鍋との区別を使用において無くしてしまう。



挿図383 福田片岡遺跡と輸入陶磁器



挿図384 福田片岡遺跡と中世の物流

### 3. 福田片岡遺跡の遺構の変遷について

福田片岡遺跡の調査された遺構から、その変遷を辿ってみる。

#### I. 弥生時代中期の集落

遺跡の北端のN<sub>1</sub>B地区・N<sub>3</sub>地区で弥生時代中期の2棟の住居跡と4基の土壙がある。

林田川中流域の弥生時代中期集落の一端を明らかにした。

#### II. (弥生時代後期から)古墳時代初頭の集落

微地形の復原からN地区・C<sub>1</sub>地区・C<sub>4</sub>地区でも土器群を発見しているが、C<sub>2</sub>地区において谷状地形と環状石組と大量の土器が出土しており、当時の集落の一端を示している。

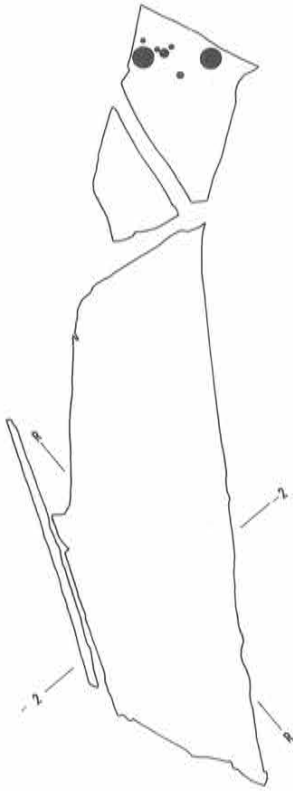
#### III. 奈良時代の灌漑用溝と水田

S<sub>3</sub>地区Ⅲ面では発見した平安時代荒河井堰以前の水路とC<sub>4</sub>地区やS<sub>3</sub>・S<sub>4</sub>地区の水田がある。

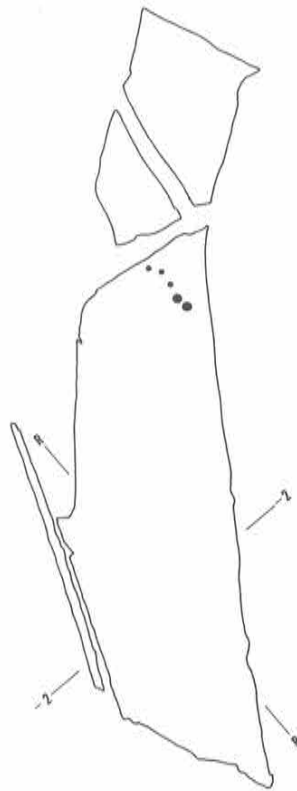
#### IV. 平安時代後期の墓、荒河井堰と水田

S<sub>3</sub>地区・S<sub>4</sub>地区に広がる。木棺墓S<sub>3</sub>ⅡSX01・S<sub>3</sub>ⅡSK01と供養塔S<sub>3</sub>SK98など墓の広がりやS<sub>3</sub>

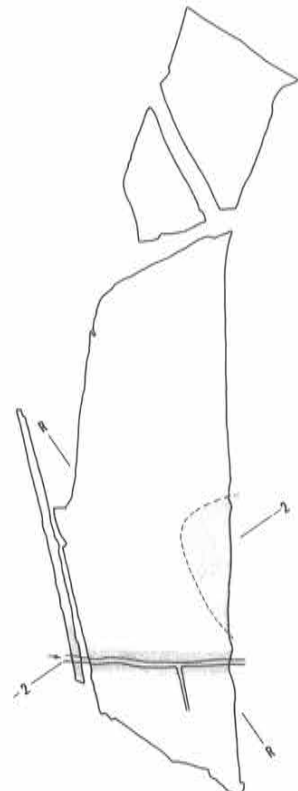
#### I 弥生時代中期



#### II 弥生時代後期～古墳時代前期



#### III 奈良時代～平安時代後期



挿図385 福田片岡遺跡 I～Ⅲ期

地区東とS<sub>4</sub>地区にまたがる水田が広がる。S<sub>3</sub>地区では、人と牛の足跡と水田の端の回耕状況が判る犁跡がある。堀立柱建物のうちSB79が異方向を示している。

#### V. 鎌倉時代初頭の屋敷

「鶴荘絵図」の9条A坪、同墓廻石丸屋敷の比定地に方形区画溝の屋敷がある。SD3044とSD3060の溝で囲まれた建物SB04と建物SB06・SB07・SB11・SB13～SB17、SB20～SB22とSB31がある。また南区にSE08がある。

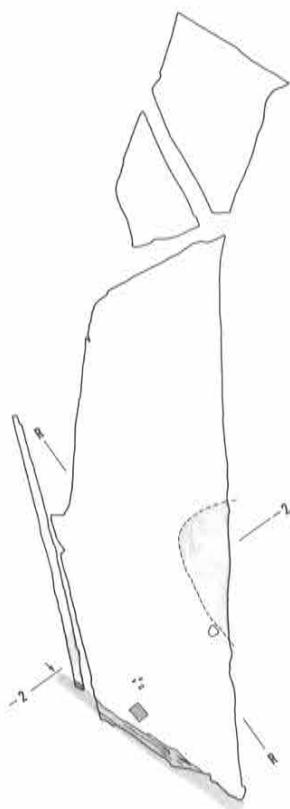
#### VI. 鎌倉時代の屋敷と墓

石丸屋敷の建替え、SD3045で囲まれた屋敷、建物SB05、SB03、SB12、SB18、SB19と土塙墓群がある。井戸SE05、SE19がある。

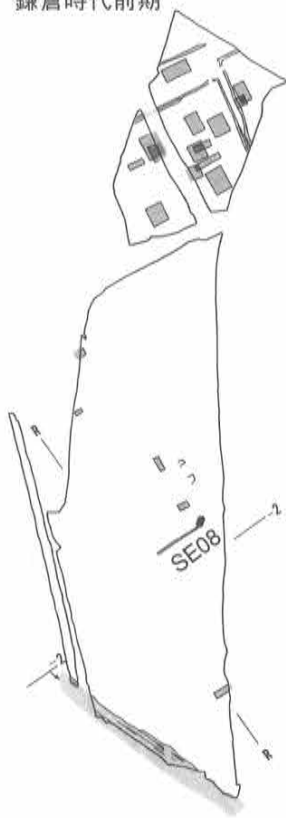
#### VII. 14世紀から15世紀前半にかけての屋敷・満願寺

「鶴荘絵図」10条満願寺と10条・11条間朱書の「筑紫大道」がある。満願寺は方形区画溝SD16・SD17などで囲まれた建物SB50・SB54・SB58・SB59・SB63・SB65などとSE02、SE04

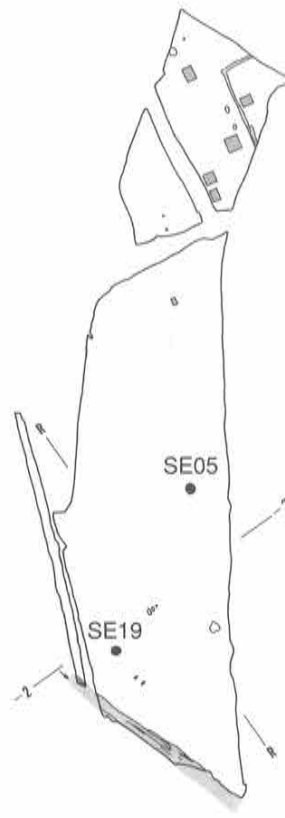
#### IV 平安時代後期



#### V 平安時代～ 鎌倉時代前期



#### VI 鎌倉時代



挿図386 福田片岡遺跡IV～VI期

と火葬跡SX01と墓SK11～SK15がある。「筑紫大道」の南には井戸SE12、SE14、SE20を中心とした屋敷群があり、北の9条にも方形区画溝で囲まれた屋敷がある。

Ⅷ. 15世紀後半から16世紀前半の方形館跡・片岡荘

福田片岡の水田呼称に残る蔵人堀廻・中町に堀で囲まれた方形館群、①井戸SE01を中心に内堀で囲まれた方形館と②SE06を中心に外堀・東西堀で囲まれた方形館と「鶴荘絵図」にみる11条B坪の片岡庄の堀とSD01で囲まれた屋敷群がある。SE18とSE13を中心とした建物がある。

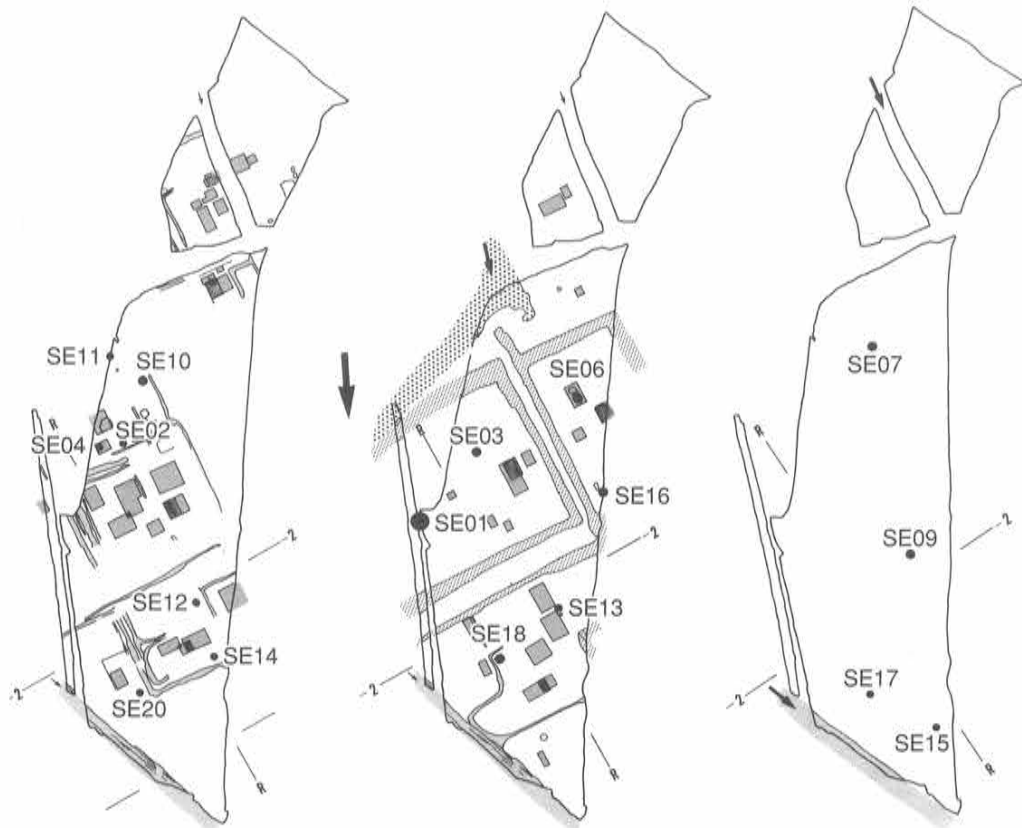
Ⅸ. 江戸時代以降の水田経営と井戸

片岡溝や荒河井の水利から、特に自然堤防が高く形成されたところの井戸SE15・SE17の石組井戸と低地のSE07・SE09の木杭組み井戸に分かれるが、いずれも江戸時代以降の水田と高畑経営を物語る。

Ⅶ 室町時代前期

Ⅷ 室町時代後期

Ⅸ 江戸時代以降



挿図387 福田片岡遺跡Ⅶ～Ⅸ期

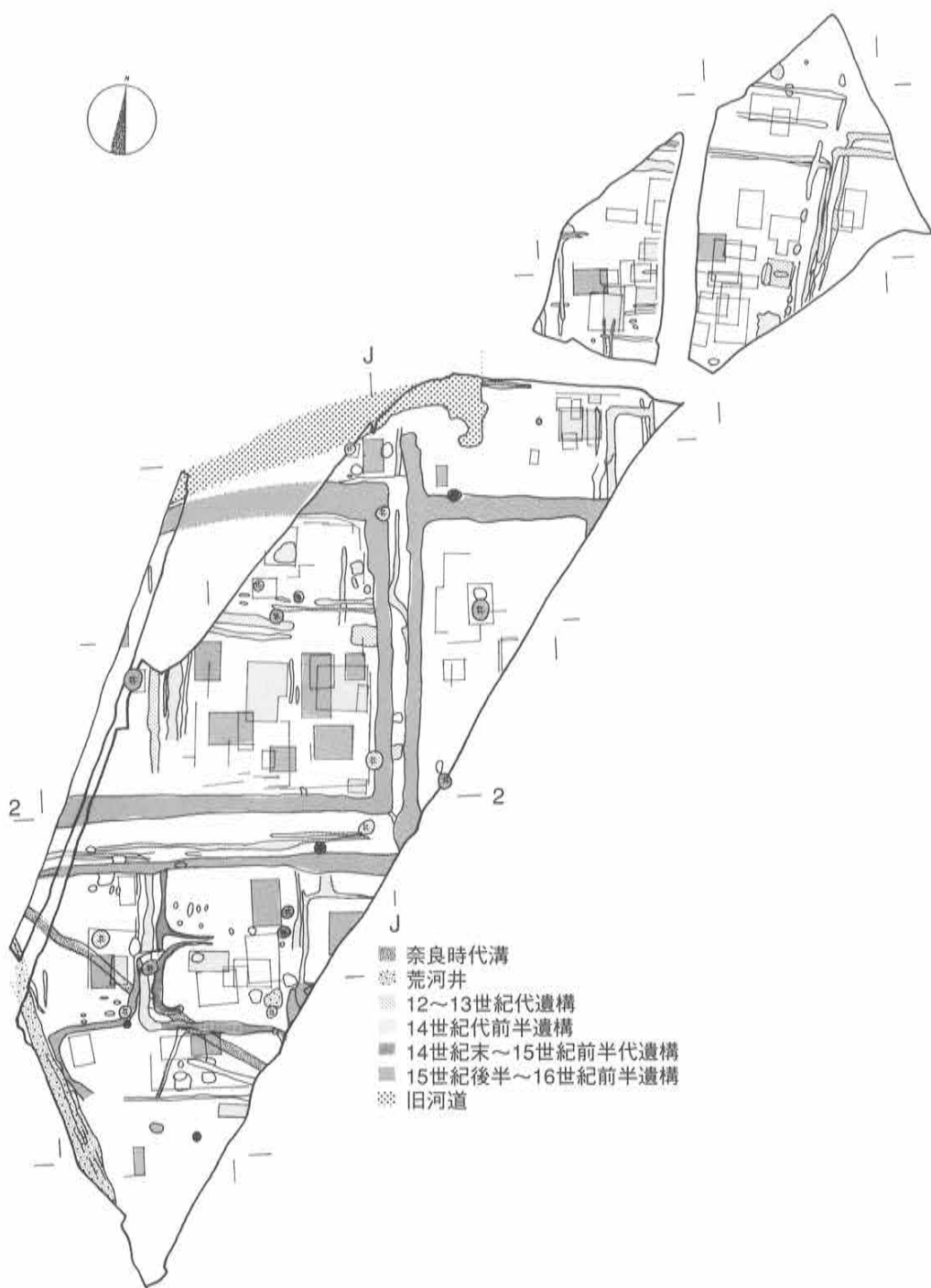


插图388 福田片岡遺跡中世遺構概念図